

PL Shin gunsho ruiju
755
 .35
S5
v.5

East Asia

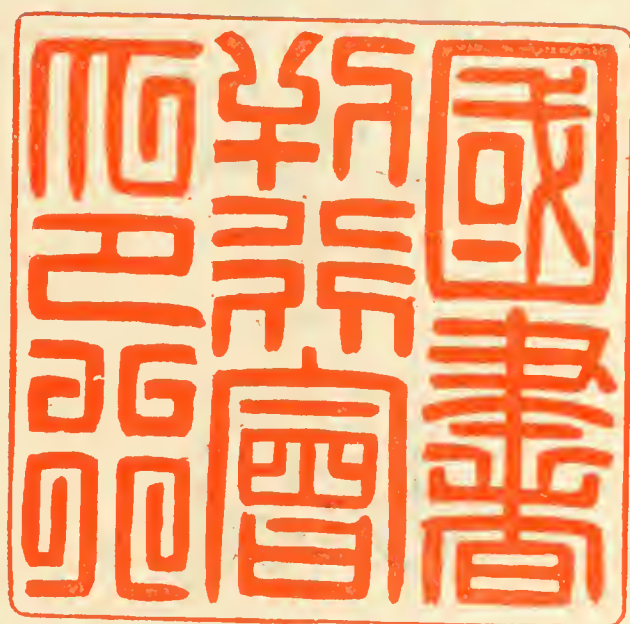
PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY



新
群
書
類
從

第五



例言

一義太夫節の流行を極むるや、世人これを當流と稱し、其れより以前行はれたる諸派の淨瑠璃を目するに古流を以てせり。蓋し當時にありては、義太夫節は最も現代趣味に適し、他は既に時代後れとなりたればなるべし。而して義太夫節の斯く現代的に發達したるは、一に近松といふ作者を得たるにあれば、近松はさながら淨瑠璃の今古を分割すべき境界線なりしなり。されば古淨瑠璃といへば、近松以前のものを數ふ。本卷また此の意義によりて、材料を選擇せり。然れども義太夫の正本のうちにも古淨瑠璃數多あり、又近松が未だ名をなさざる間、加賀掾の爲に作りしものにて、古淨瑠璃中に混入せるものあり、これらは例外として本卷中に蒐集したるもあるべし。

一排列の順序は成べく年代に従はんと欲したれども、年號のなきもの十中七八、多少前後の相違は免れざる所也。又流派の不明なる正本もあり、唯版式體裁等より區別を立つれば概ね次の如し。

『四天王高名物語』 寛文二壬寅年七月吉日

『賴義金剛山合戰』 同 三癸卯年正月吉日

『釋迦八相記』 同 九己酉年七月吉日

『善導記』 同 十庚戌年彌生下旬

『日本王代記』 〔延寶二甲寅年正月月中旬
井上播磨少掾藤原要榮正本〕

『玉津島の御本地』 延寶五丁巳年正月吉日

『四天王大田合戰』 (寛文二三年頃の版)

『舟いこん』 同

『賴光跡目論』 同

右のうち『王代記』の外八種は、何れの正本なるかを詳にせず、又『聲

曲類纂』等にも外題の見えざるものありて、其所屬分明ならざるも、『王代記』と同じく細字の繪入本にして版式、挿繪、體裁等共に相似たる點より考ふれば、恐らく井上播磨掾の正本なるべし。播磨掾は虎屋源太夫の門人にして、寛文より貞享の間大阪に盛名を走せたる太夫なり。有名の義太夫（後に筑後掾）は實に其の流れを汲めるものなり。

『津戸三郎』

宇治加賀掾正本

『義經追善女舞』

同

『愛染明王影向松』

同

『酒天童子』

以上四種のうち『酒天童子』は署名なきも、他三種と共に加賀掾の正本なるべし。加賀掾の正本は概ね八行本なり。加賀掾に至りはじめて八行本の板行あり。年號は記さざれども貞享頃ならん。加

賀掾は紀州の産にして、井上播磨の全盛を見て別に一流を語り出し、京都に赴き宇治嘉太夫と稱し、延寶五年加賀掾と改む。所謂宇治淨瑠璃の祖にして貞享、元祿を盛時とせり。

『隅田川』

山本土佐掾正本

『善光寺』

同

『清水觀音利生物語』

松本治太夫正本

『出世太平記』

薩摩外記正本

『念佛往生記』

竹本筑後掾正本

『をぐりの判官』

未詳

山本土佐掾は虎屋源太夫の門人

或は伊藤出羽の門人又伊勢島宮内が門人ともにして、始め

角太夫と稱す。(角太夫節とは此人の淨瑠璃なり)大阪より京都に移り、延寶五年大和掾と改む。松本治太夫は初名菅野傳彌、貞享、元祿の間行はれたる太夫にして、山本土佐が門人なりといふ。薩摩

外記は二代目薩摩治郎左衛門が門人にて、初名小太夫、貞享、元祿頃江戸に榮えし太夫なり。竹本筑後掾の事は世洽く知るところなれば略す。『をぐりの判官』のみは何人の正本なるかを詳にせず、されど文詞の古雅なる點より推すに、本巻中最も古き淨瑠璃の一なること疑ひなし。恐らく明暦、萬治頃のものなるべし。但し原本は貞享、元祿頃復刻の八行本を用ひたり。

『名古屋山三郎』

土佐少掾正勝正本

『京四條阿國歌舞妓』

同

『土佐日記』

同

『對面曾我』

同

『芳野の内裡』

同

『源氏六條通』

同

『定家』

同

『三世二河白道』 同

『源氏花鳥大全』 同

『賴政』 同

『和國女眉間尺』 同

『傾城三國志』 同

『博多露左衛門色傳授』同

一以上十三種は土佐少掾正勝が正本なり、土佐少掾はこれも二代目薩摩治郎左衛門の門人にして、寛文、延寶頃の江戸の淨瑠璃なり。世に土佐節と稱するはこれなり。原本には寶永五年『小傳馬町三丁目木下甚左衛門』版行の八行本を採用せり。

以上の古淨瑠璃は、正本の所屬を知るのみにして、何人の手にありしものか其の傳を得ず、されど文辭の蕪雜なるもの多き點より考ふるに、當時は別に作者といふものなく、淨瑠璃太夫が必要

上、古き物語又は繪卷物等にある話の筋を正本に綴り、語り傳へしを版行せしものなるべし。これを熟讀玩味するに及び、江戸淨瑠璃と京攝のものとの對照を得、其趣味の東西濃淡あるを發見する時は、更に一層の興味深きを覺ゆ。

一節附フツクを嚴密に傳へんとするは、翻刻上極めて困難なる業にして、原本の儘を本版に刻するか、寫眞縮刷を以てするか、此の二途に出づるの外なし、今日の活版印刷の業においては、未だ斯の如き精密なる技工は、望むべきにあらざるが如し。強ひて之を試みんとするも勞多く、たま／＼誤りを後に傳ふる恐れありて、益する所は甚だ少なかるべし。或は符號の部分だけを省き、活字に應用の出來得る範圍において、文字の節附のみを存すべしとの説もあれど、既に符號の一部を除く以上、節附其ものゝ不具なる點において、到底五十歩百歩の憾みあり。依て訂正者は最初之を全廢

するの方針なりしも、事情は之れを許さず、たとへ節附としては何等益する所なきも、讀者の便宜上、地詞等二三文字に屬する節附を存することゝせり。『清水觀音』の如き寫本によりたるものは、時として誤字脱字なきを保せず、又シラミ本には節附といふものなし、されば本卷も一小部分の節附を存したるものと、全く無きものと二種ありて、體裁の一定せざるは蓋し止を得ざる所なり。

一 淨瑠璃の文辭は普通の文法を以て律すべからず。否、淨瑠璃には寧ろ淨瑠璃の語格あり、讀癖あり、假名遣ひ、字遣ひ等凡て法則以外、別に法則ありともいふを得べし。たとへば義經とありて、或場合にはギケイと音にて讀ませ、或場合にはヨシツネと訓にて讀ますが如き、敢て傍訓を施さるも、少しく淨瑠璃を解する者には、文勢にてギケイ、ヨシツネ、口をついて出るが如きは、たしかに

無法中の有法といふべきなり。又渡邊武綱といふべき所に竹綱、ト部の季武に末武等はあて字とするも、自からといふべき場合に水からとあるが如き、あて字といはんよりは寧ろ判じ物、謎字といはん方適當ならん。斯の如き類枚舉に遑あらず、此の外廢れたる俗語、方言、國訛りなど、普通の讀者には解し難き節も多かるべし。されどこれらを一々訂正せんとすれば却て原文を害し、角を矯めて牛を殺すの譏を免れざるべし。比較的近代趣味の近松の淨瑠璃にして、既に註釋を要すとすれば、それより以前、むしろ古典とも目すべき、これらの淨瑠璃には多少不解の點ありしとするも、それは十分研究の餘地あるべきものと信じ、慙ひなる改訂を施さず、誤字、あて字、假名違ひあるもなほ原文の儘に存したり。一句點も亦然り、原文によりて濫りに校訂者の意を加へず、就中細字本には句點を施さざるものあり、『高名物語』の如きは、開卷二三

葉の所には句點を附したるも他には之を附せず、これ又原本の儘を存したり。但し本によりて、●を用ゆるもの、○を用ゆるもの區々なるは、體裁上一定の句點を使用することゝせり。

明治三十九年十二月

水谷不倒識

新群書類從第五目次

歌曲

四天 高名物語 きんぴらぐんほうやぶり	一
賴義金剛山合戦 并ひやうぶ物語	一八
ゑやか八さう記 附佛母まや婦人	三四
善どう記	五五
日本王代記 并神武天王のゆらひ	七二
玉津しまの御本地	九〇
四天王大田合戦 すけたけろうやぶり	一〇六
なすの與市竹生島詣 附舟いこんの事	一二一
賴光あともろん	一三八

津戸三郎	一五五
義經追善女舞	一七八
愛染明王影向松	一九八
酒天童子	二二九
念佛往生記	二四八
清水觀音利生物語	二六九
をぐりの判官	二九一
隅田川	三一九
善光寺	三三六
あこぎの平次	三五九
(薩摩外記正本の序文)	三八六
出世太平記	三八七

（土佐淨瑠璃總目錄及序文）	四〇八
名古屋山三郎	四一〇
京四條おくに歌舞妓	四二八
土佐日記	四四九
對面曾我	四七二
芳野の内裡	四九五
源氏六條通	五一五
定家	五三七
三世二河白道	五五七
源氏花鳥大全	五七七
艷色 萬歲賴政	五九五
和國女眉間尺	六一二

通俗傾城三國志……………六三一

博多露左衛門色傳授……………六五三

新群書類従第五

歌曲

四天 高名物語

きんぴらぐんほうやぶり

第一

さてもそのうち、それけんしやけんをうしなふ時は、
ねいじんいあり、ねいじんい有ときは、國かならず
みだる云々、こゝにせいわ天わう五代のそん、たゝ
のまんぢうの御まご、ちんじゆふのしやうぐん、源
のよりよし公とぞ申ける、然るによりよし、はくふ
らいくわうの御ながれをくませ給ひ、そのみなかみ
たいしくましませば、四かいやしまの外までもなび
かざるはなかりけり、さて御家人には、わたなべむ

さしのかみ竹つな、外には五じやうをもつぱらとし、
内にはちじんゆうの三どくをかね、はかりごとをい
やくのうちにめぐらしもろこしのちやうりやうをも
さみする程のゆうしたり、次はさかたひやうごのか
み公ひら、まことに人をも人とをもはねば、ついに
をくれを取ことなし、其けしきやしやらせつにこと
ならず、さて三ばんには、とをくみのかみさだか
げ、四ばんにするがの守すへむね、いづれもちゝに
をとらぬわかものども也、こゝに又平井のほうしや
うの一子、ひとりむしや、打物のたつしや、ことに
ははやわぎてうとりのごとし、其外とざまの大名小
名、ぎゝたうくとあひつむる、かの頼吉の御いせ
い、めでたかりける次第也、さればにや國々のさう
どう、しづまらずしなの、國の住人きそのしやうじ、
はや高打てはせ上り、うま門ぐわにのりはなち、あ
はたしく御前にかしこまり、偕もゑつちうの國の
住人じやうの兵衛國うち、かゝゑちせん三が國のせ
いをもよほし、ほんぎやくのくわだてしきりに候と、
大いきついで打たへける、かゝる所に、又下つけの
國よりひきやくとうらいしてつげけるは、ではのは

んぐわんかつさしもをさのせいをあひしたがへ、時
日をかへずくわらくへ打て上り候と、ことをきうに
ぞ申上、大將をどろき給ひ、偕もかれらは頼吉がぢ
うをんを得たる物成が、あつばれ天ばつしらぬやつ
ばらかな、いそぎ打てを下すべし、則北國へは公平、
すへむね、ひとりむしやを大將としてげんべいのせ
いをあひぐし、はつかういたすべし、偕又とう國へ
は、竹つなさだかげ、をのく兩人を大將として、
五きないのせいを付らるゝと有ければ、何もはつと
おうけを申ける、中にも公平は御前ちかくつゝしん
でかしこまり、近此おそれおゝき申ごとにて候へ共、
それがしは此たびの打て、御ゆるされをかふむるべ
きとぞ申上る頼吉聞召、もくねんとしてしばし上い
はなかりけり、時に竹つな申やう、いかに公平御へ
んな、れいにかはりたる、そせうを申さるゝ物かな、
いくさとだにいへば、ゑにかきたるをみても、よろ
こび給ふに、此たびぢたいいたさるゝは、いかさま
しよぞん有げにおぼゆる間、しさいくわしく承らん
とぞ申ける、きんぴらきいてあふ御ぶん共おぼへぬ、
公平が所存さつし給はぬこそおろか也、竹つな聞て

あふいかにも、御へんのしんていさつしたり、此た
びの打てわづかのせうてきに、四天王ひとりむしや、
五人までに仰付らるゝとのこと成べし、しかしなが
ら一國一じやうにこもる、てきにてもあらばこそ、
東國と北國す百里をへだて、又は所々にではりをか
まへたゞ一どほうきするかたきを、御へん一人がほ
こさきにて打しづめんと、しよぞん也是せんだい
みもんの大き成はたらきにてやあらん、去ながらめ
いじんのことばにも、ふかくはかりてあさくわたれ
といへば、御へんのしよぞんけつきたんちにして、
ふかきおもんばかりなきゆへ也、公ぴら大きにりつ
ぶくし、あふ竹つなのいけん尤きこそ有べけれ、ちた
いそれがしは生れつきたるをこの物にて、ちゑもふ
んべつもなければ、もとより御へんのやうにぐんぼ
う、おもんばかりもいざしらず、とらはちくるいの
かしらとして、ちゑなけれ共、むむ三にいきをい
たけき物なれば、とらにたてあふけた物なし、又ち
くるいの中にも、うさぎは少ちゑあつて、りやうし
あひたらば、とやせんかくやあらんと、かねてたく
めども、そのごにのぞめばかならずりやうしにとら

るゝとかや、是をうさぎひやうほうかけのまひと、
げれつのことばに、申ならはしたり、まづそのごと
くそれがしもとらのうまれつきかして、ちゑはなけ
れどたとはいてきはいいくほんてうの間へたて山か
あらふ共うみがあらふ共む二む三にたゝひとをしに
せめほすことこそよつくならひへて候へとあくまで
くはごんをぞ申ける竹つなかさねて申さるゝはいか
に公平御へんはたゝ今のそれがしがことばを大きに
りつぶくとみへて有いさゝか心にかくることなかれ
御へんあまりにはうばいをあなどりそのうへ上いを
かすむるにより一たん申てありとかく上いをそむく
ことなかれとことばをにうはにぞ申けるさればにや
さしもにたけき公びらも竹つながさいわうのことば
にふくしとかうのきなくおもてやはらげさしうつむ
いてぞいたりける時に頼吉仰らるゝにはいかにかた
がたとかくのせんぎむやく也則北國へは公平一人大
將としてげんべいのせいをあひぐしてはつかういた
すべし偕東國へは竹つなさだかけすへむねをのゝ
三人大將としてむかふべしひとりむしやは都をしゆ
ぐすべしとの御でう也人々御うけりやうじやうをぞ

申けるかさねて頼吉仰らるゝはそれいにしへのかう
そそのかうう國をあらそひし事八か年いくさをいど
む事七十よどかうそわづか十萬ぎのせいをもつてか
ううか百まんぎに打かちついかううをほろぼしか
んそ合八百よしうを一とうにおさめしも是ひとへに
はんくわいちやうりやうしほうほうをのゝ四
人のしんかゝぶりやくによつてなりなかんづくそれ
がしも天下のぶ將たることひとへにかたゝが有ゆ
へ也と御かんはなはだうるはし竹つな公平に打向ひ
此度北國へこされなばすいぶんけいりやくめぐらし
給へ公平聞て何程の事や有べき我等が父きん時より
かたかはやぶりのむふんべつ物にてきとだにいへ
ばむ二む三にかけこみしやうぶをけつするより外の
ことしらす又此きんびらはかたかはやぶりももろか
はやぶりも存せずきとだにいへばかいつかみ五里
も三里もとつてなぐるこそうきよの中のおもひでな
れと御せんともはいからず此たびのうつて東國も北
國もをしなめてそれがしたゝ一人おほせつけられぬ
こそなによりもつて口をしけれとざしきをけたてゝ
我がやをさしてぞかへりけるかの公平が有様かたか

はやぶりのくせ物やとをぢぬものこそなかりけれ

第二

公平北國へむかふ井出羽國へこへ判官を

打取事

さるほどにすでにそのよもあけらればきんぴらがはたしたの物共思ひ思ひによるひをちやくしきんぴらのやかたをさしてぞまはりけるきん平やがて出あひけふは日がらあしければ明日たつの一天に打たつべき何れも其むね相心得とくくかへりてよういせよ人々誠と心得かしこまつたりとしてしゆく所くに歸りけるかくて公平人々をたばかりかへしつゝよろひもちやくせず取物も取あへず大力のおのこ只二人あひぐしうく三ぎくわらくを打立北國さしてぞ下りけるいそぐにほどなく三日と申にはかゝの國にぞつきにけるかゝる所にゑちせんの國のちう人ぬまたきやうだいてせい二千いんぞつしゑつちうへかせいせんとしていそぎけるきんぴらあやしきつとみてきやつはかたきよりきの物とおぼへたりましてしばしてきかみかたか心をそとひきみんともたせたるはたを

それくとかたはらにすてをかせとあるかやはらにかくれてことのやうをぞうかいみるさればにやぬまたかさきてのものども此はたをあやしみ取あげみればいだてんをかきたるにうらにはさかたのひやうごのかみきんぴらと大もんじにかきつけけるさてはゑつちうのうつてにきんぴらのむかはれるよとみなく名をきくだにもをぢおそれふるひくたち歸り大將へよしをかくと申ける二人の物共みてなきんぴらなればとておにかみにてもあらばこそあはれきやつにあひなばいくさのかどいでにくびとつてゑつちうへみやげにせん物をとこともなげにぞ申けるきんぴらこかげよりをどりいで大將を二人ながらいかいつかみやあをのれはたゝ今のくわごんはなにごとぞきみの御をんのわすれぎやくしんにくみせんとやにつくきやつかなとかういわせず二人がくびふつとねぢきればらうどうどもこはらうせき也とましくらに打てかゝる公平みて手の物はなきかといへば承り候と四方へぱつとをつちらす公平みてしばししばし公平とみて打てかゝるものけなげなりつみつくりにとがなき物をころするなとせいしてそれよりも

ゑつちうへくわゝるせい共をみち／＼にてうちすて
打捨とをりければ是をみるものきく物ごとにおのが
ざいしよ／＼へぞかへりけるかくてきんぴらゑつち
うへいそがんととぶがごとくにいそぎけるさるあひ
だゑつちうには大しやうじやうのひやうへはとう國
うち神しら山ごんげんのまへにてせいをそろへしん
せんにむかひなむきめうちやうらいしら山ごんげん
我このたびの一大じほんいをとげさせ給へと心中に
ふかくきせいをかけ其後都のかたへむかはせやを三
すぢいさせさてらうどう共ばいくわをおり來り是す
なはちよりよしの四天わうと名付さん／＼に切ちら
しいくさのかどいでよしとよろこぶ所へきん平はせ
付あんないなしにざちうにすんといで兵衛がそばへ
つつとより兵へ大きにおどろきこはめづらしの公平
どのといへばさればこそとよ承れは御へんなぎやく
しんのおもひたちしきりのよし其聞へ是有により公
平に罷下りことのしつふをきはめよとの上い也いか
に／＼といへば兵衛ふるひ／＼ちんするやうこそお
ろかなれこはもつたいなき上いかななになる天ばつ
をかふむり我らがかうをんのきみにむかつてやしん

のおこし候はんや是いかさまそれがしにいしゆ有物
のざんげんにて候はんとさらぬていにぞ申ける公平
聞て尤々誠に北野の天神だにもむじつのざんにあひ
給ふいわんや御ふんは人げんなればさもあらん去な
がらしやとうをみればかつちうをいたしたるらうど
う共のあまた有はけふは此神のまつり成かあやしや
といふよりはやく大將がくび水もたまらず打をとし
のこりしたうさのやつばらを四かく八ばうへをつち
らしかち時どつとあげにけるかくて公平申さるゝは
いかになんぢらは是よりではの國へうちこへちまんが
は成たけつながはたらきをみてなぐさまんとではを
さしてぞいそぎけるこれはさておきではの國のうつ
て竹つなすへむねさだかげ三人の人々はでじろ三つ
ありしをやう／＼二つせめやぶりをの／＼いくさひ
やうでうしてぞいたりけるかゝる所にきんぴらしう
しう三人はせ來る竹つなみてこはいかに／＼と申け
るきん平きいてさればこそとよ北國のてきつよくし
ててせいみな／＼うたせてたゞ三きに也候へばかせ
いをこい申さんためめんばくなくも是までまいりた
り竹つなきいていや／＼御ぶんの申さるゝだんきよ

ごとにて有べしきんびらきいていやきよごんにあら
 ずして／＼當國のいくさはいかにとたづねける竹つ
 なかやう／＼の次第にててはりの城二つをやぶり本
 城いまだらくじやうせずと申せば公平つく／＼打聞
 何れもれき／＼むかはれたるかひ有ことかんじいつ
 てゐたりける時にさだかげ公平に打むかひして北國
 のいくさのじつふはいかに／＼とたづねける公平聞
 ていや北國の合戦じつせつといつはてきつよくして
 みかたせいこと／＼く打れいまだ城はおとしへすと
 になりきつてぞ申ける三人の人々きゝて偕は此をの
 こは北國のてきことゆへなくうつしづめわれ／＼い
 まだじやうをおとし得ぬこともどかしげにおもひと
 かう物をいわざるとおぼへたりとをの／＼たがいに
 すいりやうし竹つな公平にうちむかつて申さるゝは
 いかに公平御へんのでぬるくをもはるゝもことはり
 也去ながら本城は明日あさかげにのりやぶらんと
 ひやうでう也御へんごつめのうへはいよ／＼もつて
 本城はやす／＼とふみやぶらんとぞ申さるゝ公平聞
 ていやとよそれがしは北國のかつせんにしくたびれ
 身もつかれて有ければ明日の合戦それがしはゆるし

てたべとぞ申ける人々きいてげに尤しごくせりひと
 まづきうそくいたされよとひやうでうすでおはり
 けるあくるよはをぞまちゐたりさる程にかたきの城
 あんなかのしろと申は三方はひらち一方はけはしき
 大山さかをとしかたけと申てとりけだ物もかよはぬ
 山也さればにやそのよもやはんばかりのこと成に公
 平はねてねられぬよはのそらこよひうしろの山より
 しのび入かたきの心をひきみんとたゞ一人ぬけ出で
 さしもけはしき大山をつたかつらに取付／＼上りけ
 る程なく城に付ければあんのごとく山の手はけはし
 きをたよりにしてさのみようじんするていもなく
 いやしげ成下べ共四五人ばんをしてぞいたりける公平
 やがてきやつばらを一々にそば成たにへ取てはなげ
 なげたゞ一人のこしをきいかにおのがしうの大將は
 いづくに有けるぞ有のまゝに申べし少もいつはる物
 ならばくだんの如くおこなはんするぞとだいのまな
 こにかどをたててぞ申ける時にをのこふるひ／＼大
 將つねは本丸こよひはいくさひやうでうの其ために
 二の丸に有とぞ申ける公平大きに打うなづきあふよ
 くこそいふたりをのことてすでにたすけんと思ひし

かいやもしきやつにさきをせられてはあしかりな
と思ひなむあみだ佛もろ共にやがてたにへ取てぞな
げにけりかくて公平それより城のこかげにしのびい
ててきの有さまうかいひける聞くにたがはずらう
どう共をめしあつめいくさひやうでう取々也くつき
やうのをりからとつと入大將はんぐわんがくびち
うに打をとすぎちうの人々こはへんげの物かと太刀
刀のさやはつしあはてふためきける時に公平大をん
上是は坂田の公平と云ばけ物よ我とおもわん物あら
ばかゝれや／＼とよはゝつてのこりしくんびやうと
うざいへをつちらしさしもにかまへたるじやうくわ
くをたゝ一人か手にかけて一ちが内にせめやぶりけ
るあつばれ天下ぶさうのゆうしやとかんせぬ者こそ
なかりけれ

第三

みちのりていとをせむる井四天王しほが
まだち

去間其よもあけゝれば竹つなのまへに參たれ／＼く
び二つ又かくくび三つなと思ひ／＼にぶん取かう

名しけると申ける竹つなみてこはふしぎの次第也と
云に公平がみへぬはいかさま是は公平がしよぎやう
成べしといふ所へ公平大將のくび其外らうどうのく
び三つ太刀につらぬき來りいかに方々夕べはねるも
ねられず候ゆへよ打に入て大將其外らうどう共を打
取て候此たびぐんほうをやぶり候ことまつびら御め
ん候へと心よげにぞ申ける竹つなきいて侍の一ごん
をちがへ給ふゆへはおき成ふねのみなとにつかぬあ
ひだはよしともわろき共さだめられす候去ながら御
ぶんのぬけがけ今にはじめぬことない／＼それがし
せいふん申せしごとくもし／＼けかなとし給ひなば
我々いきてはかへられぬ也かやうにいくさのほうを
やぶり給ふうへはすへ／＼までもたのもしからずと
りつふくしてぞ申さるゝかゝる所へひきやくとうら
いしてみちのくのしほがまの一ぞく共きやくしんを
くわたてしきりのよしをうつたへける人々もくねん
とうち聞竹つな申さるゝは是ぞぐんほうの一大じた
りかやうに國々にぎやくとおこるは何さまむほんち
やうぼんの大將は都ちかき所に有べしかやうに我々
をおんこくにくだし都をぶせいのにゑにのつてつぶ

さんとはかりごとおぼへたりとかくみちのくのい
くさはさしをき一時もきうにいざ／＼上らくせんと
ぞ申さるゝ公平きいていかに竹つなたとへていとに
むほんのあればとてひとりむしやわだ左衛門のこつ
て罷有うへはさのみきづかいもなきことなれとても
是までげちやくのついでにみちのくのきやくとをも
すきと打しづめいそいできらくいたすべしをの／＼
いかにと申けるさだかげすへむね兩人も公平がぎに
どうず竹つなさいわうのいけんなくさあらばをのお
のきにまかせんとみちのくさしてぞいそぎける是は
儲をさらくやうにはさわらのう大將みちのりとてく
ぎやう一人おはしますぐわんらい其家くげといへ共
きうばうち物取てはぶけにまされりやうしやうた
りされば頼吉のいせいをそねみいかにもして頼吉を
ほろぼさんとてかねて國々の大名をかたらひはうば
うにてはたを上げさせ四天王の物共こと／＼くをん
國へ下していとふせいのおいにせうし今は心やす
しちぶんはよきぞはや打たてとてつかう其せい七千
よきあやのかうじへぞをしよせけるやかたになれば
二系三系にをつ取まはしときのこゑをそあげにける

され共御所には思ひよらざる事なれば上を下へとか
へしける時によせてのちんよりもみちのりらうどう
こまかけ出し只今よせたる大將をいか成ものとや思
ふらん頼吉みかどのちよくかんかうむるゆへちよく
しとしてさはらの右大將みちのり打てにむかいたり
侍はわたりものかふとをぬいでかうさんし命をつげ
との／＼しりける時に城の内よりみうらのわた左衛門
ためむねをけがはどうの大よろひをちやくし三人ば
りの大弓のまん中にぎりやぐらにつつとかけあがり
何わが君みがどのちよくかんにてさはらの右大將か
むかふたりと申かかんきとは心得すあふよし／＼や
がて心得たりをのれらはらくぢうあらゆるとうそく
かとうにてやありつらんうけてみよといふまゝに三
人ばりに十三ぞく取てからりと打つがひきり／＼と
引しほりかなぐりはなしにかつきといた一ぢんにす
すみたるみちのりのらうどうがむないたをはつしと
いるうしろにひかへたる川村兵へか馬のふとばらに
すはつと立是をいくさのはじめとして兩ぢんたがひ
に入みだれいくさは花をぞちらしけるかゝる所にひ
とりむしやは折ふしびやうきにおかされへいぐわの

ていにていたりしが長刀をつ取よろほい／＼出ける
がたききびしくよせくれば四方へばつとをつちら
しものから井しきゐにこしをかけしばらくいきを
ぞつきにけるみうらわた左衛門是をみて御くたひれ
とみへて有いで一いくさははまんとかたきの大せい
にわつて入おもてもふらずをつつまくつたゝかひ
けるかゝる所よせてのちんよりもくろかはおどしの
よろひきたる九尺あまりの大のおのこ物々しやとい
ふまゝに太刀をからとなげすてわた左衛門とひくん
たもとよりたかいにおとらぬ大力をしかへしつをし
もどしうしのたけるがごとくくみあいけるされ共た
めむね物共せず取てをつふせやかてくひをかゝんと
する所に又かたき一人をりかさなつてため宗がたふ
さを取て引かへさんとすでにあやうくみへける時に
ひとりむしやはせ來上成てきの細首水もたまらず打
をとすため宗は下成てきのくびかき切てたがい到手
とてを取くみ引かへすかの人々のはたらききせん上
下をしなへみなかんせぬものこそなかりけれ

第四

頼吉都おち井わだ左衛門てがらの事

去問ひとりむしやはわた左衛門にかいしやくせられ
君の御まへに出偕も此たびよせての大將たれ成ら
んと存しにさはらの右大將みちのりにて候とつし
んでぞ申上る頼吉聞召なにこよひのよ打はみちのり
と申かかれは日比いしゆ有物なれば此たび四天わう
の物共かるすの折からねかふ所のさいわいとをしよ
せてや有つらんゑゝわつかのしゆくいをさしはさみ
ゑいりよをかすめ天めいしらぬあふれ物なにはかゝ
しきことが有つらんとしばらくあきればてゝぞおは
します時にひとりむしや申上やうさても日こそおほ
きに今それがしかやうのしやらうにおかされぎやう
ぶ心にまかせずかい／＼しきはたらき仕らぬこそ何
よりもつて口をしけれ其うへ其たのしそつも大かた
打たれて候へば此所に御ざあつてはしじうかなふべ
き共おぼへ候ねはひとまつかたきちづかぬ其さきに
御ひらき有いづかたにもしばらく御しのひ候て東國
北國へむかはれし人々きらくをまちて御ほんいと
けらるべし然ばそれがしはか程のちうびやうにおか
されとてものかるべき共ぞんせねばすみやかに御あ

とにといまつて御所にひをかけ同けふりと也申さん
となみだと共にぞ申ける頼吉聞召こはおろか也きよ
うち三がいのあるじしやくそんだにもやまふの道は
まぬかれ給はすいわんや人間にをいておややまふは
つねのならひ也御へんそれ程わづかのしよらうにか
かわつてじがいをせんと云はいひかいなきしよぞん
かなをちば一所にこそと仰けるひとりむしや承り君
の仰はさる御ことにて候へ共我かやうにびやうきに
おかされやみ／＼とかたきにうしろをみせ都をはい
ぼくせんことぢよのはぢはともあれかつうは四天王
の人々がおもわんする所いかばかりいひかいなく口
をしう候へば君はてきちかづきぬ其さきに何事もふ
りすてわだ左衛門をめしぐしてはやとく／＼とをち
させ給へと申上る頼吉御きしよくかはりいかにひと
りむしやなんじが申だん頼吉かつてしこくせずびや
うきにおかされ打じにせんといふはたゞやまふのく
つうをへんしものがれとの事にやは頼吉がための
さゝかちうぎにはあらずそうしてなんじにかきらす
四天王の物共しなば一所にとちぎりし身なればなん
じをこゝにすてをき我なんのめんぼくあつてかをち

ゆかんやゆめ／＼もつてかなふまじと御ぐそくのう
はおびしつかとしめさせ給ひおちさせたまはん御き
しよくさらになかりけりひとりむしや有難き上の
むねかんるいきもにめいじ雨がんになんだをうかめ
こはもつたいなき次第かな此うへはともかくも上に
にしたがひ奉らんとぞ申あぐ頼吉聞召尤しんびやう
也と御ゑつきかぎりなくあけなばかたきかこまんと
よはにまぎれおち給ふいそがせ給へば程もなく堺の
うらに付給ふかくて日すでにくれければあれたるし
ほやのかきまばらにのきかたぶきてしぐれも月もさ
こそもるらめとみへたるにいざ爰にて一やをあかさ
んとてをの／＼内にぞ入給ふ去程にあはれ成かな人
人はたびねのこのくさまくら露も泪にあらそひて
いと／＼かなしさはまさりける比しも秋のなかばのこ
となればはま風はげしくふきたててなぎさによする
なみのをとそでにやどる月のかげちぐさにすだくむ
しのこゑめにみみ／＼にふるゝ物ごとひとつとして
あはれをもよほし心をいたますといふことなし頼吉
仰らるゝはいかにかた／＼ねるもねられぬよはなれ
ばいざやはまべにをりてなぐさまんと人々をめしぐ

してかいへんさしてぞいでらるゝ折しも月さやけかりければ水にうつれる月のかげうらゝのけしきなどを打ながめいとおもしろくおぼしめしをのおのふるきうたなどをゑいじよも山の物がたりをぞ申さるる中にも頼吉おほせらるゝはいかにかたゝ此うらは國だいのめいしよ也いにしへならのみかどの御時□□たうの舟のみなとにて此所を則なんばのつといへる也中比は石づかうらともいへり又は七日あまの川ともいへるとかや其ゆへは有ふるくに▲くも井にてながむるをりもあまの川ほしあひのそらもはるけかりけりとよめり又有歌にも▲七夕は思ひしらなんあまの川いそぐわたりに舟をかしつると有かやうのふるくをおもふにつけてもげにみよしの明神はれいげんあらたにおはします有歌に▲すみよしのきしのひめ待人ならばいくとせかへしとはまし物をとよみはんべればいざや明神へまふでゝ我身のうへをもいのらんとしんせんさしてぞ参らるゝやしろになればをのゝしやとうをめぐりてみ給ふに誠に月すみてなみにうつる松かげろうゝとしていとしゆせうさはかぎりなし偕人々しんせんに参りよもすがら

きせいをぞかけらるゝ頼吉仰らるゝはそもゝ我四かいのまつりごとをつかさ取てばんみんの心にかんきよくなきことを存といへ共今ねいじんにをかされててんちひろしといへ共一しんをおくに所なしわくわうどうじんの月あきらかならば此本いとげさしめ給へとふかくせいゝをつくしてぞいのらるゝかくて人々しやだんのうへにひちをまげてまくらとししばらくまどろみ給ひける時に八しゆんばかり成おきなふうふまくらもとにこつせんとあらわれいかに人々かたゝかいのり申だんしんもかんをういたしたる間おうごの力をそへてゑさすべし此しやとういですしばらく時いたらんをまつべしすへかならずめでたかるべきとさもけたかき御こゑにてたからかに御ぢけん有人々はつとまくらを上てらいはいす時にみときりゝひらけてらうをうふうふかきけすやうにいりたまふ頼吉あらた成御ぢけんをかふむり給ひ御ゑつきかぎりなくいよゝしんゝをこらしめてぞおはしますかゝる所にたうしやのかんぬし國しげあはたゝしくしんせんへ参り頼吉にたいめんしかたかたの御事にてやありつらん我ふしぎのれいむをか

ふむる間よのあくるをまち得ずして参りて候こよひ
 つうやの人々は天下のまつりごとをつかさどる人な
 るが今ねいしんのためにるらうの身と成なんぢゆい
 てちからをあばせよとの御ことなりいそぎこなたへ
 いらせ給へと申さるゝよりよし聞召まことにしんた
 くのありがたさかんるいきもにめいじおなじくぢけ
 んのあらましをかたらるゝかんぬしきいて尤明神は
 りしやうあらたにましませばすへたのもしくおぼし
 めさるべしまづゝこなたへと我かやにいざないま
 いらせけるしたくにいり給へばさまゝにそもてな
 しける人々かくてあるべきにあらざればかたきをは
 ろぼすべきないだんをぞしめさるゝ時にかんぬしゝ
 ばらくうちあんじそれがしくつきやうのけいりやく
 をおもひつけて候へすなわちそのでたといつはき
 みの御こしの物はさだめてげんじぢうだいのたちか
 たなにてや候はんしからばひとまづそれがしあづか
 りもうし此たひ都のかせんにうたれし物のくびを取
 したゝめあひそへてきのかたへぢさん仕りもつたい
 なき事ながらもかつうはけいりやくのためなれば君
 の御くびとひろうしてまつかたきの心をゆるさせも

うし心しづかに御ほんいとけさせまいらせんとぞ申
 さるゝよりよし聞召尤御へんは明神のしんたくにて
 たのみ申うへは御ぶんわたくしのけいりやくとはぞ
 んせずとかく身をなげ打て明神のしんちよくにまか
 するより外なしと有ければ尤さこそ有べければさあ
 らばへんじもきうに上らんそれゝたち刀こなたへ
 とげんじぢう代のくも切をうけ取はや馬に打のつて
 都をさしてぞ上らるゝかの國しげの心中たのもしき
 共中々申斗はなかりけれ

第五

みちのり四天王に打るゝ并頼吉御歸京の
 事

去問さはらの右大將みちのりはおもふまゝにほんい
 をとげ天下のけんへい取おこなひ給へば國々の大名
 小名日々にしゆつしはひまもなくうへみぬわしとぞ
 さかへけるかゝる所にすみよしのかんぬし國しげあ
 はたいしく御まへに参り偕も今月五日に源のよりよ
 し同らうどうのひとりむしや同わだ左衛門しうゝ
 三ぎにてそれがしたちへをちくだりひたすらたのむ

と申間一たんだのまれ申それがしはかりことをもつて三人ながらうちとつて候とくび三つにたち一ふりそへてさし上る大將やがてくびをじつけんしよくこそちうしんいたしたりくびはそんじてたゞしからざるといへ共太刀は源氏ぢうだいのくも切にまがひなししやうは後日にゑさすべしまづくかへれと有ければかんぬしはたばかりすまじたりとゑみをふくみをいとま申てかへりけるみちのりゑつきのまゆをひらき偕も天下にゐをふるいし物なれどうんつきぬればやみくくと打れぬあゝしなしたりくそれくいそぎあはた口にさらすべしと有ければ人々承りやがて三つのくびをぐくもんの木にぞかける去程にらくちうのしよ人此よしを聞よりも偕もあくぎやくぶだうのみちのりかなゆくすへよろしかるまじと頼吉御をんをしのばざるはなかりけりせめてかはらせ給ふ御すがた也共おがみ申さんとて我もくとはせまいりぐくもんのまへにたをれふしなきかなしまざるはなかりける中にも年比卅ばかりのおのこ頼吉の御くびのまへくさむらにひざまづき涙だをながし申けるは偕もあさましの御事や此たびの御かせんゆめく

ぞんせす御せんどにあひたてまつらぬことまつびら御しやめんあれとひれふしてこそなげきけるやゝあつてなみだをおさへしよ人にむかつて申けるはかくするそれがしをいかなる物とかおぼすらんがうしうしがのさとにあさ木の源太と申ものなるがひとせ頼吉のをきてをそむき御かんきをかふむりしにより吉御なさけふかくましくて程なく御しやめんありしよりやうあんどにつきしがのさとにきよぢうしてかくやみくとなり給ふもぞんせすうきよにあつてなんのめんぼくかあらんせめてくわうせんのため御ともとやがてはらをきらんとす時にみちのりらうどうぬまざは源五折ふし此へんをしよやうあつてとをりしが此よしをみるよりもこはらうせきや何物なればいか成しさいあつてかくはするぞとをしむる源太きいてそれかしはかやうくの物なりさふらひはたがいごとじがいとけさせてたまわれとしいありまゝにぞ申けるぬまさはきいていやくかやうのぎはわたくしにてはかなふまじぶしやうう大將のまへに來りて申されよとりふじんにひつたてゆかんとす源太大きにはらを立さふらひはたがいごと御へ

んはぶしのほうをしらさるかといひもあへすぬまざ
はかくひ水もたまらず打をとすぬまさはからうどう
共こはらうせき物よと大せい一どにをりかさなりた
かてこてにいましめける源太きにはかみしてさて
もくむねんのしだいかな三だいさうをんのしうの
御せんどのやくにはたゝずしてあまつさへなわめの
はぢにおよぶことかへすくもくちをしけれどいか
れるおもてよりなみだをはらくとぞながしけるか
かる所になにもとはしらずあみがさまぶかにひつ
かふで大のおの子一人きたりかのめしうとのうへに
よりかゝりいかにかたくちか比申かねては候へ共
けふはおやのきにちにあたりて候へば御ほうしにわ
れにたまわれといふけいごの物共きいてこはそつじ
なることをいふをのこが有物かな是は大事のめしう
とにて將くんう大將殿へひいてまいる也あたりへよ
るなといかりけるおのこきいてにつこと打わらひや
あ將ぐんう大將とはきくなれすせひしよもうとたち
ひんぬきけいごのやつはら四方へをつちらしさい
ましめのなはをときしさいをいかにとへば源太あ
らましをかくとかたりける公平よしを聞よりも是は

是はとごくもんのもとにたちより偕もくしなした
りやよの中とをにをあざむく公平もとうざいさらに
わきまへす泪にくれてぞゐたりけるやあつてをつ
るなみたの下よりもひとりむしやわた左衛門かくび
をしたにおろしをきひとりむしやかくひに打むかひ
いかにひとりむしやなにとてかやうにやみくとは
也けるぞ偕もあさましの次第やと又わだ左衛門かく
びをとり上いかにわとの物は物にしも成べきとおもひ
公平かたちまでゑさせしに君をかやうにやみくな
し申わとのまでかくあさましくなりはつるみるも中
中はら立と二つのくびをそば成いしに打あてみちん
になしてすてにけるかゝる所へ竹つなさだかげすへ
むねをのくいそぎはせ來る公平竹つなに打むかひ
かたくは何をたのみにみちをはいそぎ給ふぞや是
是しなしたる有さまをみ給へと君の御くびをぞみせ
にける竹つなをはしめ人々是はゆめかうつゝかと御
くびにすがりつき泪にくれてぞいたりけりさしもに
たけき公平もかの人々の有さまをみるに付ても今ひ
としほの泪也やあつて公平泪をおさへあゝよしな
し大事のかたきまのまへにをきながらよそにみ

て有はいひかいなしととんで出るを竹つなをしと、
め思ひはたれも同ことあはてゝことなしそんじなば
こうくわいさきに立ましきしばしといへば公平きい
て君御ざあつてこそは命をしからめとりふじんに
かけ出る竹つないよゝをしとゝめいかに公平此く
び君の御くびとはいひつれど其せうれつたゝしから
ざればもしかたきはかりことにて我々に身をもだへ
させじがいさせんとのけいりやくにて候はんひとま
つすみよしのかんぬしか本に立こへきやつをおさへ
てことのしつふをとふべきと有ければ公平聞てあふ
よくこそふしんなおもしろしさあらばすみよしへゆ
かんとしてをのゝとぶがごとくにぞはせにけるかの
ちになれば公平つつと入かんぬしをりふじんにひつ
とらへとかうのぎなく只君のゆくゑを申せゝとせ
めにける竹つなさだかけおくればせに來りやれ公平
りやうじをいたすなとこそゝゝによはゝりける時に
かんぬしやあかたゝゝあらきにし給ふなことをしづ
めて聞給へ我は賴吉にちうふかき物成ぞと有ければ
公平ことはをやはらげして君の行へはいかにとたづ
ねける國しげ聞て君はをくにましゝ候とやがてを

くへそせうじける賴吉をはしめひとりむしやわだ左
衛門是はゝとばかりにてしばし泪はせきあへすや
やあつて賴吉わたなべか手をとらせ給ひ此たび都の
合戦に打まけるらうと成しあらまし又は此たびすみ
よしの明神りせうたのもしき次第かたらせ給へばひ
とりむしやとわだ左衛門と公平さだかげすへ宗に打
むかひ思ひゝにうきつらさをかたり今のうれしき
にもつきせぬものは泪也かくて有べきにあらされば
國重立出此上はひとへに御なげきやめられかたきた
いちの御けいりやくをしめさるべしと申さるゝ人々
聞召此ぎ尤とやがていくさひやうでうをぞ被成ける
偕都への打てには竹つな公平さだかけすへ宗をのを
の四人大將にてむかふべしとの御でうにてせんぎす
でにきはまりける時に公平はいくさのひやうでうを
も聞かぬかほにてかたはらへ立より大いびきかきて
ふしにける竹つなそばによりいかに公平御へんはな
どいくさのひやうぎは出されぬぞと有ければ公平聞
ていやそれがしは東國北國のかせんにせいきつから
してあれば此たびはゆるしてたべといふ竹つな聞て
いやひやうてうすでにきはまつて我々四人にむかふ

べしとの君よりの上い也はや／＼よういといへば公平ふせうけにてやがてしたくをそせられける去聞きはらの右大將みちのり此たび四天王の人々東國より上りたるよし又はすみよしのかんぬしはかりのあらましこと／＼都にろけんしてふじつに四天王が打てにむかふよし聞給ひ大きにをとろきいへの子らうともよほしてよせくるてきをそまちゐたりさればにや打てのせいあひもすかさすをしよせ時のこゑをぞ上にけり本より城の内にもかねてこしたることなれば同こゑをぞ合ける時のこゑもしづまれば兩ちんたがいに入みたれひ花をちらしてた／＼かいけるいくさもいまだなかばのこと成に城の内よりも一ようにいでたつたるむしや四人かけ出是へす／＼み出たる我我をいか成物とかおほすらん右大將のみ内にきのもとの太郎二郎三郎四郎とてをの／＼四人共に一きとうせんと頼れたる物共也此たびは我々が身のおんひのいくさ也然ば打物わざはむやく此四人の物共と四天王の人々と一きつゝのゑらみ打せんとよは／＼りける其かたちよのつねの人りんにかはりせいは一丈餘おもへにひげをひてひとへに鬼のごとく也かれらは

ぐはんらい其しゆつしをう母は人間父はもと／＼ぞなのりけるさだ景太刀ひつさげかけ出る公平しばしと引と／＼めいかに方々此四人のやつはらをそれがしに給れ一どにて取にせんと有ければ竹つなせいしいやいやきやつら一人つゝと云共さはあらし四人一どにをりかさなつてくみとめんとの計事にてやあらんそつしに出てしそんし給いなと云時に四人の物共云様はやあ方々かたきにことばをかけられて出あはぬは我々をあはぬかたきとあな取ゆへか又は四天王の人人もかたきによつて口は聞るれど我々にはしんしやくかいかに／＼とばうじやくぶしんにくはうけんはく公平大きにいかつてゑ／＼竹つなのいはれさるせいしらる／＼によつてあれていのやつはらに口をた／＼かせつるよといひもあへずとんで出參さうと云よりはやくまつさきにす／＼んだる太郎をかいつかんでまへ成堀へからとなぐるあんにたかはす三人一どにとひかゝる公平物共せずゆんでめてにひつつかみ一しめしめて同堀へどうどなげいきをもつかす城内にかけ入ば大將道のりも頼切たる四人の郎等打せかなはしとうらの門よりをつる所をかいつかみ思ふ本いはと

げたりと本ちんさして引かへす竹つな定景末宗三人
の人々思ふ望は公平にはこられたりと大きにりつふ
くし城中へみたれ入残し軍兵共東西南北のつまりつ
まりにをため切てすて今は思ふしさいなしと城にひ
をかけかち時上て引かへしそれよりもすみよしゑし
やをたてかたきぼつらくのよし申上れば頼吉御かん
かぎりなくいそぎ御きらくあつて都せいひつにぞお
さまりけるめでたさよ共中々申計はなかりはれ

寛文二年壬寅七月吉日

二條通正本屋喜右衛門開元

四天
王 高名物語終

賴義金剛山合戦

井ひやうぶ物語

第一

いつけひらけてちよのはるのどかにめぐるおぐるま
のときめきわたるよものそらふくかせるだをならさ
すあめつちくれをうごかさねば四かいなみしづかに
ておさまる御代こそめでたけれこゝにせいわたわう
五代のそんみなもとのよりよし公は御たいめんじよ
に御いでありいかおぼしめされけんなんでんのひ
ろゑんに御太刀ものゝぐをならべさせざ上になをら
せましませば三人の御きんだちはなをりむすぶ御し
やうぞくにてしだい／＼になほらせ給へば御家のか
うけんさかたひやうごのかみきんひらみうらのわだ
左衛門ためむねわたなべ武藏のかみたけはる同源次
たけみつかまぐらの權五郎かげまさちゝぶの十郎よ
りひらをはしめとしてその外のしよ侍ぎゝどう／＼
とまこうあるそのちよりよし抑けるはさてもあさ
ひしやうぐんもりすみがぎやくどおもひのまゝにま

づむる事天りにかなふといゝながらかた／＼がゆう
りきなり此うへはいよ／＼めいとくのりあきらかに
したまへつきてはかた／＼もよき太刀物のぐは有べ
けれ共われおもふしさいのあれば家につたわるちう
もつをぶんらにゑさするぞまづ一ばんにくりから
ふどうをさうがんにてほりたるいか物づくりははく
しうのやすつながうち物なりなをばおに丸と付て有
則公平にとらするなり扱あかきのさやにどうがね入
しはびせんのやすたゝが打物なりなをりうすいとつ
けて有則ためむねにゑさするぞうのはなおどしのよ
ろいにほしかふとそへたるはみたの源次たけみつな
りまたくろかはおどしのどう丸にくわがた打たるか
ぶとはちゝぶの平田より平にとらするなり其後のい
ば二ひき出させそも此馬と申はつねに心はゆうにし
ていさむ時には五七けんのほりあり共やす／＼とと
びこへさゝなみのたつなさゆうを一方ひきければそ
のまゝとびかへるによつてゑんひと是をな付て有た
けはるかげまささにゑさすると仰出されたりければひ
と／＼承りこは有がたきしだいとて一どにあつとぞ
かんじける時に公平は人／＼に打むかいか程におゝ

き其中にかやうの御おんにあづかること身にとつて
のめんぼくたれかいさみをなさざらん是につけても
たけちの源太はくわほうすくなき人にて有かた／＼
はいまだひのでのさかり也すいぶんちうこういたさ
れよ我は年もよりければ心ばかりで手はたゝず候去
ながらまづしうぎは申おさめて有しせんごにちにち
んけきしゆつけいたしなば此おに丸をひつさげてま
つかふこびたいさうのこてあたる所をさいはいにう
んにまかせて切ひしがんとおどりあがつてよろこび
ける御心ざしの有がたさをいはねどおもてにあらわ
れて泪をはらりとながし又つつしんでぞいたりける
頼吉御らんして方／＼のしんていくちよかけてた
のもしやと御かんはなはだかぎりなく御ぎを立せ給
ひけるよりよし公のいせいの程三重うらやまざるこ
そなかりければ是は扱おき爰に又すがはらのゑんわう
とて二の宮にてわたらせ給ふがあさひの將軍もりす
みのそく女やよいのまへと申てこゝんぶそうのびじ
んにてことひはにいみしくていとなさけふかきよそ
おいをかりそめに御らんじていつの比よりれんりの
ちぎりあさからず程なく太子一人出きさせ給ふされ

どもりすみか天りうすくしてよりよしにほろぼされ
むねんといふもあまり有いかにもしてほろぼさんと
心をくだき給へ共さらにしんていにたつせずげに誠
それがしかはくふおゝいの大じんと申て其いくわう
よにたかくたいこうぼうがひせし所のぐんほうたな
心におさめしゆうしなりよびよせないだんせばやと
てやがてつかいをたて給ふ大じん何事やらんとつか
ひと打つれまいられたりしんわううちしほれさせ給
ふみこゑにて其方もかねてぞんじのとおりもりすみ
をよりよしにかたせむねんいまにたへやらすかたが
た其もんようとしてかれをほろぼさざらんにおいて
はまつだいのきろくのおもても口をしやいかにもし
てよりよしをたいぢしてもりすみがきやうようにほ
うじ御身も天下のお將にあおがれ給へやとなみだと
共にぞ仰ける大じん承はりない／＼それがしもさや
うにぞんじいかにもして頼義をほろぼししんわうの
御いきどをりをやすんせ奉らんしよ存にてかねてな
いだんのともがら有さらばよびよせ申さんとやがて
つかいを立らるゝ一みの人／＼承りしんわうのやか
かにぞ出らるゝ大じんたいめんしてみぎのあらまし

をぞかたたるゝ人々聞てみもつ共とどうじおのゝ
 ひやうぢやう取ゝなり其中にすかぬまたんごのか
 みすゝみ出かのよりよしはぶゆうなだかきものなれ
 ばこせいにてはかなふまじたゝゝちりやくにしく
 はなしそれがしあんじ出せるちりやくの候きたる十
 五日にもみぢのくわいあるべきなりよりよしそぎ
 さんだいつかまつれとちよくしをたてさせたまひな
 ばそのまゝさんだいつかまつらんその時かくしせい
 をふせおき一どにとつとかけあはせやすゝとうち
 とらんとこともなげにぞたくみけるしんわううちゑ
 ませたまひける時に大じん申さるゝはくつきやう一
 のけいりやく是にすきたる事あらしさあらばそれが
 しが家の子にはやしの六郎と申てべんせつたつせし
 ものありとやがて御まへにめされくだんのあらまし
 を申ふくめたりければうけたまはり候と御まへをま
 かりたち三重やがてよういをゑたりけりさるほとに
 六郎はちよくしのごとくにいでたちてよりよしさし
 てぞいそぎけるやかたにもなりぬればあんないかう
 て内に入よりよしたいめんましゝてちよくしを座
 上になをさしおきつつしんておはします六郎はふる

なのべんせつおもあざむくほどのものなれどもしや
 うぐんのいにやおされきまたらうどう共がいせいに
 やおされけんせんじのおもむきたるよしを申わちわ
 ちとふるうてはいもんしてのべけるをきん平きつと
 みてやああらふしぎや此おのこがていたらくは御所
 かたのゑよれいとはばつくんにちがふたりとりわけ
 人そうもふつゝかなりげにやおもひ内にあればいろ
 ほかにあらわるゝいかさま此ちよくしはしさいなく
 てはかなふまじまかり出てたづねんとおもふがいや
 いやそつじのいたりしてあしかりなんとちやくとし
 あんしさてそろりとたつておもてへまはりまづ下人
 どもを取てふせしてあのちよくしはいづくよりさま
 よいきたるぞまつすぐに申せすこしもいつわる物な
 らばいちゝくびをねぢきらんとにらみつけて申け
 れば下人ども大さにおどろきふるいわなゝき申ける
 はあれはおゝいの大じんのゝ御内なるはやしの六
 郎と申人にて候がしんわうの御むほんにつききんち
 うにてうつべきたくみにてかくのごとくにて候かや
 うにはくぢやう申せしちうせつにいのちをたすけく
 たされ候へと申心得たりとなげすてゝやがてざしき

につつといでちよくしを取ておさへさてくおのれ
めはめうがもしらぬぐゑんかないかにちりやくなれ
ばとてぼんげの身としてちよくしのすがたになるこ
とはあまりにもつてもつたないしことにしやうぐん
の座上にいでくわんだいなるべんせつかなやれなら
はぬきやうはよまれぬものにてはなきかさてもみご
とのちよくしのふせいやいかにかたぐかほどてあ
しのあれたるおくげはよの中のけんぶつ物にてはな
きかおのれらがぶんとしてわれくをたばからん事
とろうしやてつにむかふにいたり此よのくげをさ
らりとやめてらいせのくげんをうけよとて御ゑらす
にひき出しくびをねぢきりすてたりけるかのきんぴ
らがていたらくげんじのみたからは是なりたゝ是な
るわとさてほめぬものこそなかりけれ

第二

玄んわう御むほん井よりよしうつての事

この事なをもかくれなく玄んわうをはじめてまつ
りいづれも大きにおどろかせたまひたくみしちりや
くのあらわれしうへはいかゞはせんかたぐとしん

いをくだきてひやうぢやうあるおゝいの大じん申さ
るゝはもはや此うへはとかふ申におよぶまじ大ぐん
のもよふしてかわちの國こんがうざんにきみをうつ
しきんべん口のちくほくを切入れらうまいをようい
して一兩年も御ろうじやうましまさばよりよしにい
しゆぶかきしよ大みめうめさず共まいるべししから
ばよりよしおのれとじめついたすべしもしおしよせ
きたる其所はなん所やまぐたにぐにとをめをつ
け一方よりかけ出くむにむ三にたゝかはやりをゑ
ん事はうたがいなしいさめやいさめかたぐとせん
ぎ一づにさだめしのひくにせいぞろへ三重うへを
したへとかへしけるかくてしんわうはおくの御てん
に入らせ給ひ太子きさきをちかつてかやうくの
次第にてかはちの國へおもむくなりおもひのまゝに
打かたばめでたく御めにかゝるべしもしまたいしか
に打まけなばちぎりおきにしかね事をおもひ出した
まひなばごせをとぶらひたまはれやなごりおしやと
の給ひてなみだにくれさせ給ひけるやよひのうへは
きこしめしこはうつゝなの仰やなかいらうのちぎり
あさからず一日へんじもいかではなれまいらせんい

づくまでも御ともにめしつれゆかせたまへやとかき
 くどきてぞなげかるゝしんわうつくゝ御らんじて
 いたはしきありさまや誠きんごくせんじゆの花のよ
 そおいとあらそふすがたもかはりはてたりあゝさて
 ふびんの事共やいかいはあらんとむすばれさせ給ひ
 しが御心つよくも御なみだをおさへげにことはりな
 りさりながらいくほどなくもきうくしてまたこそま
 みへ申べしその内ふみのおとづれいたさんいとま申
 との給へばその時わかみや御たもとにとりつきみづ
 からなんしとむまれをなしことさらおゝちのかたき
 なりたゝみづからも御ともにめしぐせられ候へとな
 みだながらにの給へばしんわう聞召おゝいとやさし
 くも申たりさりながらはゝをのこしおくなれば御身
 も共にとゝむるぞはゝにかうゝ有ならばちゝがと
 もにはまさりなんとひこゆるたもとをひきわかれは
 や御こしにめさるればちからおよばすみやさき御
 あとをみおくりてさらばゝゝとのなみだのわかれぞ
 あはれなるわかれゝゝになりにつりさるほどにしよ
 ぐんせい御こしのせんごをしゆごしつがふそのせい
 五まんよきらくやうをうつたつてかはちの國にぞい

そぎしがほどなくこんかうせんにもなりぬればほり
 をほりへいをぬりやぐらかいたてさしあげてろうじ
 やうのよいしてよするかたきを三重今やゝゝと待
 いたり此事なをもかくれなくよりよしは聞召いかに
 かたゝゝ二のみや御いきどをりやまずしてざいきや
 うのぶしをかたらい大ぐんにてかわち成こんがうせ
 んに立ごもり給ふなりまづゝさんだいしてみぎの
 しだいをそうもんせんとやがてきんにあがるゝ
 御所にもなればはじめおほりをいちゝゝそうもんあ
 りとかく大ぐんにてこんがうせんにひきこもらせ給
 ふ事さだめてそれがしを御てきになさるゝと存候い
 かにもしてみやの御いきどをりをなだめらるべきと
 そうもんあるみかどゑいぶんましゝゝてされば二の
 みやはもりすみがゑんるいたりもりすみたいじの後
 はちんにも心をへだてしなりさればとてそつじのう
 つてはかなふまじまづゝちよくしをくだしものし
 だいをゑいぶんにたつせんと三條のもろいへに仰付
 らるゝうけ給はり候と御まへをまかり立三重かはち
 をさしてぞいそがるゝこんがうせんにもなりしかば
 三條のもり家ちよくしにさんじたるよし申入るゝば

んの侍承はりやがて此よしを申上る二の宮聞召もろいへめせと仰けるかしこまつて候とおもてに立出こう御とをりと申上るもろ家御まへにかしこまりさても此たびの御むほん天子にたいして御うらみは有まじく候しせん御うらみも御ざ候は此もろ家につぶさに仰入れられ候へ其だんゑいりよにたつし申

べく候いはんやれんしの御中なれば御しつくわいは有べからずといさいこまやかにあいのぶるしんわう聞召天子にうらみはなけれ共たい御まつり事せいめいならずぶけより天子のけんへいをとっておこないくげ日々におとろいはんべければ天下のめつぼうとほきにあらずさるによつてわれ天道にかわつてあくぎやくぶだうのよりよしをたいじいたさんそのためにかくはおこない候なりいそぎうつてをむけられ候へとぞ仰ける時に大じんすゝみ出いかにもろ家今このきはにおよびてせんじもちよくしももちゆべきにあらずいまに此きみを天子とおおぎ奉らん事あんの内なりはやかへりて此よしを申せとちよくしをかいつかんでもんより外へなげいだせばもろ家はきもをけしいきたる心ちはあらずしてやうくとしておきあ

がりみればたてゑぼしおも打をとされてうしなへばかりきぬのそでをうちかざして人のみるめもおもわくもいかでかもつておもはれんほうくみやこへにげのぼるかの大じんのあくぎやくもろ家きやうのていたらくしやうしせんばんなかくさてにがくしくこそみへにけれ

第三

三條のもろ家はあやうき命をたすかりていそぎていとににげのぼり二の宮の御所存のとほりおほいの大じんがあくぎやく一々そうもん有ければみかどげきりんやすからずいかによりよし二のみやがむほんにおいてうたがいなしいそぎなんじはせむかいすつとうつさずついうし天下いつとうにおさめよとのせんどじなりかしこまつて候とりやうちやう申御まへを立三重やかたにかへらせたまひつゝ諸ぐんせいを引ぐして河内の國へといそがるゝこんがうせんにもなりしかば大手からめてもみ合時のこゑをぞ三重上にける城の内にもかねてごしたる事なれば同じく時を

合せつゝ我さきにと切て出火花をちらして三重たゝ
 かいけるされ共せうぶは見へざりけり其時城の内よ
 りもむしや三人すゝみ出大おん上で申やうとをから
 ぬものはよりて見よちかきはかねてゑつつらんおほ
 いの大じんの良等に杉山だんのすけいつなのてつし
 ん坊あたいの八郎といふ者なりよりよしの御内なる
 四天王は出ぬかやはなぐしく太刀打して諸人のね
 ふりを覺さすべし出よぐしくのしれば其時げんじ
 のごちんよりむしや五人すゝみ出我は是げんじふだ
 いの侍にたけばほそかはとだ大田むらやまとて何れ
 もおとらぬゆうしなり四天王うにてなければ太刀打
 はならぬ事か我々がうでさきをそつと心み給へとい
 ふ三人のものの共うちわらつてやあなんぢらごときの
 ぐ人らはありのたけともおもわぬぞあしもとのよき
 時にとうくひいて四天王をいだせといふ竹べの平
 六はらをたてあまりひろうのことばやと太刀ふりか
 ざしゑしやくもなくうつてかゝるすぎやまきつとみ
 てあゝ心みちかきおのこやとまさかりを取のべみち
 んになれと打ければかぶとのまつかうむないたまで
 わりつけられしりへにどうとふしたりけるほそかは

藤太つゝと出おゝ口ほどなるむしやぶりやとおもて
 もふらずかゝりしをてつしんわらつて出ごへんもし
 やばのうきすまひもはやあきかせ立たるかとかなば
 うをとりのべ打ければらつくわとちつてぞしゝたり
 けるとたの小太郎うんは天にありとはしりかゝるを
 てつしんちうにつかんで大ぢへ入れよとなげければ
 うんとばかりをさいごにてくさばのつゆとぞきへ
 にけるのこる二人ははがみをなしむ二む三にかゝ
 りしをあらいの八郎心得たりととびちがへ二人を
 さうのこはきにはさみかうべとくを打合らつくわ
 のごとくにしてぞすてにけるよせてのぐんびやう膽
 をけしゝりまいしてぞひかへけれわだ左衛門きつと
 みて出きやうようにほうせんと太刀ひつさげためむ
 ねとは我がことなり人ませもせずかゝりしを八郎お
 つ取なをしちやうど打をはつしと合いれみだれてし
 ばしかほどたゝかいしが八郎がぼうをさそくにつけ
 てかつとなげすておさへてくびをとつたるは時にと
 つてのめいやうかなすぎやまだんのすけ是をみてげ
 に四天王にありけるよと一もんじにかゝりしをむさ
 しのかみたけはるはしりいで打くるまさかりむすと

第四

八まんあらはれ出竹みつをたすけ給ふ

其後むざんやな竹みつは俄にきやへいに取つめられ
今をさいごとみへしかば皆々袖をぞまぼらるゝされ
共あにの竹はるは泪をおさへ立よりていかに竹みつ
忝もしゆくん頼義公の御まへ成ぞか程の少病にてさ
やうにみへけるが心を取なをせ竹みつとすゝめなが
らもかなしくてしのび泪はせきあへずむざん成かな
竹みつは竹はるのこゑと聞くるしげ成いきをつぎあ
あ忝次第かなさいごに君をはいし奉る事是人々のお
なさけゆへなり誠に御せんとをみるといけ申さずやみ
やみとしせん事かへすゝも口をしやいかに竹はる
殿ふるさとの母うへにさいごの有さまをかたりて給
はれ公平殿はいづくにましますしやきやう竹はるを
よきにめがけてたび給へなごりおしのはうばい達あ
にうへ頼奉ると是をさいごのことばにてついにむな
しくなりける是はゝとばかりにておのゝ涙をな
がさるゝかゝるあはれの折ふしいづく共なくいくは
んたいしきらう人來ていかに方々それ成ておいほひ
ごうの玄にして有ければ心やすく思ふべしいでゝ

とりゑいといふてとらんとせしをいかでごへんにと
られんゑいゝこゑを出しねちあいしかすぢがねわ
たせし大まさかり中よりふつゝとねぢきつたりすき
やまいかつて太刀をぬかんとする所をまさかり取の
べちやうどうてばちしほにそみてかつはとふすてつ
しん是をみていさぎよきふるまいやそこをひくなど
かゝりしを公平一もんじにかけ出ておしならべてむ
んずとくむ兩方のふむあしはぢしんのゆるにことな
らずされ共公平大ぢから大こしにひつかけてかしこ
へどうとなげおさへてくびを打をとすまた大のおの
こ一人はせ來りのがさじときつてかゝるをひつばづ
しかいつかみやあさきほどのごぼうとはばつくんに
ちがふたりからだばかりでぢからはなしひとへにあ
さがらをもつてあつかふにことならずとくびをふつ
つとねぢ切て其後大せいを四方へばつとおつちらし
身かたのぢんへしんづゝとひいて入つたる此人々
のていたらくとうはつびしやうもんはくわうもいか
でこれにはまさるべきあつばれゆうしのあつまりや
とさてほめぬものこそなかりけれ

くすりをゑさせんとくわいちより取出し立より口に入給へばふしぎやにわかにいき出であらくるしやとこゑをあぐれば人々よろこびいさみをなす其時賴義らう人にむかいして其方はいか成人ぞと仰ければこたへていはく我は此國のこんだの八まんなりやがて天より力をそへさせ給ふべしそれまではあいまでとてくもいはるかにあからるゝはつとかんして賴義はこくうを三どらいはいし扱はふつしん三ほうもいまだすてさせ給はぬと御よろこびはかぎりなし扱又三田の竹みつも次第くゝに本ふくいたしければおののきゑつのまゆをひらきさあらばおしへにまかせんとひろおかに御ぢんの取三重しばらくひかへていたりける是は扱おき物のあはれをとゝめしは都にのこされおはしますしんわうのたいしきさきにてしよしのあはれをとゝめたり扱もつまのしんわうは川ちへしゆつぎよなされしよりかせのそとふくにだに今や歸らせたまふかやおとづれもましますかとあくがれ待わひ給へ共其かいかくもたいします事なればゑいりよをくだかせ給ふべしつれなかりけるうきすまいやとりうていこがれなげかるゝわかみや御泪の

ひまよりもいたわしや父うへのしつ山がつの御すまいさぞや物うくおほすらんあらうらめしのうきやとおもひまさらせ給ひける母うへあまりやる方なさにいざやわかみやなんでんに出文ごのつねく御心を入れ給ひしめい所づくしのびやうぶをせめてはうきをわすれんとわかみやの御てを引女ばう達をめぐしてさしきに出さて給ひつゝ立よりはをみ給へば國々に聞へたるめいしよくゝのうら山を四きによそへてうつさるゝまづひがしのびやうぶにはおもしろや花の都のはつはるやおとわの山のうすがすみけふたちそめしとしなみのかものは風のどかにてこほりとけ行きよたきやたにのと出るうぐひすのこゑやたかおに聞ゆらんとばたのおもの衛つゝくよとのゝさはのまこもぐさつのくみわたるおりしもは水のみまきのはなれこまけにおとに聞つの國のなにわのはるのうら風にたかしのはまや住よしの松のみどりもひとしほにさきてかゝれるふちなみはなつのはじめと打みへてくもいのよそのほとゝぎすたかまの山をやすぎぬらん立田のかわのうのはなや十一の里のなつよつもかけてやさらすさはかわのきしのやなぎの

下すゝみいつのまにかは神風のいせのはまおぎ打そ
よき今こそあきにあふみぢやきへ行月のかゝみ山光
りをみがく水うみのなみやこほりとみへぬらんあれ
てやさしきふわのせきたびゆく人の立わかれいなば
の山や宮ぢ山みねのもみちの色々はたれかはそめし
からまつも二村山の村さめぬれてさはたるかりかね
のおつるへいさはびやう／＼としほのひかたの今み
口はまなのはしはあとたへてさよのなか山是かとよ
打こへみればおゝい川みなざる水のなみまくらはや
くも爰にきよみがたせきのとさゝぬ君が代のひさし
かるべきためしにはちもとのまつこそめでたけれふ
じのたかねの白たへにつもれるゆきをみるからにふ
ゆのけしきはおもしろやいづのみしまのみやだちも
いくよへぬらん神さびてかまくら山のほし月よ大い
そこいそこゆるぎのおきにつりするあまをぶねこが
れてかへる夕ぐれはゑんぼのきはん是ならんあきの
ちぐさのいつとなくふゆがれはてゝむさしのはこの
いけみづこほり川かもめおし鳥都どりむれいであそ
ぶよそおいはふでのかぎりやつくすらんしもうさ
はかとりうらかづさの國にゑたのはまひたちにか

しまの宮しろやふりさけみればつくばねのみねより
おつるみな川いまだはるにはあらね共なみのはな
さくさくら川かのつらゆきのことばにかけしむかし
のおもかげもげにことほりとみちのくのちがのしほ
がままつしまやおしまのあまのときやかたふきあら
したるうら風はそとのはまにやかよふらんすへのま
つ山よつも川あこやのまつこのまよりおきにみへ
たるつがるのしまち鳥共よぶそてしまやゑぞがしま
の有さままでのこるかたなきふでのあとりかへし
み給ひて少心をはらさせ給ひわかみやの御てを引女
ぼうたちもろ共におくの御てんにいり給ふともか
くにも此人々の御有さまたゞよのなかのものゝあは
れはこれなるはとみなかんせぬものこそなかりけれ

第五

明神しんたく井頼義ようちの事

それせうしきはいのらぬとても神はやどるよのなら
い頼義公の御ぶうん口さにつきざるしるしにや竹み
ちもしにをのがれければ御ゑつきはなだかぎりなく
扱人々を御まへにめされいかに方々所こそおゝきに

八まんみやちかくちんの取こそめでたけれかつうは
 たうしきたうのためいざやさんけい申さんと人々を
 めしぐして三重神前さしてぞ参らるゝおまへになれ
 ばわに口てうと打ならしなむきみやうちやうらいこ
 んだ八まん大ぼさつ口口ちやうていのほん主累世り
 せしめ給へとふかくきせいをかけ給ひそのゝちねぎ
 かななきをめしあつめかぐらをそうしみゆをあげ三
 重しんりよをすゝしめたまひけるしゆしやうなりけ
 る次第なりあら有がたや有がたし神ものうじうまし
 ましてかななみにより給ひ御たくせんこそあらたな
 れふしておもんれみればしんはひれいをうけすまさ
 にしやうしきのかうべにやどるいかに賴義がつうは
 れつぎのかしんら其外ていしやうの方々心をしづめ
 けいしゆしてわがたくせんをたしかに聞それ我がて
 うはしんこくにて神代より此かたよゝをつたへしす
 べらぎの竹のそのほのすへばまでたれかはおあをが
 ざらん然るにしんりよをないがしろにしわういをも
 おそれずおのがけんいをふるはんためばんみんをの
 うらんしてうかをかたむくる共がらをてうてきぎや
 くしんと是をいふあゝちう成かなしんなるかな爰に

賴義はたを上げせんぢやうにおもむく事身のため家
 のためにあらずひとへにてうかたいへい國どふねう
 のちうしんなればいかでかなうなからんやあたか
 一だいふんしんしがうまのりけんし身をへんじてき
 ぢんにいりて打やぶり又はこんがうてつとうのたて
 となつては身方をまもらんしかのみならずやれまつ
 しやのほこらもたいちやうゝしんりきをはげまし
 天をかけりちをうごかし爰にとびかしこにひぎやう
 し四方四ゆいをはいくわいしてきをそくじにたいぢ
 せんことなをたな心をかへすごとけんなんたちてう
 かのしゆごとしてたんせいをぬきんでまるをいさむ
 る心ざしかへすゝもしゆせうなりいはんやじひを
 むねとするしんめいにおいておやせいやくいかでむ
 なしからんなほゝしんりよをすゝしめやあ方々と
 の給ひてしばしたゝすみおはします其時ねぎはいさ
 みをなしまたまかぐらをくりかへしうたには神もの
 ふじうをたれゑらゆのはなをさゝげていざやじんか
 をうたはん神おどりしていざやしんりよをすゝしめ
 んちよをたのしむひなづるのよはいを君にさゝげん
 そうよやゝよろづよわいをまもらんとみなもろ共

にいさみをなしきつゝのこゑたへにして三重神はあがらせ給ひけり人々きゑつのまゆをひらき有がたきすいそうやとふかくかんしてそれよりも君の御とも仕り三重や^く所をさしてぞ歸らるゝやく所になれば御大將頼義公人々をめしあつめ城中のぐんせいいまだ三萬きにおよぶと聞然共てきより更に打て出ず此上はみかたにもくらしいをはかりあいしらいばかりによせかけてひやうろうづめにするならば我とじがいをいたすか又はかう人に出るより外は有まじきぞまづ方々はせめ口をまもり爰かしこにとをめを付城中へ出入のやつばらを一々に打取べしてきたいくつに及打て出る其時は一どにどつとかけ合中に取こめ打べきと其りあきらかに仰ければ公平承り上いのだんせうち仕候へ共天下むそうの我々が有ながら左様にゆふゝとひかへてはたものさみする所も有あく所なん所をおぢ申にあらずいでそれがし一人かけ入て大將大じんかくびをぢさん申かそれがしかくびをてきにとらるゝかいきすきたりや我が命うむの二つは爰なりいとま申て方々と一もんじにとび出るをため宗取ておさへ誠にもつて申さるゝごとくたとへ

ばかたきてつべきをつみかさねたり共御ぶんをさき立我々おなじく打て出ばふみやぶらんはあるの内なり^ゑかれ共只今君の仰いだされしごとく所はなん所ことにてきも大ぐんなれば一人としてはおぼつかなしことさら此頃は太あめ打つゝき馬のあしばもあるべしまづ五三日も相待てせんちんごちんのさだめおき只一どにかゝるべしまづ^ゑまり給へとせいしければしきりにいさむ公平もためむねが其一りにきをのまれ心をほつきとおりて^ゑのいかりをやめにけるかゝりける所へ都よりちよくし立頼義に近付此たびのたゝかいすじつとへだゝり君も^ゑいりよをくだかせ給いまづそれがしをつかはされ候きん日ざいきやうのしよぶしをさしこさるべしすいぶんはげみ給へとせんじのおもむきあいのべ給へば頼義承りこは忝次第やとつつしんでちよくとあればちよくしは都へ歸らるゝ其時公平又申やういかに方々此上はたがいのたんかうなり扱都せいくわゝりなみゝのはたらきしては天下になを^ゑし人々ちよくとはおもはれぬかとかく都せいのつかざる内にいざ取かけ打べきと思ふはいなやためむね聞ておふ申さるゝ

所しごくせり此うへはじこくうつさず取かけ申さん
 去ながらもはやこよいは日もくれぬ明日さうてうに
 おしよせんといへば此ぎ尤然べしとおの／＼せんぎ
 ひやうちやうして三重いまの内へぞ入にける去程に
 城中の大將うたの大じん諸ぐんせいをまねきよせい
 かに方々扱も賴義はらうどうの竹みつが大病をうけ
 其うれいに沈み諸ぐんせいゑうしやうすると聞て有
 此たくみこそくつきやう一のさいはいたりことに此
 頃の大雨にいよ／＼てきはゆだんせんこよひよ打に
 おしよせて皆こと／＼く打取て其後都へせめ上らんと
 とも大ようにぞ申さるゝ一身の人々是を聞此ぎ尤
 しかるべしと扱よ打の大將には平のむねひろまかい
 の左衛門つがう其せい三千よきにてくさすりやくつ
 わあぶみをきぬでつゝませゑのびやかに城を出三重
 かたきのちんへぞおしよせけるかゝる所にわたなべ
 むさしのかみ竹はるはてせいをひきぐしちんばのけ
 んみに出けるが此よしをみるよりもすはやかたきが
 よ打に來れりゑゝおのれらあんおんにはかへさじと
 やがて侍一人近付やあなんちはいそぎ公平の方へ参
 りて申さうは只今かたきよ打におしよせて候其だん

をゑよぐんせいへふれさせ給ふべし少もおどろくふ
 せいなく大てへかけ出給へそれがしはからめてへま
 はりうしろより取まき申べしことさら此中の大雨に
 てこんな川へぼつこみ申さんと手立こまやかに申付
 たかしこまつてそれよりも公平やく所へいそぎける
 かくとはゑらでかたきのせいこんな川を打わたしひ
 ろおか川原におしよせて三重時のこへをぞ上にける
 かくて公平は竹はるがあいづのごとく大てへかけ出
 同じく時をぞ合けるかたきのぐんびやう共あんにさ
 ういしてあきればてゝいたる所へわたなべのたけは
 るからめてよりおしつゝみたいまつにひを付させあ
 ますまじきと打て出ればかたきのぐんせいきもをけ
 し我も／＼とこんな川へとびいりて水のあはとうせ
 けるはげに心ちよくこそみへにけれわづかにのこる
 物共も皆こと／＼く打たつればよ打の大將こはむね
 んと一もんじに切てかゝるおふるたりやと公平はと
 びちがへてむんずとくむ左衛門すかさず公平がみだ
 れがみをひつつかみ引ふせんとせしを竹はるはしり
 かゝつてかいつかみゆんでどうとおしふせた時に
 公平申やういかに竹はる此二人のやつばらはさすが

に聞へし大將なればいざ君へのみやげにせんおふ尤の次第やとめいゝにひつさげてやく所をさしてぞ歸りける二人のもののていたらくあつぱれぶそうのゆうしやと扱はめぬものこそなかりけれ

第六

えんわういけどられ給ふ井頼義かいちんの事

かくて公平たけはるはよ打の大將をいけ取ていそぎやく所へ立歸り君の御まへに參り有し次第を申上る頼義聞召方々がはたらきはんくわい長郎にもこへつべし扱あのまかいの左衛門はせんぞ代々げんじにちう有物にて有其うへ思ふしさいあればかれは其ままたすけをけ又平のつねひろはかたきのすへにて有間いそぎかうべをはねよ承候とやがてかはらに引出し其まゝかうべをはねにける左衛門つくゝ思ふやうそれおんのみておんをえらざるはぼくせきにことならず此上はすいぶんちうをつくさんとおもい御前にかしこまり涙をながし誠にもつて御たすけにあづかるのみならず有がたき上いのおもむきかんるいき

もにめいじて忝し此ちうかうに城中のやうすを申上べし然にこんごうせんと申はたとい五萬十萬のせいにてせむる共たやすくはおち申さじされ共爰の一つのなんぎこそ御ざ候へ山の南にあたつていわたけせいすいがたきとて二所のたきあり此みづを城中へ取申候が大じんも此方を一大じと思ひそれがしをつけおかれ候此みづを切候へば城中へは水少も來らずしからばぐんびやう共水にうへていくさせん事思ひもよらず皆ちりゝにおち申さんそれがしはしんわうをいけ取奉り御身かたへはせさんじ申さんかの水上にはそれがしがはたを立おき申べしあしがる共をさしつかはされ水上を切おとさせ給へとてだてこまやかに申上る頼義聞召少のせんごんにて大とくをもとむるとはかやうの事をいふべきと御悦はあさからね扱左衛門は御いとまを給はりて城中さしてぞ歸りける其後ため宗を召れ右の次第を仰付らるれば承候と御前を罷立三重やがてしたくをしたりける去程にかくてわた左衛門てきちんにはせ行て城のていをみ上るにまつ北にあたつてもへぎのはたにくきぬき松かはひめ小松のさし物と四つめゆいにまいづる花わち

がいをさしたるはしらいたうと打みへたり大ての方
 にあかちのはたにみづ車たつなみきつかう三かい
 さ一やうにねざゝのさし物はよこ山たうとみへにけ
 り南にあたつて白はたにもみぢに玄か花すゝき打た
 るこそまかいの左衛門がちんばなりとみ付つゝぐん
 せい共を引くしてしづかに山くさし上りくだんのた
 にを其まゝにざんしに切ておとしつゝ三重本ぢんさ
 してぞかへりける去程にうたの大臣はしん王の御ま
 へにかしこまりてきあんないを存つゝ此城の水 upper
 切候へば城中のぐん兵共水につかれどろによへるう
 をのごとくに罷成候へばもはや此城たもちかたしき
 みはいそぎ大和の方へ御しのび有かさねてぎへいを
 上させ給へはやくとくといひもあへず御こしにの
 せ奉りよしのの方へぞおとしけるぐんせい共是をみ
 てさあしん王のおちさせ給ふは我も人も命有てこそ
 おんしやうのさたにもあらめ只おちよといふこそあ
 れ三重皆ちり／＼になりになるかくて其後みやこよ
 りかせいのともがら三萬きにてはせ來り賴義なゝめ
 に思召いそぎ取かけ一時にふみやぶらんと大てから
 めてもみ合三重ときのかへおぞ上にける大じん大さ

におどろきて此上は力なし只む二む三に打て出てか
 うみやうせよ承候と我も／＼と打て出れば公平ため
 宗わかむしや共ゑたりやあふと立かゝりあたる所を
 きらいなく三重はらり／＼と切にけるすさましかり
 ける次第なり城の内のつわ物共皆こと／＼く打れけ
 れば大臣今はかなはじと家につたはるらうどうにさ
 なたむろしまいざはかつまたとて一きたうせんの物
 共をせんごさうに相ぐして一ぢんにかけ大おん上此
 度の大將うたの大臣とは我事なり天下わけめのいく
 さなれば賴義にたいめんしうむのせうふをけつせん
 とぞ申さるゝ公平聞てやあなんぢかやう成あくぎや
 くふたうのぐにんめをいてけころさんといふまゝに
 一文しにかけ出るさきにすすむこなたの次郎心へた
 りとおしならべてひつくんだり公平こと共せず上お
 ひをかいつかんで力にまかせてなげければあけそみ
 てぞゑたりけるむろしま太郎はがみをなしてとん
 でかゝるをため宗ゑたりとひつくんでやがてくびを
 打おとす大臣いかりをなしいざはかつまたをさゆう
 に立只一打にとかゝりしを公平心へむすつくめば二
 人もさうより取かけつかんとする所を竹はるげ心か

け來り三人をかしこへどうとなげ一々くびを打おとす扱公平かさにかゝつてひしぎ付んとしたりしが大臣聞ゆるゆうしにてかくればはづしなくればとびしばしが程こそもみあいけれ公平ほうどあぐみはてゝいたりしかげに思ひ出したりりんの玉とて竹つなさづかりしひしゆつは爰なりとやはらにはくれて取てふせおのれにほねをおりたりとくびをふつつとねち切て君の御めにかくる時にまかいの左衛門はしん王をいけ取奉れば頼義なゝめに思召悦の時を上都をさしてかいちん有やがてきんりさにんだいし一々次第にさうもん有君ゑいかんかぎりなくゑんわうをおきのしまへながすべしとせんじにてやがてゑまへぞながしけるさて頼義はおんしやあつくかうむり給ふなをくけんしの御はんじやうせんしうばんざいめでたき共中く申はかりはなかりけれ

寛文三亥卯年正月吉日

頼義金剛山合戦終

あやか八さう記

付佛母まや婦人

第一

それきやうにいはくあんじゆ一さいくどくゑほうゆ
ぶ十ほうきやうごんほうへんにう佛ほうぞう上きや
うひがんとくんぬんこゝに五てんちくの其一つ中て
んぢくまかたこくのあるじをば上ほん大わうと申た
てまつるゑひ第一のけんわうにてばんみんをあはれ
み給へば國もゆたかにおさまりて上おろしたみのと
ざしもゑづか也偕またさうのゑんかにはぐわつくわ
つ大じんまか大じんとてゑんぎたいしきちしん國の
せいたうれいあつくきみをゑゆごし奉るゑかるに上
ぼん大わう御代をつがせ給ふべきわうじいまだまし
まさずさうの大じんけいしやううんかくあけくれ此
ことひやうでう有其頃せんじやう國のあるじせんか
くわうのひめみやあねにきやうどんみいもうとにま
やぶにんと申てよにならびなきびじん有しをむかへ
とらせ給ひ兄弟共に後にそなへ給ふ誠にやさしき御

すがた月にねたむかほばせはくものうへにもならび
なし花にあらそう其すがたやうりうよりもたをやか
にひすいのかんざしあをふしてたけにあまりてふし
色ふかくるりをのべたるよそをひはたゞ天人にこと
ならず大王ゑいりよに入せ給ひあねきやうどんみは
月のかたばゑやうぐんをあひそへげつけいでんにう
つし給ふいもうとのまやぶ人は花のかたうゑやうぐ
んをあひそへせいりやうゑやうへうつし給ふ兄弟共
にいつくしく花とやいはん月とやいわんおもいはも
のうへなれやあまつおとめのはごろも袖のひかりや
まさるらんぎよくたいにゑたしみ給ひ御みやづかひ
給ふこそ國もゆたかにたみさかへ御代長久の御すい
そう三重めでたかりける上次第なりかくて其後御い
もうとのまやぶにんは君のゑいりよあさからすせい
りやうゑやうの玉のとこけんのまゝらにかたぶき給
ひ少まとろみ給ひけるかゝりける所にこくうにをん
がく聞へゑうんたな引おりからこんゑきたへなるほ
うとうの十六丈にそびへこんゑきのはた七ながれゑ
つほうゑゆ八本ぶさうの花ぶさにほひふかく三望心
もことばも上およばれずぶにんふしぎにおほし召ま

くらさし上み給へばほうとうの内にたつとき御佛ひ
かりをはな^あかとか^あやうどうくをんごうひやうと
う^あゆ^あやういつ^あちち^あはん^あにむ^あぞく^あこん^あげん^あざ
いと^あうらい^あけち^あるん^あふ^あぶ^あつち^あとな^あへ^あ給へば^あふし
き^あや^あな^あび^あやく^あさう^あや^あうれ^あん^あげ^あを^あいた^あき^あふ^あづ^あせん
に^あ来る^あ其^あ時^あ御^あ佛^あほう^あとう^あを^あ出^あ給^あひ^あれ^あん^あげ^あの^あう^あへ^あに^あざ
し^あ給^あひ^あぶ^あに^あんに^あむ^あか^あつ^あて^あの^あまた^あふ^あや^あう^あい^あか^あに^あぶ^あに^あん
御^あ身^あに^あけ^あち^ある^あん^あふ^あか^あき^あゆ^あへ^あ今^あ爰^あに^あら^あい^あげ^あん^あす^あ上^あぼ^あん
わ^あう^あを^あち^あゝ^あと^あた^あの^あみ^あぶ^あに^あん^あを^あは^あゝ^あと^あた^あの^あみ^あて^あや^あゆ^あや^あ
や^あう^あの^あぐ^あは^あん^あを^あみ^あて^あん^あなり^あぶ^あに^あん^あの^あたい^あない^あを^あか^あし
ゑ^あさせ^あ給^あへ^あとの^あ給^あへ^あば^あぶ^あに^あん^あ聞^あ召^ああら^あお^あそれ^あ有^あお^あこ
が^あま^あや^あご^あし^あや^あう^あさん^あぞ^あう^あの^あわ^あが^あ身^あに^あて^あいか^あで^あた^あつ
とき^あ御^あ佛^あに^あか^あしま^あいら^あせん^あこと^あ共^あも^あつ^あたい^あな^あし^あとの
給^あへ^あば^あ佛^あか^あさ^あね^あて^あい^あや^あと^あよ^あぶ^あに^あん^あす^あで^あに^ある^あん^あい^あの^あむ
か^あし^あを^あか^あた^あつ^あて^あき^あか^あせん^あ御^あみ^あく^あは^あこの^あむ^あか^あし^あは^あとう
ぞ^あや^あう^あ國^あの^あほう^あや^あわ^あう^あの^あひ^あめ^あみ^あや^あ也^ある^あり^あによ^あと^あ申
せ^あし^あ人^ああり^あぞ^あが^あけ^あい^あぼ^あの^あざ^あんに^あて^あせ^あつ^あたら^あせん^あとい
ふ^あ山^あ中^あに^あす^あて^あられ^あ給^あふ^あ其^あ時^あ御^あ身^あは^あぞ^あや^あう^あく^あは^あう^あぼ^あさ
つ^あの^あと^あか^あれた^ある^あげ^あだ^あつ^あけ^あつ^あぼ^あん^あぎ^あや^あう^あを^あ一^あま^あん^あぶ^あど
く^あぞ^あゆ^あし^あ日^あ月^あと^あう^あみ^あや^あう^あぶ^あつ^あを^あく^あや^あう^あし^あ給^あふ^あそ^あの^あく

りきによつて今すでにまやぶにとむまれ上ぼんわ
うに^あた^あし^あみ^あ給^あふ^あ其^あ時^あの^あ日^あ月^あと^あう^あみ^あや^あう^あ佛^あは^あ則^あわ^あれ
なり^あか^あゝ^ある^あけ^あち^ある^あん^あふ^あか^あき^あ御^あ身^あの^あたい^あな^あひ^あを^あか^ある^あぞ
と^あ御^あこ^ある^ああら^あた^あに^あの^あたま^あへ^あば^あぶ^あに^あん^あ御^あて^あを^ああ^あは^あせ^あ此
事^あわ^あび^あん^あと^あぞ^あたま^あふ^あが^あふ^あし^あぎ^あや^あぶ^あに^あん^あの^あ御^あて^あより^あ二
十^あ八^あ本^あの^あ正^あれ^あん^あげ^ああ^あざ^あや^あか^あに^あひ^あら^あき^あ出^ある^あ其^あ時^あみ^あ佛^あれ
ん^あだ^あい^あに^あう^あつ^あら^あせ^あ給^あひ^あさ^あしも^あた^あへ^あなる^あ御^あこ^ある^あに^あて^あが
と^あく^あぞ^あや^あう^あどう^あこん^あげ^あん^あざ^あい^あい^あこん^あと^あう^あら^あい^あぞ^あよ^あぶ
つ^あち^あと^あとな^あへ^あさせ^あ給^あひ^あ三^あ五^あの^あち^あぶ^あさ^あを^あか^あき^あわ^あけ^あか^あげ
の^あう^あつ^ある^あが^あご^あと^あく^あは^あや^あたい^あな^あひ^あに^あや^あど^あら^あせ^あ給^あへ^あば^あ其
後^あほう^あぞ^あゆ^あの^あ花^あぶ^あさ^あ一^あど^あに^あひ^あら^あけ^あも^あろ^あゝ^あの^あ御^あ佛^ああ
ら^あわれ^あ出^あさせ^あ給^あひ^あく^あは^あう^あみ^あや^あう^あ十^あ方^あせ^あか^あい^あみ^あぢ^あも^あぞ
よ^あなん^あぞ^あゆ^あご^あし^あよ^あ佛^あし^あや^あう^あゝ^あと^あとな^あへ^あ給^あひ^あて^あぶ^あに
ん^あを^あら^あい^あは^あいま^あし^あゝ^あて^あ三^あ重^あこ^あう^あに^ああ^あから^あせ^あ給^あひ
ける^あぶ^あに^あん^あ大^あき^あに^あお^あど^あろ^あき^あ給^あひ^あゆ^あめ^あさ^あめ^あわ^あが^あ身^あを^あみ
た^あま^あへ^あば^あ五^あたい^あ六^あこん^あき^あよ^あや^あか^あに^あく^あは^あう^あみ^あや^あう^あ御^あて
ん^あを^あて^あらし^あ給^あふ^あこ^あは^あも^あつ^あたい^あな^あき^あ御^あこ^あと^あや^あと^あこ^あう
を^あぞ^あば^あら^あく^あら^あい^あは^あひ^ああり^あそ^あれ^あより^あも^あま^あや^あぶ^あに^あん^あく^あは
いた^あい^あの^あ御^あ身^あと^あなら^あせ^あ給^あへ^あば^あ君^あを^あは^あじ^あめ^あ奉^あり^あげ^あつ^あけ
い^あう^あん^あか^あく^あ天^あ上^あ人^あみ^あん^あか^あん^ああ^あや^あし^あの^あす^あへ^あゝ^あ迄^あおも

ひくの御よろこび三重たとへんかたこそ上なかり
 ければ是は儲をき世の中の月にむらくも花に風つらき
 事こそ出きたれげつけいでんにおはしますあねきや
 うどんみの御まへにば玄やうぐんをめされ儲もまや
 ぶにんはわうじくわいたい仕り君のあはれみもては
 やしよのはいかりもなきときくわうじたん玄やうあ
 るならばまやがいせいみのひかりうへみぬわしのふ
 るまひをおもひやられてうらめしや兄弟のもの共が
 おなし大りにすまひして君の身ひとつにみやづかひ
 まみへ申事共はよにもためしのなきことかなたとへ
 るいりよにうつゝなきおほせのあるとてもま
 やぶにんはそしなればみづからが心をはぢ君へおい
 とま申上ふるさとへかへらんことこそみちならん又
 ふるさとのちゝうへも兄弟が中一人は御かへし給は
 れとたつてさうもんあるならばいかでかなはである
 べきやいまよりのちはおや有共おもふまし又ぶにん
 が有さまよそのみるめもかへりみずわがありがほの
 ふるまひ返すくもきつくわいなり玄よせんみずか
 らはかゝるじせつにながらへてせんなきことをおも
 はんより玄がいをとぐなる又はいか成ふちへも身を

玄づめ一ねんのあつきと成まやもわうしも取ころし
 今の玄んいをはらさんといろをかへての給ひしはふ
 しげにすさまじくみへにける將軍承りげに御どうり
 玄ごく仕り候仰のごとくまやぶにんはわうじたん玄
 やうましまさばちうぐうにようごとあふがれ給ひよ
 のはいかりは候ましあね君の御身にてもうとのい
 せいにおしまけ給ふは口をしき次第此上はまやぶ人
 をてうぶく仕りくはいたいわうじもろ共取ころし申
 さん玄からば君にうへこす御かたなし此だん御しあ
 んなさるべしとさまゝあくじをすゝめけるきやう
 どんみ聞召うれしき人のたくみなさあらば其だん
 よきやうにはからひ申せとのたまへば將軍承はり其
 ぎにて候はゝさいはひ爰にぎばくせん人と申てめい
 よのぎやう玄や候かれを頼てうぶくいたし申さんと
 おくりひそかに便を立にけるかくてぎばく使と打つ
 れ參上すきやうどんなのめに思召それこなたへとた
 いめんありさまぐの引出物を給はりいかに仙人ま
 やぶにんをてうぶくし取ころして給はりばんじはた
 のみ奉る行者承り仰そむきがたく候へばたちまちい
 のりころし申さん去乍てうぶくの法と申は七だんの

次第候中にもくわいたいのてうぶくは其たいをよく
みとめ申さではかなひがたく候きやうどんみ聞召そ
れこそやすき次第なれまやぶにんをたばかりよせみ
せ申さんとふみこまゝとかきしたゝめせいやう
でんへさしつかはし行者をこかげにゑのばせまやぶ
にんの御出をおくり今やゝと待給ふあらいたはし
やまやぶにんはかくすさましくみとは夢にもゑ
ろしめされずあね君よりの御ふみ世にもなゝめに思
召女房たちを御供にてげつけいでんへうつらせ給ふ
ふし心の内こそわはれなれきやうとんみは出給ひあ
らめつらしのまやぶにんいざこなたへのたまひて
をくのでんへゑやうじ給ひめでたき御身のよそをひ
や家のおぼへよの聞へ何事か是にまさらんとさまさ
まもてなし給ひけるすでにゑゆゑんもおはりて後い
かにぶにん心しづかにあふ事はよろこびの中のよろ
こびなりゑばしところはおもへ共又こそむかへ申べ
し君の仰もいかゞあればなごりはつきぬことながら
歸らせ給へとのたまひて御泪ともろ共にわかれゝ
になり給ふせり心の内こそあはれなれかくて其後
ぎばくせんになこかげにゑのびまやぶにんのおもか

げをおもひのまゝにみすまじきやうどんみに打むか
ひさらばいのり申さん御心やすくおほし召せとこと
もなげにぞ申けるあね君なゝめにおほし召へんしも
はやくいのりてたべばんじは頼との給へば畏り候と
やがてよいゑをゑたりしは三重すさましかりける上
次第なりかくて行者はひつちのよねを取よせ月の水
をむかへ取七どあらひてこにくだきまやぶにんのか
はばせをおもひのまゝにつくり立ひつちのわらにて
かたちをつくり五ぎやうのくしにてつき合せ五ゑき
のきぬにてみをつゝみはなたのをびを引まはしみつ
ばのそやをぞさゝせけるたけのかもしをさげさせか
うべにしめをきりかけぢぎやう七尺其下にさかさま
にほりうづみ四方四めんにだんをかざるそもゝゑ
ゆそのだんと申はそくさいぞうやくけいやいてうふ
くとして以上だんは四だんなりまづそくさいはひがし
むきぞうやくは両けいやいは西さててうぶくは北む
きなりくもつのやうこそおそろしけれひつほのいひ
をこくゑきにそめかへし百八十本のくぎをさしへい
はくをきりかけけまんにはほけの花ゑやすいにはく
ゑやの水をたれとうみやうにはいもりのあぶらしや

うめうにはこらうのほねひかけのたすきにみをひち
へいはくをふり上のつとうをこそ上げにけれふしそ
も天ぞんちぞん五りうぞんばんぎの玄やうれうあつ
きじんうじやうむじやうそうべうぞんみやうどうを
うごかしさいはひする殊には今のてうふく人てんけ
つもふちけのもうこうもう玄つとく五ぎやう五い七
玄やうないばく下ばく玄やへいのほうこうばくばん
玄やくむみやうのゐんあんみやうほんなふむ玄やう
をんとせめにせめてぞいのりけるあまりにつよくせ
められば百八十本のへいはくが一つにみだれて玄ん
どうせりぎやう玄や是に力をゑむみやうちやうやの
せばからんにいでよ／＼との／＼したり其時ふしぎ
やちのそこよりもくぞんたちまちをどり出たけのか
もじでかほかくしだん上につつ立どうの内にこゑあ
つていかにあね君わがわたくしのあらざればばんじ
はゆる玄給はれと泪をながしの給ひけるあね君此由
御らんじいかにまやぶにんわれをうらむることなか
れ父うへをうらむべし玄やう／＼せゝもへだつるぞ
おやあり共おもはぬなりまして兄弟ななどとはおも
ひもよらぬことにてあり今こそゑんのきれはなれそ

れはからへとの給へば行者立よりだん上より引おろ
しへいはくにをしまきさむしろに引つゝみでん中よ
りもなけ出しふし其まゝだんをぞやぶりけるきやう
とんみは御らんして今こそほんもふとけたりと心に
ゑみをふくませ給ふ其時ふしぎやにはかに天ち玄ん
どうしらいでんいなづま玄きりにて三重ごてんもく
づるゝ上ばかりなり人々是におどろきかなたこなた
ににげちつたり行者こくうをきつとみ何ものの玄よ
い成ぞ玄やうたいをあらはせと大をん上にてのゝ玄
つたり其時うんちうより玄やくびやくのきぞんあら
はれせつなが間にかくたり行者のへつそくひつつ
かみはるかこくうにとびさり忝も三がいのけう玄ゆ
玄ゆつせのもんをとぢふさぎてうぶくいたす天ばつ
いかでもつてのかさしと二つにひきさきこくうにと
んでうせにたりしはすさましかりける次第なり誠に
たへなる御佛をくわいたいなされしまやぶにんをて
うぶくいたせし天ばつもくせんにあらわれ玄はまつ
せまでのためしなりとて皆かんせぬ物こそなかり
けれ

第二

きやうどんみのねたみゆへまやぶにんの御なやみも
つての外にましませば君をはしめ奉りゑよきやう大
玄んせんぎとり／＼ひまもなし然る所に月光大玄ん
まか大じんをひそかにちか付儲もまやぶにんの御な
やみいか成ことぞとぞんせしに馬將軍がすゝめにて
なさけなくもきやうどんみぶにんをてうぶくあると
かや儲もにつくひ將ぐんがしはざかな此事君にそう
もんせばきやうとんみ諸共にうしなひ給ふはひつで
う然る時はまやぶにんあね君の御事をふかくかなし
みまし／＼て御くわいたいのおりからいよ／＼なや
ませ給ふべし此おこりのこんげんはみな將ぐんがわ
ざなればとか／＼きやつめを打取せひはおつてきわ
めんとぞんするが儲いかゝあらんと申さるゝまか大
玄ん聞給ひあつはれこれは大事のさた仰のごとく后
の御事はのちのせんぎにいたすべしまづ其あくぎや
くをたくむ將軍めをさしのばしおかんはわれ／＼ゑ
んたるみちにてなしそれがし將ぐんがたちへおしよ
せそくじにかれを打取せひはかされてきはむべし

んじ其ほうとそれがし心を合はからはんにたれかい
ぎにおよふべきうつてのよいはそれがしに御まか
せ候へとひそかにせいをもよふしてつがふ一千二百
余きまか大じん大將にてあくぎやくぶだうの將ぐん
をたいちにこそはよせにけれ此ことなをもかくれな
く馬將軍聞付むねとたのむらうどうせきゆふといつ
ゑがうりきむ二のくせものその外げくはんのやから
こと／＼くめしあつめ儲も此たびのあくじたれゑる
ましとおもふ所にまか大じんせいをもよふしよする
とや今此せつにいたつてちんずるともかなふまじか
たきよせなばいさぎよくきりちらし大將まか大じん
をうち取わが身にとがなきよしいつわつてさうもん
せんゑいりよさらにわきまへなくげきりんふかくま
しまさばきんちうを打やぶり天下にらんをおこし一
せのみやうもんきはむへしまづ大づゝいゑゆみなど
をよういせよとある所へあひもすかさすみかたのぐ
んせいなんぼくよりをつ取まはし時をどつとぞあげ
にける時のころもゑづまればみかたのちんよりはな
やかによろふたるむゑや一きこまかけ出しいかに將
軍御へんはきやうどんみをいさめ忝も一天のわうじ

をくわいたいなされしまやぶにんをてうふくせしは
何事ぞかゝる大きやくごんごにものかたし天ばつ
いかでのかるべきすみやかにかうべをはねられ十あ
くのつみをまぬかれよみやうがをえらぬ大あくにん
とことばせはしくのゝえつたり將軍とかふのへんと
うなくことやかましきにあればうちらせとげぢすれ
ばかたきのぐんひやうどつとかけ出いれみだれ三重
てつくはをふらしてたゝかひけるさしもよせては大
せい馬將ぐんがらうどう其かすあまた打れる爰に
かたきのらうどうせきゆふは馬將ぐんにちか付何と
たけくはけむ共此ていにてはかなふまじえかしなが
らよせての大將まか大じんをうつ取なばさうもんい
たすたね共ならんそのはかりことといつはまづそれ
がしうらがへりたるていにもてなしかたきにかうさ
んいたすべしもしかたき心をゆるさずはふた心なき
ていにて此もんへむかひ申さんときにそれがし打ま
けたるていにてよせてのちんへにげ入べし其時つゝ
いておひ給へえからば大將まか大しんかけ出んはひ
つでうところを御身と我せんごよりひつつゝんで打
申さんもし又申たき事候はゞきほうとそれがしひつ

くんでひそかにだんかう申べきとぐんほうかたくあ
ひきはめよせてのちんへぞいそきけるぐんもんにな
りぬればはるかにへだてまか大じんにたいめんしそ
れがしは馬將ぐんが一のらうどうせきゆふと申もの
にて候此たび將ぐんあくじをたくみ申だん一系に天
まのわざならんとおそろしくそんし身のとがをのが
れんためえうゝのよしみをすてかうにんに参り候
とことばをつくしてたばかりける大じん聞てやあき
やつがつらたましゐはまさしくわれをたばかり所ま
がひなしかへつてをのれをたばからんものをとおも
ひせきゆふにむかつて誠にわうめいをおもんじかう
さんせらるゝだんちか頃えんびやうのいたりえから
ばふた心なきえやうこに御へんのでせひばかりにて
將ぐんがたちへをしよせいさぎよくはげませよとあ
れば力およばすせきゆふはせひわづか五十よきえゆ
くんのもんにおしよせ誠しがほにもてなしもみにも
ふでぞたゝかふたりいかかはえけんせきゆふ馬將ぐ
んとひつくんでふしけるがみゝにくちをおしあてな
ふいかにわが君しばらく御待候へえぶんをはかつて
にげ入申さんあれにみゆるこんしのはたこそまか大

じんがちんしよなれそれがしにげこむと一しく大し
んとひつくまんかまひておくれ給ふなといへば將ぐ
ん聞て其かんいさい心へたさりながらなんちとそれ
がしくんだるうへはくびをきるまねをしてとくく
ひつかへし申されよかまいてうでをまはしはかたに
て打申なはやくと申所へ大玄ん此よしみるよりも
偕こそそれがしがすいりやうせしにまがひなしにく
きかたきのありさまやとはしりかゝつて二人共にく
び一々に打をとしちかづくかたきをむらくはつと
ぼつちらしいさみにいさんできんりをさしてひつか
へす大じんのちうせつあくにんのなれのはてちうと
ふちうのふんみやうなるきどく千萬是成とてみなか
んせぬものこそなかりけれ

第三

かくて二人の大じんはあくきやくぶたうの將ぐんを
おもひのまゝに打ほろほしいそぎさんだい仕り一々
次第にさうもんす君はゑいぶんましゝてたゝ何事
もまろをおもふちうきんいかでおろかに有べきとゑ

いかんはなはだかぎりなくかさねてぶにんの御めの
とうだいふうふをめされとかくぶにんが身のうへは
くわいたいとはおもはれずてんやく共もびやうきの
みたてなりいそぎぶにんへまいりたゝてんやく共か
はからひにまかせくすりをもちひ然るべしとことね
ん頃にせんしあるうだいふうふ承はりこはありがた
きりんげんやと御まへを罷立三重せいりやうでんへ
ぞ上かへりけるあらいたはしや御后まやぶにんはあ
ねきやうどんみのそねみふかくてうふくまします其
ゑるし御身にまさしくあらはれて御なやみもつての
外にみへ給ひ御枕もたへゝにてんやくいれうをめ
しよせさまゝあつかひ申せ共ふし何のゑるしもあ
らずしてはや二とせにならせ給ふ偕たいないにはわ
うじまします共おもはれずたゝかけろうのごとくお
とろへ給ひ御命も今ははやあやうくみへさせ給ひけ
るいたはしやまやぶにんうだいふうふをめされこの
ていならば程もなくはかなくならんはぢでうありい
かなればみづからはわうじくわいたたいたせしとは
いかで思ひよりたるぞたゝわづらいの事成にもては
やされたるうらめしや只はづかしきはあね君のきや

うがる事をまやぶにんはもてあつかひしはかなやとおほしめされんはづかしやいか成むくひの身につもり天まはまゆんのみいれそやあらなさけなのわがみやとふしまはし涙にむせばるゝうだいふうふをはしめとしつきそひたりし女房たちふしをのゝそでをまほらるゝうだい泪ともろ共に御なけきはさる事なれ共心かなはぬよのならひさのみなげかせ給ふまし君も御いたはりのりんげんたびゝあればおろそかにおほしめさず共たゝやうまやうましゝて一度御ほんぶくましませとさまゝいさめ奉るいたはしやまやぶにん今は御身もつかればて御枕をかたふけつやつやまどろみ給ひけるかんびやう申せし人ゝもよもまなかうにふけ行ばをのゝまどろみ申さるゝふしぎ成かなぶにんのたいないにやどらせ給ふ御佛ひかりをはなつて御後の三五のちぶさをわけあらはれ出させ給ひたちまち卅二さうの御すがた玉をのべたる御ちごとぶにんの御枕に立よらせ給ひさしもたへなる御聲にていかに申さん母みだい御身くるしみましますゆへまろをうらみ給ふこと御ことはりとはぞんずれ共天まはまゆんとの給ひしはうらめしき御

ことなりすぎにし年のやよひのすへ夢ながら申せしことわすれさせ給ふかやおぼつかなやゝのたまへばぶにんゆめの御内にあら御なづかしのよそをひやくはしき事をかたらせ給ひうつゝなきはゝが心をなくさめ給へとの給へば御ちごかさねての給ふやう誠に思ふこといはじとすれば君がため心をやぶるにわたるべし然共衆生のくはんをみてんため正覺いたす我なれば御物語仕らん一時のせんいにくていごうのせんこんをやきすつることうたがひなし其上天地に三つの悦びあり語申さん聞召せまつもろゝのまやうをうくるに人とむまるゝ是一つ人と生るゝ其中に萬のだうりをまゐる身と成事是一つだうりをまゐる身と成内によくいたはる事是一つ是を三つの生れと申也それのみならずせかいに十でうのおきて候一つには其身たつとくしていやしきをすつることなかれ二つには其身あきらかにしてくらきをすつる事なかれ三つには其身至てぐ成をすつる事なかれ四つには其身せんとをまゆするに悪人をそこなふことなかれ五つには其身とみてまづまきをすつる事なかれ六つには其身さかつておとろふるをすつる事なかれ七つには

其身をさまつてかなはざるをすつることなけれ八つ
には其身誠有ていつはりをすつる事なけれ九つには
其身まとかに^ゑてかけたるをすつる事なけれ^十は第十
には^ゐんぐはのいん^ゑんを^ゑつて外をうむることな
かれ是のみせかいのおきてにて候是をせかいの十^ゐ
んと申なりかゝる事を^ゑらすしてほしきまゝ成心こ
そにんひにんとは申なりつゝ^ゑみてもつゝ^ゑみ給へ
さればあねきやうとんみと御母ぶにん御兄弟の人々
が此きうちうにましますゆへきやうどんみの御ねた
みやすからぬ御事なりあさましや人間の^ゑつとの^ゑ
やねんたへがたき其もうねんのみなもとは七百^ゑや
うの其間くらきやみちにまよひ^ゑや^ゑんと^ゑやうを
うけかげのかたちこそふごとく^ゑやうく^ゑせゝにつ
きそひてくは^ゑんのいきをふきかけ^ゑゝむらをくら
いさきたがひにねたみねたむ事あさましきかなしみ
とく共つきは候はしすてに御母我をくわいにん有し
よりなさけなやきやうとんみのそねみ給ふ惡心十六
丈の^ゑやぎやうとなりこくうにへんまん仕る天ちの
あつきをまねきよせ日月のひかりをおしうづみ母上
みづからをすでにてうぶくなされ^ゑなりさればてう

ぶくのほうと申はもろくのみやうどうむりやうの
たましいをうごかし天けつもふちけつもふとて人間
の^ゑゆせのもんを七^ゑにとぢないばく^ゑく^ゑがうは
くとおそろしきほうとうふもよりわくる三百六十
よりうのちすしきるにきれぬ大つなにて御母うへの
ほねく^ゑにみづからが五たいをからみ付はんじやく
むみやうの法にて月日のひかりをうづみぬれば生れ
出るべきやうもなしかくおそろしきてうぶくにてい
のられ申此上は母上さまもみづからも何とて命有べ
く候や然共みづからが^ゑんりき^ゑざいのふ^ゑぎにて
べつに^ゑさいは候はすかゝるふしきの我なれば心や
すく身もやすく生るゝことはいとやすくはんべれ共
やすくたん生いたしなばきやうとんみのうらみの數
くらきよりくらきにまよひそねみ給ふ惡心生々せゝ
に付そひてむくひのうらみをなすならばともによ
はせたまふべし其惡心を^ゑづめんため^十は^十そたん^ゑ
やう申さぬなりされ其^ゑに一つうれ^ゑきこと候母上
てうぶく有しよりあねきやうとんみは兄弟の^ゑんを
ふつつと切七百生のうらみのねんすみ^ゑかにはれ給
ふ是一つの悦びにて候^十は^十をちやうぶくいたせ

しぎやうゑやはたちまちならくにゑつみ申なりわれ
 ゑやうかくの其時はこれをもゐんだうつかまつりさ
 てぶつくはをとけさせ申さんいかにちやうぶくある
 とでもゑんりきゑざいのわれなればはうへさまも
 みづからもすこしもゑさひは候はずかまひてかまひ
 てなにごとともよろづの事かならずくやしんにおも
 ひたまふまじとかくむゑやうをくはんじたまへくも
 のうへの御すまひたはるの日のひときぎよくゑ
 んのゆふらんもなつのよのゆめ目のまへのかくとして
 もたゝ一すいのうちぞかしゑうゑんのきずなをはな
 れてこのたびはかならずさとりをひらきいちぶつゑ
 やうどのうてなのゑんかならずゑやうだうゑたまへ
 おやとたのみ子とむまれてはうへさまともろとも
 にちゝ大わうにたいめんししゆゑやうのねがひをみ
 て申さんこゝろやすく身もやすくまことのときをま
 ちたまへおいとま申てはうへさまとさうのみにて
 てちぶさをにぎりてむねのあひだをおしひらかせ給
 ひやがて靴ひないにいたりたまはんとゑたまふときに
 ぶにんおとろきいたきつかんとゑたまはそのまゝゆ
 めはさめてたゝわがみをだひてぞおはしますあゝさ

て是はゆめじやよなうれしきいまのゆめこゝろやす
 ぎにしむかしのみほとけのたひなひよりいごさせた
 まひてふたとせあまりがそのあひだになげきかなし
 むうき事をかたらせたまひてまたゝいないにいたりた
 まふはゆめとやいはんまことゝやせんわが子とやい
 はんさてはほとけとやおがまんふしきの中のふしき
 とはかゝる事をや申らんとみつからはたへをみたま
 へはあゝありかたやみほとけはたひなひよりもくわ
 うみやうあきらかにてらしたまひてまやふにんの御
 身はくぎよくにすきとをりてそのまゝたひなひあき
 らかにおがまれさせたまふぞふしふしぎなりけるゑ
 だいなりぶにんつくくみたまふにまことにゆめの
 つげのごとくなりあらあさましやとがもなきさしも
 たへなるみほとけをちすじのなはにてからみつち
 ぶさをくわへておはしますあら御いとをしのありさ
 まやと我とわが身をいたきつゝふしたへいるやうに
 ぞなげかるゝ人ゝこれにおどろきてわれもゝと
 たちよりてさていかなる御事にてさふらふとさまさ
 またづね申ときぶにん御なみだともろともにはしめ
 おはりをくはしくかたらせたまひもしうたがひもあ

らばはらさせたまへとやかてそのまゝ御はだへを見
せさせたまへばあらありがたやみほとけまやぶにん
のたひなひにくはうみやうかゝやき五たひをてらさ
せもくせんにおがまれさせたまひしはふしありがた
かりけるまだひなり人ゝきゐのおもひをなしかん
たにくたきらいはひすそのゝちよりもまやぶにん御
身もゆたかにうるはしくふしたちゐもかろくましま
してやがて御さんのときをまちたまふまやぶにんの
御身のうへふしぎせんばんこれなりまことたへなる
御事ぶつちふしきのはうべんかなとみなかんせぬも
のこそなかりけれ

第四

いたはしやまやぶにんさしもたへなるみほとけのあ
らたに御つげましますゆへ心つよく平さんのじせつ
をまたせ給ひける然りとは申せ共あねきやうとんみ
のねたみにてちやうふくふかくありしゆへすでにふ
たとせすきゆけ共わうじたんじやうまします御身
も次第におとろひはてたのみすくのふみへ給ふ御め

のとう大將くんふうふもろ共御まくらに立より御
心は何とわたらせ給ふぞや君よりのせんしにもとか
く御くすりをもちひ給ひて然るべしとのりんげんた
びゝくたされはたとひいか成みちにても御薬をす
すませ給ひ然るべしとぞ申けるぶにん此由聞召をも
き枕をやうゝあげさせ給ひ誠にまじきりんげん
かへすゝもありがたき次第なりさりながらみづか
らはわうじくわいたひ申せしことは少もうたがふ所
なしそれをびやうきとみたつてんやくりやうのく
すりをはいかでもちい申べきせんしをそむくはおそ
れなれ共なかゝ思ひもよらすそれに付てかたゝ
に物語いたしたくおもへ共我が身の心にへだてられ
へだてまじきかたゝに心をへだてかたりへぬみづ
からか身の上をおもひやりて給はれとしふくどきな
げかせ給ひけるふうふ承はりこはおぼつかなき御こ
とばたとへはいか成事なりとも我等ふうふに何をか
つゝませ給ふべきとくゝかたらせ給へたとひ命の
御やう成共かなへ申さてをくべきかはや御物語あそ
はせとさまたのもしくそいさめけるぶにん聞召うれ
まき人のことばかなみづからちぶさの内よりも御身

ふうふにそだてられへんじもはなれぬ申なればたとへいか成なり成共つゝむべきにはあらね共ことばにつきぬことあればふかくつゝみかたりへす月日の立にゑたがひて心くるしく身もつかれ物うきことのかすゝはのふよむ共かく共つきせましたゝうらめしきはさきの世のゐんぐはの程のあさましやとふしゑはしたへ入給ひけるふうふ承はり御ことばのしな何共ゑあんにあたはずたとへ御父母御兄弟につゝませ給ふことなり共我等ふうふにしらせ給はぬ事なし仰は少もそむくまし御物語候へふにん御涙ともろ共に其儀にて有ならばくはしくかたり申べしかならずよそへもらし給ふなゑいりよにもふかくつゝみ給へべつの事にてさらになしわうじたんじやうましまさぬ其ことはりのはんべるなりなき跡までも此ことをふかくつゝみて給はれすでにみづからわうしくわひたい申せしことあねきやうどんみのそねみ給ひみづからが身のうへをてうぶくなされしゆへぞかし然共たひなひにやどらせ給ふわうしはたつとき如來にてましませは何とてうぶく有とてもたんじやうなされ候事少しさいあらね共やすくだんじやうましまさば

あね君の御そねみいよゝかきなり申さんことたへがたく思召あくしん少しづめんためたいなひにやらせ給ふたとへはせんがうまんがうふるともじんりきゑざいの佛なればつゐに一度はたんじやう有べしわうしたんじやうましゝなばみづからが命つゆちり程もをしからずたゝあね君の身の上にもゑも佛の御とかめ請させ給はんこと何よりもつてかなしやと御身のゑんくをおほしめさでそねみ給ふあねきやうどんみの御事をかなしみ給ふまやぶにんのふし心の内こそあはれなれふうふ大きにおどろき扱もゝおそろしやまさしく御兄弟の御中いか程うらみ給ふ共かくなさけなき御にくみ又もためしはよもあらじかゝるどうよくせんばん成そねみをうけさせ給ひ御身をくるしめ給へ共うらみ給ふ事もなくまだとやかくとあね君をいたはり給ふ御事は一ふく一しやうへだてなき御兄弟にてましませ共御しんていのかはりしはうんていばんりのちがひかなはづかしき君の御ゑんていあら御いとをしの有さまかなとふしこゑをあげてぞなきにけるぶにんもゑうゑやういやましてふかくなげかせ給ひけるうだひ泪ともろ共によし此

ことを今更にあらためさうもん申なば歸つてふにんの御心にそむき申さんとかく天りはくもりあるまし其上しんりきじざいの御佛にてましませば御さんへいさんうたがひなしとかくじこくをまち給へと涙ながらもいさめをなしよきにいたはり奉る三重心の内こそ上たのもしれは是は扱置大王の御前には兩しんをはじめげつけいうんかくことごとくめされ扱もまやぶにんくはいたひせしと聞しよりすでにふたとせにあまれ共いまだたんじやうのさたもなし何れか人間のくわいたひに二とせ三とせたいないにやとるといふこと有べきや又てんやく共が申にもくわいたひにては少もなし只病きなりとさうもんす然共まやぶにんは一すちにくわいたひの由を申いつれか誠にてあるべきやさはさりながらくわいぶくのまやうとて女によりて有といへ共かゝるためしはふしき也とかくはかせをめしよせうらかたの次第ゑいらん有べき間國中をあらため然べきさうにんを百人めしよせよとの御でう畏て御せんを罷立國々さとし残りなく三重一々次第にふれらるゝかくてちよくいの事なれば程なく百人のさう人を調やがて御前にさんだいす

君ゑいぶんましゝてまか大臣をもつて扱もまやぶにんの身の上くわいたいにて有か又病きのわざかうらなへとちよくてうなりはやゝかんぶんのおもむきそうゝ申されよとの給へは畏候と百人のそうにん共一々かんぶんをひらき心しつかにうらなひ十九人ひとに御うらかたを申上るまやぶにんの御身の上まつたく御くわいにんにては御ざなく候是は御わつらひにうたがひなくしかも人のそねみふかく候とすみやかにさうもんす君をはしめ奉り臣下大臣尤かうこそ有べけれいかなればくわいたひにてまます身が二とせ三とせたんじやうなくなやませ給ふいわれなし只御病きにまがひなしとをのゝせんぎ一とうなり然所に百人なみいたるさうにんの其中にはくはつたるらうわうの心をつくしかんげんし何共物はいわずゑてさめゝなひてぞいたりけるみかどゑいぶんましゝて百人のそうにん九十九人は一とうにうらなひ申所に今一人のおきながさうのむねは申さす涙をながすは何事ぞゑさいをくはしくさうし申せとせんし有おきな承はり九十九人のさうのむねさだめて誠にても御ざ有べきがそれがしのうらかたに

は御病きの御事は夢いさゝかも御ざなく候玉をのべたるごとく成御太子にてましますとさもすみやかにぞさうもんす御門ゑいぶんあつていかにらうわう申所にふしぎ有くわいにんと申さへめでたきに殊に玉をのべたるごとく成太子ありとかんげんしたる身がよろこびても悦ぶべきに涙をながすは何事ぞおきな承はり此上はうらかたの次第くはしくそうもん申上べしされば天もんつうと申てせんほうの一つにて候九よう七よう二十八しゆく三十六きんのほしを立ては天ちの二もんをかんげんいたし五りう七どう五をん七ぎしつとく五いをわけて日初相應のにうりをさたし六みやうたいゆふ三しつ十二うんをかんげんしてゐんやう男女の位をさたし申上ることにて候然るに今まやぶにんの御くわいたい被成候王子はいかなる火の中水のそこけんげきばんじやくのうへにうみをとし給ふ共御命におひてはいさゝかさはりは御ざなく候然共十せんの御位をのぞませたまふ御太子にてはましまさずめうがくむいの御位にとうとくむ上ぼだいの大ぢひふかく五百の大こく三千のちうごくむりやうのそくさんごくの衆生をのこらずさいどま

しゝゝほうわう如來となり給ふ王子にてましますなりされば此おきなが身のうへをかんげんいたし候にすでに八しゆんにあまりつたなくも命つゝまりあすの事をもたのまれ申さす候しする命はまつたくをしみ申さね共あはれとしわかくせばこの如來の御けちゑんにあひ奉りみらひ成佛いたすべきにかやうにとしのよはひなく此御佛の御法にあひ奉らずはかなくならんかなしさに我身の上をあはれみ扱こそ泪をながし候ぶれいは御めん候へとさもあきらかにぞさうもんしける御門ゑいぶんましゝゝて扱もきたひの事共かなきん中の取さたにもてんやくりやういもことごとく病きなりと申せしにまやぶにん一人こそくわいたひと申今めしよするさうにん九十九人は一とうに病きなりと申所に一人くわい人とは申一人が誠か又ばんみんな誠なるかせひさらにきはまりかたしねがはくはぢんりきじぎいのきどくせうこたゝしくゑいぶんになつしたきとのせんしなりおきな承り誠に三界のきやうしゆとしやうがくあるべきみ佛にふしきなくてはかなふましと天にむかひてかつしやうしせいぐはんたがはせ給はずば一つのきずしをみせし

め給ひ人々のうたがひをはらせ給へとかたんく
だきらいはいす其時ふしぎやくうにおんがく聞へ
花ふり下^り春のよのまだよいのまのくもまよりあま
たのほしのあまくだり三重こてんのてらせ上給ひ
ける然所にもろもろのほしの中にさしもたへなるみ
やうじやうのていせんのかすへやとらせ給ひまばし
ひかりをはなち給ふ君を始め奉りけいしやううんか
く一どうにあつはれきたひのすいさうやとかたん
くだきらいはい有其時おきなしやうくの心をげん
にあらはし南無十方のさいしよ佛日月しやうくし
とのてんせんじんけん王子せひのたう代に佛のしゆ
つせあきらかに御なうじうましませと五たいをちに
うちかたんすふしきや其時くだんのみやうじやう
つぼみし花のひらくるごとくみへ給ふがさしもたへ
成天女一人こつせんとあらわれこすへをつたひぎよ
くざちかくあゆみよりことばをかはしての給ふやう
いかに大王聞しめせまやぶにんのくわいたひおろか
におもひ給ふまし忝も三かいのきやしゆ太ぢ大ひの
如來まさにくわいにんましませ共しんいぐちあく人
のじやとんの物におそわれ給ふ是ぞ佛の御身にもる

んぐはのいんゑんのがれぬ事まつせのしゆじやうに
まらしめんと其法べんにて渡らせ給ふみやうじん
じんぢぢい王佛まゆつせまします事さらうたが
ふ事なかれ是ぞ則大ぼん天のちよくによりはくよう
しやうのせいこん今爰にらいげんすぶつりきたへ成
ゆへによりもくせんにあらわれたり是までなりとの
給ひてあまたのほしともろ共にこくうにあがらせ給
ひける君をはじめ奉りげつけいうんかく一どうにあ
らありがたの御事やかゝるきどくをおかむうへまや
ぶにんの御くはいにん少もうたがふ所なし扱もく
うらのうたりここんふさうのめいじんやとかずのほ
うびをくださるふしはくよう我やにかへりけるさ
しもたへ成み佛のしゆつせまします御めくみ天下太
平こくとあんをんめでたかり共中く申斗はなかり
けれ

第五

きんちうまつりごとときさらぎやよひもすぎわたぬき
の御くわいさまくのぎしき取くなり御きささま

やぶにん今は御心もかろくしていさませ給ふ所へみやうぶといへるくはんぢよ君よりの御使ひとしてせいらやうでんに來りまやぶにんの御まへに畏君よりのせんしには御きしよくおもくわたらせ給ふゆへ花のゑんむなしくすごし給ふ此度はふにん御きまよくすみやかに心もはれさせ給ふよし君聞召御よろこびのため御きしよくにさはちせ給はぬ物ならばはるのなごりの花のゑんきうちうの人々を召つれ給ひこなたへみゆきまし／＼てらんびにゑんの花ぞのにて御くわいなさるべきとのせんしにて候ぶにんきこしめされこは有がたきりんげんかな三とせが間ぎよくたひをおがみ申事もなく打たへひとりかなしむ事つきせぬおもひなりふしぎのみゆきをおがみなば我みのきたうとなりぬべし是にましたるよろこびなしせんしのかはらぬ其さきにはんしはたのみ申なりと打ゑみいさみの給へばみやうぶ此由承はり其ぎにて候はゞ君へ此だん申上みゆきをいさめ申さんとおいとま申おくりこてんをさしてぞ歸りける御てんになれば御へんじの由そうもんすみかゝとゑいらんかぎりなくいそぎみゆきをなすべきなりきやうどんみをはじ

めつばねの人々残らず此むねあひふれよ扱さしきのていかみ下のへだてなくきやうとんみのまねをは右の座上に備へまやぶにんのしとねをはひだりのかたにさたむべし扱其外はつき／＼にさだむべしみやうぶちよくいを承はりくはんにん共に申付三重一々次第にふれにけりかくて其日に成ぬれば忝も上ぼん大王はらんびにほんのにしのたいせいやうでんにきよしゆつ有玉座になをらせ給へばあまたの諸きやう大臣は南のかくにざし給ふ扱御后きやうどんみはあさましやまやぶにんをうき世の中のみはてなり兄弟のゑんを切上は心にかゝる事なしとちよくいにまかせ出給ひ右のかみにざし給ふ其外の女房連次第次第になをらせ給ふいくんわたゝしき其あり様是ぞ誠にをとに聞ばん天王の御くはほうも是にはすぎしと聞へける然所にまやぶにん玉のようらくむすびさけらりやうのにしきらんかんのじやうへけんもんきんしゆの十二ひとへのつゆを結びてあざやかにすがたは卅二さうにして八十しゆごうの御よそをひあだかも十五まん目のくもまをわくるごとくに女房連にいさなはれ玉のひさしを出給ひ左の方に付給ふま

ねにうつらせ給ふていたとへていはん方もなし君を
はしめ奉り各くはん女天上上げつけいうんかくもろ
共にやさしき人のよそほひやとさんこをしづめてか
んじける大王ゑいらんまし／＼てめづらしのぶにん
三とせが間みなれすけふたまさかのたいめんはよに
もうれしく思ふ也とせんし有こそ有がたけれかくて
きやうとんみはつね／＼まやぶにんをふかくねたみ
ましませしが今のすがたを御らんしてじやけんの心
をやわらげまやぶにんのすがたをみ上みおろし扱々
やさしきすがたかなかゝるゆふ成兄弟をうとみねた
みしみづからが心の内のじやけんやなほづかしのみ
のとかやと心の内に懺悔してふしゑばし涙にむせば
るゝをつる泪ともろ共にまやぶにんによりそひあら
めつらしのぶにんやな今は何をかつゝむべきあさま
しやみづからは御身をふかくうらみて有兄弟共に君
につかへせんしおもき其中にまさりそねむ心のいや
ましてにくしと思ひくらせしかあひみて今は中／＼
にくみそねみし我心扱も／＼あさまし／＼今更さ
んけ申なり日比のねたみしみのとがをゆるし給へや
まやぶにんさぞ久々のくわいたいにて心くるしくお

はすらん皆みづからが悪心ゆへとがなき御身にくろ
うを懸ゑいりよをなやませ申せし事扱も／＼勿体な
やあらあさましの我心いとをしの姫の有様やばんし
のとがはゆるし給へとたがひにめとめをみ合てしば
しふし涙にむせばるゝたがひの心ぞあはれなり君を
はしめ奉り一ざに有あふ人／＼是はふしぎの物語外
にはだれもゑらざりしに扱は今迄兄弟にへだての有
けるかとをの／＼ふしぎをなし給ふいたはしやまや
ぶにんあね君のさんけよそに聞ん事共を一しほかな
しくおぼし召こはもつたいなき御事やみづからうら
み申事つゆ斗も侍らず兎角病きにおかされなが／＼
くわいたい仕りゑいりよをなやませ申といひひとり
ましますあね君のとやかくあんし給ふこそみづから
がとかならんさはさりながら此後は太子たんじやう
ましますことさだめて程は候ましめでたく身をも二
つになりつもる事のみゆる／＼と御物語申べしとう
らみ給ふ御けしきつゆ程もあらずしてあね君の御か
ほばせをさもやさしく打詠めさしもうちゑみ給ふて
いふしたとへがたなきふせいなり是や如來のしん力
にて一時のさんげにおつごうのざいしやうめつしむ

いむろのきゑんと成ふへんしんによのきをあらはし
一佛じやうどのけちゑんとは今あきらかにゑられた
りかくてさゆふの上らう運ぶにんのかざしをつやつ
やながめあらいつくしのかほばせやとしのぶ心のあ
らわれて君の御まへを立さはぎぶにんのさゆふにう
ちかこみめづらしのまやぶにん御身なやませ給ふと
聞ゑのびなげきて有けるが今は心もはれやかにけふ
の御くはいの花のゑんあふこそめでたかりけるとよ
ろこびいさみたまひつゝそでやたもとにてをそへて
ふしたはふれ給ふぞやさしけれみかどゑいらんまし
ましてぶにんはきやうの花のあるしなになり共花ぶ
さを一えだたをり一きよくかなでぶにんがこゝろを
なぐさめ給へいかにぶにんだいばらじゆの花ぶさは
一えだたをりちんがかざしとなし給へはやくとく
とのせんしなりまやぶにんはきこしめしありがたき
りんげんやとたいばらじゆのもとに立よらせ給ひて
ひだりの御手をさし上給ひたをらんとゑたまふ時に
はかにたいないさはかしく成て心もそらに成しかば
すははやゆめの御つけぞいまなるかやをりもよしと
ころは花のうてななり扱はぎよくたいのゑんも是ま

でなりと心をしづめたまふ所にふしぎやなみあしの
ゑたよりも十六ぢやうのほうとうあらわれたちまち
まやぶにんをすくひたてまつりこくうはるかに三重
あがりけり君をはじめたてまつりあまたのきさきて
んじやう人はいか成御事ぞとみなくきいのおも
ひをなし給ふそのときぶにんこくうよりかれうびん
がのこはねにてあらありがたやいまこそはゑやうか
くのみほとけ御たんじやうましますとみづからはた
ちまちゑやばのきづなをはなれじやうぶつとくだつ
の身となりかのどにわうじやう仕り是いつわりにや
どらせ給ふみほとけの御たすけなり是ぞきみの御を
んしやばのゑんうすくして御をんはおくり申さずと
もみらいはかならずしも一れんたくしやうのはんざ
をわけてまちたてまつるこんじやうの御いとまは
たたいまなりとさもすいしくはのたまゝどもとしご
ろの御なさけ身にしみぐとありがたくさすがなご
りのをしまれてふししばしなみだにむせばるゝかた
じけなくも大わうはたまのかふりをかたむけさせ給
ひてきよいをしぼらせ給ひしがいかにぶにんたとへ
ほとけのちかひにてみらいはいか成くはをうるとも

三とせがあひだはまみへずしてけふたまさかのたい
めんにやさうにもろき事やあるいましばらくとの給
ひてれうがんに御なみだをうかめ給ふぞありがたき
ことにあねきやうとんみいま一玄ほの御なげきいか
にぶにんうらやましや御身はおなし兄弟とはいひな
がらたつときほとけのけちゑんにてみらいまでもた
のもしやかまひてみづからがゑんいぐちのあくしん
のつみをゆるしてみらいはおなしはちすのうてなに
むかへ取て給はれかくありかたき佛成をゑらぬこ
ととはかなくもうとみし事のくやしやと我とあく
しんをざんげしてふしこゑをおしますなげかるゝま
やぶにんもきやうとんみのなげき御いとをしくおほ
しめしあらもつたひなやあね君さまなにを御うらみ
申べきさはさりながら一時のざんげにはむりやうの
つみのきゆると候へば御心やすくおぼしめせ扱又た
いし御たんじやましまさばよきにもりたてゑいりよ
をいさめてたび給へいかにうだひふうふの人々ばん
しはたのみ申なりさとりひらきし身となりてみらい
じやうぶつとぐれどもおことになごりがをしまれて
すこし心のみだるゝはとふしゑばしなげかせ給ひけ

るしかる所にこくうよりこんじきのはたふたながれ
あまくだりだひばらじゆのこずへにとまりいきやう
よもにくんじてしよほうじつさうのじやうどとげん
ずふにんあまりのたつとさにこくうにむかつてが
つしやうある其時十二ひとへのもすそをわけみぎの
御わきをひらかせ給ひ太子たんじやうましますなり
をりふしすいじんりうじんりうとうをさゝげまやぶ
にんのしゆごしけるはふしき成ける三重次第なりあ
らありがたやほうどうの上に立たる四方のとびら
をしひらきいわうせんざいるりくはう如來五ちゑん
まんのほつしん如來日月くはう佛もろ共にみやうふ
しぎのひかりをはなち佛もせんざいとしゆごし給ふ
折ふしくじやくほうわうかれうびんもろゝのめい
てうこくうにとひさりまひあそぶ天人もやうがうば
さつも爰にあまくだりますすけしきふしき成ける次
第なりあまたの後女房連かく有がたきしせつにあひ
五しやう三じうのつみたちまちにめつする事ひとへ
にぶにんの御をんなりせめて一しの花をさゝげ申
さんとてんでに花をたをりぶにんに是をさし上給ふ
今のよに至るまで卯月八日にさゝぐる花此時よりの

おこりなりまばらくあつてほうとうのとびらをひら
き御たんにやうめでたくまやぶにんはたちまち佛た
いをゑ給ひりうによも共にじゃう佛すふし有がたが
りける次第なりかくて太子くはうみやうあきらかに
てらさせ給ひ左のゆびにて天をさしみぎのゆびにて
ちをさし給ひ三せれうだつ四ぐせいぐはんしよほう
ちんるい天上天げゆいがどくそんととなへ給ひまへ
に三あしうしろに四あしあゆませ給ひぶにんの御ひ
ざを立さり給へはふしぎやなほうとうのとびらをお
し立太子ぶにんもろ共御すがたはみへさせ給はず君
をはじめ奉りげつけいうんかくこはそもいか成御事
ぞとをのくふしぎをなし給ふ其時うだいほうとう
にむかつて御すがたあきらかにこなたへうつらせ給
はれとかんたんくだきらいすれば其時太子ほうとう
を出給ひはくうんをはこばせ給ひうたひにひしとい
だかれ給ふ大王をはじめ奉り人々の御悦たとへてい
わん方もなしかくてぶにんはまさに佛果をゑたまひ
をんがくの聲もろ共にたちまち天上被成ける其後太
子御せいゑんめでたく十九出家三十成道ましくて
さいらい生さいとなさるしやかむに佛の御ほうべん

有がたし共中く申斗はなかりけれ

寛文九己酉年七月吉日 八文字屋八左衛門板

釋迦八相記終

善だう記

第一

そもく西方極樂世界のきやうしゆ阿彌陀如來の御
けしん念佛の元祖せんだう大しの由來をくわしくた
づねたてまつるにこゝに本朝三十四代推古天皇の御
宇にあたつてもろこし四百よしうのあるじをばすい
ようていと申奉る然るに煬帝御心せいにましく一
天の萬民をようしの如くなつけ給へば民もまたぶも
父の思ひをなしてまつりひほうほくも朽果てかんこ
母今はをのづから苦ふかくこそなりにけれさて第一
の後にはせいやうぶにんと號したてまつり御形嬋妍
とたをやかにしてりつきうのふんたい顔色なきかと
疑はるさるによつて煬帝の御寵愛はかぎりなしさて
又國を守る三臣には左將軍たなかう右將軍まんけい
副將軍めいきやうとていづれも智仁勇の三つを兼吳
氏孫氏が肺肝よりりうしゆつしたる名將たり其外月
卿雲客はしゆつしのよそをひ引きつくるひぎゝとう
とうと列座して君を敬ひ奉ればうら吹く風ものどか

にてめぐる月日も久かたの治る御代こそめでたけれ
扱その後には彌生の事成に庭の櫻も咲き亂れいと
面白く見へければ御后せいりやうぶにん女房達を召
具してせいりやうでんに出給ひよもをはるかに見給
へばあら面白の景色やなにはものきゝもおのづから
春のきどくに櫻花げにも詠めは楊貴妃やいと焦る
る鹽釜の煙かあらんかきりかやつ九重十重の櫻花木
木のふゝきんとひこうは雪にまがひの糸櫻青葉交り
の遅櫻はつはなよりも珍らしく一入興に入たまひ御
遊覧はいとまなし然る所に俄に空かき曇り物凄じく
風吹きて御殿の花はことごとく落花すること物う
けれ后をはじめ女房達さもおもしろき御ゆふもさめ
かなたこなたに逃げ給ふその中にせいりやうぶにん
とある木蔭にふしまろび御息もたへぐに成給へば
人々驚き立寄りて后を抱き奉り御殿のさしてぞ入給
ふあらいたはしやせいりやうぶにんばんしの床にぞ
ふし給ふみかどをはじめ奉り左右の大臣月卿雲客是
はいかなる御事やと日やの詮議ひまもなし扱てんや
くの守をめされつゝ今日のきゑよくはいかゝあるや
との宣旨也さん候御後の御病氣につきいづれも吟味

を遂げ醫術のせいぐを盡し候へ共更に御元氣も御座なく候兎角御いたはりは冷氣に襲はれさせ給ふにや以の外疲れさせ給ひその上御脈けんたいをおひていのきなく候へばわれくいとくしん仕りかね候よしを奏聞す君ゑいぶんましくて此上はいかゞはせんと案じ惑はせ給ひける時に左將軍すゝみ出爰に泊洲長安のかたはらにかいせうこじと申てめいよのりやうい御座候也かれを召して御りやうけんの聞召され然るべう候と謹んで奏聞申せば君ゑいかんあつてその儀ならば急ぎ召せとの宣旨也畏り候とやがて勅使を立らるゝ件の所になりしかばかいせうに對面し宣旨の趣のべらるゝかいせう承り誠に以てわれら如きの大ほんげにかやうの勅を蒙ること生々世々までありがたしかなはぬ迄も參内し天恩の奉じ奉らんと勅使と打つれそれよりも内裏をさしてぞあがらるゝ御殿にも成しかばかいせうこじ參内のよしを申あぐる君ゑいぶんましくてかたじけなくも對面ましましいそぎ療治を加へ病氣平ゆうのてだてをめぐらすべしとの勅誼也かいせう餘りのありがさにとかうに及ばず勅答申御前を立左將軍の案内にて後の御殿に

あがらるゝやがて立より御氣色をうかゞひ御脈を取り奉りとつくと工夫し其後御前に立歸り謹んで申上るは御いたはりは別儀はござるまじく存じ奉り候へ共日の内には必ず御快氣ましますんさりながら只今とゝのへしんじさし上申たく候へ共ひしの妙藥一しゆ不足仕候へばあはれ一日の御いとまを申あげたく候と申上れば君をはじめ奉りくげ大じん一同に奇異の思ひをなし給ふみかど御感の餘りに仰せけるはあまたのてんゐ共かいじゆつもたへて朕もゑいりよを惱ます所に命にさはりあるまじきとゑいぶん達する事はに過ぎたるよろこびなしいそぎしたくに歸りつゝ靈藥をとゝのへてへんしも早く參内仕れとの宣旨也畏つて御前をたち我やをさしてぞ歸りける我家になればあまたのしよでんを取出しつくぐと考へて扱其後にみでしたちを近付てわれかやうくゝの勅ゐを蒙り大事の御煩ひを受取てかへりし也それにつき仔細あつて後の御藥を拵ゆるにはいかにもゑやうゑやうなるれい水を寅の刻に結びあけてかくる也然れ共此邊の池にはせうくゝなる水更になしまことや長安の瀧の流れは西方極樂の九品れんだいの下より

流れいで、清淨なる水と聞くいざ此水をむすびあげ御藥を拵へんと供人あまた引具して長安さしてぞ急がるゝ瀧にもなればかうゝたる山のてい白雲ころもに似て巖のかたにかゝり青苔帶に似て山の腰を巻き落ち来る瀧の有様は恰も龍門三きうの如くとうとうとしてすさまじく流れさつゝと落ちていさぎよくいとい心もすみわたり暫しながめておはします時に不思議や瀧の響きせんたうゝとぞ響きけるかいしやう不思議の思ひをなし心をすまし聞く所に虚空に音楽きこへ旗二ながれ降り下りそば成こぼくの枝にぞかゝりけるかいせう立より是を見る其時瀧の内よりも佛名を唱へ給ふ其ものに曰く末法出世めうせんだう卽是彌陀けしんぶつちよくせまつ代だうあく人一切衆生いわう玄やうどゝ唱へたまへば不思議や二流の旗に此もん明かにぞ移りけるかいせういよいよ不思議はれやらす晝夜まどろむ事もなくしんいを濟してあかしける既に虎の刻にも也しかば自ら瀧の下に行き水を汲んとせし所に落ち来る瀧の水の上に金色の文字すはる其けもんに曰く西方極樂彌陀佛しゆつ玄やうしんだんみやうせんだうれんげ口萬せん

惡人一切衆生いわう淨土とぞうかみけるかい玄やう大きに驚きやゝかたゝ是々拜めと有ければ何れも奇異の思ひをなし肝膽くだきて禮拜す其時瀧の内よりも五六歳ばかり成童子一人水中より忽然として浮み給ふかいせうなをも怪しみて扱御身はいかなる方にてましませば今爰に出現あるぞと咎むれば童子答へての給ふは昔しは西方に有て六八の願の起し今満足して唐土にけげんす天を以て父とす地をさしては母とし水を以て胎内とす我は是西方極樂のきやう主阿彌陀佛の化身也結縁の衆生すぐに佛心を得せしめんため今爰に來れり汝我をはごくむべしと高らかにの給へばかいせう奇異の思ひをなしこは忝き仰せやと合掌さんばいし奉りやがて立より御稚兒をいたき申望みの水を汲もたせ我やをさして歸らるゝ頃は隋の煬帝泰業九年みづのへ西扱我朝にあつては人皇三十四代推古天皇二十一年是せんだうの御玄ゆつ玄やうきたいせんばんありがたしともなかゝ申はかりはなかりけれ

第二

さる程にかいせう居士御ちごをいざなひしたくに歸り悦び愛し給ふことひとへまづし一子よりなを淺からぬ思ひ也扱御ちごに打むかひ我がやうくの勅を蒙り只今參内申也留守のつれづれには管絃なり共もてあそひ心をなぐさみ給ふべしやがて歸り申さんとかの靈藥をとゝのへて内裏をさしてぞあがるゝ御殿になれば左將軍を以て御藥を奉る去程に御后伴の靈藥聞召すより不思議やな今まで御心うとくしくましませしが俄に快氣を得たまひて本復あるこそめでたけれ君をはじめ奉り卿相雲客に至る迄憂ひの色を引替へて皆々悦びにぎあへり君ゑいかんのあまりにかいせうに仰せけるは此たびぶにんが病氣いまだしごならずして本復するとはいひながら是汝が良藥良醫の徳にあらずんばいかで助かる事をえんとてもの事に其療養の手たてを聞せよかしとの宣旨也かいせう畏つて申上るは此度後の御平癒全くそれがしが醫術にては候はず是君のせいぶんゑんの徳によつて諸天のふじゆあらずんば愚臣が藥力いかでか叶ひ申べきそれにつき爰に不思議なる御ことの御ざ候そ

れがし御藥を拵へ申さんため長安の靈水の水を求めかの瀧へ罷り越し候所に瀧の中より四句の偈を唱へすいゑやうに文句有其中に六七歳成ちご一人忽然とあらはれそれがしを父と頼まんととの給ひし間幸ひそれがし妻子不通の爲にて候により諸天の與へ給ふと有がたくいそぎ伴ひ罷歸り候とはじめ終りを奏聞仕れば君をはじめ奉り諸卿おのゝ一同に是ぞ稀代の不思議やと感にたへさせ給ひける其後の宣旨にはかゝる奇妙の其ちごに對面せではかなうまじ具して參れとの勅誼也畏て候と御前を罷立いそぎ我やに立歸り御ちごを近付て宣旨のよしを語りつゝ時の裝束ひきつくろひやがて參内申さるゝかくて御ちご上座にあんざましゝてさもゆふゝたる御姿たとへていはん方もなし君はゑいらんましゝて最前かいせうが申せしよりもいやまさり更に人間とは思はれずいかさま不思議はれやらす但しは大六天の魔王が王法を妨げんとはかりことかいかゝと宣旨ある其時御兒何共返答はましまさでゑよくに有ける硯を取て筆を染めあんよう極樂世界に至らんと願はんには此もんにしくはなしと虚空に筆をなげ給へば不

思議や此筆そば成障子にひつしと立光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨とさも明かにすわりしは稀代なりける次第なり君をはじめ月卿雲客かうべを垂れて御ちごをいねうかつこふなされけるみかど餘りのたつとさに疑ひもなき此ちごは佛の再誕にきはまれりと忝くも大王は玉座に立せ給ひつゝちごの御ぐしをかきなでさせ給ひ誠に朕がまつりごとおろそかならぬゆへやらん佛の出世ましますよと御衣をしぼらせ給ひけるかくて大王かいせうを召され汝日頃せいじんの道を學び聖人たるが故かゝるたつとき御ちごを天より與へ給ふなりいよくかしつき奉れと當座に官佐をゆるされかすの御褒美下されければかい玄やう面目身に餘りこは忝しとて謹んで頂戴し扱御いとまを下され御ちごを誘ひて悦び御前を罷立やかたをさしてぞ歸りける玄たくになればかくてそれよりかいせう居士あけくれちごを愛しつゝよきにもりたて給ひけるさる程に御ちごはたいあけくれは卓しよくによりそひ佛學儒書に御心を入日やの學問いとまなし又ある時は西方に打むかひ佛名をくわんねんあり一忍に後生のつとめより更に餘念はまします既に御年十

一歳の春の頃かいせう居士に打むかひ自らは出家になり菩提の道をあきらめたく候へばいとまたべとぞ申さるゝかいせう聞召出家の望は尤なれ共さりながら我此年に至るまで妻子をも持ざればおこをそだてそれがしがなきあとまでも頼む身が御身出家に成給はゞ我身は何と成べきと不覺の涙はせきあへず御兒は聞し召仰にては候へ共それ人界は火宅のすみか誰が一人のこるべき此たひ玄やうじをいとはずば來世はあくしゆに墮在せんそれ一子出家すれば九族天に生ずると如來のきんげんあきらか也此世の縁はうすくとも來世は必ず一つはちすの蓮臺に半座を分けて座し申さんとたいおいとまとぞ申さるゝかい玄やういつちの道理にふしげにあやまつたりことわりや其儀にてあるならば御身の心にまかせ給へ此上は隨分學問きはめ給ひ衆生を濟度玄給ふべしかへすゝも出離の道よくゝ勤學おはしませとてもいとまの此上は早とくゝと□□るゝこは有がたき仰やな山に登り學問とげ一山のせき學どもかなはぬまでも然申さん其内折々山下仕り見申見へられ奉らんたいただご世の御いとなみ忘れさせ給ふなよおいとま申と

の給へばかいせう名残は惜しけれ共おさあひ人にす
すめられ弱き心を取なをしても山上あるうへは里
の事をも打忘れよきに學問とけ給へ見申見へたき折
ふしは是より人を登すべしそれまでは文のたよりも
いたすまじとすゝむ涙を押かくし諫め給ふかい玄や
うの心の内こそあはれなれ御兒も今は早親子とむす
び給ひしよりかたちにかげのそふ如くはなれ給はぬ
恩愛の別れとなれば一入にいたいけ成御かほばせし
ほく成給ふいと殊勝ぞまさりけるされ共かい
せう名残の心を取直し幸ひけふは吉日なりさらば山
上し給へと供人あまたあひそへてかく玄やう山へぞ
おくらるゝ名残は盡ぬ親子中いはねどうへにあらは
れてわかれくになりになり互ひの心ぞあはれなる
かくて其後御ちごはかく玄やう山に成しかば其頃玄
玄うののふけひん玄やのほまれを取給ふとんらん大
しの御弟子どうしやくせんしに對面ましく師弟の
契約なされける則御年十三にて御くしをろさせ給ひ
ける扱其後にどう玄やくせんじの給ふやうまことや
長安の瀧より出生の時せんだうとひききし事有がた
きめいもんかなまつせんだうと響きしことよくみち

びくと見へたりせんは玄しやうのせんなりだうはゐ
んにうのだう爰を以て案するに一切衆生ことくく
極樂淨土へ導びかんとの誓願出生いせんにとなへ給
へは如來の化身に疑ひなし則瀧のめいもんに違はず
御身の法名をせんだうとかいみやうせんと則せんだ
う大しと付給ふ扱それよりも學問いよく怠らず誠
に佛の化身なれば一字を學びて十字をさとり聰明
いち中々にたとへていはんかたもなしはや十五歳と
申には佛道修行の心深く極寒にも汗を流しくわんそ
うにつかれを忘れ炎暑にも衣をかむり念佛三昧に怠
らず一切の經ことくく御覽じてつくく思召すや
うはもろ共上こん上ちのともがらはくわんぼう玄ゆ
ぎやうしてごとう發明に成佛をいたさんか末世しよ
くせに至て下こん下ち凡夫はくわんぼうくわんねん
難行苦行はかなふまし然らば來世は必ず地獄に墮ち
ん悲しさよいかにもして下こん下ちの衆生を成佛い
たさせずんばあるべからず西方に打むかひあはれ願
くは末世の衆生なんさなふさの修行なくたゝ一念の
發願にて往生極樂の素懷を遂げん誓願を授け給へと
合掌し御目をふさぎ觀念ある時に不思議や經藏のと

びら開き金色の御經一卷せんだう大しの御手にわたし給ふはありがたかりける次第なりせんだう新たに
おぼしめし三度頂きみ給へば忝くもくはん無量壽經
なりいよゝゝゑんゝゝきもに銘し則拜しみたもふに
有難や一かうせんねん無量壽佛のめいもんより光を
はなつて明かに拜まれ給ふぞ不思議なる大師すい喜
ましゝゝて誠に末世愚痴の衆生に授くべきは彌陀の
ひぐわんに如はなしと此もんの下よりも此度の出離
ゑやうじ頓生佛化の道彌陀の名號に限れりとゑゝう
し給ひ万せん万ぎやうを振捨て只一かうにじやうど
もんに入給ひ末代あくせのしゆじやうごくちうざい
げの凡夫の得道は彌陀の名號におさまれりといよい
よ堅固の信心にまかせて南無阿彌陀佛ゝと高聲に
唱へ給へば其時虚空に音樂聞へ花降り異香四方に薰
じばさつしやうじゆ來迎あり極樂淨土を今爰にうつ
しけるかと有難く肝膽くだき禮拜有其時虚空に御聲
有衆生利益のひくわん末世にるつう疑ひなしとの給
ふみこゑの下よりも數々の佛は虚空にあがらせ給ふ
善導なをゝゝありがたく信心堅固に念佛をちうやに
申させ給ひける衆生千万なゝゝに申はかりはなか

りけれ

第三

あら有がたや善だう大しはかくしやう山に登り給ひ
既に十三年の春秋をおくり給ふ學問へんじも怠り給
はず殊に一向せん念無量壽佛のめいもん一心不亂に
得道有いよゝゝしんゝ堅固にて毎日の御ゑよきた
んしんせうみやう一向せんじゆのぎをたて給ふ其外
は更に餘念はまします誠に如來の大ひのひぐはん
明かにて知るも知らぬもをしなべて皆念佛に歸依を
なしだうざ一ゑやうのかくゑやうたちもゑやうだう
もんをふりすて善導の御弟子と也淨土もんに入給ひ
念佛しゆ行なされしは有がたかりける次第也或時大
しは一七日のべつじ念佛をとりおこなはせ給ふ既に
六日にあたる日の夜に入ていづく共なくはたちはか
りの女性たけ成髪をおしみだきさもたへがたき風情
にて大しの御前に參り何共物はいはずしてさめゝゝ
泣てぞいたりける善導御らんじてふびんの物の有様
やたうまでもなし汝まよひて今爰に來るにうたがひ

なし浮めてゑさせんさりながら懺悔えしんの爲なれば有し事共具に語れ其時女性顔ふり上げさてく有がたの御事やみづからは此國のかた原にかなんと申所にさる者の妻にて候女の身とてあさましや一子を懐胎仕り七日以前に難産にて悲しきかなやみづからはあらちのうへにて空しくなりし其罪がうの重くしてちの池におとされて苛責のせめのひまなきを助け給へや御僧となげき叫ぶ有様は目もあてられぬ風情なり大しふびんにおぼしめしあふやさしくも來るものかな汝過去の宿縁にあらすんばいかで此だうじやうに來るべきまさに卅五ばんの願もん今汝らがためならんごくちう惡人むたほうべんゆいしやうみだとかしやう極樂南無阿彌陀佛くと十念授け給ひければ女老やうめんたんすいきして南無阿彌陀佛の聲もろ共にあさましき姿を引かへ靈魂忽ち佛體となり西の空に飛び去りしは有難かりける次第なり是善導の御結縁本願名號のたへなるゑるし是なりとていよいよ念佛繁昌して菩提の道をぞ願ひけるかくてべつ行の御ゑかう口口おはりし所へ御父かいせうこじの御方より使たいしく走ひ參し御文を奉る大し拜見まし

ますに御いたはり以ての外にまします間へんしも早く御越しあり御臨終の御すゝめ御尤に御ざ有べしと又かいしやうこじの弟子しやうじゆん方よりの文なり大し大きに驚かせ給ひ扱もくみやうかなや此頃は佛道玄ゆ行に心ひかされ父上の御方へおとづれだにもたへはてゝ暮せし事の勿體なやへんじも急がん方々とみでしせうく召具して故郷へ歸らせ給ひけるげにや誠に世の中の有爲無常こそはかなけれいはしやかいせう居士過し秋の中ばより重病を引うけ給ひばんしの床にぞ臥し給ふあまた醫道の御弟子たち一家の人々集りてさまく看病申せ共々やうごうのやまふに次第に衰へ給ひつゝ今を限りと見へ給ふいたはしやかいせう居士御弟子たちにかい々やくせられやうく枕を上げ給ひ苦しげなる息をつぎ我既に娑婆の縁盡き冥途に赴き申なり忝くも一代きやう主の老やくそん口にも老やうじの掟をのがれ給はずそうりんじゆの入滅はきばがれい樂も益なし生者必滅のことはりを誰かのがれん唯惡念にいとまあらず次第にきしよく衰へたりかねて死期をしるならば善導を呼下し今一たび面談し最期の名殘を惜まん物を

神ならぬ身のおさましやかく老體となりはてしもな
がろふ事もあるべきかと□□なるが故に明暮と娑婆
の執心離れ得ず一大事の未來まで取失はんあさまし
やと付けかくに付けても扱も戀しき善導やとくして
山より下れかし最期に一目あひ見たやさても是非な
き我身やとの給ふ聲もたへ／＼に涙にむせばせ給ひ
ける看病申人々もさすが親子の中といひ日頃の教化
ふかければ一しほ焦れ給ふ事に御道理ことはりや
とをの／＼袖をぞ絞らるゝその中にゑやうじゆん涙
を押へさて／＼かひなく見へさせ給ふ物かな御心づ
よく持せ給へ善導の御方へ一昨日人を以て御臨終の
よし火急に申つかはし候定めて御油斷有まじければ
ろじをもちそがせ給ふべし明朝は必ず善導御越しな
さるべし御心結ばをれ必ずなげかせ給ふなとさまざ
ま諫め申さるゝかいゑやう聞召扱も／＼おことは心
のつきたるものかな扱は人をつかはしたるとやあふ
あふ嬉しく候然らば善導にあひみんことの嬉しやと
につことゑみを含み六十八歳を一期として遂に空し
くなり給ふ人々驚きすがりつき是は／＼とばかりに
て暫し涙を流さるゝしてい七世の親しき中いづれも

途方にくれ果しあまりにもろき御命是につけても善
導の今にも來らせ給ひなばさぞや本意なく思すらん
と重ねて袖をぞ絞らるゝ然る所へ善導は夜を日につ
いで急がせ給ひ父の館に入給ふのふ唯今御臨終遊ば
したりと申もあへず倒れふし善後もしらず泣きいた
り善だう夢とも辨へ給はずそれは誠かあさましやと
御死骸に取付てゑばし消入泣き給ふやう／＼として
御心を取なをさせ給ひつゝ空しき居士の御顔を拜し
扱てあさましや我は素より父母とてもあらざれば天
とも地とも二親とも御みをこそは頼みしにはや先き
立せ給ふかやかくあるべき事か此頃は故郷の空の戀
しくてけふは歸りてあべふきかあすは故郷へ歸らん
かと飛たつ程に思ひしかどつね／＼居士のたまは
く此方よりゆるさずば里へ歸ることなかれ唯學問の
修業せよと深く制し給ふにより御ゆるしなき内には
ばかりいかゞと存じ此度の御りんゑうにあはざる事
の悲しさやと深く歎かせ給ひける善導御泪のひまよ
りもいかに方々それ人かいの習ひ生して滅するはひ
とへに東山にかゝやく日の忽ち西の空に隠れ給ふに
ひとし哀別離苦をなげくにあらずかくて有ながら御

臨終の其砌り御目にかゝらぬ事共は生々世々の不幸なり。或やうかぎりの上の命をねがふ事はなし。只臨終の一大事をすゝめ申さんためなれば南無法王あみだ佛願くば慈悲の御眼じりあざやかに或やうごうのかいせうなればなど彌陀大悲の本願によらば正念往生なからんと御そつこんを觀念し十念絶えぬ其内にきたへ空しきかいせう居士忽ちよみがへらせ給ひける善導餘りの嬉しさにひし／＼と縋り付悦び泪はせきあへず付添ひたりし人々も皆々奇異の思ひをなす其時にかいせう居士は善導大しを拜し給ひ扱て有難き我片時が間に閻魔王宮にいたりぬ大王もいけんして曰く震旦善導そくあみだ佛一切衆生利益の爲め今漢土に出現あるかいせうが悦び是に過ぎじ二たびかへつてしやう或んの彌陀のいくを授り上品に至るべしとの示しによりて蘇生したり未來佛化の引導して給はれと三拜あるこそ奇妙なれ善導斜めに思召頼しき御本願やたのませ給へ南無あみだ佛／＼と十念のみこえも共に誠に一天のどかにてあまたの星天降りかいせうの五體よりしんじうの玉あらはれみやう或やう天子と現じ光りを十方に照し給ふ音樂

虚空に聞へ花降り異香四方に薫じながら淨土もかくやらんそれめうじやう天子の本地あみだたう一たいの御斷かいせう成佛疑ひなし是と申も善導のちやうせの本願曇りなく衆生利益の深きゆへかゝる奇特もあらはれたりそれよりも御死骸を西明寺に送りよきに葬り給ひけるかいせう居士の御臨終善導大しの御法力有難しとも中々扱何にたとへぬかたもなし

第四

善導大師はかいせう居士の御死骸をさいみやうじへ送り給ひちうゐんの御念佛怠らず四十九日と申には御丈一尺七寸の三尊の阿彌阿佛を一つう三づいに手づから刻ませ給ひつゝさま／＼の御弔ひたとへていはん方もなし即ち此如來今日本山城國宇治の里平等院の什物善導の作の阿彌陀本ノミされなりいよ／＼善導の御すゝめ普く一かうせん或ゆの御念佛ありがたかりける次第なり是は扱置きその頃又けごん宗のかうそうこんがう法師とてあなん文珠しやりほつにも劣らぬ程の碩學なりその相形人に變り色黒く口廣く眼は

水晶の如くにて見る人膽をぞ冷しける並びにこんさんじのふにんばう南山のみやうけん法師その外山々院々谷々の學者都合五百余人一ツ所に集りて内儀評定取々なり中にもこんがうの給はく善だうがすゝむる所さらゝ以てまやうばうならず是ひとへにかたかたの心をくれし故たびゝ大りへ訴たゆるといへ共御まやうゐんましまさず然りとはいへどもかれ其儘をくならばまよふことゝ滅亡し萬民地獄に墮ちん事こそふびんなれこゝを以て案するに公の爲め法の爲めかつうは末代までの衆生の爲なれば是非此度にては我々が一命にかけて善導を申うけ心の儘に行なはん此ぎ尤然るべしとてをのゝ打つれ内裏をさしてぞ上らるゝ御殿になれば一めんによりこんがう進み出で度々奏聞申せ共ついに叡聞にも達せず候かの善導がすゝむる所一々邪法まざれなし斯く奏聞申す段全くわれゝがまんへんしうにてござなく候君の御ためかつうは濁世の衆生の爲にて候へばあはれ善導を召し出され正法邪法を聞き召し分けられ下され候へ此上に御承引ましまさずばきうせきの寺々を悉く焼拂ひ我々が一命を疾くゝ召され候へ

と恐れ入てぞ奏聞す君叡聞ましゝてかたゝ度々奏すと雖善導の教正法疑ひなしと思ひし故今までは打過ぎぬめんゝ左程にてんをんと思ふ上はりやうはうの佛法邪正をたゝすべし来る十五日さいみやうじに於て兩方の問答けんりやくあるべきの宣旨なりいづれも忝しと御前をたち三重本所ゝへ歸られけるかくてさいみやうじには法問の日限にも成しかばぶつだんがうざあざやかに無量の限り旗を樹てとうみやうかうけとりそへ人々をぞ待ちいたり既に其日に也しかば忝くも帝王は臣家大臣めし具してさいみやうじへぞ出御ある扱諸山諸寺がくしやうたちこんがうほつしを先きん立て同寺に伺候ある其外國中の萬民有かるき佛法を聽聞し後生を助り申さんと我も我もと群集するさしもに廣きさいみやうじの門前は雲霞の如くみちゝて貴賤色めきわたりけり扱刻限にもなりしかば御まへより時の太鼓を打けれ共善導あへて出たまはずこんがう方のがくまやう達さればこそ善導は我等が威勢に恐れ出かねたるとみへたり其心にて人の教化にかなはじと一どにとつとぞ笑ひける暫く有て善導はみ弟子わづか召具し客殿に出給

ふ既に座敷も定まれば中にもこんさん寺のふにん坊すゝみ出誠や御身のすゝむる所諸宗のほうもんは出離得道空しく浄土宗ばかり容易く出離けつぢやうとくはんけするでういかん善導答へて曰く釋尊出世の本懷はみな是彌陀の本願しんゝみめやうをあらはさんが爲なり其ゆへは秘密ぎう經に曰く三世の諸佛出世の本懷は阿彌陀佛のみやうがうを説かん爲なりと云々然れば出離のけつせうはみだ一だいにきはまつたりふしんはなきかふにんいふべき所なくへいこうしてぎをさりぬ時になん山のみやうけんすゝみ出いやゝなんぢいふは一ぎりやうしこんなりさしたるせうこもなく一ゑうこんりうしあまつさへしよしうをさみするあくこんぶつぼさつのきやうろん又はそしたうのゑやくにもそむけり何れのほうにかたいのぼるにゑやうどをもとめ心のほかに佛あるや然るにいまなんぢがたつる所のじやうどもんのかうせんじゆのをしへには佛をみだ一たいとくはんねんし浄土をはるか西にさだめざいかうふかき此身をばいぎやういしゆのねんぶつにてたやすくゑゆつりをゑんとやおろかのそうのをしへやとたゝみかけて

ぞ申されけるあふなんぢしらずやくはんきやうにいはいちねんにてもさいほうゑやうどをねがひあみだぶつをとなへんものは八十をくこうのゑやうじのちうざいをめつしてかの國にむかへんととき給ふ其うへ第十八ねんぶつわうじやうのぐはんにいはいくせつがとくぶつ十方じゆゑやうしゝんしんぎやうよくゑやう口こくないし十ねんにやくふしやうゑやうしゆゑやうがくとこんゝこの心は我みやうかうをとなふるものをば我國へむかへずんばゑやうがくをとらじとの御せいくはんなりまさにあみだぶつゑやうたうゑやうかくうたがひなし其外るんぶつわうゑやうのめいもんかぞふるにいとまあらずたふことあらば申されよとべんせつあざやかにへんたうあるみやうけんもことばなくぎゝしてひかへし有さまをわらはぬものこそなかりけれ其時こんかうほうしすかさずつゝといでいわくりやうのしんてい三ぞうのしやくする所せうだいせうねん第六のぐはんに佛のとかせ給ふいつさいのほうを四つのいしゆにわけてあかし給ふ一にはびやうどうい二にはへつしい三にはぎい四つにはゑゆじやうぎよくいとわけ給ふ其中にべ

つしいとはによらいびやうどういのしんりをすゝめ
給ふといへ共がまんむざんのしゆゑやうのきにわか
なはざるがゆへに佛いかにもしてかのしゆじやうを
すくはんと思召ほうべんをめぐらしての給はくなん
ぢらたほり佛のみなをとなへよ必ずごくらくにわう
ゑやうせんとをしへ給ふしんりにはあらずたとへば
たうを立るあししろのごとしいかと云に如來ぢひ
ゑんまんの其心にてむゑんのしゆゑやうにびやうど
ういのしんりをさづけ佛道修行におもむかせんため
のあししろなり是則成佛のへついじなりなんぢが今
すゝむる所はたとへばごくちうのあく人にて一念
にほつぐはんしなむあみだ佛にてわうじやうすとい
へり是大き成あやまりなり是は佛ゑんのしゆじや
うをぶつくはにいたらせんためのほうべんなり是か
りにをしへ給ふべついいしにおなじなんぞせんけんの
ろんゑやくにそむきひとへにゑやほうをひろめふ
かくなむあみだぶつのみやうがうをすゝめばんみん
をあくしよにおとさんつみいかでかもつてのがるべ
きへんたうあらば申てみよいかにくく口を打てぞ
申ける時にせんだうの給ふやうかたくはやうやく

ぼさつのろんしやくをもつてほうもんにおよびぬい
でくふつせつのめいもん諸佛のせいげんを以てせ
うこととしてきかせんぶつせつあみだきやうにいわく
もしせんなんしせんによにんあつてあみだぶつのせ
つを聞て一心ふらんには是をとなへば其人命をはる時
にのぞんでむりやうのしやうじゆとげんにらいかう
しごくらくへむかへんとの御心なり十方がうかの諸
佛あみだぶつのみやうかうふかしぎの功德誠なくん
ばしよ佛の御した大ちにをちてくちはつべしまづせ
のしゆじやうみやうがうをうたがはずしてとなふべ
しねんずべしとちかはせ給ふせうこあみだきやうに
あきらかなりかゝるたつときみやうがうをしゆする
しゆ行しやをへつしいにひとしきとはうんでいけん
がくのあやまりかなとあらゆるきやうろんしやくも
んをちじやうたゞしくの給へばいやくすでにしや
かのしよせつをほうべんとみるからはすゝむる所の
念佛へつじいにうたがひなしで其せうこをみせん
と天にむかつてしゆもんしばらくとなへければ俄に
天ちしんどうしてくろくも一村まひさがるたちまち
あつきあらはれてせんだうにむかつてほのほをふく

その時せんだうなむあみだぶつとくはんねんあれば
六じのみやうがうこくうんにうつるとひとしくめう
がうたちまちりけん^りと也くだんのあつきにわたり三
重あひみだれあひてぞたゝかひけるさしもひぎやう
のあつきぶつりにきりたてられこくうにとびさり
うせにけりりけんはもとの六じとなりひかりをはな
つておがまれ給ふぞありがたき其時せんだうりけん
そくせみだぶついつせうしやうねんざいかいじよと
となへ給へばくもりしそらもちまちにきよきそら
とぞなりにければせんだう大じのりけんのみやうご
う是なりかさねてせんだう手を合せなむ西方のあみ
だ佛六萬がうかの諸佛ねんぶつわうじやうのすゝめ
わしやくそのの諸せつにまかせ本願にもとづいてし
ゆゑやうをりやくす若我すゝむる所あやまりあらば
此ぎをさらずたちまちむけんぢごくにをとし給へ又
あやまりなくば諸佛しよぼさつかんのふあつて一つ
のきずいをみせしめ給へなむあみだ佛とねんじ給へ
ばふしぎや玉たうにこめをき給ふにしやりはるかこ
くうにとびさり給ひたちまちによらいのすがたをげ
んじひかりをはなつておがまれ給ふ中にもぶつだん

のもくざうはくはうみやうかくやくとてらし給へば
いきやうくんじて花ふりこくうにみこゑあつてせん
だうのすゝめまもるべしゝせんざいゝゝうたがふ
事なかれとあらたに御つげましゝてぶつしやうは
たちまちにもとのごとくに玉たうに入給ふ此時の有
さまを今日本願寺のかいさんしんらん上人せんだう
とくみやうぶつしやういとゑやうしんげにゑやう口
し給ふ是なりこんがう法師をはじめとして五百よに
んのがくしやうたち皆々すいきのなみだをながしけ
るかゝるきどくをおがむうへはなにしにうたがひ申
べきさいせんよりのふぎすいさんまつびらゆるさせ
給ふべしとゑやうじんのあみだによらいにあひたて
まつる心ちしてみなことゝくでしとなり御十念を
てうだいしせんだう大しの御ともしてかくゑやうさ
んへぞ歸らるゝしよくせまつ代たうあくにん一さい
しゆゑやういわうゑやうせんだう大しの御ほうりき
ありがたしともなかゝゝさて申ばかりはなかりけ
れ

第五

せんだう大しのおすゝめあまねく天下にひろまりて
ゑんかばんりのはてまでもゑやうどもんにきぶくし
てらうにやくなんによきせんとひみなねんぶつをぞ
申けるすでにとし月をしうつりてせんだう大し御年
六十九歳におよばせ給ふある時御でしたちをことご
とくめされ我すゝむる所のほうもんあみだによらい
の御ないせうにかない念佛はんじやういたしゝ事よ
ろこびてもなをあまりあり然れば此國に念佛もつは
らなれば衆生しやうふつうたがひなしされば我世め
い七しゆんにおよべりりんじうの程ちかゝらん我す
かたをもくさうにうつしまつせの衆生をりやくせん
としやくせんだんのみそぎをもつてみづから御かげ
を作り給ふは有がたかりける次第なりかくて御かげ
ざうりう有てせんだうなゝめに思召かうざにうつし
かうけをそなへ我めつごには必一さいしゆじやうを
我に替てりやくあれなむあみだ佛ゝと十念ましま
す其時ふしぎ成かな此御かけせんだうもろともがつ
しやう有あひ十念をふそく有きたひなりける次第な
り其後此御かけかんとより日ほんに渡らせ給ひ今つ

くしのせんだう寺のごゑいは是なり誠にせんだう大
しあみだのけしんたるによつてさまゝのきみやう
はかそゑんかたはなかりけり御年卅五のはるよりも
六十九歳の御としまでちうやまどろみ給ふ事なく出
入るいきにもせうみやう念佛しあみだきやうをかき
給ふ事十萬ぐはんにおよべり極樂のていさうあみだ
のゑざうを書あらわし給ふ事三百六十ふく毎日の御
しよさにはみだきやう一萬ぐわん并に念佛十萬べん
へんしもけだいましまさす其後せんだうあまたのみ
でしたち其外の長じゆにむかつての給はく先りんじ
うゑかうほつぐはんのきをあらはし三じん四しゆの
ゑかうあきらかにしめさんと仰ければ其時ちやうし
ゆはつとこたへかうべをかたむけちやうもんす扱其
文にいわくぐはんでしとう此ぎは一さい衆生は皆是
あみだ如來の弟子なれば今よりはしゝやうのしゝや
うと頼みせうみやう念佛せばりんじうのせつは必ら
いかうましますなり其せんとししゑやうの其人心て
んたうせずあやまりみだるゝ事もなくかのみやうが
うのしつねんもなくもろゝのくつうもなく心よく
たのしみてせんぢやうに入かたとし此こゝろをもつ

てしんくけらくによにうせんぢやうとは申なり有
かたやあみだ如來くはんをんせしいもろ共に十方の
諸佛しよぼさつまでことくくらしいかう有念佛わう
じやう有人をせんになかなとかつかう有此ぎをもつ
て此きやうにしやうしゆげんせんじやうぶつ本願と
はあらはすなり上ぼんわうじやうあみだぶつこくた
うひ必いとくろくじんづうあゝかたじけなやかのだ
にいたりては十方せかいをめのまへにみる事みな是
によらいの大じ大ひのゆへなり爰をもつて此きやう
をにう十方かいくうしやうくしゆゑやうとしやく
し給ふこくうむへんなればせかいもむへんなりしゆ
じやうことにむへんなりかくのごとく一さいしゆじ
やうかたじけなくもあみだ如來の大せいぐはんをお
こし給ひことくくたすけ給ふせかいこくどのあら
んかぎりはなむあみだぶつのみやうかうはよもつき
じたしうのおきてはちゑをみがきてゑやうぶつす今
ゑやうどしうのありがたさはぐちにかへつて念佛し
ごくらく國どにわうじやうすたのもしやなむあみだ
ぶつこくうほうかいじんがぐはんやくによせはつぐ
わんいしゝんきみやうあみだ佛ととかせ給へば人々

は皆一たうになむあみだ佛となへける猶それより
もせんだうは三心四しゆのゑかうのぎをくはしくし
めし給ひける此三心四しゆのゑかうは我てう念佛の
ぐはんそほうねん上人とくだう有しきしつくんほつ
おうさうげんさう此四しゆを二つにわけわうさうげ
んさう二しゆのゑかうを念佛一かうもつはらしゆし
ましますゆへ則しんらん上人に御ふぞくあるさるに
よつてじやうどしうのじきしつくんほつ一かうしう
のわうさうげんさう是を合て四しゆのゑかうと申て
今まつ代にいたるまでは是をたつとみけつじやうわう
じやうをとぐる事ひとへに如來の御せいぐわんじん
じんみめうふかしきのくどくはなむあみだ佛にきは
まれりとけうけ有こそ有がたけれさてごゑかう御せ
つほうをわつてのち大し仰けるやうは我きたる十四
日にはごくらくわうじやうとぐるなり一七日のへち
じねんぶつをはじめんと則ほつくはん經をどくじゆ
あり御念佛をかいびやく有すでに一七日にあたる日
はたうのかうそうゑいりう二年かのどのみの三月十
四日の事なるに一天に花ふりいきやうこくうにぢう
まんし極樂せかいは其まゝに今此所にうつすかとい

よいよしんくあざやかに御ねんぶつをとなへ給ふ
然所にこくうにをんかく聞へばさつしやうじゆこと
ごとくせんだう大しをむかへんと三重らいかう有こ
そありがたけれかくてせんだうていせんにざぐをの
べ西方にむかひがつしやうし御念佛を申させ給ふふ
しぎや其時ていせんの柳の木よりしうんたなびき大
しのみあしのもとに來る善だうかんたんましくして
件の雲にせうじ給ひかの木の上に上らせ給ふはきた
いなりける次第なりかくて其後善だう大しこぼくの
うへにあんざましくなむしんきみやうらいさい
はうごくらくせかいけうしゆあみだぶつ并にくはん
をんせいしむりやうのしよぶつしよぼさつ一さいし
ゆじやうびやうどうわうじやう一れんたくしやうな
むあみだ佛のみ天ともろ共に有がたや善だうのにく
しんたちまちへんじてわうごんの御姿とあらはれ給
ひ光明かくやくとてらし給ひ十念さうぞくましませ
ば有がたや御いきの内よりもけぶつ三ぞんあらわれ
ひかりをはなつておがまれ給ふ扱其後にむりやうの
諸佛諸ぼさつが善だう大しもろ共にざんじが間にゐ
んせう有くはんいしくどくべうどうせ一さいどうほ

つばだいしん往生あんらくこくなむあみだ佛の御ほ
うぐはんきたい千萬有がたし共中々申計はなかりけ
れ

寛文拾_{庚戌}年彌生下旬

山本九兵衛板

善導記終

日本王代記

井上播磨掾藤原要榮正本

井神武天王のゆらひ

第一

さてもそのうちそもく天しん七代ぢん五代は神の御代さて人代にうつり日本大わうしんむてんわうのゆらいをくはしくたつねたてまつるにてんせう大しんくうに四代のそんうかやふきあはせずのみことにたいしあまたおはします第一はひこいつせのみことと申たてまるは御心たけく高力ふさうの御うまれつきはんみんこそつておそれをなす次はいなゝみのみこと第三はみけいりのみこと第四ばんにあたらせ給ふはやまと岩彦のみ事として御さうかうにうわにしてい御せいとく天にかない事にふけいのみちにきよくじんきをもつてしよみんをなでさせ給ふ日本みかとはしめじんむ天わうは是成つくしひうかの國にたいてりたておろしゆたかにすませ給ひけり扱またしたかふしんかにはわけのみちをみのしんとてこくうむへんの大力かるきことはとりにひとしくていゐるを

しゆこしたてまつる國おだやかになみもなく三重おさまるみよこそめでたけれ是はさてをき其頃又つくしより東南にあたつてやまといふ國ありこの國の大將川くしのじんみやうといふものあり家ゆたかにけんぞくおほく天ちの間にはいかりなく心のまゝにおくりしがつくしの天わうのいせいつよくしたいになびきしたがふときくよりやしんをさしはさみある時けんそくともをちか付扱もつくしにあるみことゝやらんがいせいいつのつて國々かれにしたふとや今まで心にまかせはびこつたるそれがしがかれがしたてにつかんことおもひもよらぬ事にてありさりながらきやつばらめはてんの神のしそんとてしよにんおもひつけはちからなしあはれさて天のあくじんしゆつげんあれかしそれかしかしゆくんとあかめあめがしたのこくわうとあをかん物をらいげんあれくとしせうしんにぞちかひける其時そらのけしきにはかにかはり大きなるほし一ツていせんにおちくるりゝとまはりけりしんみやうきつとみて天にすむべきほしちにくだるべきいわれなしほんしやうをあらはせととつておさへつかんとすれば二ツにわれ中よりく

せものあらはれしんみやうとひつくみうへをしたへ
とかへしける本よりしんみやう大力つゐにしたてに
くみふせけんをくびにおしあつればやあやまりす
な我は是なんぢかこひねがふ天のあくしんのけんぞ
く成が御身がしんていを心みよとのおほせによつて
きたつてありしんみやう聞てさてはさやうに候かと
とつてひつたていきつく所にくもゐにひきききり
にしてあまのいわふねにうちのりふしぎのものこそ
あまくたれそのしやくは一ぢやう四五しやく成かま
ん中に立ければあひもおとらぬけんぞく二人ほとひ
つさげゆんでめてにかしこまる時に大將天もひゝか
すこゑをあげ我は是天のあくしん荒雲にきばやとい
ふものなりそれがし此國にのそみをかくるといへ共
時をへずしてうかいふ所になんぢふかくこひねがふ
こゑにおうしてらいけんせり其つくしのみこと共神
のそんならば我もおとらぬ神のそんなりそくしにつ
くしをうちつぶさんまづ下かいのこくわうとあをか
れん我にしたかへなんぢらとこともなげにぞ申ける
しんみやう大きによりこび扱はさやうに候かはやく
ねがひのかなひたり此うへは何事も御下ぢにしたが

ひ天下たい平にきりたいらげ國わうとあをぎ奉らん
といさみすゝんで申けるおふゝいさぎよししんみ
やう我にてきたう物あらばかたはしよりつかみさき
下かいのやつはらにそれがしがいせいをしらせんい
かに立齊やつむねなんぢらいそぎつくしへ立こへま
つそのみことゝやらんをひつさげて參るべしいそげ
いそげと有ければ二人のけんぞく承はり御心やすく
思召そくじにひつたて參らんとしんつうじざいをあ
らわしてこくうにとんてぞあがりけりそれよりもに
ぎばやはやまとの國にしやうをかまへ三重下かいの
せいをぞあつめける扱そのゝちにつくしにはなを
おさまれるよものそらけしきのもりのもみぢがり頃ま
ちかねて尊立其ほかきんじゆの人々御ともにてまく
打まはしさまゝの御ゆふきやうとぞみへにけるい
つせ仰けるはいかにかたゝそれ人間のまなこほど
まよひやすきものはなしくれなまかふもみぢはも
めなれぬればせんもなしいざおく山にわけ入てこす
ゑこかげにかくれいる鳥けだ物をおい出しきりとめ
いとめくみとめていさやうつきをはらさんとの給ふ
所にたれとはしらず大をんあげ是ははゝさい國より

わたりたるじんべんきいのさう人也さうし申べき事
ありとたからかによばゝりけるみけいり聞召ふしぎ
の事を申ものかなそれこなたへめせ承はり候とやが
て御せんに出しける二人のもの御まへにかしこまり
かゝるきよゆふのおりからなれば我々がしんつうに
てめをおとろかせ申さんとこくうをしばらくまねき
ければがんせんにかすみかゝつて一ツのしまとなり
山のこしよりさつ／＼とおつるたきのはやきせをの
ほれるこひのいきをいは三重すさまじかりけるしだ
いなり人々此よしみ給ひてわれも／＼と立よらせ給
へばかすみとなりてぞはれにけるいつせ仰せけるは
扱々きめうをへたるものかなきやうこふふちしをく
べきぞ此所にとゞまるべし扱まつそうし申さんとは
いか成事ぞ二人の物承はりさん候君の御まつりこと
せいしんにあらすばんみんいきどをりふかしさるに
よつてやまとの國にひやうらんおこりじざい天のま
せうにぎばやといふあくしん下かいにくたつてこの
國をたいらくるなりおろかに心へ給ふなとことばを
はなつて申けるいなゝみ聞召おろかのものゝいひこ
とやそもきやつばらがぶんざいして此しん國をうば

はんとはとうらうがをの成べしとあざわふつての給
へばいや／＼さやうにあなどり給はゞひつでう國を
うばゝれ給はんあゝうれしやな天つみそらのきみが
なを此國にひろめんとことばをきんしていたりける
そのときみちをみきしよくをへんじやあきつくわい
なりなんぢらあまつみそらのきみがなとは何事を申
ぞみけいり御らんしていや／＼さなしみちをみ扱は
きやつばらはくだんのあくしんかけんそく成べしわ
れ／＼をたばからんとへんげてきたるとみへたりさ
あこなたのみるめはちかふまじまつすぐに申せやと
しきりにつめかけ給ひけるいや／＼さも候はずしづ
まり給へ人々我々はものゝたゝりをかんせんにみる
ゆへにかやうには申也國をうばはれ給ふとの是は是
はせうこをみせ申さんとたな心をあはせ御そばへ立
よりとみへしがたちまちすがたを引かへみことを引
立こくうにこそはあがりけれ今一人のくせ物いかれ
るこゑをさし上げそも我々はくだんのあくじんのけ
んぞくやその立齊きたうやつむねといふものなりな
んぢらこと／＼くわがしゆ君にしたかふべしまつお
のれら一人もあまさしと岩彦のみことをひき立ゆか

第二

んとすみちをみすかさずむすくとくむいなゝみうしろよりたぶさを取て引たをさんとし給へどもこと共せず三人を引立とんで出るをいつせはしりかゝつてむないたをつよくおさへうはおびをかいつかんでこんがう力を出しゑいやつと引とめ給へば人々とうをんなを合ゑいやゝと引すへさてゝおのれはくせ物かなふびんやなみけいりはかいなくませうにとらはれてあへなくしにゝおよばんことのむねんやといふもあまりありきやつにしたがふけんぞくさへかやうのいきをいなれば大將あらくもがけいりやくじんつうさつするにふかし一しやうのふちんいまなりときうしう九かこくのせいをあつめ給ふそれまづはからひ候へかしこまつて兩方よりひつはりやがてくびをぞうつたりけるさてみちをみらいしんにさふらひ大將を仰付られ三人のみことをはしめぎよけんにちをぬりいくさがみをまつりやまとの國に打立給ふいくさがみのちまつりといふ事此時よりもはじまれり此人人ははやわさいた天もかくやらんとさてかんせぬものこそなかりけれ

扱其後かくて立齊はみことをひつたてたかてこてにいましめあらくもの御まへに參るやつむねがさいごのていはじめをはりを申あぐるにぎばやきいて扱々やつむねはしそんじて有けるよなさりながら其物をいけとる事ひとへになんぢがはたらきなりいかにみことそれがしがいせいを今こそよつくしつゝらんきやうこう我にしたがふならば命をたすけゑさすべし何と命やをしきかといひければさん候さして命をおしむにはあらね共きこうのいせいをみるからは敵たいすべきにあらず御たすけ候はゝかたしけなく候はんと誠やかたの給へばおふゝさもあらんそれゝゝりうさいまづそのさうのかいなをきつてをとせかしこまつてやがてかいなをうつたりけりあらくもきつとみて何とそれにてもたすかりたくおもふかや其時みこといたけたかにのびあがつてあらくもをはつたとにらんでゑゝおのれはちくるいにもおとる物かなたとへ五たいはふんだんする共うでたにあらばおのれと引くみうむのせうぶをけつせんとおもひさいせ

んよりたばかりしになんぞやかやうになりはてなに
の望のあるべきぞとくしてかうべをはねよおのれそ
れがしが一ねんなよそへはゆかし今に思ひしらせん
とそのうち物をもの給はずにぎばや聞ておゝいさぎ
よき心ねやそれすみやかにかうべをはねよくさか
みにたむけんとあへなくくびをぞうつたりけりふし
ぎやむくろうごくともへしがたちまちてつたうのか
らすとへんしこくうにとひさりうせにけりあらくも
是みてゑゝあさましやしんいふかくしやうをへんせ
しふびんさよ此うへはゆだんすべにあらずおつ付是
へおしやすべしさりながらなまぬるうつたる下かい
のせいなん十萬きあればとてありのたけ共おもはれ
ず只ひとみものせうふならんいきをもつかせずうち
つぶさんうちとけるななんぢらとそれ／＼にそな
へをたてよせくるかたきを三重今や／＼と待いたり
さる程にかくてつくしのみことたち大せいをゐんそ
つしやまとの國ちはらのさにつかせ給ひしばらく
ちんをぞ取給ひあく所なんしよのちはんをめぐらし
せめ口の御よういとぞ聞へける是よりてきのじやう
くはくへはおさかめざかとて二ツの口ありまづめざ

かへはやまといわひこのみことみちをみのらいしん
三せんよきにてむかはせ給ふ扱おざかへはいつせの
みこと同いなゝみのみことしよぐんせいを引ぐしむ
かはせ給ふ扱おざか口を大手となづけめざかくちを
からめてとなつけ給ふ是わがてうのおふてからめて
のばしめなりかくて兩大將こまをはやめてうつたち
くさかべのじやうにおしよせ時をどつとぞあげにけ
るしろにてごしたることなればおなじく時をぞ合け
る其時御大將いつせのみことしんつうくろといふめ
らばにきんふくりんのくらをかせ御身かろげに召れ
しんたうにあゆませそも／＼是へよせたるは天せう
太神に六代のはつそんいつせのみこと也かたじけな
くも此國はてんせう大じんにゆづりをうけてにちり
んをかたとつて大日本と名付しんたうをもつて國家
をおさめふつほううどうしんたう三ツかなはにあ
ひつら也五々まつだいにいたるまでおさまりなびく
しんこくをなんぢら如きのあくしんのぶんざいにて
けがさんとはもつたいなし五たいたちまちそんぞう
しこなたをうらむなとこうせうによばわり給へば川
串のじんみやうたかき所にかかけあかつてやあおるか

なりみことなんぢくちはきく共うではたゞしさればにぎばやない／＼この國をのぞみ給ふによつてそれかしに心を合せらいけんし有し此うへは何とおしむとかいあらじ只すみやかにかぶとをぬぎにぎはやこうにしたがへとさみにくさげにぞ申けるみことはらにすへかね給ひ物ないわせぞ打とれとしきつて下ちをなし給へば本よりいさむつくしせい我おとらじときつと出三重ひばなをちらしてたゝかいけるさるほどに兩ぢんたがいにくたるゝもの山のごとしされ共せうぶはみへざりけるくん中ばのこと成に大將にきばやこましづ／＼とのり出しなまぬるきいくさかないで物みせんといふまゝにてんにむかつていきをくわつとふきければにはかにこくかんよもにたなびきけんをふらし天ちをくづるゝばかりなりさればつくしせい此いきをいにおそれをなしゑばしたゆんでみへにけるその時あらくもほこふりたてむらがるてきにめかけつゝこまをさつとのり入てさんをみたして切にけり馬人のきぢいなくにぎばやか一せんにくつきやうの兵物二百よきあまりうつたりけりのこりしやつばら四方へみつとおつちらし扱も下かいのやつ

ばらはにげあしのはやさよそれがしぢまんの此馬もよもきやつばらにはおいつかしあらものくさきいくさやとこましつ／＼とひつかへすはふしこやまのうごくがごとくなりいなゝみはるかに御覽してそこを引なにぎばやけんさんとおつかけ給へばふたういし竹是をみてをゝよきかたきまいりさふとはしりかゝつてうつたちをひつはつしちうにてくびをうちおとしにつことわらつて立給ふやそのりうさい是をみてやあかゝりあるはたらきや御みがしやていみけいりをもそれがしかてにかけたり御身もわがてにかゝつておなし道におもむかれよとあゆみいでたるありさまは人けんとはみへざりけりみこと御らんしておゝちんもなんぢをこそ待つれよれくまんもつ共とおしならべてむんずとくむ本よりりうさいがうりきぶさうのがうの物たゝ一ひしぎにとはげみけるされどもみことふぢのまとふがことくにて打からみをしめ付おのれみけいりのかたきなればほねはみじんにくだく共あんをんにおくべきかと心はたけくいさめ共ちからまさりのりうさいにてうはおひをかいつかんでめてへかつばとはねたをしのりかゝつてくびをふつ

つときつてすてけるがふしぎや此くびおどり出りう
さいがふゑのくさりにひつしとくひ付ふつゝとくひ
きりてふしこくうにとんでぞあがりけるねんりきこ
そおそろしけれいつせ御らんしてきくすいのぎよけ
んをひつさげいつせのみことはにありあまさしかへ
せとよばゝつてたせいの中へわつて入三重ばらりば
らりとときり給ふぎよけんのさきにむかふものいきて
かへるはなかりけり川串是をみてかしの丸きの大弓
になかさし取て打つかへやつほをしほつてひやうと
いるされ共やつほはちかいけり御そは成大ほくにと
をなりしてすつはと立やあきやつめはせいひやうや
なたゝなかをとをされてあしかりなるとすこし立の
き給へばたにのおかはにわたしたるはしいたありさ
いわいとひつたていかくるやをいたにてうけとめ給
へばしんみやうきつとゐてやさしきものゝはかりご
とやとゆんでのそぼにをりたつてかなくなりはなしに
かつきといたあやまたすみことのふへのくさりには
つしとたつ大事のてなればうけもあへずいぬいにと
うとまろひ給ふすはいとめたりとくひをとらんとか
けよるをうしろをきにかつはとをきかいつかんでひ

きよせゑゝくちをしやはらたちやとちつ共はたらか
せずくひふつとねちきり立あからんとし給ふ所にき
たうやくりきあまのいちのや大將なりあまさしと我
さきにうつてかゝるすでにあやうくみへし所に岩彦
のみこと同らいしんかけきたりてむらがるてきをお
つはらひさてゝあやうきせんやとみことをいたは
りまつかたはらに入給ふ此人々の心の内むねんなり
共なかゝゝさてなにゝたとへんかたもなし

第三

さるほどに三日三やのたゝかいにてきみかたうたる
る物かずおほくたがいにしやしれつなきといへ共つ
くしかたにはいつせのみこと大じの御手をおい給へ
ばかわちの國あしのこといふ所に御ちんをとらせ給ひ
つゝさまゝいたはりたてまつれど御きすしたいに
をもりつゝすでにかきりとみへ給ふいたはしやみこ
とはくるしげ成御いきをつきいかに岩彦きゝ給へ我
むなしく成ならばさそたよりなくおはすらんかまへ
てちからをおとさすしあくしん共をほろぼして大し

んくうよりゆつりゑたる此國を外道のすみかとなし
給ふなちんが五たいはやぶるゝ共たましゐはれいれ
いとこくうをかけつてまもるべしあゝさりとは口
をしやといたけ高にをきなをりぎよけん御手をか
け給ひおのれあくしんどもしやうをかへてもあんを
んにをくべきかと御まなこをくわつとみいだしいか
れる御きしよくその儘につゐにおはらせ給ひけるみ
ことをはじめ人々はふし是はくゝとばかりにてこゑ
をあげてぞなげかるゝつきそひたりしよぐんせいた
たあんやにとほしひきへたるごとくにてふしなげか
ぬものこそなかりけりさてあるべきにあらざればと
ある山中に御しがいをうつみ人々はなみだにくれて
ぞましますが其時とちうにこゑありてわれあまてる
かみのしそんとしてこの國をゑるされ共天めいうす
くさうせいすといへ共たましゐは此國にとゝまつて
あくまをはらいばんみんをけとせんと給ふこゑの
内よりもかたちはくしやとあらはれにしをさして
ぞとひ給ふつうがの國にとゝまつてたてのみやとあ
らはれゆみやのしゆごじんといはゝれ給ふぞありが
たきさればよの中のたのみなきは人心いつせのみこ

とほうぎよをみて我もくゝとおちゆきて御てにした
がふものとはくもわけのみちをみ一人ばかりなり
あらあさましのこゝいもや此まゝにてつくしへとて
はかへるまじいづくへなりとも身をかくしほねをみ
ぢんにくだくともあくじんどもをほろぼしあにみこ
との御いきとをりをやすんせたてまつらんといかれ
る御まなこになみだをうかべ給ひけりみちをみもし
こくしてりんげんのごとくきやつばらいかなるひし
ゆつをなすとてもしんばつみやうばつたちところ
にあたつていかでまつたうござあるべきやまつ人さ
へ御出なされつかれを御はらし給へやとみことの御
ともつかまつり三重人家をさしてぞいそがれける是
はさてをきこのやまのふもとに八ツぐらのおきなと
てふうふのものあり本はなをへしちやうじやにて家
ゆたかにけんぞくおゝく八ツのくらにかずのさいほ
うみちくゝてふそく成こともなしされどもふうふと
もにじひ深く人のひんくをあはれみてひ々にほどこ
すたからのかずあたかもやまのごとくなりさるによ
つてみちくゝたりしざいほういつとなゝつきはてけ
んぞくもちりくゝに今はふうふ二人さへくらしかね

たるふせいなりされどもふうふたのしみにはてるひのまいと申て十六才になり給ふひめを一人もたれたりはなのかはばせあぎやかにやうりうのかせになびける御よそをひひすいのかんさしたをやかにことに心のやさしくて三こく一のびじんなりさればふうふの人おくりかねたるよの中にも此ひめきみになくさみのひにかはらぬいとなみにわかなつまぎを御らんのためふうふもろ共うちつれておくるのべをさしてぞいてらるゝしかる所へみことはうちこへたまひやあ人家のみゆるにやどをかれかしこまつてたちよりみれば家をびたゝしくつくりたれども人すむていどもみへずされ共こゑをあげあないとよばゝれはてるひのまへたち出いつくよりの給ふさん候ゆきくれたるりよじんにて候一やのやどを御かし候へなにたび人かややすき御事にて候へ共はづかしながらうへをやすめ申さんたよりもなし今すこしすぎさせ給ひ候やとめさせ候へとよにやさしげにの給へばみをこと御らんしてなふなさけなしひめぎみ色をもかをもしる人ぞしるともにうへに望むともいかでからみ申べきたちよるかげもゑんなればふしひらに／＼

との給へば身はうもれ木の人しれぬみやまかくれのかりのやといかでかをしみ申さんとさあらはこなたへとぞせうしけるかゝりける所にふうふともないたちかへればありしゝだいをかたらるゝふうふきいてをゝよくこそおやどを参らせたりとよにまめやかにもてなしけり頃はきのとのみ正月朔日はつはるとてよそはいろめけともおきながいへには一はんもたへたりふうふあまりにせんかたなくかしいをもとめこにはたき是をねりて月日のことくまろめ二ツかさねてたいにすへこめすこしありけるをわきにまきみつかと一中へくりかやさまゝのこうるいをそへふし二人のまいにぞすへにけるみことあまりなれざるものなれどもあるじが心ざしをかんしふししみゝきこしめされける是きつきやうとなり御代にいでさせ給ひてのち正月はじめにはかくのごとくとりおこない給ふ是をまなんですゑゝまで正月のかゝみはうらいをいわふこと此ときよりのきちれいなりかくてふうふはまつけさのほとはしたゝめたりさてくれのくごをばなにとかまかなひ申さんとおもひわびたる所にてんじやうよりものおとしてさがりけりなに

やらんとよくみればまつさきなるはしろきねづみそ
のをにくいつきくいくらもつゝきくらの内へぞ入
にけるおきなふしぎにおもひくらをひらいてみてあ
ればきんぐこめせにさまぐのざいほうありこは
いかにたからこそわき出たりうばごせぐとよはれ
ばなふめでたしぐいづくにかと扱八ツのくらをひ
らきみれば色々のたから物のきをしきつてありしむ
かしにばいしけりとしのはじめのくらひらきまたね
まつりといふ事このときよりはじまれりふうふ大き
によるこびわれく二たびかやうに富にはこりし事
ゆゑしき人にやどまいらせしゆへなりといつきもて
なしたてまつればみことも御心ゆるやかに月日を送
らせ給ひけるあるひ大そらのとやかにはるめきわた
る折からうんちうよりふしぎのけしんあらはれ是は
天せう大しんのしんちよくなりかのおくじんはひと
かたならぬくせものなりおろそかにてはほんすまし
是はこんにてかみをまつるあまのひらかといふもの
なりすなはちあらくもかすむくにのつちにてつくり
たりと丸きうつはものをあまた給はりこれにくもつ
をもりしよてんをまかせ給へとのしんちよく也いそ

がせ給へとくくともひはるかにあからるゝ我て
うの今のかはら是なりみことありかたおほし召さ
あらばしんちよくにまかせしよてんをくはんしやう
申さんとくもわけに仰付られにはかにやういをなさ
れける扱そのうちにかくていわひこのみことはあく
じんめつばうのそのため御身をきよめしよてんをく
はんしやうなされける是わがてうのきねんまたちや
うふくのはしめとかやながきかづらにしろきぬを
きりかけ四方に是をひきまはすゝゑのよのみしめな
わといふ事はをまなひてひろまれりさてくだし給は
るかねらけにしゆくのくごをもりならべそのほか
あまたのそなへものかずをつくしてみへにける扱く
もわけも身をきよめたんじやうにさしかゝつてそれ
日本はしんだん國よりひがしにあたり候よしじつぎ
にてござ候やおゝひがしにあたつて國のかたちあき
つむしまにいたりまことにそくさんへんちの小國な
れども天しん七代ちじん五代あひつゝきたるしんこ
く三國一のめいこく也さればわがてうはかたじけな
くも天せう大じんぐうよりゆつりゑてわれくまで
は六代などかかんのふなからんやしかるに天のあら

くも日本をうばゝんためにわしういるまにあまくだ
りさまぐのあくぎやくたみのわづらいたるによつ
てめつばうさせんとたせいをそつしむかふといへ共
かたきのやいは四かいにはびこり天をひゝかしちを
うごかしみかたのぐんりき日々にはくちゑのやさ
きぢんべんのはこもつくちりゝにはいばくせしむ
るによつてしよ天を申おろし奉るまつたう力を合せ
かつ事をいやくのうちにゑせしめ給へばまづとうば
うにはぢこくてんわうごんせんにすみ給ふさいはう
にはくわうもく天はくきんせんにおはしますなんば
うにはさうぢやうてんなりせんに立給ふ北方にはた
もん天すいせうせんをまもらせらるゝさてわうしき
てんにはしやく大わう是ぢうわうのしゆごじんたり
とうりきん天とそつ天せうくはうむしきこうくわて
ん四わうでんには日月口の三くわうあまのかく天
みやうわう天むりやうむへんふくしやう天うきも辛
さもはらひすてたゝ何事もよの中は心まかせにじざ
い天くものうきはしたへゝにしばめる花の色をう
しなひ力なき折柄も引かへすなかあづさゆみやたけ
心やものゝふのいさむ心はしくとうてんあるかとみ

ればたちまちにふしたのしみかはるらくへんげ上ひ
さうひゝさうほんしゆ天そらにもこひがあればこそ
よもにうきなほは立くものはだてに物やおもふ成ふし
あゝ人めのせきをこひわびて色にひかるゝ四きよく
天上中あるひはさんごにはくるりめのふこんゝだ
うをたからとすこれみなりよくのたねなれやとんよ
くしんいまうくわ天なをも心はいさぎよくさつゝ
と引取三重あめをふらすはりうさひ天こすへゝをさ
らりゝとふきはらふかせにたつるはふくわう天を
んせいみめう様々の五しきをいろどるはうじゆ天ふ
しはなのうてなもかゝやきたはうせかいをめのまへ
にうつすや玉のひかりさすひりやうせう天せいしや
う天ふしあめのはらふりさけみればりもりなきゆき
あり月のみやうしやう天あくまがうりき五大力こん
がうひやく天みろく天ひやくしき天にはいだてんわ
うよくかいの六天わうしきかひの十七天しゆみの三
十三天ことにはさうわうほん天大しゆくのこらずく
はんじやうせしめ奉るねがはくはあくしんはやくも
をこくうばんりにきりはらひ天下たい平にちんごし
たまへゑいゝゝゝしよ天せんじんとかたん

くだき御きせいある十せんかうゐの御いのりしよ天
もなふしうさぞあらんとかんせぬものはなかりけり
まことにめでたききしきやときせん上下をしのべて
さてよろこばざるこそなかりけれ

第四

かくて其後さしもまふいのまわう共みことのゐ力に
くだかれけん國ようやくしづまれり去程にてるひの
まへみことの花の御よそをひ一めみしよりやるかた
もなき思ひくさとても人にまみゆるならばかゝる人
になれそめてこそうき世にすめるかいもあれと思へ
共さすがげに色に出んもおもはゆくやるかたなさに
ひめ君は女ばうたちを近付ていつよりけふはしみし
みと物さびしく思ふなり花ぞのやまにともなひて心
をはらさせて給はれやふし女ばうたちとぞ仰けるこ
はけしからぬ仰やなさあらばいさなひ申さんとは
のませかき押ひらきおくり花ぞのさしてぞ出らるゝ
折ふしみことはつれゝにやおはしけんことを引よ
せ給ひつゝ時のてうしをうかいひて三重せいがい

をぞあそばしけるひめ君此より聞召めつらしのこと
のねやないまだ下かいにはつたはらじと思ひしにこ
とにたへなるしらべにぞ思ひはなをもまさりぐさあ
きのすゝきにあらね共ひたすらほにやあらはれてな
にとなきてすさみに思ひの色をかきしるしにはにお
ちたるとりのはのもくげんじゆのみに玉づさをゆい
そへわらはがねんりきとをれやとなげあげいたにて
打給へばあなたへこそはとをりけるそれよりして是
をなぞらへこいのはねのこまたはごいた共な付すへ
のよまでももてあそぶみこと取上み給へばこいのお
もにのことは色ゝにつくして有是は女のわざみ
るもなかゝけがれなれとすてんいやゝ女はぐち
にてねんふかし思ひきらせんと思召只一ふてあそは
しくだんのことくむすび付てなげ給ふ姫君よろこび
たもとに入三重つねの所に歸られける其後に心しづ
かにかの御返事をひけん有あゝはづかしやとせきめ
んしさてまゝならぬ人心きへよ露の身はきみがなさ
けの有にまかせんとふけゆくよいに姫君はこづまを
たかくかい取てつまどのわきに立しのびほとゝと
おとつれてふるへるこはねをさし上げて思ひかはせ

し玉づきのぬしてゐるひのまへにて候そやあけさせ給へとの給へばみことはつとおぼしめしとほしひさしあげみ給へばあたりもかゝやくそのすがた此よの人共おもはれずとび立ほどにおぼしめすがいや／＼までしばしわが心一大事を引うけ是はなすべきことにあらずと我と心を引といめふかくつゝしむしだいあり何とかこち給ふ共かいなき事にて候へばはや／＼かへり給へやとあひそふなげにぞ仰けるてゐるひのまへは聞召こは心へぬ仰かな女はけがれし物なればあゝみる事のかなはしとやつたへきくいきなきいざなみのみこともふうふなん女のかみときくそのなかれの御身として女をきらはせ給ふこと神のとがめもはんへらん是までまいる此うへは身はいたづくにきゆる共ふつゝとかへり候まじみこときこしめされあらむづかしやとおくにいらんとしたまへば姫君あまりにあこがれてなふしのひなわとはいかにあゝおろかなり／＼しのびて思ひきれといふ事よとつまとをふかくおしたてゝふしむにんしやうとておともせずひめ君いまはせんかたなくなさけは人のためならすむくはん君がためぞかなしきとしほ／＼として歸らる

るおくり心の内こそあはれなれかゝりける所にいくはんたいしきらうわうこつせんとあらはれ只今のてゐるひのまへは三ごくでんらいのごとくあつて日の本まもりのため下かいにしやうをうけられたりふさいのゑんあるにおひては天下たい平成べきとあらたにつげてそのまゝにけすがごとくにうせ給ふみことうれしく思召我もいわきにあらね共天のせうらんをばばかりしにこはありがたき御つげやと扱ひめ君の仰をしたいおくり物のひまよりみ給へばいたはしやなひめ君は物わびしき御ふせいにて涙にくれておはします思はずしらすも立より給ひはなのたもとに取付て扱々ふかき心さしかんにたへり候もし空にこともあらんと君が心をうたがいてなさけなかりしことばのすへゆるさせ給へと有ければ姫君は聞召れなふやん事なき御身にてみづからごときのいやしきみのあたりへよらせ給ひなば御身もけがれ候べしふしそなたへよらせ給へやと怨みありげにみへ給ふみこと聞召思ひよりなやてるひのまへふかくつゝしむことはりは申さずとてさつし給へ君がまことのある上は心におくに所なしでゐるひかさねて申さるゝはあゝう

とましやさりとはうらみあるやきこしめせなさけ
なかりしことばのすへいへかはすれん我心それよの
中に／＼つらき物のかず／＼はしのぶにさゆる月の
かけたま／＼もとめしまれ人とたがいにくらかは
しまの夢もむすばぬみしかよにあくるをつくるかね
のねやおのがつばさをかさねつゝ人のわかれをかな
しまてよやしらふるとつげわたる八こゑのとりを心
なしといひすてにしこひのみちそもや女の心にて
御へやまでしのびしにつれなくかへし給ひしはのち
のよまでもわするまし歸られ給へとの給へばみこと
しごくにつめられておゝそれがしがあやまりとかふ
申におよばず只とにかくに此うへはぢひとなさけに
しくはなしそれたにのうぐひすもむめをやとりにね
をぞなくかの天ぢくのほしあひめはひかるたいしの
みにかはりやまふをうけたるためしもあるひめ君い
かにと仰けりひかるたいしほしあひはふうふのちぎ
りありこのうへいもせの後はたれとても何か命のお
しからんむめかなさけもうぐひすの心によりてやと
をつぐつらき人に何とてかこなたに心あるべきやい
わじやきかじむつかしやときめ引かつぎおともせず

みことおもひにたへかね給ひ心づよやき／＼給へさる
はどになさけなきならばうき身をいかでなからゑん
此ましにこひしなば君もろ共にまよひをうけ六道四
しやうか其内をいきかはりしにかはりたかいにごう
くわにみをこがさんうさもつらさも後の世に思ひし
らせ申さんとぎよけんに御手をかけ給へばひめ君あ
はてゝすがり付なふ扱々たんきにましますぞや御じ
がいとは何事ぞまたせ給へとありければこは心へぬ
仰かなつらきうきよにながらへておもひあまれるか
ず／＼をだれにかたらんうらめしやはなさせ給へと
の給へは御うらみはことほりふかきこひちにより竹
の君がなさけはそむかじとてかをうちあかめの給へ
ばみことうれしくおぼし召ゑ／＼にくかりし心やた
がいにうらみうらまれてかはらぬいもせとちぎらせ
給ふ此人々の心のうちうれしきともなか／＼さてか
んせぬものこそなかりけれ

第五

扱そのゝちかくてあらくもにきばやはさんぬるいく

さにうちかつて後ふるさとたけじぎいてんよりけんぞくともをめしあつめ其ほか下かいのあくじんどもはせ付いきをい天にはびこりけりしかる折ふしいわひこのみこといくさの用意し給ふよしをつたへき、せん日のたゝかいにのこらずほろぼしぬると思ひしにいまだながらへありけるかやだれかあるそれ引さげて參れあまの藥力承はり仰にては候へ共かのみことは武勇すぐれしものと承はり候へばそこつにはとられまじそれがしはかり事をもつてそくしにひつたて參るべしそのぎにてあるならばともかくもなんちにまかするといひもはてぬに八ツめのからすてい上におり立て藥力がかうべをくだけでのけとはつしけるこはいかにとおどろきけんをぬいてはらへどもとひぬけかいくいり難なくおつふせかうべみぢんにつつきくだかれ終にむなく成にけりあらくも大きにおどろき扱もけふかるあくてうかなあれあますないおとせかしこまつて候とさし取引つめいたりけるされ共此鳥事共せずはかいにてたゝきおとし三重ひぎやうじぎいをあらはして又はくちにてくわへつゝ一やも身にはたゝざりけりにぎばや大きにいかつてこ

くうをねんしまねきければこんじきのとび一ツもくせんにとひ來りてからすをめがけかゝりし所へみこと方よりまたこんじきのわしきたつてくだんのとびをはつしとけて三重さまゝひしゆつをつくしけるはしにひつかけ大ぢに其まゝふみなどしみぢんになして大おんあげ我はしよ天のかみちよくにてあくまをばつするわしにて有あらくもがめつばうとをきにあらずとくもゐはるかにあかりけり時にからすも大おんあげ我は是なんぢにせつかいせられ第二のわうしいなゝみかせこんなりおのれいかにたけく共あんをんにてをくべきか其上第四のわうしいわはりのみことしよしんしよ天の□□によつておつ付是へ取かかるおのれみぢんにつかみさきわがそんねんをはらさんとこくうにとひさりうせにけるあらくも大きにとうてんし扱々おもひよらざるかふてきしんたいここにきはまりたりしかしながらはいほくのぐんせいをおつめおしよするといふ共さまでの事はあるまじきぞ誠は本よりくつきやうのあくしよなりうしろはけはしき大山まへの大川ははつせのなみ山水ひやうひやうとしこすいにとしなん万きにてよする共あき

のきのはとおつちらさんとしたい／＼に下ぢをなし
三重きびしくよういをしたりけりさるほどにいわゝ
りのみことはしよじんしよ大の御かりにて思召事共
をかいたりやうまんぞくなされ候はゝあくじんめつぼ
うの御ひやうぢやう取々なりかゝりける所に玉のか
ふりにいくはんたゝしくそんがんけたかくあらはれ
いかにみことけふよりしては位をあらためじんむ天
わうとなり給へしかればあくしんめつばうのじせ
つたうらいせり扱てきぢんにむかふには是をふりた
てしよくんのけちせよ此さいにおふじしよしんらい
りんあつてしゆごし給はん我は是たい一のわうじい
つせのみこと也しよしんかんおふの時至てしんれい
まさにあらはれたりなをゆくすへをまもらんとこく
うにあがらせ給ひけるみことかんるいきもにめいじ
此うへはたとへみかたこせい成共はかりごとをめぐ
らしたちまちがふてきをしりぞけんさつする所かた
きは大せいみかたはわづか八百よきおよぶべき所も
なしまづみかた大せいあるやうにはかりごとをもつ
てぢんを取よに入てあのうへのやまにしひのびあがつ
てしやうの内へ命をかぎりにおとしつゝいきたへた

らばそれまでのかうもしそくさいならばねをひれた
るやつばらなん萬ぎありてもうでをかぎりにきつて
すて大將を引くみいつししやうのしやうぶをけつ
せんとおもふはいかにと仰けるらいしん承はりこは
いさぎよき仰かなわれ／＼日頃かるわざのちやうれ
ん此也する丈の谷成ともやす／＼ととんでをりんと
いさみすゝんで申けり天わう大系つきまし／＼てさ
あらば此きにとうせよとあるひはかぶとこてすねあ
てをめい／＼にいしやうをぬきほこ長刀にゆいつけ
てぢんしよに是をたてならべしだい／＼にかざりけ
り是我がてうのはた馬じるしのはじまりなり扱御と
もにはみちのおみのらいしんしう／＼二人ないたん
三重其日のくるゝを待給ふすてにやはんに成しかば
みことはやまへわけのぼりいかにらいしんかほうす
きやつに物ないわせそさしころせとたがひに心をあ
はせつゝまつさきかけてとんでをりあしふみなをし
まつはりのやつばらをかたばしよりさしころし一二
のきどをうちやぶつてつめのしやうまでつめかけ給
ふ爰にあらくもが郎等きふね一のや二人のものはな
にとやらんさはがしやとたいまつふりたてほこひつ

さげ立いづるを物がけに立しのびやりすごしうしろより心もとをさしとをせばこはいかにくすいさんなりとくび一々にうちおとしいかにらいしん扱きみちよきようちかないざこのいきをひにのりとらんいやくおほせにては候へどもさきんずる時んばせいするにりありといへ共まづひきとらせ給ふべしひつぢやうしやうりをゑ給はんゑなまぬるしらいしんなんなふかつてかどとのおをしめ給へとすゝませ給ふを引立さてもんのくはんぬき引はなしいかにぎはやおのれましやうのぶんざいにてこのしんこくをうばゝんとはひとへに水の月をのぞみさるのごとしじんむ天わうみちおみのらいしんしく二人のはたらきみよとこうせうによばゝつてはんぢんさしてぞ引給ふあらくもきいてすはようちのいつてみたるはとあはてふためきかけ出このありさまをみて大にどうてんし扱々ふしぎのしだいかなきふねいちのやをはじめくつきやうのつわもの二百きばかりうたれいかさまぼん人のなすわざとはみへすいかになんぢらそれがしつらく天のうんきをかんがふるにとてもかつべきいくさにあらずかみのいりきにせめら

れ五たいもぢゆふにはたらかねばまづこのたびはこうさんしかさねてじせつを待べきとけんぞく共をめしつれ三重みことの陣所に参りつゝあんないをもつてらいしんにちかくみぎのあらましをつぶさにあひのべともかくもきてんをたのみ候といんぎんにあいのぶる扱はさやうに候かさらはまつかみへうかひ申さんと天わうの御まへにかしこまりあらくもにぎばやきみの御いせいにおそれかう人に参り候いかはからひ候はん天わう聞召それこそ望所なれまづ召出したいめんせん畏て立出仰の通り申上御たいめん有べきとの御事なりまづ其けんをあづかり申さんとやがてけんを請取らいしんに奉る天王御らんじてかう人に参るでうしんひやうなり其方が心ざしに依て命をたすけゑさせん然上はかさねて此國にたいししやうげをなさじとのせうこをのこし置べしにぎはや承はりこは有がたき仰かなかうさんいたすうへはいかでてきたい申さんとさうのうでにすみを付手のいんをぞ付にける是わがてうのてがたのはじめこれなりてんわう大ゑつましくて此うへはべちぎなしとふくすみかにかへるべしありがたしと御ま

へをまかり立けんぞく共を引つれじざいてんへぞか
へりけるそれよりもてんわうはやまとの國にたいり
をたて天下たい平におさめ給ふせんしうばんせいめ
でたきともなか／＼申はかりはなかりけれ

延寶二年甲寅正月中旬 八文字屋八左衛門板

日本王代記終

玉津しまの御本地

第一

さても其後、それおもんみれば神はまやうてんのせいにあらはれ、天地の間に垂跡し、わくわう、どうぢんのいをかゝやかし、人は神の徳によつてそうめいるいちのきしつをうけ繁榮子孫に傳ふとかや、ここに和歌のぐはんじん紀州玉津島の大明神の由來をくはしくたづぬるに、人皇廿一代安康天皇の御宇にあまつこやねのみことより十六代の後胤、鎮西將軍、まつとう大連の長男、とよらの大臣中臣のくにたかとて公卿、一人おはします、西海道のせいむを蒙り、紀州牟婁の郡にすみ給ふ、御子一人おはします、とよらの中將くにしげとてしやうねん廿一さいになり給ふ、其身智恵深く忠孝に私なく、武にも文にもすぐれ、天下にはまれかくれなし、さてまた家の後見には田邊のせうじともなり、茨木別當としひらとて、古今無双のつはものなり、日々にまゆつしひまもなく、君を守護し奉れば、國も豊に民さかへたうとくく

らさせ給ひけり、あるとき國たか公御臺所に近付給ひ、我熊野權現を信じ、毎年參詣おこたらず、御身國しげ諸共に參詣せんと仰ける、御臺所は聞し召、みづからもかねく諸願の候なり、頃しも秋の中ばにて皆山々は色付て道すがらの興あらん、いざや打つれ參らんと、親子三人もろともに、供人あまためしぐして熊野へ參詣三重なされける、御まへになれば、鰐口てうと打ならし、なむきみやうてうらい熊野權現、年頃あゆみをはこぶこと子孫の榮花を祈るなり、もはや齡も傾きて、國しげ一子のみにてはたよりすくなくなるなり、あはれ神の御めぐみ姫を一人授けたまへとて其夜は、つやをぞなされける、夜半ばかりのことなるに、内陣よりも御聲あつて、いかに夫婦のもの、年ごとに怠らずあゆみをはこぶ心ざし、などか感應なかるべき、子孫ながく玉殿にましはるべしあるしの寶珠を得させんと、北の方くわいちうへ、玉一ツなげ入れ給ふと見へぬる、か夢はのさめにけり、國たか夫婦の人々は、あらありがたの御夢想やと、神前を伏し拜み、さてそれよりもみてかんぬしを召されつゝ、御よろこびのみかづらに神慮

をすゝしめ三重給ひけり、神靈おとめにのりうつり、御聲あらたに神託ある、われ既に、あんやうむいの都を出で、垂跡わかうの光をあらはし、この音無ざとの、三ツの山にちをゑめて、法界無縁の衆生をばまさ一子にの如くけとすなり、然るに汝、女子を一人もうけんと、神前に座をかさね、骨髓をなげ打ゆへ、夢中に玉子を授くるなり、必ず疑ふことなかれと、あらたに御示現ましゝて、神はあがらせ給ひけり、かゝりける所にいづくともなく白斑の鷹一もと飛び來り、國しげの御手にこそはとまりけり、國高このよし御覽じて、鷹は八幡のゑてうなり、鳥類とは申せ共國しげが手にのること、神慮にかなふゆへなるべし、かゝるきたいの其鷹を、わたくしにてはかなふまじ、御邊はいそぎ都にのぼり、禁裏へ鷹をさしあげよ、はやとくゝと有ければ、畏り候と、急ぎ御前を罷り立、田邊の庄司御供にて、都をさしてぞのぼらるゝ、國たか夫婦はそれよりも屋形をさしてぞ三重下向あるはや程もなく、北の御方やがてくわいたいましゝて、きのふけふすぎとゞまらぬ月日の數も重なりて、あたる十月と申にはめでたふ平

産なされける、御子とりあげ見給ふに、さもうつくしきかいごなり、ふしぎといふもあまりあり、國たか大きに驚き給ひ、我ゆやごんげんに頼みをかけ、かなはぬことをいのりぬる、神の咎めのゆへやらん見るもなかゝ忌はしや、いそぎ熊野山に捨置べしとしひらいかにと怒るゝ、茨木承り、やがて玉子を取持て、いそぎ御前を罷り立、くまの山へ捨たりしはことはりせめてぞ三重きこへけるふしぎなるかな、熊野あたりの山とは、草木五色に變じつゝ、紫雲たなびき音樂聞へ、天人やがてあま下り、かいごをあらため給ひしはありがたかりける次第なり、五七日と申にはかいご二ツにさつと破れ、かゝやくばかりの姫君なり、天女はかんろの露をふくめ、晝夜養育したまひける、もとより姫君天のなせる麗質にて、日々に成長したまふは、前代未聞のためしなり、爰に一ツの難儀あり、熊野の山に年久しき大さづちといふ山の神、此姫をほのかに見て、奪ひ取り養育し、最愛せんと思ひいれ、てつちやうをふりかたげ、惡風を吹き立、山河を響し來りしは物すさまじくぞみへにけり、天女此よりみ給ひて、姫君をいだきつ

つ、麓をさして逃げ給ふ、山神これを見て、いつくまでかはのがさんと、跡をしたふて追かくる、天女は姫を取られじと、谷峯へだてやうく逃げるのび給へば、不思議や山の神のわざならん、大河俄に流れ出、漲るれば瀧の如く、渡るべきやうなかりけり、跡よりは大きづち勢ひかゝつて走せ来る、天女忽ちかれうびんなり、羽がいに姫をおしかくし雲井はるかに三重飛び給ふ、山神大きに怒つて、鬼面飛行の驚となり、つゝいて空に舞ひ上り、くるりくゝとおひめぐる恐ろしかり三重ける、怨念なりかくて國高の屋形の上までのき給ふ、折ふし國高ひろるんに立出、四方をながめておはせしが、空をきつと見給ひ、是はきたいのけしきやと、いよゝ空を打ながめ、是はくゝとばかりなり、かゝる所にゆやごんげん、雲の内より現はれ給ひ、利劔を抜き持ち山神をきり立切立蹴落し給へば、さんじん通を失ひて、大地にころび落ちけるが、もとの姿をあらはしてゆき方、しらす失せにけり、其時權現天女もろ共底前に飛び下り、いかに國高夫婦のもの、授けし玉は是なりと、姫君をわたし給ひ、天女は雲井に上り給へば、扱其後

に權現は消すが、ごとくにうせ給ふ、こはかたじけなき次第やと、やがて取入れ見給へば、御衣すきとをりかゝやくばかりの美人なり、夫婦悦び給ひつゝ、そとをり姫と名付つゝ、御寵愛限りなし、夫婦の人の御悦び、めでたしともなかゝに中はかりはなかりけれ

第二

かくて其後、其頃のみかとをば、允恭天皇第二の太子安康天皇と申奉り、いそのかみのふるのこほりに都を立、百官しゆれうぎゝとして天下太平國土安全におさまりける、然れども皇子一人もましませねば、つねゝゝ勸慰をなやまし給ふ、こゝにみかどのこのかみかるの太子の御子に、いちべのみやびりんわうと申は生年十七歳、御眼ざし人にかはりせいの高さ七尺五寸、心あくまで不敵にしてかりすなごりをことし、武藝わやわぎを好み力の程はりしがたしつねゝゝ思召けるは、我は允恭天皇の謫流の御孫なれば、位をつぐべきものと色に出てぞみへ給ふ、扱

又はつせの宮わかたけの皇子と申奉るは、允恭天皇第五の宮、安康天皇の御弟御子にて御年は十六歳になり給ふ、御心おだやかに聖德身にそなはり、仁義忠悌の私なく、公卿大臣にいたるまで、この宮こそ太子に立せ給はんと重くもてなし奉る、まかれどもいづれを申出す人もなし、かゝる所にとよらの中将國重參内有て、白斑の鷹を奉り、ありし次第を申あぐる、みかど叡感淺からず、げに天はかゝみの如し、朕が心をあはれみ給ひ、諸神のまめし是なり、幸ひ位を譲るべきをりなれば其鷹を放ち、ひりんわかたけ二人が中にて、此たかをすへ上たらんをば太子に定めんとの宣旨にてやがて鷹をぞ放されける、二人の宮は拾ひさしの方へずんと立、我すへあげんと争はせ給へば、鷹は雲井に飛びあがり、ひらりひらりと舞ひ下り、若竹の宮の御手にすはりしは不思議、なりける次第なり、みかど叡覽ましゝて、此上は神慮にまかせ、若竹を東宮に立せよとの宣旨なり、ひりん王大きに氣色變り、禁裏をもちからず其座を蹴たてゝ出らるゝ、山田のありぬし蘇我のあら島ひりん王と一みなれば、同じくつゝいて立かゝるは

おこがまし(此間十五六字缺)大伴の竹丸大臣とよらの中將をめされ、ひりん王が振舞逆心と覺へたり用意せよとの宣旨なり、竹丸大臣承り、ひりん王謀叛を企て給ふとも何程のことの候べし、誠に私なき王位をそむかせ給ふ天罰、一たん利を得たまふとも遂には亡び給ふべし、國重すゝみ出竹丸の仰尤なり、まかしながらいくさの勝負はかりがたし、先づ若竹のみことは紀州へ忍ばせ奉り、心やすく一戦を勵むべし此儀尤然るべしと、國重の良等、田邊の庄司御供にてひそかに都を落ち給ふ、さてそれよりも竹丸國重兩大將にて、官軍合せて三千餘騎禁裏を守護しての三重まちいたり是は扱置、ひりん王蘇我のあら島山田の有ぬしを近付、我天孫のちやくゝなれ共、若竹を太子に立ること無念といふも餘りあり、所詮いくさを催ふしみかどを押込め若竹を亡しわれ天子とあふがれん、用意せよと仰せければ、兩人畏り、此うへはいかで時節を待べしと、やがて勢をぞ揃へける、かねて従ふ惡黨共、時を得たりと與力して既に其勢五萬餘騎、皆々心を合せつゝ、朱雀門へと三重押寄する屋形になれば、東西よりも取圍み関をどつとぞ

上にけり、こなたにもかねて用意の官軍、同じく関を合せける、関の聲も静まれば、いしゆを名乗ることもなく、敵味方入亂れいくさは花をぞ三重散しける、是は扱置き、こゝに若竹の御方より、とよらの國重一陣に駒かけ出し、そも／＼是は紀伊の國の住人とよらの中將國重なり、我と思ふ人あらばはなち合て勝負をせよ、いかに／＼と呼つたり、あら島是を見てきやつは聞へし馬上の達者、大かたにてはかなふまじと、味方の備へを立なをし、きつ先を並べ待ちかけたり、國重もとより剛の者、大勢のつわものをも、駈破り／＼四方へはつと追散し、それよりも引返し、手綱はいくりしと／＼／＼／＼／＼とのりまはり／＼、秘術を盡して乘たりけり、其時敵の方よりも山田の有主が舍弟、山田の有廣かけ合、駒を並べて切り結びうけつひらいつ半時が間戦ひしが、國重もとより早業なれば、山田が馬にむかふさまに乗り移り敵の上帯かい掴み、中にずんとさし上げ、二ふり三ふりまはし、前なる谷へ投げければ底のみくづとなりけり、其後又我馬に承租り、大勢のやつぱらを東西へばつと駈散しえづ／＼と引きけるは、今

日の戦の花なりと敵も味方も感じける、爰に寄手の方よりも、たて山將監みつさだ、大さと源五郎たゞなを二人共に長刀を傾け、ゆらり／＼と出けるが、器量骨柄人にこへ、あつばれ武者やと見へにける、國重見給ひ何者なるぞと問ひ給ふ、將監きつと見て、名乗るまでもなし勝負の後はしれ申さふ、參りぞふといふまゝに、長刀ひらめかしてかゝる、國重もとより剛の武者、長刀を切落し、おし並べてむんずと組む、大ちからのやうに見ゆれ共、やす／＼と取て押へ、首ふつとねぢきり、あつばれからだたをしやとなげすて給へば、大さと源五つゝいて組む、是をも引よせ輕々とさし上、ゑいやつとなげ給へば、みぢんとなつてうせにけり、蘇我のあら島是を見て走りかゝつてむずと組む、兩方めいよの大ちから上を下へ、下を上へとかへしける、山田のありしげかけ合、國重の上にのりかゝる、國重これをも取て引よせ、まへ／＼おしまはさんとし給ふ所に、びりん王又駈來り、國重を取て引伏せ、首を取らんとし給へば、びりん王のかいなを取、わが首打たるものに喰付んとはつたと睨み給へば、有主やがて立上り、國重の

首打落し立のきける爰に又、いふきの判官高峰、荒馬乗つての大ぢから、駒かけ出し打てかゝる、びりん王見給ひ何物なれば我に向つて太刀を取ると、はつたと睨み給へば、おゝその人こそあらめ、心なき馬までも、ふるいわなゝきすゝみえず、駒の手綱を引かへす、竹丸跡より是を見て、ゑゝおくしたり高峰、味方のおくれをなすものかな、と馬より取て引おろし、いで物みせてくれんとて、かうべみぢんに踏みくだき、扱びりん王にきつてかゝる、びりん王見給ひ、いさきよし竹丸と、をしならべ引組み、取て押へ首ふつと切てすて残るやつばらむらゝはつと追散し、其儘内裏に亂れ入、みかどをおしこめ奉り、天子の御座にうつらるゝ、かのびりん王の舞振貴賤上下ををしなべて憎まぬものこそなかりけれ

第三

かくて其後、ひりん王合戦に打勝ちみかどをいけ取り奉り、おのゝ奥黒木の御所におしこめ、みづから天子と仰がれ、蘇我の荒島山田の有ぬしを左右の大臣

と定め惡逆無道限りなし、さて道主を召しよせ、こんど打取首共を獄門にさらすべし、畏り候と、檢非使に申付はや獄門に三重をかけさせける、有ぬしやがて立出、一々實けんする所に、竹丸國重二人の首、眼をきつと見開き有主をはつたと睨む、有ぬしもさる物にて少もさはがす、汝らかくかばねをさらすこと、邪をさしはさみ、天の罰する所なりと、からんゝとそわらひける、其時二ツの首口より火焔を吹き出し、有ぬし飛かゝる、心得たりと太刀抜き持切り拂へば竹丸の首、切り立られて見へければ、國重が首つとより有主が首の骨に喰ひ付、口惜しやと切り落さんとしけれ共、遂に首ふつゝと喰切り虚空を三重さしてぞ上りける、扱其後に、竹丸が首も今は一念はれたりと、虚空に呼はり失せんけるはおそろしかりける三重念力なり、是は扱置いたはしや若竹は田邊の庄司只一人めしつれさせ給ひつゝ、紀の路におもむき給ひける心の内こそあはれなり、治る御代に我ひとり我慢ぞうぢやうまんしんの貪慾愚痴の雲あつく、噴患の雲のはれやらす心の鬼に身を狭めかゝる姿となりけるよと涙にくれさせ給ひける、春雨しげく降

りければ草を結んで味方かけうきみのかさを召れる、是や誠に我朝の簀笠なりと承る、大和の國住なれ給ひし宮居を出、心細き限りなしいつ立皈る身ならねば名残り惜さに三笠山ゆくすらとても頼まれず、この身は何となら阪や、うきをことたふ人もなく、今ぞはつせの山越に、降來る雨も晴れやかに、咲きぬる花を打ちながめ、はつせ山雲井に花の咲きぬれば、あまの川なみたつかとそみると、くちすさみつゝ過ぎ給へば、是ぞなたかきみよしの雪かと思れば雪ではあらで、やあ是の花の吹雪はおもしろや、かゝるうきめに大峯も雲のあなたと、思ひやりゆんで見へし山々はたへまにつゞく金剛山、見わたせば、立田の川の春ならば、錦織りしく紅葉葉を春にも秋を思ひ出て、あはれ世にある身にあらば、數の臣家を召し集めみねとも名所の歌枕さぞおかしくや有るらんと、つらき内にもなくさみて、やうく今に紀伊の國、牟婁の郡に着き給ふ、田邊の庄司いそぎ屋形に參り、かやうくの次第にてみかどの御供仕り、罷下りけると申上る、國高急ぎ立出、奥に請じ奉り、かゝる亂れの折ならで、何とて渡らせ給ふ

べき、それがしかくて候へば、ついにはかたきを退治仕り、御位につけ奉り候べし、御心やすく思し召れ候へと、世に頼もしく申上、玄んどうに御所を立いつきもてなし三重奉る、頃はのどけき春の空、彌生中ばのことなるに、みことあまりの淋しさに、花ぞの山に立出て、木々の梢の花盛り、雪かと紛ふ春風に、吹き散る景色を打ながめ心をくわんしておはします、かゝりける所に衣通姫、女房をともしひて、花見のていに出給ひ、あらおもしろの花盛り散りもはじめずさきも又、残らぬ花の枝々に八重九重は一重にもおとらぬ物ときくざくら、花のかほばせ楊貴妃や、是ならば稚兒櫻、げにあいらしく咲く花に戯れ遊ぶ春のよの、只一時と申せ共、其あたひ千金と、たれか限りしうつゝなやと、詠めにあかぬ折ふしに、花を散らすは鶯のはかせか憎や心なや、追拂はんと思へ共、いやまてしばし鶯も、花に戯れ囀るを、情けなしと思ふらんと、かしこを見れば若竹の皇子花に嘯き立給ふ、姫君一目御覽じて、扱も美しき少人かな、いかにめのとたれ人なるぞと問ひ給ふ、めのと承り、あれこそ都より來らせ給ふ若竹の尊に

て侍らせ給ふと答へける、姫君聞し召、あら羞しや都人のはしたなくもや覺すらん、木蔭に忍ばせ給へば、宮このよしを御覽して、さもあれかゝる田舎にもかやうの美女の有けるよな、是ぞ國高が衣通姫姫にて有らんと、はや面影にたつなみの、夜とはいはし晝となく、忘れはすまじお車のめぐりあふせのいわまくら、かはしてこそとおほし召、そなたの方を打ながめゑはし、たゝずみ給ひけり、姫も心はうはのそら、そら定めなきおもはゝにやめのとを近付、のふ都の君と聞くなればをくゆかしくも思ふなり、はづかしながらこしをれの歌をかけて、御心を引みると、短冊を取出し、一首はかふぞかゝれける、ゑづやゑづゑづがふせやの、いたまにも、くもの上なる、月をこそ見れと遊ばして、めのとにわたし給ひけり、めのと是を取持て、みことにこそは奉る、宮は此歌を御覽じてゑはし感歎なされしか、うらおしかへしかき付て、めのとにわたし給ひけり、めのと急ぎ立かへり、姫君に奉る、姫取上て讀給ふ、あまつかせ雲井はるかにふきをちてわかのうらみの、そでぞわびしき、姫君あつと感じつゝ、あらうつくしの御

筆や、又御かたのおさゝしき、わくかたならぬ御心、いとをしきよとの給ひて、まきかへしゝうちもをかれぬ風情なり、みこと此よし御覽じてするするとたち寄りて、はづかしながらそれがしは、八重のしほちをはるゝと、都かたよりおちうとなり、たい今花ともろともにほのみそめしより是を見に、そふおもかけも忘れかね、忍ぶ文字すり君ゆへに、亂れぞそむる紫の、色とはいづれ争はん、いまぞしる、うきむさしのゝゆかりとは、思ひそめにしむらさきの色とあそはしければ、姫君聞し召、あらなにともなや都人、ことさらいともかしこき御身にしあれば、數ならぬ身のわれゝが御ことばをかはし參らすること御はいかりなりやおもはゆしと顔うちあかめておはします、みことも今はたへかねて、我をちうどの身として、世をも人をもはいからず、よしの今の戯れと思しめされさふらふかや、人のなさけはくみてしる袖になみこす田子の浦、思ひ入るのたまかしは、舟さすさはのしたにこがれ參らせて、かくまで物を思ふみに、さてもつれなき御ふりやと、かこち顔にての給へば姫君聞し召、おしかへしゝ

仰せは重く候へ共、いかに御言の葉の有かたきとて、中々になき名取りてはいともくるしき名取川の、せせの埋れ木あらはれて、みづからよりも君の御うへも、いかいと悲しく候へばたいいくたびもく、我身つれなき御事と、怨みかこたせ給ふべし、さはさりながら、物のあはれのかすく、こなたの袖はぬれ参らせ、玄のふにたへぬいろもはや、あらはれ参いらせはづかしや、なふあれにみへたるにしのたい、みづからが月見の亭にて候なり、人めもる關屋と思し召、心はへだてぬ中川の、あふせのかすは、すくなくとも、なかれたへせぬ御心ならはのふ、頼み参らせ候はん、かならずく暮方には、あれへ渡らせ給ふべし、玄つか身のく、あはれをかたり参らせんのふ都の君とぞ仰せける、みことな、めに思し召、かくまでなさけ深りしをうらみしことのはかなさよ、必ずたがへ給ふなと、いとねんころにの給ひて、おのくかへらせ三重給ひける、こゝに一ツのさはりあり、熊野の山の神大さづちは、衣通姫に心をかけ、かなたこなたとうかいひしが、通力自在の身なれば此よしを聞よりも、何とぞせうげをなさんと、小

蔭にしのびいたりけり、かくて姫君たそかれ時にめのとをつれ、月みのていに出給ひ、月やおそしきみやおそしとまち給ふ、不思議や俄にむなさばぎし、御心たへ入やうに見へ給へば、めのかいしやく仕り奥にいらせ給ひける、かくてみことはくる、ををそしと待ちわびて、ひそかに忍び給ひけり、山神此よしみるよりも、やがてめのとと變じつ、宮に向ひて申やう、姫君只今までは是にて君おそしと待ち給ひしが、母上の御方に俄にさはり候ひて奥へいらせ給ふなり、今宵はかへらせ給ひ、あすのよ御出候へとまことしやかに申ける、みこと聞し召、おぼつかなく思し召、うらみながらに歸らせ給ふ、さん神しすましたりと悦び、その儘また宮の姿となり、月見のていに来りつ、かなたこなたと尋ねれば、衣通姫あひの玄やうじをするりとあけ、いとほづかしげに立給ふ、さん神悦び立よりたもとをひかへ、つれなき人の風情やな、いざこなたへといざなへば、姫君聞し召、君とかはせしことばの末、たかへしと思ひつ、是まで参り候へ共、身につしみの候へば是より歸らせ給ふべし、さん神聞て思ひよらずや姫君、

きみゆへ深きおもひをなし、いかて空しく歸らんこと、姫君に取付は、のふおそろしや其方は變化の物と覺へたり、女なり共汝が力におとらんやと、やがて取て伏せ給ふ、其時さん神申やう、我はこれ紛れなき若竹なり、そこつばして給ふなと、おきん／＼としか、れ共、姫君つよくおさへ給ふ、みことおぼつかなく思し召、月見のていに入給ひ、此よし御覽じて興さめ顔にておはします、かゝる所に姫君も出給ひ、是はいかなる事やらんと、たがいにくめとめを見合せてあきれ、果たるばかりなり、山神今はこらへかね、有し姿をあらはせば、姫君と見へしは熊野の權現とあらはれ、さん神をかいつかんで、かしこへどうとなげ給へば、姿は見へずなりにけり、權現はみこと衣通姫に打向ひ、いよく行末守るべしと、消すが如くに失せ給ふ、みこと姫君もろ共に、虚空を三度ふし拜み、忝き次第やと、打つれ奥へにぞ入給ふ、ゆくすへかけて變らじと、御ちぎり淺からず、此人々の心の内、うれしき共なか／＼申ばかりはなかりけれ、

第四

かくて其後、若竹の宮衣通姫になれそめて、水もらさじとの御ちぎり淺からずとこそ聞へける、包むとすれども國高夫婦は聞召、我々つねに願ひしは姫を内裏へみやづかへ、又ゑんわう方へ奉りたく思ひしに、若竹の御心にななひぬるこそ嬉しけれ、いざや月見のていに參りまゆをすゝめ奉らん、尤此ぎ然るべしと、國高夫婦打つれて、月見のていに參らるゝ、御前になりしかば、種々のちんくわをとゝのへしゆをさま／＼に奉る、上から下に至るまで、まふつうたふつさゝめいて、酒宴中ばのことなるに、黒雲一村まひさがり、何とはしらずていせんへ物こそどうと落ちにけり、田邊の店司走りかゝつて取て押へ、何やらんとみれば、人の首が人の首をくわへきり、ともなりひつさげ御まへに持來る、是は不思議の次第とて、立より是をみ給ふに、國重の首有ぬしがかうべをくわへ、いまだ御目もあさやかに、ゑみを含めるかははせなり、人々驚き、是は／＼とばかりにてみな／＼涙をながさるゝ、中にあはれをとらめし

は、母上や姫君なり、國重殿と聞からに、夢ともさ
らにわきまへすもだへこがれてなげかるゝ、むさん
やな國重の、熊野山にてわかれの時、君の御まへめ
てたふし、やがて下らんさらばといひしいとまこひ
いまだみゝをもはなれぬと消入やうになげかるゝ、
よその見るめもあはれなり、落る涙のひまよりも、
なふ國高殿、今よりは誰をたよりに思ふべき、思ひ
出れば國重と、姫と二人の子を持て、世にたのもし
く嬉しくて、ひと木の松のかた枝を、つれなき風に
吹き折られ、峰にさびしき老の身の、有にあらぬ
うき世やと涙は更にとゝまらず、玄よしあはれと聞
へける、いたはしや國高も、涙ながらに立よりて、
いかに國重死しても所存をしらせんと、是まで來る
心さし、父も嬉しく思ふなり、やがて朝敵退治して、
君を位に立參らせ、汝がうらみをはらすべしと、さ
もいさぎよくの給へ共しきりに涙ぞすゝみける、其
時國重の首につこと笑ふ、若竹御覽じて、扱もふび
んの有様や、我ゆへ命をうしなひし、心さしのせつ
なさを、いつのよにかはわするべきと、の給ふ聲の
下よりも、此首其儘目をふさぎ、きんぶせんの方に

飛び行、よしの、藏王權現とあらはれ給ふぞ有がた
き、扱それよりも國高、みことに申けるは、中國九
州の勢をもつて、朝敵退治仕り候へし、まづ／＼當
國和歌の浦はもろこしの八景をうつしたる名所な
り、御歸國の後またとみゆきも定めなし、此折から
を幸ひに、御舟にめされ、御遊覽なされ、ひなのう
きを御はらし候へと、衣通姫をはじめ、あまたの供
人召ぐして、和歌の浦へと出給ふ、あら面白の浦の
景、東は山たかく、せいかいはるかにそぼだちて、
せいなん雲のきはもなし、てうていきよくほの雨の
音、げに玄やう／＼のよるの雨とやいつ／＼べし、風
は波浪にひるがへり、あしべをさしてみつしほに、
ともよびあさるへいさの雁、紀の路のとを山、かす
かにて遠寺の鐘やひ／＼くらん、一やうせんちうばん
りの身、せいてんくもをさしはさみ、玄んゑん遠く
つらなりて、かすみがくれの淡路島、みやいはるか
にみへわたり、さも有かた／＼伏し拜み、おちの海原
あをふして、玄かんの月をうがちつゝ、つりせでか
へるは、あまをぶね、ゑんほのきはんもかくやらん、
そうしふけいのうらづたひ、ゑじまが磯の、なみの

うね／＼ゑろたへに、げにかうてんのくれつかた、
雪かと思へてゑならずや、わかふき上の月かけは、
とうていの秋のそらかと、疑かはれ、漁村の夕べに
てうすらん、すいそんさんくわくゑゆぎの風、たか
かみねにふきおちて、かへるさいそぐいち人は、さ
んしのせいらん是なるべし、きよふのばんせんなみ
をわけ、夕陽のかげのどかなり、みぎはによする白浪
の、とうど打てはさつと引、さつ／＼と引ぬる浪の
音高く、龍宮世界のがくのつゝみひやうしもかくは
あらじとて、いよ／＼興をぞなし給ふ、其時姫君か
くばかり▲よの中は、わかのうらわの朝ぼらけ、など
うらめしく、うちてひくらんと、くちずさみ給ひけ
れば、とうど打たるその浪のひくしほさらになかり
ける、此時よりも和歌の浦のかたをなみはうつとか
や、かくて日もせいさんにかたむけば、田邊の庄司
御迎ひの爲に舟に取乗り参りつゝ、君のみふねにの
りうつり、上下さいめき、こぎもどす、かゝる折ふし、
れいの大さづち、雲の上にあらはれいかに衣通姫、
まんごうはふる共、我ゑうしんはよもはれじ、いで
いで思ひしらせんと、惡風を吹きかけ、其儘海に飛

入しが、さもすさまじき毒蛇となり、大雨をふらし
つゝ、舟を下かいに沈めんと、しほ／＼ふひてぞ狂ひ
ける、水手かんどり立さはぎ、おもかち取かちとり
合揉みにもふでぞをしたりける、中にも田邊の庄司、
水練の達者にて太刀引抜き海中に飛込み、おつかけ
おつゝめ討んとす、すさまじかりける次第なり、毒
蛇は更に事ともせず、浪をまくつて走せ來り、むぎ
んやなともなりを、たゞ一口に吞みてんけり、みこ
と御劔のひつさげて、ふなばりに立あがり、汝しら
ずや天てる御かみより四十八世、允恭天皇第五の皇
子、若竹のみことなり、日月いまだ地におちず、其天
罰をしらせんと、大おん上にてのたへば、毒蛇はい
よ／＼怒りをなし浪をけたてゝかゝりける、みこと
御劔のふり上げ、切らん／＼とし給へば、さすが天子
に恐れをなし、浪をくゝつて近付ず、姫君いそぎお
しとめ、打ものにてはかなふまじと一首の歌にか
くばかり▲日のもととはあまつひつぎのみことのり、
我が大きみの國としらずやと、詠み給へば、きじん
にわうどうなしとかや、此歌の徳により、毒蛇は浪
に打たてられ、しほにひかれて失せにけり、人々よ

ろこびそれよりも、御ふねをはやめこぎ戻す、とにもかくにも衣通姫の御えいか、まことにわか御神に、祝はれ給ふもことわりやと、貴賤上下おしなべて、感ぜぬものこそなかりけれ

第五

かくてそのうち、若竹の親王は、國高を御まへに召され、いかにもしてびりん王を亡しみかどのげきりんのやすめ奉り、身の本望を達せんと思ふはいかにと仰ける、國高承り、それがしもかねて左やうに存せしより、中國九國へくわい文をまはし候所に、皆御味方仕り申べきよし申來り候と、いひも果ぬに播磨の國の住人、飾磨の大六むらおかのおん六千餘騎にてはせ來り、御まへに畏り、君御發向の回文いたたくとひとしく走せさんじ候、九州中國の勢は播磨攝津和泉まで參りあふ約束ござ候、いそぎ御馬を出させられ候へ、あれにて御勢揃へ然るべしと申上る、みことげにもと思し召、國高むらおか先陣にて、三萬よきを引卒し、紀伊の國を打ち立て、中國さして

ぞ下らるゝ、このことなをもかくれなく、びりん王はそが蘇我のあらしまを近付、扱も若竹の宮、國高しかまの大六を先陣として、中國九こくの勢をもよふし、急に都へ責めのぼるよし大かたにてはかなふまし、東國北國の勢を揃へ、ざんじに退治いたすべし、あらしま仰を承り、いそぎ御まへを罷立、さふらひ共に申付、一々ふれをそなしにけるさるほどに、東國北國の諸軍勢、家々の旗をさし、われもくくと走せまゐる、然るにびりん王、みづから天子となり給へども、からにしきのひたゝれにてこがねざねの鎧を着し、村雲の御劔にこがねざやのうちかたな、きんりうのかぶとの緒をしめ、柄も五尺及も五尺の大手鉾をひつさげ、床几に腰をかけ給へば、蘇我の大臣あらしまは、思ひくゝの腹巻に、ちうだいの太刀をはき、兜をぬぎ御前に畏り、集る所の軍兵をはやりやくたうにぞゑるしける、まづ一ばんにたけい將軍六千よき、あひ從ふ東國勢、常陸の大將みちむらせんし八萬よき、安房上總二ヶ國の大將、はくまのぐんし五百よき、武藏の藤太三萬よき、相模のてるもと二萬餘騎、甲斐信濃にはうんのもち月なんぶ下山

諏訪八代すべて五萬七千餘騎、上野には群馬の大夫
かんらの三郎三千よき下野にはまかべの太郎鹽のや
玄やうげん六千餘騎、駿河の國にはふぢ太郎五千よ
きにて走せ參る、遠江にかつまたたう、三河にあす
けの權のかみ、軍勢つがう一萬よき、美濃尾張近江
せいからめての大將には、いそら將軍きよとら、若
狹越前佐渡越後、加賀能登越中七ヶ國のつは物二十
一萬五千餘騎、都合其勢五十三萬六千よきとする
されしは、げにおびたしく見へにけり、かゝる所
に其たけ一丈ばかりのくせ物、頭に角をいたいき、
ひとへに夜刃の如くなるが、鉾ひつさげ走せ來り、
御まへに畏り、我は是天竺玄ゝさんより日本にとひ
來り、熊野の山にすむこと三百年、飛行自在のさん
神、大さづちとは我ことなり、このたび若竹の宮御
退治のよし承り、御みかた申さんため是まで參り候、
たとへは百千萬の大軍なりとも、落花みぢんに打ひ
しぎ、みかどの勝利になし奉らんと、手に取るやう
にぞ申ける、びりん王聞し召、我日の本の主として、
ぎやくとを退治せしむるに、汝が力をかるまでもな
しさりながら、心ざしといひ、飛行自在のものなら

ば、其術をたゞ今みせよ、畏り候と申もあへず美女
とへんげ、或は敵陣へ忍び入、かたきに近付しとや
かに、よるべもしらぬ浪枕、さよのころもをしほく
と、打したしみてたばかりなば、色には迷ふならひ
にて、いかなる猛將がうてきも、心よはくて引く袖
に、こよなふみへん其をりは、取てはひきふせく
おりかさなるものならばかいつかみくつぶてに打
てひしぎつけん、是にもひるまぬものならば、忽ち
惡鬼と變しつゝ虚空にずんと飛びあがり、惡風を吹
きかけて、火の雨つるぎの雨をふらしつゝ、いちく
敵を打殺し、きみの御世になし申さんと、大身の鉾
をふりまはし、勢ひかゝつて申せしは、身のけもよ
だつばかりなり、びりん王采ふりあげ、奇妙なりく
汝に先手をまかすべし、其ぶんころへ候へと、か
どいでの祝ひなされつゝ、既に都を打立てさいこく
さしてそ下さるゝ、かくて其後若竹の親王は、津の
國の尼ヶ崎に陣取してましますが、びりん王大勢に
て下らせ給ふと聞し召され、せいを集めたまへ共、
筑紫勢はいまだ參らず、中國の勢いまだ五萬よきに
は過ぎざりけり、國高むらおかを御まへにめされ此

せいにてはかなふまし、筑紫せいをまつべしと、に
しきの御はたをさしあげさせ給ふ所へ老人二人來り
しが、一人は弓矢をたいし、いま一人は金剛杖をよ
こたへ、陣中を見わたして、あつばれ陣の取りやう
かな、北に錦の御はたはせんごの大玄やう東西の兩
陣、三軍の玄やうをかまへられしは、天子の南面の
徳を表し、一陣二陣の武者ぞなへ、さて又後陣のせ
いくばり、一つとしてあやまりなし、ころはやよひ
の上旬にて、やうに向ふいくさだち、天の時にかな
ふたり、後は高山めては海、右手はぬま大河をひか
へしは地の理なり、惡人を亡し給ふゆへ、萬民勇み
よろこびて、集りたる勢なれば、人の心のくわする
ゆへ、天地の三歳にかなふうへは、勝利を得んこと
疑ひなし、われ／＼も後づめしてまいらせんと、鷹
となり鴉と變じ、虚空に揚らせ給ひけり、みこと軍
勢もろともに、扱は熊野の權現、正八幡此陣守護し
給ふと皆一同に伏し拜み、悦ぶことは限りなし、か
くて其後ぶりん王、大勢を引卒し、大地にむらがる
勢ひに、哄をどつとぞ揚げにける、こゝに若竹の
方よりも、飾摩の大六すゝみ出、是は播州の忠人し

かまの大六村おかの玄んなり、身玄やうなれども此
度味方の先陣を給はり、いで物みせんさらばとて、
とうまちくいの如くなる、多勢が中へ破つて入、は
らり／＼と薙いだりける、もとより村おかてきゝの
勇士、くつきやうのつはものを、其かずあまた切り
伏せ、残りし奴原東西へおつちらし、さも大やうに
引いたりしをほめぬ、ものこそなかりける、ぶりん
王采ふりあげ、きやつめ餘すなか／＼と下知し
給ふ、いそらの將軍二十萬、一どにとつとかゝりけ
る、正八幡うしろの山に現はれ給ひ、白羽のそやを
なげ給へば、たちまち此矢むらくもとなり、うんち
うより數千の矢さきまくりたて／＼とをなりしてこ
そ出にけれ、さしもに勇む大軍も、右往左往に敗軍
す、其時大さづち虚空に向つて鉾を振れば、不思議
やあまそら震動し、火の雨しきりに降りけるは、す
さましかりける次第なり、其時に權現は、天に向ひ
て合掌し、持ちたる櫛を投げ給へば、則ち數萬の劔
となり、亂れあひてぞ戦ひける、勢ひかゝる都せい
かなひがたくぞ見へにける、ぶりん王大きに怒つて
する／＼と駈出、いかに若竹、此亂は御ぶんと我と

天下を争ふゆへぞかし、あまた人を殺さんより、一
き打の勝負せんいかにくと申さるゝ、みこと聞し
召れ、あゝおろかのいひことや、昔より天皇として
惡逆無道の多きものと組打したる其例なしと、さも
大やうにの給へば、びりん王こらへかね、大手を廣
げ飛んでかゝる、村おか茨木おしへだてゆんでめて
よりむづと組む、びりん王ことともせず、取て引よ
せゑいやつて投げ給へば、とよらの國たかかけあは
せびりん王の亂れ髪を引つかみ、ゑいやつと引き倒
し、首をかゝんとせしを、びりん王強力にて、下よ
りもはねかへし、すでにあやうくみへし所に、ふた
神あらはれ給ひ、びりん王の左右のかいなをひつは
り給へば、有がたや神力にからめられ、五體少しもは
たらかず、時に若竹走りより、やがて首を打ち給ふ、
さん神今はかなはじと、向ふの山へにげのぼるを、
八幡宮は山上にたちたまふ、又虚空にのぼらんとす
れば熊野の權現空よりおつゝめ給へば、今はせん方
つきゆみの、飛行自在もかなはずて、大地にどうと落
ちけるを、やがておつふせからめ取、みことに參らせ
給ひつゝ神は跡なくなり給ふ、ありかたしくと、

御あとを伏し拜み、それよりも都に、上り御位につ
かせ給ひ、雄略天皇是なり、衣通姫御后にそなへ給
ふ、みことはにふの大明神、衣通姫は玉津島の大
神とあらはれ給ひ、和歌の道を守らせ給ふ、扱さづ
ちがかうべをはね、ちまたにさらし給ひける、その
のち天下治り民も豊にさかへける、千秋萬歳めでた
しともなかく、申ばかりはなかりけれ

延寶五丁巳年正月吉日

山本九兵衛板

玉津しまの御本地終

四天王大田合戦

すへたけろうやぶり

第一

それゆうあつてたけしといへども、ふんとうをしらざれば、しやしよくをまもることかたく、玄んのちやうこうかんのわうもうらが、ほろびしむかしにことならず、されば其頃源のせつゝのかみらいくわう、天下のぶしやうにましますとき、たいしよくわんのこうゐんうらべのくらんどすへたけとて、めいたいのゆうし有玄かれば、せんねん大忍山のきじんたいじのちうこうに、玄もふさをだまはりひかし八ヶ國のむしや所にて、あふたのせうにぞすみ給ふ、ことにくわほうのあまりにや御子二人おはします一はためよのひめとて、十三成たまふが、かたちといひ心さますへいかならんよそをひと、すゝはゝめやすくおぼしめす、次は小次郎とのとて、九ツに成たまふがよみかきわざのさとき事、かんしやうせうのさいたんかと、みな人かんじ奉る、すへたけのせいとう

の、すなを成に玄たがいて國たみいよくなびきつ、あけくれはたゝたのしみのめでたくおくらせ給ひける、かゝる折ふし爰に又げき玄んちかたのはつようにむれのべつたうなをすみとてあくぎやぶとうの者一人かづさの國にぞすまひける、かれいか成むまれにや、ようぎこつがらよにかわり、力はやわざひやうほうはせうおよそぼんふのわざならず、たゝ天魔玄よぎやうにしてらうどうひくわんの物までもるいをもつてあつむれば、あぶれ者のだいなり、すきからとうの源内たゝはるいわやくれのほら次郎かげもとなどゝいふ一人とうせんのかせ者家のしんとぞ玄たがいける、なをすみあるひの事成に、かれらをまねき近付、いかになんぢら物を聞、それ弓取の名をおもんじ命をかるく思ふ事一たび望を達せんため、我ばつかのみなれ共天下のあくぎを思ひ立らくわうをほろぼし、名を後の世にとゝめんと思ふはたゝしふてきか、やあ汝らいかにとたづねける、すきがらどうの源内兵衛、御でうにては候へ共いにしへ今に至るまで、朝敵の名を得し物運を開くためしなし、時節と御待候べし、まづ暫くとぞとゝめけ

る、なをすはたゞにらみつけ、おくれたるかたゝはる昔より此かた大りへまをなすやから口ぞのをほしといへ共、つらくかれらを案するに大石の小丸は武勇つよきばかりにて計畧をしらざるゆへひせんのうたれぬそがのいるかの大臣はまわしけれんの身といへ共、ゆだんがうてきのもといにて大職冠にほろばされ、うちの大じん共たゝふちはらの純友其外に清原はのこうぐうゑみの押勝何れも皆智謀は有といへ共、武器に達せんゆへなり、代々の朝敵かくの如くの仔細にてみな本意を失ひし、今なをすみはおそらく武勇をたとへて勇ならばはんくわい項羽もなか／＼もつて及ぶべからず智謀は張良周勃もこうせいを恐るべしいづれか足らぬことあつて頼光にはまくべきぞ早打立と申されける、いわやがくれのほら次郎いさぎよく仰かな頼光がみうちにこそ綱公時など、いふ鬼も神にもまさりたる大かう一のくせ者とみな人さたし申せば人によつての功名ならめがたはらいなく候へばあはれかれらと出合、をしならべてひつ組み腕の骨をためさんこそ武勇の家の望なり、はやうつたゝせ給へやめでたきさとぞよろこびける、

かゝりける所に俄にしんどうらいでんして、天地もかへすが如く也去程にやゝあつて虚空より鬼神二ひき忽然とひろゑんさして飛來る、御前なりし物ともあはてふためき氣を失ふ、され共二人の郎等はたとへ天下が變する共のがさじものと太刀ひんぬき飛かゝらんとする所をなをすみ二人を取ておさへ、やあさなせそ物共いかさま仔細あるべきぞはたらかば物々しや、ちうにつかんで微塵にせんまづ暫くとしとゝめ二ひきの鬼をまねかるればひろゑん近くかしこまりつゝしんで申やうそも／＼我らと申はいにしへちかたの大じんに申鬼共にふうきくわきにて候なりしかればこくんちかたの大じん打れ給ひて候よりきのともをか草も木も我が大君の國とよむかたの心のはづかしさに四匹ながらばん天へ歸り申といへ共思へば又口惜しくよからん大將ましまさばちかたの怨みを散せんと虚空をめぐる所に今なをすみの武勇はそも凡夫の所爲とは思はれず、殊にちかたの大玄んの御子孫にてましませばつかへ申さん其爲に是まで參り候なり思し召立給ひ逆しんあるべく候なり玄かれは又此國のいさわの社の寶殿へこくんちかた

の大玄んうちがみかすがの明神口ふしけへ傳はる御はたを納め申させ給へば取いださせ給ひつゝ今度の御陣の先がけに此旗さゝせ給ふべしとかうべを地に付申けるなをすみ聞て悦びするゝと走りより二ひきの鬼の髪かきなであら嬉しやな汝等が思ひよりぬる心さしいかでか盡し報すべきやがて怨みを晴さんにいざやいさわのやしろへ行先祖の旗を求めん者共との給ひて人々を引つれいさわの社にいそぎけるいそげば程なくやしろにも成ぬればかなぎに案内かうてかやうゝのことなれば先祖のはたにて有あひたくれよかしとぞ申されける神主は承り仰にて候へば參らせ上たく候へ共いにしへちかたの大じんの納め給ふときよりも此社のちう物にて我等如きの社人までおがみ申こともなし、殊更謀叛の企にておぼしたゝれんはじめに此旗を參らせば都のきこゑもはかりあり勿體なき御事や御免あれとぞ申けるなをすみ聞て怒りをなしわれ此國の守護として國民をあはれめば、たとへ王位にそむきてもわれかとうどたるべき身の今のことばの憎さよいで物見せんといふまに走りかゝつてかいつかみ、首ねち切て社壇へす

て社のかうしを打破り、奥の院にこめ置きし、件の旗をとり出し、此旗を求むるより首を見るこそ嬉しけれおそらく此旗をさし上げ東國より打て出中國はさておき四國西海山陽道北陸道に至るまでことゝく打取り日本國を從へんはえはしが程にて有ぞとのゝめき叫び歸りしはあつぱれ惡鬼のはじめかなと上下萬民おしなべみなおちぬ物こそなかりけれ

第二

なをすみ謀叛井ほら次郎すへ竹に打るゝ事

其後むれいの別當なをすみは郎等共を近付て今ははや關東勢ことゝく從へば心にかゝることともなし、東國勢をひきつれをして上洛すべきなりされども爰にすへ竹は東國のおさへとして頼光がけらいなり、何とぞきやつをすかしよせ、かれを味方になすべき、異議いふ物にて有ならばいくさ神の血祭に打てすててたつべし、先づたばかり使を立よとある、承り候とてよこへの兵衛を使としてすへ竹方へぞつかはしける、いそげば程なく下總に成ぬれば、すへ竹に對

面しかやう／＼とのべければ、すへ竹聞いて驚きな
にと候それがしに來つて内段申せとや、我武將の身
なれ共、關東のおさへとてときのつかさを給はれば
公事についてもひまもなし、やうあらばなを純に來
られよとて入にけり、使は面なきふせいにて本國に
立歸り一々かやうと申ける、なをすみは是を聞すい
さんのいひ事や、此上は是非もなし玄やをつこんて
すへ竹を打て本望を達すべし、いかに／＼と申ける、
ほら次郎承り玄ばしまたせ給ふべし、それもろこし
の玄んぶようはけいがと共にはからひて始皇帝だに
とりこにす、さらばそれがし打こへてすへ竹に對面
し、たばかり召連れ參るべし、もしいはいに及びなば
をしならべてむずと組み、刀を首にをしあてひつた
て是に來らん時數萬の下人候とも主を殺さん悲しさ
に是は／＼とふためきて、よも諸共にそれかしを打
んと申物あらし、我君いかにと申けるなをすみは打
うなづき、是は誠に然るべしともかくもほらはから
へ畏つて候と御まへを罷たち下總さしてぞいそぎけ
る、すへ竹館にも成ぬれば案内こうて對面し、かう
べを地に付け申やう、われらの主君なをすみは俄に

病氣に冒され存命しられず候ゆへおそれ多く候へ共
京都への御ひらうをも口をせうこに仕り申置たく候
へば、是へと仰ぎ奉る程へては候へ共、ひごろのよ
しみの御なけに御いであつて給はるべしと打しほれ
てぞのべにける、すへ竹つく／＼思案していや／＼
病氣とは覺束なし是はいかさまなをすみが、われを
打んしはかるらん愚なりと心へほら次郎にいふやう
は、參りたくは候へ共國を隔てゝ行き通ひ、都の聞
へも候へば御めんあれとそ申さるゝ、ほら次郎是を
聞もとより期することなれば、あひ近きたちよりこ
は情なやすへたけかげもとなとの侍を本意なくかへ
す法やある、せひ參られずばそれがし引立ゆかんと
いふ、すへたけは打笑ひまことに愚人夏の虫おのれ
と飛んで入るをのこかな、たゝ一人來つてわれを引
立ゆかんとは、鷲と雀がすね押するに似たるべし命
をしくばとつくかへれ罷り立とぞ怒らゆける、次郎
は腹をすへかね鷲か雀か物見せんと、飛かゝつてむ
ずと組む家の子郎等は見てのがすまじとぞせり合
ひたり、すへ竹きつと睨みつけ推參なり、己れらわ
れに任せて見物せよといふより早くおつふせ上に乗

りかゝり何と候雀どのわしはそつと手ごわき物今が
最期ぞ觀念せよと、首捻じ切てぞすてにけるかげも
とが侍ども此沙汰を聞より早く切て入らんと犇めく
を、すへ竹が郎等共ゑゝすいさんなり己れらと東西
へおつちらせば逃げて國にぞかへりける、國にもな
ればかげもとがさふらいどもあはたゞしく走せ歸
り、右の次第かやうくと申ける、なをすみ大きに
色そんじやあ己れらほら次第を打せいきて是まで參
るだん、さても未練の奴原かな、風鬼火鬼それはか
らへ、承り候とつゝとよつとかいつかみ、首ねじ切
てぞすてにける、へつとう見ていさぎよし、い
かに物共すへ竹と見るならば、打な殺すな手どりに
せよ時刻移りてかなふまじ、はや打たてやめんゝ
と都合其勢六千餘騎下總さしてぞおしよする、其後
すへ竹家のかうけんさわむらへいた其外近習とざま
の侍を召され、いかにかたゝさても別當なをすみ
は音に聞へし大ぢから、器量こつがら人にすぐれ、
おのが武勇に高慢し世になしものを取立家臣となづ
けてうあいし、巖づたい谷をとび其身をむげに碎き
つゝ、外道の法を行へば、ちかたにつかへしにふう

きくわき、いづくともなく飛來り、此程専らなをす
みに逆心のすゝむるよし、つゝめど四方にかくれな
し、かく朝敵となる程の大惡無道の奴原ども、殊に
はそれがしこなたにて使を誅せし事なれば、末の難
儀もかへり見ず、望む所といでたつすじつとうつさ
すよせ手たらん、こゝに一ツの難儀あり、かのなを
すみはぐんしやなり神通異力の風鬼火鬼かれが手に
從へばなかゝ以て此たびは勝べきいくさし思はれ
ず、されども三ぼうはせきがなかゝとして、なかな
かに寄せかたし、一ほうの細道あり、寄せ來らん奴原
を選び打のかうみやうせよ、親打るゝとも子かへり
みず、乗りこへゝときううかゝひ敵と組め、なを
すみと見るならば、遠矢に引詰め射て落せ、かまい
てゝ汝等不覺の働き仕り、うらべの名をば下すな
と、いさみすゝんで下知し給ふ、かのすへ竹の御有
さまあつはれ猛き勇士やと、みな感せぬ者こそなか
りけれ

第三

すへ竹勇力井城中へいけどらるゝ事

扱其後むれいの別當なをすみは六千餘騎を引卒しすへ竹玄やまにもなりぬれば二ゑ三ゑにをつ取巻哄の聲をぞあげにける、城の内にも豫て用意の事なれば大將すへ竹大手の櫓にかけ上り人數くばりの手分けして普天の下に住みながらくわんかをおかすくせものどもあれをつはらへとありければ所々に出合て火花を散して戦ひける寄手は大軍ことに又つうりき自在の風鬼火鬼が駆けまわりて取ては引裂き又はねちくび人つぶてはたゞ降る雨の如くなり爰に寄手の其中にすきからどうの源内兵衛たゝはるは心あくまで剛にして力人は人にすぐれたりつらく思ひけるやうは、我今度のいくさにすへ竹とくまずして風鬼火鬼にくまでは日頃の廣言いたづらに人のおもはん所もありとひそかに陣中を忍び出爰かしことぞねらひけるかゝる所にすへ竹の後見澤村平太玄げともよき敵と見るよりも向ひはたそすぎからとうのたゝはる我ぞ澤村玄げともなりいで見參とつゝとよりうけつひらいつ玄げしが程は戦ひける運のきわめ悲しさは玄げとも太刀を打はづしゆんでのたかも、打落されのつけにかへす所を首ちうに打落しきつ先に貫きすへ

竹が後見に澤山平太玄げともをば源内兵衛たゝはるが打取たりと口上にぞ罵りけるうらべの藏人是を聞きあつばれおのれはおこの者すへ竹是にひかへたりかへし合て勝負をせよたゝはる願ふ幸ひと取てかへしをしならべてむずと組む源内兵衛も大力一期の安否爰なりと矢聲を出しもみけれ共ばつくんかわかすへ竹なればやすくと組伏せ首ふつゝとかきおとしいかに寄手の奴原なをすみが一世と頼むすぎからはすへ竹が手にかゝりぬけからとなりたり見よやとと呼はりけるまつゑの新五是を聞あゝ仕たりすへ竹と走りかゝつてむずと組む物々しやとたぶさを取て前へかつぱと打倒し肩骨を踏へつゝ口してぞすてにける、かゝる所に風鬼はやがて飛來りすへ竹かめづらしや我はちかたの大じんに仕へし風鬼といふおになり今なをすみを取立て國土の主となさん爲め家臣と成て仕ゆるなりあはれ此風鬼が手にむかはん物こそふうんなれ日本國の人だねは絶ん物と申ける、すへ竹は聞給ひ汝等二匹の鬼共が取たてがほにかとうどしてむざんやななをすみかさねて首を打れんときかたゝかとうどをよにうらめしくや思ふべき我

じやく年のいせんより大江山此方かたのことくもお
になれたり寄れ組まん尤とて互ひに牙をかみならし
組めばはつれなぐればひらき秘術を盡しねぢあひし
が風鬼が力やまさりけんすへ竹を組んでふせ既に引
裂んとする所をやつといふてはね返し上になつてす
へ竹首をかゝんとすれば又ゑいといふてけかへされ
上になり下になり二三度四五度くれ共互ひに助る身
方なく勝負は更になかりけり、すへ竹運のきわめに
や搦手にいたりける火魚はかけ付是を見てあさまし
の有様やと走りかゝつてかいつかみ息をいはず
末武を兩方へひつぱりちん中さして入にける其後寄
手の物共我先にと亂れ入り勝鬨を作り立のゝめき叫
んで歸りけるかのすへ竹の心の内無念なりともなか
なかに中はかりはなかりけれ

第四

みだいきんだちをち給ふ事

扱も其後無念なるかなすへ竹はふうきくわきにいけ
どられいましめの縄つよくかけなをすみ前に引いだ
す大將みたまひいかにすへ竹汝らは頼光が内にして

四天王とがうしつゝ人もなげなるふるまひだに世に
はにくしと思ひしに使の物を誅せしこと、彼れとい
ひ是といひ何とかおのれをさいなまん、因果は早く
も運る物おゝつけかふなる有様鬼にも神にもまさり
たるすへ竹殿の縄付るふりのみことやとからゝと
ぞ笑ひけり、すへ竹聞もあへず汝ごときの愚人にい
ふべきにはあらね共さらば語つて聞すべし異國には
ゐんのちう王周の西伯かたいゆうりきに取らわれ、
ついに天下の主となる我朝にてはこうちの大じんと
し人將軍敵の手に渡りても二たび世には出たまふ異
國本朝かくの如し今我がやうの身となりてもさらさ
ら以て耻ぢならずもとより命は君のため骨は微塵に
碎かれ身をすだゝにせられても勇士の悲しむ所は
なし、かゝる差別をしらざるゆへ勿體なくもてうて
きしなり、今に天罰身にうけんあさましさとぞ申
けるなをすみ大きに怒りをなし己れのがれぬものゆ
へに死狂ひに狂ひてあくこんはむやくなりきやつを
ば獄屋にいましめをけ四天王のやつばらみな一々に
からめ取引ならべて誅すべし、かまいて油斷仕な承
り候とてすへ竹をひつたて厳しく獄屋にこめ置きし

はあはれなりける次第なり是は扱置いたわしやすへ竹のみだい所や公達はらうどうが情により大田の城を忍び出いづくをそこ共しらね共やうく今は落ちのびて武藏の國に付給ふ余りにつかれ給へばとある所に宿をかり一夜を明し給ひける、折ふし宿の主をば太郎太夫と沙汰しける人賣にて有けるが人々をつくく見てよきさかてぞと悦び、立寄つて申やう是にまします上ろうは見ればおさない人を連れいづくより何方へ御通りましますぞ一樹のかげにたちより同じ流れを汲むこともたえやうめうの縁と聞、一夜の宿を參らするもたいならぬ契り也くはしく語らせ給ふべし、おぼしめさん所まで送り届けて參らすべし上ろうさまとぞ語りける、御臺は此由聞し召あゝさて御身はやさしくも問せ給ふ物かな、何をか包み參らせんみづからは是よりもをくかたにて候が去年の夏の頃成に夫にわかれことしまでをさない物を養育しつまの在所につやうおくりてさふらひしが、都の方に頼むべきよしみの物の候へばいとすなき物共をひきつれのぼり候也一村雨の宿りさへ朽せぬ縁とぞ承る、たよりなき物共をあはれみ給へあるじと

て泪にくれての給へば、亭主が聞いて打なづき、心やすかれ人々よ、見る目もあはれに候へば、いづくまでもそれがしが送りといて參らせん、のぼらせ給へとみだい餘りの嬉しさに、さらばつれゆきたび給へ、たいなな事もくうき世の中は情けぞと、五更の天もひらくれば太郎太夫をたのみにてうちつれ上らせ給ひける、いそげは程なく今ははや駿河の國に付給ふ、爰に越後の人買こたか次郎に行あふたていしゆ次郎を招きよせ、是々ぞといひふくめ人々を賣り渡しかくれて國にぞ歸りける、其時次郎人々を船に乗せ越後の國にゆかんといふ、みだいは此由聞召なに我々は是よりも都方へ行ぞかし、越後とやらんへいかにして參るべきとの給へば、こたか次郎は聞よりもなにと申ぞ女房、我はあたへ十くわんに三人を買取れば越後の國へつれてゆきあたひければ先々へ又こそ賣て渡すなり、船に乗れ女房とあいそうなげに申ける、人々は聞たまひきもたましいも身にそはず、次郎が袂にひしくと取付、なふいかに今まではあるじが情けに我々を都へ送ると思ひしに、扱は親子のもの共をあたいをきわめ賣りけるかや、とて

も賣る物ならば都の方へ賣りてたべ、たとひ命はとらるゝ其越後へは行くまじと三人手に手を取くみ天にあこがれ地にふして聲あげてぞなき給ふ情けもしらぬ次郎にて、かしましのやつ原や、いで物見せんと杖ふりあげて打んとす姫君若君すがり付、あらかなさけなや船頭どの打てはらだにいるならば此兄弟の物共を心のゆく程打たまへ、其上賣らでかなはずば母をゆるし我々を鬼すむ島へも賣てたべ、あゝ扱木竹も物はしるぞかしあはれみ給へとのたまひて、御手をあはせてなげかるゝ、され共耳にも聞入れず、あゝ面倒なり已れらと棒ふりあげて命も失せよとさんぐに打ければいたはしやみだい所次郎にひとと取付、こはなさけなや船頭どの、我もよし有物ぞかし、水から(自ら也)がつまは頼光のみうちなるすへ竹と申人の妻や子にてありけるぞ、わどの我々を都へ送りとけなばあたいはのぞみにまかせんなふ船頭とてすがり付てぞ泣き給ふ、こたか次郎是を聞はつと驚き、遙の末座にたち下り、さては君にてましますかや、それがしをいかなるものとかおぼしめす、すへたけ公の御内に次郎むねえげと申物の御

ざ候べしか幼少の時不慮に御かんき蒙り身の置所なき儘に、かやうのわざを仕り世を渡り候所に、三世のきゑん盡きざるゆへ是にてたゞ今若君を拜し申事の有難さよ、さりながら相傳の御主を打奉るそれがし天めいの程こそ悲しけれと涙を流し申しけり、御臺公達今は早物うき事も打忘れ、扱は汝むねえげかや、かやうぐのしさいなり、わらは親子の者共をいそぎ都へつれ參れ、承り候とかたはらに御供申たびのせうぞくなされけり、物うき世にも今は又うれきたびを駿河なる、富士のけぶりといひけんもうわの空にやたつなれば思ひくらべていさゝらば、さらにたへせぬ我胸のくゆる思ひの悲しみにかくしつみても後のよは、またはちす葉にうきしまがはら、二人公達のお手をたづさへたどりぐと清見瀉かすみにかへりみをがさき、まつとしきかばわかみもかへんものをなかくにながらへて、憂き命ぞとなみだにくれてゆふはらのくさばの露に身もぬれて、形もやつれ浅間しくえづはた山の鶯は聲もかすみて鐘の音のひとつ二つとうつの山みちうつゝにも夢にもきかぬふるさとのいなせいかにとすぎやうしやにとう

とうみのはまなのはしわたりくらべて三河の國八つ
はしのさわべにもきゝつなれにしつまの身はなにと
なるみとなつかしくなげくわがみのをばりをばた
たのめゝゝゑめじが原のさしもぐささしも熱田の御
かみはそのかみ日本武のみことにてあづまのつまを
こひ給ふ、なぞらへ給へわれも又今一たびすへ竹に
めぐりあはせて給はれといのりゝゝもすぎゆけば、
今は願ひのかない來てこいしき人にあふみぢと聞け
共むねの雲きりに鏡の山も見へばこそなにとかゑか
のうらやましくもなみはよせてやかへるらん、思ひ
もよらぬうきたびをせたのからはしうちわたり、大
津のうらに入ぬれば、なをも思ひの大きなのせきも
なみだはといめすやとりのそらねもかも川を打こへ
ゆけば今はゝやけふ九へにつきたまふ、とにもかく
にも人々の御有様あはれとも中々に申ばかりもなか
りけれ

第五

すへたけろうをやぶり出都へ上る事

其後攝津の守頼光四海にみちし逆徒ことゝく追伐

有、洛陽に御所を建て君を敬ひ民を憐み、ちんしやま
つりごと正しくめでたくおくらせ給ひける、頃は八
月十五夜のめい月なからく口なく梢をかゝやかすは
たくはゝかんのことくなり在京の諸大名御慰みの爲
にとて種々のたいへい口つゝをさゝかせ御所をさし
て上りわたなべをもつてかくと申上ければ大將御き
げんかぎりなく東西の大にはに立出させ給ひつゝ既
に御酒宴はじまりける、面白かりける御遊び心もす
んでいさぎよくきやうを催ほす所に常陸の郡しゆき
つな俄に飛脚到來して、上總の國の住人むれの別當
なをすみ逆心をおこし、いにしへちかたの大じんに
仕へ申鬼共にふうきくわきをみかたになし下總に押
し寄せすへ竹城を攻め落しあまつさへすへ竹取こに
いたし候へば、ゆゝしき國土の御大事いそぎ打てを
給はるべしと大息ついて注進す、頼光驚かせ給ひい
かに有べきと御詮議なかばの所へ鎌倉のかげもと御
所に参りすへ竹が妻子参りたるよしごん上す、君お
ぼつかなくおぼし召それこなたへと有ければ、すへ
竹が女房は二人の子供の手を引きて御まへ近く参り
つゝ始め終を申上、涙にくれていたわりしがやゝあ

つて申やうつまにて候すへ竹、わらはに申けるやうは何とやらん此たびは難儀におぼへさふらへば、此おさなひ物どもを君の御げんざんに入れ奉り、もしもいくさの習ひにて我打死すると聞ならば、朋輩たちを頼みつゝ御せんよろしく申なしうらべの家をつかせよひたすらをちよと申間力及はす小供を連れ、あかぬ別れをふりすてゝ是まで参り候と、御前ともはいからず聲を上てぞ泣きいたり、頼光聞召れ誠にふびんの事共かなかれ十七の時よりも君臣のよしみをなし、忠節數度に及ぶといへども就申われ大場が手に捕はれ、既に危うき命をもすへ竹が武畧にて二たび敵を滅し、今みそじに餘るまで片時もはれしとなれにしあとのきうかうもいたつらごと口惜やと御泪はせきあへず御まへなりし諸大名みなく袖をぬらさるゝ其時大將御泪をとゝめさせ給ひいかにかたがた此たびのいくさは朝敵といひ一つは又すへ竹がついせんの爲なれば、よりみつじきに向ふべし、去ながらなをすみはおとに聞へし器量もの、殊に又ふうきくわきが従へば、すこし難儀におぼへたりわたなべいかゝとの給へば、つなの太郎かしこまつてさ

ん候御でうの如く大敵にへんげの組し候へば、いくさにをいては重く覺へ候なり、去ながらかれをほろぼさんてだてといつば、承るに此鬼は酒を好むとつたへ候へば毒酒をしたゝめ申つゝ大手口のかたはらに幾つものたいに入おき風鬼がかけんときよせてさつて逃げ去るべし、さけと見て此鬼立よつて吞むべし、毒酒なれば必ず五體のうらんし己れと自滅仕らん彼等が滅び候はい、なをすみはおのづからひちやうのつばをもぐごとく忽ち打取申べし、此儀はいかに申ける、其時きん時つゝと出、いかに綱どの物しり顔に罷出、自餘のことばも待たずして、わたなべ殿の計畧然るべう共思はれず毒酒にて強き敵をほろほし、調伏にて人を殺すは女わらべのなすわざ、敵は鬼にも神にもしたまへ、此金時は左様の面倒なる企みはいやくゝ、たゞ一文字にかけ入玄やつはらと引組み、運の天にまかするこそ誠の勇士の本ならめ、あお聞ともないくんはふやとたゞよそめしてこそ申けり、時にさだみつゝいふやう金時のの給ふは血氣の勇士といつゝべし、それろこしの孫氏が計略にも戦つて勝つことは誠の勝に更にせず、弓や取ての名人

は戦はずして勝つと有たは、一身を全うして敵を滅
すてだてこそあらまほしけれ、金時いよくりつふ
くし、おゝ其もろこしの吳氏孫氏が憶病流の習つて、
ごへんもそれをまねび給ふかあら□□やな、さやう
の人にはにるもいや戦かはすして勝やうに、命惜く
はいくさは御無用四天王といはるゝが、かりにもよ
はけに口をしゝ、いくたびもくゝそれがしに置ては
鬼神にかけ入てつばうほこ續のかん程、馬人のきら
いなく落花微塵に打ひしぎ、死人の山をつかせんこ
そ心地はよけれと申ける、さだみつなをもといまら
ず、ごへんな人もなげ成いひやうかな、我儘も人によ
るべし、そうしていくさの習ひ計略用ひず、軍法破る
は侍にても人にてもなし、猪武者とてちくるいに、
たとへたりとはつたと睨み申ける、金時打笑ひ、御
免あれさだみつどのもとより我は玄やう共なき山う
ばが一子なれば無禮そこつも多からん、又我儘は生
れ付、此金時などを蓄類に譬へん物は異國は知らず、
日本口とはおぼへず、あつはれわどのはつわ物かな
と、血眼になつて申ける、なにとやらぬこと實にな
つて見へければ、わたなべ中にへだたる君も御座を

下りさせたまひつゝ、かたぐゝが申ぶん、何れも一
利備はれり、去ながらかほどの大事を目前に置き理
非たゝさんことあるべからず、此上は頼光軍法いた
すべし、さらばうつたてかたぐゝと都合御勢八万余
騎、花の都を打たつて上總の國へといそがるゝ、そ
れは扱置きむざん成かなすへ竹は、いつしか敵の手
に渡りらうぐつの身となりて、けふをも知らぬ我命、
をゝなげかし物をと思へ共、追に我は四天王中にも
忠有さふらいとて、ひと多き其中にたう八ヶ國武者
所を給はりしに、いひがひなくも取ことなり、いや
しき奴原が手にかゝりうき名を下さん口惜しや、正
八幡大菩薩、源氏をすてはて給はずば、今一度それ
がしに神力をへさせたび給へと、心のうちに祈誓し
はらく泣いていたりける、不思議やな虚空よりかん
なぎ一人忽然とあらはれ、いかにすへ竹それゑんあ
ればとくあり、せいぐわんなとか空しかるべきゑん
りきを與ふべし、いそぎ獄屋を踏み破りはや落ちよ
すへ竹、我はこれ八幡宮の神勅たけうちのゑんなり
とて雲井はるかにあがるゝ、くらんど喜悅の眉を
聞き虚空に向つて參拜し、さらば教へにまかせんと

らうのこうしに手をかけ、ゑいやつとをしければ、さしもしたゝかにこしらへたる扉くわんぬき一度に折れてのきにけり、番のものどもきを消しあはてふためく所を、をれたる門とびらにをもちさんぐに薙ぎふせ、残りし物共おつちらし夜まはりに打まじり、虎の尾を蹈む心地してゑやうらうを忍び出たるかのすへ竹の御連の程めでたし共なか／＼申ばかりはなかりけれ

第六

公時二人鬼打井なをすみ最期の事

其後攝津の守頼光の御勢、既に上總におしよせ夜あけなば、急に取りかけんとその夜のおくるを待ち到り、かゝる所にすへ竹大童になつて走せ来る、人々これはと見る所に分れて、久しきすへ竹なり、君をはじめ奉り、をの／＼夢の心地して呆れはてゝぞいたりける、やゝあつて頼光はいかにすへ竹汝は敵のとりことなり、打れたりと聞つるがいかにして是迄は逃れ参りて有けるぞ、藏人承り、有次第をつまびらかに一々言上申けり、武將聞召れ、扱は朝敵罰せん

ため、うち神八まん大菩薩えんちよくおろさせ給ふかと、御手を合せ給ひつゝ三度禮拜なされける、御まへ伺候の諸軍勢皆々頼拜奉る、その時大將いかに方々、なをすみが滅亡はたゞざんじの内成べし、さりながら敵少勢なりと侮つて、打とけ油斷有べからすと、御座を立せ給へば並ゐたる諸軍勢やく所／＼と歸りける、其金時心に思ひけるやうは、我都にて渡邊といひ争ふかひもなく、鬼を毒酒にて殺させては余りにもつて本意なし、打て出ぬ其時風鬼火鬼とひつくんで、いきながらつれ來り酒のむ伽にせん物をと、いまだ夜中の頃よりも只一人忍び出、大手の門にたゞすみける、され共門を開かねば、大音聲で呼はるやう、只今は寄せ只一人なる物をとにも聞らん因にも見よ、山河をめぐる山姥が一子攝津の守頼光の御内成四天王の其中に坂田の民部金時といふ者なり、それがしに向つて凡夫は中々及ぶまじ二匹の鬼共出合て此金時が腕骨を見よ、鬼共は大聲上てぞ呼はりける、風鬼火鬼是を聞につくききやつが廣言かな、出物みせんといふ儘に大手の木戸を開かせて鐵棒をひつさげ坂田を目にかけ飛んでかゝる、

金時見て鬼立出られ候か、いでげんざん仕らんと四尺八寸の岩切抜き、てつぼうに打合火花を散し戦ひける、さしもに剛なる金時もふうき口わきに打立られ、下手に成て金時既に危うく見へにける、時にさだみつ走せ來りおし並べてくわきと組む、ふうきも棒を打すて金時とひつくみ上になり下になり、矢聲を上てねぢあへ共、兩方聞ゆる大力勝負は更に見へざりしが、いかゞしたりけん金時、ふうきに取ておつふせられさだみつくわきと組みながら、こはいかに金時はねかへせくと人に力を添ふれ共、其身もあぐんで見へにけり、金時下に有ながらふうきか右の腕を取り我はつかれて候へば暫く休み申なり、たい其方が危うく存するというより早く取て返し、ちつともはたらかせず鐙の上帯にて、たかてこてにいましめひとつ立んとする所に西の手にいたりける渡邊すへ竹かけ付くわきを取ておつ伏せ、首ちうに打落す、金時こそよく遊ばしたる物かな、我もすけたく候へ共鬼の番にひまを得ず存じながらの延引、ごめんあれさだみつと四人どつと打笑ひ、ふうきを先きにをつ立本陣さして引かへす、なをすみ聞いて怒りをなし、

かれらを失ひいつのため命を惜むべし、切死に死ねと下知すればはやりをの若物共よこへの立をさきとして、くつきやうのつは物廿五騎あますまじとて切て出る、渡邊すへ竹是を見てやさしのくわしやばらと多勢の中に破つて入西から東北から南雲手かくなは十文字、八ッはな形といふ物にさんくに切たりけり、残りし奴原東西へむらくばつと追散し、暫くいきをつぎいたり、なをすみ彌怒りをなし、櫓より飛んで下り、當るを幸ひにはらりくと薙ぎ伏する、すさまじかりける有様なり、末武見てなをすみか珍らしや我ぞうらべの末武なり、日頃の鬱憤はらさんいかにくと申けり、なをすみ聞てゑ、おのれをてのびにし、今にむねんなはれやらす、今ぞ手並は見らんと走りかゝつてむずと組む、なをすみ無双の大力物の數共思はず、末武を中にひつさげあはやと思ふ所に金時やがて走せ來り、草摺を疊み上つかも拳も通れくと三刀さす、弱ればかしこへどうとなげ、首ちうに打落し、君の御めにつかければ、武將御祝氣かぎりなく、敵残らず追討有、其後都にかい陣有て天下おたやかにおさめ給ふ、源氏の御代すへ

はんぞやうめでたしとも中々申ばかりはなかりけれ

二條通正本屋喜左衛門

四天王大田合戦終

なすの與市竹生島詣

付舟いこんの事

第一

さてもそのうちよおもんみるに明君は賢を愛して
國土をおさめふめいのよには佞を好んで國ほろぶこ
こに源氏の大將源の頼朝公はおごる平家を御誅伐あ
り鎌倉に御座をすへ武家の成敗取おこない戸ざゝぬ
御代とおさまれり其頃下野の國のくわんりやうに那
須の與一宗高おろしとてふし弓取一人ありけるが然る
に宗高は一とせ平家御追伐の時四國八島の沖にして
源平兩家のまの前にて扇のまとを射て落し名をばん
てんに上げ給ひ下野の武者所を給はりてふし那須の
こほりにすみ給ふ姫君一人おはします御名をばたへ
まの上と申て十三にぞなり給ふ扱また家の後見には
もりをか源内みちふさとて一騎當千のつはものなり
或時宗高御臺所にうちむかひ思ふしさいのある間近
江國竹生島へ參るなりするの□□□は姫をとまひ
ましませと道ふさはじめとして家の子郎等引具し

て三重近江の國へぞ上られけるいそかせ給へば程も
なく竹生島にもなりぬればまづ御前に參りつゝ鰐口
てうと打ならし故郷に残す妻の胎内にみどり子あり
あはれ願くは男子になしてたまはれと深くきせいを
かけ給ひてごゑやうせんゑよとふしおがみ扱御まへ
を下向あり宿坊に入らせ給へば住持いそぎ出迎ひ誠
にはるゝと是までの御さんけいかへすゝもめづ
らしやとさんかいにちんくわをもようしゑゆをさま
さまに奉りさて御なぐさみの其爲に御舟を飾り立住
持案内仕り三重御島まはりと聞へける海上はるかに
こぎ出すおもしろのうみづらやながめも多き其中に
ひらや□□つの朝霧に浪のうねゝゑげゝれば釣り
せで歸るあま人は煙浦の歸帆もかくやらん見るゝ
雲のたち迷ひしぐれをもよをす其けしき是ぞ誠に瀟
湘の夜の雨の名残かや夕陽西に傾けば三井寺の鐘の
聲けふもはや命の内にくれぬると名残を惜むゆふま
ぐれ遠寺の晚鐘これならん思ひつらねて行程に滋賀
唐崎の磯ぎはにつよくきけたるかりかねの友呼び遊
ぶ其聲は平沙の落雁是ならん鐘の山に照る月は是ぞ
誠に洞庭の景と打ながめ御ゆふらんは限りなししかゝ

りける所に美濃の國の住人はちやの冠者さだ國は郎等四五人打つれてせうせんに打のりつりたれあそびに出られしが叡山の山おろしはげしく落ちてはちやが舟に向ふさまにつき當るさた國血氣の勇士にて船端に立上りやあ何者が船なるぞいそぎさしのけよと申ける那須の郎等は聞たれ人なればことごとくしやまづそなたの船をのけ給へさだ國聞て腹を立につくいものゝいひやうかな我を誰と思ふらん美濃國の住人はちやのくわんじやさだ國といふ者なり今當家において此さだ國などに楯つく物はぐにんなつの虫とんで日に入が如し己れらいち／＼に海上へ切てはめんと罵れば宗高もたまりかね白木の弓をおつ取り大のかりまた打つかひ船底よりつゝと出てこととしやはちやどのいづくにていかほどの功名しらるゝ事あつてかゝる廣言は申さるゝぞあふ／＼やがて心へたり御ぶんは梶原平三景時の智なり當家において君の御きしよくあつきより舅の權威をかうにきて世には人もなきやうに左様の振舞びろうなり我は是下野の住人那須の與一宗高なり小兵には候へども見參のしるしになかざね一すぢ參らせんいづくと矢つば

を好み給へとあればさだ國聞てなに宗高にて有けるかごへんは聞ふる手きゝの人大ひやう一矢うけて閻魔のちやうの訴へにせんとおどり出んとする所を郎等ども取て押へあゝ暫く／＼爰にて御生涯に及び給はん御事は誰かは無念のはらすべし爰をのがれ道に待うけ歸るさを打べきなりひらに／＼と教訓すれば勇みかゝりしさだ國もおくびやう神にひかされて尤といひもあへず急ぎ船をぞこぎ戻しゆくへもしれすなりにけり宗高此由御らんじていかにはちやとのことばにはにざるふるまひかなかへせもどせとの給へば耳にもさらに聞入れずすみのをさしてぞ歸りける船中の人々は一どにとつと打笑ひ舟こぎ戻しそれよりも宿坊さしてかへらるゝ彼の宗高の御有様あつぱれゆゝしき共中々申ばかりはなかりけれ

第二

はちやのくわんじやむほんの事

さても其後はちやの冠者さだ國はみづうみにての舟いこん心にこめて無念さに一家の郎等はせあつめいかに汝等物を聞け那須の與一宗高にかゝる耻辱を與

へられ生きては何のゑきあらじ道にまちうけ打べきなりとかく申に及ぶまじはやうつたてやもの共と都合其勢五百余騎みちのはとりに立出て三重とやくと待いたり是はさてをき那須の與一宗高は侍共を近付てはちやの冠者さだ國は仁義もしらぬあふれもの殊にきのふの耻辱をばいかで其儘あるべきぞ定めて道にて待伏せんめんく物の具せよやとて其勢は八百余騎本國さしてぞ下らるゝ美濃國に入ぬれば案の如くはちやが勢四方よりもかけ合て三重時の聲をぞ上げにける時の聲もしづまればこそば寄手の方より一陣にこまかけ出しそもく是は當國の住人はちやの冠者さだ國なりきのふの意趣を晴さんために是に待かけ申なり那須の與一宗高に見參やつとぞ呼わつたる宗高聞し召何に定國にて有けるか水うみにての舟いこん晴さん爲に待受けて重ねて耻をかゝんとやふゆふ禮義もわきまへぬ野干におとりし侍といくさをせんは無念なれ共待うけしたるがやさしさにあれけちらせとありければ畏たりとて郎等の道ふさは大おん上げて云やうはいかに美濃のはい武者共宗高の御内にもりおか源内道ふさと云ふ大剛の者ありとは

かねて音にも聞つらん汝等をあはぬかたきと思へ共いで物みせんと云まゝに大大刀抜いてさしかざし多勢が中に破て入三重火花を散して戦ひけり時もいまだ移さぬまにくつきやうのつは物を其かずあまた切たりけり本より道ふさは心は剛なり力はつよいくさだては上手なりさしもの寄手と申共もりをかに切立られ残りすくなになりけるを四方へばつとおつちらしかち時どつとつくり立三重まつかたはらにぞ引にけるさても其後定國は残りし郎等近付いかに汝等それがし鎌倉に下り舅の梶原を頼み君に言上仕り此本望を遂ぐべきなりと取物も取あへず夜を日についでぞいそぎけるかの定國か心の内むねん共中々申ばかりはなかりけれ

第三

かぢはらさんけん付與一るざいの事

扱もその後さだ國はいそげば程なくはや鎌倉になりしかばやがて御前に參りさんゑん申けるやうは扱も下野の住人那須の與一宗高は竹生島に參詣と見へ候がいかなるいこんにやかへるさにそれがしが城に押

寄せ既にいくさに及びそれがしが郎等あまた討せては候へ共後日の御咎めを恐れ陣中を切抜け是まで参り候と誠にやかに申上るらいてう聞召何と申ぞ宗高はいしゆいこんもなきにおしよせて一戦に及たると申か宗高ほどの弓取が左様のろうせきはいたすまし定めてむまのりやいかさとがめにいくさに及びかけ負けてざんげんするとみへて有其だんは重ねて評定あるべきなり罷立とぞ仰ける折ふし梶原御前に候ひしがつゝと出て申けるは御誕尤にては御ざ候へ共さりながら宗高一たんの御暇を申上げす遙々と都近き所まで上洛申事あるはひとへに君をかるしめ申に似たりぢよの掟にても候へば先づ暫く流罪にも仰付られ候へとさゝへかゝればもとより頼朝は梶原が申事は何事もよろしく思召すにより尤梶原申所一々以て至極せり重ねてぢよの掟の道もあれば本領を召し上げ流罪をさせんと給ひて越後の國の住人五十嵐のぶんじ其日の御番に當りしを御前に召され那須の與一宗高をまづ汝に預けおく召つれ下れとの上意なり畏て候とやがてりやうしやう仕りいそぎ御前を罷立おたわらまで出むかへ宗高の下國をば今やゝと待

給ふむざんなるかな宗高は此事を夢にもしらすして本國さしてぞ下られけるこぶんじ與一を御らんじてことばやがてはせむかい對面して上意の趣の給へば宗高聞し召南無三寶扱ははちやめに讒言せられたると存なりさりながら此度竹生島の參詣をあやまりと上意のうへはとかう申に及ぶまじともかくも御意にしたがひ奉るいかに道ふさ汝は一先づ國に下り妻や子供をいかなる所にもかくし置天の恵みを待つべきなりばんじは頼むとの給ひて涙を流し仰せける道ふさ承りせひにおいてそれがしはいづくまでも御供仕べく候へ共一先國に下り御臺姫君をいか成所にも忍ばせ奉りやがて越後に参りあれにて評定仕らんおいとま申す我君さまと心強くも立別れ下野さしてぞ下りける扱宗高はそれよりもこぶんじと打つれ越後の國へぞいそがるゝともかくにもかの宗高の所存のてい口惜しきともなかゝ申ばかりはなかりけれ

第四

道行付若君たんじやうの事

さる程にもりおか源内道ふさはやうゝとして本國

にかへり女房たちを近付てそれがしが参りたると御前へ仰上らるべし承り候とてみだい所のおまへに参り此由かくと申上る北の御方姫君はやがておもてに出給ひ心元なや道ふさよそも何事あるぞとの給へばもりおか承りさん候我君はかやうくの仔細により越後の國へ流され給ふとかたりもあへぬに人々はなきぶしわつと叫ばせ給ひける下色ぶしおつる泪のひまよりもくときごとこそあはれなれいたはしやむねたかどの思ひもよらざるうきめにあひ配所の旅の道すがらふる里の事共を思召しいだされてさこそ物うく思すらん妾がことはともかくも姫は何と成べきとなきぶしりうていこがれなげかるゝ地道ふさ承り御なげきはさる御事にて候へ共たい御心つよくおぼしめせやがて本望遂げ申さんそれがし存るむねの候へば是より信濃の國善光寺のほとりまで一まづ御忍びなされ候へみだいさまとぞ申ける北の御方聞召ともかくも此うへは汝が心にまかすべしいざや忍び行んとて三重ひとま所に入給ふ思ひもよらぬ旅のそら我身の果はうき雲のさそふやいつかまたよにあふみやのめうじんと聞につけてもたのもしやつまのゆくへを

安穩に守らせ給へと伏し拜みたびのうきみの道すがら思ひふかやの宿を過ぎけふこそ爰にからす川浪の高さに打こへて我をばたれか松枝の宿過ぎ行けばうらめしやうする峠をながめこしよもにうきなをさらしな月の光のかげ清みとまりくのあばらやで涙の枕かずそえてあかしくらして行程に名にのみ聞し信濃なる善光寺にこそ着かれけれ先づ御まへに参りつゝつまのゆくへを心靜にふし拜みさて御まへを下向あるかくて源内道ふさはとある所に宿を取り御臺姫君入れ奉りおくり旅のつかれをはらさるゝはや四五日も過行ばいたはしや北の御方はたゞならぬ御身なれば御産の月にやあるならん御心よはくとなり給ひあら苦しやたへまの上むねくるしやとの給ひてつかれなやませ給ひける姫君あまりの悲しさに誠や御枕に立よりてなふいかに母上さまみづからはたまのうへにて候道ふさも御まへに候かまいて御心まどはせ給ふなと御力を付給へば御臺所は其まゝに三重御産のひばをぞとき給ふ御子取上げみたまへば地玉をのべたる如くなり若君にておはします果報つたなの此若やよがよに有し物ならばお乳やめのとをあ

ひそへてみすやきちやうの内にしてさもゆゝしく有べきに思ひの外にさはなくてしづがふせやの内にしてかくあさましきさんやのていわらは、何と成べきともだへこがれて泣たまふ道ふさ承り御なげきはさる事なれ共まづ御えんし共に御堅固成こそめでたけれそれがしかくて有内は御みやつかい申さんとよきにいたはり奉る心の内こそ殊勝なれかの道ふさか心中頼もしき共なか／＼申はかりはなかりけれ

第五

いがらしこぶんじ若君をひろひ給ふ事

是はさてをき越後の國におはします那須の興一宗高はこぶんじ殿のおなさにてわづかの屋形をしつらいてあかしくらさせ給ひしが故郷に残すつまや子は何となりなん物うやと是のみ物おもはれけるあはれなりける次第なり地かくて信濃におはします宗高の北の御方はもりおかを近付ていかに道ふさこよひ不思議の夢を見る善光寺の山門に此若を捨て置け末はめでたかるべきと御僧の給ひしを夢の内にも悲しくて行衛めでたく成とてもいかですてゝは置べきとこ

たへ申せば又御僧の給はく捨ずは重ねてうきめにあひ若もろ共に朽ちはてんとあらたに夢想の有けるがなきふしやあいかわはせんとの給へば詞もりおか承り扱もふしぎの御ことかなそれがしちさやうの靈夢をかうむり候其御僧と見へ給ふは善光寺如來に疑ふ所にあらず殊更此佛は靈夢あらたにましませば佛のをしへに御まかせ候て然るべしと申上る御臺所は聞召さあらば靈夢にまかせんと心づよくも北の方若君を赤き衣に引包み姫君もろ共宿を出山門に立出てと有所に捨て置きなきふしとときことこそあはれなれふしああうらめしの世の中や汝いまだおさなく共みづからをうらむるなかれ下いきとしいけるものことにいるふし子を思はぬ物はなし斯くなしけるも末のよを昔になしてわどのをもよにあらせんが爲成ぞことには如來の靈夢にまかせ爰に捨置きかへるなり末頼もしく思へとて心つよくも捨て置いて立歸らんとし給ふ時いたはしや若君は乳房のわかれや惜しかりけんわつと叫はせ給ふ時きも魂も消へはてゝ又立歸り抱き上乳房を口に入れ給へとせき來る泪のこぼるゝはつらぬくなきふし玉の如くにてふしせんとも更にわきまへ

ずふしゑばし上泪にむせばるゝことばかゝるあはれの

折ふしいがらしの小文治は夢想の告げの有けるとて侍あまた引ぐし善光寺にぞ参られける御臺姫君御らんにて扱若君を捨ててひととすゝきにかくれいてことのていを見給へば小文治は馬より下りまづ御前に参りつゝ心しづかにきねんして扱下かうの折ふし山門を見給へばよにいつくしき小人有我はいまだ子を持たず是ぞ夢想のしるしなるらん我子にせんとの給ひて侍共に抱かせて悦び國へぞかへらるゝ御臺姫君はすゝきの中よりかけ出て跡に残りしそうしき一人近付のふことば只今の大名は誰人ぞと尋ね給へばさん候越後の國の住人いからしの小文治殿といひすてゝぞ通りける地みだい姫君聞し召跡をのみ見送りてかゝる人の手に渡り下いる果報ゆゝしきいる我子やな上いるとは思へ共かなしくて心もそゝろに狂亂して上おんのふ其子はやるまじきはや返してたべやたびの殿とおめきさけばせ給へ共はや行衛も見へざればみだい姫君取付いて道のほとりにたをれふしなきふし是はくゝとばかりにてこゑを上てぞ歎かるゝみだい所の心の内あはれ共なかゝゝ申ばかりはなかり

けれ

第六

もりをか源内はやうちをさる事

かゝりける所にもりをか源内道ふさ御向ひに出けるが此由を見るよりもするゝと立寄りのふ何をなげかせ給ふぞや地北の御方聞召御泪のひまよりいかにもりをか只今いがらしの小文治殿と云人か若を拾ひ行き給ふあまり別れのものうきになげきゑづみて有ぞとてなきぶしかきくどき申さるゝことばもりをか承り扱もめでたき御事かな其こぶんじ殿こそ我君のおはします越後の國にて候なり偏に是は善光寺の如來ののふちううたがひ更になし地やがて御代に出給はんといさめ申せば北の方少心を取直し扱姫君に御手を引れ下なくゝ上おんはるいほり三重にかへらるゝ是は扱置梶原平藏景時はちやの厄者を近付ことばいかに定國聞給へ扱も我君頼朝はなすの與一宗高を一たんのこらしめに流罪に仰付られしが近き内に召かへされんとの御いきとをりとみへて有宗高きさん仕らばごぶん我等の滅亡なりいざや小文治を頼み與

一をひそかに打せ申さんと深く内談してやがて文をぞかいたりけり其狀に曰く那須の興一宗高をながながの御預けさこそと思ひやられて候哀れ願はくは宗高をそれにてひそかに誅して給はれかし君の御前は病中にて相はてたるとひろう申さは後日のとがめも候まじ此御恩賞にはいがらし殿の身の上にまぜんの事も出きなば景時定國二人の物の御命にかはるべし末代も御はうしに萬事は頼み奉る景時判定國とかきとめはちやが中間に申付越後の國へぞつかはしける御まへを罷出三重越後の國へぞ上いそぎける去程に道ふさはみだい所においとま申ことのやうを聞ん爲是も越後に下りしか道にてかの飛脚にはたと行あいもりをかきつと見ていかさま不思議の使ぞと思ひ立歸りなふ御ぶんは何方へ通る人成ぞ我も伴なひゆかんと申せば聞いてそれがしは美濃の國の住人はちやの冠者より越後へ參ると申けるもりをかはつと云より早く首打おとし文を奪ひ見てあれば我君打つべきたばかりなり天のおしへと嬉しくてか程のせうせきあるは是より鎌倉へや參らん又越後へや下らんと案じ煩ひしがいや越後に下りこぶんじの心を

引きみばやと越後をさして下りける心の内申ばかりはなかりけれ

第七

若君ぐそくき井けんぶくの事

かくて其後いがらしこぶんじは若君をひろひ取せんわう丸と名を付て花の如くにもりそたて月日重り今はや七歳にぞなり給ふある時に小文治は家のらうとうにあやせの源五を近付いかに源五物を聞けあのせんわう丸七歳になりければはじめて具足を着せ申さす弓矢に名を得しつはものをぐそくの親に頼み八幡をくわんじやうし武者になさんとおもひ立たれ人を頼むべきと仰ければ源五承りたれくと申に及ばず是に流されおはします那須の興一むねたか殿こそ弓は揚由が跡ををい數度の功名たぐひなきはまれの勇士で候へば宗高殿を頼み給ひて然るべしと申上るいがらしげにもと思しめし其儀なればなんぢ參りて此由を申えやうし奉れとありければ承り候とて御まへを罷立て宗高殿へぞいそぎける程なくしたくに成しかばやがて對面仕り件のあらまし申上る宗高聞し

召仰にては候へ共ごぶんも思ひわけても見たまへ我
は弓矢の冥加と盡き日頃忠節あだとなり流罪のうき
身と沈む身の具足の親にならんこと今はしき次第な
り只それがしはごめん候へとよく／＼申てたべと有
あやせ承り御ちやう尤にて候へ共御身咎なきことは
鎌倉殿も御存にて候へば只一たんの御いとまを仰ら
れぬとの御あやまりにて當座の御勘氣にて候へば何
かはくるしう候へき幸ひこれに御入候を小文治もよ
き折柄と存せられおほそれながらそれがしを遣はさ
れ候へば何と御辭退候共せひにおいて頼奉ると再三
強いてぞ申ける宗高聞召此上は力及はずともかくも
小文治殿の御はからいにまかすべきと仰ければ源五
めんぼく施しやかたをさしてぞ歸りけるおまへにな
れば此申上るいがらしな／＼めに思召吉日をあらため
玄ゆ／＼のほうらいかざらせて八幡をくわんせうし
宗高の御參りを今や／＼と待たまふ去る間宗高は時
のよそをひ引つくりい小文治やかたに出らるゝいが
らしいそぎ出むかひよくこそ來り給ふ物かなさらば
こなたへとの給ひて奥に玄やうし奉り互ひにしきだ
いおさまれば源五具足を取持て御まへにさしをけば

むねたか若君を近付てやがて床凡になをし置具足を
着せさせ給ひける其後にたかひば取て引結びいかに
せんわう丸我はかやうのものなれ共さかめ成しいに
しへは君に忠ある侍なり戦場にかけて出弓矢を取ての
勇力はそれがしにあやかり給ふべし又果報のところ
は御親父小文治殿にあやかり候へと少し立のきつく
づくと打ながめ扱もゆゝしき若君や鎧つきのけなげ
さよと我妻の胎内に残し置しみどり子が男子にても
生れなば此若君と御同年にて有らんと思へば昔しが
思はれて包むに餘る泪はよそのみる目もあはれなり
おつる泪のひまよりもやう／＼心を取なをしさてさ
て面目なやこぶんじ殿最前よりも辭退申所はこゝの
ことにて候我身の思ひ深ければかゝる祝の座敷にて
今の泪の其ふせいさぞや心にかかけ給はんまつびらゆ
るし給ふべしさりとはゆるしたび給へ小文治聞召
誠に御心底のほどおしはかられて候とて共に泪を流
さるゝ其後源五は御盃を取持て宗高の御まへに置宗
高は小ぶんじへこぶんじはまづした共に宗高へと互
ひにしきたいましませばおとなしやかに若君は口ん
／＼宗高聞召せ其盃をそれかし頂戴せんと仰ける宗

高聞召ゑゝやさしやしほらしや誠に十歳の翁と此わかの事成べしさらばりよがい申さんと盃を取上わか君にさし給ふわか君は床凡より下り給ひつゝしんでおし頂き給ふ其時宗高は錦の袋の内よりも矢を一筋取出しいかにせんわう丸そも此矢と申は一とせ平家御誅伐の御時四國八島の沖にして扇のまとをゐておとし其名を雲井に上しやなれば子孫にゆづらんが其爲に身をはなさず持しか共御身に是をゆづり申とてわか君にぞ渡さるゝわがこに重代をゆづるとしらぬ親子の心の内こそあはれなれともかくにも世の中の物のあはれは是なりとて皆感せぬものこそなかりけれ

第八

與一こぶんじかまくらへ下り給ふ事

かゝりける所にもりをか源内道ふさはやう／＼として越後に下り小文治殿の門外に立より番の侍を近付それかしは鎌倉よりの使なり此狀上へ上てたべといふ家の物承り小文治殿に奉るいからし怪しく思召急き開いて見給へば宗高打て參らせよと梶原はちやが

連判なり是々見給へ與一殿景時定國がかやうの文を遣はす事はぞ訴訟のたねならんもづはちやが使をおつかへし申さんとやがて表に立出給ひやあなんぢははちやが使なるか扱も／＼景時定國は犬にも劣りし侍なり宗高ほどの弓取をやみ／＼と殺せと思ひもよらぬ次第なりいそぎ歸りて此旨を念頃に申せとてはつたとにらんでの給へばその時もりをか涙を流しあつはれ忝の御心や此上は、何をかつゝみ申すべき我ははちやが使にあらず宗高の後見もりおか源内道ふさと申ものにて候道にてはちやが使を打て捨て文を奪ひ取御心を引見んため是まで參りて候なり主君宗高の御事をばんじ頼み奉る又一とせ善光寺にて拾ひ給ひし若君こそ宗高の胎内にて別れ給ひし御子なりかゝるよしみの御なさけに宗高の誤りのなきとをりごん上なされて給はれと鬼のやうなるもりをかも御まへ共はゝからず涙をはら／＼とぞ流しける小文治聞召扱は御身はもりをかなるか宗高も是にましませばいそぎたいめん申されよ是へ／＼との給ひてやがて座敷に出ければ宗高は御らんじてやれ汝はもりをか成かとして嬉泣にぞなかれける其時小文治はせん

わう丸の手を取ていかに宗高殿是こそ御身の胎内に
て別れ給ひしわすれがたみの御子にてましませば親
子のたいめんおはしませ進上せんと給ひてわか君
をぞ渡さるゝ與一夢の心地にして扱は我子でましま
すかたねまきそめしなでしこの草のゆかりを見るか
らにうゝつと更にわきまへずゑばし泪にむせばるゝ
落る泪のひまよりもいかにせんわう丸こぶんじ殿の
御やういくかまいておろかに思ふなよくゝ孝行
仕れと髪かき撫て申さるゝ小文治聞召あゝおろかな
り宗高殿子孫に傳はるぢうだいを我子としらで譲ら
れしは是ぞ親子の深きゑん御よつぎに奉るかゝるめ
でたき折からにいざ鎌倉に罷り下り御らうちうへ内
談して御よに出し申べしはや打立給へと云まゝに供
人あまた引具して悦び勇みてそれよりも鎌倉さして
ぞいそがるゝはや鎌倉になりしかば宗高仰せけるや
うはいかに小文治殿それがしは佐々木の四郎高綱と
少しよしみの有中なればまづ佐々木に對面して事の
次第をないだんせんこなたへ御入候へとて佐々木の
やかたへいそがるゝ程なくしたくになりしかば案内
かうて内に入高綱に對面あるはじめおほりを語りつ

つかの文を見せ給へば高綱御らんじてよくこそ參り
給ふものかな先以て小ぶんじ殿是までの御出は近頃
まうちやく申て候宗高とそれがしは兄弟よりも深き
中なりそれをいかにと申に父にて候佐々木のげんざ
うよしとも御手にしよくしたいけん門の合戦に打負
けおちうどゝなりし時おぢにて候ひでつぐそれがし
が五歳の時下野へつれ下り與一殿の御親父介高殿に
あづけ置十六歳のくれ迄一所にそだちきうゆうの
よしみに一命なり共參らせん其うへ梶原にはあめが
下のしよ侍やしんのはさまん物はなし我々かく口て
の内御け人五十三人はかねて内談申せしなりはちや
のくわんじやは數ならず先梶原を申請けざんしんの
口をしづめんと侍一人近付御家人五十三人に内談す
べき事ありとて一ノつかひを立られたり承り候と御
まへを罷立て一々三重まだいにふれにけりかの佐々
木の心てい頼もしき共なかゝ申はかりはなかりけ
れ

第九

大名五十三人連判の事

去程に五十三人の人々は何事やらんと我も／＼と佐々木のやかたに出られけり高綱立出たいめん有かたがたを是まで申入るゝ事よのきにあらずかやうかやうの仔細ぞと人々を呼び出しめん／＼に對面させ扱かの文を見せ給ひ是々御覽候へ方々かやうに梶原がおのれが心に入らざる物は口にまかせてざんげんすかくては後々は人のたねも有まじきそれがし一人ひと／＼の爲に立出て此あらましをごん上し梶原一門が首を由井の濱にさらすか又我々いつけつみに沈むかせひのあんひを極めんと存が扱かた／＼は何と思はるゝぞと申さるれば千葉の彦太郎ひざを直し誠に與一殿一人に限らず景時がざんげんにて亡びし人々數をしらす君の御きしよくよきとても彼をその儘置んこと武士の本意にあらずやとよに頼もしくぞ申さるゝ一座の人々是を聞きもとよりにくむ梶原なれば皆尤とどうじつゝさゝめきわたり悦びける其中にもかさいの六郎きよしげは梶原とげ玄やくについてしたしければひいき顔にすゝみ出なふ是はわけのなせる所なりさすが景時などをほろぼさんはことの大じ成べし(不明)先づ家老の衆へも内談あつて然るべ

しとぞ申ける秩父の六郎しげやす進み出ていかに清しげ四十に余りし高綱を若氣のむりとは何事ぞ其上家老の衆とても和田ちゝぶ千葉かつさ四人なり先づ朝いなな三郎是にましませば義盛とだういなり上總の介殿は佐々木殿のしうとなり千葉殿はちやくし彦太郎是に候へば是以て同事なり父重忠が名代にはかひ／＼しくはなけれ共重保これに控へたり何のさばりの有べきぞたとへ天命つきはてゝ此こと申あまりて身はなき物となるとも思ひ立たる一念のひるかへすべきにあらず言上申かなはずは梶原がたちに亂れ入り親子のものが首を切てすて腹かき切て死んこと何のしさいの有べきとさもいさぎよくの給ひしはげに重忠の一子やとほめぬ物こそなかりけれきよしげ心に思ふやういや／＼何となくさしきを立此ことを梶原にしらせんと思ひ玄やく取なをし申やうげにそれがしがあやまりにて候めん／＼の思ひ立給ふ上はいかではからひ申べき先したくにかへり明日すぐに御所へ上り申さんとさしきを立んとする所を朝いなな三郎取て押へやあごへんがけしきたゝならず重保がことばにさつそくしたかい此事梶原にしらせん

と思ふ所存あらはれ見へて有此義秀が見るめはちがふまじ此迄つふしづまる迄は弓や八幡大ぼさつごふんのやどへはかへすましと小かいな取てひつたて狭き所におしこめて高綱の後見あらおか源太左衛門宗つぐに預け置有し所へ立かへりはや打立や尤なりとてにたんの四郎が筆取にて一々みやうじをしるしけりまつ一番に佐々木の四郎高綱千葉の彦太郎つねうち秩父の六郎重保あさいなの三郎義秀三浦平六兵衛義村江間の小四郎よし時つちやあいきやう一でう板垣へんみ竹田おがさはら川越の太郎重ふさ武藏の七黨お山の一黨都合御けにん五十三人訴訟かなはぬ物ならば一所に思ひ定めんと連判きせうをかきはにやいて水に人おの／＼五たいにしつかとおさめ是をさいごと只一筋に思ひ切御前をさしてぞ上らし此
人々の勢いかなる天魔やくじんもおもてそばめておちぬべしあつはれ頼もしき勇士どもの所存どもやとみなかんせぬものこそなかりけれ

第十

各もんだう井そじやうを上る事

去程に五十三人の人々は佐々木を一人大将にて御前をさしてぞ上らるゝわだちゝぶかつき四人の人々は此事をしらぬていにてさいせんより殿中にぞつめ給ふ去間頼朝公記録所に出させ給ひ此由を御らんじて方々がていはたゝならず何事か有との御詮なり佐々木四郎とかうに及ず一通のそせうを取出し御前にさし上るたかはしの判官承り謹んで讀み上る其文に曰く風玄きりにあくうんのうごかし日月の光を奪ふ纔臣國にはびこれば君のちよくたいをばうすよつて政道明かならん事をこふしやうそも／＼過ぎつるりやうわう元年の頃おい那須の與一宗高宿願のしさい有近江の國竹生島へ參詣仕候所に美濃の國の住人はちやの冠者定國かりすな取に出けるきざみ定國に行あひとつ□のかいを□□きしを宗高物まふでといひ一ツには君の御前をはゝかりかんにんの胸をなすり歸國におもむき候きざみ定國多勢を卒し道に待ちうけすでにいくさに及候へ共宗高□んりよにかなひ多くのかこみを切ぬけ罷下り候定國後日の御咎を恐れ鎌倉に走せ參じてまうとの梶原を頼みざんまんと申しへ共君御同心もましまさゝりしを梶原が一言に及び

るざいのつみに沈み候然れ共ついに御ゆるされを蒙るべき梶原玄んに思ひ入りかくの如くの文を書きいがちしの小文治へさし遣はすといへ共いがらし禮義を思ひそれがしがたちにまいりないだん仕るばんじのていをけんだんせしむるに梶原かふるまひあくといひおごりといひ表裏いんやうの働きをもつて君の御かん厚く候へば我々共が身の上も何事か申上んけふは人のうへあすは我が身のうへをや申上んと何もやしんにはさみ候へば早く五逆の罪に伏せられけんりんあきらかならん事をこいねがふ所の連判五十三人件のごとし佐々木の四郎高綱つゝしんで申上ると高らかんぞ讀み上るらいてう聞召いかに家郎のめんくことの次第を聞たまへそれ語に曰くはやしの内にたか木は風にやぶれ人すぐれて忠ある武士は人のそねみ有とゑるせり今梶原が事成べしかれけもきは頼朝ふしきの中にかくれし時危うき命を助け其後源平の戦にも一命を塵芥よりも輕んじ宇治川一の谷やしまだん浦の合戦にもすこむる忠を盡し今とても頼朝が爲めには身をも命をもつゆちりほども惜ます天下を大切に思ふ物がいかで左様成さんげんなどを

めぐらさんそこつな事を申なと顔色變つて仰ける佐々木承り扱は天下に忠の武士は梶原一人にて候なく申高綱も身に相應の忠を仕り候先みちのくの伊達の大木戸の先陣宇治川玄んしう諏訪合戦の先陣其外さきがけぬけかけ分捕功名梶原はどこそ御座なく共すいぶんはげみ候ことには石橋山の合戦にかけまけさせ給ひ大ば兄弟きびしく追駈け奉り既に御自害に及び給ふをそれがし一人蹈止り大勢をかけちらし防き戦ふ其ひまにといひの杉山まで落ちさせ給ふ其時の仰には頼朝天下を取るならば日本半國はゑさせんと誼有しを早くも御忘れなされ候物かなよく御思案あつて御らんせよ梶原は此頃平家方よりうさんのいたし君御一代の侍かく申高綱は多田の満仲よりそれがしまでは六代君までは七代普代相傳の侍なりさればきのふけふ参りたる梶原は玄んじつ君の御事を大切に存せんやよく御思案候へとはいかる所はなかりけり君もことわりとはおぼしめせ共猶も梶原を御ひいきにて扱景時は人の上をたびゝさんげんしたる證據ばし有か其時千葉の彦太郎しやく取なをしさん候景時がさんげんせし人々は先御舍弟範頼同

よし經御いとこやすかたの三郎よしさだ竹田の太郎
よしのぶ其外國侍は申に及ずさればおのれが氣に入
たる物は御前にてもよろしきやうに取なし心に入ざ
る物はあしさまに取なしとがなき物を流罪死罪に行
ひ候ばんみんいこんに存すれ共御まへをはかり申
上る者もなしたさせかいの惡魔は梶原一人にて候か
ほどぶだうの景時をよろしき者と思召す御所存こそ
口惜しけれとめん□□しをいらゝげ血眼になつて
申上る君聞召いや／＼さやうにてはなしに梶原
が申とて我兄弟と思ひかへ咎なき者をほろぼさんや
其者共がむほんに於て疑ひなしよしそれは過ぎつる
こと那須の與一宗高は我に一たんのことわりもなく
都近き所まで上りさるとがにより流罪にしづめをき
けれ共方々玄きつて申うへはとがをゆるすぞ罷立と
ぞ仰ける秩父の重保すゝみ出て申されしは宗高は僅
の御とがめゆへちよの掟の爲一たんの流罪なれば御
ゆるされを御恩とも存せず候たい我々は大惡人の梶
原を此たび申うけん爲れつぎ五十三人此そせうかな
はずば二度したくにかへらじと連判きせうを書き罷
出候かく申上るだん全く梶原をそねみ申てごん上仕

るにあらずかれかくて候はゞ萬民怨みをふくみ天下
もおだやかなるまじと君の御爲を存じ命にかへてご
ん上仕候弓矢八まん大ぼさつ侍めうりもつき候べし
ひやうりを申に候はずせひの次第を聞召わけられ梶
原を我々に下さるゝか又かけ時一人に五十三人を思
召かへられ切腹を仰付らるゝかとかくの上意を承り
候らはんと申切てぞいたりける頼朝聞召其儀ならば
梶原を召出しことの仔細をたづぬべし先かた／＼は
したくにかへられよとの御諚なり朝いな三郎たま
りかねつゝと立てこはのび／＼なるでういかなおふ
げに心へたり我々が申上るだん皆あしく聞召させ候
五十三人の者共に一どに腹を切らせん事よのはゝか
り思召何となく先かへし折々はよのとがを仰かけら
れ五人三人づゝせつかいあるべきとの御思案とおぼ
へ候よしそれとても思ひもふけしことなれば死する
命は惜しからねど大惡人の梶原をらく／＼とうきよ
に置我らばかりはてんことめいどまでの迷ひなりな
ふ方々は是に暫く待給へよしひで一人梶原がしたく
へ走せゆき首ねぢ切て只今かへり申さん其首を見た
まひて今生のまふしうをはらし立ならんで人々よ一

所に腹を切べしといふより早く立出る君御らんじてやあ暫くとの給へ共きかぬていにてかけ出るよしもり見給ひていかに朝しな先づ上意を承りよしひでいかにと申さるゝさしにも勇むあさひなも父のことばの重ければ立歸るれいぎの程こそ殊勝なれよしひでのいきほひあつばれがうなるさふらいやとほめぬものこそなかりけれ

第十一

さだ國さいご井與一本領を給りまよち入の事

君は此よし御らんじていかにかちうのめんゝ若者どもが我儘を申にしづめ給へと仰ければ千葉上總よしもり三人の人々申されしは御ちやうにては候へ共かれらが申上るだん一々理に當つて候へば何と申べきやうも御ざなく候たとへば理非はともあれむたいにまづめよとの上意ならば切腹を申付るより外はたしなしいかに若者共梶原はたゞ一人にて其身にあやまり多けれ共君大切に思召かたゝは五十三人にてしかも道理を持ちながらかく御承引なき上は五十三

人を梶原一人に思召かへさせ給はん御きしよくにあらずとかふの事をいはんよりはゝかりながら御前にて一々切腹仕り君の御ふくりうをやすめ申せ若者共を先立てあとにながらへ我々がうきよに有て益もなし先なんぢらがかいしやくしてつゝいて腹を切べしとひたゝれのつゆを結んで太刀の柄に手をかけ給ふ重忠御らんじてまばらくあゝ不覺なりかたゝ道理至極の身を持て腹切らんとは何事ぞまよせん鎌倉ばかり日月の光有べきかいざ筑紫の方へ打こへ世の中の善惡をよそにてみ聞申べし我々こゝを立のかばおそらくは鎌倉に残る武士は有まじさあらば君より打て下らんは必定なり其時うらみの矢を一矢づゝ仕り扱一所に腹を切べしはや立たまへ人々と一どに座敷をはらりに立頼朝おどろき給ひ重忠の袂をおしとめ誠に一人ならず二人ならず頼朝を大切に思ひことばを揃へ申上は梶原悪人に疑ひなししづまり給へ一ごん申ことわり有石橋山の合戦に頼朝伏木の中にかくれしに景時が助けしゆへ天下の主とはなりし頼朝が一世の内に梶原が身の難あらば命にかわらんと契約あり今一ど景時が命を頼朝にたび給へ明日にても梶

原いぎに及びし事あらば其時は心のまゝに行ひ給へ
せひにおいて此度は我にはうしんし給へと忝もお手
を合せ給へばるぼしの先を地に付一どにあつとぞ感
じけるさ程の御心さしにて候はゞ誰かはいぎに及ば
んと皆々玄んいをはらしける君はなゝめに思召やが
て宗高を召れいかに宗高ながくの流罪さこそ無念
に思ふらん此たびのけ玄やうには本國下野は相違あ
らずはちやのくわんじや定國を人々のはらいせにち
うばつせよとの上意にて御ざを立せ給ひければ皆々
おいとま給はつていそぎお前を罷立三重本所くにか
へられたり去る程にかくて宗高は大せいを率しは
ちやがやかたへおしよせ関をどつとぞ上にける城の
内には上を下へとかへしけるされ共定國やぐらに上
り何者なれば浪籍やなのれきかんと呼はつたり其時
宗高一ちにこまかけ出しに定國めづらしやご
ぶんすこむるらうせきして流罪のうき身となしおき
しが天の玄ゆんくわんめぐり來てかうべをはねよと
の上意をうけ是までむかつて候なりとくく腹を切
るべしと上おんにてなのられける定國大きにおどろ
き上いなければはじとはらかき切て死んだりけり

やがて首をとり宗高の御目にかくる今こそ本望とげ
たりとて宗高はみだい公達にたいめん有御よろこび
はかぎりなしさあらばしよち入申さんと本國に下り
かすのやかたをたてたらべ二たび榮花にさかへ給ふ
千秋ばんせいめでたきともなかく申ばかりはなか
りけれ

寛文參癸卯年六月吉日

なすの與一竹生島詣終

頼光あともろん

第一

しよぎやうむしやうとひきつゝほだいをしらするゑんじのかねしやうじやひつめつ四き天べんのはな
の色定めなきはしやばせかいこゝに六孫王の御まこ
たゝのまんぢうの御ちやくしせつゝのかみみなもと
のらくわうはすどのげきしんうちたいらげへいあ
んじやうに御所をたておくりていとをしゆごし申さ
るゝゑかるにいか成御ゑゆくうんにやすきぬるきさ
らぎの頃よりも御こゝちれいならずさるによつて御
しそくよりちかきやうをはじめ御家のしんかむさし
のかみわたなべのつなはりまのかみひらいのほうし
やうとうたうみのかみうすいのさだみつするかのか
みうらへのすへたけわたなべかしやていみたの源太
ひろつなそのほかさいきやうの大みやうにちやこて
んにあひつめて御きけんいかゝとうかゝひけるかく
て卯月さつきの頃は三重したいにおもらせ給ひける
さてそのゝちに四天わうひとりむしやをはじめ御家

のしよさふらいのこらず御ひろまにあひならび御び
やうきのありさまをとりくひやうちやうまちく
たりしかる所へといはら入道御ひろまにまかり出さ
てもきみの御びやうき何共はかとらざるにより三で
うの大なごんみつすへきやうをもつて御跡めのぎを
さうもんなされ候へばいこくにもさやうのれいおほ
き事なればとかく國おたやかなるやうにあひはから
へとのせんしにて候間をのくくふうをとつくとお
さめ天下の御じつけん御じつしよりちかきやうか又
は御しやていよりのぶこうしかるべきかしんていを
のこされすこん上有べきとの上にて候といさいこ
まかにあひのべてをくをさしてぞ入にけるいつれも
大じのせんぎなればざちうひつそとしづまりける時
にわたなべあふぎを取なをし人々はなにと思ひ給ふ
ぞ是は一大事のひやうぎなりしかりといへどもおた
づねあるを御返し申さてはかなふましまづ此わたな
べかほつする所を申へしもつ共御子よりちかきやう
しかるべきと申たけれ共よりちかきやうは色にみた
れさけにちやうしばんたん我まゝなる御心入なり此
君天下の御せいたうおこなはせ給はゝばんみんのな

げきよのくるしみあつて御家のめつほうとをかるま
しきとぞんずるいつれもはなにと思ひ給ふぞとさし
きをきつとみわたせばほうちやうきんときさだみつ
すへ竹めとめをきつとみ合せわたなべどの、申さる
るごとくよりちかきやうの御身持はたうのげんそう
とや申さんけつちうにやたくらべんこくどをみださ
んとおもは、此君しゆこにしかるべし又天下長久あ
らしめんとおもは、中々むようのいたりなりされば
君もけんさいの御子と又は御しやていよりのぶ公か
いつれかとそれと上いはなけれ共頼光の御しんてい
にもよりのぶ公しかるべしとおほしめさるゝはいち
しるしとはゝかりなくそのべらるゝ爰にわたなべか
しやていみたの源太ひろつなはひざたてなをしにいふ
やうは何と候かかたゝはげんざいの御しそくより
ちかきやうをさしをきよりのぶ公のせひたうよから
んとはよにあたらしきひやうぢやうかなをのゝは
よりちかきやうにいか成しゆくい有てかゝるせんき
は候ぞせけんのひはんもあるべきことなりよくゝ
くふう候へとにがりきつてぞ申けるほうしやう聞て
いかにひろつなそれ天下は一人の天下にあらずばん

みんの天下なりたとへば五人十人の子を持ても其子
共あく人なればよをゆづらぬがほうぎたり是たみあ
んせんこくどゆたかならしめんためにて有すでも
ろこしのきやうわうは八人の太子をさしをきいやし
きたみのしゆんをあけてくらゐを御ゆづり天子とな
し給ふ其せんれいはかすおほしことによりのぶ公は
頼光の御しやていよりちかの御ためにはおちにては
ましまさずやしからば何のへたてかあらん我々は御
家ひさしかるべきことを思ひてのせんぎなりとぞ申
さるゝひろつなかさねて申やうおろか成いひことや
其ぎやうしゆんはたいたう四百よしうにもたぐひま
れ成大せいじんそれをじやうぎにはすんぼうはづれ
申べしまさにせいりのりう王はけんのくひを切太子に
國をゆづり給ひしれいも有よりちかいまだ御じやく
年にましませばあしき事をはめんゝのからうやく
にかんけんあり道をみちにたくされんこそしんじつ
のちうかうならんとぎを打てぞ申けるきん時いらつ
てすゝみ出いかにひろつなさなきだにあくにはうつ
ろひやすき人心よきを手本にせずしてあしきをじや
うぎにせよとは心へがたき事共なりさればよりちか

きやうにはそれがし御物のぐをきせ奉りし事なれば
よじんよりたいせつにせんすれ共よりちかのあくぎ
やくはゆめ／＼もつてなをるまじとあざわらつてぞ
のべらるゝいやそれはさもしきん時とのたいばご
ときのあくにんだにすゝめによつてぶつちに入した
めしありましてよりちかはそれほどまでは候まし心
なきさうもくもたむれはなをるならひ有たゝ／＼か
た／＼はよりのぶと一みのやうにぞんし候とこみ出
々申けるわたなべあまりにたまりかねやあすいさん
なりひろつななんちか申はみなこと／＼くあくしな
りかく五人の人々はすねん天下のしつけんをかうむ
り御家長久たみあんせんと心かけ五じやうをもつて
みをくだくかゝる大事のひやうちやうをおことらか
ちゑのたけにおよはんや小鳥共かあつまりてわしを
さみするしんていは近頃もつてりよくはいたり罷立
とぞいかられるひろつなもとよりおこりものやあ
こふんも我もかはらぬちゝか子にてありさきにむま
れてあになればとていかでか所存のかはるべきおと
とか打たちあににたつやたゝざるやとたちのつかに
手をかくるこはすいさんなりたちふみをつてすてん

ととんでかゝるを人々取ておさへさりとてはおとな
げなし玄つまり給へわたなへひらに／＼とせいしつ
つまづひろつなをかたはらにおし入るつなは大きに
いかりをなしこはきこへざる人々かなかやう成あく
人めをたすけをけばわたなべが家の疵なりまつたく
人手にはかけましましき爰をのき給へはなし給へとふり
きり／＼かけ出る渡邊がていたらくたゝやくじんも
かくやらんと扱おそれぬ物こそなかりけれ

第二

扱も其後みたの源太ひろつなはさしきのむねんはれ
やらずしよせんたゝよりちかへ御むほんすゝめつゝ
天下をくつかへさんとおもひしかいや／＼いにしへ
よりおやとたゝかひしうにゆみを引ほんいをとげた
ることかたしなまなかにおくれを取てはまつ代ま
でのかうなんなり是をぼだいのだねとしてしやばの
きづなをはなれつゝしづかにうきみをおくらんとも
とゝりきつて西へなげしよ國しゆきやうにいでにけ
り此ことよもにかくれなくよりちかきやうは聞召御

めのとのすきたの平八時かとをちか付扱もみたの源
太ひろつなはあとの事に付四天わうとかうろんし
よをうらみてとんせいす是に付てもよりちかゝ身の
うへおあんするに父らいくはう我をみかぎり給へは
こそおぢよりのぶとそれかしといつれかあとのめにさ
だめんとからう共にしろふおほせはなけれ共よりの
ぶせいたうよからんとおほしめさるゝ所なり其上四
天わうひとりむしやかよりちかをさまゝにそしり
しゆへにおぢよりのぶにけんいをうばはれ此めんぼ
くいかゝせんもはや此うへはいづくへもひきこもり
いさぎよくうちじにしかばねはやぐはいにうづみ名
をはくもゐにしらせんとやがてきんじゆのしよ侍三
百よにんめしぐしてしのびゝにやかたを出るちせ
んさしてぞ三重いそかるゝはやそま山になりしかば
はた馬しるしをたてならへよりきのせいを待給ふさ
ればよりちかきやうたぐひなきあく人なれ共たしな
きていにみへけれとも今はらいくはうの御かんきを
かうむり給へばたれか心をつうすべきたゝ愛かしこ
のあふれ物のふしのほかよりかせいの者はなかりけ
りよりちか御覽していや只人をたのみていくさをせ

はこそ日頃のよしみをひるかへし道をしらぬぐにん
らは中々なきこそましならめ我一せんのはんいをへ
はみなわれさきにときたるべしもとより此そまやま
は四ほうになんじよをかゝへつゝたぐひなきやうが
いなければいくまんぎにてせむる共すこしもあやうき
事はなしさし取引つめいおとしてかたきよはらばし
ころをかたむけどつとかけまつかうたてわりかたて
きりせうぎたをしはらいざりをつゝめゝきるなら
ばうき世のなぐさみこれならんとかんらゝとうち
わらひきどさかもきひしらんくゐそのしなゝにげ
ぢをなしよするかたきを三重今やゝと待むたり此
事くらくにかくれなくらいくはうの御前には四天王
をめされつゝ扱もよりちかをのれかひぎをうらみず
してらいくはうにふそくをなすこそはかなけれおや
の身としてたゞ一人の子をみかきはよつくあしき
と心へぬ天めいしらぬくにんめを時をうつさずふみ
つぶしまつだいまでのあく人のみこりにせんとさか
たのきんときにざいきやうのしよさふらひ五千よき
のちやくたうをくだされ大しやうにぞふせらるゝき
んとき上いをかうむりわうもう二ねん五月廿六日く

も井のそらもゆたかなる月のみやこをうちたちて三重
重ちせんさしてぞいそぎけるよを日についでうつ
ほどにはやそまやまになりしかはとうざいなんぼく
一だうにときをとつとぞあげにけるかくてきん時は
たゞ一もみにとしきつてけぢをなしければ城の内に
はてきをきどへつけまじとてさきをまはしわつて出
大手からめて入みだれ三重ひはなをちらしてたゝか
ひけるされともよせてはたせいといひことにはめい
たいぶそうのきん時がくんほうの手だてをつくして
もみたつればじやうちうのぐんせいとものこりずく
なにうたれけりよりちか大きにいかりをなしあさま
しのふせいやな二のせはなきかあれけちらせとのた
まへばひろはるうけたまはりいでそれがしざんしに
しやうりをつけ申さんりよくわいながらひろはるか
はたらきを御けんぶつ候へとかれ木にはとのとまり
たる家のしるしを下人にもたせゆらりと立出て
われは是二のせの源六ひろはるなりことあたらしき
やうなれども扱も此さし物はわれらがせんぞ二のせ
のくわひりやうしゆくくはんあつてうちかみ八まん
ぐうへさんけいせしむる所に一ぞく共にはかにぎや

くしんをおこしあとよりをしよせ來りし時くわいり
やうあたりをみればかれ木にはとのとまりてあり是
ぞ八まん大ほさつまさにしやうちきのまことをてら
し給ふとらいはいしたせいのなかへわつて入くんで
をちてはくびを取ておさへてはねぢくびしいきをも
つかずむねとのくびを八ッうち取くだんのかれ木の
ゑだにかけ其外のぐんせいをあきのこのはとうちち
らしきうなんをはらした事是大ぼさつの御めぐみそ
れよりも此かた代々家のしるしとすされは中につく
りしはとは八まんの御しやうたい一ねん一ふつこし
んのみだ八ッのえだは八そうじやうとをかた取なり
心さしのともからはかけいで此木のえだにかうべを
つらぬきむいのみやこにおもむけと大をんあげてぞ
のゝしりける時によせてのちんよりも今本の源六げ
んないとなりのりに二のせどのにてましますな花ま
ちゑたるげんざんすはまいりそふと二うち三打うつ
かとみへしが二人は四ッになりてぞたをれけるやが
て首をかきおとしゆきの内よりさくばいくわくれな
る打まかふもゝの花とこすへにこそはかけにけれ其
後よせてのちんよりもうのはなおとしのはらまきに

くはかたうつたるかぶとをきたむしや一きしつくと
と立出て是はごうしうのらう人みしなの兵こもとは
ると云ものなり二のせ殿のはたらき日比うけたまは
りおよひたりそつとひけんいたさんとはしりかゝつ
てきりむすぶたがひになをへしたち打のめいじんな
れば上だんだんにからんで付てめぐればひらりと
しさりうけつひらいつ爰をせんとはげみしかもとは
るなにとかしたりけんもみちのめつけをあやまつて
ゆんでのたかもゝはらはれてのつけにかへす所をく
びちうにうちをとしさしもめいよの見しなとのうき
よのひまをあけほのゝ日かけにきゆるあさかほの花
のくひそと打わらひ同ゑたにそかけにける木のめの
小太郎みるよりも花とみながらちらすはぼうじやく
ぶじんなりときつてかゝるをつゝといつてがひつか
みかしこへとつとをしふせくびふつとかき切てをの
れかぶんざいにて二のせがしるしのかすにいらんは
くはんたいなれとも心ざしのやさしければ是もかす
に夕かほと同じくえだにかけにけりひうかの善次
みるよりも四天王ひとりむしや二のせとよばるゝか
うのものを木のめかうてには及はんやとはしりかゝ

つてむすくとくみはねたをさんうちふせんとをせとも
ひけ共二のせちつともたぢろかす善次があげまきか
いつかみゆんでへからりと打たをしくびふつゝとか
きをとしたちあかる所へしら山兵衛本庄ぎやうふか
はせよつてゆんでめてよりくみけるを物々しやと兩
のこはきにかひはさみ四天王一人むしやならで二の
せとくまん物は日本にはおぼへすとまへゝ引よせむ
ずとしめ一々くびをねぢきつて一ツ二ツはつねのこ
とはなのさかりやよしのやまらつくわゑたにかへら
ずといへどもまたさけばこそさそふむじやうの風二
たびこずへをかゝやかす花のふゝきをのこせやとゑ
だひきよせゝうちかけていかによせての人々二の
せが家のきちれいのくひもはや七ツはたまはり今一
ツになりてあれは心あらんともからはかけ合はつそ
うじやうどのかすに入後の世たす(か)り給へかしい
かにゝとまねきけるきん時是を見てけに二のせに
およはん物はみかたの内にはおぼへず時の大將かう
むる身かさしあたつたるみかたのちじよくせひなし
と太刀ひつそばめかけ出て阪田のきん時是に有すも
ふかつくればぎやうしか出てよるぶとかや身ふせう

第三

なれ共それかしかくびのかずに入申さんいかに／＼と申さるゝ二のせ聞もあへずまづ此間はひさしう候さかたどの年頃日頃かたをならべひぎをくみたがひにさいつさゝれつさけくみたりしもうつりかはれる夢なれや二のせがくびを御さかなにしん上いたすか又御くひをさかなに申うくるかうむのしゆゑん仕るなりたゝ一たちとうつてかゝるをきん時はつしとうけひつはづしてきりこめは二のせ又てうとうけてひつはづし太刀のすんはのひたりとまくりたて／＼すきをあらせずうちたつるをきん時はづみをみすましひらりととびかたさきよりもちのしたまではらりずんときりすへてかへす太刀にくび打をとしくだんのしるしのえだにかけさあのぞむ所のはつそうゑやうとよつくじやうぶつ仕れくびの七ツや八ツを家のしるしとよろこぶははむしやのわざ此きん時はほしからずなんぢかめいどのみやげにせよとかしこへからりとなげすてゝしづ／＼とひつかへすかのきん時がていたらくあつはれ天下のまれものやと扱はめぬものこそなかりけれ

さるほとに城の内にはたのみきつたる二のせの源六うたれければ今ははや城中もたもちがたくぞ見へにけるよりちか此よし御らんして此うへはわれちしんに打て出きん時めがくびを取二のせにたむけゑさせんといたる所を立給ふを平八やがてすかり付さすか一家のろうどうに御手をおろさせ給ひつゝすこしの御あやまりもましまさはまつ代までの御かうなんいまづ此城を御ひらきまし／＼てかさねて御ほんいとげさせ給はんこそさすがに君にはにあひたる御おこなひたるべきとさへぎつてかんげんすればよりちか聞給ひなんでうきん時めほとをやつめをいかでしそんし申べきみつけんこつにうちわりてのこるやつばらしやうぎたをしになぎふせんととび出し／＼給ふを平八なをもかけふさがり御ぎつになるべきことをそれかしかで申さんやさやうのあらぎははむしやのわざたい大ようにことをとげられ天下のけんいをとらせ給ひとこそしんじつの御本いたるべけれかくいとはしたなき御心にてこそかやうにならせ給ひ

てあれあさましの御所ぞんやかく申だんにくしとお
ほしめすならばそれがしかくびをとらせ給へ命のあ
らんかざりは夢々はなち申ましとなみだをなかしせ
いこんすればよりちかをつくと聞給ひ此うへはとも
かくも御ぶんかはからひにまかせんといかりをしつ
め給ひければすぎた大きによるこびしからばこよひ
雨かせのまぎれに御しのびなされ候へと扱打じにし
たるしにんをつみかさね城に火をかけひかしの方よ
り山つたひにぞおちらるゝよせては火の手をみるよ
りもすは城ををちぬるはと一どに馬をぞのりいるゝ
され其城には人もなくなたゝやけのこりたるしかいば
かりぞ有にける扱はおちゆきぬるとおぼへたりいざ
をつかけんと我もゝとすゝみけるきん時是をみて
しばらくゝかたゝゝよ是はじよのてきとはちがふ
べしたゝあく人とはいひながらげんざひの御子とい
ひことには此きんときもぐそくをきせ申せし事なれ
ばよそのやうにはおもはれずさるによつておちばお
とし申さんためわざとてぬるくせめてありきん時ほ
どのものが是ほどの城内を今までてまを取べきやし
よぞんあつてひかへたりいさかへぢんせん人々とし

よぐんせいを引ぐし三重くはらくをさしてぞかへり
けるていとなればうちとる所のくひ共を取もたせ
いそき御所にあがりつゝとひはらにうだうをもつて
いくさのしたいをこん上あるとひはらやがてをくに
入やゝあつて立出てたゝ今のおもむき一々ごん上つ
かまつり候へばよりちかきやうのかたちのみへぬは
さだめてやけうせてぞあるらんとへおちうせたり
とても三國ぶさうのあく人をいつまででたかるべ
きやまつじやうをさつそくにのりつぶしことには二
のせの源六をうち取事ちんちやうの至りなりつきて
は御びやうきゆへ此たびのぐんせいはたらきその
いでたちを御らんせざることいづれもほひなく思ふ
べしかつらはひやうちうの御なくさみのためかいぢ
んのともからがむしやぶりをさくらのはゝにて一け
んあるべきとの上にて候そのやういを仰付られ候
へきん時うけたまはりいさい心へ候といわらとのさ
らは申付んとていそぎ御てんをまかり立よういのし
なゝけぢをなし三重一々次第にふれさせけるゆゝ
しかりけるぎしきなりそのゝちらいくはうは四天王
をめしくしてやぐらにあがらせ給ひけるそのほかの

人々も思ひ／＼にさしきをうち上下色めきわたりけり思ひ／＼の家のまく大しきせいしきむらさきやくれはあやとるあやのもんにしきくれなゐさま／＼にうつり心やそめ色のせつにあらねともさくらのば、今やはるかとききはるやたけ心や物のふのとりつたへたるあづさゆみその家／＼はおほけれとなかれもきよきみなもとのもろこしまでもひやくかぶらのゆみやのみちまして我かてう一糸んをさまりなびく目のもとのげんじのいせいぞめでたけれさてこくげんになりしかばさま／＼のむまかいぐつたへをきにしつなのひしよ三重こゝをはれとぞのり出すさる程にきん時仰をこうむりて一々しだいにたづねけりまづ一ばんにしらいとのほらまきにくれなゐのほろをかけはくばむらさきのたづなはたそ御めんなるぞばせうながらのり給へさん候くはんむ天皇のびやうゑいたかもちの大きみに五代のこうゐんわたみ浦のせうしよし國このたひ大手のきとのせんちんとぞなのりけるッキ二ばんにもへぎをとしのよろひおなしけのかぶとにきほろかけ成馬にのつたるはいかにシテ是はきいの國はつせうじのはたかしらいもせの忠太

としくにとなのりけるッキ三ばんにくろかはおとしのよろひにもへぎのほろ黒きむまにくれなゐのたづなはたそシテ是はかつらはらのしんわうのかうゐんかまくらのごん太左衛門がまごかまくらのごん太郎かげひでこんどみなみの手のようちのしんかりとぞなのりけるッキ四ばんにしきのかわのよろひにあさぎのほろかけあしげのむまにのつたるはたれなるぞシテ是は平しんわうまさかどをうち取名を天下にあげたりし田原藤太ひでさとに五代のかういんたわらの平太ひではるとなのりしづ／＼打てぞとをりけるッキ五ばんのたまくれなゐすそごのよろひむらさきのほろをかけひばりけの馬にあさぎのたづなはたれ人ぞシテ是はこのたひのたゝかひにぬけがけいたしかたきしきうち取打しにいたせしにかひだうでわのかみが一子小太郎ゆきとしすなはちそのせんちやうにをいておやのかたきをうち取おはん(ぬか)つもととしては十五歳とぞなのりけるッキ扱又六ばんにくろかはのとう丸にくわかたうつたるかぶとにうすぐれなゐのほろさびつきげの馬にのつたるはたそシテさん候なにかしは御せんぞ六そんわうの御せんにて

いきたるをがとくんでひきさきほまれをせじやうに
ふれたりしあくせんじひでかねがまご大せんのしん
やまだのはるひでとなつてとをるッキ七ばんにあ
さきいとのよろひくちばのほろかけあをの馬にむら
さきのたつなはたれなるぞシテ是はちくごの國のむ
しやとところたけちの源藏やすくににて候此たびの一
ばんくびとそなのりけるッキ扱八ばんにはきいと
よろひにすぢかぶとくろきほろかけさめなるむまい
のつたるむしやはたれやらん是こそゆうりやく天わ
うのぎようにちよくをかうむりなるいかづちをよひ
くだしみかとゑいらんに入しするか大じんのばつよ
うするかのせんしこれかとにて候となつてこそは
とをりけるッキ扱又つきの九ばんめに、くちばのよ
ろひにあやのほろかけあるきむまにあさぎのたづな
はいかにッキ是こそばんとうの八平次のなにかし、
いかまの與一まさもりとしつもつて五十八いくさに
あふこと十三と一どもふかくの名をとらず、此たび
せんじやうのかうみやうは、御もくろくにめいはく
なるべしとたづなしづかにあゆませて大ようにそと
をりけるッキ十はんこんにんいとのものゝぐにしろほ

ろかけ、くろのこまにむらさきのたづなはいかにシ
テ是はむさしの國のちうにんにはたけやまちゝふの
九郎しげもとなり、此たびからめての一ばんのり一
ばんやりとぞなのりける二人扱そのほかはやまとげ
んじにみのさふらひ、あふみの國にはやまもとかし
はぎきむらあねがははりまの國にはとんだたかなし
あかまつとう、いがのはつとりいせ平次三かはに、
あすけやはきむしやいづもの國にはみちたかはひや
ま、ほうきにたくまあねはの一同色々の家のもん
もゑぎひをどしこざくらやみのはなをもたかにしか
さかは、あかゝはくろかわあらいかはきいとしら
いとむらさきや、さて又馬はれんせんあしげとらつき
げよつじろあしゝろひたいじろからげひばりけかけ
かすげ、かうしくりげひめくりげ思ひゝのくらを
かせ心ゝのたつなをかけ爰をせんとぞのつたりけ
るがてる日にか、やく物のぐは一しほいろやまさ
るらん、五しきのほろがいたりみだれのりいだしたる
馬のかずいしやう七百三十よきはなやもみちのこと
くなりときに取てのけんふつやさゝなみやゝはま
のまさこはつくる共けんしの御代はよもつきしめで

かりともなか／＼さてなに／＼たとへぬかたもなし

第四

かくてそのうちきやうのしんよりちかはたくみし
あくぎやくいたづらにあきのしもときへうせて、よ
の中ゆたかになるに付てもらいくわうの御きしよく
よろしからざるによつて、御よつぎよりのぶ公四天
王ほうしやう其外のしよ侍をめしあつめないぎひや
うぢやうとり／＼なり時の天やくのかみよしだのほ
うゐんじのむらほつきやう御まへにかしこまりより
のぶ御らんじてしてまづこんにちの御きげんは何と
うかゝひたるぞ、心もとなしとおほせければ、兩人
承りさん候今日の御きげんはさしてかはらせ給ふ御
事も御ざなく候たゝ御ひやうきのていしんに御くた
ひれ候て御心の御むすばれふかくみへさせ給ひ候と
かく御心をほうしさせ給ひ御きのどいこをりすこし
はれさせ給ひ候はゝをのづからやくりきもまはるべ
きやうにそんし候とつゝしんでごんじやうすよりの
ぶ聞召いかにかた／＼さらは御なぐさみをなにとぞ

くふうをめぐらししんていをのこさす申上よとの上
いなりいつれもしはしもくねんたる所にきんときや
がてすゝみ出げに御心なぐさみのふうけいなにかし
かるべき物それがしのそんしより候はそれ人の心を
いさむる事まゑんにましたる事候はすもろこしのら
くてんかしゆかうさんをまなひていせんにさけのい
つみをたいへひぢよをそろへ今ようろうゑいさまさ
まにをんせいみめうをつくさんこといかゝあらんと
申さるゝ時にほうせうすゝみ出是そきたいのふうけ
いもつともよろしく候はん扱それがしかぞんずるに
はそれやもふと申もじやぎのわざ其にされるをはら
はんにはしやう／＼のれい／＼たるにしくはなしみ
なみの御てんの花そのにせんぎやうのていをまなび
時にあらず共そのゝもゝ色／＼ふせいをつくしつゝ
からくみ御めにかくる物ならばすこし御心もはれさ
せ給はんと申わたなべのつな是をきゝ兩人のもやう
しももつともおもしろくは候へ共それはいくの事
わさなりちかきわかつてうのふうけいを申べしさかの
天王のきようかとよとをるのおとゝといつし人思ひ
やそらにみちのべのちかのしほかまをたへしのび六

條かはらのゐんにしほかまをうつしなにわのみつの
うらよりもとうしほをくませゆふきやうありしはな
にとやらんたへなるやうにぞんずれば御ていせんに
しほやのていをかざりびぢよをあつめあまをとめに
つくりしほをくませ、又はうほきのおきななとをあ
ひませしほやくていのゆうけいいかゝあらんとどん
上ある、よりのぶ聞召いづれをわけていひがたしと
かくかき付を以てどん上然るべしとやがて一々にあ
ひしるさせ人々をめしぐして三重おまへをさしてぞ
出給ふ御まへになればみぎの次第をこん上ある頼光
御らんしてまづもつてそれがしがびやうちうをかな
しみて、せい／＼をつくさるゝのだん誠にもつてし
うちやくせり、よつて此かき付のだんいづれもよろ
しき事ながら中にもちかのしほがまのこと、われさ
かんのいにしへみちのくへ下りし時少けんぶつ申て
あり、むかしのてい一しほなつかしく思ふ間、まつし
ほかまのふうけいのぞみなりと御きげんよろしくお
はせ出さるゝ所へきうしうくまのゝしんぐうのべつ
とうあはけわしくさんじやう仕り、扱もにやくわう
しのやしろはそんのおよび候間しゆりのために、う

しろのかたをやぶり候へばかくのだんの物をこめを
き候とさしあぐる、すなはち御まへにてひらきみ給
へはあつきいたに人を忍にかきむないたとくびには
やのねをつよく打こみちんじゆぶのしやうぐんらい
くはうとかき付しうらにはなむ日本第一大りやうご
んげんきずいをたのみたてまつるせいくかんたがへ
給ふなとんしゆみなもとのよりちかとかきしるして
うぶくのぐはんじよをそへていたりけり人々大きに
おとろきそはいかにとさはきける時にらくわう御
なみだをばら／＼とながさせ給ひいかにかた／＼扱
も／＼天めいしらずのよりちかめや子としておやを
てうぶくする事ためしあらざる事なりそれかみはひ
れいをうけたまはずなにはどきやつめがいのる共わ
れじやうがうきたらずばしぬまじけれ共うんめいつ
くれはかゝるかうひやうせひもなしさればせんぢつ
のかつせんにおち行ぬるとすいりやうはしけれ共お
んあひはなれぬおやと子の中のかなしさはよのうき
事もみにしまはすこし心のなをりやせん、もしさも
あらばおりをへて、國の一ヶ國や二ヶ國は申おこな
ひ、又さもさくは出家そうのみとなしても頼光がう

き世のかたみにのこさんと扱こそゆうめんしてはあれ、かのもろこしのしゝわうはちくるいなれとも子をかなしみてちにふせは、子はさらみちをわきまへず、とやをはなちておやをいる、是よりちかにあひおなしらいくはうむなく成ならはいか成ぶつしくやうもなにならず、たゝよりちかめをたつね出しからめ取かうべをはねてそれかしがつかまへにたむくべしくさのかげにてじつけんしうき世のむねんはるべきといかれる御兩がんに御なみだをうかめ給ふ、よりのぶこうをはじめおにをあざむく四天わうひとりむしやげに御だうりなりことはりやとみなくゝなみだをなかしける、やゝありての上いにはよし何事もさだめなきよの有さまをしりながら申はぐちの至なり、まづかたゝゝか心ざしのゆうけいのしたくあれせめてはうきをはらすへしそれゝゝとのたまひてござをたゝせ給ひければ承はり候とをのゝ御まへを罷立三重にはかによういと聞へける心もことばもおよはれず上下たへなるあそひとて色めきわたりいさみけり、かくて其後頼光は人々をめしぐしてもみぢのでんに出給ひよものけしきをみ給ふにげにもう

つせるしはやのていなにゝ付てもよの事はふしうきふししげき竹はしらあしのかきねにくさのやねつゆもたまらぬあはらやは、月みるためのあまのわさかや、かのきはのつたかづらくものあらしにふきとちてうらさびしくもしほかまのけふりいぶせくたちのほるまかきかしまのけいきまで今もくせんにあらわしてすきしむかしをみちのくのめいしよを思ひつゝ、けつゝひとしほきやうに入給ひ、よもをはるかにみ給へばいふにたへなる御あそひ、心も爰にすまのうらぶひのむかしあらわれてひかるけんしのたいしやうはのにすむむしのわれからとをかせるつみの身をせめて三とせの思ひたゆるまもなみのよるゝゝあこかれてもしほのけふりと立のほりきへてはそらにゆき平のせきふきこゆるとなかめしも、たれをまつ風身にしてみて、そでそほぬるゝむらさめのふりにしかたのうらはまで思ひつゝけてまつしまやおしまのあまのぬれころもかわくまもなきしづがわざあたにくれゆく月と日をかそへゝゝてこよひしもげにはつあきの七日なりくゆる思ひのたちのぼりそらにもこひがあればこそ、そらにうきなは七夕の、いとくりかへ

しかへしつゝ、こひのそめぎぬをりひめのあまのか
はらに立わひてあふせのなみにうきしづみ、年にま
れなるちぎりとしてわかれもつらきなみだ川、わたせ
るはしやかさゝきの、みもくれなゐにそむとかやさ
ればうたにもこよひこん人にはあはじ七夕のひさし
きほとにまちもこそすれとふることまでも思ひでゝ
むかししのぶのうらはまでいとしん／＼とすみわた
りまつのあらしのをとすぐしほくみぐるまわづか
なる、よをおしめ共したへともかへらぬものはゆく
とつとさりけらしなとしのくれあゝさてはかなきう
きよかとむじやうをくはんしおはしますその折ふし
にあまをとめあさのころものそでをむすんでかたに
かけ我も／＼と立よりていさ／＼しほをくむべしさ
あのふしほをくもたんぶとくみもちてもつやたこの
うらあつまからけのしほころもくめ口ぞかけはおけ
にあるげに／＼もらさでもらさでてらせ日のひかり
月のでしほをくむをけにうつろふかけはいつまでも
つきぬいつみときくのさけとことぶきしてたはれは
らいくはう御ゑつきまし／＼おほめでたやと御きげ
んよろしく候へければ其時にあまをとめしほきのお

きなもろ共にきみか代は千代にや千代をさゝれいし
としようけんうたひ立ければざちうに有し諸大名皆萬
せいをとなへつゝ千しうらくはたみをなで萬ざいく
らく命をのふ頼光の御いせいめてたかり共中／＼に
何にたとへぬ方もなし

第五

しようじゆせん年ついに是くちぬたれかしやうじや
ひつめつのことはりをまぬかれんあゝかなしきかな
や頼光は御とし五十四歳を一せとしついに御たかひ
有ければよりのぶ公をはじめ四天王ひとりむしや御
家の諸侍あんやにともしひきへ日月のかけをうしの
ふことくなりされ共人々涙をおさへ今ははやなげき
てかなはぬしでのたびとかく君の命を取し御かたき
はよりちか卿はねをみちんにくだきてもせひ／＼く
ひを打取て御きやうようにほうすべし扱明日は一七
日の御ほうしなりいとなみすぎて其後はをの／＼て
たてをめぐらさんとまづ御ほうしのいとなみを三重
みな／＼あるこそしゆせうなれ是は扱をきうきやう

のしんよりちかはいづみの國ふけいのうらにてはた
 をあげよりきのせいを待給ふ所に頼光の御たかひと
 聞よりもきん國のしよ侍我もくとはせつく事たゝ
 ぬのをひくがごとくなりすではやよりきのせい十
 萬八千よきとぞしるしけるよりちかしよぐんせいに
 打むかひ父頼光われをあく人なりとすてられしか天
 は誠のかゝみにて天下を我にあたへ給ふしるしまさ
 にあらはれたりよに有かほ成おぢのよりのぶにくか
 りしほうしやう四天王がくび一々に打をとしおやな
 からも父頼光はてきなればつかもびやうしよもほり
 かへし日頃のむねんのさんずべしはやうちたてやか
 たくくと三重ていとをさしてぞをしよする此事よも
 にかくれなくよりのぶ公は四天王ひとりむしやをめ
 され頼光のゑんぎやうとしてしづ山かつにいたる迄う
 れいの色をなす所にげんざいの子としてたちまちゆ
 みやをおこすこと天めいしらすのあく人かな此うへ
 はせひもなしいそぎかたくはせむかひざんじにた
 いち申されよわたなべ承はり上いのごとく一七日も
 立やたゝざるにせんちやうのかけあひほんいには候
 はね共ちからおよはぬ仕合なりさりながら人のひは

んも候へばたゝてきのしかけをまち都にての一せん
 しかるべう候はんと申あくるきん時ききもあへすこ
 はのびくゝなるせんきかなきみの御ゆひごんにもい
 か成千ぶ萬ぶのくやうよりちかのくびをはかの
 まへにたむけよとの上いをばはやくもわすれ給ふな
 よし人々はともかくも此きんときにをゐてはすぎに
 しいくさに打もらしたるゆへにより君をてうぶくせ
 られしなりげんざいのおやをいのりしとんよくぶた
 うのよりちかをいつまであんをならしめんといた
 る所をずんとたてば四人の人々もたまりかね三重み
 なくしたくをせられける是は扱置こゝによりちか
 卿の御めのとすぎたの平八ときかげはきやう人にす
 ぐれあんふかきかうの物なれはきいの國のちう人お
 しをの源太そのべの藤内とてなんかいいたうにて其な
 を得たるゆうしを近付ことのていをさつするに頼光
 あひはて給ふによりほうせう四天王ういかりをふく
 みいくさのたてやうもさだめずわれさきにとぬけが
 けせんはひつちやういさみちに待かけうむのしやう
 りをたゝさんとみかたのこちをぬきいでゝつの國あ
 べのがはらになりしかば先すぎたの平八は一むらま

つをこたてに取こだかき所にひかへける二ちゃんには
そのべをしをあひならびたとへぎじんなりとももら
さしとうでをさすつてひかへける然る所へきん時む
まにしらあはかませはせきたる平八すはたれなるら
んとまつのかけよりたちよりちかつきみればきんと
きなりなふひさしう候さかたどの是はすぎたの平八
にて候ちかころめんぼくなくは候へ共いにしへのよ
しみにはいかやう共たのみ入候とさもありそうにあ
ひのぶるなにすぎたなるかかうさんとやさふらひは
わたり物ちつともくるしからざる事さらばてきのあ
んなひいたされよははらきによりほんりやうしさい
あるべからずと申せば、さらば御さきいたさんとよ
るよとみればきんときかくさずりたゝみあげてつか
んとするをさあしつたりとひらりととびかいつかみ
をしふせてさいせんよりもはかりことはしつたれ共
なんちほどの物かなに事をかしいださんをひて事を
みんなためにわざとゆるしをきてありをのれこときの
うでにてこのきんときがおよばんやとくびをかゝん
とする所へをしおの源太かけあはせきん時がゆんで
にまわりさしとをさんとするうでばねをひつとらへ

まへゝ一しよにひきよせ二人をさうのひぎにてをし
つめあとよりつゝく其べの藤内をかいつかみはるか
のそはへなげすてゝ二人かくび一々にうちをとし是
もいくさのかどいでとにつことわらひ立にけりしか
る所へわたなべほうせうさだみつすゑたけぐんせい
をひきくしはせ來りやあきんときわれゝゝをうちす
てぬけかけはいつものくせとはいひながらよりちか
はたいしのてきなりとつくとそなへをいたさんとい
ひもあへぬによりちかはすまんのくんびやうはつか
うしたがひにときをつくりたて三重いくさは花をぞ
ちらしける都がたはこせいなれども三國ぶさうの五
人のものぢしんにてをくだきたゝかへばすまんのよ
せてかけたてられうをうざをうにげちりけりよりち
か大きにいかりをなしみれんなるくわじやばらかな
いでゝゝよりちかゝ手なみをみせんと五人ばりに十
五そくとつてつがひさしとりひきつめさんゝにい
たまへば一やに二き三ぎづゝいをとされ一ツもあだ
やのあらざればざんじかあひだに百きばかりいおと
されさしもにいさみしみやこせいむらゝばつとぞ
ひきにけるときにきんときすゝみいでこはおくれた

りなんぢらと一もんじにとびいづるをわたなべとつ
 ておさへやああのよりちかのゆんせいはいばんじやく
 とでもたまるまじ此人にゆみやをもたする事はりや
 うにみつをあたへおにゝてつほうをゑさするにひと
 しし(なにとぞしてたばかりゆみやをすてさせ申さ
 んまづしばらくとせいごんす其時きんときはらをた
 てなふわたなへせんじやうにむかふ身がてきのやさ
 きをおそれつゝいかでかはたらきなるべきやことに
 うんはてんにあり爰をのき給へやといふまゝにかけ
 いづるをわたなべなをもおしといめもつともうんは
 てんにもあれはてきにもまたみかたにもありすこし
 は人のいふ事をもちひたまへやこれをわたすぞかた
 かたよかまひてはなし給ふなとむたひにとつてをし
 入さて大をんあげていひけるはそれなるはよりちか
 にてはましまさすや是そわたなへのつなにて有むか
 しは三代そうをんのしゆくんなるかいまは八ぎやく
 ざいのとが人なりげんざいの父うへをちやうぶくあ
 りしみやうばつはいつまでかのがるべきあつはれ三
 國ふさうのあくにんかなかく申がむねんならばちか
 づきたまへまつかうをたゝひとうちのしやうぶなり

とわざとにくさげにぞあさむきけるあんのごとくよ
 りちかけつきさかんのゆうしなればこのことばにい
 かりをなしすいさんなるあくごんかなおのれごとき
 のやつにゆみもたちもいらばこそたゝ手とりとせん
 といふまゝにゆみやかしこになげすてはしりかゝつ
 てむすつくむとくにわたなべもとよりきこゆるはや
 わざなればはねつひらりひつこゝをせんとぞもみけ
 れどもさんこくぶさうの大ぢからにてものゝかずと
 もせずちうにひきよせなげんとすればわたなべしと
 とまとひてはなさゞればこはものゝしやといふま
 まにゆんてのかたへはねたをしをかゝんとした
 まふところへさだみつすへたけはせきたりやうは
 うよりもむすつくんでひきよせよろひのうはをびひ
 きちぎりたかてこてにいましめいまこそほんもふと
 げたりとのこるぐんせいうちたいらげみやこをさし
 てそひきのほせてんかあんせんにおさまりけるなを
 なをげんじの御はんじやうめでたしともなかゝ申
 ばかりはなかりけれ

頼光あともろん終

江戸大傳馬三丁目本問屋板

津戸三郎

宇治加賀掾正本

第一

地下玄やかにだいは有りかうしにとうせき有り、くにかうてきあらずんば、めいしやうのほまれ何を以てかあらはれん、さればらんは太平のはじめぶんぶさかんの源うち、九郎御ざうしよしつねは、かねうり吉次にしたがつて、みちのくに下かうあり、ひでひらがしやじやうにて、頼ともにくはゝり、平けのぎやくとをしづめんため、おくせい十萬よきをゐんぞつし、チロシフシ御しんばつとぞ、聞へける、およそ三ぐんをつかさどる御きりやう、天ねん其徳そなはつてそなへぎやうれつかいたいこ、しやうくせいせいとしてきんてつみななる御ちんをし、ぼくどうせうふもかうべをたれ草木も、ゑだをかたぶけり、こゝにあれたるわらやがのきおくもくまなく見へ給へば、六尺ゆたかの大おとこやのねをとぎてかたへには、二八の娘つゝりさす、はりのみゝずもゆびぬきてきゝ手づまの手もたゆし、むさし坊辨慶きつと

見てもんぐはいにつつ立、詞けふ我君の御しゆつちん五十四ぐんのため百姓、かつかう申おりからおさめすぎたるふるまひりよぐはい千萬、まかり出て一禮せよとよばゝれば、かの男くつゝとわらひ、いやはやながいきすればあたらしいことを聞、主をもたぬらうにんなればわが君とあがめん人あめがしたに持申さず、ぐそくきたがこはくもなし、たれにおそれてへちまのかは我てらの佛たうといな、津のとの三郎かつひらといふらう人もの、此女は我いもと身こそひんなれ、今日まで人にれいせぬ此男と、雨足くつとなげ出しひぎをたゝいてゐたりけり、詞辨慶こらへずすねふみをらんとかけ出る、よしつね馬よりとんでをりア、しばらくくゝ、津のとの三郎とは聞及びし源氏ふだいのゆふしぞや、我こそよしとものが八なんよ、西國へ同道せん力をそへて得させよひらにたのむとの給へば、津のと兄弟はしり出偕は源氏の御するかと、手をつかねて申せしは、詞誠に源氏の大將のたのむとの御錠御供申べう候へ共、おやにて候津のとの兵衛御父義朝公につかへ、しなゝの高名をんしやうあるべき所に、ざんしやのわざにて本

りやうをめし上られ御父が常々申せしは源氏のしやうばつくらきゆへ、さんしやはさかへ忠臣はおとろふる、うらめしの義朝や此うらみはしそん迄わするなと申をき、はら切て相はてし親の一ごんこつずにこたへもだされず、かく申とてしん八まん平家にしたがふ所存なし、つちをなめ水をのみ、うへしせんこそ孝行共義共我共申べし、御誕をそむくにあらね共御奉公は御めんあれとりをたゞしてぞ申ける、詞よしつねしごくましまし、しからば汝にをとらぬ武士たのんでゑさせよ、津のと承り爰に出羽のなにがし佐藤庄司と申者のせがれ、次信忠信兄弟の内一人頼むとの給はい、よもいはいは候まじとごん上すれば御大將、其義ならばぐん兵をかめる片岡むさしにつけてさきへうたせ、佐藤がたちのあんないにはわとのをゆうゐんすべしとて、二手にわくるはたの手に、よろひのにしきにははせてきうばの花、こそ三重さかりなれ去程に佐藤兵衛忠信は此ことを聞よしも、うれしや義經の御供し西國におもむき高名せんといさめ共、兄弟の内一人と有からは、兄の次信御供を望みよも某は上すまじ、エ、くつきやうふんべつ

有、せひ某がのぼらんと津のとが庵にあんないし、詞四郎兵衛忠信おみまひ申といひ入るいもとのはや姫立出、兄うへは義經公の御供し其かたへと言、忠信小ごゑに成いや三郎殿に用はなし、御身にないせうをしらせ申ことの有り、承れば兄次信とはひとしれず、夫婦のかたらひあさからぬ中と聞て有り、何とさうかといへばはや姫かほをあかめ、御存のうへはつゝみ申さんやうもなし、はや七月の身もおもしゑて此ことがあらはれしか、いやゝさやうの義ではなし、義經公より兄弟の内一人ぐせらるべきとの仰に付、兄次信いくさの供を望まるゝ、あかぬ別れはぶしの道共おぼさんか、弟の口から兄の悪性申にくきことながら、爰をよつく聞給へ、次信上がたへ上りなば國へは討死といつはり、京女のめかけを拵へいくさは半ぶん色あそびと、けらいしのぶの小太郎に談合有しを慥に聞、然れば二世の御ちぎりすてられ給はんせうしさに、そつとないせうをしらせ申爰はひらにとめ給へ、いくさの供には弟のやくふせうながら、はて某がまいらふ迄とまがほに成てぞ語ける、女心のはや姫涙もむねにたもちかね、よくぞお

しらせ忝なやさやうの事を聞からは、すがり付ても引といめ西國へやりはせじ、何とぞ次信殿にあはせてたべとなきければ、しからば某はせ申さん何かなしに取付て、めつたむしやうになき給はい、いわきをわけぬ次信思ひとまるひつちやうぞ、たいなき給へくつれてしゆく所に三重「かへりけりかくとはしらず、三郎兵衛氏神のやしるにまふで、ぬき奉りらいはいし、源氏の大將御出陣ねがはくは某を御供にぐせられ、神力を以て高名し、ほまれをのこす雲のうへなむやむらさき明神とかんたん、くだくゆふだすき、ゆふにやさしき女のこゑいがきの内より、次信さまくつとよびかくる、詞はつとをどろき何者といへば立出袖をひかへいや申、おきづかひなものではなし、わらは、當社のしんしよく行春が娘いくよと申者なるが、御しやてい忠信さまとしのびてあひに相ぼれの、神ぞいとしさかはひさは命もいそのうみをこへ、山をへだて、西國へ義經さまの御供を望み給ふと承る、上方は色所心もとなふ思はれて、はぢをいはねばりがたゝすりんきぶかきは生れ付、兄ご様の御いけんにてとめまして給はらばこんしやう

ごしやうの御じひと手を合てぞなげきける、次信をりにさいはんとだうりく去ながら、詞忠信けつきさかんにて兄の意見は聞入ず、御身すがつてかきくどきひたすらなひてとめ給へ、たいなき給へくつとをしゆる所へ忠信はや姫來りしが、あれこそ兄よ弟よと二人の女をめんくにかくしをき、詞ヤア兄じや人忠信かと地たがひにしらぬあいさつはおかしくも又しゆせう也、詞しばらく有て次信、此度我君西國の御供兄弟の内一人との御誕、某罷むかつて高名すべきりうぐはんに、さんけいせし折から汝は何とて來りしぞ、忠信聞いていやく此度は某御供申べし、惣領の身が討死せばたれが家をつぎ申さん、惣じて國をまもるは上たるやく、一きむしやのはたらきは下たる者のやくなれば、せひ忠信が御供とぞ申ける、次信聞もあへずおことが詞も一り有去ながら、そちは若き者なればさねかたまらずむしやなれず、はれいくさおぼつかなし國に残て父母につかへよ、今度は次信むかはふすよといへば忠信きしよくをそんじ、秋のこのみにこそさねかたまるといふ事あれ、わかきものにてはれいくさがるまいとや、是せうぶ

はらうせうによるべからず、兄とは生れ給へ共はれいくさはあぶなもの、地色中たゝ某を上せられよとあざわらつて申ける、次信はらにすへかねはれ軍あぶなしとは、詞儲は某おくびやうすべきものと思ふか、チ、おくびやうはめのまへよ次信彌々腹を立おくびやうものゝ弟なれば汝はなをもおくびやうならん、なふはづかしけれど此忠信はおくびやうすべきほだしなし、貴殿は國にほだされ儲こそおくし給ふらめ、やいさうろたへもの、國に心がひかれんとはわがおやは汝もおやもつておなじことはりよ、なふ兄じや人、親におやはかはらねど此忠信は、津戸の三郎がいもとはや姫といふほだしはもたぬといふ、次信はつと思へ共さあらぬかほにて、それはたがこと身におぼへなしといへば忠信ふつとふき出し、地色ひつぢやう覺へ候はぬかと姫の手を引出けるとき次信立てにげんとすはや姫すがり引とゝむ、忠信悦びそりやそこがなき所、なけゝとよばゝれば、西國へはやりませぬやらぬぞやいのとなき給ふ、地色次信せきめんしながらいくよくとよびければ、するゝとはしり出忠信さまわらはをすてゝ西國へゆかんと

は、お心もかはりしかどふでもやらぬとなきければ、次信そりやそこがなき所、はや姫なけいく世なけと、兄弟かほに袖おほひはなにうぐひすほとゝぎす、一たびに待すがたかやたいなけゝと斗也、かゝる所へ父の庄司、君をぐぶし津のと諸共來らるゝ、兄弟おどろき二人の女をかくさんとす、ア、ゝゝ、しばらくくるしからずとおししづめ、庄司申されけるはやれ子共よ、君を御供仕り是までくる事よの義でなし、兄弟の内一人頼たきとのおほせをかうぶる、地色弓矢のみやうが庄司がおひの悦び也、兄か弟かいづれかうなるをまいらせんと思ふ所に、兄弟義をおもんじてあらそふしんてい庄司が子共はかうの者、チ、頼もししゝとうれし涙をながさるゝ、儲汝らはしのびづまをもつたるとや、なさけにまよふはよきつはものゝくせぞたし、ふたりの女郎よめに取子共と思ひなぐさまば、庄司はおひのたのしみ有、此うへは兄弟共に御供申せと有ければ、次信忠信悦びていさむ心のゆゝしさよ、地庄司重て申さるゝは、詞かれら兄弟心はかうにて弓やかきおひ打物取り、馬引よせて打乗りて敵にむかふ其時は、地色千騎萬騎にも

おとらぬ者にて候へ共をさなきより主を持す奉公の道を存せず、我君へまかせまいらする庄司が心をさつし有て、御めをかけて召つかはれ下さるべし、引まはしてたべはうばいたち、諸汝らも今がおや子のわかれ也父かけうくんをたもつて君にふぢう仕るな、けふよりしては庄司を親と思ふなをやにも主にも君一人、地色一命を奉り身はなきものと心へ、よき敵と見るならばおしならべてむすくみ、首取てなをあげよじんきをしらぬはゐのしゝむしや、兄は弟をかいほうし弟は兄にそむくなよ引共兄弟つれてひけかく共兄弟つれてかけよ、兄うたせて國もとの父や母が戀しいとて、弟ひとりかへらふと思ふな、弟を討せて兄かへるな老たるおやさへ思ひきる、今をさかりの若むしや共心を残すな、けふのかどでをまつごときはめいさぎよく討死せば、生て親子のたいめんよりなをしようれしかるべきと、すゝしげにはいさむれ共さすがらうこの親子のわかれ、さへぎる涙せきあへずかくいふはふびんさゆへ、花のやう成若ものをしねとはさらに思はぬと、御前をも打わすれ兄弟にすがり付しばしきへ入なきゐたり、御大將

を初めとし、有あふしよぶし一どうにそでをしぼらぬものはなし、地色しかる所へいるま都のむしや所、あんさゐのだん正太郎氏重あはたいしくはせさんじ・詞儲も平けの一もん君御はつかうのよし傳へ聞、四國八島にたてこもりいくさの用意まつさいちうと承り候、へんじもはやく御しゆつちんしかるべく候と大いきついで申けり、はうぐはん聞召ヲ尤さぞあらん、去ながらいく萬騎こもる共物の數とは思はぬなり、いかにだん正、是成者は佐藤庄司が子そく三郎兵衛次信、四郎兵衛忠信といふ兄弟なり、向後心を合此度の合戦いさぎよくはげむべしと、念比にの給へばだん正承り儲は聞及びし御兄弟にてましますな、誠に御きりやうと申あつぱれお侍候、さればいくさはせいひの多少によくらす只一心のはげみ第一とかや申候、貴殿達はいまだ不軍にて此度が初めならん、地色かまへてくふかくばし取給ふなさあれば君迄の御ちじよくぞと人もなげにぞ申ける、地兄弟むつとせきあげしが押しづめ、詞いかにもく御仰のごとく我々兄弟はつゐにいくさとやらんはいかやうにはたらき候もかつて存せず候、しかしなが

ら貴方のさし圖を以てすいぶんはげみ申べし、若又いくさの次第によりさきがけ生どりぶん取高名仕がちにて候間、必御氣にかけられなとおこがましくぞ申ける、彈正きしよくをそんじゃ兄弟、きのふけふ侍にまじはりせんぢやうにて高名せんとや、偕も口はちやうほういはれたりく、地よしくいらざる先がけ致さんより、只わがげぢにまかせられ命大事にせられよかし、あしきいけんは申さぬとあざわらつてぞゐたりける、兄弟今はたまりかね、此うへは何が偕、ごへんのげぢにまかすべし御出陣の門出なれば、兵法けいこ仕り御でんじゆにあづからん、詞いざ參さふとたちにてをかけつめかくる、彈正もとびしさり刀をぬかんとしける時津のとなかへわつて入是々、此けいこ某もらひ申さん、さいせんよりのつめひらきみな君をたいせつに思はるゝゆへにて有、侍たる者はさ程の心ならではせんぢやうへは出がたし、地色ヲ頼もしく、わざとざけふに取なして、ことゆへなくしづめしはまことにぶんぶの侍なり、地色はうぐはん御らんじ津のとが了簡一々以てしごくせりいかにさう方のもの共かまへていし

ゆを残すべからず、此度の出陣は義經が一しやうのはれいくさぞ、地随分はげめ面々といさみいさんでそれよりも西國さしてはつかう有ル門出めでたし千秋樂萬々、歳とぞ祝ひける

第二

地九郎判官義經頼朝卿の代官をかうぶり、一の谷をせめやぶり八島に御ぢんを召れける、奥州勢の彈正太郎氏重は佐藤兄弟にいしゆ有ル中我手の者を役所にあつめ、詞偕も此度源氏の勢我等をはじめ、大名小名れきく多き其うへに、何をふそくに佐藤兄弟召出され爰にては次信、かしこにては忠信と人もなげ成侍だて大將もめがあかず、見聞もむねん千万なり何とぞひけ付ちじよくを取らせ、こゝとはかば打ころせきやつらを壹き當千と御たのみ有うへに、いらざる忠をはげみ犬ばねをつて鷹にとられなくさせんより佐藤兄弟討てとれと、はまべをさして下りしは法にそむきし三重「ふるまひなり、げに思ひても、地中色思ひにあかぬ親子の中いたはしや佐藤庄司、

次信は小ざくらをどし忠信はふちなはめのよろひをつね／＼このみしとてにはかにをどさせ、しのぶの小太郎同小次郎兄弟に取もたせ、二人が方へをくらゐ、チャクリおやの、「心ぞあはれなるかすみとともに地色中たつか弓八嶋のいそに着けるが、陣所／＼を見わたせば竹たばらんぐいたきすてし、所々のかいりもよるはもへひるはきへつゝうすけぶりしほやのけぶり立つゝき方二三里が其間、さかもぎきびしく引たれば、佐藤殿の御陣所はいづくととはん便りさへなみ打、ぎはに、くる、人を、地あまかと見ればさもなくて、十六七の小わらはの腰にさひたる山がたな、さすがしなよくをとなびて姉とおぼしきふり袖に、もつもにあはぬ商やわらんぢ賣にはをしかりし、詞しのぶ兄弟は子共わらんぢかはんといへば、いやはは武者わらんぢ、旅人の御用にはたゝすと云、ム、ぢん所に商するからは、あれに見えたる陣や／＼は誰々としつつらん、あらまし語て聞せよかし、地色やすき間の御事ぞ毎日商致ゆへ、御ぢん所やく所は存じたり教申さん聞給へと、東西南北指ざして念比にこそかたりけれ

しるしぞろへ

あれ／＼東のおのへより、南のをかの小松原雪の山かとひたじろの、まくを其まゝふもと川、からほりはつて高やぐらチャクリ風に「うすまくしらはたのかけにぐんびやうかぶとをならべ、よろひの袖をつらねしは、御大將の御ほんぢん、其はたもとに打つき小チャクリだきざゝ、たきいね花うつば、なみにうさぎのしるしこそ、かめゐかた岡いせするが、とつこにりんぼうつけたるは、ひたちばうかいぞんかねふさはみぎどもえ、ひとつどもへみつどもゑ、五つわちがひ六つかりがねなゝつだうぐを立たるは、大將のひざもとさらずむさしばうべんけいのやくしよとこそはをしへけれ、まへはさかもぎ、きいとしてせいろうたかくあげさせ、ようじんきびしきいきほひは、さき手の大將さゝき殿、偕たけがきにをりきどうち、印ばかりをたてたるは、はたもとのほろ大將、くまがへのぢんしよなり、川ごへがもの見のこや、松にかけたるたいこがね、あけゆくところをおどろかす、くもにあさ日の印こそ、いくさ大將はたけ山、

手せいは五千よきとかや偕ひとへびしいれこびし、花びしまつかわ三がいびし、おがさはらの一たうなり、二つ引の大まくは平山のちんどころ、おもだかはをやまの一るいたつなみはおぐりたう、ほうでうはあとぞなへうぢんさぢんはどひ三うら、ひらきあふぎのはたをなびかせきばのむしや二三、御ようじんとよばゝつてチャクリやくしよ、くを、かけとをるはさたけのなにがし、こやめぐり、はまの手はかまくらせい、偕山の手は都せい、かいだて、もちだて、めん、どり、ばにつきならべかちむしやきばむしやゆづるをしめし、すはといはんこゑのうち、かけ出んけしきにて、君をじゆごし、給ひけるは、誠にゆゝしう候ひし、比はやよひの、そらながらあきに、さへたる月にほし、ちばのすけのやくしよなり、しげめゆひはゆふきの七郎、きつかうはさはらの十郎チャクリ三ぼん、「うちわ、うろこがた、風にもまれて、あがりふち、またさがりふちあげはのてふ、むさしせいさがみせい一二のそなへと聞へける、偕おくがたのぐんぴやうは、十万よきを二手にわけ、ぢんしよはおふ手からめ手中にたてたるはたのもん、ゆき

おれ竹に村すゝめではのしやうじが二人の子さとうつぎのぶ、忠信は日本ぶさうのつはものと敵も、みかたもかくれなし、其外うらゝ山々も皆しろたへにしらさぎのむれゐる松見れば、げんじのはたをなびかする、たせいはかぎりしられずと残らず教へ語りけり、地色中しのお兄弟手を打て偕もよく覺えたり、詞我々は佐藤殿のげにん、父ごの方より御兄弟へ此よろひを參らせらる、とてももの事にあんないしてくれぬかといへば、地色中娘よろこぶ色見えて御案内もいたすべし、詞偕なれゝしう候へ共我々は此あたりのかり人、わしのおと申者の子共成が、源平の兵亂にて狩もかなはず、親をやしなふいとなみに習はぬわらんぢうり候、あはれ殿さまへ御奉公せさせてたべと、いひもあへぬにしのお兄弟、是はさいはひ戦場には一人もたよりぞや、吉左右ゝわれゝにまかせよ、好奉公に肝入らんとつれて、陣所に三重「急ぎけり、地色あくれば三月十八日大將軍の御出立、赤地のにしきのひたれ紫すそごの御きせなが、あぶみふんばりくらかさにつつ立あがり、詞一院の御使けんぴいし五ゐのせう、源の義經とたから

かに名乗て、よせくる平家の兵船を今や／＼と待給ふ、地佐藤兵衛次信は父が送りし小櫻をどし、わたがみだかにきながし、けさ迄着せし鎧をばわしのおに打きせて、馬を乗すて御馬のまへに畏る、詞大將御覽じかれはいかにかうにんか、いや是は次信が弟にて候御馬のさきにて討死せさせ申さんため、召つれ候と申せば判官重て、次信が弟は忠信斗と覺へしに心へがたしと宣へば、次信謹でさん候、かれは此へんの狩人わしのおの三郎と申者人と生れし思出に侍にまじはり度由、かれが姉達てなげき候故、色しらぬ東えびすの次信め心ざしにほだされ、兄弟の約諾仕て候、哀御馬の口に召付られ候は、有がたく候はんと申上れば、義經ほとんと喜悦有、あつぱれ器量の若者次信はくはほう者あやかたし、いかにも某召つかひ弓取となすべきが、地色中迎の事のづいでなれば姉はどうぞ成まいかと、たはぶれ給へばわしのおは鎧の袖をかほにあて、はづかしさふなるむしやぶりに敵も太刀をばすてぬべし、地色中あんざいの彈正太郎ごちんよりつつと出、詞次信殿の御舍弟お近付に成申さん、ヤア、是は此比陣やにてわらんぢ

うつたるわつば成が、是が貴殿の御舍弟かはてよい弟をもたれたり、向後我等もとくひに成わらんぢ誂申べし、軍中に用からは百里も二百里もあゆまる、能わらんぢがもとめたし、あたひにはかまはずはうばひの中なれば、五せんは三せんはたいもとらせてやらふはとにくていにこそ申けれ、次信むつとせきあげしが、ヲやすい事、去ながら百里二百里はくわらんぢの何の用に入申、合點、憶病風に寒け立大敵に追立られ本國へ一とびににげゆくためのわらんぢか、チ、やすい事といへば彈正重て是さ、何にもせよ我がすねは人にかはつてたくまし、是に合て作つてくれと土足を次信がひざもとにふみ出す、次信太刀に手をかけ、見事なだんびらずね、此足にて逃たらば天竺迄も一とびならん地色やうらうほね切取てかたに合て作らせんと、太刀をぬけばだん正もとびしさつてすはとぬく、地どひさき畠山辨慶なんど左右にすがり是は不吉としづむれ共はなせはなせとねぢ合所に、地平家の兵船こぎつれてときこのゑをぞ三重「上」にける其隙にどし軍も漸をさめしづまりぬ、三人乗たる小船いそ近くこぎよせ大將

ふなばりに立あがり、詞一ほんしきぶ卿葛原の親王九代のこういん能登守のりつね、源氏の大將義經に、見參のしるしに小兵ながら中ざしを參らせん、うけて御覽あるべうもやと大音上てぞ申さるゝ、判官陣頭に駒かけすへ、ものゝし能登殿の御ゆんせいの關東迄もかくれなし、たいなかにうけとめて九郎が鎧のさねためしたう存る也地爰の程が所望ざうとむねをたゝいて宣へば、地すはや源平兩大將あんびは爰ぞとときみかたかたづを吞で見する所に、詞小櫻をどしにかげの駒、みかたのちんを一もんじに乗り分矢をもてにかけふさがり、抑是は出羽の庄司が惣領佐藤三郎兵衛次信とは我事なり、本國を出しより露命は君に奉りかばねは八嶋の魚口にあたふ、能登殿の大矢を某心見仕ゑんまの帳のくはんどうにうつたへん矢つばは君と同前と、地つるばしりを三度なで、につこと笑て待かけしはめを驚かす有さまなり、詞教經仁有大將かんにじてさすがはなち得ず、菊王しきつてすゝむれば又げにもやと思はれけん、五人ばりに十五そくからりとつがひ引しぼり、しばしかためてゑいやつと切てはなせば、あやまたず次信がむ

ないたにはぶくらせめてはつしとあたりちけぶりがはつと次信弓矢打つがひ、たつの矢をはなさんひかんと二三度四五度しけれ共魂くらみいきもきれ弓手のあぶみけはなつて、めでへかつぱとおちけるはむざんなりける次弟なり、詞菊王はくびとじんとおり立所に、忠信はるかにはなつ矢が左のひぎにすはと立、どうどふすをのとの守船よりとびをり、菊王が上帶つかんで船ぞこへなげ入給へば、大力に打付られみちんにくだけてゑゝてんげり、是を見て平家の軍兵ふねを乗すて我さきにと、くがへさつと打あがる、兄次信がけうやうと忠信まつさきかければ、わしのお三郎しのお兄弟かれらにつゝいて源氏の兵かけちがへ入ちがへもみにもふでぞ三重「戦ひける軍なかばに、むさし坊辨慶くび二三十じゆすつなぎにして引ずり來り、詞討れしものゝ追善にくびじゆすを思ひ立、今少たらざれば奉加に入て給はれと、長刀長のべ切てかゝればよせてはさつと引たりける、エ、しはい事後生に何がおしいぞと、にぐる敵を追廻しねちくび打くびどうぎりつゝぬき、むれ高松をたてよこに追返し追もどし打立くきりまはるは

すさまじかりし三重「いきほひなり地なみにたいよひ
うせしも有り、人馬にせかれてしするも有かなはじ
と平家の勢、とびのりくふねはおきくかば陣所へ
さつとひく、詞辨慶は立返り討取首をつなぎそへそ
へ、チ、是でこそじゆず一れん地百八ばんなふつくら
んより後生が大事な無あみだ、なむなみだ佛と念佛
し本陣さしてかへりしは、あつばれいだ天ばらもん
天、詞せうき大臣し、王のあれたる、すがたもかく
やらん

第三

地夕がすみ八嶋のうらの松くらく、むれるるかもめ
立さはぎとわたるふねのかぢの音、しんくとして
物さびし、ときのことゝも矢さけ火もいそうつなみに、
引かへて、平家うつりかはれるきやうがいはい、あすの
身のうへおもはせし、あはれもよほすおきつ風、いそ
山ざくら、かつちるも、心をくだく、たねと成いと
物すごきうらはかな、地色中次信がちうきん義經かん
じ思召今一度對面せばや、尋來れと忠信仰をかうぶ

りて、しのぶ兄弟左右にぐしなくく御陣を出ける
が、いざ立わかれ尋ん、としはやのつじよりしゆじ
うはチクリ三方へ「こそはわかれけれ、地色中まだ宵
やみのしほぐもり浦さびわたる春の夜は、心ぞ秋の
夕成すさきのだうの西東、むれ高松の北南奥州の佐
藤殿やおはする、次信殿やおはする、君よりの御詮
にて、弟の忠信が御むかひに來りしと、しづかによ
ふでとをれ共こたふる者こそなかりけれ、地けさは
兄弟つれたりしにこよひはじめてひとりゆく、八嶋
のなみのをと迄もきのふにかはる、心地してなふ次
信殿兄うへと、よばんとするもこゑたゝすみねにひ
びくは松の風、外山のかたにかすか成手おひのこゑ
の聞ゆるを、うれしやそれかとはしりよればむれて
ともよぶつま千鳥、ばつと立てみだれゆく後の山に
こゑするは、しのぶがよばふこたまにて次信とも佐
藤共、こたふる物はなかりけり今は力もつき弓のゐ
るかひなさにかけめぐり、なふ兄うへはおはせぬか
次信殿やおはすると、こゑをばかりによび立く又
ふししづみなげきけり、地色むざんやな次のぶ精兵に
きうじよをゐられ、大事のいた手といひながらしに

もやらすかたわれ船のかたかげにたいよひふしてゐたりしが、弟のこゑと聞やう／＼にはひ出忠信かと聞もうれしくはしりよりいまだ存命ましますかとすがりついていただきおこし、ひたいをおさへ御手はいかにとひければ、今を限の次信我身の事はいはずして、詞君はいかゞわたらせ給ふ御身は手をもおはざるか、地色みかたは何程討れしぞとたへゆくいきの下にさへ弓矢取身の一言と傳へ聞だにあはれなり、詞忠信涙をおさへ君も我にも恙なく軍はみかたのせうりなり、御供申せとの仰せなりぐし參らせんといひければ地中チ、うれしさいごに君をはいし御前にて死すべきぞつれて參れといふ所へしのお兄弟かけ來り、とかうしつらひすさきのだうのやぶれどに、次信をいだきのせさき忠信あとはしのぶがかきそへて、涙にしほれたど／＼とゆくや、東の三雪山のはに月ほの／＼、地色と出にけりわしのおの三郎は次信が心ざし、ちをこそはわけぬ兄弟とむすぶゆかりのくさのゑん、しがいを取置くびを敵にわたさじと、せきくる涙ものゝふの八嶋を尋めぐりしが、面はちにそみうつぶしにふしたる手おひ有、是やはとよ

く見ればかぶとのしころ草すり迄、ちりつもりたる櫻花よろひの絲をうづみたり、涙にくもるおぼろ月小ざくらをどしと心へて、是こそは次信殿といだしづいて歎しが、地色この世ならぬ御こうおんさいごのお供と存すれ共、高名もせず相果ば世の人口も候へば、善敵と討死しやがて追付奉らん、今よりは君なくてたれにか見せんわがすがたと、さしぞへぬいてまへがみ切口をしわつてふくませ二世の契りのしるしぞ、と又さめ／＼となきゐたり地かく共しらで彈正太郎、次信をころしうつぶんをはらさんと、よはにまぎれてありきしが此ていをきつと見て詞ヤわしのおか君よりの御誼には次信ふか手をおふたるよし、敵にくびをとられ見ぐるしきしにをさせんより、腹切らせくびうつて參れとの御事なり、そこ立のけと太刀ふり上る、わしのお手おひに立おほひア、しばらく／＼、ふかでおふたらばかんびやうせよとこそ有べけれ、腹切らせよとは心得すことに忠信某をさし置、いこんふかき貴殿に仰付られんやうなし、しがいは我々かた付申すといへば、偕は御誼をかるんずるか、いやさ何にもせよ次信がくび御へんにはう

せしぞや、詞やれ忠信、おとこは高きもいやしきも、地中わかきとて人ゆるさず、たんきはみれんのはじめとしれ君に不忠存るな、はうばい達に慮外すな、野中のかゝせみをづくしもひとりはたゝぬ世中ぞ、地必人にに、まれな親や妻子もつねぐは、ぶつつと思ひ切しかどおんあいのすてがたさ、只今のなつかしさ次信ほどの者なれど兼てのかくごもさいごにはかはるものとは今ぞしる、これもおことが手本のため語りをくと計にて、たへ入まなこの中よりも涙をはらくとながし、いふべき事も是斗いとま申て我君さま、是迄ぞ弟ちゝぶ殿和田殿むさし殿はおはせぬか、忠信にめかけてたべなむや西方みだ如來と、手を合めをふさぎおしむべきはとしのほど、卅三のまぼろしも八嶋のいそのなみのあは、きへてはかなく成りにけり忠信わつと取つけば、君をはじめ奉りきんじうしもべとねりに至る迄、一度に是はところを上おしみなげくぞ、だうりなる、判官御涙の下よりも、すてはてし身もながらへてあれば有世にいかなれば、惜まるゝ身はとゞまらぬいかなるゑんにか主と成いかなるものか家人と成、かゝる哀を見る事よ

父義朝はしらね共、兄かまくら殿かば殿にわかるゝもかくあらん來世も必主從ぞと、忝くも次信がしがいにすがらせ給ひければ、鬼をあざむく辨慶も、むせ返りゝこゑもおします、なげきける、地かゝる所へ彈正太郎あはたゞしくかけ來り、詞すは御大事こそ出來候へ、わしのおの三郎は次信にはなれみかたに力なきゆへに、平家へちうしんと存候其しさいは、只今敵のしのびの者某討とめ候所に、かへつて某にてきたいしすでに太刀打に及しを、兎角切ぬけ敵は討とめ候といせんの首をさし出す、わしのおついでしこうすれば人々一度にはらりと立わしのおを取まはす、三郎少もさはがず、是々御さはぎ候な、まつたく左様に候はず是あんざい、一疋の馬がくるへば千疋の馬をくるはすとは御へんが事よ、某をざんするのみかしゝたる敵の首取て、しのびの者を討たるとはいかに、彈正聞もあへずしからば汝は敵の首取ル某に、何とて打てかゝりしぞ是二心のせうこといへば、一座の人々わしのおいかにとつめかけける、わしのお涙をはらくとながし申上るもかなしやな、地色中情の兄の次信がゆくゑを尋出るにぞ、心

もみだれちる花にむもれし鎧を次信が小櫻をとしと
めもくらみなげきしづみし折から、次信が首うてと
の御誕なりととりふんじんにきり取て歸り候、せう
こには其首の口をわつて見給へびんのかみの候べし
と、申もあへぬに忠信口をしわつて見てあれば、一
ふさのくろかみ有辨慶物もいはずつと立、詞あん
ざいがわだがみつかんで、ちくしやうおとりの悪人
もんだうするもむやくのさとと木戸の外へかつぱと
なげ、地色かまふな忠信かまふなわしのお、先次信を
辨慶がゐんだうしてとぶらはんと、けさころも着す
るまに義經を始め、大名小名残りなくしがいに手を
かけ給ひけり、詞辨慶はじゆすをしもみ汝元來鐵石
のごとし、極樂もいや地ごくもいや、しゆらたうに
とうりうし、討れてしする平家の勢と冥途にても合
戦して、しやかみだのねぶりをさましゆきたいかた
へつつとゆけと、地だらに眞言くりかけくよみか
けて、のへにおくれる春の夢さめての後の末世迄、
詞ためしまれ成もののぶやと語つたへて残りける

第四

地佐藤庄司の御かたへはなげきをはかり、忠信よ
りわざとたよりもせざりければ、庄司一家の人々は
夢にもかくとしり給はず、たいないにてわかれつる
次信が一子たんじやうせしを次若と名付、西國のた
よりをば明くれまちわび給ひけり、地色中兄弟はつね
づねつくり庭をこのみしに、がいちんせば見すべし
とてさまぐの本草をうへ、岩ぐみやり水心をつく
しいかほのぬまより、ふりよき松を見立させチャク
あまたの、フシにんぶ持來る、地色庄司ふうふ二人の
よめ庭におりて見給へば、詞松のえだちにそまりあ
けに成て見えければ、人々氣にかけにんぶを召いか
なる事とぞ仰ける、にんぶ承りさん候、いせんはか
ろく見へし故にんぶふたりして持ければ、ばつくん
おもくしてとりおとしさきのぶは何事なく、つぎの
ぶうたれてきずをかうぶりさんぐの事といふ、地
はや姫おどろきやあ何といふきがゝりや、いひをせ
と有ければ、はて何と御聞なさるゝ、此松の木を取
おとしさきのぶは何事なく、地色つぎのぶがうたれ候
さだめて命はあるまいと、ものがいはせしつじうら

は後にぞ思ひあたりける、地色中人々けうさめかほを見合しばしことばもなかりしが、詞庄司ゑんを取かへち、めでたし、小松は平家の大將次信がうつたるぞ、地色悦びのしゆゑんせんとおくに立入給へ共はや姫なをもおちつかず、しよせんわが兄津戸の三郎殿をたのみ、此子をつれてさいこくへくだらんとたびのいとなみそこゝに、次若をかきいだき兄のいほりに忍びゆきとかくかたらひ兄弟は西こく、がたへと三重「出羽の國」

はやひめ道行

なじみのくもの、あけぼのや、月になごりておもふには、さきにわがつまあとにおや、おもひきるせときらぬせの、中に立たるみをつくし、此身をつくすあはれさよ、されども津のとの三郎はいもうとにちからをそへ、つき若をあひしては、歌めだにさめたら、せなにきつとおひのとの、ねんねこせ、おとせでおよれのいへまいろ、のゝへまいろ、ゆくかたいづこ水ぐきの、をかのくずはら風さはぎ、フシチク、うらみつ、わびつ、世中のくはいろかへて、あを

ば山、ひくまののべにたつしかも、つまこひかねてかいろとなくはしほらしき、男もやうのころものせき、かすみのせきのなゝへやえ、長地うの花まだき藤ちりてはつほとゝぎすはつこゑをしのぶもちずりたれもみな、きて見よかしの、やつさしくも、うきなへだつるまがきがしま、たらちのさとゝかゑり見る、とまやのをぶり一すぢを、二つわりなるひたちをび、とけてかたりし、むつごとをあだに、なすのゝ春の夢きへつゝ夢の、かよひぢを、我になきそかなこそせき小チクリ花の、なごりのあさか山、坂が手ひきあふてのぼらりよかのほんや、のぼられじ、のぼればくだるもがみ川、をだへのはしのたへていつ、あふぐま川を江戸フシわたれとや、すぎしまろねのうつりかも、いさしろむくの袖のうら戀ぞ、つもりてみな川、そもや情のみなかみはどれゝあれつく、つくばねのみねよりおつる、たきつながれはたけなかに、ひゞきをかせにたゝませて、ひらもとゆひのくろかみ山わけゆく、すゑはむさしのゝ、アゝくさにあこがれつゆにねて、けふ四日五日めになれし、ふじさへ跡にみかはのくにすぎておはりのわたしふね

のりて、はしりて、いせもはや、とまらぬせきのち
ざうだう、にあひくくの、つまをさづくる、ちかひ
くちすなくちなばくちよわがなかの戀は、うつまぬ、
手道つち山や、あふみの海ははるふけて、みづの見ど
りもかげうつる、しげりしみねは八わうし、二十一
社のかみどころ、さるはさんわうまさるめでたき、
御世のしるしは、松もとの、まつはするどくやなぎ
ははでに小チャリたけは、しなへてふしみのさとチャ
リ江口、「かんざきにしの宮、歌夕日のにしきからく
れなるにゆくみづを、くやりくくやりく、くる
くるく、みづくいる、かげひづたひの、さとをこ
へ川をこへづ、山こへて、地谷をこへても一のたに
まだ二の谷三のたに、こゝも此たびつはもののひや
うごの、津よりをひかせの船はみつばのやしまのう
ら、浦なみかけてあしふけるしばのいほりにしばし
とて、やどもとめてぞやすみける、地色あるじの女と
ぼそをあけ、詞此所は源平のかつせんいまだおさま
らず、たこくの人にはむざと宿は參らせず、何方よ
りとひければ津戸聞て、我々は出羽の國佐藤がゆ
かり、いくさの次第兄弟が有様きかまほしくはるば

るのぼり候といへば、地かの女きゝもあへず偕は左
様に候か、みづからは此所のかり人鷺尾の三郎と申
者のあねなるが、次信さまの御かげにて弟は源氏の
さぶらひと成、御おんをうけしもの候、いくさはる
まだおはらねども平家は大かたほろびしよし、つぎ
信さまの御事は能登殿の矢にあたり、はて給ふとや
らん聞しかど、女なればせんじやうへ出たる事も候
はずくはしくは存せぬなり、いざ弟のわしの尾がち
んしよへともなひぢきにやうすをとひ給へといへば
津戸よろこび、しからは御供申さんとはや姫次わか
いほりに殘し、かの女と打つれてぢんしよをさして
ぞいそぎける

次信めいど物語

地いたはしやはや姫次若をかきいだき、あるじの女
の物がたりもし誠ならばいかせん、あはれいつは
りなれかしとたよりまつまのまちどをく、袖も心も
くづをれチャリてとろり「くくの、あだねぶりフシま
くらがうへに、地色こまのあしなみくつわのをとに夢
さめて、いほりの内に入來るを見ればつまの次信小

ざくらをどしのものゝぐかため、しほぐとして見え給ふ、なふ我つまかといだき付うれし、涙をながせし地色下が、やゝ有て能登守の矢にあたり、御さいごとも聞しゆへいかばかりあんせしが、是はうれしき御事とあれば、詞ヲ、すでにしなんとしけれども、たいないにまきすてし情のたねのみどり子に、地色中心ひかるゝしほ時の夜に三ど日に三ど、軍の隙はなけれどもしばしのいとま給はりて、是迄は來りしとさめぐとぞなき給ふ、地時に山なり谷こたへ、天地六しゆにしんどうして大地もさくるごとくなり、地次若わつとなきければ、いやくるしからず又こそ平家がよせ來る、一いくさしてかけちらさんけんぶつせよやと打出れば、平家はよせる波のおも大將をはじめとし、一もんのげつけいうんかのごとく、しんゐのほこさがまんのつるぎ、やいばをそろへあらはれしワキ地ぞらのけしきも引かへてやよひなかばの春の色けふのしゆらの敵はたぞ、太夫ヲ、能登守のりつねよ、謠下あらものゝし手なみはしりぬ、ワキ其一念のうらみのやさき、太夫思ひぞ出る地だんのうらの二人ヲシ其船いくさ今もまた色ゑんぶにか

へる、いきしにのうみ山一どうにしんどうし、太夫五ぢん六よくのかせ立て、ワキ生死のうみのあつごほり大夫とくればみかた、ワキむすべ敵二人はしりかゝつてはつしとうつ、うたれてさつとひくしほのまた差くるは五ぎやくの太刀、なをまうしうの山めぐりチクリく、めぐりて打たちは、大夫地是ごうしやうのりんゑの太刀、ワキひらいてうつはくとんの太刀、大夫とんでうつはじやけんのたち、ワキしんよく大夫とんよく二人きづなのたち、きつてもついてもゐてもうつてもたゆまぬは、しんくゐごうの三ごうの、こんはめいどにいたれども、大夫はくは此世にとゞまつて、ゑんにひかれものにふれ、又立返るいそのなみ、ワキ諸舟よりはときのこゑ、大夫くがにはなみのたて、ワキ月にしらむは大夫つるぎのひかり、ワキうしほにうつるは、かぶとのほしのかげ、二人水やそらくゆくも又くものなみの、打あひさしちがふる、ふないくさのかけ引うきしづむとせし程に、はるの夜のなみよりあけて、かたきと見へしはむれゐるかもめ、ときのこゑと聞へしは、うらかせなりけりたかまつに高松に木隠れて見へず、成にけり、地色つぎのぶいほ

りにはしり入見給ひたるかあの如く、日夜のいくさはしげけれどもせのちぎり此子をも、あひた見たさに來りしと、つぎ若をひぎにいだきのせなみだにくれて見えにけり、地かゝる所へ津戸の三郎、鷺尾兄弟忠信諸共歸らるゝはや姫はしり出なふおそかりし、次信殿も待かねて御入といふ、詞人々をどろき、しゝて程ふる次信是に有とは夢ばし見たるかうつゝかといへば、はてさいせんより御出にて次若をてうあいします、地色先入てあひ給へといひけるにぞ、なをしもふしんはれね共いはりに立入見給へば、なむ三ぼう次信がおもかげは小櫻をどしのものゝぐに次若斗いだき付有しかたちはなかりけり、はや姫是はとすがり付なふ次信殿我つまと、よべど叫べどこゑもなしものゝ、あはれのかぎりなりはや姫涙の隙よりも、くどき給ふぞだうりなる、偕もくみづから程よにあさましき者はなし、かりそめになれ參らせみとせにたらでわかれし事、すぐせいか成むくひぞやせめてをんあいのよしみには今一度次若が我つまかとなどや詞をかけ給はぬ、なふ次信殿くゝと、かひなきよろひにいだき付ふししづみてぞ、なき給

ふ、誠にふるさとの庄司殿かく成給ふとは露しろしめされずし、やがてがいちんし給はんとあけくれ待わび給はらん、是に付ても過し比つくりにはをきれいにとて、ふりよき松をもとめ給ひ、兄弟が歸りなばちそうにうへをきみすべしとて、あまたの人夫持來りおもくてあやまち仕たりしと、いひし詞の氣にかかり心もとなう思はれて、取あへず上りしがむなしくならせ給ふとの、偕はつげにて有しよな生は死のもといあふはわかれといひながら、思へばくかなしやと、天にあふぎ地にふしてりうてい、こがれなき、たまふことはり、せめてあはれなり、忠信涙をとどめかね、詞偕はうつゝにたましゐのさいしをしたひ來り給ふか、などや某にもみへさせ給はぬ兄うへと、よろひにすがりなげくにぞ鷺尾兄弟物にさはがぬ三郎も、小手草ずりに取付て人めも、わかずなきさけぶめもあて、られぬ次第なり、地色あんぎいの彈正太郎は御前にてちじよくを取、ぶしのまじはりならざるも彌きやつらがなすわざと、一みのあくたう引ぐし跡より付て來りしが、詞とばそけやぶり無二無三にこみ入ける、心得たりと忠信次若をみだきと

る、津戸おもてにかけふさがり、ム、汝は聞およびし
あんさいな、うれへにしづみしよはみをくひ我々を
うたんとは、おのれは命に持あぐんだな、いくさせ
まいとせいもんは立たれ共おのれをころすはねずみ
ぞと、いふよりはやく引つかみをつぶせ、そば成大
石をとつてせばねにどうとをしかけ、サアねすみ殿ち
う共いへと、地ごくをとしにをしつくれば、五たい
くだけでしてんげり、なをもすゝむやつばらを四
方へばつとおつちらす、人々悦び立かさなり、日比
のいこんをさんせし事まうじやも悦び給ふべし、い
ざやばたいをとぶらはんとかねて次信きへしたる、
都法然上人も頼み申さんこなたへとて、都路さして
上らるゝ源平兩家の物がたり、ものゝあはれは多け
れどかゝるためしはしやうこにも、又まつだいにも
有べからずと皆人、かんするばかりなり

第五

地四海なみしづかにて國もおさまる時津なせ、はや
うちの使として源八廣綱院の御所にはせさんじ、詞

偕も九郎判官義經朝敵ついたうのゐんせんをかうぶ
り、八嶋だんのうらあかもじがせき、所々の軍に
平家の一門ことゝく討ほろぼし、宗盛ふしをいけ
取天下太平の御代と罷成候條、内侍所印の御箱こと
ゆへなく、都へ入御なし奉るべきよし謹でそうしけ
る、地色法皇ゑいかんあさからず廣綱に兵衛尉を給は
り、源八兵衛と召るれば、卿上うんかく洛中洛外近
遠の民百姓、源氏の御代は萬々歳千秋樂とぞ祝ひけ
る、地色偕廣綱は御簾ちかく参りいくさの次第御物語
仕れとの給へば廣綱承り、詞せんじもだしがたく候
へ共、出羽の國佐藤次信と申者、義經の命にかはり
討死仕て候かれがしんぞく新黒谷にて追善の佛事を
取まかなひ候ゆへ義經が代參としてゑかう仕べきよ
し申付て候へば、地色先黒谷へこそと申上れば、尤し
ゆせうの至なりと御いとま下さるれば、廣綱は悦び
の袖にもあまる身のみやうがとたいしゆつ、するこ
そ三重「面目なれ西のむかへの、地色しうんざん新黒
谷には次信が追善四十八夜もけちぐはんにてはや姫
次若さんけいあれば、らうにやくなん女ぐんじゆし
てゑかうをなすぞことほりや、地色かくて法然上人は

御弟子あまた左右にぐし、かうぎにあがらせ給ひける源八兵衛廣綱は、義經の名代にて大黒といふ名馬、判官御ひざう有けるを次信度々所望せしが、はうばいのそねみとてついに下し給はず、御しうたんのあまりにやまうじやにおくりひかるゝとはかのめぐりを三べん引てめぐりければ、馬も毛をふせみゝをたれしほれしふせいぞあはれなる、詞しばらく有て津戸の三郎參詣す、蓮生坊座を立てヤア、御ぶんはつとの三郎か我こそ熊谷入道よ、命あればあふたよな、先此度は力おとして忠信鷺尾などは見へざるか、三郎津戸といへ共さらに返答せず、心しづかに忍かうする、詞蓮生はらを立こりや津戸、法師と思ひ近付をもどする、奉加帳も頼まい見ぬ顔するなひけう者といへば、エ、かしましひけうとはわ僧が事よ、ム、此坊主ひけう者とは何事ぞ、詞やれ侍はな、親兄にはなれてもしがいをしのかいくさするをぶしといふ、忠信鷺尾は次信がうれひ有といへ共、いくさおはらねばはかへ參らず、かういふ津戸もしさい有て侍はやめたれ共、あんざいの彈正太郎といふ悪人をうつたるぞあつ盛の情か有、いやむじやうをくはん

するなどゝてぐんちうより出家する、是は何とひけうならずやといへば、蓮生大手をたゝいてかつらかつらとわらひ、こりやばんぶ、小せうをもつて大せうははかりがたしくそうかふようは太刀も刀もいらばこそ、地色念佛をもつて切はらへば力をいれず、三がいに敵なくあんやう極樂せかいといふ、めでたき國の大將軍とあふがるゝ、詞是が何とひけう物かといへば、時に法然聞給ひ、津戸のふしん尤々ぶしの心にて一筋にふようをこのまば其通、せはにも申ごとく佛法とかやらの雨は出てきけ、地色ひろく見るにしくはなしぐそう印を見せてうたがひをはれさせん、是に立たる五りんのさう四十九のあな有、是わうじやうのこじつ能きに給へかたぐ、詞それ人間しゝて四十九日が其間四十九本のくぎをうたる、かるがゆへに念佛壹萬べんにて壹つのあなをふさぎ、四十九萬べんにみつる時五たいくそくしわうじやうす、地色中されば次信がとぶらひも念佛のたじなく、今日迄四拾八萬べんくしやうせり、今壹萬べんとなへなば此あな残らずふたがるべし、是を見てほつきあれ、南無阿みだ佛とかいひやくあれば、皆念佛を

ぞ三重「申ける地七々四十九萬べん十念を下し給へば、五りんのあなふたがりてゐはいより光さし、五りん四方へわかるゝと見えけるが、次信がおもかげ、五たいにすほんくぎをうたれチャクウつの、「ごとくあらはれて、地色をのれとくしやう念佛して打たる釘は一度にぬけ、則往生極樂のかたちを見せてうせければ、さんけいのきせん一どうにあつと、はいする計なり、地色津戸一念ほつきして、有がたしゝもはやぎしんははれたりと、もとよりふつと切てすて、詞をしはだぬいて太刀をさか手に取なをす、蓮生をしとゝめ是何事といへば津戸聞て、念佛のくりにて往生せしを見ながら、しやばくがいへんじもながらへ何かせん、はらかきやぶり極樂へはやくゆかんといへば、頼もしき大くはつの佛者かな、去ながらいかに念佛申ても、しゆぎやうのこうつもらでは往生は成がたし、いやゝ一念みだぶつと聞時は十念も一念、百年千年申ても一念が大事、地そのけといふまゝに弓手のわきよりめでのわき迄引まはす、一門たもん出家達はゝと立さはぐ、詞いや是めでたき往生かなしむなとをししづめ、地サア蓮

生只今ぞと、けつかふざして待けれ共しなんすけしきはなかりけり、詞蓮生そばより何と往生はといへばいやまだしなす、たいないに人間の五ざう六ぶ有ゆへかそれ引出せ、蓮生心へたりと、はらわたをくり出ずんゝに切てすて、サア何と往生はいやまだしなす、ゐまだにくしん有ゆへならんさがして見よ、地色蓮生兩手をさし入是爰にこそと、ゑんゝたるくれなるの一つの玉を取出す、人々是はと見るうちに虹のやう成おを引て、玉はこくうに西のそらくもを、かけてぞ三重「とびさりける地是ぞ我一念のあみだ佛、有がたやとはいすれば皆一どうにらいはいす、地法然わらはせ給ひ、いやゝ誠の佛ならず、人間しやうゝの佛性はゑたれ共、ぼんなふに引れ佛心をくらまかす、地色善惡共に一つなれ共、わかるれば二つと成、詞只今去しは衆生心誠の佛は念佛せよ、地なむ阿みだ佛と御手を合させ給ひければ、ふしぎや津戸がたいないより又かくやくたる玉一つ、れきれきとあらはれ出、うかべるくもむらさきに光りをはなちみへ給ふ、地法然御覽じあれゝ誠の佛性よ、いせんの玉も汝が心あの玉も汝が心、心と云意

識と云、善と成惡と成ごしんのみだ共とかれたり、今念佛のくどくにてゑどのたいは離るれど、いせんに去たる惡心天にこつておほふがゆへに、本心ちうのくもにまよひ、我心我をせむとは見よく佛法もくせんたり、地ごくも心極樂も心、うたがひの念をさり念佛せよとの給ふ時、黒雲長夜のやみとなつてらいくはでんくはうこくうをくだき、我惡心のたましゐ又立返ると見えけるが、くれなるの鬼火車を引るぎやうの惡鬼くびきををし、雲にとゝろき來りしはすさまじ、かりける三雪次第なり地天地にみつるこゑをあげ、詞抑我津戸三郎がしんはくにやどつて年久し、今念佛の光りにやどりをやかれこくうかに歸す、汝も我我も汝たり此車にせうじて來れ、まかにゐんだうして佛法をやぶり三がい皆我道に引入れん、來れくよばはるはなるいかづちのごとくなり、地色其時ふしぎや玉中に妙成こゑ有て、汝何者ぞ我は是津戸三郎が心に住せし佛性、汝又たいにやどりし衆生心六こん六よくしんゐぼんなふしゆらちうどう、皆是めに見みゝに聞、形にちうして我佛心をくらませし、惡心かたちをはなれてはすみや

かにめつすべし、此佛心ははかりなき命の佛極樂へゐんせうせん、來れくよと玉中よりなをも光明へんせうたり、詞其時惡鬼いかりをなし、よし汝はともかくも形にちうせし我なれば、津戸がかばねを取てゆかんと、地色みやうくはの車をし出す、時にかの玉とび上り、もへたつほのほの車にうつらせ玉ひける、地惡鬼力を出せ共車はばんじやく、山をおすがごとくにて兩りんきしりてはたらかず、各あつとはいすれば玉の中よりなむあみだ、な無阿みだ佛と十念を下し給ふと見えける時、津戸は極樂往生す玉はひらけてみだ如來、惡鬼は二そん車はれんげ、ほのははすいしき雲中に諸菩薩諸佛らいかう有、天人をとめぶがくをそうしなゝたびかへすおみ衣、なづともつきすさいれいしいはほと成て松たかき、詞今につたふるげんじの御世萬々、歳こそめでたけれ

津戸三郎終

義經追善女舞

第一

次第矢立の杉のふかみどり、く、心のまとをいのらん抑相州矢たての杉と申は、八幡宮の神木にて、詞一とせあその権のかみが吉れいより、カルしゆつちんのものゝふうはざしの、かぶらをけんじてぶうんをいのるに、一としてせうりをチロシえずといふ事なし、地さるによつて曾我の十郎祐成、同五郎時宗も、しやうぞくあらためけつさいし神木の左右に立わかれ、今はうなふの中ざし神靈なふじゆましまさば、親の敵祐經を討せかんおうあやまたせ給ふなと、くはんねんかたく引しほり手さきあがり切てはなす、祐成は一の枝時宗は二の枝にはひきしてこそ立てけれ、チ、有がたし悦ばし、某は一の太刀我等は二の太刀うたがひなしと、手のまひ足も地につかず悦ぶ心ぞ道理なる、地色時に鬼王申様、詞是に付吉事を承て候、先年衣川にてうせ給ふ判官殿の思ひ人、静と申白拍子義經なく成給ひて後、かみをそり衣を

そめ妙音比丘尼とひじり切て候が、義經の御追善いとなまんだめ、大磯小磯の白拍子をかたらひ、扇が谷にて一世一度の勸進舞を興行の由、地色今日は御敵、工藤祐經が御申にて鎌倉殿の若君、頼家卿御見物に御出と承る、くつきやうの折でさめれうかゝひ、給へと申けり、地色兄弟彌いさみをなし矢立の杉の御れいげん、はやくもあらはれたりけるかなけふと云けふ年月の、むねをひらかん扇が谷たゝみかけつゝ敵をば、討ばや波のよせ太鼓こゑを、しるべに三重「急がるゝ、名も高やぐら、地天にいのりをかけまくも、かしこき御世や太平と二本祝ひに立にけり、偕又ぶたいのけつかうには、紅ゐこぞめのあげまくに錦の水引かゝやきて、女かぶきのさすがまた四本ばしらふしなしも、うきふしこめてなまめかし、見物老若くんじゆして、色をかさぬる花道のすぐ成御代こそしられけれ、地色偕西の棧敷には鎌倉殿の御嫡男、源の頼家卿御年は十九歳、世取の御きりようあらはれさせ御るせい有てたけからず、御座についで梶原源太が嫡子同平五景早、工藤左衛門祐經はおもてなしのていしゆなり、さじきの下前後左右にぐ

ぶの諸侍伺公する、偕又東の棧敷には、若君の御お
ぢ蒲の冠者範頼忍びて見物ましませし、此蒲殿は頼
朝の御弟義經の兄君成けれ共、正直斗を面とし、人
の善惡はにきぬきせず一てつむはうの我まゝ故、時
のきにあはずしてわづかの所領ををこなはれ、かゝ
る物見の御遊にも世にひそやか成有様なり、じこ
くうつれば諸見物はやう初めいゝと、口々によば
はりしこゑの内よりはやしのやく、ぎしきたいしう
立出て次第くに着座する、地跡より大夫妙音比丘
尼、かうぞめの八とくにすりゑの長けん扇たづさへ
チクリぶたいの「さきに一禮し、色地しばしなりをし
づめ、東西く、詞偕憚ながら申上侍ふ、此度自が
女風流御見物あられんとて、れきくの御かた様早
早地色よりの御出は、袂にあまるあま衣返すくも有
難く侍ふ、それに付此度の興行、身命つなぐ玉むす
びにも又名をしられんともあらず、わらは靜の昔
九郎判官殿に思はれ參らせ、長生殿の御情驪山宮の
さいめごと、きへてかひなき水のあは、衣川のわか
れより、岸にはなれねなし草、露計の御手向もと、
思ふに叶はぬまづしき身、哀御見物のあたひをもつ

て、佛をもきぎみなき人の御ぼだいを吊はんため、
面をさらしはづかしのもりてあまれる我涙、不便と
思召れよと人めも、わかぬ有様に、見物くんじゆをし
なべて皆々、袖をぞしぼりける、や、詞我身のかなし
みに御たいくつを忘れたり、偕今日仕るは、妻戀猩
猩と申にて候、則大磯の風折舞かなで候、地色とかく
おなじみなにはに付、あしき事をもよしなしの御ひ
いき頼上參らすると、立歸るはしがゝりより大夫さ
まどうもくと一度にどつとぞほめにける、地かく
ててうしを取々の、酒に妻よぶ猩々のみだれ心も諸
老せぬや、く、藥の名をも菊の水、盃もうかみ出て
友にあふぞ嬉しき此友にあふぞうれしき、みきと聞、
く、地名もことはりや、秋風の、ふけ共く、さらに
身にはさむからじ、ことはりや白菊のことはりや、
白菊の、きせわたをあたゝめて酒をいざやくまふよ、
まれ人も御覽すらん月、星はくまもなき、所はじん
やうの、江の内の酒盛猩々舞をまはふよ、あしのは
の笛をふき波のつゝみどううち、こゑすみ渡る、
浦風の秋のしらべや、残るらん、地色ぎがくなかばに
工藤祐經御棧敷にゐたりしが、ぶたいへつつと飛出

あらふしぎや、詞あのたいこやぐらにあみ笠きたる男二人ぶたいをば見物せず、御座にめをはなさぬはくせ物あれ召とれ畏て、地色やりぶすまをつくり取まはす、詞ア、是々そつじあそばすなと、地色飛でおるるを四方よりかこんだり、祐經立寄見るよりはやくやあ、詞わとのらは曾我兄弟よな、チ、合點たり大御所頼朝公は、ごぶんらがために祖父の敵、さるによつて若君をうかいひ奉るにうたがひなし、儲々命しらずかな是々梶原殿、某とは一門なれば、みと覺さんも迷惑なり、急度せんぎ有て拙者があかをぬいてたべ、景早聞いていやさ、地色せんぎ迄もなし先からめよとひしめければ、兄弟大事のばを見付られ殊に君をねらふといひかけられ、とかうのいひわけにたうわくせられしが、ちやくと祐成ちんじらる、詞いや是各は存もよらぬなんだいを宣ふ物かな、此上はまつすぐにあかし申さん耻しながら聞てたべ、某今日の舞人大いその風折に内々心をかけぬれ共、地色身がひんなればけいせいにも見すかされ、餘りつれなく候故せめて一言の恨申さんため、かくの仕合おりわるく参りあはせて候へば、只々御しやめんかうぶら

んと誠しやかにのべらるゝを、風折樂屋にて聞付するゝとはしり出、詞やあ御主さまは誰人なれば名もしらすかほもみず、けいせいこそいたせひんな男とてすてはせず、地色思ふと云人達へは品によつてあふてもやる、よしはあふてやらぬとてもむげない返事は一度もせず、大せいの人も聞に身がひんなれば女郎がつれないの、いや風折は戀しらすの情しらすのなんのどゝて、けいせいの一分するやうのいひ分さあ、いひわけはやくしや、どうぞゝとこゑふるはし、すんとしたために玉こぼす是戀しりのかんばんかや、地色本より祐成跡かたもなき事なれば、返事ぐどつき見えければ時宗おつとり、詞いやゝそなたのしらぬ事もあらん、かぶろを頼み文をさいさいやられしといへば、地色そんならかぶろに尋ぬべしこいよ竹之丞、地色こいよゝとよぶ下よりあいとこたへてはしりくる、兄弟はつと思ひながら是々竹之丞、詞そちに中立頼しを、しらぬといへば我々たちまち爰にてころさるゝ、地色たすけふ共ころさふ共、其方次第と有ければ一めもしらぬ竹の丞、有しやうにていかにもゝ私を、あのさま度々頼ませしか共

悪性のつかひすなと、親方や手の云付ゆへ文の數
數火にくべて、中にて返事致せしぞやあのさま達に
とがはなし、いとしぼなげにこらへてやらんせと人
の顔色みて取て、しらぬ事をも間にあはせにつこら
しげにいひこなし、人のなんぎをすくひにしかぶろ
のりはつぞかくべつなる、地祐經眼を見出しなまこ
しやく成うそつきめ、をのれがせうこに成べきか只
からめよと云所に、蒲の冠者範賴棧敷をひらりと飛
でおり、しらぬの長刀かいこふで曾我兄弟に立かこ
ひ、祐經景早をはつたとにらみ、びく共せばまつか
うに切付、給はんいきほひなり、地兩人こゑを上は
あ、詞しれたく、曾我兄弟をかたらひ蒲殿の御む
ほんぞ、御ゆだん有地なと云もあへぬに賴家太刀に
御手をかけ、御きしよく、かはりみへ給へば、蒲殿
御覽じからくと笑ひ、偕もく笑止千萬、龍は一
寸より其きざし顯はれ、びんがはいこの中よりこ
ゑ有とや、ゐこく本朝にもたぐひなき、名大將とよ
ばれ給ふ賴朝の嫡男共覺へず、某むほんの心あらば
かゝる牢人風情をかたらふべきか、誠のむほん人が
しりたくは、是成梶原祐經のよ、くはんしよはたの

しんでゐんせず君子はざぐをみずといへり、いま
だ平家のよるいしづまらず、又義經が重恩の侍恨を
ふくむも多かるべきに、其用心もなくあのねいじん
めらに心をゆるし、見物遊興に我を忘るゝ愚將にて、
源氏の代をたもたんとは心もとなしおぼつかなし柳
公權がやつこははいうを盗み、張之定がやつこは銀
器をぬすむ、けいはくしゆれんのねいじんを見しら
ざるはかなさよ、詞是某がけふの見物まつたく遊興
にあらず地色天下をたいせつに思ふ故、若か様の事
もあらばとけいごのために來るなり、かく忠節の某
を、あのうづむし共めがそれ逆心とおどろかせば、
けでんし太刀に手をかけ誰をきらん心ぞや、詞やい
ごくどうの祐經め、をのれは曾我殿原が親の敵たる
故うるさく思ひ、鎌倉殿をねらふとさへ誠せわに
いふ、やくびやうの神にて敵を取るべき手だて、地色
云まいく此上にも、曾我兄弟にゆびでもさせ某が
相手ぞと、大長刀をふり廻しびしやもん立に立給ふ
はすさまじ、かりけるいきほひなり、地面目なくも
祐經はわなくくとふるひながら、申わけは候へ
共、詞所もわるし折わるし爰は拙者がおとなしく、

地先あやまりに仕らん、いざさせ給へ我君と御供申
立けるが、はるかに行てふり返り、けふ計はあやま
る共いひ所でいふてみせんと、いかつらしくいひけ
れば蒲殿腹筋をより、詞やあ犬のにげばえせず共か
へす時にはやく歸れ、地いでくけふのきり狂言に
某が劔の舞、一さし舞てかへさんと長刀取のべふり
廻し、ぶたいの敷板どうくくく、どうくくくくと
なるは瀧のみづ、なるは瀧の水車八方花がた手をつ
くし、偕長事の御たいくつ惣やうさまへのおいとま
ごひ腰の廻りの御用心、又祐經や梶原はくびのまは
りの用心せよ、あぶないく追付く千秋樂と、曾
我を祝て和歌を上、名をも上たる高やぐら、太鼓の
音はつててんてん、てんがらくてんがらく、て
んがらくがらくくくく手がらくとほめざ
る、人こそなかりけれ

第二

右大將賴朝卿四海太平に治め給ひ、賞罰正しくまし
ませ共梶原源太景末が嫡子、同く平五景早とて、父

にをとらぬねい人の、ッシ近習に有こそうたてけれ、
地其比備前の國吉備津宮の神職、大藤内といつし者
工藤祐經が取次にて、御前に伺公しふしぎの事を言
上す、詞さんぬる七日の夜吉備津宮の寶殿めいどう
し、風もふかぬに神木の枝た、かふごとく相うち候
故、ねをほらせ見候へば、あやしき箱の候に付早速
持參仕候と御前にさし上る、地賴朝御覽じそれ急ぎ
ひらき見よ、畏て人々ふた打はなせばもつたいなや、
わら人形に紙しやうぞく、ひたいに源の賴朝と書付
むないたふしぐつがひくに白羽の矢をつき立
て、朱うるしをもつて八幡の御使、蒲の冠者範賴敬
白と書たりけり、武將暫あきれさせ給ひ、偕もく
淺ましや、九郎が事はぐんらうにほこり、賴朝が敵
と成べきざしを察しちうばつしぬ、又範賴はおさ
なきより我まゝきずいのいちばりなれ共、心あくま
で正直成しがあつばれ天まのしやうげならんと、仰
もあへぬに工藤左衛門すゝみ出、詞御れんしの御中
を申はいかに候へ共、さんぬる比若君がく御遊
覽の折から、蒲殿伊藤が世倅共をかたらはせ給ひ、
御棧敷近く取かけ給ふを某梶原事をたし候へば、

却てさかねだりにし引取給ひ候、地色彼是存合すれば
逆心うたがふ所なし、と申もあへぬに梶原平五いか
様天下の御大事は蒲殿ならめと、諸大名の風説今存
あたり候と、手をそろへ讒しければ頼朝彌御機嫌そ
んじ、天命しらずの大悪人幸頼家が軍の手ならひ、
梶原祐經付そひて、をしよせ切腹せさせよと、三千
餘騎をたびければ、じするに及ばず頼家はうゐぢ
んの御門出、よろひにかはる花あやめ蒲の屋形へ三
重」をしよする、範頼かくと、地聞給ひ引うけてはあ
しかりなん野合の軍見事にしすみやかに腹きらんと
二百餘騎の手勢をそつし伊豆とさがみの堺川、波の
白はたなびかせて、今やをそしと待給ふ、地じこく
うつさず三千よき馬けぶりを立をしよせときをどつ
とぞ上にける、頼家駒を一ぢんにすゝめ、おぢにむ
かつて弓引は其恐れ有といへ共、父頼朝の命に應じ
頼家むかつて候ぞ、御腹召れんにおいては御かいし
やく申さんと、聞もあへ給はず蒲殿大音上、詞ケニ
忠孝有兄弟をほろぼし、しきよくにおもねるやつば
らを見しり給はぬ兄頼朝やわぬしらが、地つぶれし
眼をきりあけて善惡をしらすべしあれふみちらせ承

ると、雨ぢんたがひに入ちがひおめきさけんで三重
「たゝかひける地範頼ぶさうの手きゝにて、自身のは
たらき御家人も火水に成つてふせげ共、三千よきに
二百よき皆悉討なされ、今は是迄と腹をきらんとし
給ふを、めのと子の刀禰川太郎をしとめ、エ、いひ
がひなし無實の御腹めさんとは、口惜き御所存かな
御命まつたうし、悪人共が行末を御覽せんとはおぼ
さすやと、様々せいし天のあたへとあるほらにかく
し參らせ我身は小高き所につけあがり、詞清和天皇
のこういん蒲の冠者範頼が腹切をみて手本にせよ
と、地色心もとにつき立十文字にかきやぶり、太刀を
くはへはるかのきしへまつさかさまに落ければ、う
すまく波のそこはかなくもしがいはいしづみうせにけ
り、地よせてのぐん兵いち同にすはや蒲殿討死ぞと、
ゑびらをたゝきかちどきつくりチャクリさいめき「あふ
てがいぢんある、地色偕も梶原祐經はしんがりにとて
ひかへしが、さはなく祐經景早に向ひ、範頼は討ほ
ろぼすもはや無念ははらしたり、いざ此度の一禮に
大藤内を慰めがてらこよひ大磯へ立越て、曾我兄弟
をひいきせし彼かぶろめをひしいでくれん、尤々よ

からんと、くるわ一番くろがうし長が一家の女郎を、三日三夜あげづめとさきへ使をはしらせて、是やけいせいかいちんといさむ心も三重「なまめかし、なさけのもりの、下道を、地けさふみそむる新客は、誰とかこよひねざゝはら、かぶろの時に竹の丞とよびし其名により竹の、虎御前と改めて思ひよるべの水あげや大吉日の初賣に、一家の女郎打つれてあげ屋揚屋を廻らるゝ、右のあしから、くりだしあゆみ一ゆりゆつて、ふり袖や、えんでんたりしひたいのきは、せんげんたるおひさがり、生れ付にてつくるはすすんとして又、にくげなく、戀の初苗二ばより、松のくらゐのそなはりて三百六十餘ケ日はチャッお隙「あらじと祝ひける、地爰に曾我の兄弟は、いづぞや芝居にてのなんざかぶろが詞一つにて、大事の命たすかりし其一禮をと思ひ此所へ來れ共、早其かぶろは虎御前とて、今日よりくがいのつとめ水上とてざゝめけば、兄弟むさ共よりつかずしゆびもがな一ことの、禮をいはんと跡に成先に成付まとへば、つれの女郎やり手などぞめきの者と心得て、きの通らぬうつじんやとくつ／＼とぞ笑ひける、地色さ

れ共虎はめかどつよく、曾我殿原を能見知、はてわる口をいはんすな、すいだてする男よりむくなお人がかはいらしよしない事をといひすてゝあげ屋の、内へ入にけり、地祐成是ぞ思ひのたね、弟にさへつつまかねあれ聞たるか時宗、先度といひ今といひ、我をたすくる情の詞、エ、牢人の身ならずは、一夜買て禮をもいはんにひんせんなれば力なし、こよひは此邊にやすらひ虎がもどりを待請て、せめて詞の禮いはんに先こなたへと兄弟は、茶屋のみせさき御免なれと夕ぐれ、かたにぞ三重「成にける、かゝる所へ、地祐經景早は大藤内をいざないて、あげ屋に入れば出口の茶屋たいこおろせはしり出、水上のだいじんさまのみゆきなるぞとどさめいて、やれお盃よお肴よ先ひいやりと吉野川、くす水などともてはやすさはいこつがらきさんじなり、地待まふけたる事なれば、新造の虎大夫天しよく各座敷にゐながれけり、祐經虎をつく／＼みて、偕々見事な新造じやが能々みればかぶろの時、詞竹の丞とやら名をいひて、一めもしらぬ曾我兄弟がひいきし我々にはちをあたへられしがなふ、世はしれぬ物、御身のひいきめさる

曾我殿は、す牢人にて金銀はすつきり祐成、地父我
我はにくまれても、かねが敵の賣物にてけふより三
日買きれば、たてふともふせふ共、三日三夜は我々
次第なんといしゆさうではないか、かねの恩の有
がたさ、いふにいはいはれぬ山ぶきの花の露はつゝは、
まはれゝとのさばれば、女郎達興さまし座敷しら
けてみへにけり、地ていしゆからゝとけいはく突
ひし、これやおもしろい旦那のわるがう、ならすの宮
の禰ぎ殿へおみきをさゝげて太神宮を、勇めん勇め
んいざいさめんとてうし盃持て立、詞大藤内氣色し
やいていしゆ、ならすの宮の禰ぎ殿とは某にあてこ
とか、地吉備津宮の大藤内ぞあなどつてけがまくる
など、眼をいらゝげはつたとにらむ、祐經景早打笑
ひいやは藤内、詞今時はやるかる口にて誰もいふ事
氣にかけるゝな、これやていしゆ、大藤内は見か
けとちがひずんど心のやさ男、我々ちそうせで叶は
ぬわけあれば、新造の虎殿は大藤内にあはせんとい
ふ、地虎はつと思ひしが、さあらぬ體にて座敷をた
つ藤内すがり引留め、詞フム某をふらるゝ體是、おと
ここそげびたり共、地吉備津宮のかぐら錢參錢共に

打こみて、つゞけ買をするならばふり度てもふられ
まい、よしぶらばふれゝ歌ふるやこづまがいとし
なといだきつくをつきこかし、エ、けたいのわるいと
はしり出れば祐經追かけ、なますいさんな小めらう
めと、やにはに取て引もどせば、すは御機嫌がそこ
ねしと亭主やり手立さはぎ、新造の氣みじかなだい
じのお客を何事ぞと、たゝみかけてしかれ共虎は少
も驚かずはてけたゝましいどうぞいの、詞女郎の客
をふるが何とめづらしい事か、地たとひ身あがりし
一ごけいせい身でくらすとても、あのやうなかさ
ねぎに水上は頼はせぬ、大名高家のゐせいにも自由
にならぬはけいせいぞや、かうなつた上からはこん
りんざいふつてみせふ、あたいまゝしけがらはし
と涙をながすぞ道理なる、地祐經景早大きにいかり、
すいさんなる小めらうめしよせん鎌倉殿へ申上、け
いせい町を法度にし、けはひ坂大磯をくろ土にして
くれん、いざ立給へと立んとす虎が親方くるわ中、
おどろきかけつけ何分にもおはらのゐるやうに仕ら
ん、まつ平おゆるし下されよとおひぎをだいてわび
けれ共、詞いつかないかな、我々が同道の人新造づ

れにふらせては、けいせい買の一分たゝずびやくら
いきかぬといちばれば、地長は虎にしがみ付やい爰
な女、かぶろの時からかひそだて物いれて仕立るも、
をのれらにかゝらんため今から客にえりきらひ、後
には何と成べきぞおわびごと申上、御機嫌をなをさ
ぬかさなくははしに引おろし、青のうれんのすまゐ
じやがとさんぐにちやうちやくす、虎はひるまず
顔ふり上、儲情ないしわざ哉打てはらだにゐるなら
ば、腹のゐる迄打給へかうしたいぢに成からは、い
か成うきめにあふとてもそこはいとはすどう成共、
心まかせに、し給へと聲をあげてぞなきゐたる、地
長者こらへす取てふみ付情なくも衣裳をはぎ、木綿
布子をきせかへて、詞某よくをはなれかやうの體に
仕り、はしへおろし候上は御堪忍下されよと、地手
をすつてわびければ、よいきみ／＼木望ぞ、儲も長
はきさんじ者、是を肴に酒のまんと、どつと笑ふて
入けるはむげな「かりけるしわざなり、地はやくる
わ中きたすれば、曾我兄弟聞付てはがみをなしゐた
りしが、五郎きかぬ男にて命の親の虎成に、はぢか
かせては見てゐられじ飛で出るを十郎引留、詞やれ

まで時宗たんきなり、傾城と云者は何事も親方次第、
地金銀持てうけださねばこちのあやまりそつじす
な、しづまれ／＼とせいすれば鬼をあざむく時宗も、
金銀と云に行あたり口惜さうにこくうをながめ、エ、
たつた今此所へ五千兩程ふつたらば、其親方めをは
ひまはらせ虎がゐせいをあぐべき物、儲々無念と思
へ共是非ない袖はふらねば、うでなどふつて歸らん
とこぶしをにぎり力足、とがなき草木をふみちらし
曾我の里へぞ歸らるゝ、虎が心にくもでかく、いも
せのはしのわたりぞめ是や戀路の手本ならめと皆
人、したふてかよひけり

第三

春過てよそのみやまは夏木立、爰は涙の時雨して我
身一つの秋の菊、曾我兄弟の母上は晝は夏書し花
を摘、夜は法華經をとくじゆして妻の河津のぞうし
ん佛果、子共が行末げんあんごせんせう大ぼだいと
ふし拜む、涙の露もくるじゆすの玉につらぬく計な
り、地かゝる所に祐成は御前にひざまづき、詞いつ

もく同じ様の御せうに候へ共、五郎めが御勘當
又地申上度候と、聞もあへず母公いや是なふ祐成、
詞きけば御身兄弟は祐經を討んとて、鎌倉殿の若君
芝居御遊の御座近く忍び入見とがめられ、既にあや
うかりつるを蒲殿の御力、又傾城のかぶろとやらん
が情にて命たすかり歸りしとや、地さればこそ自が
常々も云ごとく、鎌倉殿は討とても祐經は討れまじ、
却て命うしなひてなげきに餘る此母が、思ひに思ひ
を重ねさせなと兼て云しは爰ならずや、もしもの事
の有ならば母は何とか成べきぞ、なげきしねとの心
かやア、情なきしわざやと恨、かこたせ給ふにぞ、
地祐成は詞なくさしうつぶいてゐらるれば、地母上
重てやれ祐成、惣て他人の恩をしらぬ故親の恩をも
しらぬぞとよ、蒲殿は弓取の、道を守てたすけ給へ
ばさも有げな事なれ共、彼傾城のかぶろとやらんは
わらべ心にやさしくも、終に見しらぬそち達が難義
を我身に引うけて、時の詞の取合命の親とは其かぶ
ろ必あだに思はれな、君傾城はいやしきものと人が
おろしめあなどれ共、傾城に筋はなし、いか成貴人
高家にて、世に落ぬれば親はらからのためにしづ

みし浮世の中、明暮御身をそばに置みれ共く見あ
かずし、少の間もみへざればとやかくやと案するに、
哀やなかぶろが親のひめごせの子を手ばなして、あ
ひたき時もえあはずしどうかかうかの氣遣は、子を
持てこそ思ひしれ身のひん故になでしこの、花とみ
る子を賣つらめ、我まづしきに引くらべ猶思ひやる
親心ア、淺ましの人界やと聲もおしますなき給ふ、
地女房達も祐成も、實御ことはり至極やと共に、袂
をひたしけり、地暫有て母上御守袋より、黄金十兩
取出し、是此かねはおこたらが爰はの時にため置
しか共、其かぶろとやらんにやりてくれよ、我子の
命をたすけし人に何事かおしからん、傾城の身は何
事も、心にまかせぬ計にて、かやうの物の入ときく、
さもしけれ共と計に、わらはが露の禮ぞとて、品よ
く云てやられよと、涙ながらにわたさるれば祐成三
度いたく手も、心もたゆる計忝け涙にむせびなが
ら、是皆我等がためなれば、祐成拜領同前なり、地
然らば急ぎ大磯へ参り一禮申歸べしと、おいとま申
立ければ母上後を見送りて、惻情なやうつみくすみ
川津とて、三ヶの庄のあるじ伊藤の孫の上不便さは、

わづかのこがねを悦びさらば供をもつればこそ、かちやはだしの其有様、こはそもいか成なれのはてぞと伏まろびてぞなき給ふ、地女房達立よりて、漸すかし慰め參らせおくにいざなひ三重「入さ山、はや日はくれて、地中夕すいしきさよせみせや、はし女郎の花盛、行かふ者は、旅人や、偕は舟おさ馬かたの、六さま七さま八まんくされ似合、くくの、まぶぐるひ、くせつの酒に歸るさは、どろさになりて歌よふたとさ、く、ちどり足して行もあり、もん日を頼みかけられて、つくりやまひのかくれがさみの戀風はかはらねど、位おるればちる花の色もうすきぞ哀なる、地去程に祐成は、大磯の町に入よそながらみてあれば、むざん成哉虎御前せばきつぽねにひとりゐの、班女がねやのとぼし火も涙に、しめるうすげふり、もめん小袖のうらぶれてはだへの「玉もくもるらんぞめきのざう人、地入替り立かはり、大夫おりの名物さま笑ひがほが見ましたい、たばこ一ふくおふるまひちゃんくちがひのかり枕、御めんなれと遠慮なくひぎに、もてれつ寄そへど、地虎はいなせの詞なく、押うつぶいてなく涙、のべのはな紙打亂れ、

しぼるかひこそ、なかりけれ、地祐成みるにたへがたく押わけいらんと思ひしが、いやまで今は人多しとしばしためらひゐる所へ、親方の長者來りやいそなびんぼう神め、詞其身に成てもこりもせずすねはたばつて客せぬ故、あか坂のはたごやへ出女にうるはづなり、代金は只十兩請取てからはわびられじ今が分別所じやが、地思案はなきかといひければ、虎は涙を押へなふそれこそは望なれ、此くるわだになれなば出女は偕置ぬ、下のみづしのつとめ成共と思ひ切つたるへんたうを、あか坂のはたご屋聞幸々去ながら、詞大名方のおとまりには、お杓に出お着に一さしまはねばならざるが、何と扇は成候か長聞て、成程ノ、静と言名人にならはせて、かたのごとく舞手と云、いやそれとてもみぬ商は申さじ、地然らばまはせて見せ申さん、逆の事につれ舞にと、けはひ坂のしのぶずりがかぶろ少將をやとひにつかはし、いざくこなたへくとともなひ、内にぞ三重「入にける、祐成も、地とざまの者に打まざれじこくうつして見給ふに、虎少將しやうぞくし、扇おつ取立出て、舞は何をか舞申さん長聞て、されば數々有

といへ共一年鎌倉殿、奥野の狩のすまふ舞、よからめといひければ二人はあつとこたへつゝ、かれうびんがの聲を上^ナぐりおもし「ろふこそうたひけれ、去間東八ヶ國の諸大名、いざ佐殿を慰んと、奥野の萩のかり衣、夜晝七日の狩くらに、ゐのしゝかのしゝくまむさゝびうさぎ、たぬきよぶこどり、妻こふきじを、妻ごめに、其數あまたかり取て、柏が峠打あがり既にしゆえんど初りける、ワキ地こゝに、伊豆の國の住人三島の入道つつと出、いでや肴にわ殿ばらすまふ一手あそばせや、入道行事に參らんと太夫云よりはやくあいざはの彌七郎、よきなぐさみごさんなれどなた成共御出と、さそくをふんで出たりけりワキ瀧口三郎是を聞、おあひ手にとすゝんだり太夫あいざはは十五歳ワキ瀧口は十八歳二人いづれもすまふは上手なりつまどりしたる有様は、雲吹立る山風の松と櫻に音立て、鳥もおどろくごとくにてむすべはばづしなぐればまはり、しばしせうぶはつかざりしが、彌七した手に成とゞろくゝゝゝ、はしりてうくひざを、つかれて彌七ぞまけたりけるワキ兄の彌五郎たまりかね、袴のひもとくをそしとて取て引ち

ざり、參るゝとをどり出あたつてみれば太夫ふんばつて、二人山ををすがごとくなり彌五郎手だれのすまふにて、瀧口がこまたをかきはなじろにひつすへた、だますに手なし大力も、枯木だをしにたをれけり、是をはじめてやぎ下の小六郎、竹の下の孫八左衛門高橋の忠六兵衛、及びな源八よきすまふ、八番迄こそ勝たりけれワキ殊にすぐれてみへけるは、大場が舍弟侯野の五郎、あら手のすまふ廿一番つゞけがちしてくはうげんはきいかめしげに立たりけり太夫爰に伊豆の國のはたがしら、河津の三郎祐重につくき侯野がくはうげんかな、小がいな押折すつべき物をと二人白きたづな、ふたすぢよつてしつかとをさめ、ゆらりゝと出たる姿さしかたにしてほねたかく、かしらちいさくすそふとくぼさつなり成大男、うしろのおりばねはその下へさしこみて、たけは五尺八分年は三十二歳なり、ワキ侯野は三十一歳みきはまさりの大力二人やつとこゑかけ手あひをしむんずとくんであてつ、あてられつ一あせさつとながるゝふせい、いはほにたてるから松の、露ふきみだすにことならず龍ぎんすれば雲おこり虎うそぶけば風さ

はぐ、四つ手くづし五つばね六つもぢりと云物に、七はなれ八はなれはなる、所を河津の三郎、右のかいなをつつとのべ、俣野がまへぼろかいつかみ、腰も手づなもきれてのけとかみのわけめに地をすらせ、ひつくりかへしてめより高くくるり／＼ともつてまはり、かた手をはなしてまつさかさまに大地へどうど投げれば、さつてもおすまふとつたり河津、坂東一の地まれ物ぞやと上下どつとぞほめにける、それより各いとまごひ宿所／＼に歸さる、太夫河津の三郎祐重は、せんだん藤の弓をしにぎりさびつぎの馬にのり、ふし木あく所のきらひなくさしくれてこそあゆませけれ、き爰に工藤が郎等に、近江八幡二人の者待まふけたる事なれば、一のまぶしをやりすごし、しゐの木三本おひたるかげより大のとがり矢ひようとゐる太夫思ひもよらではせ通る、二人河津がくらの山がたゐけづりむかばきのきいをはをば、前へくつとゐとをせ共智者はまどはず、勇者はおそれず河津弓と矢うちつがひ、四方をきつと見まはせ共きう所のいた手にしやうねみだれ、あぶみけはなしかつばとふしかりばの露ときへうせて、今世がた

りの手向草とんせう、ぼだいと舞にけり、地祐成聞に心みだれ人めもわかずはしり入、なふなつかしの物語やと虎少將にいただき付こゑもおしまずなき給ふ、地長者一家おどろき酒のえひか氣ちがひか何者成ぞとのめければ、調いや是なふさはぎ給ふなさらさら左様の者ならず、しづまつて聞てたべ、地我は只今の物語の河津がせがれ、曾我の十郎と云者成が、虎にふかき恩有故ほうせんために來りしに、思ひもよらぬ物語父なつかしさのあまりぞや、又子細有て黄金十兩虎がために持參せし、これを長者へ參らせん、虎に不便をくはへてたべと取出し渡さるれば、長は本より赤阪の者偕て左様に候か我々も古へは御家のお百姓、御恩蒙る事なれば此上は御らう／＼の御いとなみ仕らん、追付目出度御出生を松のはの末長く、さかゆく君を祝はんと奥にいざなひ參らする人の情も、世のわざも戀のあふせも親孝行のまことからこそ誠あれとて聞人、道にぞ入にける

第四

折節のうつりかはれる物毎に、哀はあれど玉祭る秋こそまされと夕間暮、地蒲の冠者範頼卿、刀禰川太郎が忠節にて虎口の難をたすかり、しばし蟄居し給ひしが、はやうら盆にも成しかば、父義朝のなき玉を祭らはなれと思召、手づからとぼす燈籠の、影だに忍ぶ世の中のさがみ寺へと参らるゝ、地かゝる所に向ふより牢人と覺しきが、是も燈籠たづさへてすりちがひ行あみ笠の、めとめを合せや、詞範頼様、何曾我の五郎か偕々久しや、して是は何方へぞ、さん候某母が勘當つよく屋敷へもよせぬ故、大磯の虎けはひ坂の少將二人がかいほうにて、宿も定めず候が、今日は虎少將河津が墓へ参らんにつれ立くれよと申せ共、女の道づれ人のめ立もいかゞと存さきへ参候、君には何方への御越にて候ぞ、ヲ、地我も同じ日陰草、はかなき父の玉祭かくはしつらひ出たれ共、諸大名の廟参にかくれ忍ぶも心うし、無心ながら其方へ此燈籠を言傳ん、義朝のみはかへ備へ水をもさゝげ給はれや、互に同じるらうながら心身をな捨られそ潜龍は三冬に蟄して陽來を待天の道明かなり、互に本意を達せんは只今の事成ぞ、たとひ祐經

大名にもせよ、此範よりがかたうどせば、百萬騎に一人と祐成へも傳へてたべ、爰は途中まづはさらば、さらばと、わかれ三重

水向參道行

ゆくみづの、ゐせきによどむ、なみまくら、くゝりまくらになげしまだ、うたてやゆふてほどけては、又ゆひなをすくろかみの、つとめのならひいつの世の、いか成松かしぐれそめけん謠さきのよのむくひまで思ひ、やるこそかなしけれ、うきなにもかへ身にかへて、いとしまぶのいとしぼや、人のうはさのやえむぐら、フシわけてわけよき色ごのみ、おんと情と、ふたえまはりの二つおび、思ひまはせば外ならず、そが兄弟の父上こそ我々ためにはしうとごよ、いざや御はかに参らんと、虎御前少將はぼたんやはすのとうろうを、心計のたむけ草、フシチャクリもつ手に「じゆずの、露をへて夕日にかさを、かたぶくる、かぶろの時にみしまゝの、くるわのそとをけふみれば、我身も戀のすごもりにはをのす鳥もひろくとのべめづらしき花むしろ、しいてねたましをみなへ

し、女すがたにむらさきの、ぼうしとみせてはつぎきやう、ひゆりしらんの色々にたぐひなじみの、袂ゆかしきそが菊を。一もおれば、さつとこぼるゝ露の、もろさよめのまへに、むじやうをつげてあだし、けぶりがくまになくからず、いるのあらそふこゑきけば、ちくしやうだうと白雲の、入さの山の山おろし、チャクリふもとの、松の共ずれに、えだと枝とが、さら／＼はた／＼てうど、うつをとほ、是ぞさながらしゆら道と、あをぎてきけば水こひどりの、チャクリ雨待がほのもろごゑや、がき道則まのあたり、我人道の八くのみ、てらし給へと里々に、なきたまよばふ、むかひ小チャクリ火は心、々にいづこのたれか、父をよぶらん、母をこふかやいとし、妻子や、まねくらん、是をみかれを、聞からによその哀にけふもまた、命の内とくれにけりあすもや、聞入相のかねて頼ん頼めや頼め、女人成佛うたがひなき妙法蓮花の此とうろう、もみぢが枝に、かけをけば、よるの錦とてりまある、光につれてをろかやな、火を取にくる、虫の数々チャクリかうろぎ、いとどはた／＼や、いなばのいな／＼きり／＼す、りん／＼

ちりん／＼、ちろりとなく松虫の、こゑもすゝしきすゝ虫や、ながれの身には聞もうきなくのくつわ虫、空おそろしき秋げしき、雲おさまつて天たかく、銀河は空によこたはり、妻まつほしの、中空に、西へちろり、東へ小チャクリちろり／＼、と夜半のあげはの、はつとたつては又飛あつまりをのれと、をのが夢さますうつゝ、其なし、まぼろしの、うきよなりけり様々よ、市しばはこぶしづのめが、露の高がや押分る、歌みのも笠もぬれしはたれてそれや皆、たれも戀にあかでないあゆむ、身ぶりのいたづらや、あだな立けせ秋ぎりの、ふかき思ひの中村の、里もほのかにみへそめて、心のたづな心のこま、むちをあげたる半月にあれと、ゆびさすはちすばのうらばんまつるてらのなや、法のしんによの玉手箱はこねの山にぞ三重「着給ふいでや其比、地工藤祐經が嫡子犬坊丸、箱根の別當を師と頼みけふ入學の吉日と、さも花やかに取つくろひ寺入とこそぞゝめきけれ、地師の御坊への送り物、児法師下々へも近江の小藤太八幡の三郎取つくろひ披露する、大勢の兄でしよりはるか上座に犬坊丸、机にかゝれば同宿共偕も御

きよう御りはつと、からすをさぎとへつらふ所へ、時宗はべうさんの道にて此由を聞、直に別當の御坊へ行お禮申とつつと入奥へつかゝ通るを見て、児法師しゐゝ、といへ共きかぬかはにてようしやなく、犬坊が上座にひぎをまくつてどつかとなをる、近江八幡氣色をそんじなふゝ、詞是は工藤左衛門殿の御息犬坊殿、今日始てお寺入成に近比そつじしさられよといへ共、地時宗少もをくせず二人が前へ兩足かぬつと出し、ひぎ打たゝきからゝと笑ひ、詞ヲ、犬坊にもせよ猿坊にもせよ、學問所にては兄でし程上座をしめる作法なり、別當の弟子中に此はなより此座敷に先輩は一人もなし、地たつた今寺入して、れきゝの兄でしの上になをるはすいさんぞ、某は師の御坊よりとつとむつかしい兄でし也、手習にぶせいならば此、にぎりこぶしにて、めはなのあひを五十も百もはつてゝはりまはし、其上に机をおはせ相弟子中のげたざうりをなをさする、ぐつ共いへばたゝきだすしやうねに入てしつかとならへと、はつたとにらみ付けるはにがゝ、敷こそ見えにけれ、地近江八幡聞づらくはてにが口いひな兄で

し哉、詞尤師弟同門の禮儀有といへ共、金銀祿をおもくすれば大勢の兄でしをもこへ、大事の祕密祕傳を傳受するためし有、是、此方の若殿はけふ始ての寺入なれ共、各の十年にもえせぬ禮物を只一度にいるる成が、何と此まねは成まいのといへば、五郎ゐだけ高に成やれ、君子は禮をおもんじ小人は祿をおもんず、知行兼備の別當の坊が、なんぞわづかの包金にめがくれ道をそりやくにし給ふべきか、地いろはのいの字もしらぬわづば、上座はすいさんはやくしされときめ付る、犬坊も色をかへいや、いはすればいふ事と、何といろはのいの字もしらでとは我をゐなどつていふか、ヲ、詞よいがてん多分おしりやるまい、但しつたらば聞て見よういで其いろはは何と何と、はて子細らしいはいろははは此外に何が有、時宗腹筋をよつてさればこそゝ、ヲ、しらぬも道理、いで汝が様な初心坊には兄でしがひにといてきかせん、やい、それなる愚人共もよつくきけ、惣ていろはといふ事ををろそかに思ふかや、地抑文字は義理の器にして其中に妙義をふくむ、先の字をのぶるに左の點は念をおこし、筆を立る所かろく

して、すめるが故に天也陽也父なり、右の點は心をとめて筆を押へ、納る所をもくしてにゐるが故に、是地也陰也母也、兩點の間諸法實相中道にして、萬物其中に生ず、天竺にては阿字第一命とき、あうんの二字を一切有情の父母とす、されば天竺は能生の國なれば、本佛堅固の阿字を以て最初とし、諸の文字に阿字をそなへて五音有、あいうゑを是なり、倭國は所生の國なれば、根本を取ていの字をあらはす、是によつて平聲はたいしくしてをだやかなり、上聲ははげしうしてあがり、去聲はすんで遠く入聲はなをうしてつまれり、是皆いろはのいの字より事おこり、語默作々起居動靜、三世生死いろはに過たるさとりなし、是をもしらぬ愚蒙のやから、兄でしより上座のくはたいとこぶしふり上犬坊が、ひたいたまのようしやなくなたゝみかけ打ければ、近江八幡太刀おつ取のがさじとひしめく所へ別當あはてて走り出、詞眞平く御免なされよきやつはかくれもなき一てつもの、愚僧つとめの内ならずば何しに座敷へとをすべき、とかく御腹ゐせにはいか程成共某をうつて御堪忍下されよと、地手を合ひ給へば

五郎聞もあへずいやく、詞弟子のかはりに師匠を打する事や有、師のためにこそ命はすつれ、打て腹だにゐるならば某こそ相手よ、いか程成共うてやく犬坊と、顔さし出せば犬坊扇をもつてうつ所を、ひつはづひて小がいなとり四五間、取てなげにけり、近江八幡いかりをなし、みぢんになさんと飛かゝる二人がうでばねむづと取、すしなやつめがうでだと大地へどうどひしぎ付、ほねくふしんみぢんにくだけ五臓六腑一つになれ、ゑいくと踏つくれば目口より血をはき終にむなく成てげり、地さああらじやうらいの玉祭はすのは笠にあさがらづえ、白瓜馬にそうめんたづな祝ふてさしさば一さしと、二人のしがいをかたに引かけ佛殿、客殿くりはかはらかけまはつてかつぱとすて、どつと笑ふて歸りける是ぞ手がらのいろはにほへと又、祐經が榮花のはな、ちりぬるをわか今の事頼もし、きみよし、心地よしとて聞人、ゑみをぞふくみける

第五

建久三年初秋三五の月寒く、さながら物のかなしきにいたはしや河津の後家、祐成をいざなひ池の汀に聖靈棚をしつらひて、百味百菓の甘味をつくしフシゐますがごとく祭らるゝ、地蒲の冠者範頼も、父義朝義平朝長義經の尊靈を、同じく祭らせ給ひければ虎御前少將も、顔打かくしよそながら水を手向ゑかうウチクリ有殊勝にも亦哀なり地母上涙ながらチャア祐成、憚乍範頼様にも聞召させ給はれ、かばかりふかき親子の中、いかなれば五郎め母がけうくん聞入ず、をのれが身には勘當うけ母には腹を立させて、か様の時にも出合ねば、我くるしさは外に成不孝のつみにしづまんと、不便にもまたにくしみに、むねをいたむもかれめ故ヲ、情なの我子やとむせかへりてぞなき給ふ、地蒲殿御涙ながら實尤なり去ながら、わかき者の事なれば先勘當をゆるされて、自然に異見申されよ、我も其々なだめんと宣へば母上は、偕有難き御仰やと言すて袖をぞしぼらるゝ、地角てたそがれ過る比池の蓮に風落て、こぼるゝ露かなき玉か、けしたる姿よろゝと、杖にすがり、よろばひ出、あらゑんぶ戀しや、中有に迷ふまうしうの、

しんの霧にとぢられて、わたりもやらぬみつせ川、河津がゆうれい成けるは、なつかしの人々やとをしうつぶいてぞなきゐたる、地老母夢の心地してこはそも誠か夢成かとはしりよらんとし給ふを、祐成しばしとをさへ、ばうこんゆうれいなど、申はめにはみへても取べきかたちなし、皆一心のてんだう御そば近く寄給は、忽きへうせ給はんに、只是より何にても御詞をかはされよ、母はせきくる涙ををさへ偕淺ましや河津殿、一しうき第三年年忌、御命日、朝晩つとむる經だらに残るかたなき吊ひに、何にか念がひかされてかくは迷ひ給ふぞとふしまろびてぞ、なげかるゝ、ヲ、年月の施佛供養更にをろかはなけれ共、一つのさはり有故に、佛事法事もあだと成よみぢの闇と成はとある、してなふ其さはりとはいか成事にて候ぞ、我身に叶ふ事ならば命にかへてもかなへ申さんヲ、嬉しくもいはるゝ物哉、いやさはりとて外になし、しゝても迷ふ子故の闇、いづれをろかはなけれ共五郎はをと子の事なれば、草葉の蔭でもかはゆきに、御身の勘當ふかき故方々るらうの身と成て、なげきかなしむ五郎が涙我さきの世の

迷ひとなる、急ぎ勘當ゆるされよ忽我は成佛ぞ、若
さもなくは無間にしづみ惡鬼のほこにつらぬかれ
ん、うかめふ共しづめふ共、おことの心一つぞやア、
情なやくるしやとさもたへ難きこは色に、母はきも
消心もきへなふ五郎を勘當致せしはさら／＼にくう
てふけうせず、不便の上に不便さの餘りての事ぞか
し、何が偕此上は勘當ゆるし申さんに、迷ひの雲を
打拂ひ成佛し給へ河津殿、やれ祐成五郎をはやくよ
びよせよ、勘當をゆるさんにフシはや／＼と宣へば、
地嬉しさ餘り時宗は、父ゆうれいにばけたる事はつ
たと忘れはしりより、偕有難き御赦免やと母上にす
がりつく、母は興さめこはいかにと、おどろかせ給
ひけり、地其時蒲殿宣ふは尤なり去ながら、詞内々
五郎某に様々に頼む故、祐成に心を合かくはたばか
り申せしぞ、地一つは河津追善のため、又範頼にめ
んじてもとかくゆるしてたべとあれば、何が偕女と
ても一度いひしことのはを、いかでかたがへ申べき
もはやゆるすぞ五郎やれめづらしやなつかしや、ち
ぶさをくはへし箱王が加程に成人しけるかや、河津
殿のゆうれいと見ちがへたるもことばりぞや、よく

も／＼父上におもざしの似たるかなと、鬼の様成時
宗がゆうれい出立をそのまゝに、ひざに引よせなで
さすりいとしのものやとあいし給ふ、をや子の中こ
そわりなけれ、祐成あまりのうれしさにまづ／＼こ
なたへ／＼と、をの／＼ともなひまいらせて屋かた
のうちへ三重「いり給ふかゝる所へ地梶原平五景早
工藤左衛門祐經駒をはやめ大をんあげ、詞やあ／＼
曾我兄弟の者共をのれらは先年蒲の冠者範頼へよし
なきむほんをすゝめ、何心なき蒲殿是非なくはらを
きられし事、是汝等がゆへなるに其わきまへもなく、
をのれらゆう／＼とながらふる段ひけうしごくのい
ぬ侍、もつては蒲殿の敵同前くびうつて參れとの頼
朝公の仰なり、地異義におよはゝからめ取しばかりく
びをはぬべきぞと、みだれいらんとしける時蒲殿つ
つと出、詞やあめづらしや兩人、何といふぞ範頼が
はらをきりたるゆへ、兄弟をも討んとや、やれ、汝
等ごときがざんげんにて切腹をする此範頼にあら
ず、某かやうにながらふるからは兄弟討せんやうは
なし、地いで／＼兄頼朝の御前へ汝等をつれて出、
始終の段々言上せん我について來れやと、かけ出給

へば兩人はつとおどろきやうてんし、偕は御堅固にわたらせ給ひめでたう候此段を、急ぎ君へ申上よろこばせ奉らんと、駒ひつ返し行所をどつこへやらじと時宗はゆうれい姿其儘にて大手をひろげおつかくる、祐成も追掛祐經が乗馬の、尾づゝを取て引ければ屏風だをしにかつぱとふす、されども祐成高もを馬にしたゝかけつけられ、暫しよろぼふ其隙に祐經馬に飛乗てにげて行衛はなかりけり、かゝつし所へ時宗は梶原をのせながら、おなじ馬の三づにのりむちをうつて乗かへす、範頼御覽じいしくもしたりでかしたり、さは去ながら祐經めを取にがせしほゐなさよ、明年の夏鎌倉殿ふじのみかりのさたあれば、和田ちゝぶに内通しかりばにて討すべし、先手合にしやつめを討せめての事にはらをゐよ、忝しと祐成は馬上成梶原が、腰のつがひをざんぶときつて落る所を時宗、飛かゝつてむな板をさしとをしゝゝ、我きたりけるしにしやうぞく梶原がしがいにきせ、追付祐經送るべしめいどの先立せよやとてフシどつと笑ふぞ心地よき、地母上は御覽じて、身より出せる科なれ共、玉祭の折からむやくのせつしやうあさ

ましし、もはやしんゐをふり捨て、聖靈に御ゑかうせん實尤と各、御經どくじゆのこゑの中くまなき月の雲間より、河津の姿かげのごとくあらはれ給ふぞ三重「有難き、妙なるこゑにて、地それ本有圓成の都には、苦としてすつべきもなく集として取べきなし、怨と成親と成皆是かりのたはぶれぞや、汝等孝心ふかき故我天上の果をうけて、月宮殿の壽仙と生る猶も現世の武名をまもり、未來は一蓮並座の契りをなさんと宣ふみこゑもしら雲に、法の月輪天子とあらはれ光明四方にちりしきみ、香のかほりにつゝまれ雲がくれゆく天津空、忉利天上有頂天梵天宮迄ものゝふの、ほまれをあげし曾我兄弟親孝行のとくゆうは、くはうだいむへんむりやうのゐりき文武はんじやう萬々歳の秋津國をさまる、御代こそめでたけれ

右此本者依小子之懇望附秘密音節自遂校合令開
版者也 加賀掾

二條通寺町西へ入町 山本九兵衛刊

義經追善女舞終

愛染明王影向松

加賀掾直正本

上之卷

序五大明王の中に愛染明王と申奉るは赤色御尊體御手にちゑの弓をたづさへ、方便の矢にて惡魔をがうぶくし給ふ、去によつて信心渴仰の輩は、衆人愛敬の幸を蒙ることかはけるに火の付より利生なをしすみやかなり、こゝに美濃國の大守右京大夫政もとの嫡子、修理、佐政方とてヲロシはつめきりやう、すぐるれば、地つぎめの參内つゝがなく都に月日を重ぬる中、御父政元御重病とて飛脚かさなり來りければ、取物も取あへず本國に下向あれ共、御しにめにさへあひ給はねばかひなきうれひにしづみ給ふ、御繼母妙壽院と申せしは、邪智とんよくの惡心にて、詞もとがるけんさき船家中かちをぞ取かねける、げにやくはういん、地矢のごとく程なくけふは政元の、御忌日成と施行を引せ給ひければ、きかつに及ぶひん者乞食我も「く」とあつまりて施行を受て、歸る跡へをくればせに盲目一人杖に任せ尋ね來り、詞御施

行を下さるゝおやかたは是かじや迄と、地色政方御繼母おはす共しらでさぐり足して行んとす、繼母見給ひ偕ぞんざいな盲人いかにめかいが見へぬとて、大かたさとりもあらふことあれ追さげよ畏て中間若等立かゝり、さがりませいと追さぐる國家老治郎大夫ことく敷こゑを上、詞やあ推參也土めくらめ、目くらならばめくらの様に遠慮して尋るはず、必定をのれはまいすめくらのこじきめくらめ、ぬすみかはきに來りつらんやい、忝くもこれに渡らせ給ふは當國の御あるじ、右京大夫政元公の御後室、同く御代繼政方公定て聞も及びつらん、御後室は御繼母たれ共道の道たるお心から、大殿御死去なされてもなさぬ中のへだてなく、御先腹の政方公へ御かたくをゆづらせられ、親殿御追善の其爲にかく御施行をひかるゝ所に、地色お國の粟をはみながら指當つたる慮外者、あれたゝきだせ打だせとあらゝかにいふしたより、なを聲々にのゝしればうろく、きよろくどうてんしおゆるしなされ下されよとわなく、ふるひゐたりけり地色政かたしはしとしづめ給ひ、ア、さなせそくかれが眼見へばこそ、慮外者共いふべ

れ、官者と譬者とを見てはなれたりといへ共、必立てはいすといへり、其上父の御めい日何程のことあればとて、ゆるして施行をとらせかへすべしと、大様成詞を聞繼母面をやはらげて、偕もく若殿はよふこそ心付ました、親殿に別れてより、月共日共ひとり大じに思ふそなたの前へ、慮外者と思ひし故御めい日にあられもない、よしないつみを作りたりアアゆるさせ給へなむあみだ、なむあみだ佛みだ佛と念佛をあくびにかみませてフシけもないかほしてゐられける、その心ぞ恐ろしき、地色盲目かうべを地に付、偕有がたや忝や誠に申も恐れながら、殿さまの御一言なくは打擲の上追出されんに、御ゆるされかうぶる段さすが國の守さまにてましますよな、此厚恩いくばくぞ申上るも憚有、詞それに付恐ながら御そせうの願ひ候、迎のことに殿さまのおじきのお詞今一ど承りたく候と、地色みゝをそばだて目をしかむ政方は聞給ひ、盲目が訴訟とは心へがたし、遠慮なく申せよと聞もあへずよこ手を打てアハ、詞偕こそ偕こそよく聞たり必御油斷なされまじ、御大じは殿さまの御命只今あやうく渡らせ給ふと、いはせもあ

へず治部大夫引とらへねぢまはし、是はく土めくらめ、いかに御きげんよきとていふことゝいはぬことと有、一國一城の御主なればゐし達御前に相つめ晝夜御きげん伺ふ物が、をのれづらが考にていま敷も御命、あやうきなどゝぬかいたは此口からはきだいたか、ゑらばね引さきくれんずと引よすれば政方やれまてく治部大夫、地色しばしくとをさへ給ひ、其方がいふ通其理り有といひながら、しごうのじこく今をもしらず、又死はうしろより來る共いふ、たとへ賤き盲目とていか成妙術をかゑつらん、傳聞周宣といつし相人は、魏の文帝の五音を聞て宮中にたうじやうあらんことをしるとかや、先しづまれとせいし給ひいかに盲人、して某が一命今日をはるとのかんがへ近比以て心へね共、よくく覺のあればこそかくはなれ切て申と聞へし、いさゝかも遠慮なくまつすぐに申べし、道理たゝ敷しごくにをいては其かくごも有物ぞ、すみやかに申せやとおどろく氣色し給はねば、盲目しばらくかうべをさげ仰下され候通いさい畏て、詞元來私其いせんは去しさい候て、もろこしの師曠が秘密を傳へ、恐らく五音の占

にをいては千に一ツもあやまること、過言には候へ共先日本に覺ござなく候、然れば今御城下にて身命をつなぎ候へば、いか成ことにあふとても殿さまの御大じしりのがしにはいたしがたし、地色夫人の五音といつは、宮南角微羽に別れ四季の調子其時をあやまたず、地先青陽の春つげ鳥、うそひばり百千鳥秋の山邊のさをしかや、ちぐさにすだく虫のね迄も、皆五調子にもれざるなり、今はきさらぎ半なれば、尤双調たるべきに、殿の御調子平調なれば奇怪といふも餘り有、太極うごいて兩儀となり、兩儀わかれ四象と成、四象則八卦を生ず八卦體用の、妙をわかし五行生克の道理をさつし、吉凶悔吝の機をあきらむ双調は春の調子、五行に取ては本性とす平調は秋の調子、五行に取ては金性なり、用の金體木を克することあたかも、磐石をもつてかひごをくだくことならず、されば秋吹西の風、金風と名付つ、此風にあたる時、青々たる木葉も皆ことくくきばみおつ、あらしの前の、紅葉たきいをおほて火にむかひ、石をいだいて深淵にのぞみ、薄氷をふむためしよりなをあやうきは殿さまの、只今の御命、あつは

れゆゝしき御大じ、地色若又考そんじなば、此めくらめがいき首をごくもんの木にさらさるべし御うらみとは存せずと詞を、はなつて申ける、地色人々目とめを見合さほど覺有ことならば、うたがひをはらす爲はうがくを慥にうらなへ盲人しばらく頭をめぐらし、詞殿さまの御座所まさしく東方震の位、克する物は兌の卦なり、然れば今のわざはひは必西方酉のかたより來るべしと、地色いひもあへぬに高へいのかげよりも、人かげ見へて打しゆりけん政方のひだりの袂を前へぐつと打つらぬき、うしろの松をゆるがせてうらかく計立ッたりけり、それくせ者よあますなと侍達追取まく、こはかなはじとあらはれ出政方に討てかゝるゑたりやおふと治部大夫、鍵引さげ立かゝりなんの、くもなくつきたをす、地色政方立より見給へば六十餘りの老人なり、詞して先をのれ何者なれば、いか成いこん有てかくらうせきをはたらくぞまつすぐにはくでうせよ、地色いはすは此まゝくつうをかけせめさいなむがといからるれば、老人くるしきいきのしたより、詞ヲ、御ふしんは斷なり、かくしそんせしことなればつゝみてゑきも候はず、拙

者はおばを打からせし牢人者にて候が、よく故に御家の御家老、民部之丞友春に深く頼まれ、殿政方公をこゝにかくれ討てくれよほうびは望に任せんと、武士の有まいことながら、地牢人の悲しさに、やすやすと頼まれて、ゑたる所のしゆりけん只一打と存せし所を、盲目にさへへられ本望とげぬのみ成か、くつうを受ん無念さに残らず白狀仕る、只御じひに片時も早く首をはねられ給はれ、はやとく／＼といふいきも、くるしげそふにされはて／＼ついにむなしく成にけり、地色政かたほとんどあぐませ給ひしばし物をもの給はねば、繼母つゝと出偕おろかや政方殿なんのしあんの入ことぞ、御身の命つゝがなき上悪人はみんなの承めとしれたれば、歸りしだいみんなぶめをさかばり付にをこなひて、はらをゐさせ給ふべし偕々はらの立中にも、なふ有がたやたふとやな、若殿けがのあらざるも今日の佛の守りめと、一ツは盲目がはたらきア、嬉しやでかしたりでかされたり、命の親のそなたをば此まゝをかふ様はなし、治部大夫いか様共はからへと有けるにぞ、誠にめでたふをさまりしも盲目がうらかた故、いかゞ仕り候はんと

謹てうかゞへば政方もうなづかせ給ひ、成程／＼尤さいせんよりさは思ひし、此度忠義のほうびとしてけんぎやうしよくになすべきぞ、又みんなめは歸りしだいいか様共はからはん、先々盲目いたはれとおくをさして入給へば、はつと計に一家中ことぶき歸る其賑ひ、盲目は小つふりふり、あふぎてんがうはな小歌一夜、けんぎやう三重「これならん、すでに其夜も、地なかば過草木もねいる丑の時、政かたのうら門に山伏三人わら人形をよりに立、へいはく追取ふり立／＼、じゆずさら／＼とをしもんで、□つつしみうやまつて申それ、ひみつの法といつば、△そのかみびるしやなせそんよりこんがうさつたにふぞく有、○りうみやうりうち大くはうちけいくは大師にてん／＼し△偕、我朝の弘法大し聖寶そんしにさうせう有、○つゝいて某傳來せり、□眼にもろもろの、けがれを見て心にもろ／＼のけがれを見ず、み／＼にもろ／＼のけがれを聞はなに、もろ／＼のけがれをかぎ乃至身口意に、もろ／＼のけがれをふれて心に、もろ／＼のけがれをふれず、○我身則△六根清淨、六根清淨、□なるが故にフシ五ざうの神、フ

シやすらかなり、此故に人は皆、天地の神靈にひとしかるが故に、なす所の願ひとして成せずといふことなし、○東方に降三世、△南方にぐんだりやしや、○西方に大いとく△北はう、○金剛夜叉□中央に、大日大聖、不動明王うや／＼しく、地明王の尊體を、はいし奉るに外にはふんぬのさうをげんじ、火焼三昧に入給ひて衆生の諸願をかなへしめ、フシ内には大慈の益ふかし、今まさに、祈る所のいしゆいかなとなれば、右京太夫政方が一命たちまち、だんせつしせしめ給へ尤、ひごうのめいといへ共小をばつして大をすくふのいひなり、あふぎ願くは、ぼん天帝釋けんらうちじん我日のもとの神かせや、いせに兩宮太神宮、王土ちんごのいなり○ぎをん、△御靈八所○松ノ尾□北野、今宮の太神宮○上がも△下がも□きぶねの社惣じて一万八千餘座諸佛菩薩大龍王、明王部天どうぶをおどろかし奉る、此へいはくにのりうつりたちまちきずいを見せしめ給へと鈴錫杖をふりならし、さんごをなげ付とつこをもつてなづきをわり、てうじやうよりあゆるちをぐまの油にしぼりこめ、せめかけ／＼祈りしは身のけよだちて三重すさまじしフシ

去程に、政方の執權みんぶの承友はるは、とんちふゆの侍成が常々繼母治部大夫、政方失ひ申さんとたくむ心を見透して、他國へは行ずしてよにだに入ばこ、かしこ、やかたの邊りをはいくはいす、こよひも來り見てあればあんにたがはずてうぶくの祈りぞと見るより早く、偕こそ／＼こいつらが繼母治部に頼れて我君じゆそと覺たりをのれらあごをくひちがへません、幸やみのまつたゝ中をゑぐてのけんとし足し、そろり／＼と忍びよりたんせいをこらし祈りゐる、うしろより左右方の下僧をけこかし先達をかしこへどうどつきたをし、人がたをつ取立たりしは思ひがけなき所なり、地色三人きもをつぶし漸におきあがる、され共先達おくせぬかほにてやあをのれ何者なれば、詞忝くも此祈りは國主政方公より仰付られ、當年國民あんをんの爲ひそかに大法をしゆするの所に、地色さまたぐる汝ばくだい成らうせき者、明王の御ばつをかりぶり立所にくげんを受、未來永々世々生々うかむこと有まじきぞ、我はじひの此身なれば見のがしにもせんずれ共、法力ふしぎと政方公の御みゝにたつしなば、うきめを見んがふびん也定

て本氣でよもあらじ、足本のあかきうちとうく、
歸れといかりける、地色友はるにつことわらひげにげ
に是は斷也、人をすくふ行法かりにも惡心あらふ様
なし去ながら、詞只今お手前いはるゝは國主政方よ
り仰付られ、安民の祈りと申さるれ共此人がたには、
修理大夫政方てうぶく祈る物也、願主後室妙壽院と
書印、つがひくふしぐにまなく大釘打立ても、
民安全の祈りと成やいや是なふお山伏、偕々おしゆ
せう千萬わるい者に出あふたと思へど、地色ふていけ
てをかぬうぬめら主人のやかたでせんさくせん、さ
ああゆめまいすら行まいかとねめ付れば、山伏共あ
らはれてはもともどもどふした物で有ふぞとたうわ
くの内よりも、何とぞ此ばをすりぬけんとけんのつ
ばもと打ならし、エ、めんどやかしましい、をのれ
名をなのらぬからはにせ者に極つたり、詞其上殿を
てうぶくなど、夢にもしらぬむじつをいひかけ、行
法をさまたぐるゝ、聞へたく、必定をのれは此比せ
けんにはいくはいする盗人に極つたり、此御やかた
のざい寶を心がけ來る所を此行者に見付られ、顯れ
んせつなさに我々を討とらんたくみ、いふまいく

三世も見ぬく某あたゝかにくはふかいな、地色待てゐ
よ政方公の御前にてあかさくらさのうちをわけん
と、足ばやににげんとするを引たふしどうばねをし
つかとふむ、二人の下僧はかなはじと跡をも見ずし
てにげうせたり、サア同行なしの山伏殿、出某が名
をなのりきをおちつかせ申べし、こともおろかや政
方公代々の家老職、みんなの承友はるとは此はな成
が見しつたか、ふどうのばちは待遠なれば先此方の
はぢをあたへん、人をのろへば身をのろふ覺る様に
してくれんと、兩足にてせばねの上をどうくく
とさんぐに力に任せふみ付れば、詞なふいたや悲
しやもふしにまするく、少しおゆるめ下さりませ
有様に申ませふ、私は角行と申山伏にて候が、誠は御
繼母治部殿に頼まれ政方公をてふぶくせば、當國中
のきたうのぶん汝一人にいひ付んとくれぐよぎな
ふお頼み故、せひなくか様に祈れ共もつたいないな
んのお前さま、上にはか様に見せかけても心中には
殿さまの、地色御ぶうん長久成様にとたんせいをこら
し候、おじひにおたすけ下されば有がたく候はんと、
ふるひわなゝくかほばせの、ひげに涙はつたひけり、

地色友はるはらすちをよつて打わらひ、詞なふ角行とやらはいせんとかはりいかふ詞がなをり申た、ヤイ、をのれかゝる大じを頼まるゝ程の者が、いや殿さまはのろひませぬ御長久の祈りなど、此ごに成ちんじたとてそふむまふくはふ地色かいのしかしたつときお僧故、繼母治部さへほうびと有を相家老のよそめもならず、よいはく屋敷へ引、白狀の其上にてほうびには親重代三尺二寸の大だちを、おなかへ進上いたすべしいざ立あがれと引おこし、先にをし立だんな殿お先へござれ御供には、千ぎにあたる友はると引立行こそ三重「こゝちよき、其夜も明て友はるは何心なきていにもてなし、下部に長持になはせ政方の御門内へ入、げんくはんさしてあがる所へついに見なれぬやさ女、白人ならぬだてふせいすんとすがほのすき通り、情こめたる目のはりや、友はるを見てはつと計おもはゆげに口おほひ、かたがげにいらんとすかたいみんぶも戀風に、うつかりひよんとさむけ立覺すこしをとんと打ヲ、いた、ほに誰さまじややらぶし付な、人が見たらばたいとはいはじ、大じの所をむごらしいそうしてみればおれ程な、か

たい者は此かいに又とひとりござるまいと、いはんせいでもこはいかほといふたら又しからんしよ、それにゆるりとござんせといらんとするを引といめ、詞是はくめいわくなふお女郎、いかに我かほきたいとて心がどふで有ふやら、人にはそふて見よ何やらには地色乗ても見いであたまからいやでござるといはぬ計のあしらいは、しんぞ聞へぬ此上は情らしいお色事を、せひきかいでは此袖をいつかなくとすがりつく、地色かの女ほゝゑみて、偕も嬉しい御詞僞りにもせよ忝さ、身に餘り候ぞや去ながら、みづからは此お屋敷へけふはじめてのみやづかへ、なじみなければどなたにもうゐくしうおはづかし、しかし今見て今のこと誠共思はれず、しんじつ定か定ならば逆ものことに御名をもあかし聞させ下されかし、一じゆのかげ一がのながれえんとえんとが行あふたら、後にはめつたに打とけていとしいやらなんじややら、それから跡はいはひでもしれたことよとをしかくす、かほのもみぢの色もよき、女にうつつをぬかりなき民部もこしをどうどぬかし、偕通つたるあいさついかにも名をばきかすべし、某こそお

家の執權民部友はるといふ者じやが、けふはじめてと聞なればさぞうゝしう思はれふ、いはるゝごとく他生のえんかたい男かやはらかなる、其手をほほへととらんとするをふりはなし飛かゝり、みんぶか刀ひんぬいて親のかたきのがさじと打てかゝるをひつぱづし、小がひなとつて引ふせ、詞こりやなんじやなんとする、やあら心へぬ某を親のかたきと打かくるがまつたく以て覺なし、先汝はいづくの身の方討れし親の名は何といふぞ、人たがひと見へて有まつすぐにしさいをかたれ、様子により便にもなつてやるまいものでもなし、刀もぎ取引おこし、しりめにかけて立たりけるみんぶが心ぞ道理なる、地色彼女はがみをなし偕もむねんやさいせんより、心にそまぬたはぶれをさまぐにふたるも、親のかたきはみんぶぞと名をきいたばかりにて、かほをしらねば何とぞしめにさへかゝらば一たちに、討てすてんとおもひしにはやまつてしそんせし、なせにひきやうなみんぶの承覺ないと僞るぞや、そちがたくみで殺されし眞砂のぐんじが獨娘玉千代とはみづから也、いとほしや父上いせんはよし有人なれ共、様子

有て牢人のまづしき故にせんかたなく、わらはをおさなき時なりも都九條の色里に、うきふししげきはたけの流れの末も、今しばし、年さへあかばと思ふ内どふしたえんやらおもしろい、かはゆい人についなじみたとひ此身はどふならふと、此男ならではと互にかはす枕の上ね物語に宣ふは、我はもとみの者、急なこと故國へ行、やがて迎をのぼさんとわかるゝ跡のかなしさは、立てゝゐてもといしても有にあられずくるわをば、ひそかに忍びぬけ出て美濃と聞しを便にて此所へにげ下、跡では親かたはらを立身請の手付取置しに、定て親との仕組ならん、娘をかへすか身請のかね思ふ様に立ぬならば、預ふの斷ふのと色々せがむ其中へ、そなたが京へのぼり合せかふした咄しを聞付てよいこと有と我父を、ひそかによびよせぐめんごかしに侍は互のこと、金は残らず立てやらふが命にかけて無心有、かふゝしたることゝいへばひだうとれど父上の頼まれ給ふも世の中の、なふ子にまよふ親心わしがかはゆき餘りにや、眞砂のぐんじ共いふ武士がそちが様成惡人に頼まれ、殿さまに手むかひも皆是みづから故なれば、

神さま達の御ばちにて親をか様に討するむくひ、不孝共天ばつ共人にうらみはなけれ共、此世さへ淺ましきながれの身さへ有物を、しゝてはなをし親殺し重ねかさなるむくひのつみかへすべくも、かなしけれ、なれ共金故合點して討れ給ふことなれば、親のかたきとなのりつゝ打かけふ様もなし、せめて父のきやうやうにだましようちに一たちうらみ、その跡はどうならふと逆もながらへあらぬ命、とは思へ共かく成ても義理もなんぎも親かたにも、親にもかへて殿さま共しらでほれたがいんぐはぞや、せめて一め政方さまにあふておかほを見た跡のみらいはうきめにあひたい見たい、なふ殿さまとやらいふ政さまにと身をなげ、こがれ泣ゐたる、みんぶ一々聞といけ、殿とのわけは尤ながらしいうをしらぬことなれば、いひわけにたうわくしいきをつめてゐる所へ、後室治部を先に立政方諸共侍共、ばら／＼とはしり出友はるを取かこみ治部大夫大をん上、詞のがれぬのかれぬみんぶの丞先達てあくじの段こと／＼く聞たる上、やかたへあがる道筋にてあの女が跡より來り、みんぶさまにあはせて下んせ頼むはいナアとばつと

した口上に、きちがひそふなと家來共つぎのけて過行を、無理に取付頼むを聞ば殿さまつぎめの御のぼりに、都九條の御慰におなじみと聞ゆれば、實はお年わかな故かふしたことも有べきが、みんぶさまと尋る上は偕は汝がすゝめにて御通ひと聞へたり、しかしながら此女こゝ迄來るふびんさに、さき程より今參りの奉公人といひなしおくへはいれずだまして聞ば、殿さま故にくるわをば身請もいやとぬけ出るよし、其金故に女が親娘は見へず金はなし、しなねばならぬを汝聞付かれを頼み、施行のまぎれに殿さまをしゆりけんにて討參らせ、御後室我々をもすでに討する其ぐめん、され共君の御ぶうんつよくうらかた故に御命つゝがなくわたらせ給ふ、こりやみんぶ、むほんをたくむみやうばつにてかくあらはるゝ其上は、地色たいほうのごとくのごぎり引ちまたにかばねをはり付にせん、色の太こを持たる故むほんの太こも上手なり、ついでにしゆらの太こをもたせんかくごせよとあざわらふ、地色され共みんぶへんじもせず少しもさはがぬかほを見て、繼母身をもみきばをかみ偕大それたおそろしい、主を殺し國をとら

ふと思ふ程成こんじやう故、あらはれてもまち／＼とあの大たんなつらはいの、そふしてかりにも政方の、情深ふせられし女けいせいにもせよ行々は、うぢなふて玉のこしどふした身にならふもしらず、さある時は主人のつまじやに其親を討せぬれば、重ね重ねの大ざい人しかもあの子が親達もいせんはよし有人と聞、戀故とはいひながら親を討せ女心に、定て無念成べきに主殺しの國法に、はやをこなへややれしばれ、エ、まだるいとせりかくるどしやう、ぼねこそ恐しき、政方心も心ならずさぞみやぎのが我故に、かく成しと思へばふびんもまさりくる、涙はむねにせまりながらさすがそふ共いはれはせず、さあらぬていにてやいみんぶの丞、詞あつぱれをのれはばくだい成不忠の者、代々家老職も勤る身が、何のふそくにか様成あくじを思ひ立ぬるぞ、地色其上かく迄かこまれてもまだのがれんと思ふかや、日比の心と引かへみれん成こんじやうぼね、をのれが様成人でなし見るも中々けがらはし、ヤアみやぎの、かくあらんとは思はずして女心のはかなさは、我をしたひて來りしな、ことに親迄殺されし、心の内いか計

さつしやられてふびんなり、かふしらけた上なれば、もはやつゝまん様もなし親のぐんじがてきせしも、そちとかふしたわけなりとしらで金故頼まれて、討んとせしはしれたこと、子を思ふ親心それはうき世のならひわきまへなきは尤なり、其かはりにはみんぶめを其方にとらす間、いか様共きりさいなみ本意をとげよ、母じや人治部が手前へ云わけもめんぼくなやとせきめん有こそ道理なれ、地色友はるゐなをり手をつかね、詞憚りながら是は御誼共覺奉らず、御先祖より御家老職つゝがなく相勤、しゆみより高き御恩をかうぶり何しにやしんを存べき、いか様是には様子あらんいやなふ治部大夫、して殿を某がいし申せとみやぎのとやらんが親を頼み、御命あやうき所をつげしらせ奉る、其ちうしんは御家中にて誰人にて候ぞ、相役のよしみには御しらせに預りたし、地色いふても大じのせんぎのばひとへに頼み申と有治部大夫ゑせ笑ひやれ、天しる地しる我しる人しる地色惡事千里かべにみゝ石の物いふ世のならひ、され共是は我君の正直正路にまします故、諸神諸佛の御めぐみにて行衛もしらぬ盲目なれ共、殿の五音

五調子を考御命をたすけ奉りし故、則けんぎやうになし下されおそばさらずのおきに入、しよせん千も萬もいらぬ急ぎけんぎやうを召出し、あかさくらさの埒明んとナクリ頓て「かくとぞ、いひ入ける、盲目いせんにかはるしやうぞくもつたいつけて畏る、みんぶつくく」打詠め、詞ム、うらかたのおめい人と聞けんぎやうの御坊とは御じぶんよな、拙者はみんな友はるとて殿のお口まねをもいたす者かなはざる御用故此比他出いたしいまだ御めにもかゝらぬが、先以此たびは殿さまの御身の上といはせもはてすけん校ハア、さればこそ、誰にもせよ此てうしはお國を望む野心有、皆々御ゆだんあそばすなと、地色聞より早く侍共一どにはらりと取まくを、友はる手を上ア、詞さはぐまいく、もふ此様に聞だされあらそふても埒明ず、儲々せひもない此こと計がしれふとはうろたへた神も中々しられぬはづ成を、お座頭殿にかんがへられ思ひの外のちじよくを取、何かくさふぞ某がいんぐは物語をさんげいたさふ、さんげにはちうざいもめつすと云御ふせうながら下にゐて、拙者がたくみの様子をお聞下されいやかはつた

ことでもござらぬ、御ぞんちの通りみやぎのが親はしゆりけんの上手と聞、殿さまをなんのくもなふしてやつて其残りの衆はたゞ取様にころそふとは思ふたれ共、地色治部殿が生てござらば其様にむまゝ共成まいことじや、先治部殿を此ごとく、まつ此様におれが様に先へしまふてのけふと思へど、殿様を手にかけては世上へ主殺しと、いはるゝ聞へもわるしこゝらがしあん所と思ひ、角行といふ山伏を當國中のきたうじやにせんと、まひないにて深く頼み夜も丑みつに及ぶ比、ひそかにうらの御門にをいてじゆそてうぶくの人がた、大釘をまなく打込うらには願主ア、誰やらな詞ハア誰やらとしてあつたが、忘れまいことを失念した、ヤア後室さまではなかつたぞ、但覺はござりませぬか、はて此咄しは後室さま治部大夫殿のいかふ御みゝにさはるそふな、まつたくそふではござりませぬ、チ、それよく、地色此みんな友はると書付、せめかけく祈る所へ何者かまつさい中へつゝと出、角行坊をひとつとらへせんぎの上のせうにせんと、かの山伏ではなかつた某と人がたを、あのひつの中にをし入こゝ迄ちさん致せしが、詞後

室さま治部大夫殿、なんと跡先のつまらぬ咄しにく
いたくみでござりませぬか、地色どふでのがれぬ某が
命いつそ打あけしまはんと、飛かゝつてけんぎやう
をひざの下にどうぞしく、是はといふて治部大夫繼
母をはじめあはつるをみんぶの丞大音あげ詞ア、是
うろたへまい、友はるがいんぐは咄しはしまひ
がどこへこけふもしれ申さず、ゆつくりとお聞なさ
れ先一ばんがけんぎやう殿、お手前も桂馬坊といふ
お山伏それ故うらかたがお上手にて、友はるを各と
相談にて、殺しさへすりや殿さまは手間いらすと思
召ふが、此様なこしらへごとを、せんぎして顯はすこ
と又友はる山伏がいへのでんじゆ、見ゆる眼をふさ
ぎめくらのまねがすきならば、地色つい手にながふ
さがせんサア、眼玉をゑぐるぞとずばとぬくたち風
に、詞あいたくめをあきました去とては御尤御
尤、まつひらおゆるし下さるべし有様に申ませふ、
ねはよく故に後室さま治部大夫殿に頼まれて、か様
か様にするならばほうびは望に任せんと有詞にあま
へ付あがり、地色かくの仕合其段はまつびら御めんか
うぶりて、命をお助け下されば有がたく存べし、エ、

おれがこふ有ふと思ふてゐた、なんのいんぐはにき
うくつな此めをふさいでゐたじや迄、命が有てのよ
くづく是、あきましたくゝとめを見だし、てぞふる
ひける、詞友はるからくゝと打笑ひ、いやゝそれ
計ではゆるされず、其ぬかすのにきよごんなくばあ
のひつの中における、地色をのれがつれの角行めをよび
出せさなくばどうばらをゑぐるがと、たち取なをせ
ばア、それではあぶなふて申されませぬよびだしま
せいでなんと致しませふ、エ、きてんのない是々角
行、此じゆつないのが聞へぬか早ふ出てお心をなだ
め、命をたすけてくれよとて涙をながしひゝるにぞ、
地色角行もふるひくゝおづくゝびをさし出しけい
ま坊そこにゐるか、是程きうくつなめにあふてもそ
ちがうきめを見た時は、こふしてゐるも友はるさま
のおかげ、どぞおわびを申上て見よ偕もかはいや
じゆつなかる、こゝは極樂くゝとなをくゝすくみわ
たりける、地色政かた今はこらへかねはしりよつて角
行人がた共に引出し見給へば、友はるがいひしに違
はず人がたに大釘打、政かたてうぶくと書付願主後
室と有上はあらそふてもあらそはれじ、エ、聞へぬと

思ひながら御繼母はまゝしき中こふしたたくみなされふ共、よい年をして治部大夫めともぐにをどりあひ、みんぶをも討せんとはよくもくしたるよな、をのれ手討にと思へ共いふても親へのふけう、只今はたすくるぞとふくやかたをでうせふ、かく有べきとはしらずしてさいせんより友春に、さまざまのあつかうざう言ゆるしてくれよとくやみながらいかりの涙はせきあへず、地色友はるかうべをさげこはもつたいなき御ぢやうや候、此身はみぢんにはたかれふ共君つゝがなくわたらせ給へば此上よろこびなし詞サ御繼母治部大夫もはやのがるゝ所なし、一々くびをならぶるぞかくごせよといひければ、二人かほを見合せくつくとふきいだし、やいすつぽり共、なるほど是はかねてより後室と我ふうふに成、うぬらさへころしぬれば、國のかみはそれがしと、家中は残らず一味させたいとる様に思ひし所にさすが民部友春程有ッて、よふ見出した其れいに政かたをのれがいけくびうち、地色國の主はそれがしぞ夫うちとれ畏て侍共、おばなのごとくぬきつるゝ政方友はる是迄と、主従二人立ならびむかふ大せい引

うけて命かぎり三重たゝかひけるてきはたせいの、地ことなれば政方うす手といひながら、其かすあまたうけ給ひ漸にきりぬけて、エ、ふびんや宮城野は女の身なれば定てうたれしゝつらん、われ故思はぬくるしみのやひばにかけし、ぶびんやと、フシむせび入て、ぞなき給ふ、地色所へ友春かけ來り、なふうれしや殿さまは是に御入あそばすかや、ずいぶんふせぎ候へ共大せいにへだてられ、御きづうけさせ申こともねんながらせひもなし、一先こゝをいづかたへも御供申立のくべし、いざゝせ給へとすゝむれば政方涙ともろ共に、かく迄忠義なしくゝ其方がいさめそむくにはにたれ共、うんつきゆみのちからなきあれを見よかたきのやつばらむらがつて追くれば、今はのがれん様もなしすみやかにはらきらん、かいしやく頼むと御たちに手をかけ給ふをしがみつき、詞エ、其御所存成故にか様のなんぎもおこるなり、地色此友春があらんかぎりはめでたく御代に立申さん、おくびやうみれんの追手共何十萬有とても、ちつ共きづかひましまさずはや何かたへもおちさせ給へ、あしきことは申まじじこくうつるといさめら

れ、然らば詞はやぶるまじ命さへ有ならば、たがひに尋ねあふべきとなみだとともににおち給ふフシさだめなかりしうきよなり、地色ともはるいまはこゝろやすしおちのび給ふ其あいだに、さへてのかんと待所へ又のがさじとかたきのせいむら立てかけむかふ、主人はおとすこゝろやすしと、うでをかきりにきりまくりくちりぐぱつとをつちらしながらゐは、むやくこれ迄と、君の御あとしたひゆく頼もしかりける三重「しだいなりむざんやな、宮城野は何國にかくれのびけん、しなば殿さま一所にとおもふうちにもおやのかたき、治部大夫を何とぞと身をひそめ此ところを、うろく尋る左右方より繼母と治部鎧ひつさげ、詞ヤアしにぞこなひのやけめらうめ、をのれはさだめて我々をおやのかたきとねらふと見へた、地しやばふさぎのいきけいせいをしにげいせいとやりだまに、あげてくれんとつつかくるをあなたへはづしこなたへくやり、女のねんりきやりさきをはねてけやぶり柴がきを、むかふのそとにも出たりける、地色すきもなくゆん手めでより鎧さきそろへとりかこむ、心へたりとにげんとするをまへなるゐ

づゝのうちよりも、どつこへやらぬとやりさきに今はせんかたつきはて、偕くちおしやむねんやな、とてもころさでかなはずは殿さまはいづくにぞもはやをのれらがいしつらん御しがいの其前にて、いさぎよふあひはてんしばらくまでなさけにと、フシ手をあはせてぞなきゐたる、地色繼母いらつてヤアうろたへもの、殿めは民部にさへられうちもらしたるはらゐせに、せめてをのれみやうだいにころさひでをくべきか、地色まだるいはやふといふしたよりずばとつきたてつきとほす、くるしみもだゆる其ころはならくくゝいふならく、ならくのそのおにどもがかしやくのせめもかくやらんついにこときれいきたゆれば、それゐの中へしづめよとチクリまつさか「さまにぞなげいれける、ときに屋なりしんどうし、おそろしや宮城野がなきがらゐつゝをあらはれ出、しうねきかんばせうらめしげにはつたとにらむまなこのひかり、かみそらさまにたちまちくちよりほのほをはつとふきかけ、ふきかけ繼母をめがけとびかゝる、わつとおどろき治部大夫ありあふ者どもきをとられ、こけころびつゝにげんとするを一ねんしんいの

ちずぢのつな、じゆうじぎいに引まはしともになら
くの供せよと追立、追つめ追まはすおそろしくも又
三重「すさまじし、地なんなく繼母をひつつかみ、我
くるしみを思ひしれ、かしやくのせめも様々にむけ
ん、きやうくはんあびやうちん、八まんぢごくのそ
こはかとなきおほぞらのきりかすみうすまくくもに
くるくくく、くるりくるまの我まゝにまゝ子をに
くむ繼母のいんぐは尤、かふよと夕やみに姿は、も
ろ共うせにけり

中之卷

かくとだにゑやはいぶきのさとばなれに、政方のし
つけん民部の丞友はるがおぢ、三上藤大夫といつし
者、何としてかみそじ余りのころより兩みゝひしと
聞へかね、たまゝいふことにてもみゝに口よせ、
大ごゑせねばかつて通せぬふじゆうさに、武士をや
めてどみんと成いぶきのさとに引こもり、物にかま
はぬ身のらくと月日をくらしゐたりしが、先祖より
しんかうにて、いなりのやしろをつき山のうへにく

はんじやうしあゆみをはこび奉りしが、けふはやよ
ひ午の日伏見の神のお出也、心いはひとあたり成、子
共をよせてまつりごと誠に神も納受のチクリちかひ
「あらんと頼もしし、地色かゝる所へ政方の御妹都の
前と申せしはげしやくばらにておはせし故、やかた
へは忍び御さとすみにてまします中、母もむなしう
成給ひみなし子なれば政方へ、ひそかにかくと申さ
んと思ふにかひなく國みだれ、政方のゆかりとあら
ば一々にからめきたれと治部がきびしくふれし故、
漸我屋をのがれ出頼む者にはをさなきより、召仕ひ
の雲右衛門とて下部の者只一人御供にぞつれられけ
る、此雲右衛門下部ながら心がうにて、きりやうは
あつばれ何某共いはるべき人さうなれば、生れ付の
せひなきは口どもつてごんせつのかなはぬ迄も御供
と、都の前をぐし奉り三上が門に立寄て、物申さん
といひいる、下男立出、詞どなたにて候ぞといんぎ
んに尋ける、雲右衛門小ごしをかいめ、ハアそつじな
がら我々は、みのゝ者にて候が御主人三上藤大夫さ
まへ、じきに御めにかゝりたきさい有て参りたり、
地色お取次を頼みまするといんぎんにぞ申ける、地色

下男請取てしばらくそれに御待と、やがておくに立入て主人藤大夫がなをりゐる、そばちかくと立よ
りて、詞申々どなたかは存せぬが、みの、お衆と申
され、じきにお前へおめにかゝりたきよし申されま
する、ヤアなんじやみのがやぶれた、はてそふではご
ざりませぬ、みの、國衆でござりまするが、直にあ
ひましたいとでござります、ムなんじや、みの、國
の者ちやが身にいたいとゆふか、あい、はて儲々、
それをさゝやくことか、誰じやな、若おいのみんな
が近付かもしらぬ、地色先こなたへ通せ畏てこなたへ
と二人をおくへぞ通しける、藤大夫たいめんし、つ
いに御意もゑませぬおかたじやが、何の御用に拙者
をば御尋にて候ぞ、詞先じゆうながら申ましょ、わ
しはみゝがとをふござつて、しやうくでは聞へま
せぬ、近くへ寄てずいふぶん大きなこゑでいふて下
されと、地色みゝをそばだてじつとして聞ゐたる、詞
雲右衛門ちかくより、仰られまする通御意ゑました
ことはござりませぬ、イヤ別義ではござりませぬ、則
是に居られまするは、みの、御城主政元公の姫君都
の前さまと申して、若殿の御爲には御妹子にてござ

りますれ共、げしやくばらにて候故御屋敷への御ひ
ろめなく、折を待候中に親殿は御かくれましまし、
うみの母御もおすぎ有、其上お國は御家老治部大夫
がぎやくしん故、殿さまもみんな殿もいづく共なく
おちさせ給ひ、地色其上治部めが國中を政かたがゆか
りとあらばからめよと、きびしくふるれば無念なが
ら姫君の御供申、國は立のき候へ共かゝるじせつに
候故、誰をたのまなかたもなくさまゝ心をつくたく
うち、貴殿さまの御ことは友はる殿の御おちごとき
き、せひにお頼み申さんとなれくしいことながら、
是迄御供申たりあはれ御かくまへ下されば、くさば
のかげなる大殿もいか計御満足ならん、御丁簡に預
りたしと手をつかねてぞ申ける、地色藤大夫も大かた
はみゝには入しか共、したぢみゝの聞へぬにどもり
まはつてかたるにぞ、儲きのどくしんきやと心あく
せきあたまをかき、といきをつくを都の前もとより
さとき心にて、ちやくとさとり硯をこひ、くはしく
書て見せ給へば藤大夫飛しさり、儲は姫君さまにて
わたらせ給ふかたとひ御はらちがひしとて、たいな
いはかり物御たねはひとつなるに、いかでそりやく

にいたすべき、みゝ故にこそどみんとなれ、もとは
たいしき友はるがおぢ藤大夫にて候ぞ、御代に出さ
で置べきやとはいへお國のさうどうは、夢にも存せ
ず候が儲は治部めがたくみなりしか心もとなや若殿
は、いづくへおちさせ給ひつらん、民部は御供せざ
りしか何とかしけんきづかはし、いかゞせましとた
うわくにあぐみ、はてゝゐたりしが、地しばらく有
ていや申姫君さま、そつ共お氣遣あられまじ、某若
年よりいなり大明神をしんかうし、まさかの時はす
くはんとのお御むさうに預る程のれいげんあらたにま
します故、御らんのごとく庭前に社をしつらひ候へ
共、ついにかゝることぞとてなんぎは願ひ奉らず、
此度こそいつせ一代さいはいけふは彌生のお出也、
ひたすら立願こめ申殿のお行衛姫君を守らせ給へと
立願申さん、先々こゝははしぢかなり見苦しく候へ
共、おくへ御入下されよとよきにいたはり參らせて、
せめての御ちそうには手あみを引、追付歸らん家來
共かしづき申せとゆふチャクリまくれはまべを「さして
出にける、地色然る折ふし角行坊治部大夫がさしづを
受、都の前を召とらんと十四五人ともなひあそこ爰

に忍ばせて、我身は只三人姿をかゆる順禮の歌ふだ
らくやきしうつなみは、みくまのゝなちのお山に、
ひいくたきつせ詞西國順禮に御ほうしやと、地色うた
ひつれつゝ通りければ都の前聞給ひ、儲もしゆせう
やみづからも親達の御ぼだいの爲、又はげんたう二
世の爲とひそかにそともに出給ひ、角行ともしらす
なふゝ順禮達、是はわらはがふたりのおや達ぼだ
いの爲と、小袖を一つ渡さるれば角行受取儲は是、
都の前に極りしと思ひながら見しらねばそこつもな
らずをしいたいき、しゆくゝぢうざい五ぎやくしや
うめつじたべうどうと、稱へゝ小袖の紋見れば二
つ右どもゑ、さあ是じやは心へたとちうにひつさげ
かけ行たり、地色折ふし雲右衛門一間にふして有ける
が、此をとにめをさましはつとおくに入れ共はや
姫君は見へ給はず、詞なむ三寶うばはれし、をのれ
らどつこへかへさぬかと、地どもりまはつてかけ出
る所へ大せいどつとよせ、雲右衛門を追取まくいや
ものくさいやつばらと、地向ふ者共さんゝになげ
ふせ、うちふせをつ立ればおくびやうみれんのぞう
人ばら跡をも見ずしてにげ行を、さもしきたなしこ

んりんならく火に入、水をくゝりてもうばひかへさ
で歸らんやかへせく、くくくををつけ行こそ
三重「頼もしきいさかひ過ての棒ちぎり木、藤大夫が
けらい共さすがどみんのはかなさは、物かげにかく
れるたりしが漸と立出て、詞やれだんなのお若お姫
さまを何者かつれ行たり、地遠くは行じのがすなと
もやくしてゐる所へ、地藤大夫いをおけをさげあ
みをかたげ歸るを見て、けらい共あはたしく姫君
はうばれ給ひ雲右衛門は追かけて、と聲々にひし
るにぞ、くはつとせき上物をもいはす二三町かけ出
しが、なんとかしあんをし立歸りいやくどふでも
追かけてとかけ出ては又かけもどり、うろくはぎ
りしてじだんだ踏、すわつゝ立つする折ふし下の女
三寶に、供物をすへつき山のいなりの社へそなふと
見て藤大夫飛かゝり、地そなへの三寶ひつたくりみ
ぢんになれと打付る、皆々おどろきそはも餘りお
せきなされた故、お氣がのぼつてお心もそゝろにな
りしかもつたいなや、先しづまらせませと、せな
をさすりつなでおろすをふりはなちつきのけて、い
なりのしやだんをはつたとにらみ涙をながしねめ付

て、詞やいかたり狐のばけぞこなひめ、年比日ごろ
えん日ごと又は神事おこたらず、御供をそなへたつ
とめ共何をかふとの立願せず、然るに此度我おいの
主人のやかたさうどうに付、姫君御入遊ばされ、か
ずならぬ某を頼むとあればもだしがたくかくまひ申
御ちそうに、あみを引に出る跡にていかにうつけた
神なりとて、氏子の主人の姫君がうばはれ給ふをお
めくくと、よふもく見てゐたなあやい、それでい
なりの明神のとあがめられふと思ふてゐるか、そふ
とはしらでうかくと信心したかくやしいはいや
い、さあ、地色是からはしばらくも我地に置ことけが
らはし、この藤大夫がどそくにかけてしやだんを只今
ふみくだく、はらが立ばたち所に我とりころせ恨は
なし、去ながらとてもばちをも利生をもしらぬきつ
ねの四つあしめと、しやだんに手をかけゑい、やつと
引たふし、のりかゝりとびらかうらんことくくふ
みくだき、かしこに有し棒をつ取さんぐにうちく
だき、はがみをなしてかけ出しはいまはし、くも又
三重「道理なり、謠次第我はばけたと思へ共、く、人は
何とか見るべき、狂言是は三上藤大夫がちんじゆにす

むふるぎつねのこつちやう、當月午の日は京都いなりのお出故、毎年諸國の末社あつまるなれば、我等も當年のぼつてござる其るすのまに、藤大夫がおいみんぶ友はるが主人の娘、かたき故國をおち藤大夫を頼む、何がたのもししいやうじきしやなれば、都の前を守りてくれよと社へ深ふきせいし、ちそうの爲手づからりやうに出た跡へ惡人共がみだれ入、姫をうばひかへつたげにござる、藤大夫かへり見てさんざんはらを立、うき世に神はないねがふてもゑきないとさすが凡人でござるは、我るす共ゑしらひでしやだんをみちにふみくだいてござるが、是は藤大夫が正直な心からは道理共、是程の道理は近年又有まいと思ふ道理でござる、とあつても今更致し様もござらねば、しよせん友狐共をかたらひかたきを待請、姫をうばひかへし藤大夫にわたし、いひわけもいたさふと存じ取物も取あへず歸りまするが、地色儲も、治部大夫めは前代みもの惡人と、いひもあへぬに角行坊姫君を引立させ、此所へ來りしがはや日はくるゝ急げよと、いふ向ふよりくだんの狐角行が傍輩桂馬坊と身をばけて、挑灯をさげこゝにき

かゝりエ、詞角行坊かよい所であふて有、餘りをそしと治部大夫さま仰付られ、地色むかひにきたが何と首尾はと尋ねける、角行いつぱいくひ何桂馬坊にて有けるか、詞悦こんでくれ都の前を早速にいけどりしが、なんとでかしたではあらざるか、地色とはいへきやつもくはほう者、みめかたちすぐるれば、つれて歸るとすぐさま殿が手かけにせふとおつしやつた、さあゝ早ふ歸り殿に見せてよろこばせ、ほうびをいつかどしてやらんとフシ跡先しらずにいさみける、地色けい馬坊打うなづきでかされたゝ、殿のきげんはしれたこと片時も早く歸らんが、しらるゝ通道惡敷日ははやくれて行先見へず、追々迎をこすはづじやが道にまよひはせぬかじや迄と、いふかは向へ狐共迎の者の挑灯に、あまたばけてともしつれおひゝゝ、とよびかくるそりやこそ迎がきたは、詞太儀ながら桂馬坊此女がなはを取、大じにかけて引てたも成程ゝ合點じや、地色こちへ任せと請取かはべにかゝれば此のべの、きつね共せなをならべはしにばけて見せけるを、皆々誠のはしなりとチャクリひかりを「たよりに渡りける、地色程なく大せい渡りすめ

ば提灯のひかりもうせ、せんごもさらに見へわかず、跡には角行とけらい少々、都の前桂馬坊残りしが、角行坊ふしんはれずこゑを立、詞やあゝ橋向ひの侍共、何とて挑灯の火をけした、早くとぼしはしをあかくし渡さぬぞ、地色大じのめしうと跡に有にフシぶさたなりとぞいかりける、地色かは向ひのもの共いやゝ左様では候はず、我々渡りすむ迄は挑灯見へて候が、見ればわたりしはしもしめいよなことゝいふこなたへ、又提灯高々と迎と見へて、おひくとよびかくる角行力をる詞エ、くどんなそち達が挑灯のかげ、かはへうつるを取ちがへそれへ行し、是是迎はこなたなり早ふまはり來れよと、地色谷共しらずさしかゝれば又狐共はしとなり、道と見せて有けるをばかさるゝとはきもつかず、先に立てわたりしはチクリこゝちよくこそ見へにけれ、地色なんなく向ふへわたりこしさあけい馬姫をつれ、いそいでわたりやといふ内に又挑灯のかげもなし、角行彌ふしんはれず、詞是は楮、はてめいよな合點の行ぬ、地色どふしたことで有ふぞと、きやうをさませばにせ桂馬からゝと打わらひ、詞あの大だはけがぬかしたざ

まは、我を誠の桂馬と思ふかやい、それにて慥に承れ、政方の家老みんぶの丞がおち三上藤大夫がちんじゆにすむ、こつちやうもゝいなるの鳥居を七度のはまなみ丸といふ白狐なり、地色我すむやしろを藤大夫がみちんのごとくくだしも、をのれらが此姫をうばふて歸る故なれば、取かへし藤大夫へわたさでは此波丸が、すみ所なくあまつさへ此のどがさりつとひあがるなり、あのうんつくめらがつらを見よ、大義によふこそほねをりぶんにしぶ茶をのめとぞわらひける、地所へ藤大夫雲右衛門まつくろになりかけつくる、都の前すかし見給ひなふ藤大夫殿か雲右衛門か、箇様ゝのことなりと有し次第をかたらせ給へば、藤大夫はつと計かうべをさげひざまづき、かくじんへんにましますをもつたいなくもみやしろを、どそくにかけてし其みやうばつさは去なからお主のため、ゆるさせ給へと手を合せフシひれふしてこそ泣ゐたれ、姫君も雲右衛門もかんるいきもにめいじつゝらいはいしてぞおはしける、地色白狐も神慮うるはしくうれし涙と諸共に、必ちつ共くるしからず皆是かたきがなすわざなればおことらにとがは

なし、いざ／＼ともなひ立歸りじせつを待政方にめぐりあはせんきづかひすな、若又かたきがよせくる共皆狐に任せてをけ、かたはしよりふみくだきからすのゑじきにくれん、道がくらいに挑灯と先にすゝめばあまたの狐悦びともす其ひかりフシ只まんだうのごとくにて、フシ心しづかに、地行給へばかたと山との向ひ成かたき共こゑを上、詞なふ／＼いなりさま頼みます、是はあんまりむごいぞと、地わたらんにも大河とたに、そこともしらぬやみなればなにとせんかたあらしにふかれ、其夜はそこにてすゝみゐるきみよか、りける三重

まさかた道行

とても身は、地くはたくをいでよとすゝむれど、みやうりの心つよければ、きいておどろく人もなし、らうせうふぢやうのハチャ、キフシ世のならひ、しする命の其きは、戀しきつまもしたがはず、いとしき我子もともなはず、ひとり出ひとりゆく、ふなをか山の夕けぶりたへぬなみだぞフシあはれなる、フシそれより物のハチャ、キかなしきは、いらくとひやく山寺の、

かねにことかくせつきまへたびでひだるい夕間ぐれ、きちんどまりのわびしさは松の木枕もめんよぎ、ひざよりしもはかんざらしあしをつゝめばくびすぢへ、つきぬく様なさよ風によのめさのめもあはざのからす、つばさ色なるすみぞめに、ころも計はそむれ共、そうとぞくとをかけもちに、フシチャリ世をすてかぬる、我はそもみの、國にて誰あらふ右京大夫政方と、人にしられし身なれ共國はかたきにうばはるる其上家老民部之丞、又はふた世とむすびてし、宮城野の露ちり／＼に、行衛さだめぬひとりたび、せんかたなさのはちたゝき、ひさご一つを友としてキンチャリ人めを、忍ぶかくれがさ、かくれみのちを立いで、いつかむかしにあふみ成、今津の宿にきて見れば旅のならひか此身にも、かごやろ／＼はいしゐどう、馬かしはばら歌さむさをしのぐやあこれの、さけの、酒のゑひざめさめがひや木々にさゑする、とりもとのフシつばさ、たのまんこきやうの文、硯の墨やすりはりの取三重岩のかけちをよぢのぼりフシ西をはるかに、見おろせば、ひらのいぶきの山風にばつと立なみ、つれてむれゐる歌はまちどりの友よぶ

こゑはちり／＼やちり／＼やちり／＼と友よぶ所に、かもめこぞれる岩の上フシ雪や、つもと、水うみの、向ふに見へし高山は、ありしむかしのさと通ひ歌ひゑの山かせ身にしみて合なたねの花もうらがれとうたひし比もいつしかに、又あらたまる春のそらみぞれあはゆきはつれ雪、ふりぬるとしにかへるかたとどる計にちら／＼／＼びらり／＼と風にちりくるもみぢ笠、さうばうたりし山嵐むせぶ、計におちくれば、しばしつかれをやすめんとと有、所に着にけり何かはしらすかさのうへにおちかゝるこゝちして、しきりにおもくすがたも見へずこゑ計して△申々政さま、殿さまとよびかくる○こは心へずかゝる道のちまたにて姿も見へず我名をよぶはきつねたぬきが我しやうきを、うばはん爲かおろかやな、それは人によらふぞと心に思へどきみわろく、まつげをぬらしべいろうしやのうまかぼだらまにはんだらとなへ／＼ゆかんとす△時にたちまちすがたをあらはし、さもくるしげ成こゑをあげ御うたがひはおことはり、わらはゝやかたでわかれにしみやぎのにて候が、彼さうどうの御跡よりおちんと思ふ其中に

も親のかたきのことなれば治部を一たちうらみたくあなたこなたとする中になふ口おしや本望とげぬのみならず、御繼母治部が手にかゝり、返り討にあへなくもひと思ひにころさずし、鎧先につらぬかれあまつさへまつさかさまにゐの中へしづめられしうさつらさ、いはんかたなきくるしみの、中にも君を戀しゆかしと思ふ一念かつは、又本意をとげぬ無念さにこんはめいどにおもむけど、はくは此世にといまりてあさましかりし我すがたかくあらはして侍ふぞやあはれ日ごろの御よしみ御忘れ下されずは治部を討てみづからが、しゆらのもうしうはらさせてたべ、浅まし我身やと泣共こゑの出ばこそ、ふびんにも又、哀れなり地色政方十方せんかたなく、偕はみやぎの成けるかや我故ついに此世をば、あたさかりの花のすがたよしなきことにころされて、さぞや無念に思ふらめ、去ながら、たとへ生をへだつ共、かりにもふうふは二世といふなど近よりてうさつらさ、かたりてなり共我思ひはらしてはくれざるぞ、あら情なやとよらんとすれば△其まゝきへて○又かしこになき玉の△かげろふ、いなづま口水の月かや姿は見

ゆれど手にとられず、○地色せんかたなさに政方はわつ
 と計にたふれふしきへ入計に泣給ふ△地色ゆうれいば
 うせんと又あらはれいや戀しきは我とてもをとらぬ
 君が心ざし、見るに立そふれんほのくもはれぬ思ひ
 と成侍へど、とてもかなはぬしでの道、此世のえんこ
 そうすく共、みらいはかならずふうふと成いきかは
 りしにかはり、ながふめをとぞいつ迄もつきそひ度
 は侍へ共、えん王よりのつかひしげくもはやめいど
 へ歸るなり、あらなごりおしやかなしやと□さけべ
 るこゑはこだまに残りすがたは、きへてうせにけり
 ○政方夢かうつゝかとおなたへはしりこなたへか
 け、たい狂亂のごとくにてやれ今一どせめて詞をか
 はしてくれよ、去ては情なやとよべどさけべと其
 かげも、なげきて今はかひぞなき、此上は何とぞし
 みんぶに尋ねめぐりあひほんいをたつしみやぎのが
 後世をたすけえさせんと思ふ心を使にて都のかたへ
 おもむけど、めぐりあはんと思ひてし人は此世には
 なくも、なきと思へばまのあたりあひしは夢か今
 さらに、かゝるなげきはうつゝにもいづれを夢かい
 づれをうつゝ、わくべきかたも夢のよの夢ちを、た

どるごとくなり、

下之卷

○春霞、立ならびたるむねついき、こや王城の情の
 市うそに誠をつきませて、あきなふ戀のとひ丸に、
 よねかふ客の、地とだへなく四つ手のかごのほをま
 きて色のみなとゝ賑ひけり○地去程に右京大夫政方
 は、ばうせんとしてそれよりも漸都につき給ひ、こ
 こ色ざとのあたりともいさゑらつゆのをだのはら、
 みどりにしげきくさのほも、霜にはあへずうらがれ
 ん、是皆せけんの無常ぞとしやうみやう、してぞ通ら
 るゝかゝる所へ大吉といふかぶろはやり小うたのゑ
 ざうしを、よみくゝ來り先も見ず政方に行あたり小
 びつしよなくエ、こゝなはちたゝきは、何をしやうね
 にうつかりと、人のくるのもえ見やらぬはあきじゐ
 そふな杖やろか、そふしてそなたのしやうばいはみ
 な此さとのきらひ物、しゆせうそふにあはれらしう
 へうたんたゝいてこまごといひ、衣のみじかい其ふ
 うは客様達にいけんする、せんもんとやらいふおや

じの様で下心のこなれぬうつけたなり、はやふとつ
とゝとほらんせとおりやゝとしかりける。○地色政か
たいせん忍びくるさとは夢にもわきまへず、きも
さんらんしうかゝとかまはずひさごを打ならし、
さつてもいふたよくいふた、をのがめくらはたなへ
あげ、人をめくらといふやつは、しつかいさるのし
りわらひ口汝ぐはんらい鉢々、きびんぼう人の娘にて
四百六十五匁に、身をうられきてやうゝと今けい
せい玉子ずし、すしにそだちていき過て客に口上
いひちがへ、すきさへあれば板の間のらうかのすみ
のくらがり、茶わんのそこを枕にしまんぢうくは
ふとねごといふ、すこしせいたけのびぬれば、あげ
やのむす子とまぶぐるひわけも見へざる文通ひ、う
かりゝとうかついてやり手にわめかれしくゝ
と、小すみへよりてほへるをばしらぬと思ふか小び
つちよめ、かはいやゝなむあみだなまふだゝな
むあみと、そしらぬかほしてゐられける。△地色かぶろ
大きに腹を立エ、あのにくてな口はいの、あんまりあ
ほうつくさず共早ふあるいてこめもらや、詞エ、は
らの立にくらしいさりと此世のはちたゝきうなゝ

せ、どこのはちたゝきじやたゝきたされなとたゝき
にかゝれば、ちやくとぬげ、ヲ、をのれが様なこしや
くなやつは此くろぬりのへうたんで水あげがしてや
りたいと、いひすてにぐる向ふより、みやぎのが妹女
郎、今はやり手のしらぎくはついかい取のひだりづ
ま、きやらの追風くゆらせて道中しづかにあゆみ來
り是はゝはしたないどうしたことぞ大吉、見れば
こはい所をばかりまはらんすと聞及ぶ、修行者さん
を相手にしもつたいないあんばくな今の身ぶりはど
うぞいの、よいはゝまつてゐや、玉につげたらよい
ことであんまりほめはせまいぞと、いひなぐりつゝ
いやなふ修行者さん詞さだめしおはらが立やしけれ
れどいふても年のゆかぬ者、こらへてやつて下さり
やせ、儲それに付はじめておめにかゝりやしなれな
れしき御ことながら。○地色けふはわたしが心ざす人の
忌日でござんすが、こふした勤の身なれば思ふ程な
とむれひも、人頼み斗なればせめてとねがふしるし
にや、思はずそなさんにあひあしたもあさからぬの
りの御えんとありがたし、ちよつとあげ屋へおこし
あり御免かうなされ下さんせば、身に餘りおうれし

からんひとへに頼みあげやすと思ひ、入たる必ざし、
よぎなきていにぞ見へにける。地色政方はつと心付儲
は世に有其むかし、通ひなれたる色ざとかなふはづ
かしめんぼくなやと、顔もえあげずかくしながらと
やせんかくやいひぬけんと、しばしあんじおはせし
がやうくと思ひ付、詞ハアおしゆせうやおきどく
や、かゝる勤の其中にて御せんごんのお心ざし返す
返すも感じ入申ませふ様もなし、しかしながら拙者
義は、さがたき用事故只今外へ参るなり、地色おゆ
るしなされ給はれ急用に候はずは、にやはしきお頼
みをお残多やといひすて、行んとするを引とめ、
心さこそましまさんがひま取やす事でなし、少し
の内の御ゑかうどふでも頼み上やすそれ大吉、お
供してといふに取付すがり付、先にからの口ごたへ
は、皆々わしがわるかつたこらへてこちへきてくだ
んせ、其禮にはへうたんで、水揚をしてもらひませ
ふとむりにつれだち三重入日さす、あげ屋の座敷、地
はれくくとたゝみの色もあさみどりはるの夕かせほ
のくくと、火取がうろに立けぶり、三ぶくついのかけ
物の、もやうは少しことぎめて、中尊にあいせん明王

左右に風流のなん女の圖、本ぞんとあがめしはめづ
らしくも又ふしぎ也。地色政方女郎に打むかひ、詞し
て心ざしのしやうりやうの御かいみやうはととひ給
へば△さればいな、則そなたにかけました女郎すが
たのかけゑこそ、ふかい御をんに預りしあね女郎さ
んのうつしゑでござんすが、こちらにかけし男ゑの
殿達になじみ、互にふかふのぼりつめ、あまのた
くてふもしほぐさけぶりくらべの中なりしに、其殿
美濃とやらんが本國にて、お下り有しをわすれかね、
くるわをはしり見へさんせぬより、あまりかなしう
こがれまし神さま達に願をかけ、どふぞあはせてく
だんせと祈るにかひもなぎさの千鳥、なきあかした
るけふの日を御めい日と心ざしかくはとむらひまい
らする、又まん中なはみやぎのさま、常々信心なされ
やしたあいせんさまのみかげなり、よい様にせわや
いてほとけになしましくだんせと涙をながし泣ゐた
る、地色政かたはつとかほ打ながめ、今迄はよその様
に思ひしが見るに付聞に付、よくく思へばさりし
ころみやぎのにつかはれし、かぶろのまがき立のび
て今白ぎくの大夫妻、見わすれたるもことはりやれ

我こそといはんとせしがちやくとひかへ、ア、よしなしまよふたり、かくといひなば身のちじよく、又みやぎのがしゝたりし有さまかたり聞せなば、なげきくやまん見るめもうし、ことにてい主喜平次が聞付てはいかいなり、よい程にしてかへらんとは思へ共みやぎのが、身の上なをし思ひ出し心もみだれむねにこがるゝ涙をせきに、まぎらかし、いかふせけんがひゆる故ぎやうさん風をひいたそふな御ゑかう早ふしまひ歸りてまめ茶をたべませふと、ひさごをたゝきとこのゑにむかへばなをしいやまさり口過しことのみ思はれて身もしびれこゑふるひ、忍び涙をかくさんとすれ共わき出わき返りせき上ゝすみ染の衣を、ひたしなげかるゝ^{△地色}しらぎくさとき女郎なればちやくと合點しつゝとより、見れば見る程うたがひもなき人の思ひ人政さまじやが是はそも御すがたかはりしとて見ちがへたはわしがそさう、わたしこそ其時のみやぎのさんにつかはれしかぶろのまがき御見わすれありはせまいがどうよくなきよくもなや、先それはそふとしやれ過た、此お姿はどうじやいなわけもない、偕もかはりし御げんやとすがり付

てぞ泣るたる^{○地色}政方も涙ながらア、偕しばしの中ながらなじみほど世にくくに嬉しい物はあらざるぞ、かく成はてし我身をば、みやぎのがよしみとてよふこそ泣て下さつた、誠にかゝるさまに成此さとなどへ足ぶみは人間のすることならねど、はぢをいはねばわけ立ず、みやぎの此さとぬけ出て、我を尋ね下るとかや、か様ゝのしだいにてかたきに國はみださるゝ、いきがひなくおちさる跡にてかはいやみやぎのも悪人共が手に掛り、ひごうのしにをとげたる^{とてあさましきかたちとなりあひ見ることもかたい}とにつらぬくたまのあくがれて、我をしたへる其おもかげまぼろし共うつゝ共思ひまはせばなまなかに國をものかず討はたさば今のうきめは見まじ物うらめしの此身のごう、いか成くはこのいんぐはぞと人めも、しらすなき給ふ、^{□地色}白ぎくも諸共に、げに御道理ことはりとこゑも、おしますなきにけり^{△地色}此有さまをさいせんよりてい主喜平次物かげにてとつくりときゝすまし、そつと立出よこ手を打、さつてもお久しや政さま、はつとおどろき、たつてにげんとし給ふを△くるりとむかふに立ふさがり、詞是は是

はおどうよく、先にからお身のうへの御物がたり、一つも残らずあれにてくはしく承り、びつくり共御いたはし共申わくべきかたもなし、と申ながら御恨みは、段々深き御こんいに預りし私、いやしき身すぎをいたせ共、慮外ながら憚りながら推參ながらくはんたいながら、心のそこは武士がたにもまけはせまいと男をばたてると申はおかしけれどちつ共お氣遣あそばされなかつた身にひつかけ申べし、むかしが今に至る迄、主に弓引てきする者ひとりとしてせうりをばえたるといふこと、淨るりぼんにもついでに出たることもし詞まつ其ごとく治部大夫一たんお國にはびこる共、地色日月誠をてらさせ給へばじめついたさで有べきや、其内御ふじゆうなりとも是に御入あそばされよ、おかくまへとははいかりたいゐつかけと思召、ゆる／＼くらさせ下さればひとしは大悦仕らんこの上にもみやぎ野さま、一所に御入なされなばかふした時にも御たのしみ、ふかき思ひもあさはかにはかなき無常のせかいやと涙をながすしんじつに、口しらざくありあふかぶる迄涙に、むせぶやさしさよ、地色政方嬉し涙と共にかくばかり皆々念比成

詞をうけ、身に餘り思へ共とてもおもしろからぬ世をてい主のやつかいめいわくなり、命だにながらへばと△いはせもあへすてい主頭をふつて目顔をしかめ、詞偈も／＼ふるい／＼、左様におちおれさせ給へばお心迄ひがみしか、とかくお氣をはらされて、ゆるりと是に御とうりうなされませ、ヤお久しぶりじやに誰さまぞかりましてなぐさめませふと申まするは座敷つき地色宮城野さまの御ことば御はてなされてせひなきこと、追付御代に御出のときいか様の御とむらひあられふ共それはまゝじやに、とんとおわすれなされさいはい菊さま御ことは、其ゆかりなり御きりやうはおそらく只今くるわ一ばんまだ／＼まだどこやらに、みめうむるいのうまみ有とまいつた方の御ふいてう、若まだいじむじおつしやると慮外ながらちくしやうじや、是菊さま大夫さま、お前も日ごろの御口ぶрийやでないをしつてゐる、そこらを頼み上はのてふ羽袖をかへすもんさくのころはり上てかのかんたんのかり枕、詞一すいの夢のさめしも五十年、又五十年百年なり、偈其後は二百年、是を合せて四百年、又五百年、千年は鶴のよはひと

おぼしめせ、うら嶋太郎は八千ざい、東方さくは九千ざい、龜は萬歳めでたさよ、しやかのかぶろの水は五十六おく七千萬ざいと聞時は口に、はやりていひにくし^{△地色}さあ／＼こゝも氣が替らず先々おくへお供せん、宮城野さまのあはれごと又は御國のきのどくざた、西のうみへさりつとわすれさせまし下さるべし、是大夫さまそこらをとそゝりたつれば○しらぎくも、かぶろのときの子心に政さまはよい殿と、かいついいふてわらはれしもかふしたえんのはしならん、地こちごんせといだき付、草葉のかげで宮城野さまちつとのうちじやあちらむいてくだんせと□手がいれば又足もいるえんおうの、ふとんれんりのよぎ、はやときがくる下ひものながき、契りと三重成にけり□つゆ霜ときへてもまよふ戀路のやみ、わするゝひまもなごさこぐあまのをぶねが、こがれくる、地色宮城野がなきかげは、かけゑをはなれ又こゝにあらはれ出るしつとのねん、女心のあやしさよ△なふうらめしや政かたさま、我より外によの女のはだふれじとちかひをき、人にこそよれしらぎくと御ねすがたは何ごとぞや、あゝねたましや腹立

やとたぶさをとつて引出す□みだるゝかみもみだるる我心も是皆御身の惡性故、あはれみ給へ淺ましや、たちまち宮城野がをんねん政方のひにくにいり正氣をうばふくるしみに○しらぎく夢共わきまへずなふかなしや宮城野さま、是程こがるゝわたしには何を見かぎりそれぞ共、詞もかはさくだんせぬさりとては情なやといだき付んとしけれ共かたちは跡なく△ナクフシなみだつくして思ひをそむるふでのすさびにおもかげの地又立出る、ふしぎさよ○^{地色}政方ふしたるとこの内、すつくとおきて見給へばありしつとめの其まゝに、雪のすあしのしろ／＼と打見上ればア是は／＼、詞シテそなたはしんだではないか、地色こはそもふしぎといふはおろか我こそは御身をあくがれしたふ故、前後ふかくにとりみだしやるかたもなきおりふしに、ちぎりくちせずあひ見ること夢かうつゝか夢ならば、さめてくれよよろこばしと□互にひしといだきつき泣より外のことぞなき、宮城野涙をおさへ先つゝがなくおはしまし、御めにかゝるうれしやな、誠にわかれますしてより御なつかしさいかばかり尋ねかねつゝ此さとへ、まへのゆかりと御と

はせもしあらふかとまつかひの有とはいへどうき世の中かはりはてたる御すがた、見るに涙はといまらねど、それはくやみていらぬことかふおめにかゝる上はなげきてせんなし此うへは、いづかた迄もお供してしんじつにそひませふ是、我おとこいとしいぞや、かはゆいぞや女房と△いだきあひ、○しめ合て口さもむつまじきていたらく夢としらざるはかなさよ、地色しらぎくはさいせんよりすこしまどろみふしたりしが、ふつと夢さめ見てあれば、政方宮城野いだきあひてゐるけしき、見るよりむつとせきにせきむつくとおきてつか／＼とより、政方のむなぐらをしつかととりいやは申政さま、詞是はあちでござんすの地色まへはどふであらふとまゝ、いきかたづくでさきにからまくらをならべしうへなれば、たとへあねさまでござんしよが宮城野さまでござんしよがこはいことはちつともない、もふけふからはわしが男ござんせねよと手をとつて行んとするを△宮城野引はなちつきたふし、詞エ、是こゝないたづらもの、おれをたれじやと思やるぞ、いやほにあんまりじやがの地色そうじてつとめはいたづらがちながならひと

はいひながら、あね女郎のふかふあふおとこをねとりつべこべと、けつくこちからあやまらせふとなんぽかさからゆやつても、それは人によらふぞや、いかふかにんしにくけれど妹女郎のちなみ故、さたなしにこらへてやる今度からたしなみや、政さまこちへと手をとれば、いやあたゝかにはなそふかいの、政さまもつまらぬは宮城野さまと御ふうふの、御心中立さんせばなせに人にほれさんす、こちからしかけた戀ではなし、わしがおとこじやはなさんせ、いやだいたんなそち達に、ねとられてたつものかはなさぬか○いやはなさじと□後には兩方いとみあひ○あなたへひつぱり△こなたへひき□たがひにあらそふしつとのあくふうふきたて／＼、れんぼのねつたうくらり／＼、くら／＼、とう／＼とわき返り、げん世にほひしそらだきの、らんじやのけぶりほのほとなりくみ、ながしたるさかづきの、酒しらなみてんにみなぎりうらみとこひの二河白道、三惡道のかしやくのくげん思ひしらせん思ひしれとひつ立／＼、くる／＼とくるしみなげく其こゑの、まことうつゝにあらざれば、かの夢人はかけ

ゑにといまり三重うせにけり、二人は惣身地あせに
ひちばうせんとしてなくばかり^{△地}なふこひしのあ
ねさまや、○なつかしの宮城野といだきつけどうつ
つのかたち、床にかけゑのいきうつし、偕は此ほどな
つかしとふかくも人を思ひねの、夢としらせばさめ
まじをせめて詞を今一と、口かはしてくれよとふし
しづみなけど、さけべとかひぞなき、地色所へかたき
治部大夫、侍あまた引ぐし一間へふんごみヤ詞見わ
すれたか、政かた、いせんは主從今にては國のかみ
とあがまへられ、くはつけいくはんらくにほころと
いへ共家のけいづをみんぶめがをのれにわたしおと
せし故つぎめの參内なりがたし、何とぞをのれを尋
ねだしけいづさへひつたくらば命はたすけをひはら
はんと方々と尋ねつかれ、きうそくがてら家來共が
なぐさませんと此さとへ、らくあそびに來る所に、
地色日ごろしやうじき成某故佛神のみやうりにかな
ひ、しんだとりよりなをやすくいけどつて國へ引、
けいづをぬすむとが人と諸人の見こりにしてくれ
ん、あたぶのわるい其ざまで、錢かねなしの色ぐる
ひうでなしのふりずんばい、ゐざりのおろせ及びな

しとかんら／＼とぞわらひける、地色政方待つるかた
きながら大せいなれば何とぞし、治部めをうつて宮
城野がぐげんをたすけ其跡は、うたるゝ共せひなし
と身づくりひ有所へ、民部友春いかづちのおちぞこ
なひたる力足ぐはた／＼とはしり、入ハアうれしや殿
さま御きげんにてわたらせ給ひ恐悦至極仕る、ちつ
共おきづかひ遊ばすな、友春が參つたと、地色聞もあ
へず政方何みんぶとや是はそも、ふしぎにしつてか
けつけし我身落たる其跡にて、みやぎのもアノ治部大
夫めに殺されしよし、此上はくひ付てもしやつを討
でははらもゐず、もししそんなば友春跡を頼むとの
給へば、みんぶ聞にたまられずもふ／＼おくやみ御
無用さあ、詞治部大夫め、友春がしやばのなごりのう
らみのたちかねあんばいを覺させんと、地色政方諸共
ぬきはなちさやふみわつて立給へば治部大夫あざわ
らひいやしやらくさい死人めら、地色ついでにつちへ
にへこませけいづをうばへと夕そらもにはかにくら
くしんどうし、宮城野けしたるすがたをあらはし△
ア、お待なされませ、尤御本意とげられふなれ共たせ
いなればおぼつかなしわらはしやばにありし時常々

しんじ奉る愛染明王のりけんにつけ、親のかたき國
のあだたいちあらん御つげのしるしあれ、御らんせ
よ御正體をと口謠いふこゑの下よりも、ふしぎやゑ
ざうにつけ、置たりし、明王きへうせ給ふと見れば、
あたりもかゝやくがうまの尊體惡人たいぢ、有がた
や口地ついに追つめ追まはし治部大夫をづたくに
さしつらぬきて御すがた光明四方にかゝやけば、有
がたくもたつとくもをのくはつとかうべをさげは
いすれば、宮城野もたちまち成佛とくだつのをさま
る御代は千秋樂、萬歳樂や福德の諸人あいきやうぶ
んぶの神、廿六夜の月々にたつとみうやまひ奉る、月
待の御利生あら玉の、かすくつぐ御はん昌めで、
たかりけるはるとかや

右此本者依小子之懇望附祕密音節自遂校合令開
版者也 加賀掾

二條通寺町西へ入町 山本九兵衛刊

愛染明王影向松終

酒天童子

第一

さてもそのうち、ことばこゝに人わう六十六代の御門をば一でうの院と申奉る、うちには三くわう五しやうのきをあらはし、ほかにははんぎのまつり事をただしくして、ばんみん天をんのおもんじ君のめぐみは久かたの、やしまの外もくもりなく、月の都の道ひろくおさまる御代こそめでたけれ、其比天下のしゆごをせいわ天わうより五代のそん、多田のますちうの御ちやくし、けんひいしのべつたう、ちんじゆぶの將ぐん、いろふしせつつかみ源のをろし頼光とぞ申ける、地あいしたがふらうどうには、ことばわたなべの源五つな、さかたのみんぶ金とき、とをくみのかみうすいのさだみつ、地うらべのしきぶすゑたけ、ひとりむしやほうせうとて、以上五人の人々は、ぶゆうの道に誰として、るいたいのおもてをあはするものぞなき、かの頼光のゐせいの程、うら山さらんは、大三重なかりけり、ある時頼光、やかたにくわい

がう有、春さめのふりくらしたるつれづれに、こずへの花もほころびて、けふもくれぬとつけわたる、こゑもさひしき入あひの、かねつくころにもなりしかば、おのくしゆゑんはしめつゝ、地てまつさへぎるきよくすいの、ながれにうかふさかつきのめぐれや、おぐるまの、しゆくゝのゆうらんおもしろや、うたひつわものゝまじわり、頼みある中のしゆゑんかな、ことばすではるの日も、はやくれがたのこと成に、茶のくはひしゆゑんことをはり、よものはなしに成て頼光仰けるやうは、偕もたうぎんの御せいたう、天下にあまねく、ばんみんかうゑいを悦ぶ、我又天下のぶしやうにそなはり、せかいのりらんをたな心につけ、世上すでにせいひつにして、弓を袋におさめし也、なにか世の中にめづらしき事は候はすや、めんくゝいかにと仰ける、そのときほうせう申さるゝは、さん候此頃都にはめづらしき事を申ならはし候、九てうのらしやうもんには、きじんかすんで、くるれば人を取くらひ、ぎうばろくちくをつかみさく、去によつてかのあたりへ、よに入人の行かよふ事なしと人皆申ならはせり、定てかたぐも

聞召れ候らん、めん／＼いかにと申さるゝ、まんざ
の人々誰も聞た誰もたれもと申さるゝ、其中にわた
なべのつな一人へんたんをも申さず、きかぬかほに
ていたりしが、ひざをし立大べしにへしたる口びる
をきつとそらかし、是はほうせうの仰とも存せずや、
それをいかにと申に、つちも木もきもわが大君の國
なれば、いづちか鬼のすみか成べき、さすがにあの
らしやうもんは、王城のなんもん、とうざいの兩寺
はくはんむ天王の御願所、是又天下の御きたうに、
立おかせ給ひし大がらん、中比こうほう大師、かの
寺にちうしてたいざうかいのまんだら、七百よそん
をくはんじやうし、しんごんひみつのだうじやうな
り、かゝるたつときまのあたりに、たとへきじんが
すめばとて、それをすませて置べき、か筋ことばなき
事な申させ給ひそ、ほうせう聞て、偕は某御前にて
いつぱりを申と忌召か、其ぎにて候は、今夜にても
行むかつて御らんせよ、渡邊聞て、偕は某え參るま
しきと思召すか、其時まんさの人々一どうに、是は
むやくとといめける、いや／＼ほうせうにたいして
あらそふいこんはなけれ共、一つは君の御ためなれ

ば、あつはれしるしのふたを給はれかし、某今ばん
行むかつて、事のじつふを見て參らんと、はいかり
なくこそ申ける、ことは其時頼光綱にむかつて、げに
げに汝がいふごとく、かつうは君の御ためなり、是
を立置歸るべしと、しやうさつを下されける、かゝり
つなはしるしを給はり、いそぎ御前を罷立しが、又
立かゑりかた／＼は、ひとの心をみちのぐの、あだ
ちがはらにあらね共、こもれるきじんをしたかへず
ば、二たびめん／＼におもてをあはする事あらじ、
是迄なりと申切て、しゆく所を、さしてぞ三重歸りけ
る、やかたになれば、かゝり物のぐ取てかたにかけ、
重代のつるぎをはき、たけ成馬に打のつて、人をも
つれず只一人、二條大みやをみなみがしらに三重あゆ
ませ行さへもせず、くもりもやらぬ、おぼろ月よに、
とうじのまへをうちすぎて、らしやうもんにさしか
かる、俄にふきくる風の音に、こまもすゝます身ふ
るひしてこそ立たりけり、つなは馬よりとんでをり、
羅生門の石だんにあがり、しるしの札を取出し、だ
ん上に立置立歸らんとせし所に、何かはしらずうし
ろより、綱が甲を取て引とめ、つなも聞ゆる大力

にて、取たる甲のおを引ちぎつて、おぼへずだんよ
りとびをりける、其時きじんはいかれる姿をあらは
し、其たけかうもんのきにひとしく、まなこは月日
のひかりかゝやき、引さきくはんととんでかゝるを、
とひ違てうと切る、きじんかたうで打をとされ、す
こしひるみてついぢにあがり、やれつゐには其うで
取かへさん物をと、雲のうちにてよばはりこゑして、
行がたしらずうせてんげり、つな此由を見るよりも、
ゑゝ打もらしたる口をしやと、切たるうでをゆんで
にひつさげ、こまを引よせゆらりと打のり、屋かた
をさしてそ三重歸りける、御前にもなれば、ことば此よ
しかくと申上る、大將をはじめ奉り、まんざの人々
取々に是を見るに、いかにふとくたくましき事、大
ばんじやくのことくなり、つめのさきかゝまつて偏
に龍にいたり、頼光御らんじて、いかに源五かやう
のあつきは、七日の内には必わざをなす物なり、ふ
かく事をつゝしむべし、是はたうざのゑんぶつとて、
金作りのさやまきしたるひけ切の、御こしの物を渡
邊にくだされける、かゝりつなは弓矢の名をあげて、
悦び御前を罷立、わがやをさしてそ三重歸りける、わ

がやになれば、ことば偕おにの手をしゆのからひつに
おさめそのゝちは、たきやうもせずもんこをとぢ、
ふかくつゝしみいたりけり、かくて其日もくれけれ
ば、もんをしきりにたゝく、ばんの者立出て、あや
しやたそとがむれば、いやくるしくも候はず、津
の國渡邊に有しつなの太郎がおば成が、是まで参り
て候なり、こゝをあげよと有ければ、番の者承り、
いや誰にてもあらばあれ、こよひはよもふけぬ、明
日御出候へと、いひすてゝ内に入、おば此由を聞給
ひ、地打うらみたるこはねにて、あらうらめしのし
だひやな、誠にをんをえておんをしらざるは、そも
ちくるいにたとへたり、わどのおさなき時よりも、
みづからがそだて、けんたうそせつのさむきよは、
ふすまを重はごくめり、きうかの天のあつき日は、
あふぎのかせに手をさらす、わどのをつなといはせ
し事、みづからがおんならずや、としおいよはひか
たふけば、あすをもしらぬ命にて、わどのを一めみ
んために、くもひとをきふるさとより、はるゝ尋
來りしに、もんより内へ入ずしてをひかへすほうや
有、わどのじやけんの者かなとうれいふしこゑをあげ

てぞなき給ふ、ことばさしもにかう成渡邊も、あくまでおばにくどかれて、もんをせひなくをしひらき、いやとよ是は偽なり、おばごせわかき時よりも御心たけくしくましますば、今もさぞわたらせ給ふかと、御心を引みん其ためなり、かりこなたへいらせ給へやと、よまのでいへぞしやうしけることばおば仰けるやうは、此ほどは打つゝき、わどのばらが身のうへに、ゆめ見のあしくはんべれば、何にても思ひ合する事なきかとある、つな承り、羅生門にて鬼のかいなを討たる事、有のまゝにぞかたりけり、おば此よしを聞召、誠やらん今生にて、はるふし鬼のかたちを見し人は、來世はうかぶと聞なれば、ことばなふ其鬼の手とやらんを、わらはに一め見せられよ、綱此由聞よりも、かなふまじとは思へ共、又もふけうと有べきかと、せひなくかいなを取出してぞ見せにける、おばかいなを手にとりまはし、引まはし見るよしにもてなし、きられしうでにつき合せ、やれ是は我手なれば取ぞとて、かりたちまちあつきとなり、はふをけやぶりとんと出る、綱此よしを見るよりも、ゑゝたばかり口をしやと、あとをし

たふておつかくる、雲の内にてわらふこゑして、ゆきがたしらすうせてんげり、綱あまりのほゐなさに、うん中に向て、天もひゞけるこゑを上、おのれへんげのしんなり共、我たましいは、じんづうなれば、天地さうかいしゆみせんのはてまでも、さがしいださで置べきか、終にはたいぢせん物をと、八げんはなつてのゝしつたり、それよりも今のよにいたるまで、渡邊たうの屋づくり、はふを上ぬるんゑん是なり、せん代みものためしやと、皆かんせぬ者こそなかりけり

第二

さるほどに、ことば渡邊の綱は鬼神のかいなを討しやり、よの中しづかに成けれ共、つゐにかいなを取かへされしより、まつた近國にはいくはいし、人の妻子を取事は、都の内にもくげ大臣の姫君たち地其かずおほく取とかや、爰にいけだの中なこんふし國高とてをくりかうけ一人をはします地只一人の姫君有、ちんの内にて人ならせわか紫のにはひふかく、はつ

もとゆひのねみだれがみ、行するなかり御てうあひ、
はや十三にぞ成給ふ、さればにや世の中の、情を聞
人ごとに、心をかけぬは中三重なかりけり、是は諸置、
ことば爰にかづさの國のちう人、藤原のせうげんとも
として、弓取の有けるが、此姫君の御事を、かね
てよりもきゝおよび、やがて使を立らるゝ、あらお
のこはでんぶなりとて地いるおつばねにいひふくめ、
ゑんの使を立らるゝ、ことばやがて國高のやかたに
行、あんないかふて北の方に近付、ゑんの使を申上
る、御臺聞召、尤さは候はんすれ共、此方の姫か事
は、二條のきんだちへかねてけいやく有し事なれば、
かなふまじきとの給へば、中なごんつかひの者に打
むかひ、大きにいかつて我むすめをのそまん人は、院
の宮がたくはんばくてん上のきんたちか、ぶけに取
ては天下の武將、源の頼光のもんは成へしなんぞや、
あつまのあらゑびすをむこに取べきいはれなしと、
もつてのほかにの給へば、地いる使の女房、力なくく
りいそぎ、やかたに歸り、有のまゝにぞ申ける、と
もとし大きにふくりうし、お中さけすばあづまぢの、
さのゝふなばしさのみやは、たへては人の戀わたる

へと、思ひこがれ給ふにぞ、御いきどをりふかくし
て、我ふしやうなればとて、さのみ國高がいやしむ
る道にてなし、此うへは國高がやかたへふんごうて、
姫をうばふか、さらすは國高とさしちがへんと、たち
おつ取てとんで出る、ちからの介が取付てしゝ申こ
はもつたいなの御所存かな、うへのおてらのちごほ
うし、それよりもなをやはらか成くけ長袖とたとへ
たり、誠にはんどどうむしやの其中に、ゆうりき人に
こへめいちのほまれ取給ひ、したながけれ共我々迄、
あらおのこのりきしやといはれしもの共が、罷こも
つてありながら、いなこのやう成人間に、君の御手
はおろさせ申まじ、おいて物を御らんせよと、しつ
ほりとぞ申ける、ともしせきたつむねをおしさす
り、おゝよくこそ申たれ、わかき時のならひにて、戀
にはたれもせく物ぞ、ふかくのものと思ふべからず、
此戀をふつゝと思ひきる、八まんぐゝ二ごんとはつ
がぬぞと、小刀をもつてつばもとを、かつしゝと
きんちやうをはつたるは、いさぎよくこそ三重見へに
ける、是は諸置、ことば此比たんばのくに、大江由に
すむ、酒天童子がけんぞくに、石くまとうじといひ

し鬼此由を聞よりも、偕も中なごんの姫君を二條殿へむかへらる、是よきさいわいなり、女とへんけうばひ取、どうじのきさきにそなへんと、かゝりあたかもじんべんをえし鬼なれば、たちまち女のすがたとへんげ、ことば池田殿のやかたへ行、あんないこふてたいめんし、さいはい今日さいじやう吉日、姫君をおくり給へとの二條殿より御使と申ける、國高もとよりやくそくの事なれば、地いろしうぎのよそほひ引つくろひ二條、いろをくり殿へぞおくらるゝ、かゝりくだんのおに共一條のもとり橋にて、請取わたしのぎしきをして、二條殿へはゆかずして、東寺の今道より、あたごのかたへ行かと思へしか、御供の侍女房と見へしは、いるひいぎやうの姿と成、行がたしらすに上「とんで行、是は偕置、二條殿より誠の使ぞ立にける、國高おどろき、偕はともとしめがたばかり取たるにうたかひなし、おしよせて取かへさん、馬にくらをけものゝぐせよ、かゝり承り候とうへを下へと三重かへしける、あくじ千里を行ならひ、ともとし聞てちからの介をまねきよせ、姫をくれぬのみならず、そうごんはきし事、それさへむねんに思ひし

に、むしつをあたへ某を、ほろぼさんとのくはたて、やせくけはらがぶんとして、ぶけに弓を引ん事、とうらうがをのをもつて、りうしやにむかふににたるべし、ことばいざこなたよりおしよせ、くもの子をちらすやうに、かたはしよりふみつぶさん、用意せよ、かゝり承候と、物のぐおつ取なげかけゝきるまゝに、馬共を引立ゝ打のり、夜は何時ぞ八つの比、じぶんはよきぞとよせかくる、兩方よりよするせい、二條ほり川にはつゝめ、川をへだてゝあみあはせ、ときのこゑをぞ三重あげにける、かゝり時のこゑもしつまれば、偕兩ほうより馬をはたゝと乗合、ちからの介がせんにとばをかくる、それゝてきと見た名を何といふやらん、我は是かつさの國ともとしか郎等に、小林ちからの介もりみつといふものなり、しさひなきともとしにいきどをりをふくまるゝ、いしゆをつぶさに承り、あいてもあらばそとくんで見申そ、さなくばかたはしより、わしがすゝめをつかむやうに、ひらふて御めに掛んため、罷出ばつて候と、ことばにくぎをぞ打にける、おゝ聞たゝゝ、是は國たかい郎等に、今川ゑもんなりとをといふ者な

り、忝くもうへつかたへ、御けいやく有姫君を、なんぞやあつまのあらゑびすのぶんとして、りふじんにうばひ取事、じんぎやぶるやから者、いそぎ姫ごみをわたすべし、からめとられてこうくはひくびすをめぐらさじ、命をしくばはやかへせ、かへせくとのゝしつたり、もりみつ聞てやれうろたへものよつく聞、しんぎをたゝす侍か、たとへば女のきゝんがゆけばとて、などしんていをくづさぬぞ、おのればらが心に引あてあさいすいかな、侍たるべき者がかゝるむしつにあふうへは、いや取たぞとらぬのへんたうにはおよはぬぞ、あれけちらせもの共、かゝり承り候と、かたきみかたが入みだれ、火ばなをちらして三重たゝかひける、然る所へ、こゝは六尺ゆたかの太の男、ひたゝれの露をむすんでかたにかけ、くろかねのはうをつきちん中へとんで入、しづまれくせまいく、是は四天王の内遠江の守定光といふ者也、頼光よりの御使也、何ゆへもつてかくらうせきにはおよばるゝぞ、だいらまちかきあたりにて、王位をもはゝからず、洛中をさはがせ給ふはかみをなかがしろにしたまふゆへ也、かたゝもつて然るべ

からず、惣して此頃うへつかたの姫宮たちうせさせ給ふ事其かずをしらず、事のうたがはしき事あらば、せんしをもつて後日にきうめい有べし、まづくきをやめられよと、かゝり定光しきりにせいすれば、兩方一句につめられて、國高ともしたがひにちんをさつと引、かの定みつのふるまひを、上下萬民をしなへ、かんせぬ者こそなかりけり

第三

かくてそのゝち、地ともといつはりなきにより、重ねて弓やはなかりけり、偕國高のやかたには、近國他國を尋れ共、其行かたのあらされば、其頃都にかくれなき、めいよのはかせの上手有、いそぎ召よせ給ひける、御臺あまりの物うさに、はやく參れやすうちよ、今は誰をかはぢぬべき、迎へよりて事とはん、なふはかせ聞給へ、それよの中のおやの子を思ふなひいづれか思はさるべきや、かなしきかなやみづからは、只一生にひとりの姫の有けるが、有夕くれに、女房の來りたばかりしを、しらで其まゝい

ざなひゆかれ、其行方のなきぞとよ、こゝばはかせ承り、してお年は何と、とらのとし、いねうしとら、お、偕はお十三な、何の月の何の日の何のこくの御たんじやうぞ、とらの月のとらのこくにたんじやうす、姫が行ゑの有ならば、數の寶はおしからじ、生れてよりも此かたは、えんより下へおるゝだに、おちやめのとが付そひて、あらかかせだにいとひしに、わかれてよりも此かたは、又二め共見る事なく、あうらめしのわが身やと、きへ入やうにぞなき給ふ、こゝばはかせ承り御どをり也理りとて、六十一のこよみに八十三のさんぎをはらりとみだき、易のおもてをしはらくみてよこてをてうと打、姫君の御行ゑたんばの國大江山にすむ、きじんがわざにて候也、去ながら御命某延命久と祈るべし、やがてめでたふ二度御所へきにうなさしめ奉らんと、地いろさも頼もしくうらなひて、はかせは我やにかへりけり、地偕それよりも中なごん、いそぎだいらへ三重あがるゝ、だいらになればこゝば姫をとられし有さまを、有のまにそうもん有、帝ゑいぶんましゝて、くぎやうせんぎまちゝたり、中にも五條の大臣申さるゝは、

惣して國高一人にかきらず、近年人の妻子を取事其數をしらず、萬民の煩國土の大事是成べし、昔くはんむ天わうの御とき、たむらとしひとすゝか山の鬼神をたいぢす、せんれいにまかせられ天下のぶしやう、せつゝのかみ頼光に仰付られたいぢ有べし、ひとともなふらうどうには、さだみつすゑたけ綱きんときほうせうとて、鬼神をも手のうちににぎる程の兵なれば、あつぱれしさいは候まじと、只手に取やうにぞ申さるゝ、帝ゑいぶんましゝて、いそぎめせとのちよくぢやう也、地畏り候とをくりやがてちよくしをたてらるゝ、頼光ちよくめいかうふり、いそぎだいらにあからるゝ、内よりのせんじには、汝は急きたんしうにはつかうし、人をなやますくせものを、たいぢせよとのちよくぢやう也、頼光ちよくめいかうふりて、あつはれ大事のせんじかな、誠に鬼神はへんげものなれば、ちりやこのはに身をへんげ、ほんぶのまなこに見つけんことはかたかるべし、まなこにさえぎる物ならば、いかなるてんまやくじんなり共てつへきをもふみやぶり、手の下にうちしたがへ、しんきんをやすんせ奉らんと、つゝしんでお

請を申御前を立やかたを、さしてぞ歸らるゝ、したくになれば、ことば人々を近付、此度はつねの打手に替りたり、神の力を頼まんと、綱金時はくまのへ代參すべし、定光末武はすみ吉へ、地かゝり偕頼光はほうせうをともしなひて、あまた供人引くしてやわたの山へそ三重參らるゝ、お山になれば、鬼神たいぢの御りうぐはん、十二人のかぐら男、八人のやをとめほうへいをさゝけ、神前にてみゆを參らせ三重給ひける、あら有がたや、きねがたもとなるすゝの、神の御聲そひてあらた成ける、御たくせん、我はんち、じやつくはうを出しよりも、すいしやくわくはうのひかりをあらはし、ふんたんとうこのやみを照し、まつせの衆生をまもらんため、此岩清水の、きよきながれにかげをうつし、君もそくさい氏子はんじやう、きんじやうさいはいくゝ、鬼神をはやくたいぢせよ、かけ身にそふて守るへしとて、神は上らせ給ひける、かゝり頼光なのめに思召、あらたに御ぢけんかうふりてやかたをさしてぞ三重歸らるゝ、やかたになれば、定みつすへたけ綱金時も、あらたにれいむをかうふり、ことば同下向申さるゝ、頼光仰けるやう

は、此度は人あまたにてはよろしからず、以上六人山伏にさまをかへ、山ぢにまふふせいにて、鬼が城にみだれ入、いかにもちりやくをめぐらしてたばかつて討べき也、用意せよ、承り候と、思ひくゝのはらまきをしだひしたひに三重かさりけり、先頼光のおいの中にはらんでんくさりと申て、ひおとしの御よろい、しゝ王の甲にちすいと申て二尺八寸有ける金作りの御はかせ、しひにんにくの衣の上に、わつそくにむすんではき、たいぞう、こくしきのはゞき、八つめのわらんづしめはいて、さもゆゝしくこそみへ給ふ、かゝり偕ほうせうはむらさきおどしのよろひに、岩切とて、四尺八寸有けるが、ふたへにかねをのべ付て、三そくあまりにねち切、おいに入てぞかけてんけり、綱はもえぎのはらまきに、同げの甲をそへ、鬼切とて四尺七寸有けるぬけば玉ちる計り成を、ゆんでのわきに覺へける、定光末武金時も、思ひくゝのぐそくを入、心々のつるぎをはき、さゝへと名付さけを入、火うち付たけはらのかひ、こんがうづゑをつきつれてすでに、みやをこそ三重

頼光山入道行

出らるゝはやあけがたの、山のはに、月も雲かゝる、
かげにかつらの里とかや、さをなぐるまのはかなさは、
うしもつなでをほぶらん、いさむ心はくつかけ
のふ、む、こまのあしなみはこばせて、地さかゑるお
におひのさか、なをしんりきのみしめなは、むかふ
あくまをきりしきみ、ほうらいぎうはいるなれば、
せんしう、ばんせいのかめ山に、よろこびのきたく
をいそかんと、大江山のふもとなる、かの姫むろに
ぞつかれける、こゝは是よりすゑは道もなし、いかゞ
はせんとおもふところに、しばかるおのこにゆきあ
ふた、らいくはうちか付いかに山人、此國のせんぢ
やうがだけおにがいわやはいづくぞや、をしへてた
べとありければ、さん候あれ／＼御らん候へ、まづ
みなみにあたつて、かすかに見ゆるたかねあり、し
ろく物のみへけるは、おそろしきおにがじやうより
ながれて、おつるたきのみづちしほにみゆる、時も
あり、地又其みねのあなたこそおにがさいしよと聞
からに、じんりんさらにゆくことなし、なふきやく
そうと、おしへてこそはのとをりけれ、かゝりらいく

はうなのめにおぼしめし、さ有は此みねこそやとて
たによ、みねよと三重こされける、じんりんなければ、
あるひはたかねのくもにまくらをそばだて、いわも
るみづにてのんとをうるほし、がいたるやまのそは
づたひ、こゝはつゆなめらかにしてかゝりあしをつまだ
て、木のねにとりつき／＼こゝろをくだききもをけ
す、こゝはすさんろしゆ川とより、あめなふしてこゝ
すひころもをうるほせり、見あぐればばんじんのせ
いげつしのきをけぶり見おろばせんじやうのへきた
んあひにそみたり、地みゝにふるゝものとは、み
ねにこつたふさるのこゑ、ゆきのしたゆくちり／＼
みつのをとをのみ、地しづがつま木のおのゝおと、
心ほそさはかぎりなし
とある岩まをみれば、しばのいほりの其中に、おさ
なき三人おはします、頼光立よりいか成人にてまし
ますぞ、おぼつかなしと仰ける、さん候一人はきし
うおとなしさと、今一人は津の國かけこのこほ
りのもの、又一人は都近き山城の者成が、此山の酒
天どうじにさいしをとられ無念さに、此比叡に來り
て有、儲きやくそう立をよくみるに、ちよくめいを

かうふり、かれめが打手に向ひ給ふと覺へたり、我
我せんたち申べし、先おいをもおろしつかれをもは
らされよ、頼光聞召、近比御情とこそ存れ、いかに
めんくしばらくやすらい候へく、畏り候と其時
おいをひたくくとおろし、しばいにおりゐてや
すらひける、時にさへ酒を取出し、兩三人のお
きなへは酒をさまく、にすめける、地とおきな
なのめに思召、鬼を討べきはかりこと、きやくそう
たちに語べし、かの鬼つねに酒をのみ、ゑいふした
る物ならば、わか身のうするもしらぬゆへ、酒天ど
うじと名付たり、此三人のおきなこそ、めいよの酒
を持參せり、其名をしんへきどく酒とかく、神のほ
うべん鬼のどくとよむ也、此酒をあたへゑいふした
る所をうち給へ、ふさぬさきにはかならず御むよう
とて頼光に下されけり、今一人はながへのてうしを
取出し、是もむかし神代の時、鬼と國あらそひの有
し時、此てうしにて、酒をくみ、鬼神をたいぢし給
ふ也、口の二つ有事は、かりどくと藥のへだて也、
ゑのながくはんべるは、命ながへのゑんきをかたと
り、此てうしにてくむならば、くだんの酒はいつみ

と成、のむ共くむ共よもつきじとて、頼光にたびて
んげりことば今一人はほしかぶとを取出し、是も昔神
の軍の有しとき、正八まん大菩薩あくまをしりぞけ
給ひしときめされたる甲也、これをちやうだい致し
て討給へ、たとへばばんじんが力をへねつてつをわ
かしかくる共、すこしもしさい候ましとて頼光にぞ
下さる、かり三どちやうだい仕り、偕は三社の御
がみの、是迄げんとうめいはく也と、かん涙きもに
めいじて、なふ有かたかりける次第也、かりさあら
ば打立給ふべし、猶々道引申さんと、先達してこそ
あゆまれけれ、かうざんふかき谷迄も、かり夢ぢを
たどることくにて、鬼が城の山口成、ほそことば谷川
にぞ着給ふ、此川を上り給へ、やがて程こそちかから
め、かり一人はくまの權現住吉の大明神、正八まん
大薩と、けすがことくにうせ給ふ、かり六人の人々
は歸らせ給ふ御跡を、やしはらくらいはいし、川か
みさしてのぼらる、此人々の御有様、有かたしと
も中々申、斗りはなかりけり

第四

かくて其後、地いろ六人の人々は、ことばをしへにまかせ川上にのほり見給へば、十七八成上郎の、あけのちしほにそめかへしたる御小袖、涙と共にすゝがるゝ、ことば頼光立より、御身はいか成人にてましますぞ、さん候みづからは、都にて花ぞのの少將の、地一人姫にて侍るが、あるよ鬼神にとらはれ、此所に来りたり、戀しき父母や、おちやめのとにあひもせでうれいうきもつらきもとめたり、地いまだみづから一人にかきらずし、くげかたの上郎達、十四人迄ましますが、酒天どうしといふ鬼が、かなしきかなや上郎達のかいなをぬきもゝをそき、酒と名付てちをしぼり、のみける事のあさましや、いとをしやほり川の中なこんの姫も、けさちをしぼられ給ひしが、其御小袖をみつからが、是にすゝぎ申ぞところを上げてぞなき給ふ、頼光御覽していとふなけかせ給ふなよ、我々帝のせんじかうふり、此山の鬼神をたいぢし、御身たちをやがて都へくそくし申さん、鬼を討べき其じこく、道引給へと有ければ、地姫君よしを聞召是は夢かや、うつゝかや、なふ其ぎにて候はい、さ

あらば道引申べし、去なからみづからが、今迄爰にながいで、いか成うきめにあはんとて、なく／＼歸らせ給ひける、ことば頼光なのめに思召、いかにめん／＼あらうれしや、もはや鬼神はうつたる物ぞ、尤々日暮ぬさきに岩やに入べし急々ところ、いふやいなや程もなく、鬼が城にぞつかれける、ようじんきびしく打みへて、石をたゝみてついぢをつき、山をうがちて門を立、岩を割てとびらとなし、ことば偕其内にはくろがねのもん有番の鬼共是をみて、此程は人をこびける折ふし、ぐにん夏の虫、とんで火に入とはかやうの事をいふやらん、出々引さきくはんととんでかゝる、中にも心有鬼が引とめ、やあしばらく／＼、かくめづらしき酒肴下にてはからひたべんより、先かみへ申て御意次第にたべんといふ、此義は然るべしと童子へかくと申、童子聞て是はふしぎの次第かな、何さま對面申べし、それこなたへと申せ承り候と、かゝり六人の人々を、をくりゑんのきは迄しやうじける、其時なまぐさきかせ吹て、らいでんいなづましきりにして、せんごをばうする其中に、せい高く色うすあかく、かみはかぶろにをしみたき、

かり大がうしのおり物に、くれないのはかまをき、
てつちやうをつゑにつき、あたりをにらんで立たり
しは、偕身のけもよだつ計り也、ことばどうじ申さる
るは、我すむ山はつねならず、すせきぢやうの谷より
わき立雲のなみきりふりかすんで道もなし、そらを
かくるつばさ地をはしるけたもの迄、道なければく
る事なし、ましていはんや人間の身として、そも天
をかけつて來るかや、かたれきかんと申けるべしとば
頼光聞召、御ふしんは尤也、我等か行のみなかみゑ
んの行者といひし人、道なき山に道をふみわけ、ご
きせんきあつきとて三人の鬼神の有に行合、しゆも
んをさづけゑるきをあたへてはごくめり、されは此
きやくそうもおなしながれをくむ、本國はではのは
ぐろを出、大みね山にしこもる、漸々春にも成し
かば、都一見の其爲に、夕へよをこめ立出る所に、
せんやうたうよくふみまよひ、思はずも爰にうかれ
きて、童子の御めにかゝる事、是ひとへにゑんの行
者の御引合と存也、誠に一じゆのかけ、一がのなが
れをくむ事も、皆是たしやうのゑんぞかし、ことば酒
を持せて候へは、おそれながらもとうじへ御酒一つ

參らせあげ、我らも是にてよますがら、酒もりして
なくさまん、一やの宿をかし給へとけに有さふにの
給へば、どうし聞てもとより望む事なれば、酒と聞よ
り悦びて、それ／＼きやくそうこなたへと、ゑんの
上迄しやうじける、ことばかくてとうじ人々に打むか
ひ、さらばとうじもきやく僧達に御酒一つ參らせん、
夫それと有ば、承り候と十七八成上郎を二三人つか
みよせ、いたはしやなあさましや、うたかのゑをう
つ其ごとく、かいなをぬきもゝをそぎ、酒と名付て
ちをしぼり、ことばさかつきそへてどうじがまへにぞ
置にける、どうじ盃取上なにがしたべ申さんと、一
つうけてさらりとほし、頼光にさしければ、頼光盃
取上、一つくんでさらりとほし、綱にこそはさゝれ
ける、綱さかづきちやうだいし、さし請、引受つゝ
けて三ばいほし、しゆつふうといひてこびたいをは
たと打、偕々おたんな申、かゝにきく酒、ゆどの山
にはつまかくれさけ、はくろさんのとなりしらず、
くまの山がのほい／＼酒とて、ことばあまたのめいし
ゆをたべ申たるがなふ、なかんつく此酒は、あらお
ごりかなく是ぞめいしゆとほめにける、どうじなの

めに悦ひ、それ／＼さかなはなきかとある、今切たると打みへてかいなとも、をばんにすへ、どうじがまへにぞ置にける、それ／＼こしらへて参らせよ、承るとて立所を頼光おさへて、とても事の事に某てれうりしてたべんと、こしのさしそへすはとぬき、しむら四五寸切した打してぞしやうくはん有、綱御情のふるければ某もとて、鬼のかうぶつ手の内のししむらをかいつかみ、さもむまさうにむしり／＼としがみける、どうじ見て偕々きやく僧達はいか成山に住なれて、かくめつらしき酒肴、ふくせらるゝそふしぎなれ、其時頼光御ふしんは去ことなれ共我等が行のおもてとしてじひにて給はる物なれば、たとひ心にそまず共、じたいにおよふ事はなし、ことにかやうの酒肴本來くうの人げん、打も打るゝも夢のたはふれ、そくしんそくぶつ是也、くうに二つのあちはひなし、あら有かたやとらいすれば、とうじもかへつて頼光にらいをなし、心にそまぬ酒肴、参らせけることはづかしやと、心打とけ見へければ、こは其時頼光綱にむかひ、それ／＼とあれば、承り候とくだんの酒を取出す、頼光仰けるやうは、おそれな

がら某持参の酒どうしへ一つ参らせん、御心みのため一つくんでさりとほし、どうしにこそはさゝれける、とうじさかづき取上、一つくんでさりととのむ、誠にしんべんきどくのさけ、其あぢかんろのごとくなればさし請引うけ、のむほどに、かやうの酒をのむ事は、是が一ごの初也、我さいあいの女有、よひ出してのまさんとこは國たかの姫と花そのゝ姫をゆんでめてにそ置にけり、其時らいくはうそれそれとあれば、綱承り上郎達へともりながす、其時どうし立あがり、いで／＼我せんぞをかたりきかせ申さん、本國はゑちごのもの、山寺そだちのちご成が、ししやうに、ねたみあるゆへに、あまたのほうしをさしころし、こは其よにひゑい山に行、わかすむ山と思ひしに、でんけう大師といふほうし、我たつそまとておひ出す、力およばず此山に來りしを、こはうばう大師といふほうしに、ふうじこめられかなはずし、それよりかはちの國、かづらき山にこもりしを、爰をもふうじておひ出す、それよりこはうばうはかうや山にうちやうじ、其後はさやうのほうしもなきにより、又此山に立かへり、都よりはほしき

女を取よせ、るりのくうてんいらかをならべ、女に
手あしをさすらせおきふしぬ、いか成ていわうの身
なり共、是にはよも過ざらじ、され共心にかゝりし
は、ことばみやこにかくれなき源の頼光とて、大悪人
の兵有、かれがけんぞくにつな金時定光するたけほ
うせうとて、以上五人のくせものありそれをいかに
といふに、去年の春いばらきとうじを都へつかはし
候時、渡邊の綱に行あひ、ゆんでのかいなを打おと
されしが、ついにかいなを取返し、今ははやさしい
なし、きやつはらがむつかしきゆへ我はみやこへ行
事なし、此しやうくはくをかまへしも、きやつばら
をふせがんだめなり、かゝりいか成しんつうをえた
る兵者なり共、是まではよも來らし、きやく僧いかに
とかたるやいなや、あらずさまじや色かはりて、しゆ
てんどうじは頼光をめをもはなさず打ながめ、かゝり
御身かまなこをよく見れば頼光かと覺へたり、諸其
つぎはいばらきが、かいなを切し渡邊、綱にて有、殘
る四人のもの共は、定光末武金時ほうせうかと覺た
り、ことばいぶしう候お立あれ、是に有あふ鬼共よ、
心ゆるしてけがばしすな、我にも罷立ぬると、てつ

ぢやうをおつ取色をかへて、そひしめいたり、ことば
頼光ちつ共さはかず、爰をちんじそんじなば事の大
事と思召、につことわらつて、是は近比御情共なき
御ことばかな、日本一の兵に此きやく僧かにたると
や、もと竹もする竹も名を聞だにも初也、ましてめ
に見る事はなし、只今仰をよく聞は大悪人と承る、
あらもつたいなやあさましや、さやうの人にはにる
もいや、我らが行のおもてには、ものゝ命をたすけ
んため、さんろを家とする事はうへたるこらうにち
きをあたへ、うしやうひじやうをたすけんため也、
しやかむに佛のいにしへ、らかん仙人にわかれ給ひ、
せつせんにいらせ給ふ、則御名をせつせんどうじと
申、ある時山ちを通らせ給ふに、ふるき谷のそこよ
りも、しよぎやうむしやうせしやうめつほうとな
ふ、せつせんふしぎに思召、谷にさかりて見給ふに、
九そく八面の鬼神とてかしらは八つに足九つ、さも
すさまじき鬼ぞ有、せつせんどうじの給はく、只今
となへし四くのもんいまだ二く有べし、とてももの事
に残りしもんをさつけよとある、鬼神こたへていは
く、さづけん事はやすけれ共うへにのぞんで力なし

何にてもにくたいをぶくしなばさつけんといふおつての給はく、やれきなくとよ、それにくたいはぐわらくのごとし、石かはらよりむさき身を今たつときもんにかへて、衆生の本くはいにたすけん事こそ本望なれ、残りしもんをさつけないば汝がゑぢきに我ならん、鬼神なのめに悦び、其義にて候は、残りしもんをさづけんと、かゝりしよぎやうむじやうせしやうめつはう、しやうめつるじやくめついらくとなへければ、あら有がたやとらいはいし、きしんの口へとひ入給ふを中にてすくひ奉れば。鬼は則八大大目、せつせんだうじはしやかむに佛、又有時には是やこの、地はとのはかりに身をかけしも、皆是いけるをたすけんため也、是にありあふきやく僧達も、おなじ行にて候へば、ことば何にてももん一つさつければ、はや／＼命をめさるべし、露ちり程もをしからしと、かんだんくだきてのべらるゝ、ことばとうじ是にたばかり、仰を聞は有かたや、きやつはらは是迄はよも來らじとは思へ共、つねに心にかゝるゆへ也、ゑいてもほんじたがはすや、あかきは酒のとがぞかし、おにとは思召れなよ、我もそなたの御姿、

打見にはおそろしかれ共、なれてつぼひは山伏と、うたひかなで、ずんと立、ことばさかづきをほうせうにさす、そば成とらくまどうしにまへとある、ずんと立てぞまふたりける、くもゐより、そら山伏がうち來り、酒や肴のかざしとぞ成おもしろやと、をしかへしをしもどしぶてうほうとぞしやべりける、ことば此歌の心はくもゐるとは都の事、そら山伏とはにせか正じんか、引ききくはんといふ思ひ入なり、あらかしこき鬼めらかなと、心の内はおかしけれ共はをくいしめてどつとほめてぞとをしけれ、ことば其さかづきをへんれいのため石くまどうじにさす、つなは立てそまふたりけり、本ふとしことに鬼のしこくさおゆる共、春の花みに、切てちらさんと、きつけうをいはふ歌の心を聞しらで、鬼共は手をたゝいて、たゝおもしろやとかんじける、ことばとうじさしきにたまりかね、いかにきやく僧たち、某が代官には二人の女を残し置、こよひは酒をのふで遊び給へ、明日御めにかゝるべしと、かゝりあらおかやしやうじをおしあけて、よるのふしどにさし入ぬ、有あふ鬼ども是を見て、こゝやかしこにふしたるはよねんもな

ふこそみへにけれ、ことは頼光二人の姫を近付、いかにかたぐ鬼のふしどを道引給へ、こよひ鬼神をたいらけ、明日かたがたを都へ送り申さん、なふ是は夢かや、ことばあゝおとたかし、しづまり候へしづまり候へ、なふ其義にて候は、御ようゐあそばせめんく、とおのく物のぐかためける、此人々の心の内、いそがはし共中々申、はかりはなかりけり

第五

かくて其後、かゝり頼光出立には、はたにはくさりかたひらに、らんでんぐさりと申て、火おどしの御よろひし、わうの甲に同三社の御神より給はりし星甲をき、ちすいといふつるぎをさし、なむ八幡大菩薩と、しん中にきねんして、さきに出させ給ひける、かりのこる五人の人々も、思ひく、のよろひをき、心のたちをはき、女房達を先に立、岩やをさして入給ふ、ことば時に定光こゑをひそめ、鬼にとられしものあらば、ひそかに是へ出よとあれば、其時岩やの内よりも、我をもたすけ給はれと、すそやたもとに

すかり付たる有様は、誠につみふかきざいにんが、ごくそつの手に渡り、とうくはつちごくにおとされしを、ぢぞう菩薩のしやくぢやうにて、すくひ給ふもかくやらん、かゝり女房達のおんないにて、ことば岩やの内をみ給ふに、十七八成上郎の、かいなをぬかれもゝをそがれ、あけにそまりておはします、頼光御覧じてあれはたれやの姫君ぞと、あればほり川の中なごんの姫と申さるゝ、頼光立よりいかに上郎、みなく都へ歸らせ給ふが、御身はのぼらせ給はぬかとあれば、地いたはしや姫君は、かすか成いきの下よりも、あらはつかしやあさましや、かく成はつる有さまを見せ参らするはかなさよ、あらうらやましの人々や、我はきのふの晝の比、かいなともゝをそがれ、いまた命のきへやらでかくくるしみをうくる事、哀とおぼしめされよときへ入やうにぞ、なき給ふ、地おつる涙のひまよりも、いかにかたぐ、都へのぼらせ給ひなば、父母の御かたへ、かたみのことつて申へし此、くろかみを切てたべ、頼光それれ切て参らせよ、承り候とやがて切て参らせける、地又小袖はみづからか、今はの時迄も、身にまとい

ける小袖なり、母のかたへ届てたべ、雪のまどのおれたけの、よはさかさまの事なれど、我をみるよと思召ごせ吊て給はれと、念比に届てたべとうれいふし涙と共に申さるゝ、地上郎立は取付て、いとをしの御事や、かくおそろしきちごくにも、御身に心がひかされて、跡に心が残るとてうれいふすかり付てなけるゝ、諸子の哀と聞へける、頼光御覽じてけにどうりなり去ながら、心つよくも待給へ追時むかいをこし申さん、末頼もしくもましませと、女郎立を先に立どうじがねやへぞ三重忍はるゝ、かゝりくうでんろうかく打過て、鐵の御所と名付くろがねにてとびらをかまへ、あかゝねのくはんぬきさし、中々ほんぶの身として入べきやうはなかりけりこうしの隙よりみてあればともしびかすかにかゝげ、酒天どうじが有様は、よいのかたち引かへて其たけ一丈斗にて、手足はくまのごとくなり、かゝりかみはあかくてさかさまにおひ、まゆげしげり四方へ手足をなけ出し、ゆたかにふしたる其すかた、身のけもよたつ斗りなり、かゝり内へ入へきやうもなし、いかゝはせんと有所へ、三社の御神あらはれ給ひ、いかに頼光

心やすかれどうじが五たいを八方へつなきて有きる共つく共しさいはあらじ先頼光は首をきれ、残りし者は足手五體を切べしと戸平をさうへおしひらきけすがことくにうせ給ふ、人々悦びみたれ入其時どうじめをさまし、なさけなしとよきやく僧達、僞なきとの給ひしが鬼神にをうとうなき物をと、大こゑ上ておめく聲山もくづるゝ斗りなり、ことば頼光ふり上丁と切、五人の人々も足手五たいをつだゝに切、其時どうじがくび頼光のほしかぶとをめぐけくい付、人々立より切給ふ、されども神のはうべんにて、其身にしさいはなかりけり、けんぞく共があまさじと、我もくとかゝりあふ、心へたりといふまゝに、四ほうへはつとおつちらし、有し所へさつと引、ときにいばらきとうじあまさじとかけ出る、渡邊ゑたりやあふとむすくみ、うへを下へとかへしけるが、いばらき力やつよかりけん綱を取ておさへたゝ一口とせし所を、頼光はしりかゝつて丁ときる、残りし鬼共おつふせゝ切ふするかゝり偕それよりもどうじが首を都へちさんし、御かどへさし上奉る、數の御はうび下さるゝ、偕其後は國もゆたかにおさまり

ける、千秋萬歲めてたし共中々申斗はなかりけり
右此本は太夫ぢきの正本をもつて板行致し候さ
れば初心稽古のためことゞくかながきにして
ふししやうくざり三味線ののりかたほどひやう
し三重おくりのしなぐゝひみつを残らずあらは
し出板行し也

京寺町通二條上ル町 版元 鶴屋喜右衛門
江戸通油町 鶴屋喜右衛門

酒天童子終

念佛往生記

第一

行水のながれはたえずしてしかももとの水にあらず、清くやはらぐ源の、たう／＼せんとしたいるとはげにいちじるくぞ聞えける、爰に流人前、右兵衛、佐頼朝卿、其威漸東關万里にふるひ玉ひ、ゐながらをんでき追討のヲロシぐんりよの程こそ、大やうなれ、地先々木曾がらうせきをしづめて後、平家の一族いづく迄も追つめて、ねを切て葉をからし目出度がいぢん有べしと、引手になびく青柳の枝をつらぬる御兄弟、御代官に立玉ふはよに頼母敷ぞおはしける、地色偕追手の大將軍には蒲、御曹司範頼、搦手の大將軍には九郎御曹司義經、相したがふもうしやうには和田、小太郎義盛、秩父庄司次郎重忠、平山、武者所季重、しのとうのはたがしら、熊谷、次郎直實同子息小次郎直家、佐々木、四郎高綱梶原源太景季などを先として、都合其勢六万余騎、壽永三年正月下旬に東寺四つ塚とばなは手に大まく打せぢんを取、平家

の一族追討の軍「チャクリ」評定取々なり地色中にも大將軍蒲御曹司範頼卿、軍配團押取のべ、詞抑此度平家の一類たてごもる、攝津、國一の谷の城郭といふは究竟の要害ときく、先東は生田の森を追手の木戸とし、らんぐゐさかもぎくはい／＼たり、西は又一の谷をかぎり、大ばんじやくをたゝんで搦手の木戸口くはう／＼たり北は大山てつべきをたゝみ、南は荒海ほんらん山をうごかし、四方ぎゝとしてよん所なし、口せばく奥ひろくぶんないくはうだいなりとかや、偕城の表の高櫓に、四國鎮西の手だれの兵甲冑弓箭をたいして、うんかのごとくなみゐたり、櫓のまへには鞍置馬共十重廿重に引立、すはといはゝ馳出んやうにかまへをき、つねにたいこをうつてらんしやうす、一張の弓のいきほひは半月のむねのまへにかけり、三尺の劔の光は秋の霜、こしの間によこたへたり、高き所にはあかはた多く立たれば、春風にふかれては、青天にへんぼんしたゝ火焰れつ／＼ともえ、あがるにことならず、かゝるするとき、城郭に、山陽道八ヶ國南海道六ヶ國都合十四ヶ國を打したがへ、たてこもり軍兵十万余騎、みかたの勢に一

はいせり、前はひかた後はけんその、てつかいがだ
けひよどりごへ追手も、搦手も中々、ぐんりよに及
ばすいかゝは、せんとぞ仰ける、御しやてい御曹司
義經謹で承り、仰は左にて候へ共それ、軍といつば
勢の多少によるべからず、千尋の堤にしやくすいを
そゝぎて洪水をみなぎらし、はんじやうのみねより
ゑんせきをなげうつて、大敵をほろぼすのじゆつ是
大公望がひせし所、しよせん六萬騎を五萬騎は御は
た下にぐせられ、追手ぐちより無二無三にせめ入玉
へ、某は残る壹萬騎をいんぞつし、山共谷共いへ、
人間の及びがたきかまでつかいがだけなり共、鳥さ
へかよふひよ鳥ごへ、平家の城のまんなかへま一も
んじにかけおとし、相圖の煙をあげほら押取てふれ
ならさば、追手よりもみ入玉へよし、大ばんじやく
をさぐつて幾萬騎こもる共、百しうのほらにもうこ
が飛入ごとく、みなごろし仕らんとさもいさぎよく
宣へば、地色中範頼を始め奉り、諸將此義に同じつゝ
さあらばはやく打立べし、明日五日は西ふさがり
六日はだうこ日七日のうのこくには、必々一の谷東
西の木戸口にて、源平の矢合と各一圖に相定め、幸今

日は吉祥日と、追手搦手手分をし蒲殿は攝津國、義
經は丹波路を山共海共なづみなく、よしやとはする
義經の軍慮の、程こそ三重ゆゝしけれ去程に地色追
手の大將軍蒲御曹司範頼卿、五萬餘騎を一圖にしめ
一の谷の追手口生田の森に押よせ玉ふ、搦手の大將
軍九郎御曹司義經は、壹萬餘騎を二手にし土肥次郎
實平に、七千餘騎をさしそへて一の谷の西の木戸へ
ぞつかはさる、我身はわづか三千餘騎にて一の谷の
後なる、ひよ鳥ごへを落さんとむかはれけるこそ三
重おそろしけれ、爰に又、地色熊谷平山は六日の夜半
計迄搦手の在けるが、熊谷は平山にをくれじとまだ
夜ふかきに子息小次郎直家と只二人はたさし一騎召
ぐして、頓て打立出にけり、熊谷其夜の装束にはかち
んのひたゝれに赤がわおどしの鎧をき紅ゐのほろを
かけ、こんだくりげと言聞ふる名馬に乘たりけり、
子息小次郎直家はおもだかを一しほすつたるひたゝ
れに藤縄目の鎧をきせいろうと云月毛の馬にぞ乗た
りける、偕はたさしはきちんのひたゝれに小櫻をき
にかへしたる鎧きて、きかはらげなる馬に乘主從三
騎打つれて、落さんずる谷をばり手になしチクリ馬手

へあゆませ急ける、地色まだ夜ふかければ土肥、二郎が七千餘騎にてひかへたる陣所をば夜にまぎれ、そつとはせぬけ一の谷の西の木戸にぞ押寄ける、熊谷子息の小次郎に云けるは、詞此手は惡所であんなれば、我もくと先に心を懸たる者多からんいざ地色名乗らん尤とて、かいだてのきはにあゆませより大音聲をあげて、詞武藏の國の住人熊谷、次郎直實、嫡子小次郎直家、今日一の谷の先陣ぞやと名乗ける、地色や、有てあとより武者こそ二騎つゝいたれ、熊谷たぞととへばいや季重なるか、詞さいふは又たぞ、直實ぞかし、して又熊谷殿はいつよりぞ、よひよりとこたふ、え、季重も地色頓てつゝいて寄べきを、成田五郎にたばかり今迄ちゝし無念、至極と語りける、地色角てしのゝめ明ければ熊谷先に名乗たれ共平山が聞前にて、又名乗んとや思ひけん、詞抑以前名乗つる武藏國の住人、熊谷次郎直實同小次郎直家、地色一の谷の先陣ぞやと名乗ける城の内には是を聞、夜すがら名乗熊谷父子をいざ引さげてこんとすゝむ平家の侍には、越中、次郎兵衛盛繼上總の五郎忠光、惡七兵衛景清後藤内定經を先として宗徒の兵廿餘騎木戸さ

かもぎをひらきおめいてこそは出にけれ、地色爰に季重はしげめゆひのひたゝれに、ひおどしの鎧をき二つびきれうのほろをかけ、めかすげといふむまに乘、はたさし一騎打具しつゝたちあがつて名乗ける、保元平治の軍に先懸して高名せし、武藏の國の住人平山の武者所季重参りさふと云まゝに大長刀をふりまはしあたるを幸にきつておとし、熊谷かくれば平山つゝき、平山かくれば熊谷つゝき互に、我をとらじと入かへく、名乗かへく、火出る計せめければ平家は手いたくせめられて、城の内へさつと引はしつて門を丁と打、只ゐとれやゐとれと下知をなし、しのをさすが如くさしつめ引つめ三重ゐたりけり地熊谷馬のふとばらをゐさせ、弓杖ついておりたてば子息の小次郎は、弓手のかいなをゐさせ是も馬よりおり立て父とならんで立たりける、詞いかに小次郎手を負たるか、地色鎧すきをつねにせようらかゝすな、やれしころをかたぶけよ甲をゐさすなと教訓し我身に立し矢共をかなぐりすて、城中をはつたとにらんで大音あげ、詞越中の次郎兵衛上總の惡七兵衛能登、守はおはせぬか、此熊谷父子におりあひくめやくめ

とのゝしれ共、地城の内にはをともしせずゐるやは雨のごとくなり、されども源氏の兵少共ぎぐせず、しころをかたぶけ鎧の袖をかざし此木戸を乗とれ、乗とれとゑいゝごゑしてをしよする、或は甲のまつかう、草ずりのはづれをゐ付られ手負死人は數しらず、地色中にも熊谷は小次郎が先に立ふさがらんとすれば、小次郎は父をいとひ我先にとかけふさがり、親は子をあはれめば子は又親をかなしみてしばしたゆんで見えにけり、地色中直實たんじて思ふやう、アものゝふの道程世にかなしき物はあらじ、我弓取の身ならずばかゝる思ひはあらざらめ、此世の外のくげんまで思ひやられて口惜やと、是にぞ一ねんほつきしてやゝ道心こそきざしけれ、地色中よしやよし、かゝれとてこそ生れけめ、ことはりしらぬ心やと、心で心をはぢしめて引は返さじ梓弓、矢たけ心の一筋にこみ入者共ひるむなとおめき、さけんでよせにける是を軍の始にて、追手の大軍どつとよせ軍は花をぞ三重ちらしけるされ共平家の大勢あら手を入かへふせざしかばさのみよはみも見えざる所に、からめての大將軍義經ひよ鳥ごへてつかいがみねより、

平家の城の真中へさかおとしに落し入、所々に煙をあげ相圖のかいをぞふかれける、是にぞ平家の大軍は一つ時にやぶれ一戦にも及ばずして、前なる舟に取乗て我もゝと三重落らるゝフシ荒いたはしや地色中むくはんの大夫敦盛はよひの管絃にふき玉ふ、青葉の笛を城中に忘れ置、取に歸玉ひし間に御座船沖に漕出る、四五反馬をおよがせて、扇を上てまねぎ玉へば大臣殿をはじめ一門の人々、あれよゝと宣へ共其をりふしは引しほにて、大船のかなしさは水主梶取もだへても、さらに其かひわらいそのせんかなみにこまをひかへフシあきれ、はてゝぞおはしける下謠かゝりける所にうしろより、熊谷の次郎直實、のがさじと追かけたり敦盛も、馬引返してなみの打物ぬいて、二打三打は打ぞと見えしが馬の上にて、引くんでなみ打ぎはにおちかさなり、熊谷取てをさへ内甲をみれば、二八斗の少人の、うすげしやうにかねくろくさもあてやかにらうたけたり、熊谷はつと思ひ、偕々御身は誰人ぞ御名乗ましませ、たすけ奉らんと有ければ敦盛につことわらひ、地やさしの人のことのはや、露よりけなる玉のをの、たへなばた

えね名乗はせじ、地色中とくくくび取て人にみせられよ、あはぬ敵にはよも候はじと宣へば、まうこそあざむく熊谷もたよくと成て、天晴上臈やないづくに刀を立べきぞ、今朝一の谷にて小次郎が薄手を負たるだに其かなしみのせつなりしに、うち奉らば御一もん嘸なかなしみ玉ふらめ、ア、いくとせのよはひをへて何のみやうもんりよくぞやと、取て引立よろひに付たるちり打はらひ馬にかきのせ奉れば、うしろの山より源氏のぐんせいを見て、詞武藏の國の熊谷こそ敵とくみはくんだれ共、うたぬはしれもの二心熊谷共に打とれやとこゑくくにのしれば地色熊谷涙をはらくとながし、此上は人手にかゝり玉はんより、某が手にかけて奉り是よりすぐに發心とげ御跡とぶらひ奉らんと、なみだにこゑをふるはしてさも頼もしく申ければ、敦盛も御なみだををさへやさしの人のいひごとや、名乗るまじとはおもへども、我は經盛の末子無官の大夫敦盛なり、はやとくとくと有ければ熊谷は是を聞、さればこそよのつねならぬ御かたやとなをも涙にくれにけり、地色中敦盛敵のかたを見給ひ事急に候はやくと、にしにむか

ひ念佛しかいしやくを待玉ふ、熊谷せひなく御くびを水もたまらず打おとし、たちをかしこになげすてしがいに覺えずいだき付しばし、涙にしづみしが、地色エ、よしなしな無三寶、是ぞしゆつりの門出ともといりふつつかききり太刀もろ共に西へなげ、弓きりおつてつえにつきすぐに發心したりけるは、熊谷の所存の程天晴惡につよければ善にもつよしと世こそつて感せぬ、人こそなかりけれ

第二

熊谷の次郎直實は今度西國の合戦に、嫡子小次郎討死せしよりおんあいのかなしみにや、發心におもむきしが、又敦盛を手にかけて申、彌むじやうを觀じ軍の場よりもとり切、都黒谷法然上人の御法を受阿じの一刀を引さげ、おんあいのきづなをばふつとときりはらひ、おこなひすましてゐたりける心の内こそ三重しゆせうなれ是に付ても、地中哀いやますむさしの、月よ花よとそだちぬる直實の二人の子、あね清姫十五歳弟小太郎種直は、十三歳に成玉ふが

五つと七つの春の比、父直實國を光源氏がたにつきそひてつゐに古郷へ歸られず、あまつさへ去年の秋母もむなしく成玉へば、今はたよりもなぎさの下鳥よるひるわかぬ涙哉、地色され共父をたのめにてあけくれ待しもいたづらに、父さへうき世をすてをぶねのりのすがたとつたへ聞、なふなさけなやたとひとんせいし玉ふとも、親子のえんはきれまじきに歸りて見もしみへられんと、思召ざる御心底ア、おやながらもだうよくやとこゑも、おしますなき玉ふ、地色涙の隙より姉君はいかに小太郎、わらは女の身成共都とやらんへ尋行、父上の御めにかゝり尼法師共さまをかへ、母上の御菩提をもとひ参らせんとおもふなり、おことはいまだをさなければ姉がらすをやし玉はん、小太郎聞もあへずこはうらめしき仰かな、父共母共頼にせし御身にはなれ某が、いかでひとりはあられふぞ、其上我も父上にあひ参らせ度候へば、御供申候はんさあらばしたくましますと、今をはつかの旅姿あはれ、はかなき三重、しだいなり

きよ姫兄弟道行

あらいたはしや、清姫たねなを兄弟は、都とは西やらん、東共いざしらくものとうざいわかぬたびの空、おぼつかなくも出らるゝ、チャリ心の「内こそ、あはれなれあゆみならはぬ、道しばの、露か涙か、袖につらぬく玉川や、あとに霞のせきはあれど、もしやは人のおほいそと、とつかはとしてふぢさはや、薄紫の親子のえん、偕も七世のまごにだに、あへばあふとやうらしまが、玉手はこねの山こへて、西を遙にみしまぢや、弓手はさうかいまんくとして、みほのまつばらさんざと、チャリ嵐につるゝ夕なみに、げにうき嶋がはらからと、爰にふたごの山みへて、手に取やうにあしがらや、フシあしたか山もけをさるゝ、やえまく雲のおびをしてかのこの小袖ゆきなだてを、するがのふじのやま唐、迄もたかきなを、もつやたごのうら、あづまからげのしほ衣、きてこそみたれ清みがた、かげもはてなきなみのうへチャリ月の「くまなる、さよちどりともなふ人も、あらいそのあまの、小船か、こがれゆく末はいづくと遠江、はまなの橋の橋柱、立る心もよはく」と、と有木かげに立寄て、暫休らひ玉ひける、然る所に

東國方の人商人七八人打つれて跡よりも來りしが兄弟を急度見て、さあたゝ取山のほとゝぎす、しかも津がひをひつかけたかけたゝとうたひよる、地色され共二人の人々はかゝる者とは夢にも知らず、詞なふ都の方へはかう參るかとはるれば人かひ共うなづきあひ、いかにもゝかう參るが、都へのぼらせ玉ふならば我々も京うち參り、地色いざゝ同道致さんといへば、地色こは嬉しや其儀ならばひとへに賴參らする、めんどくながら都迄送りといけて玉はれや、チ、少共氣遣し玉ふな、馬に成共かごに成ともすき次第にのせまして、ゆるりゝと參らふぞとそらいたはりののせことば馬よかごよと夕暮にあか坂宿にぞ三重とまりける、宿のていしゆ地色立出さまゝにあいさつし、詞あのお子さまがたは御兄弟と打見えしが偕うつくしきお生つき、地色さぞ草臥させ玉はんに風ばしひかせ玉ふなと障子をへだてあなた成小座敷にしやうすれば、人かひ共は次の間に打くつろいでゐたりけり、地色兄弟は草臥より休み玉ひしが、人かひ共は悦びの門出をいはんと、さまゝ肴をとゝのへさいつさゝれつさかもりし、互にきげんも

四つの比一人が云様は、詞何とあの兄弟は寺方へうるべきか、ぶしがたへうるべきかといへば一人聞いて、いやなふ此比上方に、かふき子といふものはやりあのやう成うつくしきは二三百兩にもかふといふ、姉はむるいのきりやうけいせい町へうるならば、五百兩はした物ぞ、地色兄弟合て八百兩百兩づゝの分取ぞやよき肴ござんなれ、のめやきほへといさめるを姫君始終聞召、大きにおどろきねいりてまします小太郎をゆすりおこし小ごゑにておそろしやあの者共が御身と我を都にて、うる談合を極めたり、して先何とせふぞいのたとひ忍び落たり共、晝さへうとき道しばの露ももらさじよどごゐの、あみうきめはかなしやと忍び涙にむせばるゝ小太郎、地色おどろくふせいなく、太刀引さげ立玉ふを姉君をさへ、なふ何と心得いづくへぞとの玉へば、いづくとはおろか也かたはしより切てすて、其上の思案ぞとふり切玉ふをいだきとめさりとは先しづまれよ、かれらはいふても大勢也、御身はひとりの小うでにていかでかなはんとにかくに、かれらがねいりし其隙に御身はそつと落られよ、わらはゝ跡に残りゐて偽たらし間

をとらん、其内一足成共おちのびられよと宣へば、地色小太郎今はしほくと諸有がたき御心底、もだすはいかに候へ共、父共母とも頼にせし御身さまを殘し置、落られふ物なるか、詞只某が残るべし姉君落させ玉へ、地色いやよわらは、世に有ても、有にかひなき女の身、御身は父の跡をつぎ家引おこす身ならずや、あしき事はいふまじき、姉次第にせよと有いやなふなんぼう宣ひても、御身さまを殘しては落じおちよとあらそふを、人がひ共聞付て障子押あけばつと入兄弟を取てふせ高手小手にからめ聲立させてあしからんと、さるぐつわをしつかとはませ、詞エ、都迄馳走してつれのぼらんと思ひしに、いらざる小ちゑががいになりさつてもよいざまなるはとて、地そば成柱にくゝり付今はちつ共氣遣なしゆるりとやすめといねけるはチャリなさけ「なうこそ見えにけれ、地色むざん成哉兄弟は、何のとがもやあらけなきなはめの上にさるぐつわ、なけ共こゑの出ばこそ、地色され共清姫心かしこくつくぐしあんし心をしづめ、そばに立たるとばし火をチャリあしにて「そろそろかきよせて、地色柱の本迄にじりよせ、つなぎし

なはをやきければ小太郎も打うなづきなんのくもなくやききつてしばられながらそつとぬけ、うらの方へ出けれ共めざすもしらぬやみのよにやぶかげ高くくればいづくをそこ共しらねども、のがれ出たる嬉しさにむばらからたちそぎ竹のかゝるもつくをもいとはゝこそかほにてをしわけ押くやり、かなたこなたとまよはるゝはめもあてられぬ風情なり時こそあれ日こそあれ、平山の武者末重は、本國へ下向とて其藪となりにとまれしが、詞あらふしぎや、うらの藪の内と聞え犬のけはしくほえぬるは、いかさまあやしき物、有と見えしやあ汝等、地色がして見よとあれば畏て侍共、手々にともし火引ッさげ藪のきはにはしり出兄弟を見付、詞チャそれ成は何者ぞとがむれ共、地色とかうの返事あらざれば、若者共かけ入て引立てこそ來りけれ、地色末重見玉ひナ、物いはぬこそことはりなれ、さるぐつわをはませたり先其轡をとれとて頓てはづさせ、詞して汝等はよし有者の子と見えしが、何のとがゆへかく有ぞまつすぐに申せ、地色清姫夢の心地にて、いやなふ何のとがも侍らはず東國がたの者成が、此八九年以前父上方へ上

られしが、我々を捨置遁世し、都とやらんにおはするよし餘戀しさやるかたなく、是成弟諸共に尋上り候所に、人商人にかどはされかゝるうきめにあひ侍ふ、なふどなたかは存せね共、かげをかくして玉はれと涙に、くれて宣へば、地色末重聞もあへず何東國のものとは若武藏の者にてあらざるや、詞ハアいかにも武藏の者にて候、フウして、其父の俗名はいかに、地色荒耻かしやかく成はつる親のなを、名乗はよしな去ながら、難義を頼參らする身のつゝむ口はいかり父の名は、熊谷の次郎直實と、いはせもあへず何直實の子達とや、こはいかにと走寄手づから二人のなはをとき、我こそ直實の朋友平山の武者末重よ、何末重さまとや是は誠か夢成かと、兄弟左右にすぎり付、嬉しなきにぞなき玉ふ、末重涙ながら偕なさけなや人の親の、心はやみにあらね共子故に迷ふと聞つるに、旁は引かへて、地親故やみちにまよふかやア、孝行ふかき兄弟やと、さすりたてゝぞほめあるゝ、地色偕直實の發心の次第語りきかされ、都新黒谷と云所にて蓮生坊と尋玉へ、追付我も上るなれば必其節あふべきなり、詞して又人買共めがとまりし旅宿はいづく

成ぞ、地色旁をなやませしとが一々に首をはね往來のみこりにせんいざゝあないせられよと兄弟諸共家來をば爰やかしこに忍ばせ置我身はきんじゆ、地色四人つれ忍び足して立きけば、内の體さはがしく主夫婦が聲と聞え、こはりふじんなされやう一めもしらぬせがれ共を何の故有ツてかおとし申さん夢にも存せず候となきわめけ共聞入ず、詞をのれ夫婦ならでたがしらふ、まつすぐにあかさすばつきころすぞきりころすぞと、地色さもあらけなくせちがふ所へ戸を押あけつつと人、詞是々れうじせられな暫またれよ、我々は道通り成が、夜中にことがましくこゑだかなれば様子を聞てあつかはんため、して先何事ぞと有ければきやつらもしれ物ちつ共をくせず、いやいな所へさしづるもの哉、主人の仰を蒙り大事のめしうとつれ今夜此屋にとまりしに、是成ていしゆ夫婦めが行方しらずおとせし故、角がうもんしてとふ成が何と旁にかまふかと云、チ、さもあらば尤なれ共しらぬと云亭主をせのころされて忍きもなし、來りかゝつたるこそふしやう共々尋參らせんして旁の主人は誰人成ぞととはるれば、イヤサ、人頼する我々な

らず、主人の名が聞度ば坂東にかくれなき平山の武者末重と云人よ、何平山の武者末重とや、偕々世には同じ名名字有物哉、某も武藏國平山の武者末重と云者成が、御分達が主人は坂東の内にてどの國成ぞととはるれば、地色人買共けでんしてとかうもいはずしりごみす、詞いやなふ、いかうぶきげんさうにみゆればいで機嫌直しに、地色お尋のめしうとに引合申さん、これ／＼と宣へば兄弟つれて出らるゝ、詞是々にせ平山殿の御家來衆、是は某が同國熊谷の次郎直實の子共成が、いか様のとがいたせしぞ承らんと有けれ共、地色只わな／＼とふるひわな／＼ききたる體には見えざりけり、地色末重めぐばせし玉へば、侍達飛かゝり小手三寸にからめたり、チ、心地よしいかに小太郎、御身いまだ若年なれば人をきつたる事あらじよきけいこぞと宣へば、姫君末重の袖をひかへ御長刀をかし玉へ、わらはも一手はならへ共人を斬たゝることはなし、耻しながらと宣へば、實さもあらんと長刀を姫君に渡さるれば、小太郎は太刀を抜兄弟互に入ちがへめぐるいんぐわの車斬手を盡してこそ三重斬玉ふ思ひのまゝに、地はらゐせし偕々末重に打

むかひ、此度の御おんしやう生々世々に忘るまじ、はやお暇と有ければチ、某も在番に、追付上洛いたすなり其節おめにかゝらんと、互にいとまこひこはれわかれ／＼に成玉ふ親孝行の志、しんめいぶつだの御かごにてあやうき所をのがれ玉ふと聞人、かんにぞたへにける

第三

いで其比は建久元年三月中旬の事成に、都の東北黒谷には、源空法然上人他力本願とて、くせう念佛をすゝめ給ひあまねく衆生を御さいど有、是はきたいのしんほうとて諸宗こぞつてなんもんし、黒谷のふもとりうせんじにをしよせて日夜論談せられけり、地色爰に熊谷入道蓮生は、上人に付奉りもんだうにせいつかれ、小ゑんに立出遠見してゐられし所に、叡山の小ちご達座主の御供せられしが、蓮生法師を見付あれこそ熊谷入道よ、詞いざ西國の軍物語所望して聞んと云、尤とてつつと寄、なふ、御身は熊谷の次郎直實入道にてましますとな、近比なれ／＼敷こ

となれ共、西國にての合戦に先御自分の御手柄偕判官辨慶景清などの手柄の段、地色一々語り聞させ給へと兩の手に取付かたれ／＼とせめにける、地色蓮生ほうどもてあつかひ、詞ヲ、然らば愚僧も望有、是よりみへわたりたる名所舊跡ををしへ給はゞ語らんと云、地それこそやすき御事なれさあらば語り申さんと兩人扇をつ取てチャクリ名所／＼ををしへける

名所づくし

地まづひがしにたかくそびへ見えけるは、我立ッそまのひえいざんみやこのふじとも、又はうへみぬ、わしのみねとも名にたかし、そも此山と申は、くはんむでんけう御心をひえいして、御さう／＼有しゆへひえいざんとは申なり、もろこしの天だい四方八千ぢやうの四めいのほらをうつし、謠一ねんみぜんの、きをあらはして、三千人のしゆとををきわうじやうの、きもんをまもり、あくまをはらふ、くも水は、是くはんをんのしやすい、かや、によいがだけより、くろだにのながれは白たへに、せいがい水のけぶりたち、チャクリおぼろの、しみづ立よらば、つま木こる

身も戀、すりやかげは謠やせのさと人せれうしづはら、おはらのねしやう、ぢんやじやかうはもたねどもにおふてくるはたきもの、おはら木、／＼かはひかはひ、黒木めされよ、しばめさぬか、たきいに花を、おりそへて、いふにいはれぬなりふりや、ふりさけみれば、西にきぶねや、くらま山ゆきになだかきひむろ山、したもえ出る春くれど、やまはそのまままじろにて、小歌花かと思れば、こぞのふいきよの、たにのうぐひす一こゑを、まつがさきより小歌二のせについ、二のせついきのいちはらや、をのゝこまちが、もゝとせに、ひとゝせたらぬつくもがみ、みだれごゝろやくるふらん、ひろふこのみはなに／＼ぞ小チャクリいちゐ、かしゐまてばし井、チャクリはしばみ、かや大小かんじきんかんまどのむめ、そのゝもゝ、人まるのかきほのかきやまのべのさゝ、さゝぐり／＼くりかへす、をとほのたきのしらいとの、いとほそやかにながるれど、ゆふ日あさ日のうつろひに、きらゝとみゆるきらゝぞか名所のかずはおほけれど、ことの草の露計あら／＼御覽候へと、一々残らず教へしは實けう、有てぞみへにける、地色蓮生あく迄

聞すまし、此比のもうきをはらし忝しとていらんとす二人のちごはすがり付、詞何と契約の軍物語はいかに／＼とあれば、地色今此身に成て軍の事は思ひ出すもけがらはし、あらもつたいなやとふり切て入ければ、二人のちごは興さめて追て奥にぞ三重入にける、かくて日中にも成ぬとてろんぎのかねをつき出せば、諸宗の僧徒我先にとりうせんじにぞつめらる、地色先一番にけんしん座主、しやうしん僧都じやうげんあじやりやうべんなどを宗として、山門の碩學三十餘人、并に南都の僧には蓮光坊明へん坊、大勸進の聖俊乗坊重源和尚を先として、此外有智の僧五十餘人、三井の大貳こうゐんを上首として、門徒のがくとう百餘人、法相三論けごん天台眞言五ヶの大乗は、左の方に、着座有、其外聽聞の有智無智數をしらずなみゐたり、法然上人は御弟子住蓮坊、安樂坊、蓮生坊其外少々召具して、左右にもくれいまし／＼諸中央のチャクリいすに「寄居玉ひつ、地色先高聲に念佛を十へん計ぞ申さる、諸東西のなりをしづめ、詞我とんせいの昔よりすいらうの今に至て、ひそかに尺尊御一代の教文を披情しゆつりのようを

あんするに、げんに付みつに付其さとりたやすからず、事といひ理といひ修行やはか成がたし、只淨土をねがひ他力を頼み、名號をせうするにしくはなし、有智無智の輩誰の人かきせざらん、佛法修行の中に是よりやすきは有べからず、但有や／＼と仰ける、顯眞座主問て云、くせう念佛はひとへにくどんのきをかうぶるのみ、まつたく眞言上觀の妙行けごんせんもんのしうしにおよばんや、一もんふつうのぐはんろしやに、ざいごうをせいせずして何程名號をすすむる共、いかでか往生をとげんやいかに／＼と有ければ、上人答ていや／＼、くせう念佛は極善さいじやうの大法なれば、いか成極重惡人成共みだの名號をとなへ奉らば、其他力念佛に無量のざいしやう悉めつし、けつちやう往生なにのうたがひかあらん但有や／＼と仰ける、永辨なんじていはく、ざいごうまうねんはさもあらばあれ、自專せうねんして必往生すべき事をゆるさば、人皆あつくけんにちうしてあくごうをおそれず、このんで衆罪をつくりまうねんをおこしかへつてあくしゆにだすべきなり、しからば一往先惡をせいし、妄をやぶるをもつてあんじ

んのおもてとし、そこのつみをおそれしむべけんや上人こたへてはいはく、しよあくまくさしよせんぶぎやう是佛のつねのいましめなり、しかるにごうあくのぼんぶも、念佛往生するとて全くあくごうをつくりまうねんをおこせと云にはあらず、ぐちのぼんぶさらにあくごうやめがたき事なげきてもあまり有、ア、恐るべし、爰に彌陀の本願かくのごとく
の凡夫をすくはんため、行ひやすき名號をもつて衆罪をてんせしむるのやから、事を他力によせこのんで大罪をつくるべけんや、忝も念佛は、しごく大乘にして萬善の妙體なれば、名號の六字にごうじやくどくそなはるなり、地色只みだの本願を頼て他力名號をとなへよ、やあとなへ玉へと有ければ智海るだけ高になつて云、詞凡大乘眞實の理をあきらむるこれを實教と名付、又是心是佛のむねを存す是をば頓教と名付、今此宗生佛一如の道理をもあかさず、ひとへにゑんりゑどのおんじんをすゝめ、じやくめつむじやうのじつぎをものべずして、わづかに欣求淨土の行ひをしごく大乘とは心得ず、地色天晴御坊はいづくの山の天狗ぞやそれは我執候なふ我執、と、惡口

して罰れば座中一度に口をそろへ、チ、我慢偏執のぐひんばうよとあざわらふ、地色蓮生腹にすへかねて、脇座よりつつと出から、とわらひ、エ、ふびんやな旁は、剃髮染衣はのせ事にてぐちまうまいの凡夫よな、己が自力にじばくせられ他力の大乗なる事がかつてしらず、げに井の内の蛙夏の虫にせいれうとや、忝くも他力の大道は廣太にして五せうひとしくつうにうす、ゑんくぐくくむさうむねんの上においてむ方なんしの大用をおこし、うさうしゆ因よりちきにむさうの樂果に入、是廣太の念佛大乘にあらずやと、地色血眼をいからかし、懷中より大なたを取出し振廻し、ゐぎにおよば、一々になぎたを、さんずいきほひなり、地色俊乗坊おどり出持たるなたに取付給ひ、詞ア、むかしの持病おこりたり、只今他力本願を大乘とえとくしたる大法師が、是はふしんゐの銚さきなふ、折てもおれぬかや、地色只此鉈をはなされよとあればイヤサはなさじとねぢあひたり、詞して又是は自力か他力か、蓮生聞てヤ、誠に是は自力なり、地色ア、面目なやあやまつたり、他力を頼むなむあみだ佛と持たるなたをからりと捨本の座に

こそつかれけれ、地色重源和尚こそをあげいづれも座中へ申上る、詞凡此上人は凡人にあらずせいしさつたの化現と覺えり、地色さればくはんじんくはんぼうにさとくけうもんあたかもなめらかなり、しんいんまかかせう、べんせつはふるなそん行ひはしゆぼだい、三教一致の上人なれば日本國裏貴僧唐土天竺の智識晝夜こそつて論ずる共、中々以て及ぶべからず各はともかくも愚僧はへいこうくとよばはり玉へば南都北嶺三五七九の宗門等、皆々閉口くといく同音にな無阿みだ佛、くとがつしやうすればふしぎやゐきやう御だうにくんじ上人の御身より、金色の光さし勢至薩埵と拜れさせ給ふ、各はつと驚き眼をひらけば上人なり、彌不審の思ひをなし、又めをふさぎ禮拜すれば光かいやく薩埵なり偕はうたがふ所なしと智者、愚者共にをしなべてくはんぎゆやく念佛す是ぞ誠の生如來、有がたし殊勝なりたうとかり共中々申、計はなかりけれ

第四

熊谷の次郎直實の二人の子、清姫小太郎種直は都にも成しかば、新黒谷に尋行御寺の僧衆に近付て、我々は武藏の國の者成が、熊谷ノ次郎直實發心ましと、此御寺にと承る、あはせてたべと宣へば役僧こたへて、詞ヲ、其直實は蓮生坊と改名し此寺におはせしが、修行のためとてさいつごういづく共なく出られ、地色今此寺にはおはせずと語りて奥にいられけり、地色いたはしや兄弟は父にあはんといさみぬる心も今はきえくととはうを、うしなふ計なり、地色姫君涙にむせびながら、なふ我々は何のとがめに佛神の、御にくみをかうぶりて行さきくの物思ひ、はるばる上る其かひも情なの親子の中、こはいかにせん種直と袂をひたしてなげかるゝ、地色され共小太郎力をつけ、心よはし姉君さましゝて別れし道にこそ、命だに有ならば日本國をめぐりて成共などかはあはで候べき、先々都の内に出人に尋て見申さん、必なげかせ給ふなとそれより都に立出て、かなたこなたと尋れば東國方へ下られし共いひ、詞或は又善光寺へ千日詣といふもあれば、地色若さもあらんと兄弟は、しなのちさしておもむかるゝ哀、はかなき三重うき思

ひ、黒染衣、地色偏へに西方極樂を、願ふのみにや蓮生法師、都あたりはかしましと、江州粟津の松原に、草引むすぶ庵の内、地みだくはんせいの像をかけ、土釜の煙にすゝたれしを、ようらくけまんと觀念し、我敦盛を手につけずば、菩提の道には入まじきに長地思へば、善知識安樂國にゐんせうせんとの佛菩薩の化身かと、猶いやまさるくはんぎのなみだ、是に付ても捨る身は、心やすき物かはと思ひつゝけていにしへの、よろひにかはる紙子さへ、風のある矢は、とをさざりけり、かくつゝけたるよしあしも小チャクリたれに、かたらんかたいとの、よりそふ物は松のとの、すきまもりくる、さよ嵐、是も無常のをしへかと、只ひたすらに稱名をチャクリ怠る「まこそなかりけれ、地色偕も清姫種直は又立返り近江路や、松本のあたりより種直心地あしとて、あなたにたゝすみこなたにやすらひいたくなやませ給ふにぞ、地色姉君悲さかぎりなく、ゆみづをもとめほ口樂さま、あつかひ給へ共、さらに其かひあらずして顔色をとろへ見えければ、地色なふいひがひなや小太郎萬の病も心から、心で心を取なをしせむにと思ふがを立れば、

をのづからよきものぞ心をはつたともたれよと涙ながらに宣へば、地色種直くるしき餘りにも姉の歎をかなしみて、いや先程よりよほど心地もよく候、爰はとちうのことなれば、旅宿迄そろ／＼と參らんと有ければ、チ、嬉しや其義ならばわらはがかたにすがられよ、宿有方につくならば如何様にも養生せんいざと手を取かたにかけ、猶し力やつくつえもよりはやくこそいたはしき、粟津の原に、着給へば、日もはやくれてほのぐらし、地色もはやせたへはちかけれ共種直くるしみつよく成今は足手もかなはねば、こは何とせんかなしやと姉君とはうにくれながら、めでの方を見給へばともしの光ほのかなり、人すめばこそと思召、かい／＼しくも種直をせなにおひあせ道を、たどり／＼とあゆまる、チャクリ御有「さまこそ、哀なれ庵になれば、地色しづかに小太郎をおろし置、とばそに立寄いかに此屋の内へお案内申候、詞旅の者に候が、をさなき弟を召つれて候所に俄に煩なんぎに及びそれゆへ爰にて日をくらし候、地色近比わりなき御事なれ共今夜をあかさせば給へと、さもしほじほと宣へば蓮生聞給ひ、詞チ、安き間のことなれ

共、地色獨坊主の庵室なれば女人はけつかい／＼とき
ごつなげにぞ返答有、地色御仰はさる事なれ共妾ひ
とりの身にもあらず、殊更あたりに家もなく、いづ
くを頼まにかたもなし、且は後生の御爲にもなり參
らせんと宣へば、蓮生くつ／＼と吹出し、詞わごせ達
に宿をかし後生のために成ならば、汗水ながしせい
をはり申念佛はあだ事よ、地色ならぬ／＼と言捨フシ
念佛申おはしけり、地色むざん成哉種直は五ざうなふ
らんするやらん、どうの内にてによふ音さも絶がた
く聞れば、こはいかにと姉君いだきあげひたひをを
さへ、詞何といかうせつないか、やまふはともあれか
くもあれ、親故かゝるうき苦勞よもや佛神三寶も、見
捨させはし給はじ頼もしく思ひ、心をくれ給ふな
といさめながらも何として、たまるまじきと思ふに
ぞ心も亂れ身もふるひ前後、ふかくの涙かな、地色い
たはしや種直さもくるしげなる息をつき、アかなし
やもはや命は候まじ、定業とは云ながら、姉君の御
身の上、御行末が思はれて、よみぢの迷ひと成侍ふ、
誠にか程氣を盡し、心をつくすかひもなく、今一度
父上に、あはで過ゆく殘念さあら戀しの父上や名殘

おしの姉君と是をさいごの詞にて、こときればつれ
ば姫君はきもきへ心きやうらんし、しがいにがばと
いだき付わつときへ入給ひしが、地色や、有て心付、
儲淺ましくもし、たるよなア、實ことはり生れてよ
り、おちやめのとにかしづかれすきまの風をもいと
ひし身のあゆみもならはぬ旅の空風にもまれ、露に
ぬれ、心つかれしそのつもり、こよひにせめて此里
の、土と成行はかなさは迎かへらじ此上は、わらは
を跡に残し置うき物思をさせんより、ともなひゆけ
ややれつれゆけや小太郎とりうてい、こがれてなき
給ふ、地色親としらねば我子共夢にもしらで蓮生は、
念佛をやめてや、不便や、詞さいせん病人といひし
者がしんださうな、地色儲定なき世中やと、とぼし火
たづさへ戸を明て立出見ればし、たるは十二三のを
さなき者姉と見えしは十四五なり、詞なふ／＼其子
はし、たるか、さいせんきけば御身が爲には弟とな、
ナ、然らば愁歎尤なり、地色定て京内參りか參宮なら
んか、所の親達聞ならば嘸や歎きかなしまん詞して
國里はいづく其子が名は何といひしぞ、改名を付過
去帳にうつし廻向して得させんとあれば、地色姫君暫

なみだををさへ、今迄はどうよくしんの御僧やお
恨に存しが、しをあはれませ給ひての御心ざしこそ
有難けれ、此上は何をかつゝみ参らせん、我々は武
藏の國、熊谷の次郎直實の子共わらはが名は清姫、死
人は小太郎種直と聞より蓮生たましゐきへ、五たい
もしびれ眼くらみどうどたをれて、なき給ふ、地色
あさましや凡夫の身の、はかなさは親子の間をしら
ずして眼前しするをしりながら、一言詞もかはさず
し物うき上にうきめを見せ、しかもするどき詞のす
ゑさぞや無念に思ひつらめ、せめてむなしきしが
いに成共我こそ親よと名乗て聞せん、詞いやく、は
あ忘れたり迷ふたり、かやうの所をまよはぬこそ道
心とは云べけれ、地色あらもつたいなやと心で心をな
だめ、詞是々旅の姫、偕は旁は熊谷入道の子成とや、
都黒谷にて愚僧も別るに語しが、誠各のうはさもさ
んげせられし、嘸父の發心を恨にも思はれんが、重
重至極の道理始終をかたれば事ながし、生とし生る
物子をかなしまぬはなしまして人間の身の上をや、
され共其おんあいをふり切ておこす程の道心なれ
ば、よつく道理あつてこそと思ひ必恨に思はるゝな

と、地色よそのやうには語れ共、いきて有もしゝたる
も我血を分し子と思へば、切てもきれぬおんあいの
涙、墨の衣もしらむべし、地色姫君つくく聞召、偕
はわらはが父上とわりなくなされし御中とや、御物
語を聞に付、御顔ばせを見るに付、をさな心に覺え
にし、父上のおもかげに似させ給ふと思ふにぞ、他
人のやうに思はれず猶なつかしう侍ふと涙いやす
歎の有さま思ひ、きれ共わくのいと又くり返しみだ
るれど、地色はをくひしばつて心をしづめ、いかに旅
の姫、もはや歎てかひあらじ、幸あたりにもむしよあ
ればと庵のとを押はづし、涙ながらにしがいをうつ
し誠に姉として弟のしがいをかく事は、道にそむけ
る事なれ共たれを頼ん方なければ、御身さきをかき
給へ某跡をと有ければ、こは有がたき仰なれ共わら
は、いふてもちのわかれ、御身様は他人と云殊に又
御出家なり、勿體なや自がおひて成共いだきて成共
参らんと宣へば、詞いやくか様の死人を手につけ
て念佛申とぶらふこそ、すゝむるくどく共に成佛な
れば人のためとはぞんせぬなり、地色いざゝさらば
と手をかけて、さきを姫君かき給へば、跡をば蓮生

かるめチクリつゝのべの「送りぞ哀なる、地色今はふつ
つと思はじと思ふうちにも世の中の、子をさきだつ
るはならひなればあへてかなしむ道ならねど、親を
したひ身をすて、千里をしのぎきたる子に、さらば
廻りもあはぬ身か、見えつ見へられ詞をかはし他人
成と偽るは、法儀おきてといひながらさりとはむご
き次第なり、よし姉こそはしらす共、死靈は知てい
か計うらみん事のはづかしやと、思へばめもくれ手
もなへてしがいをはたとおとさるゝ、姫君はつとを
どろき何となされて候ぞ、詞いやゝゝ別の事ならず、
各の父蓮生とはわりなくかたりしちなみゆへ、地色子
はもたね共旁を我子のやうに思はれて、不便さも又
哀さもこつずいくだくる涙にくれ、取おとしては候
へ共もはやむしよは爰なり、と土を漸うがちのけし
がいにもかひ手を合、しゆつり生死とんせうばだい、
な無阿みだ佛と廻向して、もはやうめんと有ければ
なふ情なや今しばし名残をおしませ給はれやと、引
といむればいや是なふ、迎かくても歸らぬ道、ふつ
つと思ひ切給へと、様々けうくんしがいをうづみ涙
の玉の数々に、夜すがら念佛申さるゝチクリいたはし

「かりける風情なり、地色かゝる所へ平山の武者季重
は、頼朝よりの仰蒙り院參の上洛とて、此所を通ら
れしが馬上より急度見付、詞なふそれ成は直實入道
にておはさぬかと、地色馬より飛おり偕も久しや先
以恙なき道心近比殊勝にこそ候へ、就ては國本の子
共衆御身を尋上られしがそれ成は姉姫か、して弟小
太郎はととはるれば、地色姫君涙をはらくゝとなが
し、先におかげ故、兄弟命をたすかりそれより方々
尋廻り、ふしぎに是迄參りしに情なや只今迄父と名
乗聞されず、剩小太郎は物うき旅のつかれにや、夜
前爰にてしゝけるがなふ鬼にもせよ蛇にもせよ、幾
年逢ぬ子に逢て親となのらぬ事あらじ、どうよく至
極の父上さまやと人めも、わかずなき給ふ、地色季重
驚き何小太郎は病死とや、詞偕是非もなき次第去な
がら清姫、父のそれと名乗られぬは是御道のをきて
なれば必恨と思はるゝな、いかに入道殿、御身の心
底千萬察し申せしとあれば、地色蓮生衣の袖をひた
し何事もかごとをも推量なされて給はれと、云捨て
こそ歎るれ地色チ、見事成辛棒佛意にかなひ給はん
と、彌殊勝に覺え候、清姫も對面し一旦望叶ふ上は、

向後親子と思はるゝな、且は父への孝行ぞ我國本へともなひて、幸一子とめあはすべし然るうへは蓮生も、心にかゝる事あらじ彌道心堅固なれ、偕々過分何が偕、ほうゆうのよしみには偏に頼參らする、氣遣し給ふな某にまかされよもはや姫は我子なり、いざ／＼都に同道せん嬉し、／＼めでたしと打つれだちて上らるゝ歎の中の悦びとは、かゝる事こそいふべけれ前代未聞の次第なりとてかんせぬ、人こそなかりけれ

第五

飛鳥川けふ有とても定なき、人の命はあだ波のうつつときゆる蓮生法師、よみちにおもむき給へ共、しやばにて日比造り置罪障の霧立おほひ、そこ共しらずくらきよりチャクリくらき「道にぞ出らるゝ、地五色の鬼共をつ取こめだごくの人とぞひしめきける、蓮生少もさはがす只念佛をのみよねなく申さるゝ、其時あをき鬼つのをいからしあかゝねのつめをとぎたて、くろがねのはをならし天地もひいくこはねに

て、詞汝一生の間殺生のつみをばいかゝははたさん、蓮生聞給ひ、ム、それな、それはなむあみだ佛よ、地色き成鬼ほこふりまはしいかりをなし、汝一生ちうどうのつみをいかゝはする、詞ヲ、それもなむあみだ佛よ地色あかき鬼おどり出はねまはり、色にそみかにめでしじやいんの罪はいかに／＼、詞なむあみだ佛／＼、地色白き鬼きばをかみ、紅の舌をたれまうごきごはとせむれ共、たいなむあみだ佛と計にてさあらぬ、ていにてゐられけり、地色中にもくろき鬼、眼は銀をみがきたるごとくにて、やあをんじゆの罪はいかに／＼とのゝしれば、詞はてやかましい木のは鬼共哉、地色なむあみだ佛な無阿みだぶと、空うそぶいてゐられける、地色五色の鬼共呆ればて、偕も／＼しつはく成念佛者や、もはや地ごくへ歸るなりゆきたいかたへつつとゆけと、いふかと思へばたちま地に南無阿彌陀の五字と成、こくうにすはりこんじきのひかりをはなつて見えにける、地色蓮生是を見てあら有がたやさりながら、佛の一字のなき事はいかゝと思ふ我身より、こんじきのひかりさし、佛といふ文字あらはるれば、偕は佛果に至るよと彌、念佛三重

「申けりふしぎや黒雲、地さつとはれしうんたなびく方よりも、観音勢至の二菩薩は、金の天がい青蓮花中央にそなへられ、微妙の御こゑをそろへつゝ影向」有こそ有がたき

九品の淨土

地それ、げぼんげしやうのわうじやうは、六だう四しやうのくげんをやゝのがるゝ計にて、十二こゝが其間れんげちうにはらまればう、くせんくとしてあかしくらし、やうく其こゝみつるときれんげひらけてやゝ、ちうぼんにちうしやうす、偕中ぼん中しやうこそ、よに有がたき大往生のそくはいなれ、上ぼんれんにいたるまは、一たんじちやう六十よせつなとて此、このくつまはじきする間に、たちまち地中ぼんの、蓮げひらけて上ぼん上しやうに往生し、むしゆのよらくをうくるなり、先其身をみづからかへりみれば、しまわうごんのはだえこまやかに、三十二さうあらはれ、やうらくしやうごんのけさ衣、出入いきは、せんだんのにはひくんじ口にはしやうれんげのくきをふくみ、ないげ共にしやうくにく

はうみやうへんせうかくやくとして、ゆうくじざい雲にのり、ふうごしては、こくうにざせしめ、中をかけり心のほつする所にゆく、偕又つねのくうでんは、こんくゝるり、はり、しやこめなふさんごこはくすいしやうを、みがきたてく、玉をいろゑてつくりたてたるうてなには金のほうちやく銀のふりやう、ちやうらくがじやうの風ふけばチャリみめう「めうをん、れい」と、めうほうののりをとく、偕又大ほうれんげのもと、八くどくちはかんろの水、せいくときよらかに、妙法蓮花がさきみだれ、ゐきやうよにもふんくたり、ふがんゑんわうさへづりて、しんいのけがれをきよむなり、そのには玉のこすゑをつらね、八しき五しきの花ひらけ、くじやくあふむや、びんがてう、色々のねを出せば空にはかぶの菩薩、むりやうのけぶりあらはれてをんがく天に、ひいくなり此ほうこくの、たのしみはたとひ百千くでいなゆたごうをへて、百千萬なゆたの舌の上にむりやうのこゑを出し、一々以はむる共淨土のしやうごん、ほめ盡すことあたはずかゝるたうとき九ぼんれんだいへやれ、ぐすべきぞ蓮生とてゐんせ

うあらたに三重見えにけり淡路がた地色通ふ千鳥のこゑきけば、ねがめもすまのせきもりはたそ、いかに蓮生敦盛こそ待うけて候へうたてやな一念みだ佛そくめつむりやうの、ざいしやうをはらさん稱名の法事を絶せずとぶらふくりきに、何のゐんぐはありそうみの大夫なみにたいよふまうしうの、くもきりなをもはれやらぬッキ思ひをすまの、大夫うらめしや謠同うらみは人をも世をも、く、思ひ思はじうき身のゐんぐは、とは思へども、わすれがたのうらみの波うみやま、一とうにしんどうらいでんひらくく、ひらくく、とひらめくいなづまさらくさつと風をちこちの、みねにはげしくたに、ひゞきてしやぢくをながす、雨はやさき、つちはせんけん山はてつちやう、雲のはたてをひつさげ月毛のこまにむちう地くるり、くくくるくくくるりのりこみ、乗あげのりおろし、ひくなのがさじきたなしさもし、かへせ返せとよばはりかゝつてかたきはこれぞとうたんとするに、あだをばおんにてほうじぬ念佛してとぶらはるれば、しんゐのほむらもばつときへうせおなじはちすの蓮生法師、あらありがたやといふかとおもへ

ばたちま地じやうぶつ三重とげらるゝ、うてなのうへに、地れんしやうはうつるとひとしくこんじきの、によらいのさうがうくはうみやうへんせう十ばうせかいにかゝやきてめうもんたがはぬせつしゆふしや、すなはちわうじやうあんらくこく有がたかり共なかなか申計りはなかりけり

右此本者依小子之懇望附秘密音節自遂校合令開版者也 筑後掾

二條通寺町西へ入町 山本九兵衛刊

念佛往生記終

清水觀音利生物語

松本治太夫正本

第一

偕も其後、序それ諸佛の大悲まぢくなれとも、じよく世末代の時にいたつて、能救世間苦の徳をあらはし、一切衆生の利益の達心、大慈大悲の觀世音菩薩にしくはなし、誠なるかな、爰に洛陽音羽山清水寺の觀世音の由來を委く尋るに、本朝人皇五十代の帝桓武天皇の御治世にあたつて、正二位の中將坂上の田村丸とて武將一人おはします、然に田村丸内には武略の道をたしなみ、外には仁義禮智信の五常をただし、ことにくはんせおんぼさつをしんじ、朝暮に御經讀誦有、誠に大悲の威神力即得求男の御利益有て、若君一人持給ふ、御名を清若丸とて十三歳に成給ふ、其きりやううるはしく絲竹の道に心をよせ、實やんごとなき少人也、偕又家の執權には淺井入道玄寛とて、吳子孫子が秘せし所我物と得たる勇士なり、侍どもには羽根川刑部友滿宮部七郎氏晴松島九郎川村内記眞野藤太とて、智勇を兼し兵共強をやぶり弱を

すくひ、慈悲をもつて治むれば天下の政道穩かなり、其外とざまの大名共日夜の出仕ひまもなく、此君の御くはほうめでたかりける大三重「しだいなり引、是は偕置、ことは其比又やまとの國こじまでらのぢうそを、ゑんちんしやもんと申てちゑじんゑんのかくしやうあり、此そうは、のたいたいにありし時、つねつねせんじゆのしんごんをとへし事しよ人のみにみてしゆへいかさま出家とくだうして、しやくものほうたうをまかゝぐべきものならんと、しゆつしやういごしやうじんけつさいにてこじまのでらの一くはしやう、ほうおんほうしのでしと成、七歳より出家をとげさせ給ひける、ようがくのはじめより取わけくわんせおんをしんかうし、てうぼのらいねん隙もなし、ある時ゑんちん思召は、我此年月くはんせをんをしんずるといへ共、いまだしやうじんのせんようをおがむ事なし、我一つの大せいぐはんをおこし、しやうじんのくはんせおんをおがますんは、たとへ命はおはるとも、此ねんぐわんをみてんとて、地よるひるのわかちもなく、地おこない給ふぞ有がたき、ことはあまりに思ひつかれつゝ、御きやうをま

くらとしてすこしまどろみ給ふ時ふしぎやせい天のくもまよりいくわんたいしききにん一人くだらせ給ひ、いかにゑんちん、汝やさしくもくはんじぎいぼさつをおがまんとや誠さやうに思ふならばよあけて後きづ川に出、三十三度のこりを取り、一つのきどくを待べし、汝が心のふびんさにかやうにはつげしらするぞまことは我はほうさうおうごのかすが大みやうじんなりと、地の給ふと其まゝに、御身よりひかりをはなちみかさ山へぞとび給ふ、地ゑんちんあまりのうれしさに、はるかに御あとらいしつゝ、をしへにまかせそれよりもきづ川、さしてぞ三重いそがるゝ、地川にもなれば、かゝり三十三どのこりを取、ことばなむや大じ大ひのくはんせおんぼさつ、それふしゆしやうがくの御ちかひ今以はじめならず、くわこくをんの大ひのひかりいづくかいたらぬ所あらん、しかるにわれようせうのむかしより心にはくはんおんのゐじんりきをねんじ、口にはせんじゆのしんごんをこたらず、今一つの大ぐはんをおこし、しんのまことをいたす、ねびくわんおんのめうちりきにわがくわんみてしめ給へと、かゝりしんぐきもに

てつし、一時ばかりはいし給ふ有がた、かりけるしだいなり、地さればにや大じ大ひの御ちかい、まこと有けるぎやうにんを、あはれみまします御ぐはんにて、ことばふしぎやよど川のみな上より、こんじきのひかり有水一すじながれ来る、ゑんちん此よし御らんじて、ことば偕もく有がたやそこそ大ひのふしぎなるべし、此みなかみにしやうじんのくはんせをんのましますらむと、地くわんぎのなみだをながしつゝ、こんじきの水のでとを尋つゝみなかみ、さしてのぼらるゝ、地心の内こそしゆしやうなれ、ことば此水ながれとおくして、おとはの山のふもととなる、ゆせんのたきより出にける、ゑんちんあまりの有がたさに、なむくはんせおんぼさつと一しんしやうめうのまこと凝し、おとはの山を見あぐればくさ引むすぶいほり有、こはふしぎやと山にのぼりて見給へばびやくゑのらうおう一人有、ゑんちん此よし御らんじて、御身は是いか成人ぞ、おきなこたへての給はく、我は是ぎやうゑいこじといふものなり、我心にはくはんおんのゐじんりきをねんじ、口にはせんじゆのしんごんをとなへ、此地にかんぎよする

事年久し、汝をまつにおそくきたれり、われゆくこと
あつてとうごくにいたる、其間汝よろしく我にかは
つて此所にすむべし、我に一つの大ぐはんあり、此
木は是くはんをんのみそぎなり、われもしおそく歸
り來らば汝せんじゆのぎやうさうをつくり、まッた
口人のだんなをまち、大がらんをこんりうすべしと、
地がゝりの給ふみこゑの内よりも、おんがくきこへ花
ふり、いけうよもにくんじはくうん一むらたなびけ
ば、やかて打のり給ひつゝ、地ひがしのそらへゆき給
ふ、ことばゑんちん此よし御らんじて、こは有がたき
御事や、是くはんおんのすいじやくならん、へんじも
はなれ參らせじと、地がゝりしんぐふかくがつしや
う有、ぎやうゑいののり給ふ、くもの上にとびのり給
へば、地誠に大ひのしんりきにて、ゆめぢをたどる
ごとくにて、こくうをとびゆき給ひしはふしぎ、な
りける三重しだいなりかゝる所に、ことばとうぼうよ
りほうれんくもゐにとゐるき、天どう二人さゆうを
おしたて、せつなが間に山しなや、うしのお山の上
にては、ぎやうゑいここの御まへに、むかいのくる
まをさし口せしはなふふしぎと、いふもあまり有、

地がゝりゑんちんよしを御らんじて、ことば偕もく有
がたや是ぞ誠につたへ聞、ふだらくせん御むかい
にてんどう來らせ給ふらん、いかにぎやうゑい大じ
大ひの御ちかいに、われをも召つれ給はれとうれいふ
しなみだをながし申さるゝ、ことば其時ぎやうゑいふ
りかへり偕もく汝とをくもしたいたるかな、む
じやうぶつ一によなれ共まのあたり其ぼんしんをわ
がじやうどへはともなひがたし、いそぎいほりにか
へりつゝわがゆいかいをまもるべし、いかにくゝと
の給へば、ゑんちん今はちからなく、涙と共に御そ
ばに立より、さあらば御めにかゝるしるしには何に
ても御かたみを殘し給はれとさまぐなげき申さる
る、ぎやうゑい聞し召、聞にやさしきしんていかな、
もとよりかんきよの事なれば身にたづさへたる物も
なし、是ぞ此世のかたみぞとうへにめされししるき
じやうゑを下されければ、かゝりゑんちんてづから御
かたみをいたゞきとれば、地何うたがいの有べきぞ、
かゝりやがてぶつたいあらはれて、正じんのくはん
せをんとおがまれ給ひ、くだんのくるまにのり給ふ
は有がた、かりけるしだいなり、かゝりゑんちんかん

るいきもにめいじ、御あとをらしいし立給へば、たち
まちひかりかゝやきて、くもの内よりまんだらげ、
まかまんだらげふりぐだりひがしのそらへゆき給ふ
は、ふしぎなりける、「次第なり、偕もく有がたや
と、ずいきのなみだをながしつゝ、大ひのをしへを
まもらんと、おとは山を心がけ、涙と共にかへらるゝ
心の、内こそしゆせうなれ、ことばやうく山におり
させ給へばふしぎやそばなるくち木のやなぎより、
くはうみやうかゝやきいけうくんじ、地さくらにあ
らぬ草木までみなしろたへに花さきける、偕こそせ
んじゆのちかいには、かれたる木にも花さくと、今
の世までも申なりかのゑんちんの心の内、しゆせう
なり有がたし、誠にきたいのめいそうやとみなかん
せぬ、人こそなかりけり

第二

「去ほどに、ことば比はゑんりやく廿年はるも中ばの
事なるに、せいしうずゝが山おびたゝしくやけあが
り、川かみくれなゐのごとく也其ひかりきんちうに

とび來りぎよれんの内へさし入れば、みかどおどろ
かせ給ひつゝやがて御なふと成にける、くぎやう大
じんあつまりていかゝあらんとせんぎ有、時にいで
の大じんもろゑこう仰られけるやうは、是はいかさ
まへんげのしよゑと覺へたり、此比おとはのたきの
うへにゑんちんとてたつときそうのましますよし、
此そうを召れつゝ、ぎよくたいあんせんの御きたう
を仰付られしかるべしとそうもん有、さあらばゑん
ちんめせと地有承り候とすなはち、ちよくしを立ら
るゝ、ことばゑんちんはちよくしと打つれさむだい
有、其時もろゑこういかにゑんちんたい今めさるゝ
事よのぎにあらず、さくやのらくちうのひかり物御
てんのうちにひらめき、ぎよくたいをなやまし奉る、
それにつきわ僧はしんりきけんごにしてまのあたり
くはんをんさつたにまみへしよし、上ぶんにたつせ
しゆへ、御かち申せとの御事なり、いそぎほうりきを
もつてぎよくたいをやすんじ給へと有、ゑんちん承
りこは有がたきちよくちやうかな、さりながらぐそ
うがほうりきにては中々もつてかなひがたく候へど
も、もとより大ひの御せいぐはん、しんねんふう

くはの御りやく、いかでかむなしかるべきと、地四
めんのたんをかざらせておこない三重給ふぞ「有がた
き、かりゑんちんだん上なされつゝ、五ひやうに花
を立とつこさんこれい花ざゝ、ねんじゆしやくじや
うおつ取てせんじゆせんげんくはんせをんの、ひほ
うをおこなひ、給ひける、そもく忝くも、くわん
せをんと申は、くはこにしやうがくをとなへてはし
やうほうめうによらいとがうし、今又しよぶつのじ
ひにかはつて、くはんせをんとあらはれ給ふ、千じ
ゆ千げんと申奉るは、くおんがうの其むかし、せん
かうわうじやうちうによらいの御まへにて、大せい
ぐはんをおこしつゝ、一さいしゆじやうりやくのた
め、うけさせ給ふ御さうがう、地しゆぐの御手の
其中に、地やぎのゑだの御てにては、地かり身のう
へのやまいをはらい、たからのみはちの御手にて、
ふくちうのしよびやうをのぞき、ほうけんの御てに
てもろくのきじんをがうぶくし、たからのゆみや
の御手にて、一さいのおんできをほろぼし、ほつす
の御手にて、あくじさいなん、はらひ、のけ、しやく
じやうの御手にて一さいしゆじやうをじひをもつて

あいみんじ、ひやくれんげの御手にて、しゆぐのく
どくをほどこし、かしまのてにてちへをあたへぎや
うの手にてたもんをさとらせ、しやうれんげの御手
にて、らいせをじやうどにゐんだうし給ふ此たびの
みかどの御なふへいきんならしめ給へやとせめかけ
せめ掛、祈らるゝ、こまのけむりはだいゑんにみち、
しんれいのおとはゑきでんにひいきいか成あくま御
物のけも、しやうげをなすべきやうぞなき、こは時
にろだんの其上にくろくも一むらたちきたる、こは
ふしぎやと見る所に、たちまちあつきのすがたあら
はれ、いかにゑんちん、くはんせをんの神りきにて
せひなくこゝはたちのくなり、さりながらいわきり
おとすすゝが山、かりみねをふさぎたにをうづん
で、せきのひがしへ人はとをさじ御ばうとてせいし
うさしてとびさりしはなふおそろし、かりけるしだ
いなり、こゝは其時ゑんちんだん上よりおりさせ給へ
ば、みかどの御なふ本ぶく有、地御所中の御よろこ
び何に、たとへんかたもなし、こゝはかさねてゑんち
ん申さるゝは、此たびのへんげきうもんやふうじい
たし候へ共、せいしうすゝがにとりこもりこくどを

なやまし候てすこぶる大事に候へし、きりやうのぶしに仰付られ御たいぢ候へとつゝしんでそうもん有、内よりのせんじには、たれかれとあらんより、時のぶしやうたる間たむらめせとのりんげん也地かしこまつて候とてやがて、ちよくしを立らるゝ、ことはとしひとは何事やらんとちよくしと打つれさんだ有、其時みかどとしひとをぎよれんちかくめされいかにとしひと、此たびらくちうのそうげきは、せいしうすがにすむ所のあつきのしよぎやう成間、いそぎ汝はせむかひちうばつし、ばんみんをやすんせよとのちよくちやうなり、たむら承り、ちよくめいにては候へ共、めにもみへぬへんげのぎいかか心もとなく候とおそれ入てぞ申さるゝ、其時ゑんちんもつともなりさりながら、此あつきは大ひのひほうにせめられて立さりたり、此こゝのへの御まもりをはたじるしにさゝせせめ入給ふ物ならば、かゝり何のおそれかありあけの月のみやこの道ひろう、おとはすゝがの山あらしも、ふきしづめたるみよならんとげにたのもしくの給へばたむらいよくちからをゑ、有がたしゝと、御前を立てそれよりもわが

やを、さしてぞ三重歸らるゝやかたになれば、ことは家のこらうどう召あつめ、かやうゝのしだいにて大事のちよくめいかうぶりたり、いかゝあらんとの給ひておのゝいけんをとひ給ふ、あざゐのげむかん申やう、誠に君の御大事此事なり去ながら、かのまつげにすをくふなるしやういのごとくちいさくて、やがゝりたちがゝりもなからん物はいざしらず、まなこにさへぎる物ならば、きまんどくのきわう成共あましはやらじさりながら、へんげの物の事なれば大せいにてむかいなばくさ木ちりあくた共へんすべし、小せいにてはせむかいてづめのせうぶあそばされしかるべしとぞ申ける、としひと大きにゑつき有此義尤しかるべし、さあらばようゐ仕れ、かゝりかしこまつて候と、おのゝしやうぞくあらためて三重しだいゝ、に出らるゝ、偕御ともの人々には、あさゐの入道げんかんはね川ぎやうぶともみつ、みやべの七郎うぢはる、まつしま九郎川むらないきまの藤太、かゝりふしつがうしうゝ八きにてすゝみにすゝんで出らるゝ、ことは偕今度みかどより下し給つたる、にしきの御はたに日くはう月くわうを金銀に

て打て付こゝのへの御まもりをはたがしらにかざらせ、一ちんにさしあげ、かゝりゑんりやく廿年二月十八日、みやこを立てそれよりもせいしう、すゝがへ三重いそがるゝ是は儲置せいしうすゝがの大たか丸、けんぞくどもをよびあつめいかにかたぐゝ、儲もみやこよりたむらとしひと我々が打てにむかふと聞て有、たとへきやつばらがいく萬ぎにてむかふ共、何のしさいの有べきぞ、らつくわみちんになすべし、ゆだんをするなかつぐゝよ、是ぞ一つのなぐさみと今やいまやと三重待ゐたり、儲其後に、人々は、すでにいせちの山ちかく、地きうばの道もさきがけむとかついろみせたるむめがゑの、花ももみちもいろめきて猛き心はあらがね、の、地かゝりつちも木もわが大君の國なれば、いづちかおにのすみかなるべきいさめや、くくくもの共と、さしもけはしきれいろくさん、みねをわけ、たに、下りみ給へ共、ことはもとよりへんげの事なればきじんのありかはなかりけり、あざゐのげん申やう、儲はわれゝがいせいにおそれかたちをかくすと覺へたり一まづなのりて御らん候へ、其時としひとこだかき所につゝ立あ

がり、只今此山へわけ入たるつはものをいか成ものとか思ふらん、うりんしやうぐんさかのうへのたむら丸とはわが事なり、いかにきじんもたしがにきけ、むかしもさるためし有、ちかたといひしげきしんにつかへしおにも、わうゐをそむく天ばつにて、ちかたをすつればたちまちほろびうせしぞかし、ましてやまぢかきすゝか山、いづくかおにのすみかならんと、かゝりひきめのかぶらや打つがひ、きんりくゝと引しぼり、かぶらぎはまでひつかけ、ことはしばしかためてきつてはなつ、其時ふしぎや、かゝりあのゝまつばらむらだちきたり、こくうにてつくはをふらせつゝ、らいでんいなづま、しきりなりとしひと此よし御らんじて、ことはすはやもの共まなこをくばれとさゆうにげちしての給ふ時、きじんはあらはれいかにたむら、やさしくもきたる物かな、其ちかたがもうしうはらさんため大たか丸とあらはれたり、いかにけんぞく共あれ引きさきすてよといふ、其時そらよりけんぞくあまたとびきたり、かゝりよくこそきたれおのれらと、もとよりひぎやうじぎいにて、人々にみだれあい、ひじゆつをつくしてたゝかいしは三重すさまじ、

かりけるしだい也まつしま川むらまの、藤太、此三人のもの共をあるいは引さき人つぶて、こは又はこくうにつかみゆき、のこるしうく四人の人、是はいかにとあきればてかたづをのんでぞいたりける、くだんのけんぞくいかりをなし、いきおいかゝつてとんでかゝる、是にふしぎやこくうん一むらむらがつて、すまんのやさきとふりくだる、あつき是をみるよりも、かゝりあがるやをばついくいり、さがるやをばおどりこへ、まん中さしてくるやをば、のこらずきつておとしけるは三重おそろしかりける三重次第なりもはや人々ちからなく、こはすでにかふよとみへし所に有がたやいづく共なくしらはのそやふりくだり、まつさきにすゝんだるふうりきがむないたにはつしと立、エ、ものくしやとかなぐりすつる所を、うちはるともみつゑたりやおふとひつくんだり、くわでんき是をみて、大手をひろげあますまじととんでかゝる、時にくだんのやさきくわでんきがふとばらに立所を、げんかんすかさずつつとよりむかふさまにむんずとくむ、のこるおに共むらがりきたるを、としひとこゝをばわれにまかせよと、ゆん

でにあいつけめでにうけしやりんのごとくきりまはればむらくばつとぞにげにける、其ひまにげんかんともみつもろ共に、くびをとつて立あがる所へ大たか丸とびきたり、としひとをひつさげてこくうを、さしてぞ三重あがりける、かゝりとしひとこは、こはいかに、あく、ぢしきやうふしさいの大ひのせいやくこもうと成、あつきにとらるゝむねんやと、なむくはんせおんぼさつくくと、かうしやうとなへ給へば、ふしぎや都のかたよりも、かゝりしうん一むらとびきたり、くはんせをんはあらはれ給ひ、大ひのゆみにちゑのやをばげはなち給へば、こはきじんのみぎのかたさきにはつしと立、ひるむ所をたむら丸たちをぬき、そらさまきじんのくびをてうどきれば、むくろと共にとしひとは大地へどうとおち給ふ、きじんのくびはわれ此たび大ひのしんりきにてほろびうせたり共、いきかはりしにかはり、此うらみをはらさんと、口よりくはゑんをふき出しひがしのそらへとびさりける有がたし誠にしゆそしよとくやくねひ、くわんをんのちからをあらはしすなはちげんじやくおほんにんすなはちげんじやくおほんにん

のかたきはほろびにけり是、くわんおんのぶつりきなり、有がたし共中々申ばかりはなかりけり

第三

かくて其後、こは田村しやうぐんとしひとはせいしうすがのきじんをばことゆへなくたいぢあり、ゑんちんをともしひいそぎさんだいなされつゝ、一々しだいにそうもんある内よりのせんじには今度としひとがはたらきにてとういをはろぼし申事、ばんみんのよろこびとゑいかんはなはだかぎりなし、やがてじよもくをおこなはれせいゐ大しやうぐんににんせらるゝ、偕又ゑんちんはほうりきけんごのいとくにて、大ひのしんりきあらはれみかたしやうぐんしやうてきのりをゑたりとてすなはちおとは山に大がらんをこんりう有、清水寺とがうし天下あんせんのかぎはんしよたるべしとてあきすはうをふしんりやうこくによせらるゝ、かゝりゑんちんとしひと諸共にこは有がたしと御前をたちおのゝしたくへ三重かへらるゝ是は偕置、こはそれ人がいのならいとて八

くの道はのがれずしとしひとの一子きよわか丸もつての外の御いれい、御みやくにたのみなきよしてんやくのかみおどろき申、みうちとさまの人々いかゝあらんとひやうぢやうある、地げにやたかきもいやしきも、へだてはあらじ人のおや、地心はやみにあらね共子ゆへにまよふならいにて、いたはしやはゝうへは、人のみるめもしら玉の、地つゆもいとぬふせいにてはしちかく出給ひ、こはいかにめんゝきよわかゝいれいいかゝあらんと仰ける、其時わけのたうしやう申やう、わか君の御ゐれいそれがしも身にとつての大事と存、さまゝりやうぢをめぐらし候へ共、此御みやくと申はしきのあくれうほうかいの風と成しんないにみだれ入、しんかんをさいだんす、かるがゆへにしよくきをとめづつうをおこし、ふうきかへつてねつしやうと成、いじゆつをうしなふ所なりと申上る、時にたんばのほつきやう申さるるは、爰にしんのうせんきやうをかんがみるに、どうねん同月同日のむまれし女のいきぎもを取、ほんはうにくわへあたへなばほんぷくやすきに候と手にとるやうに申上る、からうのめんゝ申さるゝは、

若君は十五歳三月十八日の御たんじやうなれば、此年月の女を尋ね、君のいれいを救はんと申、地みだい此よし聞召、おゝ尤なりさりながら、地きよわかいか成るんぐはにて、地かゝるやまふを身にうけて、うきふしなやみしづむさへ、そばに有けるおや心、身もたへなんとかなしきに、たとへいやしきものなりと、思はぬ事に身をうしなひ、いのちをとられれば其人や、おやきやうだいやゆかりのもの、うらみかこたんつみとがは、きよわかいかでのがるべき、おもふにかいなきくすりかな、さてもかなしき世の中とうれいふししづみてぞなげかるゝ、ことはどうぞに有あふ人々も、いろふしあたるだうりにせまりつゝ、おのゝゝそでをぞぬらし、ける、ことはげんかんとともみつ承り、御だうりしごくせり、何とぞはからい申べし、それゝと有ければ、地女ぼうたちは立よりて、なくゝみだいの御手を引かはりおくりれんちう、さしてぞ入給ふ、ことはげんかん申けるやうは、みだいの仰もさる事なれ共、かゝる大事の御わづらいさしおくべき事にあらず、いかんとなれば此君は天下の大しやうこつかのとうりやう也、もし御ふりよの

事あらばたむら一けのめつばうなり、下らうをころし大人をたすくる事其みちなきにあらず、又むたいにいのちをうばはいこそ、こくちうへふれをなし、身にのぞみの有ものをいのちのかはりに其ねんぐわんをかなへなば何のうらみか残るべき、かたゝや我々が命をせんじやうにてかるんずるも、是みな身ののぞみをかなへむため也、いかにともみつ御身はかたちをやつしゝあき人にさまをかへ、まづゝ君の御れうちなればやまとかはちいづみきいの國をまはり、くだんの女しやうをさいかくあれ、此義尤しかるべしと地はね川ぎやうぶはそれよりも人々にいとまをこひあき人にさまをかへくにゝ、さしてぞ三重下りけるなをもあはれをとめしは、ことは大和の國うたのこほりにおはします、まさひめきやうだいの人々にて、地しよじのあはれをとめたり、ことは其ゆいしよを尋れば、父はたむらしやうぐんの御うちに、かげゆざへもんゆきはるとて人にしられしものなるが、よしなきものゝざんげんにて君の御かんきかうぶりつゝ此さとに身をかくしじせつを相まち給ふ所に、みとせいせんにはかなくならせ給ふゆ

へ、地は、を頼てつらき世に、おとゝのせいじん待
にける、地いかなるつみのむくいにや、地すぎにし
なつのはじめ比、のりのたもとにころもがへは、さ
へむなしくなりければ、何とわくべきかたもなく、
たよりなぎさにあらゐそのなみだにくれておはしま
す、ことはもとよりひんじやの事なれば、てうさんば
しのかてもなく、地人のなさけによりいとのおさの
ころもを手はざにし、ひるはあたりのさとにゆき、
てわざの物をあきないて、地れいしやうじよがあと
をおひ、日もくれぬれはいほりにかへり、わかもろ
共になきくらす心をくりの、うちこそあはれなれ、こ
とは小次郎申やう、偕もくあねごさまかくうきわざ
になれ給ひ、我をはぐくみ給ふ事、思へばくかな
しやな、何とぞして我ひととなり、いか成方にもみ
仕へ御身をはぐくみ申つゝ、ことは世にいとをしきち
は、のごせばだいをもとひまいらせ、あねごの御
おんのをくりなば、かいなさいのちはおしからじと
なみだをながして申さるゝ、まさひめ此よし聞召、
おゝよくこそいふたれ小次郎よ、我も御身がせいじ
んを、月よ花よと待ゆへに、なれぬ手わざもくにな

らず、いろことはさりながらいとけなき身にかゝるわ
びしきうきすまゐ、みせぬる事のふびんやとうれいふ
しふししづみてぞ、なき給ふ、地物うき月日かさな
りて、地又くるなつになりければ、ことはいかに小次
郎あすははゝうへの一しうきになりたれど、もとよ
りまづしき此身にてくぶつせそうのちからもなし、
此くはんせおんは我々が父左衛門殿、一とせくまの
まうでの時ごんげんの御むそうにて、なちのお山の
たきつばよりしゆつげん有しくはんおんなり、ちゝ
はゝ子のなき事をかなしみて、此くはんをんにねが
ひをかけ、われら兄弟をもふけ給ひし御はとけなり、
地かうげをさゝげとぶらはん、地水くみ參れ小次郎
と、かうをもち花をさし、さまくとぶらひ給ひけ
る心の、いろおくり内こそしゆせうなれ、地偕ぶつせん
に參りつゝ、御きやうどくじゆましませ共、おつる
なみだにもじきへてうれいふしよみわづらひてぞな
げ、かるゝことはり、せめてぞあはれなり、とはかゝ
りける所にはね川ぎやうぶともみつは、君のゐれい
をすくはんとはうく尋めぐれ共、さるべき人もあ
らざれば、なをやまとぢにさしかゝり、やうくゆ

けばほどもなく日もくれぬればともみつ、いづくかやどりなるらんとあたりをみれば山かげにともしびかすかにみへければ、いほりのあたりに立よりて、此内へ物申さん行くて候へば一夜のやどをかし給へ、小次郎立出、是は人やどりにてはなく候、今すこしさきへおとをりあれ、おゝもつともなり、さりながら、いろことはゆきさきしらぬよるのみちひらに一夜と申ける、いやゝ何と仰候共おやどはかなひ申まじ、まさひめ聞召何と申ぞ小次郎、さん候道ゆき人のおやど、仰候程に、かなひがたきよし申候、ひめ君かきごしにみ給ひ、いろことは誠にたび人とみへたりとしもいそじにあまる人、御身の父もましまさば此たび人のとしぐらい、おもざしもにたるぞや、何かくるしかるべき、はゝうへのぼだいのたね共なりやせん、一夜をあかせ参らせよ、其時小次郎立出さあらば御入候へと、内へしやうじ奉る、ともみついほりの内に入、つくぐとみまいらせ、いかに上郎かゝる人ざととをき所にわかきかたぐ計にてあるじはいづくにましますぞ、姫君は聞召されば此やのあるじは是成おさなきものにて候、ともみつ偕

偕さやうに候はゝやどかし給はぬもことはりなり、さいさん申候だんさぞひほう成ものとおぼすらん、さて父母はいかならせ候ぞ、さん候父にはようせうにてわかれ候、いろことははゝ一人をたよりにてとし月おくりさぶらひしに、こぞのなつはゝにもおくれしかも明日が一しうきにて候ゆへ、さやうの事も思ひ出、かくみぐるしきいほりなれど、御やど参らせ候ぞや、いろことは御心有かたならば一ぺんのねんぶつをも御ゑかうあつて給はれとうれいふなみたと共にぞ申さるゝ、ことはおにをあざむくともみつも、いろふし人のあはれを身にうけて共になみだをながしける、ことは偕かたぐは御としはいくつにならせ給ふぞや、まさひめ聞召小次郎は十一歳、わらはゝ十五に成申が共に三月十八日のむまれにて、くはんおんのめぐみふかきよしつねゝはゝの申せしゆへ二人共に此くわむせをんを父共母共たのみつゝ、いろことはうれしきにもかなしきにも此くはんおんのみなをとなへてくらし候、ともみつはつと思ひ、すはや是こそほとけのつけ何とぞしてたばかりつれのぼらんと思ひつゝ、げにいたはしき御事かな、都のか

たへおのぼり有御みやづかへはなされぬぞ、もつ共
さやうに存れども、ふりよにはゝにおくれしゆへ、
とはうにくれてとし月をけふよあすよとくらし候、
儲々ふびんの御事や、それがしは都のものにて候が
五十にあまり申まで子とてもたぬものにて有、か
たぐの御物がたりよにいたはしく候へば、こよひ
のおやどの御ほうじに都へともなひ参らせ御世に出
し申べし、うばにて候ものもなさけ有ものなれば、
さだめてよろこび申べしと誠しやかにぞ申ける、地
まさひめよしを聞召、なふうれしき人の仰かな、い
ろことはいかに小次郎たび人の我々を都へともなひ、御
みを世に立ゑさせんと給ふぞ、よろこびようゐ仕
れ、小次郎聞てうれしく候さりながら、きのふふも
とのさと人がおくよりあき人ののぼりたり、おさな
きもの共心せよと申候、まづ此事は御しあんあれと
ぞ申ける、おゝよくこそ申せ小次郎よ、いろことはさ
りながらいづくいか成國までも此くわんをんをもち
奉りのぼりなば、よもさいなんにはおちいらじ、か
やうに都へのぼるとてわが身のためにあらばこそ、
御身を世に立ちゝはゝの御ぼだいをさへとふなら

ば、あるかひもなきみづからが、命はさらにおしま
ぬぞ、いかにたび人あけなば御とも申べし、さりな
がら此年月二人のものねんじ奉るくはんせをんの御
はします、此御ほとけをもち奉りたく候いかゝあら
んと申さるゝ、ともみつしすましたりとよろこび、
何事もそれがしに御まかせ候へ、其外手ぐそく何に
てもよいのもの候はゞ都へといけ参らすべし、地か
かりさあらばようゐ有べしと其夜のあくるを大三重待
給ふ、地つれふしあらいたはしや、ひめ君は、地人の
ことばをたのみつゝ、おさなき人の手を引て、くさ
のはしげきむぐらやの、地あれたるいほりを立出て、
地みやこをさしてのぼらるゝ、こゝろの内こそはか
なけれ、地けふたちいづるたびごろも、かはくまも
なきそでのつゆ、たれかあはれとみよしのゝ、山ぢ
はるかにながむれば、あとはとをちのさとをすぎ、
人をはつせの山風にむらさめしげくふるのみや、も
みちのにしき神のまに、ぬさをたむけの山道に、う
き身はなにとならざかや、このてがしはのふたおも
て、ともかくにもおさな子の、ゆくへを思へばむ
ねの火も、とぶひののもりきへやらで、あはれ、は

か、なき、身なれども、すへをたのみにみかさ山、みへつかくれつしのゝめに、月をかこちてゆくそらのもとの、身ながらやつれはて、いと思ひはますだのいけ、おさなき人はあゆみかねうれいふしたちやすらいておはします、大夫とはいかに小次郎すみなれそめしふるさとを、とこはなれ行かなしみも、二人おやかうゝのためなれば、くるしき心をなぐさみているおくりしばし、うれしささほの川、地わたりくらべてわれゝも、いつかはよにもいでのと、げに玉みづはなのみして、わけてながむる身ならねど、しらぬめいしよのかずゝ、地をとふにつらさのまさりつゝ、なみだにくもるあさひやまめぐりゝゝてたきのみづ、いとくりかへしゆくほどに、野くれさとくれ山をこへ、月のみやこにつき給ふかの、ひめ君の御ありさま、たゞ世の中の物のあはれは是なりたい是なるはとみなかんせぬ、ものこそなかりけり

第四

かくて其後、ことははね川ぎやぶともみつは人々をともなひ、いそぎ都に上りつゝ、すぐにわがやに立歸れば、女ばう立出、偕きやうだいをみまいらせ、さてもゝよにいつくしき人々かな、いづくの國いか成人の子成ぞや、姫君聞召さん候われゝは、やまとの國の者なるが、是に御ざ有御方の都へのぼりいか成かたへもほうこうさせ、よきにはからひ申さんとよにあはれみましますゆへ、それをたよりに是までのぼり候ぞや、たゞ何事もゝかたゝをたのみ奉るといふふいとしほゝとぞ申さるゝ、女ばう心におもふやう、偕もじやけんのがつまや、いかにしうめいなればとてかくいとけなき上らうをうしなはんとはふびんやとしのび涙をながしつゝ、ことは誠にすみなれ給ひしふるさとをはるゝのほらせ給ふ事、さぞたよりなく思召さんさりながら君にみやづかへましまさばめでたき事にて候はん、地まさ姫は聞召、うれしき今の仰かな、ことはおとうとさへよに出ば、みづから女の事なれば、いゝことは何たるくらうをいたす共、いかにもつとめ申べし、只御ふうふの人々をひとへに頼み奉ると、うれいふし涙をながして、申

さるゝ、ことは女ぼう聞て諸もやさしき御心、地とふにあはれはまさりぐさ、かれぐに成事共を、いろに出さでしのびねにうれいふしなくより外の事はなし、ことはともみつきつとみていかにそれ成女ぼう何とて人々にきうそくはさせ參らせぬぞ、おくへつれ行候へとあいさうなげにぞ申ける、女ぼう何共ことばなく、地こなたへいらせ給へやと、地人々をともしつてみうち、さしてぞ入にける、ことはともみつづくと思ふやう、今の女のていたらく、おさなきものをかたらばこうくはひす共かなふまじ、とかくこよひの内にじつぶをたゝし申さんと、おもひこふでそれよりもひそかに内に立入、何となく姫をよび出し、こごゑに成て申やう、いかにまさ姫、御身をかやうにつれのぼる事よのぎにあらず、さきに申たく候へ共おさなき人につゝむゆへ、とかふのことを申さぬなり、かやうくのしだいにてわが君きよわか殿れいにかはりしいれいゆへ、てんやくのかみ申せしは、同年同しやうの女をがいし、其いきぎをもちぬなば御はんぶく有べしと申ゆへ、さいわい御身はわか

君と同年同しやうの人なればこよひの内にがいするぞ、かまひてうらみ給ふなよ、其おんしやうにはおとうと小次郎にくわぶんのしよちを下さるゝとにがく、しくこそ申ける、地まさひめよしをきゝもあへず、なふよは誠かなしやとうれいふしなみだにくれてぞおはします、ことはともみつ大きにいかり、何をなげき給ふぞやさいせんより御身の給ふは、あの小次郎さへ世に出なば一命とてもおしからじと、たびく御ぶん申されしは、あゝ諸はいつはりにてましますか、少もいはいの有ならばまづおさなきものをうつてすて、其後御ぶんをさしころしともにうきめをみせ申さん、せひの二つはこゝなりと、八はうをにらみつけ、さもおそろしく申せしはなふはるをとなさけ、なふこそ聞へける、いたはしやまさ姫は、何とわくべきかたもなく、さてくじやけんの有さまや、とくにもかくとしるならば、なにしに是まできたるべき、又みづからが命をおしみ申なば、わかもろ共にころさんとは、是はむたいの御事や世の中にく、かみやほとけはおはせぬかと、うれいふしししづみてぞ、なげかるゝ、ことはともみつなをもい

かりをなし、いかにまさ姫、さあ／＼とくと心をさだめ給へ、もしもいはいの有ならばまづ小次郎をがいせんと、ずんと立ておくへ入、まさ姫あはてゝすがり付、なふさてみづからいなと申なば、二人ともにうしなはんや、うらめしき御心、しばらくまたせ給ふべし、おもひさだめて候ぞや、かゝるじせつにあふ事も、せんせのゐんぐはといふゆへ、恨みとさらにぞんずまじ、いろことはさはさりながらおとうとをかならず世に立たび給へ、地かれたに世に出申なば、きへん命はをしからじとおとなしやかにのはの給へ共、さすがわかれの事なればうれいふしせんごふかくになげか、るゝことはり、せめてぞあはれなり、ともみつもさすがふびむに思へども、わざとことばをあらゝかにいかにも／＼御身さへ命を君にさしあげ給はい、わかには世に出申ぞや、心やすく思はれよ、地ひめ君よしを聞召なげきの中よろこびとは、かかる事をや申らん、いろかんことはもはやこんじやうに思ひおく事候はず、さいごをきよくいたすべし、偕みづからをいか成ものとおぼすらん、今は何をかつつむべき、われ／＼が父うへはたむらしやうぐんさ

まの御内に、かげゆさへもんゆきはると申ものにてさふらひしが、さるものゝざんげんにて君の御ふしんかうぶりて、いろことはやまとの國うだの里に身をかくしじせつをあいまち給ふ所に、いろことはいたはしやち／＼うへいまだ御しやめんなき内に、ふりよにあいはて給ふゆへ、地わらは女の事なれば、せめては此小二郎を、十五歳までもりそだて、其後はいか成かたをも頼みつゝ、是はさへもんがわすれがたみで候と、君の御しやめん申うけ、すぎさり給ふ父うへの、しごにねがいをかなへんと、心をつくせしかいもなく、あいみる事もこよひばかり、偕もはかなき世の中とうれいふしふししづみてぞ、なげかるゝことはともみつよこでをてうど打、偕はゆきはるのわすれがたみにてましますか、御身の父とそれがしはしたしみふかきはうばいなり、人こそおほき其中に、かゝるよしみの人の子を、我手にかけてころさん事、あゝしなしたる事共やと、いろ地かゝりなみだにむせびうちしほれうれいせんごふかくに、みへにける、ひめ君よしを御らんじて、なにいろことはみづからがよそがましき物がたり、偕は此御やかたはたむらしや

うぐんさまにてましますか、其若君きよ若さまの御
いれいに、みづからがいきゝもをめされとや、おろ
かなりともみつ殿、地わらは女の身なり共、其いに
しへはあづさゆみ、やたけ心の我からと、思ひしも
のゝ子にて有、おしうの命にかはる事、あつぱれく
はほうの我身かな、くさのかげなるちゝうへも、う
れしくこそはおぼすらんと、ひとりごとにいさみを
なし、こは儲さいごは只今にて候か、ともみつ聞て、
いやゝ此あかつきが御さいごなり、まさ姫聞召儲
はしばらくのじこくにて候、我等國もとよりもり奉
るくはんおんは、はゝうへさま御さいご迄もおがみ
給ひ、めでたくわうじやうなされたる御ほとけ也、
みづからも今をかぎりの事なれば、御いとまごひ申
たく候、ともみつ聞てげに有がたき御事かな、いか
にもはいし給ふべし、かまひてゝ小次郎に此事し
らせ給ふなと、やがて内にぞ入にける、地あらいた
はしやまさ姫は、是ぞ此世をかぎりぞと、地まづ御
佛に参らんと、地いるなくゝおまへに参りつゝ、な
むや大ひのくはんせをん、ちゝはゝのごせばだい、
よきにみちびきたび給へ、べつしては小次郎のゆく

すへまぼらせおはしませと、ふかきねがいをかけ給
ひ、ねがはくはぶつりきにて、只今きへゆくみづか
らを、ちゝはゝとおなじうてなに、すくいとらせた
び給へと、ふかくねがひをかけ給ひ、かくきうせん
にかゝるみづからが、らいせのくげんぞかなしやと、
うれいふしふしまろびてぞ、なき給ふ、地やうゝ心
をとりなをし、こは小次郎がそばちかく立より給
ふ、地ふびん成かな小次郎は、地ならはぬたびにつ
かれはて、せんごもわかでふし給ふ、いたはしやま
さ姫は、おとうとのかほを御らんじて、儲もふびん
や小次郎が、只今きへゆくみづからが、さいごのほ
どをしらずして、よねんなくふしけるぞや、世の中
にゝ、わらははどうたてかりけるものはなし、ち
ちはゝにはようせうにておくれ、みなし子と成はて、
野に出山を家として、兄弟より其外は、たれをたの
まなかたもなしおさなきものゝ事なれば、さぞや心
のみだるらんと、思ひやられてあさましやと、あと
までも思ひやりうれいふししのび涙はせきあへず、し
よじの、あはれと聞へけり、こはかゝりける所には
ね川きやうぶともみつは、家の子二人めしぐしじぶ

んはよきぞと立より、いかにまさひめさあゝ出させ給ふべし、地ひめ君は思ひわけたるかたもなく、なみだにくれてぞおはします、ことはともみつそれゝと有ければ、承り候とて、やがて立よりひつたて、いゝ地にはのおもてにつれ行しはなさけ、なふこそ三重みへにける、さて其後に、こはいかにまさ姫さいごなるは何にてもいひおき給ふ事はなきか、いゝことはひめ君涙の内よりもはや此ごにおよび何ののぞみもなく候かへすゝも小二郎がゆくすへたのみ奉ると、なみだと共にぞ申さるゝ、ことはともみつ聞て其だんはそれがしに御まかせ候へ、いかに汝らじこくうつるにそれゝと有ければ、かゝりかしこまつて候と、こほりのごとく成かたなをぬき、すでにかふと見へし時、ひめ君あはてゝ取付、なふしばらくまたせ給ふべし、さり共と思ひしに、是がさいごで候はい、今一どおさなきものに申おきたき事のあり、やれ小次郎よく、是が此世のわかれぞや、など詞をばかはさぬぞ、いづくに有ぞ小次郎と、うれいふしこゑをあげてぞさけばるゝ、こは二人のものとなつておさへ、ゑゝ是みれんなりやひめ君と、心もとにを

しあつれば、あつとばかりをさいごにてつゐにむなしく成給ふはうれいおとしめもあてられぬしだいなり、こは諸二人のものきもをそろりと取出し、うつわ物におさめつゝ、ひめ君のしがいにきぬ引かづけ参らせ、三人のもの共はたがひにかほを見あわせ、いゝこは諸もゝ世の中にせまじき物はみやづかへ、われほうこの身ならずば、かゝるうきめは見まじきものをと、さしもにあらきもの共もうれいふしせんごをぼうじていたりける、こはあらふしぎやみづしのうちよりも此うつわ物にひかりさす、こはいかにとふりあをのきて見てあれば、くわんおんの御むね二つにさつとさけ、ちのながれ出る事ひとへにたきのごとなり、ともみつをはじめつゝいかさまふしぎはれやらすまさしく姫君の御むねをさきたるに、今みほとけよりちの出るは是はいか成事やらんと姫君のしがいを、きぬひきのけてみてあれば、ひめ君はまします、ともみつ大きにおどろき、まづくはんせをんをおがまんと、地とる物も取あへずいゝおくりぶつせん、さしてぞまいりける、こはこはふしぎやきやうだいもろ共せんごもしらすふし給ふ、

ともみつ大きにあはてつゝ、偕は此くわんおんの身がはりにたゝせ給ふと、きやうだいの人をおしおどろかせば、二人共にめをさましたゞばうせんとあきれるたり、ともみつよこでをてうどうち、こは偕も偕もしやうじんの御佛にやいばをあてちをあやしつゝ、五ぎやくのとがをいかやせん、まつびらゆるさせ給へやと、うれいふしずいきのなみだをながしつゝ、こは偕もく御身はたい人と思ひしに、是ぞ誠のくわんせおん、姫とあらはれ給ふかや、只今つくりしつみとがをたすけ給へやおゆるしあれ、なふ姫君と申つゝ、なみだをながしはいし、かゝるきたいの御事を、いかでかさしをき申べき、いそぎ君へうつたへんいざこなたへくゝと、御所さしてあがりける、かの姫君の御有さま、きたい千萬尤あやうき事共やと皆かんせぬ、ものこそなかりけれ

第五

かくて其後、こはたむらしやうぐんとしひとはみだい所をちかづけ、いかに申さん聞給へ、きよ若がび

やうなんとやせんかくやあらましと心をこめて思ひねに、すこしまどろみ申内にこんやふしぎの御れいむをかうぶりたり、たとへばつゐにみなれ奉らぬくはんせをんのそんよう、清若がまぐらがみに立給ひ、御むねのまんじより大きくわうみやうをはなち給ひ、其ひかり清若が口中に入らせ給ふと思へば、たちまち清若はんぶくすとゆめにみる、ふしぎなりとの給へば、みだい此よし聞召れ、偕もふしぎの御事や清若がいれい、ゆふべうしみつのころよりやまふしづまり、すこし靜にふしたるとめのとのかたよりつげたりしが、けさはやうすも聞へぬぞ、やあたれか有、みて參れとの給ふ所に、清若丸御ふんぶくにて出給ふ、ふうふの人は取つき、いろこはなふおことはかるく敷もはんぶく有こそうれしけれ、いろふし是もひとへにくわんをんの御じひと、うれいふしうれしなみだを、こぼさるゝ、こはかゝりける所にはね川ぎやうぶともみつは姫君をともない、急ぎ御まへに參りつゝ、くだんの御佛ならびにうつわ物をさゝげつゝ、有ししだいを申上、いろふし御せんともはゝからずなきふしかんるいそでをぬらしける、こは大將

よしを聞召、むさうといひじげんといひ、是たゝ事にあらずいそぎうつわ物をひらくべし、承つてふたをとれば、あら有がたやいけうくんじて、其内よりぶつしんじやだいじひとあきらかにもんじすはりこくうに、あがらせたまひける、ことはとしひといいよくかんたんし、大じ大ひの御りやく今にはじめぬ事ながら、かゝるきどくあらはし給ふ、御身は神か佛かと、おのゝかうべをかたむけて、ひめ君をらいし給ふ、げにことはりとぞ聞へ、ける、地としひとふうふの給ふは、ことはいかにまさ姫、御身しんぐ誠有かく有がたき御佛の、御心にかなひ給ふ、そのぎやくゑんにひかれつゝ清若はんぶくいたす事、しやうぐせゝのきへんならん、かゝるきどくをあらはし給ふ、御身はいづくいか成人の子なるぞや有のまゝになり給へ、其時姫、こは有がたきじやういかな、地今は何をかつゝむべき、みづからは、ことはたう君の御家の子に、かげゆさへもんゆき春が子共なり、あらぬざんじやのしはぎにて、君の御ふしんかうぶりつつ、三とせいせんにあいはてられ候、地わらは女的身なり共、君の御かんにあつかる事、くさのかげな

るちゝゆうれいも、さこそよろこび候はんと、なきふしなみだをながし申さるゝ、いろふしとしひとふうふもろ共にはつみふしそでをぬらさせ給ひ、ける、地やうやうなみだをとめつゝ、ことは儲もゝゆき春はちうかうふかきものなりしが、ねいじんのことばを誠と思ひ、むじつのりにしづめたり、めしかへさんと思ふ所にあいはてぬればちからなし、今又汝にめぐりあふも、三せのきゑんくちぬゆへかゝるたつときまさ姫を、清若とふさいのゑんをむすばせ、我ゆいせきをゆするべし、又小次郎は清水寺ゑんちんそうづのでしになし、出家をとげさせ、御身たちがちゝはゝや、われゝがぼだいをとぶらひ申べしと、かり地一か一もんめしあつめ、しゆかうのしなぐとゝのへて、ちよばんせいの御しうげんのいろおくりぎしきの、程こそめでたけれ、ことは儲其後に、としひとはいかにかたぐゝ、こんど清若がびやうちうにとりまざれ、久々せいすいじへ参らず、いざやさんけい申つゝ、かゝるふしぎの事共を、ゑんちんにかたればやと申さるゝ、其時まさ姫げに有がたき御事や、かゝるおりふしにて候へばせいすいじのくはんせお

んの御まへにて、まんどろゑをとりおこなひすぎさ
り給ふ父母の、ごせぼだいがとぶらひたく候いかい
あらんと申さるゝ、としひとよしを聞召、儲もゝ
思ふにまされるしんていかな、いかにもとゝのへ參
らせん、せん、いかにからうのめんゝ、清若ふう
ふはじめての物もふでなれば、ぎしきをゝのへ申
べし、かりかしこまつてそれよりも、しだいゝに
申つけ、きおひ三重きよ水さ、してぞ參らるゝみだう
となれば、ことはおやこ四人の人々はまづぶつせんに
參りつゝ、げんせあんおんごせうせんしよとねん比
にふしおがみ、儲ゑんちんにたいめん有、ありしし
だいをかたり給ふ、ゑんちんかんるいましゝて、
ぐそうようせうのむかしより、すいらうの只今まで
すいぶんしんゝをこらせ共、かほどのきどくはお
がみ申さず、有がたき御事かな、又ちゝはゝの御た
めにまんどろゑをおこなはんとはいよゝゝやさしき
御心、すいぶんとぶらい參らせんとの給ふ所に、ふ
しぎやとうざいより、かりしうんたな引、なんによ
のすがたあらはれ給ひ、手にとうみやうをさゝげつ
つ、きたらせ給ふぞふしぎなる、地やうゝちかく

なりければ、ことはいかにまさひめめづらしや、われ
人げんに有し時、ふげんしきしんのとくをあらはし、
かりにちゝはゝとげんじたり、今又かゝる御はうべ
んにてけちゑんの人々をまことの道にゐんだう有、
ありがたく存るゆへ、とうざい二佛の淨土より、し
やうゝの火をもちきたりたり、いざまんどろゑと
ぼさんとの給ふ時、二つの火とうざいへさつととび
されば、一まんのとうみやう皆一どにはつととぼり
しはふしぎ、なりける次第なり、ことは人々きゑの思
ひをなし、かうべをかたぶけらいはい有、其時二人
の人々いかにゑんちんとしひと、我々は是くわんじ
ざいそんのさゆうのけうしなりとの給ふと其まゝ
に、ちゝうへはせうてきびしやもんとげんじ給へば、
母うへはせうぐん地ざうとあらはれ給ふ、其時姫君
の給ふやう、御身たちしんゝの誠をこらし我をし
んするとくにより、かたきをほろぼしやまふをたす
けしゆゝのりやくをほどこしたり、今はほんどに
歸るべしとちやうの内へいらせ給ふ、其時ゑんち
んいかに姫君、是はいか成御事ぞや、ふしぎさよと
の給へば、姫君おろかなりゑんちん、おういちやう

じやさいくわんぶによしん、とくどしやそくげんぶ
によしん、にゐせつぼうといふめうもんの有をわす
れたるか、汝、人の大だんなとしひとが、一子清若丸、
あつきのなやみにくるしむをすくはんためのはうべ
んなりと、の給ふみこゑの下よりも、四はうのみち
やうさつとおるれば、としひとゑんちんこはいかに、
まさ姫と思ひしに、偕は大ひくはんせおんにてまし
ますか、とても大じ大ひの御ちかひに、今一たび誠
の御すがたありくと、いろふしおがまれさせ給へや
と、うれいふしなみだと共に申さるゝ、ことは其時こく
うにおんがく聞へ、花ふりくだり、かゝりいけうよも
にくんじ、ふしぎやみちやうの内よりも、めうをん
たいしきみこゑにて、今ぞ誠のそくげんぶつしんに
ゐせつぼうとの給ふと其まゝに、せんじゆせんげん
くはんせをんとあらはれ給ふ、じげんじしゆじやう
の御りやく、ふくじゆかいむりやうなり、たむら一
家の人々はさてもく有がたやと一度にはつとかん
じける、偕こそ洛陽清水寺は田村將軍の御願にて圓
鎮僧都の御開基此尊像に願ひをかくる人々は、現世
安穩ふつきじざいごしやうせんしよの御ちかい今に

たへせぬ、御めぐみ、もつとも日本第一のくはんせ
をんと今の世にいたるまできせんぐんじゆの參詣あ
り大慈大悲の御誓願有がたしともなかく申ばかり
はなかりけり

をぐりの判官

第一

扱もそのうち、中比の事かとよ、ひたちの國とつはた村といふ所に、正八まんむすぶの神といわゝれおはします、由來をくわしく尋るに、都三十六人の其中に、三條高倉の大納言、かねいゑとの御ちやくし、おくりの判官まさきよとて、高家壹人おはします、去程におくりとの、くらまたもの申子にて、八わた八まんのゑぼしおやにてましますば、ちからの程は數しらす、うへこす人はなかりけり、扱又家のこうけんには、池のせうしと申もの、おくりとのにおとらぬかうの者、其外とざまのしよさふらひ、主君とあふきたてまつり、ゑいくわにさかへ給ひけり、しかるにおくりとの、くらまにしゆくわん有故に、いけのせうしを御供にて、くらまをさしてそ三重參らるゝ、御前になれば、うかひにて身をきよめ、わに口てうとうちならし、よきにきせいをかけ給ひ、扱有へきにあらざれば、こしよりようでうぬ

きいだし、かくはさま／＼おほけれど、そうぶれんといふがくを、しばしふきてぞ三重おはしける、かかる所にみぞろか池の大じやは、たちまちりうによと身をへんし、がくをてうもんしたりけり、小栗御らんじて、それなるはいかなる者とぞ仰ける、大蛇こたへて、さん候みづからは、はるかいなかの者成が、なさぬ中のざんにより、身の置所なきまゝに、是迄參り候と、げにありそふにぞ申ける、おくり聞し召、扱は左様に有けるか、こなたへ來り候へとて、つれて御所へぞ歸らるゝ、御所にもなれば、秋の蟬のから衣、うすき世なれどちきらるゝ、今ははや、つばねもくわいにんと成給ひ、詞有時小じやを召れ、いかに小蛇、われ人けんとちきりをこめ、只ならぬ身にて有、後にはあらはれおひいたされんはぢてう也、みづからがいらん池あらは、見て參れと有ければ、小じや承り、御前を罷立、南おもてへ打こゑ、かなたこなたを見まはし、それよりも取てかへし、さん候是よりみなみおもてに、しんせんゑんと申いけの御ざ候、是へいらせ給ふべし、つばねよろこひ、やがて大蛇とさまをかゑ、南おもてに三重いりにけ

り、かゝる所に、しんせんゑんが池にすむ、八大りう王、おどろき出させ給ひつゝ、いかに大蛇、なと人間とちきりをこめ、我すみかにはかなふまじ、ものとみぞろにもどるべし、大蛇こたへていわく、人間とちきりをこむれば、ふつたいの身と成ゆへ、此池にいるへし、いやかなふましとのせんぎにて、七日が間は雨風しきりにしんどうして、御てんもくづる、三重ばかりなり、是は扱置、みかどには、くげ大臣を召れ、とりくひやうでうなり、内よりの宣旨には、はかせを召、うらなわせよとのせんしなり、かしこまつて候と、やがてはかせを召れけり、おくよりのせんしには、いかにハかせ、かやうくの次第なり、はかせ承り、ひとつのまき物取出し、しばしかんがへて申様、是は三條の大臣、かねゑとの御ちやくし、おくりのはんくわんまさきよどの、みそろが池の大じやと、ちきりをこめさせ給ふゆへ、扱こそしんどう仕る、おくりをるにんたるへくは、天下めてたかるべしと、見どふす様に占て、はかせは我家に歸ける、みかどおどろかせ給ひ、其儀にて有なは、父かねゑる召せとの宣旨なり、か

しこまつて候と、かね家をぞ召れける、かねゑる何事やらんと急き參内なされける、おくよりのせんじ、如何に兼家、ふびん成事なれど、少ししさいの有間、此たびおぐりをひたちの國へ、るにんとの宣旨なり、かねゑるちよくめいかふむりて、こはふしきとは思へ共、せんしなればちからなく、畏て候と、やがて御てんを罷立、やかたをさしてぞ歸らるゝ、やかたになれば、おぐりとのに近付て、いかに正清、とがは何とはしらね共、きみよりのせんしには、御身をひたちへ、ながしをけとの宣旨なり、若木の花を流人させ、跡に残る老の身は、何と成へきものうやと、まづさめくゝと泣給ふ、おくり聞召、扱は左様にましますか、せんしなればちからなし、よりくゝそうもん申べし、おいとま申てさらばとて、互にいとまこひこわれ、十人のとのばら達を打つて、三條の御所をば、夜半にまぎれて出給ひ、ひたちになるにと三重聞えけり、ひたちになれば、しんそうにやかたを立、くろきの御所と名付、ゑいくわにさかへおはします、ある日雨中の事成に、殿原たちを召あつめ、酒ゑんをはじめ給ひけり、酒も半の事なるに、何國

共しらすあき人壹人來り、門外をあきなふやうのおりしろや、御たしなみの道具にはじんを召れ候へや、きやらを召れ候へと、たからかにそ賣にけり、おくり聞召、あのあき人召との御でうなり、畏て候と、おもてに出て、如何にあき人、こなたへと御前ちかく召れる、おくり御らんじて、いかにあき人、汝かうしろにおふたるは、何成ぞととはせ給へば、あきひと承り、さん候、是はくすりの品々をもとめ賣るにより、せんだひとつと申候、おくり聞召、左様の藥を賣ならば國はいかほと廻つて有ぞ、扱又汝か名をば、何と申と問せ給へば、あきひと承り、かうらいへは第七度、およそ日本は三度迄めぐり候と申、扱又それがしが名は、まづつくしにおゐてはさめがゐの後藤、都においては三條にむろ町の後藤、かやうに申はさかみの後藤と申て、凡そ日本には後藤の名字つく者、我ら三人ならでは御座なく候とぞ申ける、おくり聞召、すがたを見ればあづまゑびす、心は花の都なり、酒をくめや殿はらとの御誕なり、池のせうし承り、何國もしらぬあき人に、そゝろにさけをぞしいられける、酒も中ばの事成に、池のせうし申さるゝは、いかにあきひと、

此御所は心ふでうにまし／＼て、いまた定る御前なし、よきひめあらば仲人せよとの給へば、あきひと承り、なきと申ものならば、國をめぐりしかいもなし、あるやうに申なし、通らばやと思ひ、爰にむさしきかみのぐんだいに、よこ山殿と申せしは、五人のきんたちおわします、おとのひめ君は、下野日光山の申子にてましませは、則御名をば、てゐての姫と申て、かたちをみれば春の花、姿は秋の月十はら、とをのゆび迄もるりをのべたるごとくなるひめ君にておはします、此ひめ君こそは、當御所様の御臺所にてましますと、ことばに花をさかせ、べんせつたつして申ける、おくり聞召、まだ見ぬ戀にあこがれて、いかにあき人、其姫を仲人せよ、仲人するものならば、くんこうけしやうは望によつてしたがふべしとの御誕なり、あきひと承り、御仲人とはおゝそれおゝ候へば、一ふで召れ候へ、ふみの使と申けり、おくりよろこび、うすやう取て一重、思召るゝこと共を、さもちんでうにあそばして、まつかわやうにおしたゝみ、あき人にたまはりけり、後藤玉つさうけ取て、御前を罷立、さかみをさしてぞ三重、急ぎける、さかみになれば、て

るての姫のおわします、いぬいのつぼねを、あきなふやうのおもしろや、女郎達のけわひ道具には、べにやをしろひたとう紙、尺のかもじは召まいかと、たからかにぞあきなひたり、折ふし女ほうたち出給ひ、いかにあき人此方へと、御みすちかく召れける、其時あきひとつゝらをおろし、品々を取出し、あれかこれかとあきなふたり、女ほうたち見るよりも、是はいつものあきなひ物、何にても珍ら敷ものはなきかとあれば、商人うけ給り、時分はよしと心へて、かの玉つさを取立し、いかに女ほう達、それがしひたちの國を、三日あきなひ申て候が、うつくしうしたゝめたる文一つう、ひろうて有、よくばてほんあしくは當座のわらひ草にし給へと、たはかり文を參らする、女ほう達はうけ取て、さつとひらき見給へば、何上成は月にほし、下に雨あられとめされしは、何様心きやうらん成人か、すじなき事を、もじあるやうに書なして、途中にすてたはぢてうとて、一字をもわきまへず、一度にどつとぞわらわれける

てるてふみ之段

去程に、てるてのひめ、七重八重のみすよりも、しつ／＼と出給ふ、何をわらわせ給ふぞや、面白きことあらば、姫にもかたり、心をなくさめ給はれや、上郎達と仰ける、承りて、やがて玉つさ奉り、てるて玉つさうけ取て、先上書をほめ給ふ、ひつせいのけたかさよ、すみ付のみごとやな、主はたれ共しらねども、筆にて人のまよふとは、爰のたとへを申なり、地いかに女ほうたち、それ百やうたつしても、一やうとてもしらざれば、人とあらそふことなかれ、何さまにも此ふみは、ぶんのよみこゑ有べきに、みつからうてきかせんとまつ、文の紐をとき、何成らんと見給へば、いせものかたりにことよせて、さもじんどうの此ふんや、大和ことばでよむべきか、又はぎにてもよむべきか、あら面白のこのよみやま、まつ一ばんの筆立に、みねにたつ鹿うすもみち、ねざゝあられと書せしは、先立しかのたとへをば、秋の鹿にはあらねども、つま戀かぬるとこれをよむ、うす紅葉のたとへをば、いろにだすなとよむべきか、ねさゝにあられとかゝれしは、花のたもとかさはらばおちよと是をよむ、池のまこもと召れしは、ひく手に

なびけと是をよむ、尺長帶とめされしは、さて此戀か戀かしゆみをへたゝて、あればとて、いちごに一度はめぐりあひ、むすびあはんとこれをよむ、つかなき弓にはぬけ鳥、うすみ火とかゝれしは、此戀を思ひそめにし此かたは、ゐるもゐられず立にもたゝれず、我こゝろもえたつばかりと是をよむ、戀を七つにわけられた、見る戀聞戀かたる戀、逢ての後にわかるゝ戀、くもにかけはし中たえて、およばぬ戀をこひといふ地爰にひとつの奥書あり、戀する人はひたちほうでうたまつくり、おくり殿にておはします、こひられ人はみつからなり、扱今迄もくも、よその事かと思ひしにわが身の上にて有けるな、もし此事父よこ山あに殿ばらに聞えなば何と成なんかなしやと、かの玉つさを二つ三つにひきさきて、みすより外へふわとすて、れん中、さしていり給ふ、てるてのひめの御有さま、ものうかり共中々、申ばかりはなかりけり

第二

去ほとに、御前成女ぼう達、是はいつも參るあき人かと思ひしに、人商人にてかどわかしにて有けるぞ、時のはんしゆはなきか、あれはからへと有ければ、後藤此よし承り、よしなき人に頼まれ、しなしたりとは思へ共、爰はひとつおどす所と思ひ、ひろゑんに上り、いかに女ぼう達、只今の玉つさを、ものをしつてやぶらせ給ふか、又はしらひて御やぶりあつてましますか、いてく筆の始りを、かたつて聞せ申べし、まつ天ちくにては、だいしやうもんじゆのふではじめ、唐土にてはせんどうくわしやう、わが朝にては高野山におわします、弘法大し、四十八字のいろはのもしをつくらせたまへば、文字を一字やぶれば、こうほう大しの命を取たるごとくなり、二字又やぶれば弘法の十のゆひをもぎおとすごとくなり、てるてのひめ女ぼう達のごうの程、おそろしやと板ふみならしておどしたは、身のけもよだつばかりなり、てるて此よし聞召、あらおそろしの事共や地色扱もはかなやなみつからは、むさしさかみ兩國諸大名の方よりも、文玉つさの通ふ事、ふる雨したふかごとくなり、いづれも引さきすてけるが、皆みづ

からが後のごうとや成申さん、たとへば此事父よこ山、兄とのばらにもれ聞え、いか成うきめにあふても、ふみの返事申さんとして、うすやう取て一かさね思召ことのはを、さもじんでうにあそばし、まつかわやうに引むすび、ひやうごのつばねにわたさるる、つばね玉つさうけ取て、やがておもてへ立出て、かのあき人にわたさるゝ、詞後藤王つさうけ取て、かわこのかけごにしつかと入、れんしやくつかんてかたにかけ、へいち門をつゝと出、といきを一つほつとつき、とらのをふみどくじやの口をのがれたる心ちして、ひたちをさしてそ三重歸りける、ひたちになれば、やかて御前に参りつゝ、殿ばらにたいめんし、是々御返事とて奉る、せうじうけ取我君に奉る、おくりよろこびいそぎひらきはいけんある、何何木曾路にかけしまろきばしと召れしは、返さはおちよあはんとこの事成べし、ひめがりやうでううたがひなし、とくゝむこ入との御でうなり、いけの庄司承り、奥方は使者を立てばむこにとらぬと承る、某使者に参らんと有ければ、おくり聞召、おろかや庄司我よこ山にむこにきはりやう事にてなし、使者に

は我が参らんに、何のしさいの有べきと、十人の殿はらをうちつれ、いかにあきひとろしの案内せよと仰ける、商人承りさきにたちてぞあゆみける、ほどなくゆけばさがみの國に著給ふ、後藤は高き所に上り、あれゝ御らん候へや、あれにむねかとの二けんならふたるは、五人のきんたちの御家かし、ぬぬいの方のつばねこそ、てるての御所にておはします、あれに御うつらせ給へ、もはや某は御いとまとぞ申ける、おくり聞召それゝ商人に引手ものにとらせよ、畏て候と、數の小袖を下さるゝ、後藤よろこび、わが屋をさしてぞ歸りける、それよりおくり殿いぬるにうつらせ給へば、時のはん衆は出あひ、是はととがむれば、是はいつも参るきやく成が、そんなぬかとさしてもものでもなく、いぬるにうつらせ三重給ひけるふしいぬるになれば、てるて立出たいめんし、女ばう達の御しやくにて、御酒もりとぞ聞えける、此人人の御中、ひよくれんりの御ちきり、げに淺からずと三重聞えける、此事横山たちにもれ聞え、五人の子共を近付て、いかに汝ら、いぬるのつばねに始てきやくらいの聲がする、汝らはぞんせぬかとあれば、

いゝや我らもそんなせぬ、人もしらぬとばかりなり、よこ山大きにはらを立、我も侍人も何かし、いつしよとかまへし其内へ、使者をも立すこうきのむこ入、何より以てきつくわいなり、むさしさかみのせいをもよほし、つめばらきらせよとの御誕なり、時にちやくなんゑほしのまねきを地に付、いかにちゝごに申べし、いぬゑのきやくらいは、たしか都のおくりと承る、父は三條高倉の大なこん、母はひたち源氏のながれをくみ、くらま寺の申子、ゐる矢をも中にてとる、神通の者なれば、まづ此度は一門しらぬ由にて、むこに御取有て給れや、いかにちゝごと申ける、よこ山いよゝ腹を立、只今迄は汝らもそんなせぬかと申せしが、扱は姫といつしよと覺たり、みれば中々はらも立と、十のまくらをなけ打に給りけり、三郎がおしとゝめ、是は父うへまたれいのたんきおこり候な、某かたくみいだして候、あのかや原につなき置せ給ふ、鬼かげは何のために候ぞ、かやう成者をまぐさにかわんためぞかし、先明日に成ならば、むこしうとのげんさんとして、使者を立させ給ふべし、おぐり參らんはちてうなり、其時酒をさまゝにも

てなし、三ごんめといふ時に、何か都のきやくらいに、肴を所望との給ふへし、その時おぐり申さんは、弓かまりか包丁か仕らんと申べし、時に某罷出、いやや父子はわかき時より馬をすかれて候、只一ばゝと所望せん、よこ山聞いていしくもなくむ三郎、其儀ならば汝いぬゑに使者に參れ、畏て候と三郎は、いぬいをさしてぞ參ける、いぬいになれば、殿ばらにたいめんし、よしをかやうと申入る、おくり聞召、參まじと思へ共、三郎殿の御出しう着申て候と安うりやうてうなされける、三郎悦び、我屋をさして歸りける、それよりもおくり殿、十人の殿ばらじんじやうに出立せ、よこ山殿へと急れける、よこ山たちに成しかば、大まくつかんてうちあけ、座敷のていを見給ふに、一だん高き所は、我しやうくんと思ひむんずひらりとなをらるゝ、十人の殿ばらも、ゆん手めてをあらそひ、ちとりかげにそなをられける、時によこ山立出、めつらしのおぐりどの、まつむこしうとのげんさんなれば、酒をさまゝゝにそもりながす、はや三ごんめといふ時に、よこ山の御誕、何か都のきやくらいに、さかなを所望との給へば、おく

り聞召、侍のげいならは弓か鞠か包丁か、力わざかはやわざか、はんの上のなくさみか、仕らんと有ければ、時に三郎すゝみ出、いや／＼ち／＼ごはさやうの事はすかれず、若き時よりも馬をすかれ候、爰にふじさんのふもとより出たるあら馬を一疋求め候、さかなに一ばゝ所望と申けり、おくり聞召、馬をさかなとはふしぎやとは思へ共、じたい馬にはすいつ、日本をめぐり蛇になわを付たり共、一ばゝのらんと思召、やすふりやうでうなされ、よこ山殿にいとまこひ、はかまのもゝ立高く取、馬屋をさしてぞ急れける、何れよこ山も馬すきと見えて有、四十二間の馬屋には毛色を揃へつながれたり、馬屋のべつとうを召れ、某がのる馬はあれか是かと宣へば、別當承り、さん候、あれにてなし、是にて候はず、きやくらいの召るゝ御馬は、こなたへと八町のかや野をさしてそ／＼三重いそがるゝ、鬼かけか馬屋のみちと申せしは、去年はうだるしらかふべ、ことしはふだる生かうべは、さんをみだしたごとくなり、殿ばらたちは御らんじて、我君さま、是は馬屋の道にて候はず、人を送る野部と見えて有、御かくごあれとぞ申ける、

おくり聞召、げにまこと奥方は手にあまる侍をば馬草に飼ふと承る、それがしはまぐさにはかはれまじ、心安かれ一馬場のつて見せ申さん、先鬼かけが馬屋のていを見給ふに、あゝらげう／＼しの有様や、山出しならは一千人計にて出しそふ成楠を、四方へ八本どう／＼とよりこませ、まはしらにはくすの木をすきまなく立られたり、人まくさを天井よりいるゝやうにこしらへ、鬼かけを八方八つのくさりにてじつとつなきて見えたりけり、鬼かけ馬屋の別當をみるよりも、又いつもの人まぐさをくるゝよと心得て、まへかきし只ゐなゝいて八方八つのくさをしつととのし、只國土地震のゆるごとく、殿ばら達は御らんじ、こしの刀に手をかけ、いかにや鬼かけ、汝主君おくりを一口成共ぶくするとみるならば、五人しては五万十人して十刀にて、汝かひら首打おとし、返すたちにてよこ山へみたれ入、一門と目釘をかざりと打あふべし、運命つくるものならば、我君に御はら召せ、我々もじかいして、死出の山ちを、主君おぐりと手にてを取てこさんに、何のしさいの有べきぞ、我くちとらん御馬に召れ候へと、きしよくほうたる

心ざし詞いか成てんまやく神も、おもてをむくべきやうぞなき地色ことばをくり聞召おろかやな殿原達、それは人間にむかつてのけなげわざ、ちく生にはかなわぬ迄もせみやうをふくめのるときく、某かせみやうをふくめんに、心安かれと殿はら達をば、しゆべやきのそとへおい出し、その身は壹人貳ばんのかうしによりそふて、せみやうをふくめ給ひけり

せみやうの段

ふしに鬼かけきくかとよ、うしは大日によらいなり、馬はばとうくわんをんの、けしんのものときくからに、地よなる馬と申するは寺もんせんにつなかれて、經念ぶつをきく時は、人こそしらねつねにぶつみやうとのふる、汝は又角かや原につながれて、經ねん佛と聞されば、ちくせうの中の鬼ぞかし、是はたとへにあらね共、昔大國きやらそふこくのさつた王、ふぼけうやうの其ために、たんどくせんにごぼらるゝ、おりしも寒風はげしくして、ゆき高山に降つもあり、とらがゑもつなかりける、とらわうじを見るよりも、ぶくせんととんでかゝる、皇子御らんど、

いかにとら、しばしのいとまとらせよとて、によせちくせうほつたいしんとうしやうぶつと、とき給ふ、とらはほとけに成とかや、其身も成佛とげて有、汝又一馬場のらするものならば、汝か姿もくごうにきさませて、ふじのすそ野に一間四面にこかねのとうをくやうし、ばたうくわんをんといわふてこそはゑさすべし、おにかげいかにと仰ける、もとより鬼かげ名馬のことなれば、おくり殿のひたいに米といふ字のすわり、兩がんにほとけ四たい立給ふを見るよりも、のせんといわぬ計りにて、前ひぎ折てうやまふたは、只人間ものをしらぬなり、おくり此よし御らんどて、是はいかさま鬼かけがのせふけしきと見えてあり、さあらは鬼かけに力のほとをみせんとして、つゝと立よりゑび錠に手をかけ、ゑいやつとねち給へば、鐵金つよしと申せ共、はらりとされてのきにけり、くわんぬき取てかしこにすて、戸びらをひらき、其身は馬の平くひにいだき付、やうもん三べんとなへ給へば、ちつ共子細はなかりけり、八方八つのくさを一つ所に御取有、ゑいやつとねち給へば、是もはらりとされてのく、二すじ取て中をきりゝと

ねぢ合、是をかつしとはませ、やがて馬屋を引出し
すでにのらんとし給ふか、まてしばし、かやうに心
あるむまを、むではのるまじ、ひとほめほめての
らんとて、馬引たて、ほめられたり、のふ御馬候様
や、よき馬のきつさうや、むねは出はつてはりもあ
り、さうのおもかほしもなく、ほうがいあれてう
わくちつゝて下口たれわたつのくびのごとなり、
はなあらしのやうだいは、年々へたるほらの貝を二
つとつてほしあわせ、中よりばたんを出すのごとく
なり、眼は紺に黒して、赤がねのめつきをさし朝日
に向ふがごとくなり、耳はちいそうわけ入て、八ぢ
くの御經を二巻おつ取作り付たるごとくなり、しめ
の髪は山すけか、谷の嵐に一もみもふでふわとなび
いたごとくなり、どうの骨はつくし弓のじやうはり、
つるを恨み一そりそつたるごとくなり、尾は山中の
大瀧かたぎりにたぎつてさつゝと落るがごとくな
り、後のもゝはからのびわを二面追取作りつけたる
ごとくなり、前足のやうだいは、大から竹根引にし
て、有との節をさせごはんの上に作り付たるごとく
なり、しかもけいしのほねあれて、鳥のほねにな

れあひて、せいては下りまひては上り、毛なみほね
あひよめのふし。爪はあつうてつゝたかけれ共、龍の
毛にてちり打はらひ、天晴此馬にうちのり、千里萬
里をかくるとも、何國にかは此馬の、つけうすやう
はなかりけり、あつはれ御馬候とほめ給ひ、御身か
ろけに三重召れけり、馬屋の出し口さつくとかけて
はしとゝとめ、しとゝ留てはさつくとかけ、まる木
ばしをとくゝとのり出し、茅野に出させ給ふか、然
るに此馬つないてより此かた、出たる事のあらざれ
ば、いさみにいさむ有様は、ゑんこうかこすへをつ
たひ、あらたかがとやを破てきじにあふたるごとく
なり、八丁のかや野を欠つ返しつのらせ給へば、十
人の殿はら達、あまりの事の面白さに、ゆんでめて
よりたちわかれ、大こゑ上てぞほめられたり、是は
地扱置よこ山は、いざやおくりかさいごを見んとて、
敷皮もたせ茅野をさしてぞ出らるゝが、是は是はと
計なり、それよりもおくりどの、先ひろにはにのり
こうで、はのりをはしめ給ひけり、太郎あまりの面
白さに、からかみせうしを取出し、是へゝゝとのそ
みけり、乗てみせんといふまゝに、せうしの上のし

めのり、ほねおもならずかみをも破らず、とつくとつくとのおろす、次郎あまりの面白さに、ごばん一めん取出し、是へ／＼と所望する、是も乗てみせんとて、ごはんの上にのり上て、四そくを揃へのり給ふ、三郎あまりの面白さに、のぼりはしごを取出し、しゆでんのやばなにつけ、是へ／＼と所望する、これものつてみせんとて、はしこの上をとつ／＼とのり上て、あなたのやはなこなたのやはな、かけつ返しつゝのり給ふ、がんせきおろし、むちのひしよにて、もとのろくぢにくりおろす、惣じてたづなのひしやうには、さしあいうき舟うらの波、とんぼかへり水車、ひきよくをつくしのらせ給へば、大かう一の鬼かげとは申せ共、まさるおくりの判官に、どうのほねをはさまれ、しらあわはふでぞうやまふたは、只にんげんのわさにてさらになし、それよりもおくり殿、御身かろげにひらりとおり、鬼かけをば櫻の古木につなぎ置、それより座敷へ出給ひ、よこ山一門にたいめんし、かうげんことはにかく計り、のふいかによこ山との、扱々あのやうに口やはらか成馬を、何とて鬼かけと付給ふ、あのやう成馬あらば、此馬

のむこ引手に、五疋も十疋も給れや、ひたちにかへりあさ夕十人の殿はら達に、庭のりさせて見物せんと有ければ、よこ山一門おかしうはなけれ共、にがわらひといふ物に、いちどにどつとぞ笑けり、鬼かけ我をわらふと心得て、櫻のこほくを根引にしてこくうをさして欠出る、よこ山はあきればて、今ははやむこのおくりに手をさぐる所と思ひ、のふいかにおぐりどの、あのむまとめて給れや、御とめなき物ならばむさしさかみ兩國に、人だねは有まいとの給へば、おくり聞召、さやうに手にあまる馬をば、かわぬがほうよと申度は思へ共、それはなにがしか何某にちぢよくをもとふかと思召、心安かれとめ申さんと、居たる所をつゝと立、ひろゑんに立出て、しばつなきのやうもんを、三べんとなへひらり／＼とまねかせ給へは、こくうをかけしおにかけも、ひらりともととり、おくりをうやまふたり、汝ろうせき成との給ひて、御身かろげにひらりと召、もとの馬屋にのりこうで、むかしのごとく八方八つのくさりてしつと、つなぎ置、それよりもおくりは、てるての姫を伴ひて、ひたちに歸らせ給ひなば、末はめてた

かるべきに、又乾のつほねに移らせ給ふは、おくりどの運のすへとそ聞えける、とにもかくにもおくり殿の有さま、きせん上下おしなべて、皆かんせぬものこそなかりけり

第三

さる程によこ山は、三郎を召れ、いかに三郎、都のおくりをまくさにかわんとすれとかなわす、いかゝはせんと仰ける、三郎承り、某又こよひのうちに、よき事をたくみ出して候、先ひろまにほうらいさんをかざり、ほうらい山座敷に、ふたへてうしをからくみ、どくとくすりの酒をつぎ、おくり十一人にどくの酒、我ら一門のむ酒は、くすりのさけをつぎわけて、きのふの馬の御しんろうに御酒一つと申て、使者を立て給ふべし、大こうのおくりでも参らんはぢてうなり、其時某しやくに立、おくり十一人にもるならば、たちも刀もいらすして、やすくとほろぼさん、此義いかにと申ける、よこ山聞て其儀ならは、今度もなんじ使者に参れ、かしこまつて候

と、三郎はいぬいをさしてそ急きける、いぬゐになれば、おくり殿にたい面し、よしをかやうと申入る、おくり聞召、安うりやうでうし給へは、三郎よろこび、我屋をさしてそ歸りけりオクリさる程におくり殿、すでに出んとし給へは、てるての姫はすがり付、といまり給ふべし、それをいかにと申せしに、みづからこよひ一度ならす二どならず、くわしき夢を三度見た、はづかしながらも夢もの語申べし、先一ばんの其夢は、我つまつねく御てうあひなされけるむらしげどうの御弓、天よりわしかまひさがり、三つにけおれば中はくわゑんともえあがる、うらはすならくに沈むなり、又もとはすはうわ野かはらにそとはに立と夢に見る、次の夢もさのごとく、みづからが十二の手はこの其中に、からのかゝみのましますか、母上さま迄六代、今みづからか手にわたり、七代つたわる此かゝみ、みづから身の上に大事のあらん其時は、おもてかくもりうらにしつと、汗をかく、あせの事は扱置ぬ、是もわしがまひさかり、二つにけわれれば、かたわれならくにしづむなり、又かたわれは主は誰共しらね共、うわのがはらに、そと

はかゝみにたつと見た、第三はんのその夢は、わか
つまも殿はら達も、つねのゐしやうを召かへて、白
きしやうぞくを召れ、つゝあしけのこまに打のりて、
北へくゝと出給ふ、みづから夢心に、北はものうき
かたうわのが原へこさあると、跡をしたふて出ける
か、かなしき哉や、天よりくろくもまひさかり、つ
まの姿をみうしなひ、いぬゐのつほねにないて歸る
と夢にみる、ゆめにさへ夢にだに、わかれとなれば
物うきに、もしも此夢あふならば、みづから何と成
へきぞ、とゝまり給へとの給へば、おくり聞召、お
ろかや女の夢見があしきとて、かつべきいくさにま
けふでなし、いとま申てさらばとて、夢ちがひのよ
うもんを、三べんとなへ殿はら達をうちつれて、よ
こ山殿へと急がるゝ、よこ山に成しかば、大まくつ
かんでうちあけ、座敷になをらせ給へば、十人の殿
原達ゆんでめでになをらるゝ、其時よこ山立出、お
くり殿にたいめんし、きのふ馬の御辛勞に、御酒ひ
とつとの給へば、おくり聞召、今日は某はきのみや
精進にて酒はたぬとの給へば、よこ山はあきれば
て、いかゞはせんと思はるゝか、しばらく有てちや

うだいへつゝといり、みのなきほらの貝を取出し、
みぢんはらひてだいにのせ、いかにおくりどの、そ
れ貝呑はむさしさがみ兩國をまいらせん、某も給り
御身もひとつまいれとて、思ひざしにそさゝれける、
おくり聞召、しうとの方よりさす盃に、諸領をそへ
て給るうへは、いづくにこゝろおかるべきと、引う
け三ごんほし給ふ、殿はら達は御らんじて、君のま
いる此うへは、何のしさいの有べきぞ、いざのま
んと、我もくゝとのまれける、何がとくの事なれば、
ゆんでへかつはとふすも有、めてへどうとふすも有、
おくりどのゆんでめてにさんを見だしたごとくな
り、殿はら達の其中に、いけのせうじと申せしは、
おくりとのおとらぬごうの者、君の御まへにかし
こまり、いかに我君さま、いつのむ酒のさわなくて、
只今ほしたる此酒は、身にしみくゝとしみわたる、
是はどくとおほへたり、御かくごあれや、君の御奉
公是までと、是をさいごのことばにて、ついにむな
しく成にけり、まだもつよきはおくりどの、弓手のひ
ざをおし立、たちのつかに手をかけ、ひけうなりと
よ横山、おくり程成弓取を、よせてつめばらはきら

せずして、どくにてころすひけう也、よこ山出よはらきらん、三郎出よさしちがゑんと、心は高砂のおのへの松といさめ共、何がとくの事なれば、天井の大ゆかも、ひとりくるりとまいかゝる、おくりさい

ごのことばには、ひとはうんめいつきぬれば、ちゑのかゝみもかきくもる、又さいかくの花もちる、ぐにん夏のむし、つまゆへとんでひに入、あへなく死をする事と、是をさいごのことばにて、ついにむなしく成にけりことはよこ山立出御らんじて、あつはれ今こそ氣はさんして有、いかに三郎此者共をどうにやせんくわそうにやせん、はかせをよびよせ占よ、かしこまつて候と、やがてはかせを召れける、いかにほかせ、かやうくの者なり、占と有ければ、はかせ承り、しばしかんがへ申やう、さん候おくり壹人はどう、扱十人の者共は主にかゝつてひぼうの死、是はくわそうになさるべし、おくり一人はどう、火そうと占わけしは、おくゝ殿すへはんじやうと聞えける、よこ山聞て、侍共に仰付けられ、やがてかくこそ三重おこなひける、扱其後によこやま思はれけるやうは、人の子をころし、我子をたすけお

くならは、都の聞えもあしかるべしと、おにつぐ兄弟を召、いかに汝ら、夕ざりいぬいに参り、あのとてを引立、さかみ川おりからか入うみに、しづめにかけて参れと、れん中さして入にけり

かたみおくりの段

むざん成かな兄弟は、とある所に立よりて、くとき事こそ哀なれ、只よの中にく、すまじきものは宮つかひ、我ほうこの身ならずば、かゝるうきめによもあわじ、しんたい爰にきわまりて、せひをもさらにわきまへず、思ひばよわき心哉、身をかけわけしおやだにも、思ひきれば切給ふ、ましてや我々たもんなり、思ひきらんは安き事、先ひめ君へ参らんと、扱それよりも兄弟は、いぬいをさして三重急きける、さていぬるにも成しかは、ひやうごのつほねにたいめんし、扱も都のおくりどの、ほうらい山のざしきにて、御はら召れ候なり、扱ち、上の御でうには、夕さりさがみのふちへ、ひめ君さまをしつめにかけて申せよと、おにつく兄弟是迄参りて候なり、此よし上へ申させ給へと、なみだにくれてぞ申ける、つば

ね此よし聞よりも、しはし涙にくれけるか、やう／＼とゝめ、それに御まち候へと、御前さしてを参ける扱御前に成ぬれば、かやう／＼の次第にて、おにつぐ兄弟是迄参り候と、始おわ、かたりける、てるて夢共わきまへず、それはゆめかうつゝかと、きえいる計りになき給ふ、おつるなみたの下よりも、何わがつまおくり殿、ほうらいさんの座敷にて、御はら召れ候とや、さしもみつからか申たる事共を、御せうゐんのなき事よ、ひとはうんめいつきぬれば、ちゑのかゝみもかきくもり、又さいかくの花もちるとは君の事、けさしのゝめのむつことも、みな偽りのかねことは、にしきの床きやらの枕のうつりがも、又さめやらぬ其さきに、はや御さいごとは何事を、あらうらめしのよの中と、もだへこがれてなき給ふ、され共なみたをおしとゝめ、いかにつほね、其兄弟はいづくにぞや、ちかふ参れとの給へば、みすより外へ出給ひ地いかに兄弟、我つまのおくりどの、御はらめされ候とや、姫は夢にもしらぬそや、わらはゆめ程しるならば、つまのおくりにはらきらせ、かへすたちにてじかいをし、しでさんずの大河を、手

にてを取てこさんもの、のふ兄弟とかきくとき、きえ入ばかりなき給ふ、おつる涙をおしとゝめ、いかにつほねふかくなけくは、是三がいのまよひなり、扱兄弟と召れ、しばしのいとまゑさすへし、いまたうきよにある内に、かたみを送り申さんと、十二の手箱のふたをあけ、雪見の窓のおれ竹の、世はさかさまの事なれど、びんのかみとまもりをば、はゝ上さまに参らせよ、扱又からのかゝみをば、ふぢ澤の上人さまに奉れ、ひめがなからんあと迄も、よくとふらわせ給はれと、念比に申へし、そのほかないの女ほうたちにも、品々小袖を下さるゝ、扱又うへにめされし御こそでは、是兄弟にゑさするなり、ねんぶつとなへくれよかし、いかに女ほう達、是かわかれに有けるぞ、姫が顔もみたまへや、御身たちをも見おかんと、たがいにかほを見あわせて、もだへこかれてなきたまふ、時に兄弟見るよりも、こはみれん成女ほう達、姫君の御ためには、ねんぶつ申させ給へとて、しもとを以打はらひ、なく／＼はまちに

出にけるはなさけなふこそ聞えけれ、時に女ほう達ひとつ所にあつまりて、いざや姫君の御さいこ成と

見おかんと、我もくとうちつれて、はまぢをさしてそ三重急きける、さて兄弟は色詞姫きみをろうこしにのせ參らせ、くがに向て大おんあけ、いかに女ほう達、沖にてたいまつふるならは、すはやひめ君の御さいご成と思ひ、念佛申させ給へとて、舟々にかいをよこたへて、さすやさほ、こぐやからろのおとにおとろきて、おきにかもめかはつと立、あのかもめさへちどりさへ、ともをこふかややさしやな、われ又たれをとふへきそ、いかに兄弟わかつまの、さぞやまぢかね給ふへし、はやくさいごを急やと、きえいるばかりになける、時に兄弟承り、爰にてやしづめん、かしこにてはしづめんと、さすがにいまはしづめかねてそいたりける、時におにつぐ申やう、いかに鬼王殿、是はあまりにいたはしき次第なり、ひめ君さまをしづめ申てあればとて、千ねんのよわひかや、又まんごうをたもたんや、いざ兄弟が情にて、御命たすけ申さんと思ふは如何にと申ける、鬼わう聞て、おとたかし、我もさやうに思へ共、汝が心を引かねて、今迄しづめかねてあり、いざやいのちたすけ申さんと、ろうこしをほとく

とをとづれて、いかにひめ君さま、兄弟か情にて御命たすけ奉る、いつくの浦にも吹つけられ、御よがめでたくましまさば、兄弟が其方へすて文壹通たまわれと、いふよりはやくこしのさしぞへするりとぬき、しづめのいしばかりはらりずんと切てうみへたんふとなけいれ、ろうこしをほとある所へつきながし、たいまつばつと振たつれば地くがに有ける女ほう達、すはやひめ君の御さいごと心ゑて、はつとさけびし有様は、是やこのしやくそんの、御にうめつの御時に、十弟みでしてうるいちくるいにいたる迄、佛のわかれをなげきしも、是にはいかでまさるへき、扱それよりも兄弟は、しづめたていにもてなして、わが屋をさしてぞ歸りけり、かの兄弟か情の程、頼もしき共申計りはなかりけり

第四

去ほとにかのろうごし、風にまかせてなかれゆく、ほとなくゆきとせうらへなかれ付、浦の者共是を見て、ふしぎ成もの哉と、立よりてみれど口もなし、

くちがなくはわつてみよとて、ろかいをあげて打わつて見てあれば、中より十五六成ひめ君、何共物はいわずして、涙にくれてゐたりけり、うらのもの共是をみて、此ほどりやうのきかざるは、かれがわざよいぞ打ころせといふまゝに、ろかいをあげてうちころさんとせし所へ、むらきみの太夫きたり、いかにかた／＼あれはけいほの中のかされ人と見えて有、汝らがしるごとく我はいまた子をもたす、やうしにせんわれにくれよと有ければ、うらの者とも是を聞、此事においては叶ふまし、只うちころせとひしめいたり、太夫聞てさなせぞ、やかた／＼我にゑさするものならば、酒をもろふと申ける、浦の者共是を聞さけとだにきゝぬれば、げこも上戸もろかいをすて、太夫のやうしに參らせたり、太夫よろこび名をよりひめと付、おくりつれて我屋に歸りけり、わが屋になればあるじを近付、ていかにうばごせ某は、はまにてやうしをひらふて有けるぞ、萬事はたのむとの給へは、うばはことはの下よりも、もはやりんきことはにもてなし、のふいかに太夫との、それやうしと申せしは、十四五成わつはか山へ行てはたき

きをこり、はまへ下りては太夫のあいろをこすこそはやうしとは申へし、むつらか沖へつれ行、壹貫文にも賣ならは、よきやうしにて有へしと、あいそうすて、そ申ける、太夫聞て扱々御身は子がなければほしいといふ、又やうしをすればうれといふ、御身の様成じやけんのひとつちきりをこめ、つれてまどうへおちんより、某はよりひめと諸國しゆきやうとの給ひて、おもてに出んとし給へは、うば太夫にはなれてかなわじと、たもとにすぎり、いかに太夫との、只今はみづからわかき時のざけうことばで候ぞ、いかによりひめこなたへと、誠にやかにのたまへば、正直成太夫にて、是を誠と思ひ、ばんじはたのむうばごせと、いつものことくつりをたれに、沖の方へ出らるゝ、太夫留主にも成ぬれば、うはは姫君をつく／＼と見て、かれをそのまゝにて置ならば、後にはみづからをおもひかえんはぢてうなり、ひとまづふすべてみんと思ひ、しほやくかまへおひ上、あをき松葉を取くべて、飛ずはねつふすべける、何が姫君、しもつけ日光山の申子にてましませば、せんじゆくわんをんのかげ身にそふて守らせ給へば、さの

みけふくもまします、姥は四つ時よりも八つ時分
までふすべ、さだめて色もくろう成つらんと、かま
よりおひおろして見給へは、白き顔にうすけふりが
たなびき、ひときわすぐれて見えにけり、うばはい
よ／＼腹を立、あさよりもみつからは、むだびのほ
ねをおつたりと、しほやく松のゑだ追取、しね／＼
と打たりけり、いたわしや姫君は、うたる、杖の下
よりも、うき名の立なのたゝぬなの、名取川とよ、
そこにもごらぬみづからを、さのみにうたせ給ふな
と、涙にくれてぞおわします、姥はいよ／＼はらを
立、所せんかやう成ものは、此家には叶はしと、い
づくへ成共うらんと思ふ所へ、人買か一人きたり、
うばよろこひ此ひめを買てゆけとあれば、人かいひ
とめ見て、貳貫にかわんと申けり、うば聞てあたひ
がなくはたいもゑさせんと思ひしに、貳くわんりや
うそくひろいものと打うつて、うば／＼さらぬてい
ゐたりけり、然所へ太夫沖よりも、釣をたれて歸り
より、ひめを尋給へどまします、うはを近付て、
いかにうばごせ、よりひめはいつくへ行て有けるぞ、
姥はとうざにはつたとこまり、さればより姫は、御

身の跡をしたふてはまぢにゆきて有けるか、定て御
身の舟に有らんと思ひしに、扱は人かどはしにかと
はされて有けるか、このとしに成迄、思ひも戀もな
きうばに、おもひをかくるよりひめと、先そら涙を
なかしける、太夫聞ていかに姥御、身がなげく涙は
よりひめを壹貫文か二くわんもんうちにうち賣て、よろ
こひ涙とみえて有、御身に出よとはそれかしが欲、
ざいほう御身に參らすると、諸こくしゆぎやうに出
たるを、ほめぬ人こそ三重なかりけり、是は扱置、ひ
め君はあたいがまさばうれやとて、かなたこなたと
うる程に、後にはみの、國おふはかの宿よろつ屋の
長のみうちに代つもつて二十五貫文に買とむるは、
しよしの哀れと聞えけり、長はよろこび姫君を近つ
けて、汝か名をは何と申と問せ給へは、ひめ君は聞
召、扱みづからはあなたへはしろもの、こなたへも
あきなひものと定る名とては候はず、よき名を付て
つかわされ候へ長殿との給へば、てう此よし聞召、
其儀にて有ならは、國名を付ん、國をなのれと有け
れは、姫君は聞召、ひたちの者と計りなり、長此由
を聞よりも、其儀にて有ならは、けふよりしては汝

か名をばひたちこはぎと付るなり、明日よりもいろよき小袖をきかへ、おもてのこうしに立出て、のぼり下りの旅人の袖を引、長ふうふをはごくむへし、こはぎいかにと有ければ、てゐて此よし聞召、もはやみづからはなかれの女郎と成たよな、今ながれを立る物ならば、ぬさのかけにおはします、つまのおくりどのさぞやうらみにおぼすらん、是に付てもあらこひしのわがつまと、きえいる計りに泣給ふ、おつる泪ともろ共に、しよせんたゞ偽りを申、ながれのみちはたてましものと思召、いかにてう殿扱みづからはみめかたちよきとてあたいをたかくかわせさぶらふが、みづからには内にくるしき病ふ有、左様のみちを立れば、忽やまふあらわるゝ、何方へもうらせ給ひてなかれのみちはゆるさせ給へ、長殿いかにとの給へはことばてう此よし聞召、此女はおもふおつとはなれ、ていぢよのみちを立るとみえてあり、おどして立させばやと思ひ、其儀にて有ならば、是よりもさきへうればゑぞかさどへうるべし、ゑぞか嶋と申せしは、うをさめのゑにかふなり、又さどか嶋と申せしは、手あしの筋をたち切、日に手一合のあわ

の飯をしよくさせ、あわの鳥を追するが、此所にうれうかはやゝ申せと有ければ、ひめ君は聞し召、それはせんせのゐんくわなり、ゑぞへ成共さどへ成ともうらせ給へ、ながれのみちはゆるさせ給へ長とのいかにと申さるゝ、こは長は此よし聞よりも、しよせんかやう成ものにはあたはぬ事を申付けは、ながれを立ると聞て有、其儀にて有ならば、某か下のみづしを十六人にていとなむを、汝壹人にていとなむべし、上るむまも五十疋、下るぞうだも五十疋、あわせて百疋の馬にぬかわらかい、百人のながれの女のおびんに參れ、七所のかまのわらびをきえぬやうにたき、そのあいにて七つのををうむべし、それをしまふて有ならば、是より十八町あな成し、みづを七おけくみ、長ふうふをはごくめと、しよしよくの道具をゑさせ、れん中さして入給ふ

しみづのだん

いたわしやてゐてのひめげしよくの道具をうけ取て、十八町あな成し、みづをくみに出給ふ、心のうちこそ哀なれ、やうゝしみつになれば、おけを

おろしつゝさんふとくんではおけにいれ、くんだるしみづでかけをみれば、南無三方くやつれはてたよ、わか地姿、つまにはなれて此かたは、前だれたすきにひまもなく、髪にくしのはいれざれば、おどろをみだいたごとくなり、是もたれゆへつまのため、思へばうらみとさらに思はれず、さがみの方へ打向ひ、念佛申つまのため、又申ねんぶつは、殿はら達へとゑかうして、くんだるしみづをかたにかけ、てうとのさしてを参りける、てう此よしを見るよりも、又りやうそくを取出し、いかにこはぎ、此れうそくにて世の中の市に出、とうなんせいなんうごもりかごもりかいろういちじ、扱なみのをつれおのこ、七いろ買て歸るべし、是七いろのかいものか、壹いろちがふ物ならは、なかれを立ると思ふへしと、長はおくにそ入にける、いたわしやてるての姫、とある所へたちよりて、くどきことこそあわれ成、さがみに有しその時は、百首の歌をつらねつゝ、おちやめのとにいたるまで、から名を付てつかひしに、かく成はてゝ候へば、ちゑのかゝみもかきくもり、もはやからなをわすれたり、いやまてしばしわが心、

是ほとやすき事なしと、てう殿さしてを歸りける、いかに長殿、是御らんせよ、先とうなんとは、はるのはしめのつくくし、せいなんとはせりの事、うどもりとは山のいも、かごもりとはところなり、かはろうとはゑびの事、いちしとかいてひともしよ、さてなみのをつれおのこ、ことのほらにて御ざなきか、是七いろの買物かひといろちがふて候共、なかれをゆるさせ給へとて、涙なからに仰ける、こは長此よしをみるよりも、何さま此女はゆへ有者と覺たり、下十六人のみつしの下女、一度にさつとおいおろし、情をかけてつかわれける、てるてのひめの御しうたん、あわれなり共中々、申はかりはなかりけり

第五

さるほどにおくり十一人の人々は、ゑんま王くうの御前に出らるゝ、わうぐう御らんして、日ふんの帳を取出し、常張のかゝみにうつし見給ふに、おくりしやばにて善といへは遠のき、あくにんなれはしゆらどうへおとすべし、十人はしやばへもどり給へと

仰ける、殿原たちは聞召、我々しやばへもどりても
せんなし、主君はしやばにかたきの候故、我々にめ
しかへおくり壹人しやばにもとし給はれと、皆一同
に申さるゝ、王くうは聞召、扱もかた／＼はめいど
こうせん迄、主にちう有人々哉、其儀ならば十一人
なからもどすへし、いかにみるめどうし、しやばに
しがいが有かみて參れ、畏て候と御前を立てほこさ
きにあがり、三千せかいをひと目にみわたし、わう
ぐうに取てかへし、さん候十一人はくわそくに仕り
候へば、からだは御座なく候と申、王ぐうは聞し召、
其儀ならばそれがしわき立に頼んと、十王十たいと
いわい、其後おくり殿手の内に、此もりをくまのゝ
本ぐうのゆのみねにつけてたべ、こなたよりくすりの
の湯を出すへし、藤澤の上人へ參るわうぐうはんと
あそばし、にんげん生ずるとうたせ給へば、うわの
が原にせうがかわる、是は扱置、ふち澤の上人は、
うわのがはらにとびからすかわらふ比立よりて見給
ふに、古のおくりのつか二つにわれ、中よりがき壹
人顯たり、立よつて物とひ給へど物いわず、手のう
らひらいて見給へば、何々此ものをくまのゝ本ぐう

ゆのみねへつけてたべ、こなたよりくすりの湯を出
すへし、藤澤の上人え參る王ぐうはんとかいて有、
扱はいにしへのおくりにうたがふ所更になし、かさ
ねてよこ山へ聞えなば、又ころさんはぢでうなり、ひ
そかにてらへつれて參れとチャクリ御寺をさして歸ら
るゝ、てらにもなれば、名をはがきあみだぶつと札
を付、つちの車をつくらせて、此くるまを引ものは、
ひとひきひけば千ぞうくやう萬ぞうくやうに成へし
と、むねに木札をかきそへて、いかにこぼうし、車
のたんな付ん迄、引て參れとの御諚なり、畏候と道行
「去ほとに、こぼうしは、車の手なわに取付て、藤澤
を引出す、大いそ小いそ引過て、小田原宿に車つく、
ゆもとのぢそをふしおがみあけてはこねをいづの
國、三島の明神ふしおがみ、原よし原を引する、
折ふし富士のねかたにくるまつく地ふし參りの同者
達、いざや車をひかんとて、二親のために引も有、
つま子のためとひくも有、ふじのねかたを引出し、
ながれはげしきふし川や、かんはらゆいの宿過て、
みほの松原せいけんじ、ふちうのしゆくをはるゝ
と、けあげてわたるまりこがわ、うつ山へのつた

のほそみちを、ゑいさらゑいとひくほどに、一夜とめぬかおかべの宿、まつにからまる藤枝や、四方にうみはなけれ共、島田の宿をはや過る、一夜にかわる大井川、かみに祈りをかなやのしゆく、さよの中山はるくくと、につ坂こゑてかけ川や、さきをいづくとうくみ、三川にかけし八はしを、ゑいさらゑいとひくほどに、おわりの國に入ぬれは、あつたの明神ふしおがみ、今ははや、みの、國大はかのしゆく、長の門ぐわいに、三日車かとまりけり、是は扱置、ひたちこはぎは、がきあみくるまを御らんして、むねの木札を見てあれば、萬ぞうくやうとかいて有、哀れみづから三日のひまの有ならば、一日はつまの御ため、また一日は殿原たちの御ために、車を引てまいらせたや、さりながらつまの事といふならば、隙とては給はらじ、いまだうきよにおわします、二しんのためと偽りて、申請んと思召、てうどのさしてそ歸らるゝ、長の御前に成しかば、いかに長どの、此もんぐわいにかきあみ車のましますが、むねの木ふだをみてあれば、萬ぞうくやうと書て有、みづからは父におくれて七ねん、母にはなれて三年

なり、父母の御ために車を引てまいらせたや、三日のひまを給はれと、泪をなかにして申さるゝ、長此よしを聞よりも、おろかやこはぎ、いま成となかを立るものならば、三日は扱置十日のひまもゑさせんと有ければ、てるて此よし聞召、こはなさけなき御でう哉、物を語らは聞召、三日のひまだに給はらば、長とのふうふの身の上に、しせん大事あらん時、みづから身かわりに立まいらせん、哀れと思し召ならば、三日のひまを給れと、またさめくと泣給ふ、長は此よし聞召、扱もやさしきこはぎ哉、其儀にて有ならば、三日引たる車みち、二日にはもどるべし、上下五日のひまをとらするぞ、頓てかへれこはぎとて、長者はおくにそ入にける、てるてあまりのうれしさに、其まゝおもてに走出、車を引んとし給ふがいやまてしはし我心、此まゝくるまをひくならば、町屋宿やせきくで、あだな立んはぢてうなり、こころは物にくるわねど、姿をきやうぢよになせやとて、たびのしやうぞく

車のだんてるてのひめみちゆき

なされける、いたわしやてるてのひめ、長にゑほし
を申うけ、かたをむすんで下にさけ、すそをむすん
でかたにかけ、さゝのはにしで切かけてふりかたげ、
もんくわいさして出給ふ、めづなおづなに取付て、ゑ
いさらゑいとひくほどに、てうのもんぐわいはや過
て、宿やまちやのせきくを、ひけよく此車、お
んどを取てひかせうぞ、ひめが涙はたるいのしゆく、
ふわのせきやの板ひさし、月もれとてやまばらなる、
みのとあふみのさかいなる、ねものがたりやさめが
井の、あらし小がらしばんばふけとて袖さむや、ゑ
ち川わたれはちとりたつ、おのしゆくとや、すり
ばりとうけのほそみちを、ゑいさらゑいとひくほど
に、みよはめでたきむさのしゆく、かゝみの山に付
たよな、やつれはてたるわか姿、おもかけうつすか
かみ山、雨はふらねどもり山や、がきあみかむねの
木ふたに、つゆはうかねとくさつのしゆく、山田下
田を見わたせば、さもいつくしきそうとめの、さな
いおつとり田歌をこそはうたひけるさうとめぶし「田をうゑ
いざうとめ、うゑいさうとめ、さつきののふを
はやむるは、かんのふの鳥ほとゝぎす、山からこか

ら四十から、此とりたにもさわたれは、さつきのの
ふはさかなり、こぐさわかくさなわしろを、うち
ながめゆくほとに、なをも思ひはせたのからはしを、
とんとろくとうちわたり、石山寺かやかねかすか
にみゝにふれけり、あわつまつもとはや過て、あれ
に見えしはからさきの、しがのうらはに船とめて、
あの山みさいこの山みさい、からろのおとにおとろ
きて、おきにかもめがばつとたつ、いたはしやてる
ては、みのを立上げふははや、三日と申には、のほ
り大津せき寺や、玉やがかどに車つく、べつにやど
をとるべきか、いやましてしばし我心、かきあみにそ
ふもこよひ一夜の事なれば、ともに夜をあかさんと、
車わたちに立よりて、よもすからくないて其よを
あかさるゝ、扱かきあみが耳がきこゆる物ならば、
めいどのことかきゝたやな、目だにみゆるものなら
ば、ひと筆かきてみせう物、みゝはきこゑすめはみ
えず、思ふにかいなきがきあみと、ないて其よをあ
かさるゝかのおんじやうしのかねのこゑ、月も數そ
ひて、百八ばんのふの夢をさますや法のこゑもしづ
かにて、玉屋殿に参りつゝ、すゝりとふでと取給ひ、

はなかりける

第六

がきあみがむねの本札にそへかきこそはなされける、此たびがきあみが車のたんなおく共、中せんどうはみの、國大はかのしゆく萬屋てうが下のみづしにひたちこはぎと申せしは、上下五日のだんな也、くまの本ぐうのゆに入て、しゆもくあきらかにへいゆふつかまつり、かならずげかうに尋候へと、ことねんころにかきとめ、筆をかしこにからとすて、よこ手を一つてうど打、あらふしきやかきあみと、ふうふのきゑんなさね共、いづぞやさがみにてつまのおくりにはなれしも、いまかきあみにはなれたも、なになるきゑんつきずして、いづれの思ひはおなし事、あわれ身かな二つやな、壹つはみのへかへりつく、又ひとつはがきあみと、もろ共にくまのほんくうのゆに入て、やまふへいゆふつかまつりなれのはてかなみたいよな、心は二つ身はひとつ思にかいなきがきあみと、みの、國に歸りしか、あまりの事につれなさに、また立かへりするくと、はしりよりかのがきあみに取付て、是かわかれかなしやと、なくくそこを立のきて、みの、國へと歸らるゝ、てるてのひめの其有さま、あわれ成共中々申はかり

さるほとにがきあみを、車のだんなおゝくして、大津のうらを引出しひのおかとうけをはるくと、都の町を引過て、山ざきせんけんたから寺、はやつの國に入ぬれば、てんまのもりをうちなかめ、はや天わうしをふしおかみ、さかいのうらをはるくと、いそぐ心のほともなく、ごんけん坂にそ著にける、扱是よりもがきあみを、車にては叶はしと、がきあみかごに入、かわりくにおひ給ひ、ほどなくゆつぽに成しかは、へいゆうなれやかきあみと、皆々家ぢに歸りけり、はやゆつぽにも成しかは、忝もごんけんは、あらはれさせ給ひつゝ、おくりかいしやくし給ふに、一七日いらせ給へば、みゝも聞ゆる目もみゆる、二七日はひやうほうはやわぎ、三七日と申には、もとのおくりとたんせうならせ給ひけり、おくりゆめのさめたる心ちして、是はまさしく熊野三つの御山と覺えたり、あら有かたやとふしおかむ所

に、又ごんげんは山かつと身をへんし、こんごう杖を二本御切有、いかにそれ成きやくそう、こんがうつゑをめさぬかとあればおくり聞召、某此かいどうをがきあみとよばれしも、なんぼうむねんに思しに、こんごうつゑかへとは、我をてうぶくするかとはつたとにらんでの給へは、其時にごんげんは、いかにきやくそう、此つゑになんほうゆらいのましますなり、一本はおとなし川にながすれば、しゝての後めいどにおもむく時に、ぐせいの船とうかふ也、又壹本つきふもとに下向ましますば、侍ならば所りやうをえるなんほうめて度此つゑ也、あたひがなくはゑさせんと、かしこになげすてごんげんは、けすか如くにうせにけり、おくり御らんじて、扱は只今のはごんげんにてましますかと、御跡三度ふしおがみ、教のごとく一ほんは、おとなし川になかし置、扱壹本つきふもとに下向ましますが、是よりすぐにみの國へとは思へ共、一まづ父母の御じゆめうを、おがまばやと思召、都をさしてぞ三重上らるゝ、都になれば三條高倉御所に行、もんぐわいに立よりて、くま野へ通るに山ふしに時れうたべと乞給ふ、おりふ

しおぐりとのはうへは、こん日はおくりがめいにちになれば、あのきやくそうを召、時れうを參らせよ、承候とおもてに出ていかにきやくそう、時まいらせんこなたへと、御前ちかくそ召れる、母うへは御らんじて、いかにそれ成きやくそうは、くにはいづくにましますぞ、おくり取あへす、ひたちの者とばかりなり、はうへは聞召、ひたちときけばふきくる風もなつかしや、我子のおくりもひとせ、ひたちの國にるにんと成て有し時、さがみのくによこ山とやらんへ、がうぎのむこ入し、どくしゆにてもりころされし由をかぜのたよりに承、ひたちの國のきやくそうにてましますば、おくりがさいごのていを御そんし有へし、かたらせ給へきやくそうと、まづさめくとそなき給ふ、おくり聞召、つゝむにいろのますふせい、今は何をかつゝみ申へき、某はいにしへのおくりにて候、めいどよりよみかへりし有さまを、いちゝにの給へはふし母はゆめ共わきまへす、おくりとのにすがり付、是はくゝと御よろこびはかぎりなし、かゝるめでたき事を、かねいゑとのに申さんと、やがておくに入かねいゑとのに近付

て、かやう／＼との給へば、かね家大きにおどろき、おろかやみたひ、しゝたるものゝ何とてかへり申へし、それは御身のあけくれおくりをこひしとなげくにより、たばかりてやきたるらん、某たいめんせんとの給ひて、ざしきへ立出きやくそを、はるかばつぎにめされ、いかにきやくそう、御身はわが子のおくりとの給ふ、我子のおくりは八わた山にておしゑしひやうほうはやわざあり、此矢をめされ候へや、御取なきものならば、きやく僧の命をとらんと仰ける、其時おくり眼をふさぎ南無正八まん大ほさつ、いにしへのはやわざを只今あらわしてたまわれと、まなこをふさきくわんねんしておはします、其時かねいゑよつひきひやうどはなす、一矢をゆんで、二の矢をめて、三の矢けわしくきたりければ、こんがう杖にてはらいおとし、我いにしへのおくりなり、かんどうゆるさせ給へとて、さしうつふひておわします、かねいゑ夢の心ちにて、御よろこびはかぎりなし、かゝるめで度おりからを、さあらば御かどへそうもん申さんとおくりどのゝしやうそくを改め、だいをさしてそ三重あからるゝ、みかどになれば、

かねいゑはさんだいし、はしめおわりをそうもん有、みかどゑいらんまし／＼て、しゝたる者の歸る事、ためしすくなき次第也、ほんれうなればとて、ひたちの國にするかのくにをあいそへて下されける、おくりかたじけなしとて、三度てうたいなされ、おなしくはみのゝくにゝあいかへて給はれとそうもん有、りんけんはあせのことし、みのゝ國は馬のかいりやうにと重て御りんし下されける、御まへを罷立、やかたへ歸らせ給ひ、父母にいとま乞供人あまた引ぐして、みのゝ國へと三重急かるゝ、みのにもなれは、大はかの宿よろづ屋てうがもとにいらせ給ふ、てうはよろこひあまたのなかれの女を御しやくにこそ出しけり、おくり御らんじて、いかにてう、なかれの女は何かせん、汝か下のみづしに、ひたちこはぎとて有ときく、そのものをしやくにいだせ、杓に出さぬものならば、長ふうふが命をとらんと仰ける、てうは大きにおどろき、ひたちこはぎに近付て、いかにこはぎ、汝はくわほうのものぞかし、御身がみめよき事を、都の國主の聞召、しやくに出よと有けるぞこそでをきかゑはや／＼出よと有しかば、てる

て此よし聞召、おろかの長の御誼かな、かやうのしやくに出ましたためにこそ、十六人の水仕をば、みづから壹人にていとなみ申候へば、此事においては御めんなされ候へやと、さしうつぶいてぞおわしける、てうは大きにはらを立、うれしき事をもはやわすれ給ふかや、いづぞや此もんくわいにがきあみ車の有し時、三日のひまと申せしを、かなふまじといひければ、なんし某ふうふの身のうへに、しせん大事ある時は、身がわりに立とは申さんか、なんちしやくに出ねば、某ふうふがめいがなきぞ、はやく出よとの給ひて、れん中さしてそ入給ふ

てるててうしのだん

こはきどうりにつめられて、たゞともかくもとの給ひて、てうし取もちそれよりも、なくくさしきへ出給ひ、ひとまのせうじのかけよりも、都のこくしゆを御らんじて、扱もふしきや此君は、我かつまのおもかげに、よくもにさせ給ふよな、是につけてもわがつまは、くさのかけにみづからを、さそやにくませ給ふべし、さてもせひなきよの中と、なくく

座敷へ出給ふ、てうしに手をかけおわします、こはおくり御らんじ、御身はひたちこはぎといふ人か、我は都のものの成が、なさけをかけてまいらせん、扱又御身はいづくの人成ぞ、せんぞをかたり給ふへし、いかにく仰ける、こはぎ此よし聞し召、おしうの仰おもければ、御しやくにこそはまいりたり、ざしぎさんげにまいらずと、座敷をたゝんと有しを、おくりつゝいてたもとを取、おふあやまり申たり、人のせんそをきく時は、わがいにしへをかたるとや、さだめて見わすれ給ふべし、いせん此かいだうをがきあみ車といわれし時、御身なさけのくるま三日ひいて給りのぼり、大津はせき寺や玉屋かかどにひきつけられしむねの本札は是なりと、やがてざしきへいださるゝ地こはぎつくく御らんじて、扱もめてたき此君や、是につけてもわかつまはしゆらだうにおち給ふか、またがきだうにましますか、あいどの人ときくなれば、みづからせんぞかたりつゝ、つまのありかを尋んと、はづかしながらみづからは、さがみのくによこ山太郎がおとのひめ、てるてのひめとなのりもあへぬに、おぐりどの扱御身はてるてか

や、われこそいにしへのおくり成はとの給へば、て
るてゆめともわきまへず、扱は君にてましますかと、
おもはずしらすいだき付、こゑをあけてぞなき給ふ、
おつるなみたの下よりも、なさけなきはちゝごさま、
みづからをさがみのふちへしづめ申せとて、おにつ
く兄弟に仰付られ、すでにこうよとみえし時、かの
兄弟かなさけにて、いのちたすかりかなたこなたの
手にわたり、今此てうにかいとられ、なかれを立ぬ
ものゆへに、下のみづしをつかまつる、是も君ゆへ
なればうらみとさらに思はぬなり、のふわかつまと
かきくどき、もたへこがれてなき給ふ、おくり聞召、
それ／＼長めせ、かしこまつて御まへに出にける、
おくり御らんじて、いかに長なんし人をつかへばと
て、かやうにむごきつかふほうやある、それはから
へと仰ける、てるてやがておしとゝめ、あのてうが
みづからを、かい取てあればこそ、ふたゝび君にあ
ふてあれ、長が命みづからに、御めんなされ候へと
ことはをつくし仰ける、おくり聞し召、其儀にてあ
るならば、今よりして此ところの庄屋かしらになり、
かすのほうびくだされける、長有かたし／＼と、や

がて御前を罷立、さてそのゝちにおくりどの、よこ
山せめんと仰ける、これもてるておしとゝめ、むか
しがいまにいたる迄、子おやに弓をひくためし候は
す、なに事も三郎とのゝしわざなり、それ／＼とや
かてさがみに使をたて、三郎を御前に引出す、おく
り御らんじて、みれは中々はらも立、それはからへ
と仰ける、かしこまつてやがてかくこそおこないけ
れ、扱そのゝちに、おくりどのてるてのひめをと
なひて、都にかへらせ給ひつゝ、ふたゝひゑいくわ
にさかゑ給ふせんしうばんせいめでたし共、中々申
はかりはなかりけり

をぐりの判官終

隅田川

山本土佐掾正本

第一

夫身を觀すれば、岸のひたひに根をはなれたる草、命を論すれば江の邊につながざる船、のりえて彼岸にいたらん事をねがへ、爰に堀川院の御宇かとよ、都北白河に、吉田の少將是定とて^{クロシ}世上に其名、かくれなし、地内には五かいをたもち外には神祇をもつぱらとし、何に付てもくらからず、御子二人おはします、嫡男梅若九十二歳、次男松若九十歳にて、御器量けだくましませば、父母のてうあいかぎりなし、然るに是定ばだいゑんにおもむき給ひ、ある時北の方に宣ふは、うゐむぢやうをくわんするに、朝がほの露いなづまのかげ、くらきやみぢにまよはんも、さやけき道に至らんも、御身と我が心から、いざや二人の子共の内、一人は出家になし、なからんあとをもとればやと言へば北の方聞召、こは有がたきおぼし立、わらはもさこそは存じ候と、いさませ給へば少將殿なゝめならず思召、詞しからば梅

若丸は惣領なれば、吉田の家をつがすべし、弟松若はをさなけれ共、知學の器量をなはれりと、やがて松若殿をお前にめされ、おことを出家せせんため、えいざんにのぼすぞかし、諸教諸論に身をゆだね、世上にほまれをとられよと、いと念比に仰られ、御家臣山田三郎を、御かいしやくにつけ給ひ、吉日をゑらばれて、ひえいざんへと三重のぼせらる、去程に、松若丸東谷の妙法院日行あじやりの御弟子と成、もとよりこんそうめいにて、一と聞ては萬をさと、内外のさたくらからねば、必定大師のけゑんと、うやまはざるはなかりけり、あまり諸人のそうきやうに、をさなけれ共がまんゑんの有けるにや、いづく共なく山伏一人來り、さぞや晝夜の學文につかれさせ給ふらめ、いざ／＼我等が住家へともなひ申なぐさめんと、いふよりはやくすがたを引かへ、こくうにつかんで上りけり、各驚きこはいかにかへせもどせとさはげ共、もはやゆくゑはなくならで、せんかたもなくゐたりけり、地色日行十方にくれながら、こはいかゝせんと宣へば、山田三郎承り、はてせひもなき次第なれば、先某は都に歸り、便なきながら

是定に、かくとゑらせ申さんと、北白河にぞ三重歸りける、其折節に地色少將殿風の心地におはせしが、此四五日は重らせ給へば、北の方をはじめ梅若丸、御ゑつけん栗津六郎としかね、晝夜おそばをはなれず、さま／＼あつかひ奉る所へ、山田三郎參上し、右のあらまし申もあへぬに、何松若は天狗にとられ、行方ゑれず成しとや、こはそもいかにとあきればて、なげかせ給ふぞ道理なる、地色御いたはしや定殿、御病苦おもき其上に、御きもつぶされたる故にや、たちまち五たいすくみつゝ、御いきさへもたえ／＼にて、名殘おしげに北の方、梅若君を打ながめ、つゐにはかなく成り給ふ、各ゑがいにいただきつき、是は何たるいんぐわぞや、ゆめかうつゝかまぼろしかと、こゑもおしますなき給ふ、地色涙のひまより北の方、ア、さためなや此殿に、みの、國野上の宿にてなれそめしより此かたは、をしかのつゝつかのまも、はなれもやらぬ身なりしに、けふをかざりと成けるかや、ちよもといはふ松若は、いづ地共なくとらはるゝ、いきてかいなき我身やと、りうていこがれてなき給ふ、梅若君を初とし、少將殿の御舍弟、

松井源吾さだかげ、御家頼下部に至る迄、うれひにゑづみゐたりけり、されどもかなはぬ道なれば、御さうそうの用意有、よきにとぶらい給ひける、さだめなかりし三重夢の世を、それと見こりぬあさましや、少將殿の御舍弟松井の源五定景は、どんよくぶだうの男故、もつく／＼とゑあんして、ある時山田三郎を、我屋にまねき、詞内々御身を頼み度事あれ共、とやかくと打過しが、なにとたのまれて給はらんやとあれば、安近聞て、こは今めかしき御仰、何事にもあれゐへん仕らじと申けり、ヲ、祝着／＼、其一言からはつゝまずあかさん、我吉田の家の末子とはいひながら、甥に惣領職をつがせん事、近比無心に思ふなれば、いざ梅若をなき物にし、吉田の家督を我つが、此事同心においては、おんゑやう望にまかせんと、いへば安近につことわらひ、思召の段尤ゑごく仕る、御末子とてもお主筋、お主にお主かはらねば、ともかくもにて候去ながら、詞栗津六郎が心底はかりがたし、ことさらかれは仁義だてをいふものなれば、ふかく御思案と申せば、ヲ、思案は別になし、是へよびよせ頼まんに、とかうゐぎにお

よぶならば、そくさに討てすつべきに、何の子細か有べきぞ、先々御身は歸られよと、扱侍一人ちかづけて、調汝としかぬが方にゆき、少し内用の事有と同道致し参るべし、畏て候と粟津が方へ急ぎつゝ、使口上のべければ、何事やらん覺束なし、さあらば参り申さんと、使と打連來りけり、定景立出能こそ能こそ來られし、調此比は法事のいとなみ彼是御苦勞に思はれん、扱只今よび請る段、我思ふ子細有て、山田三郎にも内談せしかば、成程同心致せしが、何と御身も同心して給はらんやとあればとしかね聞て、様子をも承はらでお願いはいかなれ共、安近お請と有からはともかくもと申し、チ、過分／＼ゑてとしかね、御身は少將相果られても、吉田の家を眞實大切に思はるゝか、侍のきよごんは有まじけれ共、つゝまずあかされよとあれば、是は近比新敷仰哉、我君逝去しますとて、いかでおろかに存すべき、大切のあまりにこそ、朝にはきりをはらひ、夕にはとりをきゝ、諸事に心をくばり候、但をろかなりと思召も候哉、調いや／＼にてはなし、とかく吉田の家をせつなく思はるゝと見ての談合ぞ、ゑら

るゝ通り梅若が母は、みのゝ國野上の宿にて、賤敷遊女なりしを、兄少將さいあいす、其血をわけし梅若なれば、をさなければ共うそをいひ、心賤敷くみれんのふるまひ、成人せば何事をかし出さん、當家のはめつぢやうなれば、ゑよせんかれを討てすて、つゝがなく某が家をつがん思案、何と同心あらんやといへばとしかねけうさめ、暫うつぶさゐたりしが、さはがぬ躰にて、調仰をもだすははかりなれ共、母はいか程つたなくても、胎内はかり物とて、父の筋こそ用ゆなれ、まだいはけなき御心に、何のゑやべつかましますさん、いふても當家の御嫡孫、御おけんをくはへられ、もり立させ給ひなば、草葉のかげにて我君も、いくばく悦び給はんと、涙をながし申けり、定景面色かはりうでをまくり、調ム、扱はこのこと同心せぬ躰と見えたり、弓矢八幡かくいひ出すからは、同心してもさするせいでもさする、サア、とかうの返事はやくきかんといへば、としかねくつくつとわらひ、あらこはや、いやといはゝ斬給はん所存よな、チ、サくどい／＼、其座を一寸もにじらせもせぬはといふ、ハアづないりきみなれ共横車はおされ

ぬもの、おぢの身として甥を討、其跡をとらんと云、犬にをとりし談合に、先此としかねはえのるまじ、誠のせたくばサア、我首斬てのせよやと、大だちひらりとぬきければ、詞は主のはぢをもゑらず、わつとわなゝきにげいるを、ゑやをくびやう者、かへせくと四五間餘り、追懸しが、いや／＼龍にもつまづき有、若あなどつてけがしてはと、ひとりつぶやき太刀をさし、やかたをさして立歸る、けなげにも又頼もしき、定景非義をかへりみず、又安近を召よせて、ゑよせんこよひ夜討にし、本望をとぐべきに、用意せよやと云まゝに、上を下へと三重返しけり、去程に、栗津六郎としかねは、急ぎみたちに立歸、定景の惡逆初終を申上れば、北の方も若君も、こはそもいか成事やらんと、あきれはてさせ給ひけり、としかね重て、仁義不道の惡人なれば、夜討にやよせ申さん、御親子共にいづかたへも、御ゑのびと申ければ、梅若聞もあへず、こはふかくなりとしかね、たとひ敵がよすればとて、せんをも見分すし、落行法の有べきか、かなはぬ節こそ落もせめ、只々用意と宣へば、としかね涙をはらくとながし、かくおとなし

き御詞、君御存生にて聞召さば、さぞや悦びましきさん、さあらば母上ばかり御落まします、幸ひ西坂本に某存の者の候へばと、石田、藤太とてかひ／＼敷下部の者、御供に付申急ぎおとしそれよりも、御家人五十餘人右のあらまし語りきけ、軍のゑたくする所へ、あんにたがはず定景、洛中のあぶれ者、百騎ばかりをかたらひて、北白河にどつとよせ、ときこのゑをぞ上にける、本より期せし事なれば、としかねやぐらにあがり、調定て是へよせたるは、松井、源五定景ならん、おのれがやうなる人ちくるいに、いひきかするはむやくなれ共、數年のよしみゆへなるぞ、耳あかを取てよつくきけ、夫天地萬物一つとし正道にもれず、いはんや五常をむねとする人間においてをや、親兄の禮を守らざるはきちく木石にをとりたり、此上ながらも先非をくひ、引きゑりぞけとぞよばはつたる、時に山田、三郎かけ出、何かくいふはとしかねか、いらざる汝が賢人だて、いやはやかたはらいだし、かうしも時に栗津六郎、いくさにまけてかうさんせん、よりあしもとのあかき時、とうとう出て命をつけとぞのゝゑつたる、としかね聞も

きり、屋のむねつたひておちゆきける、よせてはいくさにうちかちしと、かちどきどつと作りつゝ、いさみにいさんでひいたりける、彼定景が悪逆を、老若男女押なべ、皆にくまぬ人こそなかりけれ

第二

あへず、やれ山田のふるだぬきめ、詞忝くも三代相傳のお主のみたちにむかひ、法にもれたるふるまひ、いで天ばつをあたへんと、いふよりはやくとんでをり、はゑりかゝつてむづとくみ、ちつ共はたらかせずとつてをさへ、首ふつゝとかきおとし、立あがらんとする所へ、田原九郎となのり、ぬきかざしかゝりしを、よこになぐればもうあしおとされ、のつけにどうとたふれけり、是をいくさの初とし、敵みかたは入みだれ、一足さらずに三重たゝかひけり、うんつき弓の、やみくゝと、みかた残らず討るれば、力およばずとしかね、若君のおまへに参り、うんにかなへば非も理となる、され共時節こそ候はめ、一先西坂本へ尋ねおちさせ給ふべし、某は残りゐて落のびさせ給ふ程、詞だゝかひ矢をゐかけ、ゑぶんをうかがひ御あとより、追付参り申さんと、思ひもよらぬ所より、ひそかにおとし参らせて、又やぐらにかけ上り、さしつめ引つめ矢だねをおしますさんぐに、ゐらして、詞只今若君がひまします、某も御供ぞ、かうなるものゝ自害のやう見ならひ手本にせよやとて、よろひをぬいでなげ出し、ゑいゝとそらばら

痛はしや梅若丸あやうき所をまぬかれ北白河を落給ふが、比は二月末つかた、くらさはくらし道見えずつしかゑらぬ野中をば、心ぼそくも只ひとりたどりまよはせ給ふ程に、夜もほのゝと明方に大津の浦に着地色給ふ、かゝりける所に奥白河の人商人、喜藤次と云し者此比都に日を送り、今朝夜をこめて下りしがうんのつきにや梅若丸、かくとはゑちすなふものとはふ詞西坂本とやらんへはどう参るぞをしへて地色たべ、商人天のあたへと悦び某こそ西坂本の者にてあれ幸哉同道せん、いざかうゆかせ給へやと、あとに成さきに立チクリあづまぢさしてぞ下りける、地すでに横田川の邊にて梅若宣ふは、詞なふゝつれの人、今旅人のいひて通るは、いつかあづまに下

り着都の咄せんといふ、其上西坂本はか程遠き道とはきかず、地色ふしぎさよと宣へば喜藤次聞て、詞ふしんも道理遠きも道理、汝をば大津の浦にて人買がもとより買取、奥へつれて下るぞといふ梅若はつとけうさめ、何人買が本より買とるとや、扱々無念やあ商人、たとひうるにもせよかふにもせよ、地色某がてんなき上に中々思ひもよらず、をさなきとてあなどりこうくはいすなと、太刀に手をかけ宣へば、やなまごしやく成わつばめと、飛かゝり取てふせ太刀ねぢ取ようぢやなくさんぐにちやうちやくす、痛はしや梅若九大の男に打ふせられ、氣もたましゐもあら口惜やと前後にばうじておはせしが、地色やゝ有てこゑを上をのれ人買め、賤敷ものゝ子ならばこそ、我はよしある者なればかやうにはぢをあたへられ、中いきてはゐぬぞはや打ころせ人買めと、わゝりかからせ給ふを又とつてふせ、エ、人聞わるし口をあけをく故なればと、くつわをはませ追立ゝあゆめあゆめとさいなむは、あはうらせつがざいにんをかぢやくの跡もかくやらん、前世のごうとはいひながら扱も、せひなき三重有さまなり、かくとはぢらず、粟津

六郎夜にまぎれ山づたひに西坂本へ参りしかば、北のかたはしり出なふ來られしかとしかね、ぢて梅若はと宣へば六郎はつと驚きい、詞や若君は某よりさきへ渡らせ給ひしが、今迄見えさせ給はぬは道にまよはせ給ふらん、地色扱氣づかはし心もとなとけうさめ、はてゝぞゐたりける、母上聞召あらうたてやそこ共ぢらずふみまよひ行つらん、淺ましや昨日迄は只かりそめに出けるにも、馬よこしよといひし身のけふはいつしか引かへて、供をもつれずすごゝとぢらぬ國へや行つらん、若も此子が行方なくは、いかゝすべきぞやれはやく尋てたべやとでもだへ、あこがれ給ひけり、地色としかねむねにせまりながらいやゝ、遠くもおはすまじ、某尋参るからは追付御供し歸るべし、よし又めぐりあひ奉らずば、六十余州の山々里々浦々嶋々へめぐりても、尋出さで有べきか御きづかひあそばすなと、云捨其まゝかけ出しは忠義、ふかくぞ三重見えみえみ、ぢる人地色さへもいく遠き、道さへ有に梅若丸なさけなや夜もさらに、ねられぬ程にさいなまれ身ふしもくだけつかるれど、漸として今ははや、武藏と下總の堺なる隅田川

にぞ、着給ふむざん成哉、地色梅若丸ならはせ給はぬ道といひ、つえにはいたくあてらるゝ今は一足もひかれねば、よはりはてつゝ川岸にたふれふさせ給ふにぞ、地色人買大きにはらをたてやあ何とてゆかぬぞ、あゆめと取てひつたつれどうつぶしにがはとふし、引おこせどうどふしいきもはやたえぐに、まなこもくらむばかりなれど情もゑらぬ人買人、又つえふり上さんぐに命もうせよと打ふせて、エ、腹立や此程の長旅に、はませし物のおしさよとそこに捨置下りしを、にくまぬ人こそなかりけれ、地色在所の人々寄こぞりこは情なき有さまや、よし有人の子と見えしがいくいか成人なるぞ、有のまゝに申させ給へ古郷へとつけ参らせんと、ゆみづを参らせさまぐにいたはりこさいをとひにけり、地色今をかぎりの梅若丸、よにくるしげなるいきをつき、ア、うれしくも、とふらい給ふものかな、かく成はつるうきみのはて、なのるはよしなく思へ共、若も都へつてあらば、母の一人ましませば此有様をつたへてたべ、我は吉田の少將是定と云人の嫡子、梅若といふ者なるぞや、むなしくならば此、道のほとりにつきこめ、

ゑるしに柳をうへてたべ、都の人の足手かけもなつかしければと、宣ふこゑもよはぐとつゐにはななく成給ふ、在所の人々一同に扱いたゞしき次第やと、こゑを上てぞなきにける、いざや死人の望にまかせ爰にはうぶり参らせんと、老若立より土をうがちよきにつきこめつかをつき、ゑるしに一本の柳をうへ無縁の人にて有間、いざ弔て参らせん尤と同じつゝ、大念佛を催ふして、よきにとぶらひ申せしは實頼もしくぞ三重見えにける、猶もあはれをといめしは、地中梅若丸の母上にて諸事の、哀をといめたり、其年も漸暮、明る春に成ぬれ共とかくのさうさへあらざれば、あまり待わび只ひとりかいだうに立出て、行かふ人は多けれ共、順禮こそ諸國をめぐり若も見聞し事もやと、三人つれたる順禮に近付様子をかたり尋給へば、詞されば我々は奥州の者なるが、去年二月の末左様の兒を、東國の人買があづまへつれて下りしが、地色若もさやうの人やらんとかたり、すてゝぞ通りける、母上聞もあへ給はずなふそれこそは我子なれ、尋こぬこそ道理やとたふれふしてぞさけばるゝ、いとをしや母上は一とせあまりの思ひ草、夢も

むすばぬなげきのうへに今又はつと思ひみだれ、心もきやうじさだめなくあなたへはしりこなたへかけ、ないつわらふつあゝ、謠中戀しの昔やな、や地色人こそわらはめえやうだいなや、とはいひながらことはりなりあのでうるいやちくるいだにも、親子のあはれはえるものをましてや人のおやごゝろ、爰にてなげき死せんよりはとたづね出させ二重

きやう女道行

「たまかづら、かくれとてこそむまれけめ、ことはりえらぬ我涙、ふつと思はじなげかじと、思ふちよしなはやわきかへる、涙のたきつえら糸の、みだれ心やくるふらん、實や人の身の、あだ成けりと、誰か云けん空ごとや又思ひにはえなれざりけりと、讀しもさもとえら雪のまだ冬ごもり花の兄東とかやに行雲の、跡を大津のうら山しくも、つれてこしぢに歸るより、やゝもへ出る若草に、露おきそふるえのはらを分行野路になくきじも、子ゆへにこがす見かみ山、このもかのものかげよりも、もれ出る月の、鏡山、えばしくもるは我からの、袂のえぐれ水くさも

まさる越川おのゝ宿、地すりはり峠のほそハツミフシ道たどりくくとたどりこす、地すへの一村醒井を、えのぐひちがさ美濃の國、のがみと聞ば今更に、カル昔こいし古郷へは、にしきを着てとつたへしに、我は引かへあかづける、かたを結んですそにさげ、地色すそを結びてかたにかけたる笹の葉に、えでやたんざく、敷くきやうかえどけないこしおれ、よみてかけたるねがひこそ、我子の行衛あんおんに、逢せてたべといのる成、ちかひあつたのやつるぎや、さす汐どきとゆふはやて、沖に男浪のとんくくと、いそ岩なみがゑ、どうどなる見のいよ、濱ちどりやちりちくちりくくくちつて亂れて、泣てこがるゝ我姿、やれ物狂ひよと聲ごへに、笑ふわらはへ、跡になり先に走りて小歌のおもしろさ、歌爰にはやらぬかごしまにはやる、三十振袖四十えまだほいさく、ほんに若い花の顔、おともきやうじて袋井や、かなしき金谷子ゆへとは、えらで色めくむらさきの、花のゆかりか藤ゑだを、はじめて三保のまつばらや、田子のいり海そこはかと、なきおほぞらにくゆる成、富士のけぶりも我ごとく、物お

もふにやせめていざ、歌くらべ三島の宮たちも、あはれ亂れて玉ぼこの、道もさがしきおざ、はら、登り下りの箱根山、尋る我子に大磯と、聞と其かいあら情なや、只世には神やほとけはましまさぬか、うきをことほり給へやと、天にあこがれ地にふしたけのよるべさだめなき、是やまことにうき世の中の物のあはれはこれなり、たゞこれ成はとかんせぬものこそなかりけれ

第三

粟津六郎俊兼は梅若の御行衛、名にのみ聞て見ぬ國浦々島々里々迄、心をつくし尋れどそれとにたりしうはさもなし、地よしや命のあらんかざりと、或時は山にふし、又或時はいそまくら袖もすそもやれやつれ、手足もかほもくろく成、かみはけづらずひげぼうくと、さながら鬼形のごとくなり、月日を重ね行年も、明る二月末つかた、あづまぢにさしかゝり、謠爰はいづくと遠江、はまなも高き、足がらやはこねとうげに、成しかば、日もはや西にかた

ぶきみねにさけるさるのこく、いはねにこしを打かけて、まばしやすめば、ぶら／＼とねぶさまきりにこたへかね、松がねまくらよねんなく、高いびきしてふしにけり、地色有べき事か去年の春、松若丸を誘ひ行比叡山の横河坊、松若をはがひにのせ大唐四百餘州残りなく見せ廻り、けふ歸るさに此山のフシ松の梢におり立けり、地色本より天狗の通力にて俊兼がふしたるを、はや夫とはまづたれ共まらぬふりにて是松若、詞あれにふしたる男はいかさま強力者と見えし地色御身は爰にて見物せられよ、なぶつて見せんとひらりと飛おり忽山伏姿と成、前後もまらずねいたりたる俊兼がそばにそつとふし、是もねいりしふせいにて兩足どうどもたせたり俊兼はつとめをさまし、むつくとおき見てあれば六尺ゆたかな山伏の、ねごとまじりの高いひぎのつけにそつてたはひなし、きやつは同行なき山ぶし成が、某をたよりにし草臥てねいりつらん、正體もなき有さまやと、そろりと足を押おろし、又打ころびふしたるはふてきなりける次第なり地色や、有て山伏うんといひてねのびし、俊兼がかうべのうへに兩足をもたせたり、ぎ

よつと驚きはらひのけおきなをり思ふやう、必定山賊強盜の作り山伏、旅人の心を引見をし取と覺えたり、をのれあごをくひちがせんとそばなる大石引おこし、はらの上に置けれ共おもげもなくをしおろし、大あくびして立あがり、詞^エ、能ねいりしにめをさまさせしは汝よな、地色天晴力自慢と見えしいで此石を返さんと、押取てなげかくる俊兼中にちやくと取、詞やあら御坊も大形の力かな、とても事に今少大きなを參らせんと、地色右の石にばいせしを四五間隔てなげかくる、客僧かた手に玄やんと請くるりくるりと押まはし、地色中々御身は強力なれば成まじとは思へ共、返さでは殘念なりさあ、もどすぞとなげ返す、心得たりといだき取、又なげかくればなげもどし二三度四五度せりあひしが、俊兼今はせいつかれまばしたゆんで思ふやう、きやつはづもない強力と見ゆれば、力業にはかなふまじ、だましよつてうたんと思ひ是々お山伏、詞我力だめしに國々を廻れ共、御身に似たる程の者にもつゐに出合す、ほとんどがを折て候へ地色ば、いざ此上はかたらひて、何様にも其方の心にまたがひ申さんと、ゑまやくし

て寄ければ客僧くつくとわらひ、詞其手も大方すいしたり、力業にかなはねばだましよつてうたんな、エ、夫はさもし、去ながら地志のやさしければ望をかなへん斬て見よと、ちつ共たぢろく氣色なく二王立にぞ立たりける、地色^チ、能推量かないで一打にとするりとぬき、とびかゝつて丁どきるひらりとばづし中にとび、うしろにつつくと立て有、こは無念とふり返り横にはらへばかいぐり、すそをなぐればおどりこへ弓手をきればめでに有、めでをはらへば弓手に飛ひらり、くといなづまの影計めに見えて、きれどはらへど手にたゝずさしもの俊兼あきれば、たらりくと大あせながしフシ只ばうせんとたゝずめり、客僧からくとうちわらひ、詞まてく是はどうめさるゝ男たる者の太刀をぬきちを見ずはさゝれまじ、露程成共血を付てさゝれよとはぢしむる、俊兼かぶりをふつていやゝもはやふつつとならぬく、^{ホウ}くたびれ地色たとどうどすはり、あせをしのごひゐたりけり、地色客僧扇をひらきそばへ立よりあふぎたて詞なふいかうあつさうなればとつくとあせを入、地色も一はげみはげまれよ、所望くとあざ

けれ共いッかな事〜 およびおりないあらもつたい
なや、よしないほねをおりたりと、もろ手をくんでめ
をふさぎ大いきついでかまはねば、詞是々それはひ
けて見ゆる、我身鐵石ならばこそ斬にきれぬ事や有、
地色ひらに所望は俊兼といへば、俊兼けうさめかほを
ながめ、詞やあらふしぎや、我名を知て俊兼とはフッ
合點たりだまされたり、扱々とうよくな御身様はは
ねのましますお山ぶしよな、なふ申、日比はあはれ
おめにかゝり一勝負もと思ひしが、いやはやいかう
ちがふたものふつゝとがを折候といへば、チ、さもさ
ふず〜、自餘の者ならばとくに引ききすつべけれ
共、主故にるらうする其忠厚をかんじ、且又思ふ子
細有てかく近付し、地色中かなしい哉汝が尋る梅若
丸、人商人にとらはれ武州隅田川の邊にてむなしう
成、母はかく共えらで跡をえたふて下りしと、聞も
敢ず何若君は死去なるとや、是は夢かや淺ましやと
地にふしゑづみて、なげきけり、地色落る涙ともろ共
にア、はかなや神ならぬ身のかなしさは、かゝるべき
とは露えらでうき身をつくせしこうくはいさ、誰を
頼みにながらへんと太刀押取をえばしとをさへ、尤

なり去ながら、餘り存念不便なればなげきをとめ
よ悦びをさづけん、されば梅若が弟松若は、父存生
の折から出家せさせんため叡山にのぼせしな、此松
若は前生にて、地色法花りやくの果によつて三寶佛隨
のみやうかんにかなひ、出家相續するなれば天臺傳
教にもすぐれ、我道のさまたげをなすものとえり取
かくす、えかはあれど父少將なく成、梅若も相果れ
ば今松若を汝にかへさん、彌主君とあふぎ吉田の家
をつがすべきや、俊兼大きによるこびこは有がたき
御事哉、何が扱松若を御返し給はらば、吉田の家つゝ
がなくもり立かしづき申さんと、地かうべを地につ
けなげくにぞふびんいやます鏡のごときまなこに涙
をうかべつゝ、忽天狗のはだゝきしもとの梢に乘じ
しが、松若丸をかいえやくし又ろく地におり立俊兼
に渡さるれば、えゝたる人の二たびよみがへりたる
心地して、是は〜と斗にて嬉しなきにぞなきにけ
る、時地に天狗宣ふは名殘おしくは思へ共、いとま
申ぞ人々と夕立空の、雲や霞も嵐と共に、うせにけ
り地俊兼えばし禮拜し、此上はとかう申に及ぶまじ、
片時もはやく母上の御跡えたひ申さんに、いそがせ

給へといさめつゝあづまぢさしてぞ三重いそがるゝ、
 漸として地藤澤のこなたなる野里のやかげに着ける
 が、若君つかれ給ふと見て、ゑばらく是にて御休息
 とゑづが軒端の竹えんに、諸共腰を打かけて旅の物
 うき咄など、せめて慰めゐる所へ男一人來りしが、
 人々をきつと見て用有さうに立といまり、いかう我
 もくたびれしに休てゆかんとよりけるを、つくく
 見れば梅若君のお家重代さして有、俊兼さとき男に
 てちやくとすいし、梅若君をきやつめがかどはしゆ
 くにまがひなし、をのれ一ひしぎにと思ひしがいや
 いや、かふたもゑらずもらふたもゑらず、そつじゑ
 てはいかゝとさあらぬ體にて、詞なふ其方は此道中
 にて折々見つる人成が、いつもは女か男かの子共を
 つれて通らるゝが、今度はなどや不仕合かといへば、
 さればいの、去年七月の末より上方をめぐれども、
 よろしきものにもあたらず故是非なく國へ立歸るが
 して、御身のつれられしは若はなし子にてはなきか、
 どうぞ談合せふ物といふ俊兼彌とひおとさんと思
 ひ、我とても同商賣、金銀次第や、それに付、去年
 の春其方はよい子をつれて下られしが、定て仕合し

つらんの、う、それを見られたるか。いやはや大きな
 はまりいの、ぢやうごは者のふてき者にてせゑ斗こ
 く故に、ちやうちやくすれば手むかひし猶いぢばつ
 ていごかねば、逆物にはならじと思ひ地色是此刀をも
 ぎ取て、隅田川のはとりにて死する斗に打ふせ、捨
 置かへるといひもあへぬに取てねぢふせどうぼね
 を、くだけよおれよとふみ付て、やい大罪人詞もつ
 たいなくも某が三代相恩のお主成に、よくも此うで
 にて打けるな、扱腹立やをのれめを、料理のしやう
 これなしと彌つよくねぢつくれば、詞なふいたや悲
 しやもはや息もたえ候、左様のお方とゑるならば何
 しにいたく仕らん、もはや返らぬ事なれば眞平おゆ
 るし遊ばされ、地色命を助け下されよとフシさもせつ
 なげにぞなげきける、俊兼聞て何ゑらぬといふとて
 たすくべきか、詞いかに松若様、畜生同前のやつめ
 を御敵とはもつたいなし、只兄上への御孝養に、さ
 いて成共きざんで成共御手向と申にぞ、若君太刀を
 するりとぬき、此うでにて兄上を打擲やゑつらん、
 めぐる因果を思ひゑれと左右のかいなを打おとせば
 俊兼はさしぞへぬき、みゝはなをそぎあしのすぢた

ちながら木にからみつけ、お家につたはる御太刀の不慮に御手にかへる事、御運ひらける瑞相といさみにいさんでくだらるゝ、ちうこうふかき俊兼ゆへ、天のめぐみやありがたしふしぎの、うへのふしぎなりとてかんせぬ、人こそなかりけれ

第四

隅田川のほとり成在所の人々あつまりて、けふは彌生中の五日去年都のをさあひが、此川岸にて亥、たりし忌日にて有なれば、いざや弔ひえさせんと色々供物を調へて、花を立香をもち灯明四方にかゝやかし、既に月出川風もふけぬさきにと面々に、しやうこをならし聲を上念佛申ぞ三重太夫殊勝なる、花の色香も、地あだとなる梅若の母上は、くるひめぐりて行水のフシ隅田川にぞ着れける、地色折節出舟の有ければ、なふく我をものせてたべワキ詞船頭聞ておことは狂女と見えしが、詞のしなのやさしさ都人と聞えし、おもしろふくるはれよくるはずは舟にのせじといふ太夫地色うたてやなたとひひな人成共、各所にすま

ば心あれ、あれくあの、水にうつる月を見給へ、風狂じ波を立真如の影をくるはする、狂人とは情なや狂人笑へば不狂人は猶わらふ、是我よりは物狂よ爰は所も、各にしおふ隅田川の、渡守ならば日もはや暮ぬ、舟にのれとは宣はで、舟にのるなとおせあるは名にも似ずさりとては船謡こぞりてせばく共、のせさせ給へ渡守さりとてはのせ、たび給へ地色ヲ、あやまつたり狂女、さすが都人程有けるよ、何かおしまんのり給へとフシさほさしよせてのせにけりツレ同船の僧俗等むかふの方を見渡しなふ渡守、詞あのむかひの柳のもとに人多くあつまるは何事ぞと尋ればワキさればあれは大念佛にて候、誠此なかにゑらぬ人のみ多かべし、此舟のむかひへ着候はんまにいはれを語ッて聞せ申さん皆々御聞ましませ、扱も去年三月十五日、亥かもけふにあたつて候、其比奥白河の人商人、年の比十二三成をさなき人を都より、買取奥へ下る、彼をさなき人ならはぬ旅のつかれにや、以ノ外にぬれいし、今は一足もひかれずと此川岸にひれふし候を、なんぼう世には情なきもの、候ぞ、彼商人散々打擲し、此川岸にすて置奥へ下る、此邊の

人々立寄をさなきものゝ姿をみるに、よし有げに見え候故、色々にしたはり候へ共定業にてもや候ひけん、たんだよりはりによはり既に末期と見えし時、おことはいづくいか成人ぞと委尋て候へば、我は都北白川にて、吉田の何某と申者の子にて有、父にをくれ母斗にそひ參らせしを、人商人にかどはされかやうに成行候、都の人の足手影もなつかしければ、此道のほとりの土中につきこめゑるしに柳をうへてくれよと、おとなしやかにいひ置終にはかなくなられて候、見申せば船中にも少々都の人も有げに見えて候へば、逆縁ながら念佛を御申有て弔らはせ給へ、や、よしなき長物語に舟が着て候、地中とう／＼御上りあれといへば船中の人々、扱も不便の次第かないぞ我々も逆縁ながら、跡弔らひて通らんと皆々舟より、おり行けりフシされ共狂女^{太夫地色}一人はふねよりもあがらずし、只ふなばたにふしゑづみ前後もわかず泣居たりワキ詞船頭見ていかに狂女、何とて舟より上られぬぞはやとく／＼といへば^{太夫地色}なふ只今の物語はいつの事にて候ぞワキ詞さればとよ去年三月十五日太夫^{太夫}ゑて其兒の年比名をば聞召ざるかワキヲ、兒

の名は梅若丸、年は十二三と見えて候太夫扱父の名はワキ吉田の何某太夫それより後親とても親類とても尋こざるかワキ中々思ひもよらず、狂女も都の人ならしぎや、只今の物語を聞愁傷の躰、若狂女は某ゆかりの人か^{太夫地色}なふ親類とても親とても尋こぬこそ道理なれ、其をさなき者こそわらはが尋る子にてあれ、是は夢かや現かともだへこがれて泣給ふ^{ワキ地色}船頭けうさめ扱も／＼今迄は、よその事と思ひしに御身のうへにて候かや、あら痛はしやと諸共にさほさす袖をぞゑばりける、地色誠に御心底思ひやられて候へ共、もはや返らぬ事御歎をとめられ、なき人の御跡を弔ひ給へと手を引て、なく／＼いざなひ參らする、チクリ哀といふものをろかなり、つ^{太夫地中}かのほとりに成ぬれば、母はひれふしあこがれて、地色なふ今迄はさり共あはんと思ひしを便にて、ゑらぬあづまへ下りしに、はかなや此世になきあとのゑるし斗を見る事よ、フシ扱もむざんやゑのえんとて、生所去つてあづまのはての、道のほとりの土と成春の草のみゑげりたり、此塚の下にぞ有らめさりとては人々、此

土を返し此世の姿を今一度、わらはに見せてたび給へなふ見せてたべ人々と消入、斗に泣給ふ^{地色}念佛回向の人々も、まごくの涙にくれながら實御歎き尤なり、去ながら母の弔ひ給ふをこそ亡者も悦び給はめと、鉦鼓を參らせ御念佛をすゝむれば太夫我子のためと聞からに母は漸おきなをり、せきくる涙と諸共に、地色南無や西方極樂世界三十六万億、同號同名阿彌陀佛、なむあみだ、く、南無阿彌陀佛なむあみだ、南無阿彌陀佛、なむあみだ太夫詞なふく人々、只今をさなきもの、聲として御念佛の聞えしは、正敷我子のこゑなるか此塚の内とはおぼさぬかッキ中我々も左様に聞て候、まよせんこなたの念佛をやめは、ご斗申させ給へ^{地色}太夫猶なつかしき都鳥今こゑこそきかまほしけれなむあみだ、南無阿彌陀佛なむあみだぶとなふるこゑともろ共に、まろしの柳の陰よりもうつゝのごとくあらはるゝ太夫母はあまりのうれしさにやれ梅若かとはしりよりいだきつけばこはいかに、其きゝきえてあともなし、扱情なや今迄爰に有けるがと、ひだりへめぐりみぎへまはり只、うろくと尋れば、つきなき所に立おもかげあ

れは我子が、母上にてましますかと、たがひにこゑをかはすにぞ、思ひはなをもますかゝみかぎろふいなづま水の月、とらんとすれどかげもなし、見えつかくれつ、する程に、はやまの、めも明ゆけば、我子と見えしはあとたへてまろしばかりぞ残りける、太夫地母はあまりのもののうさにかひなき柳にいだきつき此世のなごりに今一度、ことばをなりともかはさぬかやれ梅若よさりとてはと、つかのうへにふしまろびフシおめきさけばせ給ひけり、今はかなはぬ御事なればと人々漸なだめつゝ、さまぐいたはり參らする前世の因果といひながら、かゝるあはれは又よにもあらいたはしやと見る人聞人をしなべ、袖をぞまぼりける

第五

實や生て有子にさへまよふおやごゝろ、ましてやましてなきかげを夢にもあらず見てしより、思ひもふかき涙川ふちせに身をもまづめんと、既にあやうき折から粟津六郎俊兼は、松若君の御供申足を斗にか

け來り、母上と見るよりはやく是々俊兼こそ、松若君の御供申参りたりと聞も敢ず母上は、何俊兼とやなふ是は松若か、夢か現かまぼろしか誠とさらに思はれずと、人目もわかすいだき付なくより外の事ぞなき、地色俊兼見参らせ先以つゝがなく渡らせ給ふ珍重さよ、某も梅若君の御行衛、國々島々尋廻りうき身をやつすに思はずも、松若君にあひ奉りうれしき中にもかなしきは、梅若君の御さいごとや扱うらめしき世やとフシたもとを、ひたしなげきけり、地色チ我とても梅若が、あづまのかたへと聞し故はるばる下りしかひもなく、去年の春此野邊の露ときへつづなきあとの、フシチゑるし斗が残りしぞや、地色語るに付てよしなけれ共、世に人多き其中にみづから程物思ふもの又もあらじ、少將殿にはチゑゝてわかれ、松若はいつ地共、ゆくゑチゑられず俊兼は、かりそめながら出てより、をとづれとてもあらなくに又梅若はむなしうなる、いくゑの思ひせんかたもなき身とならんとさだめしに、せめては天のあはれみにや、おもひもよらずかたぐゝが、あとをチゑたひてあはんとはとかく時節を松若を、見るに付てはチゑにたくも

なき梅若こそ戀しけれとなげかせ給ふぞ道理なる、地色されども松若おとなしやかに、御くやみチゑごくせり去ながら、もはや返らぬ道なればおそれながら某を、兄上とおぼしめされ御なぐさみおはしませ、いかに俊兼、いざ先御ついせんのいとなみ何とぞと宣へば、其段は御心やすくおぼしめせと、すなはち妙義山北法寺の源流上人を頼つゝ、隅田川のほとりにて御弔ひとぞ三重聞えける去程に、源流上人は寺僧残らず召つれられ、河原に出させ給ひ松若親子俊兼にもよきに弔ひ給ひつゝ、扱梅若の御はかのうへに出離生死の高そとは、チゑきみにをけるあかの露、玉のかずある法のこゑチゑんゐをすます斗なり、地色既に法事もおはる比、梅若丸の亡魂そとはのかげにあらはれて、あらたつとの御弔ひやな、即往安樂世界阿彌陀佛、大井衆園遶住處の文にたがはず、決定往生すべき身の母のチゑうちやくふかきゆへ、りんゑの雲霧おほひかさなりもとの中有に立返り、ア、かなしやよるとなくひると涙のふちにチゑづみ、うかみえがたく候へばこひしゆかしと思召、御歎をひるがへしぼだいチゑんをおこされ、我あたとひて給はれと涙に、く

れて立給ふ、地色源流此有様を御覽じ、さぞあらん
去ながらおんあひへつりのなげきは是人界のなら
ひ、御身かゝるほうみをうけいかでりんゑにまよふ
ぞや、まゆゆしけんそくとくきやう、あのゝぼだ
いと、宣ふ御こゑの内よりもきなるかなこくうより、

をんがく聞えまうん一むらつかのうへにまひ下れ
ば、亡者はくはんぎの氣色にて、柳のもとよりよぢ
のぼり、枝葉かき分紫の雲のかけはし~~まづ~~くと、
またひまたはせ給ひしはきどくといふも三重あまり
ありフシくもまに月の、かゝやくごとく八十まゆかう
のさうげんじ、まやうれんげにせうじつにしの空
に飛行ある、地かゝりける所に西南の方よりも、俄に
魔風まきりにて黒雲うすまく三重内よりも地大天狗
横河房、松井源五定景をもろ手にさし上飛來りいか
に松若、詞年月なじみのまゐるしには上洛出世の門出
いはゝん、さあらばうけとれわたすぞと、大地へど
うどなげ給ふ俊兼中に取てふせ、エ、みやうがにかな
はせ給ふ若君哉、御伯父ながら御敵はやあそばせと
引おこせば、松若君太刀をぬき自業自得果是ぞとて、
水もたまらず首を討千部萬部の御經より、兄梅若へ

の孝養は是にまゐるべき事あらじと悦び、いさみ母上
諸共すぐに上洛なされつゝ、あとの参内づゝがな
く四位の侍従にけんになし家門ときめく御代万歳、
めでたかり共中々申斗はなかりけり

隅田川終

善光寺

山本土佐掾正本

第一

さてもその、ち序とはそれあみだによらいのほんぐはんといつは、しよくあくのぼんぶぐちたんさいにしてやうかううかみがたきをあはれみ、五かうにおよんでしゆいし、てうさいの御しゆぎやうじやうじゆ有てあみだ佛とあらはれ、今げんざいに御しゆつせし玉ふ、しなの、國せんくはうじゑんぶだごんのみほとけの御ゑんぎをたづね奉るに、ほんてう三十五代、じよめい天王のちてんにあたつて、ゑちせんの國つるがのしやうのあるじをば、ほし川右兵へのせう、いるふしひでとしおるしとて、じんぎたゞしきけんじゆ有、地しかるにひでとし、内には五じやうをまもり外には佛神をそんきやうす、さるにより家とみさかへめでたうし、姫君一人おはします、御名をやよひのまへと申て、いまだ二八の春の花、ようがんことにうつくしく、地かすみをわけてさくむめの、かごと計りの御よそはひ、およぶもおよば、ざり

けるも心をおくりかけぬはなかりけり、ことば偕又ひでとし公のおいに、やだの藤平國ひでとて、けつきさかんのわか者なり、ようせうにてぶもにおくれみなし子と成しを、おぢひでとしのかいほうにて人と成、其外家の子らうどう共、れいぎをまもり相つむる、然るにしなの、國川中島といふ所は、ひでとしのりやうないたりしが、かの所の民に、本多よしみつといふ者、あけ二さいのこまにつの一つおひたるをじゝんに引つれ、ひでとしへ参り御前に罷出、是はすぎしとし某が馬やにて出生仕候、あまりめづらしく存し君へさし上奉るとつゝしんで申上る、大將御ゑつきかきりなく、偕々きたいのめいば、きゑつほとんど淺からず、かのもろこしのゑんたんが、親かうくゝのゐとくにて、こまにつのゝできたりしとつたへきけ共、今さらにめに見る事ははじめなり、たぐひなきめいばなれば、いそぎ都にのぼせだいにへさゝげ奉らんと、則名代としてやたの藤平國ひでに、そうもんの趣一々申わたさるゝ、時によしみつおそれがましく候へ共、某をも御供に召つれられ候へかし、四をんの中にすぐれて、たつとき王城の地

へ参り度候と、思ひこふてぞ申さるゝ、ひでとし聞
召尤やましきしんてい哉、さあらはよい仕れ、忝
しとお請を申、地かくて藤平は供人あまた引ぐして
都をさして、そ、大三重のぼらるゝ都になれば、ことは
時のてんそうを以てかのめいばをさし上、一々そう
もん申上る、はるかに有て内よりのせんじには、は
るゝ参上仕り、ことにたぐひなきめいばさし上る
のでう、ゑいかんはなはだ浅からずとのちよくぢや
うなり、國ひで有がたしゝと、地かり御いとまを
玉はり、いそぎ御前を罷立、ことは偕侍共に打むかひ、
いざ此ついでになんばの京を一けんし、偕本國へ歸
るべしと、かり供のよういを申付たつたごへにぞ三
重かりける其中によしみつは、ことはさきのやくを
かうふり、くだんの山にさしかゝる、風はげしくも
たつた山、ゆきかふ物はしらなみの、よたうの者
におかされて、手おひ死人はこゝかしこさんを見だせ
しごとくなり、ことはよしみつやさしき人なればあゝ
偕ふびんの有さまや、此死人の親兄弟、かゝる事と
はしらずして、地まちやこがれてなけかんと、人の
うれへを身のうへに、しみゝと思ひとり涙ながら

にしがい共、よく取おさめゑかう有おとし心の内こそ
しゆせうなれ、ことはかくて藤平はくだんの所に來
り、此よしを見るよりも大きにいかりをなし、やあ
いかによしみつ、汝はいか成事にけがれたる死人を
取あつかひ申ぞや、我此たびはじめてさんだいせし
め、國元へ歸る迄は諸事けがれをいむ所に、なんぞ
やゆへなき死人を手にかへ身をふじやうにいたすこ
と、中々もつてきつくはいなり、汝がやう成者をさ
きにたつれば道すがらのいみと成、はるかにさがり
跡より來れと、以ての外にりつふくしおくりなには
の、うらへぞ出にける、地ふるき都残りなく、こゝ
やかしことけんぶつす、ことは然る所にせいゝたる
いけ水に、時ならぬはちすばの、露はさながらしら
玉かと、打ながめ行所に、ことはふしぎや水中よりけ
しからぬひかり物、十方にへんまんす、國ひでをはじ
め侍共、たゞ事ならぬひかり物、是さいせんよしみ
つが死人を手にかへ、けがれたるとがめ成べし、かゝ
りるあらもつたいなやと足はやにくだんの所を三重
さりにける、然る所に、ことはよしみつはたゞ一人跡よ
り來る、時に水中より有がたやあみだ如來、ことはし

まわうごんの御よそほひにてうかみあがらせ玉ひける、よしみつはつとかんたんし、かうべを地につけらはいはす、其時によらい誠にたへ成御聲にて、いかによしみつめづらしや、我汝とくはこしやうよりふかくけいやくいたせしゆへ、年月久しく此所に尋むたり、それ三がいてんの内は、きやくしやうそくもうとて、生をへだつればかならずさき生をわする、汝くはこみやうのむかしは天づくにてぐはつかいとよばれし長者たり、じせつはしやかぶつざいせの時我をねんじてりうぐうより、ゑんぶだごんをこひうけ、則二佛のくはうみやうにて西方ごくらくのあるしあみだ佛をこんりうす、今がんせんに我なり、そんようは天ちくにてゐ奉るぶつたいなれ共、しんは誠の西方のあるしあみだの大念大ひのしん、少もうたがふことなかれ、其後汝わうゐをのぞむ心ふかく、われにねがひをかくるゆへ、たいたうのせうめい王と生れ出る、こゝにても我汝に付そひぐはんをみつる、其時汝今其身と成、ぐゝはん有ゆへによつてよしみつと生をうくる、こゝは一世ならず二世ならず生々世々のやくそくたがへぬゆへに今こゝにめい

はくにあらはれたり、一とせもりやの大臣がぶつほうはめつなすべきと此いけに我をすつる、然れ共佛法のゐりきふかき故、もりやの大臣めつぼうし其後しやうとくたいし此所に来り、我をあがめ奉らんとふかくしうたんいたすといへ共、汝にけいやくふかきにより、此いけ水にとし久しくも待わびて有けるなり、いそぎ本國へつれ行、むぶつの物にあんらくのほうどのゑんをむすはせよと、地くはこ生々のいんゑんをくはしく語らせ玉ひける、こゝはよしみつかなるいきもにめいし、こゝはとても大じ大ひのちかひなをくあはれみ玉へとかうべを地に付がつしやうす、地其時いけ水うすまきあげ、雲のなみよりきしかげは、地こがねのまさごと色へんじ、によらいのそんようよしみつが、かたにうつらせ玉ひしは有がたかりけるしだいなり、かゝり本多あまりのたつとさに、天にもあがる心地にて、かのみほとけをおひ奉り國もと、さしてぞ三重かへりける、偕其後に、こゝは右兵衛のせうひでとしは、此度都のやくぎをおいの國ひでにつとめさせ供の侍つきく迄、けんごにきこくいたせしこと中く悦びかぎりなし、有時北の

方に打むかひ、我こよひふしぎのれいむをかうふる、語り聞せ申さんとの玉へば、北の方聞召、みづからも夢とやいはんうつゝ心に、あらた成御つげをかうふりて候、ひでとし彌ふしぎにて、されば我見し夢のつげは、くはうみやうかくやくたる佛らいりんましゝ、かの本多よしみつに我が姫を引合せゆいせきをゆづらば、ごしやうあんらゝ成べし、かのよしみつがくはこみしやうのむかしはぐはつかい長者、其後たいたうにてせうめい王と出生し、今日のもとにて本多よしみつとあらはるゝ事、ふかき願心有ゆへなり、偕汝が姫のやよひのまへはよしみつがくはこゝぐはつかいが時のつまたり、又たいとうせうめい王の時は一のきさき、かやうに生々世々のゑんふかければ、いそぎ其けいやくなさしめよとの玉ひ、たちま地夢さめぬとかたらせ玉へば、北の方偕々ふしぎやなみづからも其ごとく、ひかりかゝやくみほとけの、あらたに御つげおはします、偕よしみつは此たひ郡けかうの時、さしもたつときみほとけをもち奉り候とや、かゝるきどくもおはします、よしみつを是へ召れ、かのみほとけをおがませ玉へとの玉へば、

ひでとし尤哉、それゝよしみつに此度都よりあんちいたせしみほとけを、もち奉れと申すべし、侍共承り、御まへを罷立、やがてよしみつに此よしかくと申ぐる、召にしたがひよしみつは、かゝりかのみほとけをもち奉りおくりいそぎ、おまへに出らるゝことはひでとしふうふ御ほぞんをおがみつけ、偕もゝ有がたや則我らふうふの者、夢に見奉りしみ佛にまがひなし、此うへは何をか偕佛のおしへにまかせんと、偕姫君にも夢の御つげ語らせ玉ひ、佛の御つげにまかせ申事なればせけんのひはんはともかくも、いかによしみつ、おことはけふよりしては某のそうりやうたるべし、諸事けんごにはからひ玉へとの玉へば、よしみつしゆめいなりことに身の大けい忝しとやがておうけを申さるゝ、姫君はふうふの仰もれ玉はずはやしうげんのぎしき有めでた、いろおくりかりけるしたい也、こゝは所へ國ひではくだんのぎしきへしこうある、ひでとし御らんじいかに藤平、よきじせつに参りたり、我等ふうふ過し夜ふしぎのれいむをかうふり、つげにまかせよしみつに姫を得させゆいせきをゆづる、きやうから御へんも本多ともろ

共、いよく家をあんおんにまもるべしとぞ仰ける、藤平聞てつね／＼やよひのまへを心にかけ、又は家のそうれうを我ならでつぐものあらじと思ひしゆへ、大きにいきりをなし、こは何事を仰候ぞや、あのいやしきどみんをめし上姫にあはせ、ゆいせきをゆつらんとは、御きばしちがひ候はずや、其佛のれいむとやらんは中／＼おかしきそらごとなり、そうじてあのよしみつめは都げかうの折節も、身ふじやうにけがすゆへきつねたぬきがわざをなし、あらぬ事のためを誠になされ候かや、返す／＼も淺ましや、しよせんきやつめが有ゆへに、人の心をまよはする、討てすてんと一もんじにとびかゝるを、人々取ておしとむる、其隙によしみつは佛をもりて内に入、ひでとし大きにりつふく有、やれ／＼おのれこそ大あくま佛のあはれみおはしますよしみつを討んとは、佛てきのだいばもりやがしよるならんと、たちに手をかけ玉ふを、こはもつたいなしとおしへたて、むたいにおくへともない、かゝり國ひでをかたはらへひらに／＼と三重なだめおくかゝり偕よしみつは、こは如來をしゆごしひとまにかへり、つく／＼

物をあんするに、我此所に有ゆへに人のうらみをうくるなり、此みほとけだにましませば、うきよにのぞみあらばこそ、たい何方へも立こへ、ごせ一へんにねがはんと、地み佛をおひ奉り、そこ共しらず出玉ふ、ころしもさつきのすゑなれば、うの花くだしにふる雨をしのがんためにかさをさし、やう／＼として今はやはづみふいはた山にぞつき玉ふ、こは所へ藤平はよしみつしのび出けるを、ほつかけ討てすつべしと、跡をしたふて來りしが、こゝにて見つけ、いつく迄かのがさしとはしりかゝつてちやうどきる、ふしぎや黒雲へだゝり姿をはつたと見うしなふ、國ひでをはじめらうとう共、たいこくあんにまよふがごとく、とはうをうしなふ計りなり、かゝり是ぞほとけの御りしやうなり、あら有がたやよしみつは、かゝり如來をしゆごし申せしゆへ、あやうきなんをまぬかれて、こはかうざんのうへに我しらず、佛をしゆごしゐたりけり、所にふしぎやいづれの山共しら雲の、たな引つゞき一もんじによしみつが立ゐたる、山のうへにかけはしをわたしごとく立つゝく、かゝりよしみつたつとさ身にあまり、ほんぐはんふしぎの

びやくだうを、わたる心にしんくくと、佛をしゆご
しわたりしは、きたいなりける、三重しだいなり國ひ
でをはじめらうどう共、こゝは此有様を見るよりも、
やれあれへ行はおつかけよかへせもどせと聲くくに
の、しれ共、ぶつりきふしぎに叶はず、たゞ此道よ
りさきへまはり討てすてんと、かゝりそはをつたひに
あらぬかたへとあふてゆく、地偕よしみつは山より
うへのくもぢをば、ろくぢをふむよりなをやすく、
あゆむ共思はゞこそ、ひぎやうじぎいに成にける、
こゝは有がたや本尊はみ聲あらたにいかによしみつ、
かうくたる雲ぢ心うく思ふらん、我なんぢをしゆ
ごさん間、すこしきうそくのためかたにかゝれとの
玉へば、よしみつこはもつたいなや、こゝは何として
佛の御かたにいやしき此身がかゝり申さん、御ゆる
し候へとふし涙をながし、申ける、こゝは時に如來の玉
はく、いやくならくのざいにんの身にさへかはる
ぐはんなればくるしからずとの玉ひ、かゝりよしみつ
がかたのうへよりおりさせ玉ふは、誠にたへ成御ぐ
はん、こゝは偕よしみつは夢共なくうつゝ心に、かんこ
とはもつたいなや佛の仰にしたがふと思へばたちま

地に、かゝり如來はよしみつをかたにあげさせ玉ひし
は有がたかりける次第なり、ころしもさつきのすゑ
の夜の事なれば、かゝりゆくさきは見へね共、佛のく
はうみやうほがらかに、てらせ玉へば一天もかゝ
やきわたりあきらかにひるはよしみつ如來をおひ奉
れば、よるは佛よしみつをおはせ玉ひ、かゝりがた
るけんなん山のそは、風にしたがふうき雲の、天に
もあがる心地してはるく見こしの國つゞく日かず
程なくしなの、國、川中島に付玉ふ、くはこしやう
じやうのむかしより、まもらせ玉ふ御れいげん今も
くせんにあきらかなり、有がたし共中く申、計り
はなかりけり

第二

去程に、地右兵衛のせうひでとしはみだひ姫君もろ
共に、こゝはよしみつおち行玉ひしを、國ひでおつか
け行し事、心もとなく思召さまくへうぢやう有所
へ、やかたの藤平一もんじにかけ來り、とかふにお
よばずひでとしにとびかゝつて、やがて取ておさへ、

ひざの下にひつしき、刀をむねにおしあつるを、はねかへさんとし玉へば、是はどこへ、せまいくといかりける、みだひ姫君女房たち、是はくとさはぎ玉ふを、藤平いかつておのれらよつて見よ、取ついたらばたちま地にひでとしをさしころし、有あふやつばらも一々になぎたをさんと四かく八めんにかりければ、おちてちかづく者もなく、たいけうさめてぞゐたりける、ひでとしも御心は中々はやり玉へ共、やいばをむねにおしあてられ、何とはやせんかたもなく、是は國ひでいか成事ぞ藤平聞もあへず、やあおろかや某をさし置、あのゆへもなきよしみつめに此家をつがせんとは、よくも思はれしぞ、今さらこうくはいたるべし、あまさへ某を手打にせんとし玉ひしはさだめて覺への候はん、かたぐ以てうらみこつすいとをつてやむことなければ、しよせん御身をさしころし、儲其後はみだいの姫もかちうのやつばら、一人も残さずなで切にして、ほし川の家をだんめつさせ、うき世のもうしうをはらし、我もはらかきやぶつて此世の事は儲置、めいど迄もうらみをなさんと思ひきつたるしんていなり、今が

さいごぞくはんねんあれと、大きにかつて申ければ、ひでとしもさしあたつて何共へんたう出ずして、とかふいひかねおはします、され共やよひのまへちゑふかうして心さとく、なげきの内にもさまくとしあんをめぐらし玉ひ、國ひでをなだめ父上の命をすくひ、其後何とぞはからはんとむねをとつとさだめなふいかに藤平殿、さやうにあらぎをの玉はず共、御心をしづめ玉ひみづからが申ことはり聞召せ、此たびのやうすは父母の御計らいにていさゝか以てさふらはす、佛のれいむしますゆへ、よしみつとみづからが、わりなきむすびのけいやくを、なすと計りにお枕ならべし身にてもはんべらず、殊によしみつ行方なくおちうせしことなれば、わがつまならぬ人にて有、さあれば又此家をたれか有てつぎ申さんや、御身ならでそうりやうをしり玉ふべき人もなし、みづからもつねぐさやうに思ひくらせしに、ふりよの事ゆへ父母や又みづからに至る迄、御うらみをかうふる事一しはかなしく候、あはれ儲ねがはくは右のうらみをふりすて、父上をゆるし家をたてさせたび玉へ、父上とても此段をいかでいなとは思召ん、

さあればなみ風世にたゝす、よろづたゞ御身の心の
まゝならんと、ことばをつゝしみをわけて、そと
ゐに思はぬそらごとを誠しやかにぞ申さるゝ、ことは
さもよこしま成國ひでもやよひのまへのべんせつに
思ふまゝにのせられて、大いきをほつとつぎ、偕々
御身の申さるゝ段、女性ながらも一々にあたつた
ることば哉、さりながら某とてもさ程のりをわきま
へぬ者にてなし、御へんの心ははや一ごんにてしれ
たれ共、とにかく父母のしんてい中／＼とつくとし
れがたし、此上はひでとしのそこゐを承り、其へん
たうによつて何が偕某も、げんざいのおぢおやなれ
ばいかでせつがい仕らん、何と姫のしんていと一所
にて候か、たゞしかはりやましますかいかに／＼と
申ける、ひでとしも姫君のちりやくのことばとすい
りやう有、やあおるかや藤平、何とてちがひ有べき
ぞ、さいせんより其段をわけていわんと思ふ内に、
姫が心のはやくつき我がへつてゑんいんすまさしき
汝はおいといひ、ことにおさなき時より某がかいほ
うにてそだてあげたる事なれば、おことに家をゆづ
らん事何か以ておしからん、内々さやうに思ひぬれ

共、此度は思ひよらざるさいなん今以てくやしゝ、
かゝるうへはたんりよの心をひるがへし、わがゆい
せきをつぎ得させば、何のそこゐか残るべきと、さ
も有さうにの玉へば、藤平聞て其義ならばとても
事に姫の義は申におよばず、ゆいせき残らず某に玉
はるとのせいごんにて承はらん、ひでとし聞召おゝ
中／＼弓や神もせうらんあれ、まつたくきよごんこ
れなしとあれば、ちゑの浅き藤平にて誠に思ひ、先
こゝはしおふせたり、偕みだいけらいはいかに、何
が偕君の御意をいかでそむき申さん、かはりないな、
あゝ偕は其しんていにて候かとむいきに取しむなど
りを、手持あしくそつとはなし、あゝ偕おぢ親たる
人に慮外をいたし候、まつひらゆるさせたび玉へと、
太刀をさやにおさめしはめんぶくなふこそみへにけ
れ、地北の方も姫君も、しゝたる人のそせい有、か
へらせ玉ふ心地して御悦びはかぎりなし、女房たち
もいさましく君をいはふてするながき、てうしかは
らけ取／＼におくりしうぎのぎしきとゝのへて、地す
ぐに盃おさまれば、ひでとしふうふもろ共に色おくり
皆／＼、ひとまに入玉ふ、ことは藤平一人ざしきに残

り、心の内に思ふやう、偕く是は思ひの外の仕合哉、家のそうりやうつぐといひ、日比のぞみをかけたりし姫をさい女にさだむること、我身ながらも某は、あつはれくはほうものやと行末しらぬ身の悦び、おかしかりける三重しだいなり、すでに其夜も、ふけゆけば、みなくしん所に入玉ふ、さればにや藤平は、姫君のひとまに入、とし月こがれしうさつらさ、地かたりなぐさみあはさんと、人をはかるていもなく、上なけぶししどけなげに、あゆみをはこび、あいしやうじを、ほと、く地がりほとくくとおとづれて、なふいかにやよひのまへ、ことは國ひで成は是、こゝをあげられよ、はやとくくと申せ共とかうのへんじもまします、藤平あきれて是は偕、まづくよくもねいられたり、あゝよしとさらばひそかに立いらんと、しやうじをそつとおしあけみれば、姫君はよるのゐしやうを引かづき、ふかくねいらせ玉ふてい、さしもにあらき藤平も、見るに心のたよくと、はるおとしひざわなくくとぞふるひける、ことはやうくむねをじつとしづめ、なふいかにやよひのまへ、さいせんはことの外あらけなき

ていを見せ、さぞ心うく思召ん、今は中くこうくはいに存る、去ながら又某が心をもよくはからふて見玉へ、日比ふかく戀わびたる御身を、あのいやしきよしみつめにそはせ、手をむなしくながらへて何とかくくらすべき物か、命が有てもおもしろき事もなく、其うらみむねにせまつて、ふかきおんをかうふりたる、おぢ親といひことには又、いとをしきわ君が父上に、ぶれいをはたらき申たれ共、しかしそれゆへに思ひしねがひ叶ふたれば、近比まんぞくに存るなり、偕今より後はかならずく心をちつ共へだて玉ふな、行末ながくいつ迄もとかく情を頼むぞくなふ姫君、くやよひのまへ、くくとへ共さらにへんじなし、あまりの事に國ひでよるのゐしやうをおつ取りみれば姫君はまします、藤平はつとおどろき、是は偕我をあなどるふるまひか、何たるしよぞんにかくはせしとあんじゐたる所を、姫君びやうぶのかげよりも、たちぬきそばめねらひすまして、右のかいなを打おとす、是はとあはてふりかへるを、ゆんでのかたさきはたとすれば、かしこへかつはとまろびける、姫君嬉しく、やれいかに藤平、

みづからさいせん申せしこと誠と思ふか、ゑゝおろ
かやな、父うへたすけんちりやくのためたばかりし
をしらざるか、一度ふうふのけいやくせしよしみつ
をよそになし、おことがやう成惡人に何ゆへにした
がはんと思ふぞ、ゑゝ淺ましきしんていや、なふい
かに父上、惡人切とめ申たり來らせ玉へとの玉へば、
ひでとしふうふおどろき、あはてさはいで出玉ふ、
右の有さま語らせ玉へは、ひでとし大きに悦び玉ひ、
やれ國ひでめげんざいのおぢにてきをなし、佛のあ
はれみましますよしみつをなやましたる、天ばつま
さにあたりたり、よくもさいせん某をさしころさん
といたしたな、思ひしれぐにんめと、くびちうに打
おとし、あゝよくもゝはからひたり、我子ながら
もたのもしや、女性ながらもわごせは儲なんしにま
さる心ていやと、あふぎひやうしたてゝゝ悦びい
さみ玉ひける、姫君の御ふるまひ誠にけんちよのた
しなみやと皆かんせぬ、ものこそなかりけれ

第三

かくて其後、ことはらうせうふちやうの世のならひわ
かきとても頼なし、ひでとしのそくぢよやよひのま
へ、すぎし皆月中比より、地いろぬれいくるしくまし
ましてすへふし打ふしなやませ玉ひける、ことは父母一
もんかちうの人々、ちうやかんびやう取ゝにさま
ざまれうぢなさるれど、さらにげんきもなかりけり、
ふうふあまりのかなしさに、なふいかにやよひのま
へ、何共御身の有さまは頼みすくなきふせいなり、心
で心を取なをし、今一度ほんぶくあれと色々いさめ
玉ひける、其時姫君くるしげに、地是に付てもよしみ
つ殿、何とかならせ玉ふぞやよこしま成國ひでゆへ、
行衛もしらず成玉ふ、佛のちかひ夢のつげ、地よし
みつ殿とみづからが、わりなきいもせのやくそくも、
今生一世のゑんならず、くはこ生々のふかきゑん、
わらはがねがひはいかにもして、つまの有かを尋つ
つ、地によらいをおがみ奉らば、よみぢも心やすか
るべし、あゝ儲戀しきよしみつ殿やとゝつゝみかね
たる思ひのたね、色にあらはしうれいふしくどきなげ
かせ、玉ひける、地いろ夫婦めのと女房たちはづみふし
おのゝ袖をぞしぼらるゝ、地ひでとし涙と諸共に、

ことはおゝ心やすかれよしみつが、行衛をすいぶん尋出すべしと、さま／＼かんびやうなさるれど、さらにげんきもあらずして、地文目下旬の比よりも次第におもらせ三重玉ひける、是は儲置、ことは本多の小太郎よしみつはしなの、國川中島に、しばのいほりをむすび、月日をおくりておはします、ひんじやのすまゐの事なれば、かのみ佛をうすのうへにすへ奉り、ちうやおこたる事もなく念佛申ておはします、其としすへの事成にやはん計りにたれ共なくしばのあみどをおとづるゝ、よしみつふしきに思召、たれ成らんと立出てあみどをひらけば、わかれて久しきやよひのまへ、なふ是はよしみつ殿にてましまさぬかや、あらなつかしやとうれいぶしすがりついてぞ、なげかるゝ、ことはよしみつ大きにおどろき玉ひ、是はいか成御事に此所へ來らせ玉ふ、姫君涙ともろ共におろかのつまの仰やな、國ひであらざる心ゆへ御身ゆきがたましまさず、あけくれ戀しゆかしく打なやみ、有にもあられずなげく身の、父母にしこのびつつ命かぎりに尋んと、思ひさだめて人しれず遇にし秋のすゑつかた、一めもしらぬ國さとを、はる／＼

尋こ口ひしも、此山中へまよひ來て、かやうに御めにかゝる事、ひとへに是も三佛の私生にてましまさんと、かゝりの玉ふ聲もよは／＼とうれいふし打しほれてぞ、なげかるゝ、ことはよしみつも姫君の、地いらたがひにふかき心をかんじはづみふし共に涙はせきあへず、地やう／＼涙の隙よりも、ことは儲々我らごときのかひなき身を、それとたがひにかけをびの、むすびしゑんをきらさじと、はる／＼來り玉ふ事、誠にせつなる御心、何ともことばにのべがたし、まづ／＼こなたへ／＼と、地ふうふたがひに念佛を、ちうやつとめてあかさるゝこゝろの内、こそ三重しゆせうなれ

ひでとし夫婦道行

こゝにあはれを、地といめしは、つるがのしやうにおはします、ひでとしふうふの人々は、天共地共思ひ子の、やよひのまへははかなくも、地すぎにし秋のすゑつかた、むなしくならせ玉ふゆへ、夢のうきよにまぼろしの、身もたへなんとなきくらし、地せめての事に國々を、残らずめぐりわが姫のごせぼだ

いをいのらんとしよしのざいほうふりすて、しよこくしゆ行に、出らるゝ、心の内こそあはれなれ、地其いにしへは我も又ちよぞといはふつるがのしやう、今はあきぢの里と成はづみふしおとはあちの山をこへ、かい地津のうらよりながむれば、戀しき人にあふみ成、まん／＼たる水うみにセツかりぎよふがいとなみしがのうら、地むかしながらのめいしよぞと、まのやかたゝに引あみのめにもたまらぬわが涙つらねしうたも身のうへに思ひつゝけてあはれなり、山田やばせのわたしぶね、たれまつもとにうちでのはま、あふさかこへて山しろのめいしよ／＼をじゆんれいし、我子のためにといのるにぞ、秋のよすがら聲たてゝなくやおしかのつの國や、地なにはのことも夢のうち、しらぬゑんごくはたう迄、みとせあまりのたびごろもくり上ふしきそめて思ひ信濃ぢや、地有明山のそなた成さらな、さとにぞつき三重つき玉ふ是は儲をき、ことは本田の太郎よしみつは、やよひのまへにあひなれ、きのふけふとは思へ共、四とせの月日をおくる身の、おんあいの其中に一子をまうけ、其名をよしすけとつけ玉ふ、ふものてう

あいかぎりなくはや三さいに成玉ふ、秋風身にしむよひのまに姫君はおさなきわかをいたはりて、地共にまろびておはします、こは然る所へひでとしふうふの人々は、とまりさだめぬたびのそら、よを日にそへてわたりを得たるふなばしや、川中島につき玉ふ、とあるいほりに念佛の聲ぞ聞へける、あらしゆせうやと立より、あみどのひまより内見れば、ひころ戀しきよしみつはしちかく立出玉ふ、夫婦おどろきよしみつ殿にてはおはせぬか、是こそひでとし夫婦成はとの玉へば、本多大きにおどろき、なふ是は是は／＼、うれいふし是は／＼はと斗りなり、こは儲よしみつ申けるは、こはもつたいなき御有様やな、人をも召つれ玉はずなんじよをこへて來らせ玉ふは、やよひのまへの御事にて候はん、とく此方よりたよりを申べきにゑんいんいたし候、四とせいせんにやよひのまへ某をしたひ此所へ來られしが、日をかさね今ははやふたりの中になんしを一人まうけ、今三さいに罷成候、たとひ御うらみ候共御ゆるしなされ候へ、四とせが間御たいめんなくさぞ御なつかしく候はん、先々おくへいらせ玉ひ、いそぎたいめ

んおはしませかんおとしはやとく／＼とぞ申さるゝ、
ことは夫婦の人は聞もあへず、かんことはあゝ是は思ひ
よらずのよしみつの詞かな、我々夫婦しよじさいほ
うをふりすてゝ、かくしゆ行者の身と成は、あゝか
なしきかなやわが姫は、四とせいせんの秋のすゑ、
ことはなふあゝしかもけふ廿三日がめい日にて候、御
身の事をあこがれむなしく成て候ゆへ、すむかひも
なきうき世ぞと一すぢに思ひ切、かやうにまよひ出
けるが、姫がぼだいをとはんため、其上御身とわが姫
とは、生々世々のゑんふかく、今はの時迄御身の事を
戀わびむなしく成ぬれば、何とぞ尋めぐりあひ、せ
めては姫を見ると思ひ、わかれしつらさを語りつゝ、
共にぼだいをねがはんと思ひし心かなふ身の、今此
所にめぐり來てかくたいめんをいたす事、ひとへに
佛の御たすけ、あゝ諸御身を見るにつけ、今一しほ
姫が事の思はれて、いとゝかなしく候はと語りすて
てぞ、なげかるゝ、ことはよしみつなをもふしぎをな
し、是はきたいの仰かなまさしく此屋に罷在る、しよ
せんはやとく御入有て、やよひのまへに御たいめん
候へ、夫婦の人は聞召、あらうらめしや一たびしゝ

たる我姫の何とてこゝに有べきぞ、いることはさは去
ながら若も佛のふしぎにてましますか、たとひへん
げのわざにても姫ににたる物あらば、一め見たく候
との玉ふ内に、よしみつはおくに入、いかにやよひ
のまへ、國もとより父母御身を尋來らせ玉ふははや
とく／＼たいめんおはしませ、姫君若も其まどろ
みておはせしがかつはとおき玉ふ、夫婦立より、な
ふおことはやよひのまへか、姫君もあらなつかしの
父母や二たび御めに懸る事、ふかうとや成申さん、
淺ましやときぬ引かづきふし玉ふ、ことは夫婦あこが
れそばにより、なにしにふかうに成べきぞ、一たび
むなしく成し身の、佛のりしやうかふしぎやな、此
世に有こそ嬉しけれ、なふおき玉へと、きぬ引のけ
て見玉へば、あらはかなや姫にはあらずむなしき
ゐはいにておはします、よしみつも夫婦の人も、是
は夢かやうつゝかと、ゐはいに取付いだきつきなふ
是は／＼、うれいふし是はと、斗りにて聲を、なく
ふしあげてぞなげかるゝ、地やう／＼心を取なをし、
ひでとし夫婦の玉ふは、諸も／＼我々は、何たるく
はこのむくひにて、かゝるうきめにあふことぞや、

いるとはなふよしみつ是はふしぎのしだいかな、姫君がしがいをわが國のぼだいじへおくり、ぶつせんにゐはいをたてをきとふらひしが、是こそぼだいのそなへ置しゐはいなり、又此小そではやよひのまへが今はの時迄身にまとひしが、あゝ儲ふひんやまつごにおよび、たいよしみつを戀わびしが、其身はむなしく成ぬれ共、はくは此世にとゞまりて、かりの姿は戀しと思ふよしみつに、そひなれけるこそむざんなれ、おやこは一世夫婦は二世の契り成と、つたへし事こそだうりなり、四とせいせんにしゝたりし姫は今迄こゝに有、今父母が來りしゆへ、はくれいの姿と成、せんなきかたみを見る事よと、夫婦もろともかきくどきうれいふしりうていこがれて、なき玉ふ、こはよしみつもせんごをばうじ玉ひしか、むさん成かなおさなきもの、なげきのころにおどろきて、なふ母上様母よくと尋ける、よしみついよくかなしくて、やれよし助こなたへ來れと涙ながらにいただきあげ、やれ御身が母はおことをふりすてゝうつゝときへてなきぞとよ、今よりしては母を尋る事なかれ、よるのふしどにやすむ共、父にいだかれい

ねよかし、むざんやなおさなきもの、いなやちゝにはいだかれまじ、なふ父上、母はいづくにましますぞと尋したひてこゝかしこ、はしりめぐりてかつはとふしうれいふしなくより外の、ことはなし、地ひでとし北のかたおゝいとをしやおさなきものは、やよひのまへがおもざしに、よくもゝにたるよな、おことがためには我ゝはおうちやうばにて有けるぞ、母こそ此世にあらず共、我を母と思へやと、ななくいさめ玉へ共、おさなきものは中ゝに、おうちもうばも何ならず、なふ母うへさまとなきさけぶはうれいふしめもあてられぬ、しだいなり、こはよしみつあまりせんかたなく、ゐはいにきぬ打かけ、やれなげくなよし助、母は是に有けるぞ、おさなき者は悦び、なふ母上のましますかと、父のひざよりかけをりてなふ母上さまといたきつけばゐはいなり、あゝ情なの父上や、母上にてはなき物をとうれいふしあしずりしてぞなげきける、地ひでとし夫婦よしみつも、せんごふかくに取りみだしうれいふし聲をはかりになげかるゝ、しよじののりふしあはれと聞へける、地ひでとし涙ともろ共に、こはいかによしみつもは

やなげきて叶はぬ也、あいべつりくの世のならひ、あふはわかれの始め也、かゝるふしぎにあふ事も、ひとへに佛の御はうべん、夢の間の夢の世に、いかでなげきしづむべき、此上は我々も猶々念佛けだいなく、誠の道をねがふべし、なげき玉ふなよしみつ、本多も是に力を得、ふつつと思ひあきらめしが、おさなき者がなげくを見て、たがひにかほを見合せ、おゝだうり也ことはりやと又さめくとぞなげかる、おやこの人の御有さま、世の中の、物のあはれは是也是成はと皆かんせぬものこそなかりけり

第四

かくて其後、ことはすでにことさり其時のみかどをば、くはうきよく天王と申て女ていにておはします、御まつりごとおだやかにおさめ玉ふといへ共、せんしやうのごうゐんにや、にはかにほうぎよならせ玉ふ、然れ共ぎよくたいつねのごとくほとほりさめず、しよきやうせんぎ有て、折ふしはくさい國よりわたりし、きんりやうといふさうにんを召出され、きよ

くたいの御なやみかんがへ申上べしと仰ける、きんりやう畏てしよでんをしはしかんがへゐたる所に、ふしぎや御てんの内よりもかゝりけてう一はとび來り、さもやさしくもさへづりて、こくうにこそはの三重とびさりける、御てんに有あふくげ大臣、ことは是はきたいの事共やと色々ふしぎをなし玉ふ、時にさうにんたい今とりのさへづりしこと、ごうんふさん六こんふるとんしそめいとさへづりて候、此義は追討そせいなさしめ玉ふべし、先ぎよくたいをはうふり玉ふ事御むように候と一々そうし申上る、げつけいうんかく御うらかたにまかせ、ぎよくぎをしゆごし御きたう有、かゝりきん中の御さはぎ何にたとへんかたもなし、是は諸置、本多の小太郎よしみつはひととしふうふもろ共に、しんくふかく念佛し、年月も今ははやし助十さいにあまりける、心のつくにしたがひむなしき母をこひこがれ、ばんしのゆかにぞふしにける、よしみつ枕によりそふて、おことは諸はかなく成し母が事、今にわすれずなげくてい、かへすくもおろか也、もはや此世になき身也、あらざる事をなげかんより、念佛申るかうせよ、みら

いは佛のちかひにて、ごくらくにてかならずたいめん申べしと、さまざまいさめ玉ひける、地あらむざんやよし助は、父上に打むかひ儲はもはや此世にて、戀しゆかしの母上に、たいめんは叶はじとや、あら浅ましの我身やとうれいふしきへ入やうにぞ、なげかるゝ、こはよしみつもおうちうば、やれよし助御身がやうにこがれては、命もさらに有べきか、なげきをとめよと引おこし見玉へば、なむ三ぼういきたへてなかりけり、やれよし助くとしがいにかつはといだき付、かりよべとさけべとかひぞなき、何と成べき浅ましやとうれいふしりうていこがれてなく計り、地よしみつ涙の隙よりも、あゝ儲ふびんや此若が、過しなつの比よりも、地やせおとろへ申せしを、ただわれいのわざよと思ひしに、儲は母を戀こがれ、命のうするも思はず戀わびて父が事をば思はぬか、あゝ情なのよし助やと、むなしきしがいをおしうごかしくうれいふゝ我もきいよと、なく斗りげにこと、のるふしはりとぞ聞へける、地あまりの事のかなしさに、佛のおまへにひれふして、くはこしやうより付そひて、あはれみまします某に、歎きをかけ玉ふは、

佛も見はなし玉ふかと、ないつくどいつさまざまとうれいふしうらみかこちて、なげかるゝ、こはあら有がたやあみだ如來、誠にたへ成御聲にて、尤也然れ共くはこのごうのがれがたき道のする、まよふ心でなげく也、我ほんくはんの誠に二たびそせいなさしめんと、かりの玉ふみこゑもろ共にこくうに、あがらせ玉ひける、かりよしみつをはじめ夫婦の人、是はいか成御事ぞや、よし助にわかれなけくうへ又佛にもすてられて、此身のはてはいかならんとうれいふしふかくの涙は、せきあへず、地され共佛の御ほんぐはん、又よし助が身のほとほり、さめぬも如來の御かごと、世にたのもしく念佛申、佛力きどくを待おはします心の、うちこそ三重あはれ也、是はしやばの物語、地むざん成かなよし助は、母の事のみ戀わびて、かりのうきよをはなくも、地めいどのたびにまよひゆく、うき身は何としでのやま地今ぞはじめてみつせ川、すへはいづくと、しらなみの、こころぼそくも打わたり、地ひろさかはらにびやうびやうと、行道さらにわきまへず、あんかんとしてゐたりける、こは然る所にやんことなき、御僧一人來ら

せ玉ふ、よし助見奉り御そばに立より、かんことはなふ御僧さま、こはいづくにておはします、みづからはようせうにて、母上さまにすぎおくれ、覺へずあこがれ申せしが、夢共なく此所へまよひ來り候、若も母上の御行衛しろし召れ候は、おしへて玉はり候へとうれいふし涙にくれてぞ、おはします、ことは御僧聞召、お、偕ふびんのおさなきもの、むなしき母を戀わびて此所へまよひくる、汝は佛のあはれみましますゆへ、此たびはしやばへ歸るぞ、母戀しくはなむあみだ佛とみやうがうをとなふべし、我六たうのゐんだうし、地地ぞうぼさつとの玉ひてすかすふしけすが、ごとくにうせ玉ふ、かりよし助心ぼそくもしほくと、涙にくれてゐたりたり、地猶もあはれをとめしは、ことは一天のあるじくはうぎよく天にて、ことのあはれをとめたり、いつしかしやばのゑんつきて、めいどくはうせんのたびにおもむき玉ふ、涙を道のしるべにて、よろぼひ玉ふ其ふせい御いたはしきしだいなり、ことはよし助見參らせ、我も母の御事をこがれはてにし身のなけき、一しほあはれいやまして御そばに立より、是はいか成御かたぞや、

かく物すぎき道のする召つれ玉ふものもなく、まよはせ玉ふいたはしさよ、其時みかど御かほばせをあげ玉ひ、あ、偕やさしきおさない哉、いか成國の人成ぞ、ことはされば某はしなの、國川中島と申所に、本多よしみつが子によし助と申者成か、母の事のみなけく身の、ふりよにまよひ來り候みかど聞召、偕々ふびんの有さまや、ことは偕みつからしやばにてはくはうぎよく天王とて、一天のあるじなり、日比はけいしやううんかくにうやまはれし身なれどもめいどの道とてたれ人か、付そひ來るものもなく地こゝに來りて有けるは、猶此するはいかならんとうふれいしぎよいをしぼらせ玉ひける、ことはよし助も天王の、地御しうしやうを見奉りはつみふし共に涙はせきあへず、偕々もつたいなき御有様やな、さいせん御僧の來らせ玉ひ、みづからに此度はしやばへ歸んとの玉ひて、行がたしらずうせ玉ふ、某みかどの御供申しやばへ歸り申べし、いざこなたへと申所へごくそつ二人はせ來り、おそし／＼天王、はや／＼いそげといふ聲のかゝりいかづちのごとくすさまじくいたはしげもなくひつたて、あゆめ／＼とさいなみ、行が

たしらすつれ行しはおそろしかりけるしだいなり、
ことはよし助此よし見參らせ、かんことはなふおそろ
しやとばうせんとしてゐたる所へ、有がたやあみだ
如來こくうよりらいげん有、いかによし助汝しやば
をさりしゆへ、父よしみつおほぢうば、しうたんは
なはだかぎりなく我むかへに來りたり、はやとくそ
せい致すべし、よし助承りこは有がたき御事かな、
しかしたゞ今天の君くはうぎよく天王とやらん來
らせ玉ふを、さもおそろしき物參り、ならくとやら
んへしづめんとひつ立つれ行候が、御いたはしきし
だいなり、あはれ佛の御ぢひに、かのみかどをも諸
共に、ともなひかへらせ玉はれと、うれひふし涙をな
がし申さるゝ、ことはよらい聞召れ、されば其みか
どは生々世々のつみふかく、地ごくにださいせしむ
るたすくるけちゑんなきぞとよ、よし助承りむざい
ごうふかきゆへ地ごくにしづみ玉はんが、何とぞ佛
の御ちかひに、御たすけ候へと涙をながし申ける、
佛かんじ玉ひ、諸々汝はおさな心にじひふかきしよ
ぞん哉、さすがよしみつが子程有、ふかき心をそむ
くは我ほんぐはんむなし、叶はぬ迄もゑんわうにこ

とはつてたすけ申べし、かりいざこなたへとの玉ひ
て、よし助と諸共にゑんまの、てんへぞ三重らいげん
有かりかくてゑんま王ぐうには、十五十たいあきら
かに、ことはきよくぎにうつらせ玉へば、くしやうじ
んさゆうに立、こんさつてつさせんあくのあさきふ
かきをたゞし玉ふ、然る所へごくそつ共、みかどを
ひつ立ていしやうに引すへ、なんゑんぶしう大日本
のあるじ、くはうぎよく天王と申惡人召つれ參り候
と申上るゑん王はつたとにらませ玉ひ、汝しやばに
有し時身のゑいぐはにごせをしらす、地獄極樂も、
こんじやう一たんと打やぶり、月ごとのさい日に佛
くやうの心もなく、しきしやうこうみそくほうの六
ツの道におこりしざい、たとへがたき惡人なり、し
ゆごう地ごくにおとすべし、ごつそつ共承りあらけ
なくひつつかみ、ほのほの中へなげ入しはめもあて
られぬしだいなり、ことは然る所へ有がたやくはうみ
やうかくやくとてらし、あみだ如來よし助もろ共ら
いげん有、ゑん王も十王共に、ことごとくぎよくざ
をたつてがつしやうある、時に佛の玉はく、日のも
とのあるじくはうぎよく天王は、生々世々のつみふ

かく、惡道だざいの人たり、然るに其人をへんしが聞くげんをやめてたび玉へ、ゑん王承り、かれは大惡人ゆへ、只今しゆごう地ごくへしづめ候、それ少の間引出し佛の御めにかへ奉れ、ごくそつ畏てこつぼう取のべほのほの中をかきわけ、さしつらぬき引あぐれば、たいやけずみのごとく成を、大地へどうどなげつけ、くはつくととなへければ、たちま地天王となり玉ふ、あはれ成けるしだいなり、こゝに時に如來の玉はく此天王は惡ごうさかんにしてせん心なき人なれば、惡しゆにたざいれきせんたり、然れ共我はうべんを以てかれが惡心たちま地善心とてんじ、まつせの衆生のけちゑんなさしめん、此度はそせいなさせ玉へと玉へば、ゑん王さき立て佛のきんげんゐはい申はもつたいたく候へ共、此天王は一生の内、佛みやうとなへしこともなく、じひせんごんはかりにもなし、たいちうや惡ごう計りつみかさぬる大惡人にて候へば、御りやくにももれ申さん、すておかせ玉ふべしと、たつてしたいぞ申さるゝ、其時よし助おとなしくもゑん王に打むかひ、何かどのざいふかくましゝて御たすけ成がたく候はゝ、

みづからを替りに是に残し置玉ひ、天王様をしやばへ返し玉はれや、いかなとなれば一天のあるじ、此君そせいしまさばはんみんの悦び、又みづからはしやばに有てもかひなき身にて候へば、みかどのくげんに替り申さば、しよにんのため身の悦び、はやとくかへして玉はれと思ひこふでぞ申さるゝ、ゑん王聞召、やさしくも申たり去ながら、かうげひんふくはしやば一たん、めいどの道に王もなし、たつときいやしきにかぎらず只善惡をわかつなり、汝が父のよしみつはつねに如來をたつとみ、念佛ふかくしゆするゆへ其くどくはうだいにて、汝もまた惡道におとすべきゑん少もなし、又此天王はしんゝしごくの惡人なれば、如來の御ちかひも叶ひがたしと、大きにいかりの玉ひけるはなふにがゝしくこそみへにける、こゝは其時天王よし助に打むかひ、偕も偕も御身は佛のちかひにあづかりて、地めでたうそせいし玉ふかや、我はざいごうふかくして、かくおそろしき地ごくに残る、おことやさしくもちんをたすけん心ざし、かへすゝも嬉しけれ、しやばへ歸り候はゝ、はやく都へ上りつゝ、くぎやう大臣に此有

様を語りきかせ、跡とふらふてくれよとて、ねんどろに申てたべ、あゝうらやましのよし助やとうれいふしふかくなげかせ、玉ひける、時にゑん王よしなき事にじこくうつる、はやと、地ごくへださいせしめよ、ごくそつ承りすでにみかどをほのほの中へおとさんとす、時に如來しばしとおしとめ玉ひ尤なりことはりや、然れ共此天王はちやうごうならず、あまり惡ごうつもるゆへ我はうべんにて、まつせの衆生さいどのため、かくのごとくひごうにおとす、其うへよし助四おんをおもんじ、身がはりの心ざしもせつなれば、此上は天王の替りに我地ごくへださいせん、すみやかにみかどをゑんぶへ返し申せと、あらたにきんげんましゝて、ほのほの中へとび入玉へは、みやうくはへんじてりやうふうと成、しやうれんげにすぐひ奉るはなふ有がたかりけるしだいなり、みかどあまりの忝しけなさに、しんぐふかくなむあみだ、佛くとかうじやうとなへさせ玉へば、かゝりさしにもあらきゑん王、十わう十たいくしやうしん玉のかふりをかたふけ、一念ほつきばだいしん、かく有がたき念佛のきやうじやとならせ玉ひたるみか

どをば、地ごくへおとさん事もつたいなしゝとくとしやばへ返し玉へと、かゝりの玉ふと其まゝに、まのあたりことごとく地ごくやぶれてしやうじやう成、じやうどと成げに有がたきしだいなり、然る所へ、かゝりこくうにおんがく聞へ花ふりくだり、ゐきやうよもにくんじ、しうん一むら立來る、ことは佛はみかどよし助をいざなひ、いそぎしやばにかへり、ぼだの道をすゝめんとかの雲にせうじ玉へば、みかども共によし助も、如來のさゆうにいざなはれ、雲にせうじおはします、一しやうふかしぎ念佛の、くはうたいむへんのくりきにて、惡しゆのなんをまぬかれ玉ひ、ふたゝひそせいおはします、みたてうせの大ひぐはん、有がたし共中く申、計はなかりけり

第五

かくて其後、ことは都だいいにはみかどほうぎよならせ玉へど、うらのおもてにまかせ日夜しゆごしておはせしが、三日と申たつの一てんにみかど御夢のさ

めたる心地にて、よみがへらせ玉ひける、きんちうの御悦びたとへんかたはなかりけり、ことはしばらく有てみかどりんげんなされけるは、ちんすでにしやばをさりめいどくはうせんのたびにおもむき、しゆごう地ごくにだぎいせしを、ふしぎのゑんにてそせす、それに付しなの、國川中嶋、本多よしみつ其子のよし助、かれ兩人を尋出しそきさんだい致べし、はやとく／＼とのせんじなり、中なごんゆきさだきやう、かいりせんじのおもむき承りはやしなの、國へぞ三重いそがる、是は儲置、ことは大じ大ひのみほとけよしみつがちぶつだうへいらせ玉へば、よし助やがてよみがへりおの／＼悦びかぎりなし、去程に都よりちよくし來らせ玉ひ、よしみつにたいめん有、せんじのおもむき相のべ玉へば兩人お請を申上、忝じけなき御事と、かいり悦びいさみそれよりもやがてちよくしと打つれだち都を、さしてぞ三重のほらるるきんりになれば、ことはゆきさだの卿先立てかやうかやうとそうもん有、其時みかど忝くもぎよれんを高くまきあげさせ、親子の者をゑいらん有、いかによし助めづらしや、汝めいどにてたいめんせし時、

ゑん王のまへにてちんが替りに立て、地ごくのくるしみをうくべしとなげきわびたる心さし、生はかはるとわするまじ、其上佛の御ちかひにて、二たびしやばにかへし玉ふも、ひとへに汝らがかげなり、ゑいかんのあまりにぎよいをしほらせ玉ひける、ことはけいしやうんかく諸共に、皆かんるいをぞながさる、かさねてのせんじには、いかによしみつ、何たるしゆくせんにて汝おやこの者共は、佛の御じひにあひ奉るぞ、しさいを殘らずそうもん申せとのせんじなり、よしみつ承り、畏てなにはのいそべよりもり奉りて今迄の次第、いさいに申上ければ、みかどゑいぶんまし／＼て、儲々有がたき御事や、さやうに成御れいぶつおろそかにしては叶ふまじ、いそぎみだうをこんりうし、まつだい迄も念佛の、せうこにあがめ奉らん、先よしみつおやこの者はしなの國にて八百町下さる、儲みだうこんりうのじせつはちんもぎやうごうなし奉り、御れいのためはいし申さん、とく／＼ようゐ仕れと、御れんにゐらせ玉ひければ、くぎやう大臣いさみをなし、かいり六ゐの臣に仰付られ、山々にそまを入、かちばんじやう、

ふしんけんごにしの、國、川中嶋に、みだうこんに有けるは、有がたかりけるきほひ三重しだいなり。諸大がらんさうぞくの、ち引の右はしらだて、むね上さまぐいはひごと、こはたゝみのたうりやうそくたいの、それぐのゐしやうをちやくし屋のむねにあがり、しよてんじん地じんしゆごじんちしゆごじんへ、そなへしみきを奉り、諸日本の御神のこらずなふじゆましぐて、みだうあんをんならしめ玉へと、めでたきむねのつちのおと、ちやうぐと打おさめ、かゝり楮屋のむねにそなへたる、いはひのもちいとるぐに、きせんくんじゆの其中へ、花めづらかにまきにける、ぎしきの程こそ三重ゆゝしけれ、かくて其後、かゝりみたうのふしんけつかうに、いらかを見がき出來す、すでにわたましあるべきと、忝くも天王は、けいしやううんかく、もろ共に、ぎやうがう、有こそ三重有がたけれ、かゝりおんごくはたうのらうにやくなん女、袖をつらねてさんけいす、かくて如來のみづしをば、ないじんふかくうつし奉り、七ぢうのみちやうをかけ其外てんがいはたけまん、百八のとうみやうは天もかゝやく計りなり、こは其

時みかどはぎよくざを立て、佛前にあんざましぐて、諸々有がたきじせつに參りあひ、かゝるたつきみほとけにあひ奉り、めいどあくしゆにしづみしを、たすけ玉ひて佛道に、みち引玉ふ御ちかひ、有がたきみのりかな、此度のごしやうあんをんにぐらくじやうどへむかへさせたび玉へ、なむあみだ佛との玉ひてすへふししばしらいはいなされける、かゝり然る所へふしぎやな、のどか成ける雲まより、天人やうがうましぐて、こはみかどにむかひ奉り、心にねんずる佛のざ、あたへて歸る西方の、一たびふんじんふかとくの、つげを待へて歸り玉へと、ひかりかゝやく玉のざを、みかどのおまへにそなへ置、いかによし助みづから誠は御身が母成が、よしみつしんじんふかきゆへ、父母諸共佛道のゑんにひかれて其くどく、身にうけてみづからも成佛す、西方ぐらくじやうどにて、親子三人諸共に、さとりのだいめん致べし、いよく念佛けだはなく、如來をたつとみおはしませ、かゝり是迄成との玉ひて、しまわうごんの姿をげんじすかすふし雲るはるかに上らるゝ、かゝりよしみつ親子おほちうばかんるい袖をしぼら

る、ことは其時みかどよしみつに打むかひ、ちんす
でにくはんかうせん、御いとまごひのため今一度佛
をおがみ奉らん、それ／＼とのりんげんなり、かゝり
畏て佛前に立かゝり、七糸のみちやうをしだい／＼
に三重、まきあくるみかどをはじめ奉り、きせんくん
じゆのらうにやく男女一どにばつとぞかんじける、
ことは時にみかど佛前に向ひがつしやう有、誠にち
ん此所にとゞまり、かゝるたつときみほとけを朝夕
ねんじ奉らば、身の悦びに候へ共、ばんみんの爲な
れば、都へくはんかう仕る、ごせをたすけてたび玉
へ、ひとしほ御なごりおしく候と、ぎよいをしほらせ
玉ひける、ことは時に如來、みめうたへ成御聲にて、
わかれをおしむ心をかんに、明らかにらいらんす、
一たいふんじんのつげをまつ、其けいやくにちさん
せよと、の玉ふとひとしく如來ゆるぎ出させ玉ふ、
かゝり誠に西方ごくらくのあみだ佛の御ないぢん、こ
もらせ玉ふ御そんよう、げにもたへ成きどくなり、
ことはみかどあまりのたつとさに、偕も／＼みやうが
なやと、偕ないぢんを御らんするに、よしみつあ
んの御佛は、みづしの内におはします、今迄あらぬ

御そんよう、ぶんして出させ玉ひしはふしぎといふ
もあまり有、かゝり偕天人のぢさんせし、玉のたいぎ
に御佛をすへ奉り、ことはないぢんの御ほとけと今此
二佛をおがむにぞ、すこしもちがいはまします、
それよりもみかどは、ぶんじ玉ひし御佛をちやうだ
い申くはんかうある、今のらくやう如來寺のほんぞ
ん是也、かくてよしみつその名をしがうとさだめせ
んくはうじとかうしちうやねんぶつけだいなし、ぶ
つほうはんじやうありがたしともなか／＼申計りは
なかりけり

善光寺終

あこぎの平次

第一

さても、そのうち、ことはいせのうみにあこぎがうらにひくあみも、たびかさなればあらはれぞする、そも此ゑいかのたいがいをいかにとたづねもとむるに、にんわう四十九代くはうにんの御よにあたつて、たんばの國あまだごほりのちうにん、山ぶきしやうげんたかのぶはきんがうをうちしたがへ、あまたのこほりにじやうくはくをかまへ、地一かちうぎうどうとしてをくりかたを、ならぶるものもなし、ことは偕いゑのしつけんには、あら川だてゑもん時とを、むらかみかげゆのすけゆきはる、此ゆきはるはきよねんちゝにおくれしゆへ、じやくねんなれ共げんぶくし、おやのゆづりを取おこなふ、さいちきりやうのじんたいなり、ころはほうき四年菊月下じゆんの秋のたや、地かりほすいねもいつのまに、たはらかさねて殿さまへ、御ねんぐおさめとぎゝめいて、ことは御りやうないの百しやう共、ぎうばになうまい

付大手の口にいちをなす、其時じやうないよりだてゑもんかげゆの介大手の口迄出給ひ、百しやう共に打むかひ、おゝたいぎゝゝ、たうねんはいつゝより五日の風十日のあめが下、まづ十ぶんの世の中ちんちやうゝ、いそいでおくらへおさむべしと、地かんちやうにんにいひわたし、みくらのとびらをしひらけば百しやう共は我さきにと、むらゝのはたじるし、ことは是はそんじやう其むらとたからによばはりて、はるかにひろき大手より、地すまんのたはらをこびしはにぎはし、かりける、大三重しだいなり其日もすでにたそがれ時、おくらおさめの御ねんぐも、残りなくおさまれば、ことはかげゆはあら川にむかひ、先もつて御ねんぐまいつゝがなくおさまりて、一しはめでたく御ざ候、某は御前へ出御きげんをうかがふべし、御じぶんには御くらうながら御くらをとくとしめさせ、あとより御こし候へと、地れいぎをのべてゆきはるは御せんをさしてぞあがるゝ、ことはしかる所へしづのおの二人、ほうかぶりにてかほをつゝみ、地あさのころもを身にまとひ、たはらおふせしうしのつなしづかにおふて來りける、

ことはだてゑもんきつとみて、やあ、それへくるとみんばら、みればなうまいとみへしが大手口におろしもせで、御じやうない迄うしを引こみあまつさへ日くれにおよんで来るは何事ぞ、今日のなうまいは残らずかんじやう相すんだり、明日さうくもちて來れと、ことばきびしくとがめられ、二人おくするけしきもなく、いや我々はかげゆの介さまの御存のもの共也、かげゆさまにおめにかゝりかへりたく候と、じやうないさしてゆく所を、あら川あとへ引もどし、聞わけもなき百姓めら、かげゆの介計が此くらのしはいするか、かくいふ某はだてゑもんとて御くらの事は措置、一かちうはたてふとふせふと我しだい、いらざるうぬらがかげゆよばはり、いそいであとへ立かへれと二人をとらへほうかぶり引ちぎれば、二人共に女也、あら川あんにさうゐして、おのれらは何ゆへおつとにはさまをかへしと、よくくみればこはいかに、一人はお姫さま、一人はめのとなり、こはけうがる御ふせいと、地たがひにかほを見あはせて手もちぶさにみへにけり、ことはあら川打うなづき、ゑゝがつてんたりすいしたり、偕はぬれをや

らせらるゝな、きこへたり、此たはらはなうまいにてはあらずして、かげゆをつりだすつりばりよな、人こそおほきに此時とをが見付しうへは、もはやぬけてもぬけさせじ、兄殿さまへ申上御れうけんにまかせ申さん、とはいひながらお姫さま、さりとはきよくもなや、某日ごろ心をかけ、一めいをなげうつてとやかう申上つるに、つれなきおことば計にてかへつてじめんをあたへ給ふ、今にても御心しだい、わが心にさへ入給はゞ、只今の事共はおんみつにいたし申さん、いやかおゝかの御へんじを、はやうきかんと御袖にむつれてせひにくどきける、ことはちか姫はつとかほ打あかめ、なふはしたなのいひ事や、げにや戀ぢのならひにてたかきいやしきかぎらね共、思ふと思はざりつるとあひゑんきゑんが有物を、にくふていやとは思はねど、はづかしながらはじめよりかげゆの介に心をよせ、地とけぬ思ひはみだれがみいひかひなくは思へ共、地是も世上に有ならひ、ことは御身の戀はかなふまじ、ふつく思ひ切てたべと、地さはりさはらぬ御ことばに、ことは時とをさらに聞入ず、此上はいつ迄もおゝと仰の有迄はと御手

をとればふりはなち、又取つけばつきたふし、はぢしめらるれど時とをはなをしなだれてぬれかゝる、ことは所へかげゆ立歸り、やあ御倉のまへにて何ものなればたゝずむと、とがむることばに時とをは、はつとひいてとうわくし、かなたこなたとうろたへまわり、くらの内へにげこんで、内よりとびらはたとさしためいき、ついであたりけり、ことはかげゆいよいよあやしみて、何やつなればへんじをせぬと、姫をひしととらへ、御かほをきつとみてはあ、是はたとびしさり、めいわくさふにうちくともみ手をしてこそゐられけれ、ことはちか姫御らんじ何御身はかげゆの介なふつばねあれ見給へ、儲々いんぎんらしいていかなと、つかく立よりかげゆのせなに打もたれ、ことはゑゝ戀しらずどうよく人、思ひくてもみづからが日比おくりし玉づさの、一どのいなせも涙川、君ゆへしづむわが心、あはれをくみて給はれと涙ながらにの給へば、ことはかげゆわぢく身ぶるひし、こはもつたいなや姫君の、かゝるいやしき御すがた、人めもいかゝ候へばはやくおかへりなさるべし、某ふせいにもつたいなしとつゆせういんする

けしきなし、めのと見参らせ、是申かげゆ様、かく計姫君の御たいせつに思召、兄様のめをしのび是迄御出候に、つれなき今の御返事や、此戀かなはぬ物ならば二たびおへやへ歸らじと思ひ切てましますに、御心にしたがり給へとことばをつくして申ける、ことは其時姫君只今めのとがいふとをり、返事しだいにしあん有かげゆいかにとの給へば、はてせひもなし此上はあすにも殿へもれ聞へ身はいかやうに成ても、仰はもれじと申さるれば、姫君うれしく、それでこそ本望なれ、しからばいつくの夕さがたこなたよりもたよりせん、かならずあふせのけいやくと、たがい手に手を打かけてとちうのゑんこそふしぎなれ、ことはめのと此よしみるよりも、うしに付たるたはらより御小袖うすぎぬ取出し、誠に戀には身をやつせとよくも申ならはしたり、地いざおしやうぞく召給へと其身も、共にぬぎかへて、地人めもいかゝお歸りと、御供申て立かへれば、ことはさいせんよりだてゑもんくらの内にて聞すまし、くらのまどよりさしのぞきこりやくかげゆの介、もつたいたくもお姫様をそびき出し、ふぎをはたらくりよく

はいものせうにんは此だてゑもん、後日のためにこ
とばをかはした、おぼへてゐよとよばはれば、かげ
ゆおとろきなむ三ぼう、侍みやうり是迄と、じがい
とみゆるを姫君あはておしとめ、ちつ共きづかひ
し給ふな、さいせんより時とをがわらはにふぎをい
ひかくれど、其戀かなはぬへんねじにあのわるがう
を聞てたべ、かげゆ聞もあへず、儲はさやうに候か、
ゑゝおのれ人でなし、只今是へ引出し打てすてんは
やすけれど、あつたらしき御からう殿にやいばをあ
てんもいたはしゝ、ゑゝくつきやうのしあんこそ、
此とびらにぢやうをおろし、四五月も此内にてたい
くつをさせ申さんと、ゑびぢやうをびんとおろせば、
時とを内よりこゑを上、なふ是かげゆ殿、今申せし
はしんじつには申さぬなり、こゝをあけて給はれと
大ごゑ上てよばはれば姫君めのおかしくて、いは
れぬ事をいひ儲よいなりのとわらはれて、はぢしら
ずのだてゑもん、まつびら御めんとわなゝけば、か
げゆ立よりとびらをひらき、お侍のきよごんはあら
じ、お歸りあれと申さるれば、時とをおづゝ立出
て、申お姫様、只今某申せしをかならずおきにか

られな、わるい時は有ならひと、いひすてにして行
所を、かげゆしばしと引とめ、いよゝさいせん
申とをりいごに此事あらはれば御じぶんをあひてに
いたすぞ、あれまだくどいといひすてゝたがひにわ
かれて三重立かへる儲時とをは、こゝはわが戀かなは
ぬ其上にかげゆにぢめんをあたへられ、むねんいや
ましこらへかね、大將たかのぶの御前に出、儲もか
げゆの介行はるは君の御めがねをかすめ、御妹ごち
か姫様をそびき出しふぎをはたらき候を某たしかに
見とゞけ候、此事打すておかせ給はゝ、世上のひや
うぎも口おしゝ、只姫君にとがはなし、ともかくも
かげゆの介義を仰付られ候へといこんをふくみざん
げんす、將げんりつぶくかぎりなく、ごんごだうだ
んのしだいなり、先々姫がめのと、はやとをめせと
の給ひてをくりやがて、つかひを立らるゝ、何事やら
んとはやとの介、御前に參上す、こゝは將げん御らん
じいかにだゝ秋、汝を姫に付をくは何のためぞ、よ
くも姫にふぎははたらかせし、おのれきつといひわ
けせよ、さなくば其ぎをたゝせじと、たちに手をか
けの給へば、はやときもをけし、こゝは御上る共お

へぬ物かな、姫君様にふぎ有とは何人が、申上候といへば、時とをぎを打ていふまい／＼はやとの介、姫君にふぎ有とは某が申上たり、かばかりの一大事をめのとをかうぶる其身として、しらぬといふて一ぶん立か、あのうろたへ侍がとあつこうすれば、はやとの介たちのつかに手をかけて、やああら川殿、とかうの事はおつてのせんぎ、うろたへものとは聞にくし、いぬたかとてもはうばいならずや、八まん御身がしつけんがほ見たくをりない、さあ今一ごんいふて見よと、とびかゝらんとする所を、人々是はと引とゝむ將げんいかつてやあはやと、おのれがおちどをおしかくしわがまへ共はいからず、すいさん千万手うちにと思へ共、かたなげがし此上は、七生迄のかんだうぞ、あれ引立よとの給へば、はやと涙をはら／＼とながし、はああさましや日比はちりよ有大將なれ共、ねいじんにきをうばはれ、御家のめつぼうとをからじ、よし／＼かゝる世に有て何を頼みにぶゆうをはげまん、是迄なりといふまゝに、さしぞへぬいてもとゞりはらひ、いとま申と其ぎより行がたしらずに成にけり、ことは大將大きにはがみを

なし、かげゆをめせとの給へば、時とをこゝは大事と思ひ、仰にては候へ共、御いもうとごのあくみやうはまつだい御家のかきんなり、某の存るには此御せんぎはさしおかれ、何とぞかげゆになんたいを仰付られせつぶくいさせ候は、お姫様もつゝがな／＼くことおんびんに候はんと誠らしげに申にぞ將げんげにもとどうしん有、しからばない／＼聞およびし、かげゆがひさうのひれう丸といふたちを所望せんにいなといは、それをつみに取ておとさん、地此義よろしく候はんとかげゆが、たちへつかひ立、今やおそしと待所に、ことはかゝるたくみとゆめにもしらでかげゆの介は、ぢうたいを取もたせやがて御前へ出らるゝ將げん見給ひ汝をよぶ事よの義にあらず、かねて聞つたへしめいさくを某望に思ふ間、いそいで我にさし上よと、詞もいまだおはらざるに、時とをすゝみ出、偕々めいさくは持べき物、殿様の御所望とはねがふてもなき所、さう／＼さし上候へと、そばからいはれぬ付やきば身より出たるさびとかや、ことはかげゆすいりやうせしか共さあらぬていにて、あら川殿の御取なし、近比しうちやくには存れ共、

おやせんぞよりつたはりて某迄は七代、一代に一どならではひけんのならぬたちなれ共、ぎよゐおもきによつて是迄はぢさんせり、御所望と有だんはまつびら御めんかうぶらんと、しきつてじたい有ければ、時とをいよくかつにのり、こはあたらしき一ごんかな、たち刀をたしなむはたゝかひをはげまんだめ、一代一どのたちならば、何のやくにか立申さん、先其たちをはいけんせんと、ゐたる所をずんと立、かげゆにしきのふくろよりくだんのたちを取出し、さいせんもいふとをり、ひれう丸と申にはいはれ有たちなれば、おろそかに見給ふなと、時とをにわたさるゝ、あら川うけ取なんのいはれか有べきと、いひもあへぬに此たちおのれとぬけ出て、ひれうのごとくひらゝと、其ぎをひらめきまはりしはすさまじかりける三重しだいなりさしもの大將はじめとし、時とを残りの侍共、皆々其ぎにたまりかね、おくをさしてにげ入れば、くだんのたちはひらゝともとのさやにぞおさまりける、こはかげゆうれしくをしいたいき、やあひけうなり時とを殿、とくと御ひけん候はで、いづくへしのびましますぞ、こともおろか

や此太刀はゆうりやくていより相つたはり三ごくふ二のめいさくをけんゐをもつてとらんとは、思ひもよらずおよびなし、忝くもひだりには、正八幡のぼしすはり、右にはくりからふどうの姿あくまかうぶくをんできたいさん、いとま申てかたゝとわがやをさしてかへらるゝ、誠に一しよけんめいの、あやうきなんをのがれしは只此たちのゐとくなり、こゝんきたいのめいさくやと上から下にいたる迄みなかんせぬものこそなかりけれ

第二

さるは、どに、地山ぶき將げんたかのぶは、こはかげゆがたちにきをとられ、行春打べき手だてさへ思ひの外にしぞんして、いよくりつぶくかぎりなく、御いもうとちか姫をよび出し、偕々おのれにはいか成天まが入かはり、あのいやしき行春に何とてふぎはなしけるぞ、我家のつらよごし只今手にかけてすつるぞ、かくごせよとの給へば、姫君おくするけしきなく、こは思ひもあへぬ仰かな、我身にふぎの候は

ばともかくも成申さん、それにはせうこばし候かとあれば、たかのお聞給ひ、おゝせうこ迄もなし、だてゑもんがぢきに見たる此上はのがれはあらじとの給へば、姫君かさねて、何だてゑもんが申せしとや、ゑゝはら立や此上は何をかつゝみ申べき、かねぐゝあの時とをがみづからに心をかけ、たびゝゝふみをおくれ共、いふても久しきからうやくおみに立じと思ひしに、其戀かなはぬはら立に、とがなきかげゆとみづからとみつつうと申せしかや、時とを召よせ今一ど、とくとせんぎし給はれと涙にくれての給へば、ことはたかのお聞給ひ、何と其詞にいつはりなきか、時とをがふみを付しは誠成か、其時めのとつと出、しよせん誠かいつはりはこよひにてもお姫さまより時とをへおとづれあれば、さつそくしのび申べし、それをせうこに御せんぎといへば、たかのおとくと御しあん有、しからばひそかにはからふべし、皆々をくへとの給ひて打つれおくにぞ三重入給ふすでに其日も、地くれしかば、うつゝなくもだてゑもん姫君よりのおとづれに、ふはと打のるこひかせは、地わが身ながらもぞつとして、うすぎぬふかく

引かぶり、姫君の御ねまへしのび入こそあやうけれ、ことはかねてあひづの事なれば、めのとのこがうつゝと出、なふおそやさいせんより待わびて候に、おとせでこなたへゝと、姫君のふし給ふ、一まの内へ手引して、しつぽと口縫せ給へやと其身はかつてへ入にけり、ことは時とをばうすぎぬ取、びやうぶ引のけみてあれば、ともしびほそくそむけつゝ、地らんじやのかほりたきしめて、よるのゑもんを引かづき、ゆたかにふさせ給ふてい、たとへいか成あらゑびすも心たゆたふ計にて、ことはさしもの時とをむねとゝろき只わちゝとぞふるひける、され共心をおとしつけ、姫君の枕により、いつ迄心をおかせ給ふぞ、誠にあけれ戀こがれちづかのふみを参らせしに、御返事もなかりしゆへ、うらみは君に有そうみのふかきかくごをきはめしに、こよひしのべの御しらせ誠とさらに思はれねど、せめてはゆめに成共と、是御らんせよ時とをが女のていにさまをかへ、是迄しのび参りたり、今はなさけのおことはに、あづかりたふ候と思ふ入てぞくどきける、ことはされ共とかうのいらへなし、時とを今はたへかねて、うへ成きぬを

引のくれば姫君にてはあらずして主人たかのぶにておはします、時とを何共せんかたなくすぐと立のきてあたまをかいでぞゐたりける、ことはたかのぶ御らんじいや是御からう殿、けつかう成有様や、かすならぬ某ふせいのいもうとに御心をかけらるゝだん、忝しとや申さん、又ぶさほうとや申べき、かやうのふぎはおしかくし、ゆへもなきかげゆの介をころさせんとはしけるよな、おのれ何共おこなひやうのない悪人めと、たちに手をかけ給へば、時とをまなこをはつたといららげ、何と下人が主へ心かくるが是がうきよにないならひか、今迄こそ主と思ひてかんにんしつ、もはや今が百年めと、ぬき打にてうど切、たかのぶはつとぬき合せ、打あはさんとし給ふを、たゝみかけて打程に、こはいたはしやたかのぶはやいばの下にふし給ふ、おつぎにふしたる侍共たちおとにおどろき、我もぐとかけ出る、時とをたちをふりまはしおのれらあしくよつてけがまくるな、たかのぶは悪人ゆへ某が手にかけてたり、おのれら我にくみせぬと一々になぎたふすと、たちひらめかしとんでまはれば、たれかはいぎにおよぶべき、

皆時とをにぞくみしける、ことは時とをみておゝしんべうぐ、先たかのぶがしがいをかたづけおけやとて、おくをさしてぞ入にける、姫君かくと聞よりも、長刀ひつさげ出給ふを、こはめのとすがりおしとゝめ、ゑゝこは何事ぞお姫さま、兄上の御さいごは申てもかへらぬ事、此おこりは何事も御身さまより出ぬれば、かへつてとりことならせ給はん、一まづこゝをしのび出、じせつを待て兄うへの、かたきをうたせ給ふべしひらにぐとゝいむれば、こはいやとよめのと兄うへをみづからゆへにころさせて、へんじもながらへあられふか、たとへ女の身成共せひたちとかけ出給ふを、さまぐにとの申、うら道より御手を引、かげゆが方へとおちて行心のうちこそきほひ三重たのもしき、偕其後に、こは時とをば姫君おちさせ給ふと聞、さだめてよかたへはをちゆかじ、かげゆが方へ行つらん、ついでおしよせてかげゆめにはらきらせ、姫をうばひ歸らん、馬にくらをけものゝぐせよ、時をうつすな汝らと、手せいかりせい百五十きあまだの城を打立てゆきはるやかたへきはひ三重おしよするさる程に、こはゆきはるはきのふ

大將の御前にてあやうきなんをのがれ出、立かへれ共おちつかず、いかゝと思ひゐる所へ、姫君めのとあはたいしくかけ來り、をくへつゝと入給へば、行はるおどろきこはさうくしき御ふせい、きづかはしやと有ければ、めのと右のしだいをかたり、殿のうたれ給ふゆへ姫君是までいらせ給ふと、いひもはてぬにかげゆの介、何殿様は御さいごとや、儲しなしたりくゝとはうにくれて、みへ給ふ、しかる所へ時とをは、一どにどつとよせ來り、こゝは時をどつとぞ上にける、かげゆ一けはきもをけし、上を下へとかへしける、され共かげゆかひくゝしく、先姫君をしのばせ申、其身かるげに身じまひし、けらい共に打むかひ某しばしふせがん内汝らはやくものゝぐせよと、かのちうだいのひれう丸、ゆんでのわきにかいこみ、大もんひらかせ切て出、こゝは只今是迄よせたるは天めいしらすのあら川ならん、をのれはしゆをうち奉り、天に上り地に入共其つみやほかのがれんや、某が手にかけてみらいのくげんをかけさせん、じんじやうにせうぶをせよと、二王立にぞたゝれたり、時とをこまかけよせ、ゑゝ何さいふはかげゆの

介か、くはんたいすぎたるざうごん、それ侍はな、しゆをころしおやをも切て國こほりを切取がぶしのこのむ所なり、ことにおのれにはせんじつのいこん有、命おしくは姫をわたしやしきを出てかうさんせよとさもにくていによばはつたり、かげゆ聞て何と申ぞ、先日はいこんとはくらの内へはひかゝみ、某に出あひて手をすつてわびたるをむねんに思ふは尤なり、いでくゝむねんをはらせんと、ちうだいのひれう丸まつかうにさしかざし、くもでかくなは十もんじ、あたる所をさいはいにはらりくゝと三重なぎ給ふかたなは名におふつるぎなり、ゆきはるはがうのぶし、此たちさきにあたるものいきて歸るはなかりけり、こゝは時とをしきつてざいふり上、ゐとれゐとれとげぢすれば、すきをあらせずぬかくるやに、こゝはかげゆたまらず立かへり、はしつてもんをちやうどさし、いかに汝らとてもせうりかなひがたし、某やかたをまくらにして打じにせんはかくごなれ共、さあらん時はたれ有て姫君の御せんとを見とゝくるものもなし、かなはぬ迄も姫君を御供申おちゆかん、其まにすいぶんふせぎぬけ、跡より來れと有

ければ、さすがかげゆのけらいとて皆一どうにことばをそろへ、何がさて命かぎりに切じに仕らん、はや／＼おちさせ給ふべしとことばすゝしく申にぞ、おゝでかしたりかた／＼、めのとも一所と思へ共、女中二人はあしまとひ、跡より同道して來れと、其身に立やをかなぐりすて姫君の御手を取うら道さしてぞをちらるゝ、じこくうつればかたきのせい、大もんをおしやぶりおめきさけんでみだれ入、やかたのつはもの十七口、□□さらずにはたらけ共、大せいに取こめられ皆こと／＼く打じにす、かたきはかつにのり入のりこみ、ことはこゝかしこと尋れ共、姫もかげゆもみへざれば、偕ははやおちつらん、さあおつかけよ汝らと、たにをわけみねをこへかげゆをしたふてきはひ三重おつかくるさる程に、ことはかげゆの介ふかでの上に女づれ、心計はいそげども、あしやはぐるまのちからなき身の成はてぞ、あさましき、ことはやう／＼にげのび山かげのあんじつを見付つ、まづ／＼あれへ立こへて何とぞかけをかくさんと、いほりの内へつゝと入、御めんといへばあるじの僧、たれ人成ぞと立出るをみれば、姫の御めのと

はやとの介入道なり、たがひに是はとはしりよりさき立物は、涙なり、かげゆ右のしやうをかたり、さだめておつてかゝるべし、我事はともかくも姫君様をかくしてたべ、はやと／＼と有ければ、はやと入道聞もあへず、さこそあらんとおぼへたり、成ゆかん世をみんなためにわざと國のかたはらにためらひてゐたりしに、あんにたがはぬしあはせかな、御身は中々に共ていにてはふせぎあふ事成がたし、お姫さまもろ共にへんじもさきへおちのび給へ、ぐそうあんないいたさんと、うしろの山のこのまをわけ、おちゆかんとする所へ、こはおつてのせいむらがり來り、すはあれにこそあますなと、一どにどつとかけよるを、入道今はのがれぬ所、かげゆすいぶんはたらき給へ、心へたりと姫君をうしろにかこひ、ほうしもろ共むかふかたきにわたり合こゝをさいごと三重はげまるゝかたきはあらてを入かへ／＼、我おとらじとたゝかへば、さしもの兩人つかれはて、ほうし姫を取かこひ、しばらくいきをつぐ間に、かげゆかたきをふせがるゝかげゆたゝかひつかるれば又ほうし入道かはり、ふんごみ／＼切立れば、よせてさう

なうちかづかず、二のあしふんでみゆる所を、兩人一所にわつて入、じうわうむぐうに切てまはれば、ことはだてゑもんはかなはじと、馬引かへしにげ行を、兩人つゝいておつかくれど、かたきはめいばにのつたれば、おくりくもをかすみになげ行、ことはほうしかげゆを引とめ、いふてもかたきは大せいなり、やたけに思ふとかなふまじ、先姫君をかたにかけいづく成共おちられよ、もしやかたきのおひ來らん、某是にふみとまり、跡よりおつ付申べしはやくといさむれば、げに尤とかげゆの介、某ゆかりの候へばいせぢをさしてをち申さん、跡よりおつ付給へやと姫君をかたにかけいせぢをさしておちらるゝ、かけゆの介のなんぎのてい、はやとほうしがたのもしさ、誠に出家侍とは、かゝる事をやいふらんと、しるもしらぬもおしなべてかんせぬ、ものこそなかりけれ。

第三

かくて、そのうち、地ひくはらくゑうはかせのまへ、よのせいすいはたれとても、おもひかけぬぞはかな

けれ、ことはかけゆの介ゆきはるは先年國のさうどうゆへ、姫君をつれおちのびて、いせの國あのをこほりしまがさきといふ所に、少シのゆかり有明の、地月日をかさね姫君とかはす、まぐらのいつとなく、ことはあねたけ姫十二さい、弟とも若七さい、二人の子供をまうけつゝ、地かたはふく成うらのやに、つま木をりたくけぶりさへ、たへまがち成わびずまるゝ、むかしのけみやう引かへて、地あこぎの平次となをよばれ、ことばするどきうら人に、なるればこゝもおのづから、かはらですめるよはの月、我ひとりのみすみかねて、ことは有時平次さい女に近付、偕々世がよの時ならば御身はみだいちか姫共人々にうやまはれ、かうしたうらのかたほとりはうたにならではよまぬ身の、さらば下人も有事か、地あさのころもにやれていら、むかしのかたちもなきていを、みるも中々あさましや、せめては家のちうだいを、かやうの時のことわざに、こはたからは身のさし合せとひれう丸の一こしを、うりしろなしてと思へ共、らうにんものゝたちがたなばかりかひはつとゝいひなして、取つぎくるゝ人もなし、地是に付てもつたへ

置、むかしのつるぎ引かへて、今はよしなきながた
なとは、かやうの事をや申らんとかたり出して、な
げかるゝ、ことは北のかた聞給ひ、あゝよしなきつま
のことばかな、かく成はつるもせんせのごう、玉の
うてなもやへむぐらはへらんやどに、いもとすまば
と聞時は、何をかなげく事あらん、ことはうさもつら
さもわびしさも兄弟のおさあひにまぎれて月日をお
くり候、かならずくかへらぬむかしをくやみかな
しみ給ふなと、心づよくはいさむれど、つまのやつ
れしていをみてそいろに涙をながさるゝ、ことはゆき
はる涙をおさへ、是に付ても侍のしすべき時にしな
ざれば、しにまさるはち有とはわが身の上にてしら
れたり、かゝるむねんのうきすまゐいきて物を思は
んより、しよせんじがいと思ひつめ、いくたびかい
たびかこしの刀に手をかけしが、二人の子供に心く
れかひなき命いきのびしと又さめぐと、なげかる
る、地いたはしや竹姫は、ちゝのかほを打まもり、
我々兄弟有ゆへに、ちゝうへ様母上にかくうきめを
みせ参らす此おんを何とてほうじ申さんと、おと
なしやかにの給へば、おゝよくいふたり竹姫よ、さ

すがはちゝが子にて有、おつ付世にも出たらば、今
のうさをもむかしがたりになすべき物、あゝよしな
き事に時うつる、もはや日もくれこよひは月もさへ
わたりさこそれうの有ぬべし、なんでもこよひはし
あはせし、おつ付かへらん竹姫と、出させ給へばとも
若は、ことはなふちゝうへ様いづくへゆかせ給ふぞ
や、我もゆかんとすがり付、平次すかして是とも若、
ちゝはいつものうらへ出うを、取て來るなり、こよ
ひも又おことがすきのゑびを取てゑさせんとあれ
ば、おさな心に悦びて、あのゑびとあかいかにとを給
はれや、よくくゝるすをいたさんと母のそばへ立か
へれば、平次につこと打わらひおゝせつかくるすを
いたすべしと、立出んとし給ふを、北の方はしり出、
ことはあとせいとはいひながらいつゝよりもこ
よひは扱、御すがたを見おくれば、何とやらんあら
れぬ事が思はれて、心ぼそふさふらふぞや、ことは是
と申も何ゆへぞ、此ふたみがうらやしまがさき、あ
のゝこほりの其内は太神宮の御りやうぶん、せつし
やうきんせいと聞つるに、よなくせつしやうなさ
るゝ事神のとがめもいかならん、とかねぐ心にか

かりつゝ、地よひに家ぢを出給ひ、よふけてかへらせ給ふ迄、いくせのあんじいたすぞや、され共ひんじやのかなしさは、ことは是をしろなしうらざればおや子がうへにつかるゝゆへ、今迄はとめ申さず、こよひはことさら心にかゝり候へば、せひにこよひの御出は思ひとまりたび給へ、たとへばおやこもろ共に、うへにつかれてしする共、せんせの事とあきらめん、せひくゝとまり給はれとたもとにすがり、とめ給ふ、ことはゆきはる袖をふりはなちあゝをろか成いひ事や、我も人もつゆの命をつなぐため、それ侍のをちぶれてはつじ切がうどうなすとても、二たびほんちをあんどしてなを上るこそほんゐなれ、あすよりはともかくもこよひ計りは立出ん、はやくしまふて歸らんに、それとも若には夕べきうをすへたればきうかせひかせ給ふなよ、あねも御身もふかなべをし給ふな、よひよりやすみ給へやと、地いほりのほとりにつなぎたる、小舟にさほをさすゑは時引しほ時にゆられ行、是をばながきわかれとは後にぞ思ひしられたり是は扱置、ことは其比せいしうのそうまん所こばやしうこんの太夫もりなをは、手下のも

の共よびあつめ、扱もたうしよふたみがうらしまがさは、こらいより此かた太神宮御せんの方にゑてうじんのれうばにてせつしやうきんだんの所成に、何ものやらんよなくゝあみをおろし、せつしやうするとふうぶんす、むかしよりもさやうのともがらをからめ取、則かのおきにふしづけにするおきてなり、こよひは汝ら心を付からめとれと有ければ、承り候と、方々へ手わけをしあひづをきはめひそかにしのびてばんをぞまもりける是をばしらで、地あこぎの平次は、いつものれうばへのり出し、あなたこなたへあみを置、なみのおもてをたゝき立、やごゑをかけておひまはし、ことはあみ引上ればうれしやな、ぎようさいりんとしにかける、命まつゑのはつすいき、おひれをうごかしかゝつたり、さあこそこよひは仕合よしと、又あみおろすおりふしばんのものの共是を見て、あひづのひやうしぎ打あはす、すはやくせものあますなと、ことは大せいどつとをりかさなりひしゝと取かこむ、平次心へたりと取付もの共引よせて、取てはなげくゝ、ろかいふり上打あひしがこゝかしこよりはせあつまり、いやが上におち

かさなりつゝになれをぞかけにける、こはうらのもの共立よりて先其男がつらを見よと、たいまつさし上よくみればいやしからざる男なり、やあ此あたりにてはみぬ男、いづくのうらの大ぬす人、神のはつとをしらざるか、天ばつにてあらはれし、いきぬす人の大がんだう、むかしよりのしきれいにて此浦へしづめにつけ、いせのもくづとをこなふべし、先なをなれそれつらくはせところへにこそどよめきける、あこぎ涙をはらくとながし、あゝ口おしきていに成はて候、此ていにおよびなをなるともなし、せつしやうきんだんの所とはゆめく存候はでふとあみをおろし候、かさねては来るまじ、先此たびは御たすけ下されよとかうべをさげて申さるゝ、こはばんのものは是を聞、むやくの事をいはんよりなをなれとぞひしめきける、平次かさねて此上は有のまゝに申べし、某は此しまがさきにてあこぎの平次と申らうにんもの、神のおきてをそむく上は命はつゆもおしからず、去ながら某一人を頼にいたすさい女やせがれ御ざ候某相はて候はいかれらもうへにつかれ申さん、神も玄ひのめぐみよりせつしや

うをいとひ給ふと承る、人を一人たすくるはくはうだいのせんこんぞや、某一人たすかればおやこ四人たすかり候、事のだうりを聞わけ給ひ、某が命をたすけ下され候は、しやうくのおんならめと涙にくれて申さるゝばんのものは共聞といけ、げにさる事も有べきが所のほうはそむかれず、はやくほうにおこなへと、むざんや平次がいしやうをはぎ、あかはだかにて手あしをからめ、大竹のすにまき立、大石あまたくゝり付うすまくなみのおちあひにいきなगर、しづめにどうどかけゝるはめもあてられぬしだいなり、こは扱まつだいのみせしめと、平次がきたるいしやうをばなみ打ぎはにつかにつき、其上に高札立、みなくわがやにかへりしはなさけなふこそ三重聞へける神ならぬ身のはかなさは、あこぎのつまはかく共しらず、こははやあかつきにおよべ共わがつまのかへらぬは、いかにしても心へず、思へばよひにわかれし時玄にわかれも有やうに、心ぼそく思ひしが、心もとなやきづかはしと、地はやしのめもあければ、二人の子供の手を引て、はまべをさして出給ひ、こゝやかしこと見給へば、こはよ

ひにあこぎのゝり給ふふねはゆられて有ながら、のつたる人はなかりけり、ないはう心もおちつかず、かしこをみればあたらしきたかふだ有、さしよりて見給ふに、なに／＼此あこぎの平次と申もの、せつしやうきんだんの神地にてせつしやうしたるとがにより、せんれいにまかせふしつけにおこなふ物なり、ねんがう月日とするして有、きたのかたよみもおはらず、こはそもいかに平次は、わがつまはし／＼給ふか、なふなさけなやかなしやと其まゝそこにたをれふしきへ入やうにぞなき給ふ、地やう／＼心を取なをし、こはやれ兄弟の子供よ、ちゝの平次はせつしやうなされしとがぞとて、此所へしづめにかゝりし給ふは、なふ竹姫とも若、こは何とせんあさましやとふし／＼づみてぞ、なき給ふ、こはおとなしき兄弟にて母のなげきをつく／＼聞、ちゝうへは此うみへしづめにかゝり給ふかや、さりとてはちゝうへに、何とぞあはせて給はれと、とも若はあしずりし身をもだへてぞ、あこがるゝ、地あねは弟にすがり付あはかなやとも若よ、一たびしゝたるちゝうへの、何とてかへり給ふべき、今よりちゝうへなきぞとよ、

あねが心を思ひやれ、こはそも何たるめんぐはぞと、なみ打ぎはにひれふして命もたへよと、なげかるゝ、地とも若やう／＼聞入て、ちゝうへのましまさずば、るびをもかにをも今よりたれか取くれん、ちゝうへ戀しちゝこひし、戀し／＼とかけはしり、母にひしといただき付、わつとさけぶ時にこそ、母はいよ／＼みだれがみ、かゝる事のあらんとて、よひに出させ給ふ時、みづからひらにといめしをあね竹姫や弟が、うへにつかるゝふびんさと、さすがことばにの給はねど、御かほばせにあらはれし、月の出しほを待かねて、出させ給ふおもかげを、今見るやうに思はるゝ、思へはよひにわかれしが、ながきわかれで有し物、さらばなごりもおしますし、はなちやりぬるかなしさよ、つまにわかれて今よりは、我々おや子三人は、何と成なんあさましや、さりとてはあこぎ殿、おもかげ成共今一ど、みせさせ給へとくどき立こゑを上てぞなき給ふ、まよじの、あはれと聞へける、地いたはしや北の方あまりなげきにたへしづみ、其まゝきやうきと成給ひ、かつぱとおきてゆびさしゝ、こはやれ兄弟のもの共よちゝのあれにましますすがわらは

をめされさふらふぞや、たいめんせよやとも若よ、
なふうれしや竹姫よ、こゝはいづくぞいせのうらい
そべくはんまちゃんくく、ちゃんくちどりが、
ふうふ打つれ行時は、我をもつてゆけ、はんまち
どりのともよべかし、地あらおもしろやおかしやと、
地ないつわらふつし給へば、兄弟はかなしくて、ゆ
んでめでに取付て、何をの給ふ母上様、ちゝはむな
しく成給ふ、御身はきやうきに成給ひ、我々何と成
申さん、こゝはあれなふ人がわらふぞや、はやくい
ほりへ歸らせ給へ、何人がわらふとや、わらはいわ
らへちつ共そつ共大じもない、戀よくわがなかぞ
らになまなかに、わがつまがきてはおもかげに立け
るはなふこひしのわがつまと、ないつくどいつさま
ざまとたをれふしてぞ、おはします、地兄弟あまり
かなしさに、まぶくいはりへ歸らせ給へと、涙な
がらに立よりて、かひくしくも御手を引、なくな
くいほりへ歸らるゝ心のうちこそあはれなれ是は扱
置、こゝは一とせたんしうあまだの城に召つかへ、ふ
りよに出家とんせい有はやとの介入道は先年かげゆ
の介にかせいして、たがひに立わかれし後、いせち

のかたへと有しゆへ、せいしうに下りつゝかげゆの
行を尋れど、いづくをこそ共しれざれば、それよ
りよこくを尋んと、おほりみかはやとをとうみ、む
さしゑもふさあはかづさ、みちのくのはてし迄尋め
ぐりておのづからしゆ行のこうもつもりつゝ、さい
れんほうしとほうみやうし、さすがにこきやうなつ
かしく、都のそらへと心ざし、地やうく今はいせ
の國あのゝつにこそつき給ふ、地日もはや西に入あ
ひのゑんじにつぐるかねのねも、こゝはしよぎやうむ
じやうをしめせぞと、御念佛を申つゝかたはらをみ
給へば、ほのぐらき道ばたにくさばうくとはへし
げり、何やらんたかふだ有、立よつてみ給へば此あ
こぎの平次といふもの、せつしやうぎんだんの神地
にてせつしやうしたるとがにより、かくおこなふ物
なりともじもさだかにしるして有、さいれん立とい
まり扱々ふびんのしだいかな、もとよりむゑんをた
すくるは出家のねがふ所也、こよひはこゝにくさ枕、
念佛申てとをらんとよすがら、地念佛申つゝ御ゑか
う有こそしゆせうなれ、地よもゑんかうに成ぬれば
たびのつかれにさいれんは、衣のそでをかたしきて

しばし、まどろみ給ひける、ふしぎや此つかうごきしが、けしたるすがたあらはれ出、御僧の枕により、なふなつかしの御僧様せんせのかいぎやうつたなきゆゑ、ぐれんのうみにしづゆぬる、いんぐはの有様御らんせよと涙にくれてたゝれたり、ことは御僧かつぱとおき給ひ、此ていを御らんじて、やあ御身はかげゆの介ゆきはるにてはなきかと有、さればとよはづかしながらわそうにわかれし其後に、此所へ立こへて姫にちぎりをこめし内、二人の子供をまうけつゝ、わがなもむかしに引かへてあこぎの平次となのりつゝ、うら人にまじはれば、何いとなみのよすがなく、さいしをはごくむたよりとて、もつたいなくも此うらの太神宮の御りやうないせつしやうきんだんの所にて、よな／＼あみをおろしうを、取、それにてさいしをはごくみしが、され共あこぎがうらに引あみも、たびかさなればあらはれて、所のものにいけどられ、あのなみのみなぞこへ、ふしづけにせられつゝ、それより今にあくみやうを、するのよ迄も引あみのあこぎと申は我也と涙と共に、申さるゝ、ことはさいれん聞給ひ、扱はいにしへのかげゆ殿にて

ましますか、いたはしの御事や跡とぶらひて参らせん、其時の有様をざんげにかたり給ふべし、あこぎうれしきかほばせにて、げにや誠にざんげには、ちうざいをめつすとかや一念ほつきみだぶつのくりきにうかべてたび給へ、それいとなみのかなしさは、よるにもなればはまべへ出、つたへきくゆうしはくやうは月にむかつてちぎりをこめ、地ふうふ二つのほしと成、我はそれには引かへて、取わけ月のよごろをいとひつゝ、此はまべにあみをおろせば、おもしろの有様や、おどろくうを、おひまはし、かづき上すくひ上、ひまなくうを、取時はつみもむくひも、後のよも地わすれはてつゝおもしろや、地なふ御僧様ことはもしやわがつま子にめぐりあひ給は、此かたみをみせてたべと、あさのかた袖引はなし、則つま子はやまとの國うちのこほりと尋てたべと、御僧にわたさるれば、さいれんもしるしをうけ取、心やすかれたしかにといけ参らせん、あさましな御すがたや、うかみ給へなむあみだ佛との給ふ所にごくそつ二人あらはれ出、やあおそしく、ざんじのいとまといひつるに、時こそうつれこなたへとひつ立行よ

とみへけるが、あつきもろ共有つる平次みやうくはと成てうせにけり、さいれんきゐの思ひをなし、なむゆうれいしゆつりしやうじ、とんせうぼだいとしんにゑこう有、なみのおもてもほのぐと、よもあけわたるあさぼらけ、へんじもはやくやまとへ行、もうじやのかたみをとけん、なごりおしくも御僧はしるしのつかをふしおがみ、やまとぢさしていそがるゝかゝるふしぎのしゆくゑんはためしすくなきしだいやとみなかんせぬものこそなかりけれ、

第四

かくてそのうち、ことはつらきよりつらきにうつるよのならひ扱もあこぎの平次おきてをそむくとがによりふしづけに成しゆへ、其さいしとてころさるべきにさだまれ共女子共の事なればしぎいをなだめあのこほりをおひ出され、竹姫とも若母上もろ共やまとの國かすがのさとしるべして、地なげきながらもをぐるまのおくり月日にせきもりあらざれば、ことはあね君は十六才、弟は十一さい、やゝおとなしく成

給ふ、され共まづしきあばらやにてうさんぼしのかてもなく、人のなさけによりいと地のあさの衣を手わざにし、ひるはあたりのさとしに行、手わざの物をあきなひて、其日のかてをものとめつゝ、母うへやとも若をよきにはごくみ給ひける、地はかなかりけるとせいなり、いたはしや母うへは、つまのさいごときゝしより、たいきやうらんと成給ひ、ねてもさめてもつまこひし、ゆかしのあこぎや、いたはしの平次殿やと、こがれしたふがやまふと成、ゆみづものんどにとをらずし打ふしなやませ給ひける、地竹姫とも若かなしくて、あとや枕によりそひて、ことはなふいかに母うへさま、こゝちは何とましますぞ、心で心を取なをし、枕を上させ給はれ、なふちゝにわかれますしより、地たのみすくなく思へ共、御身様のましますゆへ、きやうきと人はあなどれど、よにたのもしく思ひしに、今又やまふにおかされて、もしもむなしく成給は、とも若やみづからは、何と成なんかなしやとこゑもおしますなき給ふ、地子供のなげきに母上は、少こゝちづき給ひ、おゝいとをしの兄弟や、母はつまのわかれゆへ、かくきやうじん

と成たれば、さぞやさぞ御身たちを所の人もあなどらん、さは去ながらおとなしくも、あねが手わざにけふ迄は、みづからをはごくみて、つらき命をつなぎしが、けふはしきりにめくらみむねぐるしう成たれば、此ていにてはしばらくも、よもやながらへあられまじせめて扱兄弟が、よにも出て有ていを、一めみて相はてばよみじも心やすからんに、其日其日のくらしさへ、まどをがち成其上に、母がむなしく成ならば、二人はなげきに打ふして、うへにつかれて有らんと、思へば是がやまふと成、みらいのくげんもしられたり、かならずくみづからが、むなしく成し其跡にて、弟のとも若をよきにはごくみ給はれや、御身とても弟も、としよりはおとなしく、人のあいれんふかければ、今一とせもすぎて後、いか成かたへもみやづかへ、ゑんをもとめ何とぞし、おちごの敵討すまし、二たび家をおこされよ、みづからともたれあらふ、たんばの國にかくれなき、あまたのあるじ、山ぶき殿の娘なり御身たちも殿の孫、必たねがはづかしきに、わらはむなしく成とても、ひけうな心を持給ふな、なごりをしの兄弟やと、あねや

弟を打まもり、よにくるしげ成かほばせに、つらぬきとめぬ涙のつゆあはれと、いふもおろかなり、地竹姫あまりのかなしさにたもとを母のかほにあて、こぼるゝ涙をひたし取お心、よはや母上様、弟が事はともかくも、先々心を取なをし、ほんぷく有て給はれと、いさむる心もよはくなくより外の事ぞなき、こは弟とも若涙をおさへ、あゝおやなればこそ母上の御身のやまふはさし置て、あねうへやみづからをくらうに思召るゝぞや、此上はみづからがいか成かたへも身をうりて、おふたりをはごくまんに、きを取なをし給はれと、地おとなしやかにの給ふ内、母うへ心くれぐと、頼みすくなくみへ給へば、こは竹姫かなしさやるかたなく、せめてあたりへはしり行くすりをもとめ参らせんと、いほりのそとへはしり出、こゝやかしこともとむれど、さとはなれ成もりかげのざいけ迄は程とをし、其まに母やしゝ給はん、とやせんかくやと身をもだへ、行ては歸り歸りては、行も歸るも母のため、あゝ物うのわが身やと、其まゝそこにたをれふしこゑを上てぞなき給ふ、地かゝるあはれのおりふしに、ことははやと入道さいれ

んはまうじやのおしへにまかせつゝ、しるしの袖を取持てやまとの國へ立こへ給ひ、此所をとをらせ給ふ、竹姫御僧を見付つするゝとはしりより、ことはなふ御僧様わらはが母の候がやまふにおかされ今をかざりにましませ共、くすりとても候はねば見ごろしにいたすなり、もしやくすりを持給はゞ、少しあたへて給はれと涙ながらに、の給へば、ことはさいれん見給ひ何御身が母のわづらひゆへくすりがあるばくれよとや、成程くすりはくはい中せり、やすい事參らせん、してびやうにんはいづかたにましますぞ竹姫悦びあれ成はにふのいほりなり、とてものおじひに御入有、くすりをあたへ給はれや、おゝともかくもと打つれていほりの内へ入給ひ、ことは竹姫母をよびいけて、なふたびの御僧のくすりをもたせ給ふゆへ、是迄ともなひ参りたり、枕を少しあげ給へと、地いだきおこされ母上はくるしきいきをほつとつき、ことは何たびの御出家のわらはにくすりをあたへんとやこはうれしやと御僧を打まもり、やあ御身ははやと入道にてはましますや、みづからこそかげゆがさい女と仰もあへぬにさいれんはつと手を打て、

やあこれはむかしのお姫様が是はゝなふ是は、是はゝと計にてさき立物は涙なり、地涙の下よりさいれんは、あゝ扱何事も皆むかしには成はてたり、地あやゝにしきのしとねをしき、けんもんきんくはの御よそほひ何くらからずあけくれと、玄いかにくらすせ給ふ身の、かくあさましき御すまゐ御かほばせをみるに付、かやうにならせ給ふかと衣の袖をかほにあてきへ入やうに、なき給ふ、地母上いきの下よりも、ことはたがひに命さへあれば又めぐりあふうれしやな、みづから御身にわかれてよりいせの國にとしをへて、かげゆ殿になれし内是成二人の子をまうけ、かひなき月日をすぐる内、ことはなさけなやわがつまはせつしやう有しとがぞとて、しづめにかけられし給ふ、其ゆかりとて我々も所のすまゐかなはずし、此かたほとりに有明の、月をみかさの山ざくら、あはれと事とふ人もなく、其上わらはゝきやうきと成、あまつさへ此比はばんじのやまふを身にかけて、かやうにくるしみ候はとかたり出してはき給ふ、ことはさいれん聞て扱々くらうをなされしぞや、某かやうの身と成しよこくをめぐり候所にいせの國あゝこ

ほりにて一しゆくいたし候所にかげゆ殿のまうれい
あらはれ給ひ、よしなき事ゆへひごうのしにをとげ
て有、此くるしみのせつなさを何とぞさいしに尋あ
ひ、くはしくかたり跡をとほせてくれよ、我さいご
迄のなはあこぎの平次となのりしが、則是をたかみ
にと衣のかたそでとき給ひ、ぐそうに給はり候と有
しかた袖取出し、きたのかたにみせ給へば、母はゆ
め共わきまへず、あらうら山しの御僧や、あゝみづ
からも今一ど、ゆめに成共わがつまの、おもかげに
あひたやな、思ひ出ればわがつまの、今はの時迄めさ
れたる、あねが手をりのあさ衣、是こそつまのかた
みよと、衣のかた袖かほにあてりうていこがれ給ひ
しがことはやことされていきたゆる、さいれんこれ
はとよびいけて、くすりを口にそゝげ共、はをくひ
つめて手あしをうごかし、つゐにむなく成給ふ、
竹姫兄弟さいれんは、是はくんと計にてたがひにめ
とめを見合てむなしきしがいにいだき付共にきへよ
となき給ふ、地是やあはれのかぎり成、むざんやな
竹姫は、あへなきからおしうごかし、今迄物をの
給ひしに、はや事きれさせ給ふかや、今一どあねか

弟かと、ことばをかさはさせ給はれなふゆかでかなは
ぬ道ならば、我をもつれて行給へ、さりとてはよの
中に神や佛はましまさぬか、是は何たるゐんぐはぞ
と、兄弟しがいに取付てくどき立てぞなき給ふ、こ
とはさいれんも兄弟の、なげきのていをみるからに
ともに心はみだるれど、地心よはくてかなはじと、
ことはいかに兄弟の人々、何程なげき給ひてもし、
たる人は歸らぬなり、そのき給へはうぶらんと、母
のしがいを取かくせば、兄弟はこゑを上、なさけなし
とよ御僧様、かた時そばをはなれざる、母上の御しが
いを、いづくへはなちやるべきぞとすがり付てぞ、な
げかるゝ、ことはさいれんいさめてあゝおろか成仰か
な、おふたりのなげきゆへかへつて母ごはまよひ給
ふぞ、かならずなけきをやめ給へまづ御しがいを
うぶらんといほりのとびらにしがいをのせさきをさ
いれんかき給へばきやうだいはあとをかき、涙なが
らにたつあしも、しどろもどろによはくと、地い
ほりのそと成やぶかげのおくりつちを、うがちほりう
づみ、地小石をひろひつかをつき、かきふしゝげき
竹花いけ、しきみのつゆのはかなくも、一本のしる

しゝやうせんとなはとゞまつてかたちもなし、四し
ゆてんとうはまなこのまへこゝにいたつてよの人の
へいせいをあやまると、とうばがかきし九つの、す
がたも思ひあはされてたいつきせぬは、涙なり、兄
弟しるしを見もわかず、いたはしや母上の、此つち
のそこはかと、うづもれ給ふかなさけなや、是が母
ごのしるしかと、一木の松をゆすり上こゑを、そろ
へてなき給ふ、ことはさいれんやうくけうくんし、
母を戀しく思ひ給はば只念佛を申させ給へと、御は
かに水をたむけつゝ、さいれんしやうごを打ならし、
くはうみやうへんせう十方せかい、念佛しゆしやう
せつしゆふしやなむあみだ佛と申さるれば、竹姫と
も若もろ共に、なむあむあみだ佛みだ佛と、涙と共
にゑかう有心の内こそ、いたはしき、ことはさいれ
んしもくをとめかやうにつらく成はつるも、何ゆ
へなればもとは皆たてゑもんめがなすわざなり、ぐ
そうしやもんの身なれ共やつめをあんをんにくらさ
せては、中々むねんはれやらず、御きやうだいの御
供しひそかにたんばへしのび入、じせつをうかいひ
だてゑもんめをうちおふせ、二たび御よに出し申さ

ん、お心やすく思召せと、よに頼もしくの給へば、
兄弟ことばをそろへ、さればとよ其事よ、母上もま
つご迄くれぐゝ申おかせ給ふ、ひとへに御僧をたの
むとあれば、おゝ何しにそりやくいたすべき、とか
くなげきはいつ迄も、へんじもたんばへ立こへん、
先々用ゐをいたさんと、有しいほりへ立歸り、かい
がいしくもさいれんは、兄弟もろ共いさめつゝたび
のしやうぞくなされける心の内こそ中三重たのもし
き

たけひめともわか道行

人はなさけの、地下もみぢ、れんりにやどる兄弟
に、かさふかゝとさきにたてわらぢのひもをしめ
おしへ、地あとにほうしのうつゝなや、うすふぢぞ
めのあさごろも、ひとへなる身はむもれぎの、地な
こそはづかしやゑざくら、かすがのさとを立出て、
こゝろぼそくもたどらるゝ、地御有さまこそいたは
しき、道のちぐさにおくつゆに、すそもこづまもしほ
るれどそではなみだになをぬるゝ、地わが身のしぐ
れはげしくも、よをあき風のふくからに、のべのす

すきはほに出て、地みだれ／＼てあふなるに、いかなればかぞいろは、よをはやうしてすぎのまどあけて一よのゆめまくら、地思ひ出ればうかりける、人をはつせの山おろし、はげしくをちてすげのかさ、ひらりひら／＼ひら松の、みどりにみゆるたかねこそ、地はる一しほのよしの山よしの山を、雪がとみれば、みねのしら／＼も、かへろ／＼となくしかの、つまこひかねてたつた山、地からくれなるにそめなせる、ぬさをたむけの山道に、つゑつく／＼とながむれば、ふもとのさとしづのめが、しづのいもせに子を引つれて、かりたのあとにまくむぎの、たねは一つにかぎれ共するにわかれてわかくさのわれ／＼ふたりのこしをき、は／＼はさき立給ふぞと、きやうだいかほを見あはせてなくより、外のことぞなき、ことはいたはしや竹姫はいかにともわか、つかのまなり共は／＼うへのこひしさをわすれんと、の山におもひまぎれしに、とすればかくしかくすればは／＼この事が思はれて、あとへはあしがひかるれど、さきへはつゆもす／＼まずと立わづらひて、おはします、地とも若あねの手を取て、我も思ひはおなじ事くひて、

かへらぬあだなみのきへてし、人はせひもなしかならす思ひ切給へ、地みづから御手を引申さん、あれ御らんせよ山々に、もみぢ色どる其ふせい、物のなさけはあきこそと、地よみしもげにやことばりの、ゑにうつす共中々に、ふでもかぶろに、くちぬべし、ゆうぎりのたへまにかりがねのあとやさきやにつれとぶを、地かきになれとやさほ川にほさぬ涙の玉水や、いつか思ひは山ざきの、ふもとをすぎて行するに、は／＼そのもりと、聞からにいとど、戀しさますかゝみ、地くもりつはる、月かげの、かつらの川をうちわたり、よろづよふべきかめ山も、わが身のうへにくらぶれば、あすの命もしらまゆみ、やそせのもりやゆげのさとめいしよ、こせきをうちながめ、わがち／＼は／＼のふるさとやあまだごほりにつき給ふ、かの人々の御有様、たいよの中の、ものゝあはれはこれなりたいこれなるはと皆かんせぬ、ものこそなかりけれ

第五

かくてそのうちことはたからさかつてゐる時は又さかつて出るとかや、扱もだてゑもん時とをばあまだごほりをおうりやうし、くはつけいくはんらく日をおつて、色におぼれしゆにちやうじけうのおごりをきはめける、しかるに手下の百姓ら時とをがまへに出、扱も御領内あをもり山の木のこ、今をさかりに御ざ候、もし近日にうてんならば御なぐさみもいかゞ也、今明日の内にお出もやとうかゞへば、時とをゑつぽに入て、おゝいしくも申來る物かな、しからば明日もよほさん、道の程もさうぢさせようじんきびしく供せよと、侍共にいひわたし、はやたけがりのもよほしと上下ざゝめき三重わたりけりかくて手下のどみん共、我もくゝとかいだうに立出て、こはけふは殿様のあをもり山へ御出ぞ、いそぎくさ取さうぢせよと、はうきひまなく立すな持、道のしばくさきよらかに、こは水打まはしてひしめく所へさいれんほうし此所をとおるかゝり、是々いづれも何事なればかやうにさうぢなさるゝぞと何心なくとはるれば、百姓共聞もあへず、何御坊はしらぬか、此所の殿だてゑもん様のけふあをもり山へたけがりに御出ゆへ、かや

うにさうぢするなれば、うろたへまはつて立すなふみ、とがめられてめいわくせんより、さうくそこをのかれよと、やくにかゝりしにんぶ迄、だてゑもんをかうにきてゐせい風をぞふかせける、こはさいれんかくと聞よりも、是こそ天のあたへなれ、けふ本望をはらさでは又いつかはと思ひ取あしをはやめて立歸る、じこくうつればだてゑもん侍あまただうぐをつかせ、さきをはらつてはいくゝめかし、馬上ゆたかに出來る、こはかゝる所へ竹姫とも若兄弟は、さもじんじやうに出立て、弟はめかごをになひ、あねはかだみをたづさへて、すゝきおしわけとをらる、侍共こゑをかけやあゝ汝ら殿様のお馬さきのみませい、わき道へよけてとをれとわめきける、時とを二人をきつとみて、やああらくないひそ汝らと、馬よりひらりととんでをり、是々汝らはへ參れと兄弟をまねきよせ、扱々二人共によいきりやうな生れ付、八まんあつた物でない、みればめかごをたづさへしが其中は何ぞとゝふ、竹姫につこと打わらひこはい殿様や我々は此山のふもとにくらすしづ成が、其時々のにとなみゆへ、是御らんせよ此山の木

のこをひろひしろなして、よわたるたつきとなし、さふらふ、何成共木のこは有召てたべとぞ申さるゝ、時とをあねに見とれつゝ、何木のこを取てよわたるとや、成程くかふてやらふ、扱うつくしいきりやうやと、竹姫の手をとれば、姫君ちやくとふりはなし、何わけもない事を、弟が見るめも有物をとかほ打あかめての給へば、ことは時とをほれくゝと成て、ゑゝあのものは兄弟とや、あねといひ弟といひ、いやはやふりを二つとや、此上は兄弟ながら残らず木のこをかふてとらせん、木のこは何々持たるぞ、さん候ちよの松たけうらわかき地袖にひろひてしゐたけや、戀をしめぢにならはねば、今はつだけのはつかにも、何といはたけさいめたけ、地いによるてふはりたけやゐくちべにたけねすみたけ、地ひらたけなども候といとやさしくもうり給ふ、ことは時とを聞て扱々あまた持たるよな、たけは付たり兩人共にね引にかふてとらせんと、あねにすがればふりはなち、弟にくどけばつきのけて、我々さやうのものならず、只御なぶりあらず共たけを召れて給はれとおもはゆげにぞの給へば、ことは時とを打うなづき、おゝそれも

さう去ながら、たい今のたけの内にわらひたけはみへざりしが、但ないかといひければ、竹姫聞給ひ、なふおそろしいとひ事や、たけの中にも取わけてわらひたけはどくたけとて手に取人も候はぬに、よしの仰との給へば、何わらひたけはどくたけとやゑゑよしはどくにもせよ、其方連ゆへならばびやくらい命もすつるきと、なをしなだれてぬれかゝれば、兄弟さうへのき様に、かごのぼうにしこみたる、たちをてんでにするりとぬき、おちごの敵おぼへたかと打付るを、引はづし兄弟を取ておさへひざの下にむずとしき、おのれらは何ゆへに某をうたんとする、有ていになをなのれ、いはず共いはせんとねぢふせねぢふせせめ付れば、兄弟涙をはらくゝとながし、ことはゑゝ口おしや手の下にうたんと思ひ、むざむざと手ごめにあひ、此まゝはてんかなしやと手あしをもだへて、なき給ふ、ことはかゝる所へさいれんほうしかけ來り、時とをゝ取てつきのけ、やあめづらしやだてゑもん、某を見しつたか、いにしへのはやとの介入道してさいれんとはわが事なり、是にまします兄弟はちか姫かげゆのわすれがたみにてわたらせ給

ふ、いかに御兄弟あれこそおちごやおやごの敵なり、一たち打て御けふやうに入給へと、二人一所に切てかゝれば、時とをが侍共かけへだて入ちがへひばなをちらして三重たいかひける其ひまにだてゑもんことは姫君をひつつかみねちころさんとする所を若君すかさず切付給ふを、引はづして兩人共に取てふせすでにかうよとみゆる所へ、いつく共なくしやくじきの玉とび來り、おつるとひとしくかげゆの介とあらはれて、時とをがたぶさを取て引すへ、しうねきかほにてはつたとにらみ、ことはゑうらめしやだて右衛門、おのれが悪心ゆへ某よにをちぶれて、つらきさいごのくるしみもあけくれ口おのれにうらみ有そうみ、うかみもやらぬわがしうしん、思ひしれとねめつくれば、時とをはめを見つめ、手あしもすくみもんせつし、つゝ立てゐる所へさいれんほうし侍共をおつちらし、やがて跡へ立歸り、やあそれ成はかげゆ殿かと有ければ、ゆうれいは涙にくれ、子供があやうくみへしゆへ某是迄あらはれ出、悪人をふうじたり、たとへ敵はめつしてもわがまうしうは、れやらず、あはれとおぼし給はれと涙にくれてたゝれたり、ことはさ

いれんもかんるいながら兄弟に力をそへ三人たちをふり上て、おちごの敵おしうの敵、思ひしれと時とをが、ほそくび兩うで打おとし、日比の本望此時と、おどり上りとび上り、らつくはみぢんに切ちらし、ことはあたりをみればふしきや今迄みへしちゝのゆうれい、有し姿を引かへて、五たいを竹のすにまかれ、かしら計をあらはして、地さもくるしげ成いきをつき、ことは此年月のまうしうは今まのまへにはれしかと、是御らんせよあさましや、ふしづけにしづみぬる有しあこぎがうらめしや、よに三ど日に三どさいごのていを後のよにうきふしだけのすにまかれ、ぐれんのこほりにとぢられて、かしやくのせめをうるぞや、此くるしみをたすけてたべとなげき給へば、兄弟は、地こはあさましの御姿や、ことはなふさいれん様ちゝの姿をみるに付なかゝ有にあらねば、何とぞしてあのくげんを、はらしてたべや御僧と、兄弟かつばとたをれ伏命もきへよと、なげかるゝ、ことは時にさいれん、おゝ尤也、ことはりと、まもりふたつより御みやうがうを取出し、いかにゆうれい、是はわしうはせでらのかいさん、□□上人のかゝせ給

ふしやうぶつむぎのみやうがうなり、たとへいか成
悪人成共此みやうがうをさづかれば、たちまちぶつ
くわにいたるなり、はやくじやうぶつとげ給へと、
まうじやの口へふくませ給へば、有がたや今迄から
みしうきすの竹、一どにはらりとさばけり、時に
ふしぎやはくうんまきあげ、こくうはるかに上りけ
り、人々一どに手を合、なむあみだ佛との給へば、
こゑの下よりたちまちにぶつたいと成給ひにしのそ
らへぞ、あがらるゝおのゝ御あとおがみ、扱
それよりも若君は、二たびほんちをはいりやう有、
□んゆゝしきときつ風せんしうばんせいばんくせ
いおさまるくにこそめでたけれ

阿漕平次終

(薩摩外記 正本の序文)

家傳の一曲祕密たりといへども書林橋本氏白水世に弘めん事をねがひ所望有に依ていよく章句を改め我が流をくむ人の爲に惑なからむ事を思ふ若外にまぎらはしき類書あらんかと此書の初に名印を顯し置もの也

㊦ 薩摩掾外記藤原直政印

往昔より上瑠璃の一曲家々の音節多しといへどもわけて外記の音曲は當世に叶ひ上中下に學ぶ人すくなくからざるも又妙音の至徳ならんか幸哉我に一流の寫本を興へらるゝに依て一字一章の誤なく開板せしむるものならし翫び給ふ人右の印を以て御もとめあるべきものなり

正徳四甲午年仲秋吉旦

書林 白水印

出世太平記

薩摩外記正本

第一

諸も其後、とうい九代の、花の代も、げんかうの、
風に破られ、せいさう、四十の春秋を、やゝ安んず
る、隙もなし、詞爰に、足かゝ將ぐん、尊氏公しせ
んに、武家の大将と成、今ははや、新田の一ぞく、
ゑんばにひやうはくなさしめ、うんほうのゐを、た
ましく、御一門には先、御舍弟左兵衛の督直義、御
家の執職には、高の武藏の守師直、きら上杉畠山、
仁木細川の一ぞくたち、晝夜うやまい奉るは、ゆゑ
しかりける、次第なり、かゝる所に、氏家、中務の丞
重國は、尾張の守高經の手にしよくし、越前のあす
羽にて、宮方の上將、新田義貞を打とり、よろひ并
重寶鬼切、鬼丸、二ふりの太刀、金らんの守袋に、よ
し野の帝の被成たるしん筆のりんしをそへ、御まへ
にさし置、くんしは、けいじんに近付ず、勇將の首、
そんせんの御つゝしめ儲こそじつけんなし申さず
と、いさいに言上なしければ、尊氏御ゑつき限りな

く、其時のくんかうには、いせの國、わたらひの郡
を、一かうなんじにゑさするとて、御座を立せ給ひ
けり、有あふ大名はらくと皆く、三重宿所へ引か
へらるゝ、是儲置、爰に又、しの塚いがの守重廣は、
義貞ふだい相傳の者成が、去る頃大だち、左馬の助の
手にしよくし、都にとまりいたりしが、ふりよに
よしさだ、うたれ給ふときくとひとしく、先當の敵
なれば、主をうつたる高經、又は氏家が首引ぬき、
其後じせつとうかいいて、尊氏をも一太刀うらみ、
又は新田のゆかりをも、ひそかに尋申さんと、北國
さして急しが、道にて聞ばさがのゝをく往生院の上
人な、ぼだい所のゆかりとて、義貞の御首を、やう
やうに申請、とむらひ給ふときくからに、有がたき
御事や、さいわい通る道なれば、立よりて御びやう
所を、拜まばやとそれよりも、下あみがさ入ひつこみ
義貞の、御びやう所さしてぞ、参りける、かゝる折
ふし、むかふを見れば、よし有げ成大おのこ、是もあ
みがさひつかふで、御びやう所へ立合を、たぞと見
ればこはいかに、くりう左衛門よりかたなり、あつ
ぱれきやつめは義貞の、御さいご迄、御供と聞ける

が、當敵を手のびにし、にげ來るひきやうもの、こ
とばをかくるもよしなしと、見ぬかほして、御はか
に向ひ、花たてまつり水たむけ、ゑ、口をしの御事
や、人らしき侍が、せめて一人御供せばかくやみく
とはなり給はじかく申しのづか、有合ぬは御うん
のすへさてくりうとかや云、をくびやうやつ、大ご
しぬけとしり給はず、頼に召つれ給ふゆへ、ふかく
の御さいごせひなしと、かんにんならぬあてことば、
よそ目ににらむまなこより、泪をばら／＼とながし
ける、くりうめんしよくかはりしが、さあらぬてい
にて、かうげをさ／＼げ、是も御びやうに打向ひ、口
をしの御事や、ふしぎなる夢のつげ、又御馬のつげ
すまい、かれこれふきつに思ふゆへ、かうりやうせ
んしよにあそばざる、かんげんをなしけれ共、御せ
ういんなく少勢にて、打て出させ給ふゆへ、あへな
くも、ぬししれぬ、流矢のためうせ給ふ、我もとう
ざにはら切て、御供とはぞんせしかと、しは安しな
がらへて、何とぞかたき高經や、重國が首引ぬき、
尊氏をも打とらんと、かくのていには候へども、若
君立は御幼少、御下人共はちり／＼に成、有かいも

なき、しの塚と云うつけ者、いづくへかにげかくれ、
玉しいくだれば、せひもなし、たゞ口さきのこうげ
んにて、をくびやう者の大ごしぬけ、何の用にも立
申さず、思へば御うんのつたなさと、同くよそめに
にらみつけ、ことばをあらしてぞ申けう、重ひら又
御はかにむかい、せきとうにみ／＼なく、そとば物云
ぬとて、ぬかぬ太刀の高名は、さこそをかしくおぼ
されん死は安しと申せ共、其高經や重くに、羽は
あらじ、命をすつるほどならば、打にうたれぬこと
や有、去ながら、ぶしと思へば、はらも立、牛馬に
はおとりたる、人外と思召せ、本意はそれがしとげ
申さん、南無阿みだ佛と申ける、くりう大きにはら
を立、さきほどよりのぞうごん、それさへ有に今云
し、人外とはたが事ぞ、を、犬ざむらひとはくりう
がこと、よりかた今はこらへかね、ぶしにむかいて
犬とはいかに、今一言かへして見よと、太刀に手を
かけ申けり、しのづか聞て、やあきつくわいとは人
がましや、むやくの太刀をぬかんより、犬ににやい
しお、ふれと、兩方りきむいやいごし、太刀のつか
もくだけよとをしにぎり、たがいの心をさぐりあふ、

ぎせいの程こそ、たのもしけれ、其時くりう、からからと打わらひ、いゝがひなきおのこと、しゝても何のゑきあらん、此うへは名將の御はかを、こしぬけ共にゑかうさせ、けがらはしやと云まゝに、高そとばを引ぬいて、かたにひつかけて出ければ、しのづかつゝいてとびかゝり、君のしるしはわたさじと、しつかと取て引とむる、日本國にかくれなき、大力の名をふれし、しのづかいがの守重ひろが、しゝわうのいかりをなせば、くりう左衛門よりかたも、りうはつかうが力を出し、ゑいやゝとあらそふ時、うでばねひざばねこしのほね、つがいゝはからくれなひ、ちばしりかへつてふしあがり、五百五拾の力すじ、きうりうのふじかつら、松をからんでこけむせる、岩ほにをひしがごつとくなり、其時しの塚云やうは、いかにやくりう、先年三井寺の軍の時、かくのごとくの大そとば、御へんとわれがひんぬいて、はしにかけしも、むかしよな、いかさま御へんとそれがしは、そとばにゑん有ほうゆふの、力だめしは是なりとゆんでねぢりめでねぢりそうこちりうのゆうもふに、八寸四方の角そとば、中よりふつと、

ねぢ切て、こをどりしてはつとのき、双方にらんで立たりしは、鬼か人かとうたがはる、時にしのづか云やうはあゝたのもしやくりう、心ていはあらはれたり、うたがひしくやささよ、ゆるし給へと、いければ、をゝ御へんが心も見とゞけたり、最前のぞうごんも、皆忠せつのあまりなり、たがいにしゆくいはなき物を、此上は心を合、何とぞして尊氏を、打とらんにしくはなし、思へばつたなき義貞の、御うんのすへやと兩人なしばらく、涙にむせびけり、されどもかなはぬことなれば、先こなたへと兩人な北國がたへといそぎけり、此もの共がしんてい、たのもしき共中々申、ばかりはなかりけり

第二

儲も其後、詞高の武藏の守師直は、氏家中務の承重國を、ひそかに近付申やう、まことに御へんが忠せつ、たにこへたる所なり、我又折々御前のぎを御取なし申べし、されば義貞の舍弟、わきやうきんご義助も、過し頃病氣とて、いよの國にてはてしときく、

然ばうきよに將ぐんの、世をさまたぐるものはなし、
したがつて重國、御へんに頼事の有、義貞の北の方、
こうとうのないしはせんていより給はり、淺からぬ
中ゆへに、義貞ひたすらこひしたい、越前のあすは
より、向いのこしをのぼせしに、其内に義貞は、御へ
んの矢さきにて、しをとゝむ、きけば此頃其女も、
京ぢかくにしのおと、きくかねて片桐彌七郎宗清に、
上いとかうし尋るに、いまだ行へもしれぬなり、其
上ないしのはらに、兄弟なんじ有ときく、をんびん
にさしをきなば、千里にはなつ虎のごとし、すいぶ
ん尋出しつゝ、我に中立し給へかし、内侍の心にした
がつて、兄弟の若共をば、其まゝにもさしをかん、
ひらに頼と申ける、重國承り、もとよりじつしの仰
といひ、とうじかうけのゐせいには、とぶとりをつ
ることなれば、御心安かるべし、そうゝ尋出しつ
つ、御心ていにまかすべしと、りやうじやう申し重
國は、ざいゝの町かうじを、のこりなくふれけれ
ば、名も尊氏のいきほいに、なびく草ばのかけにだ
に、かくるゝ所は三重なかりける行くれて、この下
かげをやどゝせば、花やこよひの、もてなしに、な

ほ袖ぬらすふせいして、空にしられぬ、雪の色、あ
らしや、よそになをもらす、うき身の花と、もろ共
にちりかい、くもる春のよの、月はむかしの、丸か
がみ、おぼろゝとして、せひもはけなの、道のべ
に、しだり柳のたよゝと、いともてつなぐ白玉の、
ひかりうつろふ、きしかげに、すみれまじりの、や
さつばな、住しうてなの、床に見しむかしの色は、
かはらねど、をもなやゝなをもかげをかくす、を
がさのすげはあれ共、さてもすげなの、べにがのこ、
人にいわれしたもとより、今はこぼれて、世におちて
袖の玉水、むらぎへの、露とこたへて、けふ迄もも
とのしづくと、をくれにし、種はいもせの、ほだし
とや、かたみの小松つらなりし、枝はひとしをあい
らしく、妻のこのみ思ひねの、夢をば母がふとこ
ろに、なきねいりせし、いとしさよ、兄はたびちを
ならわしの、あづまからげにはぎ高く、先に立たる
其ふせい、さながら父のをもかげに、新田と、人や
とがむらん、いとゝかたむくかさの内、又ふりかへ
り、ながむれば、こしちにかへる、ならいとて、あ
のとりならば、我も又、あいた見たさは、とばなわ

て諸國の秋をつみのせて、みよのみつぎの牛車、けふのなごりにとゐるかば、我心をも打のせて、をくれ見、おくれよびかへせ、かへらぬ水のうたかたに、みだるゝかはすせわしくも、ばつとちらせし山吹は、こがねを浪や、たゝむらん、小弓にそへし八幡山、守らせ給へと、ふしおがむ、兄を見まねに地弟若も、母上のふところにて、いたいけしたるてを合、まだわけしらぬ其けしき、内侍は見るにたへがたく、げにたぐいなき若共を、母が、たもとの下にのみ、むもれ木と、なすべきやと、むかしをしい行末を思へばつきぬうき泪、わが身ひとつの、雨ぞかし、古へ人の浮名立こひの百夜の、深草山、あまぎる雲に、道くらく、よし、くらく共みだ佛、みらいは妻と、はちすばの同うてなに墨染の櫻の寺を心ざし、みさとにたらぬたまぼこの、いたつがはしきそうあいの、あしたを待てやすらはん、宿はなけれど里のなは、ふしみに行くれ三重、給ひける春雨の、おときく程に、しづかなる竹より内の一ついほ、妻こふねこの跡つけし、只一筋の道細く、ともしびほのかにかき立て、女のわざかしどけなき引きさき、がみをむすびつきな

かば、上たる、いやすだれ、こちふく、かせに、ともしびのまたゝくかげもせわしきに、内侍はよすがうれしくてやまとへくだるもの成が一やの情とこひ給ふ、二八計の女房の、しそくたづさへゑんに出、おやこの人をつくゝ見て、おやど申度候へ共、都よりのさたとして、新田殿の御ゆかりを、つよくせんぎの候が、人々の御有様、とがめんなじでうなり、みづからはしろたへとて、わたり新左衛門はやかつが、いもふとにて、新田ふだいの者なるが、ふしぎのゑんにて、足かゝ殿の侍、かた桐彌七宗清が、妻と成候なり、今にも彌七來りなば、うきめを見させたまわんに、情なしとな思しそよ、わらはかづらきはいとしさゆへ、いづくへ成共をはしませとて、ねん頃に申つゝ、しそくふきけし入にける、内侍も今はたのみきれ、しだいにくらき里はづれ、あとへも先へも、道みへず、本ふしうんにまかせて、とも、かくも、こよいは爰に明さんと、すこしかせよくのきかげに、小袖のつまを打敷て、昔はすいてう、かうけいに、すきまのかせもさむかりし、身はならはしと思ひすて、兄弟にふる雪を、打しのぎ給ふにぞしだ

いにふくるさよあらし、はだへを通すつるぎかとみにしむ計すさまじく、あゝたへがたやとふしまろびせんども、しらすに、なき給ふ、兄子はおどろきなふ、いかにせんかなしやと、ひたいをおさへ手をさすり、さぞ母上のさむからん、せめては是をとの給ひて、詞世にをちうどのみせばなる小袖をぬいて母上の、枕のかせをいとはるゝ、其身は雪にぬれ立て、はだへあらわに是や此、もろこしのおうせうが、氷にふしゝかうゝも、かくやと、ばかりあはれなり、母は此よしを御らんじて、偕いたはしの有様かな、かばかりをやを思ひ子のイロ詞いかにかうゝなればとて、さやうに御身をなやませて、わらはゝみやうがにつきやせんかまへてかせばし引給ふな、只今御身の心ざし、りやうらより猶あつければ、母は中々さむからじ、はやゝ小袖をき給へと、きすればぬいで母にさせ、いやゝ我はさむからじ、それ侍の習には、いか成あらし雨雪にも、さんやをいとはずいくさして、よきかたきとくまんととき、さむしつめたしななどゝて、敵にうしろをみすべきかと、こぶしをにぎりこたゆるてい、はゝはきもたへ目も

くらみ、あはれとむらふさよちどりにて其よをふかさるゝ、かゝる所へ、片桐彌七宗清は、女の庵に忍しが、竹に、うつろふ人かげは、何ものかあやしやとからかさ、かざし、よくみれば、内侍おやこの人々なり、あじろのうをこ、さんなれ、からめ、とらんと、思ひしが、いたはしの御有様や、今、人々をたすけしと、て新田のうん、すへならば、ついには、さがし出されん、よし又、からめとつたり共、つきんず、とうけの御くわほうの、長久にはよもならじ情しらぬは、ひつぷのゆう、其上われつれあいし、つまのためには、主君なり、かれ是たすけおとさんと、しらぬかほにて立けるが、いやまてしばし、我心、じつしの仰をかうむり、尊氏卿の目がねにて、ゑらまれたりし宗清が、たすけては道たゝず、からめ、取ては、情なし、とやせん、かくやとあんじゝが、さらぬてひにて、とをたゝけば、女房待かね立出て、やがて内にぞ、入にけり、やゝ有てしろたへ、こよひはことなふひへさむらふ、先盃とあたゝめて、さいつさゝれつ、さかもりす、女房申けるやうは、みづからは新田の者、御身様はあしかゝなり、もし、只

今にも、新田ゆかりと聞給は、いかい、心へ給ふぞと、よそながらうらどへば、宗清儲こそと思ひつゝ、をふの給ふ迄なし、いかに御身がしうなりとて、やうしやはならず、めにかゝらば、からめ取てちうしんせん、たゞ何事も、みぬが佛、きかぬが、ごくらく、なりと云、さればをやこの人々の、さむきをしのぎ、あらそふこへ、手に取やうに聞へしを、女房、はつと思ふかほ、宗清少、きをつけて、やれ、小鳥共が、のきに、やどつて、かしましきに、あれ、をつばらへとぞ申ける、白たへきいて、なふ、ふくらすゝめのはをなやみ、雪に、おれふす、しの竹の、さゝに一よのかりのやど、さのみ、いたくはなの給ひそ、はやよもふけぬ床さむし、をとせでおよれと申ける、むね清がこれを、聞、いやゝゝ、われはせつしやうすき、小鳥のこゑをきゝ付ては、せひに、とらではおかぬなりはや、おつばらへとぞ申ける、女房更に心へす、よなくとまる鳥なれば、打ても、をふても、たゞぬといふ、宗清、かしらをかきながら、ゑゝ、もどかしやいで、それがし、をひのけんと、弓やをつとり立出で、そらや、四五本、さしとり、引

つめ、いるほどに、内侍はおどろき兄弟を、まへうしろにかきいただき、ほうゝゝにげさり、給ひける、宗清、はるかに、見をくりて、あれをみよや女房よ、すゝめ共が、にげつるを、其まゝおきて、某が、せつしやうを、いたしなば、御身がちうせつたつべきや、たゞ何事も、みぬが佛、きかぬが、ごくらくなりと云、しろたへとかふのことばなく、あら、たのもしの心やと、たもとに、すがり、なげきしが、イロ詞さるにても此おんの、ないし様にもきんだちにも、かまへて、わすれ給はじと、いはんとするを、おしといめ、やれしばらく、ないしといへるなを聞ては、某が、分たゝず、只いつ迄も、すゝめゝと、うなづきあいし弓とりのいもせの、道こそたのもしけれ、爰に白たへが兄、わたり新左衛門はやかつは、内侍きんだちにめぐりあい、はじめをはりをきゝ届、儲は宗清がはなつ矢は、妹めがふた心が、まづゝ、こをたゞさんととぼそに立てきゝけるが、よこ手一つ、てうど打て、なふこゝ、あけ給へ彌七殿、われこそわたり新左衛門はやかつにて候が、御身の心をきゝといけ、妹をさしころし、うつぶんを、さん

せんため、是迄來り候が、わすれがたき、情のほど、一禮のため、たいめんせん、いかにくゞとぞ申ける、宗清が、是を、聞、ゑゝ、又も、ゑしれぬ、すゝめきたつて、よしなきことを、さへづるよな、我、尊氏のけらいとして、新田かたの禮をうけ此宗清が、立べきや、うろたへたる、はぬけどり、道を立るも時による、東西に眼有、南北にみゝちかし、ゆんでもめでもかり人の、おいとりがりの天のあみ、たかに、とられて、かうくわいすな、ゑ、さ、し、に、さゝれ、て、あさましく、ちうしんの、なをくださばたれ有て新田の世を、昔の春にさかゑんや、つるの、ちとせをながらへて、一ぞく四十八たかのすゝをならべてこまどりの、くつばみをそろゆるこそ、是、めいてうのまことなり、ふるすのひなを、かいそだて、はつね、上よと、い、ひ、ければ、をゝ、たのもしく、たのものかり、はるはこしちに立かへり、新田の一ぞく共ちどり、大將ぐんのなをあぐる、はたの手、白きはとのみね、くわいげいざんのすだちして、うへみぬわしのほまれをば、ふゆふのつばさにあらわさん、げに、尤なり、たのもしや、急げや、くゝ、あし引の、山鳥

のをの、しだりをの、ながいはおそれ有明の、月よ、がらすの其形羽黒といへばでわの國、あふしう迄も、かりまよふし、西は、ちんせい、かうがもり、とりのはかたもをしなびけて、やがての内に、本もふを、たつとり、あとににぎりなく、かう有ことはやすかたの、あふむの鳥の、なにしあふ、あづまぢさして、とぶ鳥の、とぶが、ごとくに、わかれける、彌七が情のほど、女房が心ざし、げに、たのもしきしだひなりとて、きせん上下をしなべて、みなかんせぬものこそ、なかりけり

第三

偕も其後、新田一ぞく、畑六郎左衛門時よしは、義貞しやうがい有て後、わきや義助の御ちやくなん、式部の太夫義春を、世に出さんと思ふゆへ、山伏すがたにさまをかへ、先とう國を心ざし、いそぐ心はあらがねの、土山こへて、すゝが山、ふりさきみれば、我袖も入目にそむる、心ちして、なにあふとうげの、さかしきに、めざすも、しらぬくらき夜に、

ふもとをさして三重「急ける、是は儲置、爰に又、くりうしのづか兩人は、あづまぢにはいくわいし、新田の、ゆかりをたづぬれ共、月をかかねてあふことなし、此上は中國へはせこへ、なわ小島のともがら、西國には、きくち、松らの、宮方に、心を合、今一度、本望をたつせんと、ばんせいさしてぞ、いそぎけり、時に、栗生、しのづかに申やう、もとより、忍ぶ世のすまい、ろうく、ゑんせつのごんじやに、ひんきうこどくのかしやくを、うけ、長道を、しのぐたよりなし、いかせんぞとぞ申ける、しのづか聞て、はてしさいらしきことばかな、かくらう人の身となりて、かうもうしやくしのいひ草は、もちゆるによしなし、只さんぞくの道ぞよし、ろせんがなくは、なき迄よ、日比互に、持合せし、力は何のためなるぞ、行あふものをかいつかみ、むたいに、はぎとり、がうどうして、心のまゝに、いそがんに、なんぢやうことか候はん、くりう聞て、おゝいわれたりをもしろや、人のおしまぬたから物、我、うでばねに、有物を、是ぞ、御へんが、一代、一せの、できしあん、たびは、道づれ、世は情、ふびんや、通たび人は、かれのに

さはぐやせうづら、我らがたかのすゝが山、是くつきやうのかりばなり、先、こなたへと兩人な、ゆき、の人をぞ、待いける、かゝる所に、義春公、畑もろ共に、とをらるゝ、もとより、よるのことなれば、くりうしのづか、此人々とはしらすして、やあ、それ成たび人、我々は此山にて、人の寶に、世をわたる、風の神と云物なり出合ものはふうんぞや、きたるいしやうや太刀刀ぬいて、こなたへ、わたされよ、みればくわいこくほうゑんのそう、命ばかりはたすけんと、ばうじやく、ぶびんに申ける、山伏きいて、偕はすずがの白浪の、はげしかれとはいのらぬに、風の、神とは古への、品かへ人にておはすらん、あしくへんとうなるならば、いか成とがめのましまさん、さりながら我々は、くわいこく執行の僧なれば、他力をもつて、世をわたる、品こそかはれ我々も、同じ仲間のおくそうなり、ねがはくは其方に、ぬすみ、取たるかてあらば、ぎやくゑんながら法師めにも、そと、ときりやう、たべとぞ申ける、しのづか聞て、ゑゝすいさんなり、くび、引ぬかんと、とびかゝるを、くりう、しばしとをしといめ、され共山伏、おどろ

く、けしきは少もなく、何、我首をぬかんと、尤ぬかれとう候へ共、ちと此方に入用なり、其上おやのゆづりの首、そこなひ、やぶるはふかうなり、ましてよしなき法しの首ぬすみとりて、うりたりとて、酒てのたりにはよもならじ、いかに浮世をわたるとて、あくがう至て高き事、しゆみかへつてひくからん、たとへをのれ、身に八千のつるぎをうへ、はんくわいかうがいきほひ有共、法しも、法しによるぞかし、とうざのひぎはゆるすべし、ぐそうがことばを古への、ゑんの行者と、三拜して、そこ、立されとぞ申ける、くりうしのづか、いで物みせんととびかゝるを、又かしこの山かげより、男一人かけふさがり、のふ方々、ぬかんと云もぶてうほう、又ぬかれんと云人も、よしなき、互のざれことば、ひらに双方かんにんして、ふもとへ下るたびならば、けがなきやうにおり給へ、ぬす人たちも、是よりは、手にあひたるゆきゝの人、心のまゝにはぎ給へ、是にしやういんなきならば、中よりけんくわを某もろふて、しやうくわんいたすべし、くりうしのづか、是を聞、こよひの仕合十分なり、一人づゝも、ふんず

るこそ、我等がふくのいとなり、いで物みせんと、とびかゝれば、二人もやがてとびしさり、互に、劔をぬき合、火サクリ花をちらして三重「たゝかひけり、義はる、此由、御らんじて、すけだちせんとかけよるを、時よしはつたとにらんでさばかりの大將にあはぬこと、それにひかへましませと、又欠合たゝかひしが、よれくまん尤とおしならべくんだりける、いづれも、ふつうの大力、上になり、下になり、ゑいや、くゝと、ねじ合しは、さすがにすゝがの大山も、くづるゝ計しんどうす、され共しやうぶつかざれば、兩方互に、もぎはなし、あせをしぬぐうて、休ける、時に、くりう、しのづかに云様は、凡あきつしまが其内に、我々にかほどまではねをおらせん者は覺なし、しのづかいかにと云ければ、六郎左衛門聞あへず、何それ成はしの塚とや、もし重ひろにてはなきかと云、尋る者はたれ成ぞ、我こそ畑六郎左衛門時よしと、いひもはてぬに今一人、さては一家のほうばいよ、我こそわたり新左衛門、げに、尤なりわれゝは、くりうしのづか成けるは、いづれも一けのほうゆふの、あつばれあやふきたいめんやと、よろこび

あふはかぎりなし、時よしが云やうは、則、これに、ましますは、わきや殿の御ちやくなん式部太夫義春公、しうぐ、一家のゑんつきず、新田の家の御うんめい、くちぬ所と悦し、誠のすがたぞ、たのもしき、時に、わたり新左衛門、義春公に申やう、義貞公の北の方、かうとうの内侍をも、伏見にて相まゐらせ、しばしが間やまとちに、かくし置候と、片桐彌七が心ていを、残さず申上げれば、義春は聞し召、儲はないしの御行衛、心もとなく思ひしに、よくこそはからい申たり、去ながらかたぐ、一人ならず四人迄、ふだいのかしんにあふことよ、我も、せいわのうてなを出、げんじのばつようけんせんたり、されば其かみ、我々がるいそ、頼光あそんは、あしがら山にて、つな金時、定光末竹、四人の者、しうぐのゑんをなし、喜悦のあまりに、しゆみの四天のかたどりて、四天王と付給ふ、思へば、昔のかれいなり、今よりしてはかたぐを、新田の、四天王と名付て、ぼうふのはぢをきよむべし、四人の者共承り、諸名將の御心ね、たのもし、く、此君いかで頼光の、武とくにおとり給ふべき、われく四人の者共

も、其いにしへの四天王、心にくしとぞんせぬなり、所は何あふ御やうがい、いざこなたへと四人の、者よしはるの御供して、なを山ふかくぞわけ入ける、此人々のその有様、まことにゑん有ためしなりと、てきせん上下をしなべて、皆かんせぬ、者こそ、なかりけれ

第四

爰に又、男色の、梅のこ立はやせてだに、とくにこゑたる、徳じゆ丸、吉のゝおくに、ふみわけて、何とぞぎへいを上べきと思ひ、立より、都に出、よの有様をうかいふに、わつばとあらば、みとがめて、からめとれとのさたきびし、元服して男になり、其上具足の一兩も、もとめてきばやと思し召、松ばや通に、立しのび、龍左衛門がもとへ行、具足もとめん、なふ、よろひ、あつらうべしとの給へば、女子共立出て、かざり、立たる、具足の内、何が御所望候ぞや、よきもあしきも、そらねなし、望しだいに召れよと、よに、しほもなく申ける、龍左衛門がひとりひ

め、のあきは、見るに戀車、引るゝ心立出て、のふぎごつな人々かな、商と云物は、賣にも、買にも、品ぞ有、御用あらばみづからにと、するゝと立よりにて、なふ鎧は何が御所望ぞや、御よそほひのあてなれば、人の思ひをむねにたく、火おどしながら、是とても、紫すそぞ、假初のゝかりに結ふ高ひもや、せめて甲の忍びのお、打、とけ給へと、有ければ、徳じゆ丸も色なれし、吉のゝ山か、小櫻の、しばしあからむ、貌をあげ、誠に、やさしきことのはの露の、めぐみにほころびて、同じしとねに伏なわめ、もれてや、よそに白絲の、鎧の縁に上帶を、結心の草ずりは、あだ成、露の置あへず、早ぬれそむるこての内、しつかと、しめて、ほのめけば、覺へず心うかうかと、の秋の風の、今ははや、身にしむ計に、成にけり、かゝる所へ、親龍左衛門立出て徳じゆ丸をみるより、いか様是は、此程、大しゆの御せんぎこはかりし、新田殿の若成べし、ことのやうをうかい、師直殿へそ人して、過分のほうびに預んと、若君に近付、偕、少人は、具足望とみへて有、御好を尋ば、若君は聞給ひ、をふ、此わつばがちやくせん鎧は、

絲を、五色に入ませて、こ金ざねのためし胴、所望なりとぞ仰ける、龍左衛門偕こそと、思ひながらも、あら、にあわざる御望かな、こ金、さねにためしはどう、當代召れん其人は、中々はむしやの用ならず、いか様御身は一方の、大將ぐん共成べきとの御心ねのふしぎなりよしそれはともかくも、御望のためしの胴、只今有合申さねば、なんばんてつをきたいつつ、すいぶんためして其後に、よろしくをどし參らせん、先、四五日も、此所に、御とうりうと云ければ、徳じゆ丸聞給ひ、其儀ならば立歸り、又こそ參り申さんと、立出んとし給ふを、野秋、しばしとおしとゝめ、父も御やどと申さるゝ、幸なれば鎧をも、御望次第にしつらいて、御心よくきせながの、御祝儀いらい參らせん、ひらにとすがり、とゝむれば、うしろかみや上卷の、情の、絲につながれて、とも、かくもとの給へば、龍左衛門悦びて、おふでかしたり野秋、たじなく御ちそう仕れと、口にはいへど心には今の内にからめとり、御ほうびに預らんと、悦いさみそれよりも、師直方へぞハヤ三重「急ける、野秋は、鎧に甲をそへ、てうしかはらけ取持て、御鎧、出來迄

の御しうぎと、御まへにこそなをしけれ、徳じゆ丸御らんじて、儲々、うれしき情の程、つゝましけれど我こそは、新田義貞の次男、徳じゆ丸と云者なり、足かゝ一家を打亡し、ぼうふの恨をさんせんと、儲こそ、具足をもとめしなり、我世に出ば此おんを、ほうずべしとの給へば、儲は、左様に、ましますか、いたわしの有様やと、しばし泪にむせびけり其時徳じゆ丸、幸なれば某も是にて元服致べし、我等がせんぞよいへは、八わたにて男になり、八まん太郎と申なり、我も夫をかた取て、ぐそくおやは正八まん、吉のゝざわう大權現、則太刀と刀をば、八まんざわうとくわん念し、床の柱に立置て、懸て甲ををしいたいき、儲なのりをば、何と付べき、をゝ義興と付申さん、千秋万年と、ひとりごとしていはゝるゝ、御有、様こそ、あわれなり、野秋もやがて心へて、御元服をいはんと、おくの、一間へ立入、かねて、用ゐやしたりけん、あまたの鎧甲をば人のごとくに三重「作なし、式は弓矢太刀刀、鎧長刀を、持せつゝ、御まへにならべさせ、のふめでたやな古への、御一ぞく、其外、諸國の宮方共、御みかた申さんと、手

せいを引ぐし、御悦に参りたり、末はんじやうの其しるし、御酒、一つとぞ、いはひける、よしおき御ゑつき限なく、げに珍しや面白や、先東國には、新田よしみのあづさ弓、とりつたへたるものゝふの、けめうは何と云やらん、野秋、鎧に立そふて、是こそは、ゑだ兵部の太夫行義なり、一門さかへるい廣し、かずならね共某が、御みかた申さんに、近國、殘者あらじと、つゝしんでこそ申けれ、次にざしたるものゝふの、くはがた打たる星甲、こん絲おどしの鎧、菊水の金物、重藤の弓持て、さも、大様に、みへしはいかに、さん候、是こそは、楠木、判官正成がちやくなん、たもん丸、正つらなり、竹馬に、むちを打しより、ゆふりよく、めいよの若者にて、四さうをさるじねんちは、おやのゆづりと白露を、玉とあざむく計ごと、いながら萬里のかたきをさつし、戦して勝理をゑ、天地を働し目にみへぬ、きじんをかなふなさしめて、文武をさうのつばさのしん、うきよにたれか、久きと、義をおもんずる正成が、心の花の櫻井より、庭訓を、といめしも、かゝる時節を末代に、ほまれを殘す程ぞかし地儲、一ぞくにはわだ

おんぢ、はやせ、北辻、しぎ渡部、あんま橋本二井川とう、地其外手せいかす多、御先手にと相つむる、ついでなみいし人々の、紫、火おどし黒絲に、色々のぢんばをり、思ひ／＼の甲の色、どいとくのふの、人々か、其名、ゆかしと有ければ、抑々あれこそ、一年後だいの天王、ほうきへすべらせ給ふ時、忠臣をあらはし二心なく打死せし、なほ、ほうきの守、長としが舍弟、小太郎左衛門長持、同小二郎長高ぞござんあれ、偕、其次にひかへたる、卯の花おどしの鎧、風折ゑぼし引込しは、たれ、成らんと有ければ、是こそは、うたかたの、あわたのくわんばく道かねが末孫、ばんどう一の大力、宇津の宮ぢぶの太夫きんつなり並したがふ郎等には、はつた大とべはか南、紀清雨とう皆以、義を、金てつになぞらへて、大かうの兵なり、偕其次にひかへたる、白絲の鎧をちやくし、大様にざいおつ取てひかへしに、同様成印にて、甲に、しかをいたゞき、四尺あまりの大太刀は、いか成人ととひ給へば、是こそは、西國にて、無二の、みかたと頼れし、菊地、ひごの守武重、同ちやくし武政なり、此武政と申は、平家たて人のすくねか、ちん

せいの八郎爲友にも、をとらぬ程の精兵打物取ては名も高、かの、さつまの氏長にも、まさるきりやうの大ゆふまふ、遊色歌道はしらね共、敵にあふてのはたらきは、たとわゝ、かうもんきびしくと、かたてに、かけて打やぶり、つゝぬきどう切人つぶて、らつくわみぢんになすべきとべんせつ流源の、よどまぬ御代は末廣き、扇、おつ取くわん／＼と、大ひぎ、くんでぞひかへける、偕其外の諸ぐんせい、家々の馬印、風にみだるゝ、一よふの、浪地をはしるほかけ船、ふんの左に右巴、くるり／＼、くる／＼と、もんどりかへす風車、十二三三八かう、納國の四かい浪、打納れば、かたきもなく、さかへん君の御行末、ちよにやちよをさゝれ、石いわほとなりて苔衣、重々の御しうぎとことばを、つくし、こたへしは、偕、おもしろかりハヤメ三重ける、次第なり、かゝる所に、龍左衛門、師直にそにんして、にら山、六郎取手と成、具足屋さして來りしが、せうじのすきよりはるかにみれば、鎧甲をきながして、大の男、す十人、なほ、楠ゑだ、大だち、西名、かすかべ、どいとなふ、一の井、木口宇津の宮と、のゝしる聲に、に

ら山、ははつと、わなゝききをうしない、手足もこしも打ふるい、せんごをぼうする計也、龍左衛門きつとみて、のふおくれたまふかにら山殿、ふみこんで取給へ、にら山聞て、やああれを見よ、與力のせい、いつのまにかははせあつまり、うんかのごとくと言ければ、龍左衛門も、さしのぞき、みれば、大せいで鎧武者、れつと引てぞなみいたる、是も同きもをけし、二人はまけじおとらじと、ふるいわなゝく有様は、みぐるしかりける次第なり、かゝる所へ、船田長門守經政は、都の内に忍びしが、いづくにてか此由を、聞とひとしく、とぶがごとくにはせ來り、あんないなしにつゝと入、六郎みかたと心へて立よりみれば船田なり、南無三ぼうとにげんとするを、とびかゝつてかいつかみ、龍左衛門諸共に、ゆんでめてへ打たをし左右にふまへて立たりけり、龍左衛門わなゝきて我等は何もぞんせぬなり、ゆるし給へと云ける間に、義をき野秋もろ共に、をくより立出給ひつゝ、こは、つね政か、船田かと、初めをはりをかたらるゝ、經政聞て、をのれ、たすくるものならねど、娘が情にたすくるぞ、罷しされといかりつゝ、

偕にら山六郎を、むげに、ころさば情なし、己が主の師直に、罷歸りて此かたち、よろこばせよと云まゝに、みゝはなそいでおつばなせば、みぐるしかりける次第なり、偕其後に經政は、義をきに打向ひ、思へば當家の御出世、今日の御きとう、一さし舞めでたやと、そばなる、ゑぼしひつかふで、袖をかざして立上り、あゝ、をさへたゝゝ、敵を取ておさへた、天下は新田の家ならで、外へは、やらじと思ふ三雪舞納め、偕それよりも、經政は、とくゝゝ、あづまへ御くだりと、いざなひ申それよりも、東國さしてぞいそぎけり、かの、經政が、其有様、尤たのもしき次第なりとて、きせん上下おしなべ、皆、かんせぬものこそ、なかりけり

第五

偕も其後、片桐彌七宗清は、妻の白たへ新田のゆかり有故に、義貞の北の方、かうとうの内侍をもたすけてをとし申せしが、其身は足かゝ尊氏の、ふだいの侍なまじいに、弓矢取ことむづかしく、足利新田

のあらそいの、納迄は、身をしりぞけ、浮世をよそに、見なさんと、ここの秋より、びやうきと云、て勤をひしてきばらしに、夫婦もろ共京遊、の本ふし山をめぐれば、をのづから、心うかるゝ一ひようの、うつわ物に洒入て、こしにつけつゝ地主のゑん、花の下かげ行くゝ、そこを其日の宿となし、詠つくして、遊ける、かゝる折節、十五六成小童の、忍ていにて通ける、夫婦は、きつとめぐわせして、つゝとよつて袖を引、是見申に御姿、まがふ所は候はず義貞の御ゆかり、徳じゆ君と見うけたり、かく申某は、片桐彌七、宗清とて、尊氏のかばかり、ちと、申べきことあれば、なのり給へと、ひそやかに、こへをかすめて申ける、少人は聞召、をゝ、某こそ徳じゆ丸、定て我をおそふらん、今はのがるゝ所なし、はや首打て尊氏が、げんざんに入れよとて、すいしくこそ申されける、彌七郎手を打て、そなふにうへても紅いの、さすが源氏のねざしなり、まつたく某若君を、打奉る心なし、是成者はわれらがつま、たへと申て、新田ふだいの御かばく、わたり新左衛門、はやかつが妹とにて御ざ候、其ゆかり故過し頃、か

うとうのないしをも、みのがしたすけ申たり、今とても某、せけんのとなへ候へば、御みかたこそ、申さず共、などや、打留申べき、御やすく、おとさんため儲こそ尋申たり、少人いかにとぞ申ける、少人は聞給ひ、儲はうれしき心ざし、今は何をかつゝむべき、わらわゝ徳じゆ丸ならすらくちうの具足かぢ、りう左衛門が娘、野秋と申女也、おやにて候龍左衛門、とんよくの心にて、足かゝへそにんせしを、船田の經政が來り合、あやうきなんを、つゝがなく、御供申それよりも、東國方へ落給ふ、聞ば、にら山六郎が、みゝはなそがれて、立かへり、又々打手を相もよふし、竹ざは九郎が向とかや、本ふし一夜の情に、百年の命も何かおしからん、われこそ、新田義興となりのて、敵に、出合、打るゝひまには若君の、一足成共をち給はんと、儲こそか様にすがたをかへ、是迄参りて候と、かたりもあへずなきいたり、宗清、大きに、かんたんし、そのことならば女房よ、是成野秋と同道して、随分、おつ付御供せよ、某爰にい殘て、竹澤に出合、何とぞ、手だてをめぐらし、隙をつくさん其内に、早とく落よと言ければ、白たへ悦、

しからばわらはも身をかへんと、つまのはをりにあ
みがさき、さしぞへさいてそれよりも、ハサ三重跡を
しとふて、おひかくるたのもしかりける次第なり、
あんのごとく、おつ手の大將、竹澤九郎、てせいす
ぐつて二百よき、もみに、もふでぞはせ來る、彌七
郎きつとみてろうせきものと、かけよつて、馬より、
取て引をとせば、竹澤ゑたりとむんずと組、上を、下
へとせし所を、郎等共をち合て、彌七を、取ておつ
ぶせ、抑々、己は何者にて、かくろうせき成ふるまひ、
念佛申せと云まゝに、すでに、あやうくみへし、時、
彌七下より竹澤が、右のうでを、しつと取、是、お侍、
われらは、名もなきのぶしなり、ふと大酒にたべゑ
ひて、かくろうせき仕、すじなき者を、ころしても、
御てがらとはいはるまじ、其かはりに御身に、よろ
しきことををしゆべし、お侍、とぞ、あざむきける、
竹澤聞て、よろしきことゝは何ごとぞと、取て、引立
めを見合、いや、其方は片桐か、彌七、是は竹澤か、先
以久しやな、さりとては、ふりよのふるまひかな、もし、
あやまらばかうくわいせん、そこつ、さよと云けれ
ば、宗清聞て、いやいや、それは人による、御へん

はきこゆる大力、某などがくみ打は、中々、以て叶ま
じ、持合たる酒きげん、おどけて、ろうせき致て有、
して又はは、あわたしく、いづくへ行ぞととひけ
れば、をゝ、ふしんは尤、新田徳じゆ丸義興、船田
經政兩人が、おつ手のやくを承て、只今、きうにおつ
かくる、其方は病氣とて、か様にらくをし給ふは、
あらうらやましやと云すてゝ、かけ出けるを、宗清
が、まづゝ、まてと、おしとゞめ、ちか頃、大義千万
なり、さりながら侍は、息才にて勤こそ、一生の手
がらなり、随分、忠をはげまれよ、幸是に酒の有、門
出いはゝんのまれよと、こしのひようたん取出せば、
是は、誠にきが付たり、しからば、じぎ申さぬと、
互に、三どくみかはせば、いやゝゝ、六こんかずわ
るし、今、三ばいとむりじいに、つぎかけ、ゝゝての
ませたり、竹ざはあく迄ゑひちらし、是迄成と、立
所を、あゝ、さりとては竹澤よ、のみにげするは、手
がわるし、此頃打たへ參會せず、しばしはつもの物
がたり、今、少とて引とゞむる、竹澤聞て、やれ、とき
も時、折も折、大事の打手に行者に、はなしせんとは
わけもなし、爰を、はなせといひければ、むね清かさ

ねて、いやとよ竹澤、あたらしきはなしの有、ちよと、はなさんきけと云、竹ざは大きに、はらを立、わどのが様成隙ではなし、重て、きかんと立けるを、いや／＼咄か／＼つては、はなさでいかに置べきと、ねぢあい、引あい、といむれば、竹澤ほうど、もてあつかひ、さあ、それならば、早々に、はなさば、はなせ、宗清とふせうがほにて立どまる、心の内こそおかしけれ、彌七はどうどひざをくみ、是は、大事の物がたり、むざとは言ぬこと成と、八方を見廻して、やあ、それなる者共よ、主を、さし置立ながら、いそがしげにきかんとは、不禮とやいはん、くわんたい也、下にいぬかと、はつたとにらんで、いひければ、あつと、こたへてぐん兵共、畏てぞ聞いたり、其時彌七ゆう／＼としさいらしくこはづくろひ、昔、有所に、おゝちと、うばと、あつたとさ、をゝちは、山へといはせもはです、やれ、うろたい者さりとては、人をたばらかす、酒にゑひしか宗清、相手に成な兵共、いそげと云て、立けるを、彌七わらつてをしといめ、尤なりさりながら、あまりにそちがせきがほ也、それを、しづめん露はらひに、今のやうに

はいひし也、しかし、わどのは義興の、をつ手に向と、聞けるが、同ならば御無用と、眉を、ひそめて申ける、竹澤聞て、近頃は聞所、して某が分にて、義をき船田を、うたんこと、叶まじきと云ことか、彌七うなづき、をゝいかに、すいりやうは違なし、およそ、かのとくじゆ丸、少年とはいひながら、吉の、山のせつてうにて、ひやうじゆつ、むるひの天狗の弟子、殊更、船田長州とて、鬼の様成、あらおのこに、わどのが、いか程はげむ共、出合がふうん也、忽つ、かみひしがれんいひにくきことばをも、云は、なじみのほうゆふ、あしかれとてはいはぬと云、竹澤聞て何とやら、しんしやくきげんにみへけるを、彌七いよくのつ取て、其上きけば道すがら、新田ふだいの郎等、くりうしの塚、畑わたり、名張、八郎なんどゝて、一き、當千の、あら者共、へろ／＼むしやの、五十や百、手、だ、まに、取て、せつてうする、けつき、さかんのくせ者ども、付したがふと聞て有、しせん、きやつらに出合ば、そも、此刀がぬかれう、やあ、此こしが立べきや、咄は是迄今一つ、酒が残ればきが、り也、てうし、ぎりにとつぎかへれば、ゑひても、

本性有習、今の、咄のこわくなり、おく病風はさそへ共、それとはいはず、ひちをはり、のふを心入は、忝、おさへた、あいよと盃の、數をも、しらすのみゑひて、かしこに、どうど、たおれふす、彌七みて、こはいかに竹澤よ、大事の、打手に行者が、ふかく成有様かな、やれ、をつかけよと引をこせば、是、何をする、宗清、討手はふるい、そんじもよらぬ、たのしみは只一すいの内也と、云こへ迄もしはがれの、しどろになつて、よこにねる、彌七、わらつて、偕も、しめたる討手かな、やあ、侍共、あれ、ひつ立よと、いひければ、皆々、あたりへ、立よりて、立ざるこしを、をし立く、跡をもとめてをひかくる、宗清、はるかに、みおくりて、あつばれ、語すましたり、咄はかうこそする物よ、昔まつかうさるのつら、あかきは、酒のしこなしと、あく迄わらつて、立たりける、忠かう、武かう、りかうもの、べんせつ、たつせし侍やと、きせん上下おしなべて、皆、かんせぬ者こそなかりけれ

第六

偕も其後、徳じゆ丸義興は、いせの國にて御いとこ、脇屋義治にたい面し、其上ふだいの御かばく、くりう、しのづか畑渡り、船田諸共付そひて、此上はごせずして、尊氏をおびやかし、吉野の君の、しんきんをも、やすめ參せ申さんと、日夜に、ぐんりよをこたらず、船田經政が申様、聞ば、義貞の御首を、ひろひし、うちへ、中務の承重國、當ごく、わたらひの郡を給はり、其上内外の神宮領、ことごとくかすめ、取、わが、まゝを、ふるまふよし、にくさにもくしことに又、神慮を、あざむく大あく人、其、新田の勇將を、我、矢先にて留たりと、ぼうじやく、ぶじんにのゝしるよし、草のかげにて義貞公、さぞ、口をしくおぼされん、御かど出にうちへめを、打取、給へと申けり、時に、はた六郎左衛門時よし、すゝみ出て申様、きけばかのうちへめは、しんしよくをかすめんため、津の市へ立出て、ことのやうをはかるとかや、いざ我々も品をかへ、市人に出立、折もよくば討取ん、はく中にて我々が面をあやしむ程ならば、二人の女にたはむれさせ、きやつがふしどをうかいはんもとより

好色第一の氏家めがことなれば、てもなくふしどをしらすべし此義いかにとひければ、くりうしの塚新左衛門、船田を初、兩大將を、たくんだりく、是に過たるでだてなし、さあらばひそかに出立んと、おのく用意をイロ三重したりける、去程に、中務の丞重國は市に立出詠れば、名にあふ國のいせ櫻、花をつくしてかざりける、その中にをそざくら、さかり、今はの女房と、いざよひ月の、かげきよき、女はらから打つれて、立は浮名か市のなか、あきなふ品の面白き、ことばの海のそこはかと、硯に向ひ筆をそめ、戀初見初思ひそめ、淺ぎにあらで紅ゐの、もみぢ重の薄やうの、忍ぶとすれど色紙に、あらはれ、絹ののりいれや、一もとならで二もとの、杉原通ふ夜あらしの、をとせばおとす忍び妻、月のかつらの夜なくすゝにすゝきはらむとゑいじけん、是ぞおぐらののべかみや、西の内、青きは土佐のかみなれや、幾程村をしら紙の、流よるせや漆がみ、よしやこひには我國も、もろこし紙のひとへなる、よしの、かみは薄く共、君が情のあつがみに、つゝむ小菊のうつりがは、奉書のけむり、横をれし、空にしられぬうち

ぐもり、あふ夜は、心ときめきて語る思ひの尺長も残ることばのきぬぐにこゑもせわしき鳥の子や、大高小高十文字さすがいはきにあらざれば、心よくもまにあひの、跡はづかしき布目がみ、イロ詞あだになすの、紙迄も、取そろへ持候と、こへもあやにぞ賣にける、もとよりうちへは好色に、我をわする者なれば、二人の女のそばにより、偕わちよたちは、うるはしく、よしありげなるふせいなりおといひ共におやあらば夫を立てもろふべし、それ迄もなし、我心に、したがひ、なんやといひければ二人聞て、おやは他國へばいぐに罷こし候へば、此所にはさむらはず、しゆごの仰は一天の、君のめいにもひとしきなり、誠に、仰し候は、此身は君にまかすべしと、よりそひかゝりて、たはむる、氏家は心雲鳥の、とび立、計うき立て、其ことならば、此夕ぐれ向ひをつかはし候べし、必、いつはり給ふなと、めひきながらも立別れ、宿所をさしてぞ三重かへりける、わがやになれば、よひよりもひとりねやに、引こもり、其人をそし、と、松風の、そよと、むねをぞなやみける、かゝる所へ、向ひのをのこ、足河

太郎立かへり、かの女房はらからを、召つれ申候と、二人をともしひ出しける、うちへ、大きに悦びて、下人をばつれざるか、さん候下の者、四五人そうと申けり、しからばへいのかたはらに、敷物あたへてやどらすべし、なんども休と言ければ、足河ひまあけたりとかん所に入てぞ、休けり、時に、重國申様、誠にひることばの、露もたがはず御越は、待に、かひ有さゝがにの、いとも、うれしく候なり、酒一つ参らせんかすける絹を、取給へと、絹、おつ取てみてあれば、女にてはあらずして、少人二人のさゝくと、物をも、いはず立給ふ、重國おどろき、たゝんとするを、義おき氏が小がいなしつかと取、しらすや我こそ、新田左中將の次男徳じゆ丸義をきと、名乗給へば、次にふしたる足河めをさまし、すは、しれものとはせよるを、義春是に有やとて、同様に、取てふせ、おのれごときのかりむしやを、かたきとはをもはね共、日頃の、口にくければ、をこなふなり、との給へば、うちへ、足河こへをあげ、やれろうせき者と、よばはれば、すいさんなりとの給ひて、一くびを討おとし、引さげ、ざしきを立給ふ、氏家

がらうどうす百人、あまさじと、かゝりしを、くりう、しのづかはたわたり、船田もろとも聞付て、ひとへのへいをしやぶり、一もんじにわつていり、火ばなをちらして、ハヤ三重「たゝかひける、手先まかせに、打たつれば、じうわう、むじんに討ひしがれ、むらゝばつとぞにげちつたり、偕、それよりも人々は、是ぞ出世のちまつりとして、ひがしをさしてぞくだらるゝ、せんしうばんせい目出たしとてきせん上下をしなべてみなかんせぬものこそなかりけれ

出世太平記終

(土佐淨瑠璃總目錄及序文)

六段物目錄

酒吞童子

和田酒盛

なごや山三

鹽屋文正

現在松風

大しよくはん

紅葉がり

楠湊川

色小町

光源氏袖鏡

難波物語

源氏十二だん

當世薄雪

融大臣

遊覽揃

定家

土佐日記

一の谷八島

女眉間尺

中將姫

三世二河白道

大塔の宮

小野道風

全盛くらべ

せみ丸

美人櫻

花鳥大全

お國かぶき

殿飾難波鑑

萬歲賴政

博多露左衛門

洛陽壽

蓬萊源氏

源氏六條通

同續源氏

柏木右衛門

泰平簞

芳野内裏

皐月十二段

相生源氏

對面曾我

牧狩曾我

兵揃

養老

傾城三國志

ぞく三國志

平がな大全

大だけ丸

今川かづら

花月十二段

末廣榮源氏

櫻小町

一心二河白道

世繼曾我

家傳秘密の奥旨は木下氏に傳て章句を世上に弘是
一流を翫ふ人まきはしきにまとはず正風なれと
願ふものならし

土佐少掾橘正勝

近來土州の一曲は俗を離れ風をたて聲は梁の塵をた
たしめ節は利休の茶杓よりもしほらしく都鄙なべて
風をなすも亦樂しからずや予も此道を數寄て今高德
の太夫にちなみ章句を弘むる事數年に有身をたて名
を發すは一藝の徳なり書は萬代の鏡一字の違百萬の
誤を恐れ千度校合し百度琢磨して清濁を撰ふも道を
思ふが故也然に頃日數板の塵芥街に滿或は筆跡紙數
を減少し値の輕きを以てあやぶめんとす其書たるを
みれば筋章の誤かぞふるにたらず依之愚が板行の
正本には今改^回如^レ斯印出^レ之歟

小傳馬町三町目

木下甚右衛門

名古屋山三郎

第一

序「扱も、其後、それけいせいけいこくの、むかしを鳥羽の御代の時、嶋のせんざい和歌の前、それよりもこと舊て、むろ君、あるひは江口の女、かりのやどりにたのしまんと、彼まどひこそ色なれや、イロ詞こゝに山城の國、九重の都五城より、コトバにしにあたつて、七條玄ゆしやかに、なさけの玄なを道として、とまり定めあまをふね、イロ詞夜々にそひ寢は川竹の、流れの君に世の人の思ひに、くゆるむねはふじ、本地すそに心は、浮嶋原とて、わけを立たる里のあり、此さとに、上林道順とて、みちならぬわざなれ共、あまたの女郎かゝへおき、我子のごとくかいそだて、らうにやく都鄙の人々の、心をなぐさめけうをなし、おのが世渡るたすけとなす、カルその中に取ても、其名高間のかつらきとて、イロ詞ちら共人のよそにのみ、みてやゝみなんよそほひを、戀したはぬはなかりけり、ならひにこのて柏木とて、おとら

ぬほどの女郎、此二面ふたりをば、とにもかくにも世の人の、かつらきのかほばせと、カル袖を引みん手がひの庵、女三の宮のおもかげも、見し柏木の花のゑもんかチャクリ我もくゝと通ひ路の、せきの、戸ささぬ御代なれば、イロ詞きせんくんじゆのたわむれに、道順日々に富さかへ、ゆたかにうき世を本三重、幕しけり、是はさておき、其比北野の玄やにん、梅津の掃部といひしおのこ、神職は家のふう、同三十一文字の、ことの葉で成うき世もの、神前のつとめ過ぬれば、もみぢのみどりと名を付て、やうありげ成玄ばのいほ、庭にはかけひ、やり水の、ながれの君の御事を、すゝりをならし筆をそめ、わけを吉田のけんこうが、つれくさのねをとりて、うき世つれつれといふ事を、一ツ二ツ書つゝり、カルさびしき床のともとして、あかし暮して居たりけり、こゝに禁中、ほくめんの侍、なごや三郎左衛門正春が一人、なごや山三郎としはるとて、きりやうすぐれし美男にて、立ふるまひも風流の、色ある人に見せばやな、小袖のつまのつたしあらは、この年春にはぬれごろも、氣も當風の若男、ならびにふしみの里に、

ふわの伴左衛門かげみちとて、是もおとらぬだて男、金銀ざいほうくらからず、富貴成牢人あり、山三郎とたいもなき、ねんごろなる友として、春の花見なつ河はしの、すゝみの床のことはに、イロ詞かたりなぐさむ中なりけり、ある時兩人うちつれて、北野のやしろにまふでしが、げかうだうの頃しも、山三ふわのにいふやうは、聞ずやこゝにちんせつ有、此所の亥や人、梅津の掃部はこの頃しも、うき世つれつれといふ書をかく、我ゆい亥よ有知る人、いざうち越てつれ／＼の、心を聞ん伴左衛門、かげみち聞て、さいわひなり其かもんに、ちかづきにならんとて、しか／＼と案内す、かもん立出、あんないとは誰人ぞ、いやとし春にて候なり、なになごやの君か、これよそ／＼しきあんないかな、とし春かさねて、つれの候故により、まづはあん内申たり、さつそくながら引合せん、これこそ此屋の御あるじ、かねて申梅津氏、又こなた成御浪人、ふわの伴左衛門かげみち、いづれも我に御ねんごろ、たがひにわかき事なれば、向後かたり給へとて、ともに亥きだいすぎぬれば、よものはなしに成にけり、伴左衛門申やう、

貴公、うき世つれ／＼草、かきむすび給ふよし、山三はなしにうけたまはり、御ちか付にも成申、かの書も見聞いたしたや、かもん聞て、つれ／＼くさのあだことば、人に見せんためならず、只いちぶんのたのしみと、一つ二つつゝりしが、かく御意を得し上は、御わらひのたねともならん、是もたう座のたはむれと、かの一札をとり出し、いまた清書仕らず、とてもものに我よみて、聞せ申さん聞給へ、兩人聞いていよ／＼以てかたじけなし、いざや是にてうけたまはらんと、かしらをたれて聞居たり、時にかもん書をひろけ本讀つれ／＼成まゝに、筆をそめ心に移るよしなし事、太夫の位を本として、女郎のたねならぬ、それより下つかたのうかれめの、手などつたなからぬ御返事、下戸ならぬこそ君にはよけれと、詞いひ續たるせいたひにも、色ある事を書つゝりさて、戀の段こま／＼と、三重聞に心もチロシ／＼うかれける、此つれ／＼を、聞からに、かの里に打越、梅津氏の、おしへのごとく、女郎を呼よせ、此人數にて酒ゑんせん、山三聞て、申されたり伴左、亥かしかもんに御出なくば、おもしろき事もなし、つれたち

給は、一座せん、かもんももとよりうき舟の、よき追風そいざさらば、れんぼをあげてかの里の、ツナギ地戀のみなどのよるせをも、定んものぞふわの君、なごやの殿も打つれて早三重鶴原さしてぞ上「急ぎける、かしこになれば、山三郎はかつらき、伴左衛門は柏木を、今日、やくそくの酒盛はイロチクリ上下さいめきわたりつゝ、本フシかくたのしみの、たはむれは、外にはいかでなつ山の、えげれ松山、さゝんざと、ことゑやみせん、音にかよふは三重よにおもしろき上「けしきなり、實世の中は、花に風、月には雲のさはりにて、山三郎がこもの、あはたゝしくはせ参り、禁中の御用、きうなる事の候へば、御歸りましませと、いさいに申通しける、山三聞て、大事の御用に候へば、我はだいに上るべし、梅津氏にも伴左にも、くるしからぬが申ても、かつらきの御方には、けふしも初てあひ申、いまだ互の心底を、かごとばかりも申さずし、うき別れ申事、言葉にいはいぬきのどくさ、思し召もいかゞぞや、とをからぬ内といひすて、たゝんとすればかつらき、けふはふしぎの御ゑんにて、ふりよに御げんを存し申、まだ

打とけぬみゑのおび、ちかのむすひを待参らす、なふいかに梅津さま、夜道もいかゞに侍らへば、あのかたさまとうちつれて、御歸りましませと、道すがらの事までも、えみくゝと申にぞ、イロシナリなさけのふかきかつらきと、ふと思ひよる戀の道イロチクリあくるんちぎりふかくして、本フシ身にそふ敵と、成ぬるは三重後にぞ思ひ「えゝれける、片チロシ去ほどに、伴左衛門とかしは木は、酒ゑんのけうをもよほす時、ていしゆ用ありげに手をつがね、何共申にくけれ共、かしは木さまの御なじみ、明日ゑなかへ御こしゆへ、御いとまごひ有べしとて、にわかには御いであそばされ、何とぞこよひかしは木さま、もらいてくれとの御事なり、いかゞあらむと申けり、伴左衛門聞よりも、とかくこよひの仰せは、かく有事のはすならぬ、申ても我々は、又あふ事もありそ海、ふかきなじみの御方の、いなかへ御こし有ゆへに、今宵にわか御出に、かしは木どのをもらはんとや、いかにもそなたへおくりなん、いそひであなたへ御こしあれ、かしは木もさすが又、なじみのすゑの事なれば、仰にえたがひ候はんと、いとまをこふてかしは木は、

なじみの袖にぞうつりける、去ほどに伴左衛門、かしは木をもらはれしを、能事に思ひつゝ、人ゑづまつてかつらきがふしどのあたりに立忍ぶ、イロ詞かつらきはねやの戸に、イロクドキ人有とだに白雲の、そなたの雲を打ながめ、こよひあひみし山三様、いかいおやどの御玄ゆびの、心もとなや世の中は、イロ詞いやな人にもよるせの有、フシツリ思ふはならぬ此身やと、打あんでこそ居たりけれ、伴左衛門時分はよしと、あひのふすまをさつとあけ、やがて内につゝと入る、かつらきはつとみてあれば、よひにあひにし伴左衛門、こは何とての御出ぞや、伴左衛門聞よりも、何事ぞとはきよくもなや、いはねど色に見へなまし、かつらき聞て、いはねど色にゑるゝとは、さらゝ以て心得ず、伴左衛門、なにしにさのみつゝむべき、かやうゝの次第とて、はじめよりの思ひのたけ、いろゝとぞくどきける、かつらきにつこと打わらひ、流れいやしき身なりとて、御なぶりての仰かや、あゝこなたさまにはにあわぬなり、挨拶も申せばこそ、御心にやさはりなん、我身もつもらは腹立んと、とこの内をづんと立て、おくにい

らんとせし所を、伴左衛門すがりつき、こはなさけなしかつらきどの、何しにいつわりなぶるべき、神かけてまことぞや、ゑたふになびくあをやぎの、おおいとをしらしき御返事を、只たのみ申これ女郎、かつらき氣色かはつて、伴左衛門を突倒し、我もこなたを侍と、見申たるに道ならず、くどき給ふは何事ぞ、流れの身とこそ成ぬ共、心迄はさにあらじと、はぢゑめてぞ申ける、伴左衛門腹をたて、すいさん成女、花も色あればこそえだはおれ、それになんぞうんでいも、ちがいたることば、此上はいやにても、むりに心にまかせんと、かつらきにいだきつく、かつらき伴左衛門がわきざしぬき、打て懸れば伴左衛門、はつといふてにげながら、人はなきかおりあへや、らうせき有といひければ、あけ屋の者共譟宛、かつらきに取つき、是はいかにとゝむれば、わらはをいやしめ伴左衛門、かやうゝのていたらく、とても身も、ともにやいばにかゝるべし、あまさじ物をとおつかゝる、先はかんにんましませと、おくにいざなひ入にけり、げにかつらきがなさけのほど、心中はためしなき、ながれの君の手本やと、させん

上下おしなへてみなゑたはぬ、ものこそなかりけれ

第二

其後、イロ地ふはの伴左衛門かげ道、いらぬ思ひにちじよくをかき、ほうく宿にかへりしか、ちゑよくのほども口おしく、又忘れぬかつらきが、そのおもざしを何とぞして、心よく手にいれんと、あんじほれてぞ居たりける、よしく本を尋るに、なごや山三にかつらきが、心をかよはす故により、我戀もじやうゑゆせず、又ははぢもかきぬれば、なごや山三に白中にて、ちゑよくをあたへばかの里に、かよふ事成まじ、さもあらばつるやのていしゆ、又は上林道順、其ほかの者どもに、金銀をまきちらし、其上にてかつらきを、我手に入ばかの君、たとへ心に合す共、元はながれを立し身の、いかで我手にいらざらんや、何とぞ山三がゑまばらへ、通ふ時節を待んとて、つねに用意を上「ゑたりけり、是はさて置、山三郎がおや、なごや三郎左衛門正春は、山三郎が里通ひ、晝夜にかぎらず通ふよし、もつともわかきも

のなれば、有間敷事ならねど、身の勤をもうちすて、色にまよふは侍の、本意を失ふ所ぞと、おりくいけんをなしけれども、一ゑんこれを承引せず、けふもゑまばらに通ふよし、三郎左衛門立腹し、此うへは我直に、かの嶋はらにたちこへ、きつとかんげんすべきとて、供せうくうちつれて三重ゑまはらさしてぞ上「急ける、去ほとに、イロ地山三郎年春は、通ひなれにし道芝の、露のなさけのわすられず、本地晝も人目をゑのびかさ、よるの、ちぎりはいわはしの、イロ地かつらきが心ざし、互にふかくなるとのおき、身はしつむ共、君ゆへと、心の竹のつえをつき、あみかさまぶかにひつかふてイロチャリ島はらさしてぞいそぎける、かゝる所に伴左衛門、山三郎を見つけて、何心なく立むかふ、いや久方や伴左衛門、頃日内はかれこれと、互のせわに取まざれ、參會もなかりしが、かはる事も候はぬか、伴左衛門聞て、何打絶し久しやとは、おことはいづくいか成もの、我ゑる人にはなきものを、世にはおかしき者ありと、あざ笑てぞ申ける、山三聞て、こは心得ぬ云事や、たゞし酒にも酔けるか、伴左衛門聞よりも、ゑる人なら

ぬおことが、何方にて酒をもらしぞ、よし／＼それ
も心得たり、きやつがてい何様にも、ばい／＼のもの
なるか、能けいせいにおもはれんと、さしつけもか
たなをさし、侍のまねをして、島はら通ひするゆへ
に、身のくはんくはつをとがめられ、はぢををかゝ
んがめいはくさに、ついせうらしく我に向ひ、かく
らんぼうのあいさつ、さいはず共此男、なんぢらて
いのかせものに、かまふ事はさらになし、はやく通
れ若きもの、とは云ながらかさねては、ついしやう
けいはくも仕れ、いつもかやうと思ひつゝ、見ぬふ
りをして通りなば、田の中へたゝき入ん、とにもか
くにも此おのこ、きげん次第ぞはや通れと、にが／＼
しくぞ申ける、山三聞て、こは心えぬ雑言かな、ゑ
ゑ思ひ出したり、日外のちじよくを、今此時にかへ
さんと、思ふ所存のかく迄に、ざうごんにおよぶか
と笠、取てなげすて、實我ながらそこつかな、よく
よく見ればゑる人ならず、この比かつらき山の白雲
の、つよき風にふきたてられ、そのにげあしの白雲
が、我まなこにおほゐつゝ、見ちがへ申ゆへにこそ、
れうしを申て候なれ、ことにばひ／＼の者なるが侍

にすがたをにせ、ゑまはら通ひするなどゝ、能見立
たる其まなこと、我見違たるまなこに、取かへても
らふべし、けふはきげんよろしきとの、仰を聞ばい
よいよなり、まなこをぬいてくれ給へ、もしもいや
との事ならば、首共にもらふべし、早／＼返答仕ま
つれ、伴左衛門、なに我まなこをくれよとや、又く
れざらはくびとらんと、口にまかするくはうげん、
はじめゆるせし故により、かつにのつたるざうごん、
おのれがくびをとるか又、わがくびをとらるゝかと、
刀をぬいて切てかゝる、山三柄にてうけとめ、つけ
入にすつと入、伴左衛門かもちたる刀の、柄をにぎ
つてやあ、命をゑらぬくせもの、是にても伴左衛門
我にてきたひ仕るか、いかに／＼と申ける、伴左衛
門はせきめんして、物をもいはず居たりけり、伴左
衛門か若とう、主の難をすくはんと、刀のつかに手
を懸る、伴左衛門ふりかへり、れうじをするなゑば
らくまで、偕山三始より申せしは、皆ざれ事ぞ誤り
たり、ゆるし給へと申ける、山三郎打笑ひ、何はじ
めよりのらうせきは、みなざれ事とのいひ事や、い
やいや御邊もさがの人、かくこはざればしたまはじ、

伴左衛門、いやすは八まんも正らんあれ、まつひらゆるしてたひ給へ、山三聞て、かく請文の上からは、たとへ偽りにもせよゆるすべし、かまへて以後をたしなめと、かしこへかつはと突倒し、いらぬ事にひまをとり、さこそや君の待ぬらんと、立別るゝ所を、伴左衛門刀をぬき、主従三人切てかゝる、心得たりと渡し合、おつつかへしつきりむすぶ、され共山三、力量有て太刀打も、名を得たるおのこにて、一所にまくり打なぐれば、伴左衛門主従、かなはじと思ひけん、跡をもみずして逃にけり、いづくまでもと思へ共、さしてふかき意趣なしと、刀をさやにおさめつゝ、三重玄まはらさしてそ上「急ける、去ほとに伴左衛門、はじめの言葉もちがひつゝ、はぢのうへにはじをかき、むねんながらにかへりける、かゝる所に、三左衛門正はる、玄まばらさしてぞいそぎける、伴左衛門見るよりも、あれに見えしちやうちんの、もんはともへと見えて有、正しくなごや山三がもん、ふしぎさよと立よれば、おやの三郎左衛門なり、伴左衛門見るよりも、かさねくのちじよく、せめておやを打取て、むねんをはらさんわかとうと、め

くせして刀をばぬき、さきにすゝむちやうちんを、まん中より切ておとす、すはらうせきものあまさじと、刀ぬきもち切て懸れば、同小者兩人も、わきざしぬひて渡合、こゝをせんとぞ切むすぶ、三郎左衛門わかとう、伴左衛門にきらるれば、伴左衛門がこもの、三郎ざへもんにうたれけり、ちやうちん持し小者は行方しらず逃たりけり、ばんざへもん主従、三郎左衛門を引つゝみ、こゝをせんとぞ戦ひける、三郎左衛門正春、心は矢竹にはやれども、すくやか成伴左衛門、ことに貳人に切たてられ、請つ流ひつたたかひしが、すか玄よのきずをかふむり、こはむねんと倒れしを、伴左衛門主従、たゝみかさねて切つくる逃たりし小者、山三にかくと云ければ、とぶがことくにつかけ来る、伴左衛門主従かなはじと思ひげん、早三重あとをもみずして、上「逃にけり、いづく迄もとおつかけしに、伴左衛門がわかとう、かけ隔たつてむすくとくむ、すいさんなりおのれめと、かしこへだうと打倒し、くびかき切て立上れば、伴左衛門は見えざりけり、ゑゝ口おしやゝゝ、せんなきやつにくみとめられ、かたきをにがしゝむねんやと、

さて正春を見てあれば、數か所きずをかふむり、ついにむなしく成にけり、山三郎なみだをながし、よしなき色にまよひつゝ、おやをうたせし口おしや、命を限りに伴左衛門、一太刀うたで有べきかと、なみだながらに山三郎、ふしみを指てかへりけり、かの山三郎が心のうち、むねんとも中々申はかりはなかりけり

第三

「其後イロ詞なごや山三年春は、おや正春を思はずも、伴左衛門にうたれしより、牢人の身となり、こはたの里に居たりし事、世上にかくれなかりけり、さればかつらき此事を、きくとひとしく身もそらに、こはさていかに其人は、イロクドキ心になさぬふかうぞや、是もたれゆへ我からのものにすむ虫の、音に立て、イロ詞まがきや袖をひたすらん、イロクドキあけぬ暮ぬと思ひねの、枕ならではしる人も、なき身としれば何事も、世におそろしき事はなし、しよせんくるわを忍び出、君を思へばかちはだし、こはたの里に尋ね

行、ともかくにも成なんと、思ふ心を一すしに、へいをのり越かつらきは、忍ひて三重こはたへ上「急きける、去ほどに、なごや山三とし春は、牢人の身となり、こはたの里に引こもり、おやをうたせしむねんと云、一度かたきをうたんとて、思ふ内にもかつらきは、いかゞしてこそ有つらめと、かなたこなたをかこちつゝむねんながらのなみだかな、かゝる所にかつらきは、やうゝいほりにたづねきて、とぼそをほとゝと音づるゝ、山三ふしぎに思ひつゝ、刀押取たそ、イヤたれ成らんといひければ、山三のこゑと聞よりも、のふ、なごやさまにてましますや、上カ、ルかつらきは迄参りたり、爰あけ給へといふよりもゑばし、涙にむせびけり、山三大きにおどろき、やかてとぼそをおしひらき、先こなたへと内にいれ、何としてかは來りけん、かつらき聞て、何としてとはきよくもなや、君かくならせ給ふもたれゆへぞ、よしなき我をひたすらに、イロクドキあらそひ給ふ仰せにぞ、只何事もゝ、みなみづからが故なれば、命さかんとたれ人に、イロクドキ相見えながれを立申さん、御身の御手にかゝりつゝ、此世を去て後の世

に、かならず廻りあふべしと、思ひ定て参りたり、御手にかけてせ給へとて、玄はし涙にむせひけり、イロ詞山三郎もなみたをながし、なかれの水のいさぎよき、心ざしこそうれしけれ、とはいひながらいかなれば、御身をころしそれかしが、かたきをうつてあればとて、世にありがほにながらへん、まつくくるはに立かへり、それがしに一へんの、ゑかうをたのむかつらきと、いろくどいさめける、かつらき見て、あゝみれんなる有様かな、其心と知るならば、ひとり死なんに是迄は、たづねきたりし念なさよ、いかなるふちにも身をなげて、後の世にこそ待申さめと、ふり切て出ければ、山三たもとにすがりつき、あゝあやまつたりかつらき、いかにもおことが心ていに、まかすべしとのたまへば、かつらきもとゝまりて、たをれふしてぞなけきける、やゝ有て年春、さて爰にてがいせんか、かつらき承り、我君とそひまいらせたや、行すゑ久にあひ申さん、ちかひを北の、御神に、かけて一度は御庭を、ふみ申さんと立願せし、こよひ北野へ忍出、願をほどこき其後に、七本松にて心よく、せうがひをとげ申さん、

山三聞て、此上はいかやう共、御身の心にまかせんと、七本松にと心さし、三重其用意をそ上「玄たりける、實や戀路に、まよふ身は、やみのうつゝの夢とのみ、今は此世をすぎの戸のあけぬうちにとかつらきの、久米寺のはしのかけてげに山三と、共に立出る、こは誰ゆへぞ君かため、おしからざりし命ぞと、おき別れさへものうきに、ふしみの里をいつか又、見んと思ふにむねの月、くもる夜ふかき道すがら、明ぬ空さへ五かうのみや、そなたの方にふしおかみ、野原の露にすそ濡て、ぬれて染にし君とわが、ゆかりの色やむらさきと、さくふじのもり淺からぬ、本フシ中ふかくさの秋風は、いなばそよくいなりのみや、イロクドキほうへい申行さきを、東福寺をも打過てげに數ならぬ我々が、身をなけかまじと思ひ出の、せんゆうじの御寺には、イロ詞何れの天子もほうむりて、今にたへせぬ法の聲、ちかひたつとき佛舍利の、むかしを聞は、そのかみそくゑつきのげだう、佛玄やりを、ぬすみ取て、遡んとすれば御しゆご神、いだてん追かけ給ふにぞ、外道は下界へおちはしや、二たび御寺のほうぶつは、今に絶せじいま

ぐまの本ノシくはんせおんをいのるにぞ、大慈大悲の
弓のつる、道引給へと一すじに、八十鳥心の名を残
す、三十三間よそに見て、十六丈の御佛を、念比に
ふしおがみ、音羽のニツ三重嶺の、瀧つ瀬に心も、す
める清水寺、八坂の塔を打すきて、イロクドキぎおん
のやしるにまふでつゝ、ふかくちかひを夕玄での、
みしめ縄手をはるゝとイロチクリ三條通りにさしか
かり、やうゝあゆみ北野のみや、七本松にぞつき
にける、かつらきやしるに打むかひ、ねんころにふ
しおがみ、もはやさいごも近付ぬ、かならずしも年
春さま、みづからむなく成ぬ共、みれんに見えさ
せ給ふなよ、いかにもしてかたきをうち、御親のも
う玄う、又みづからが思ひをも、はらしてたばせ給へ
やと、思ひ切たる言葉にぞ、いと亂るゝ計りなり、
山三聞て、なにとしてかはおくるべき、只今がさいご
ぞや、念佛申せかつらきと、刀ぬき持立まはれば、心
得侍ふなむあみだ、なむあみだふつとなふれ共、打
つけがたくぞ見えにける、かつらき見て、あゝひけ
う也、年春さま、さほどにおくれ給ひては、本望は
とげ給はじ、とはいひながらにくからぬ、水からを

討んとは、いかゞ覺しめさるべき、所詮玄がい仕
らん、かげをかくしてたひ給へと、山三郎がわきざ
し取て、玄がいせんと玄たりしを、山三あはてゝお
しといめ、あやまつたりかつらき、いかにもさいご
をいそくべし、じがいはまて、いや死なんと、あら
そふ心もよはゝと、玄ばし涙にむせびけり、かゝ
る所へ北のゝ社人、梅津かもんは公家方より、むさ
うびらきの連歌有て、すでに百ゐんみてければ、席
を去てかへりしが、七本松のほとりにて、人聲をきく
よりも、ちやうちんをよせさせ、ちかゝと見てあれ
ば、なごや山三とかつらき也、是はゝと引わけ、
いかなる事とひとにけり、つゝむべき事ならねば、
ありのまゝにぞかたりける、掃部聞て、さてもあや
うき仕合かな、そこつのふるまひあるべからず、聞
ばかたき伴左衛門、西國方へのきたるよし、さいわ
ひそれかしが伯父、美作に罷有る、山三はそれへ立
越て、伴左衛門をねらふべし、かつらきはそれがし
と、一先くるわに立歸り、うきながら、右のつとめ
をなし給へそれといつは、伴左衛門御身に心のこる
ゆへ、山三の親を討し也、山三美作へおもむかば、

かたき伴左も都に來り、わすれぬは玄うじやく、又島原にかよひきて、御身をだにも見るならば、色にまよひてあいなまし、其時よつくもてなし、内證を玄らせ給へ、早々畠國へ人をこし、山三をよびよせ相談し、かたきうたんはかり事、此上は何事も、只それがしにまかすべし、こゝはとちうの事なれば、まづく玄たくにももなはんと、かつらき山三を伴ひて、家路をさして歸りけり、山三かつらきが有さま、あつぱれあやうき事共、梅津のかもんがたのもしさを、きせん上下おしなへて、皆かんせぬ、ものこそなかりけれ

第四

「其後、梅津の掃部の方よりも、かつらきを送りしゆへ、上林道順、よろこびながらも腹立の、よの女郎の見せしめに、色々とせつかんす、なをもはらにすゑかねて、めしつかひに云つけ、所詮あのかつらきを、右のつとめに出さんは、よその聞へもいかにせん、下の肩へ追さげよと、むざんやなかつらきを、つ

ばねのつとめにおいさげしは三重なさけなふこそ上「聞えけれ、去程に、かつらきは本地もとよりつとめのあさましきうちよりも、みはしちかきつほねにおり、あるかなきかのうきすまひ、なみだや袖を、玄ぼるらんとはおもへ共、君ゆへと、本地思ひ定し心には、浮もつらきもわすれぐさ、局の内も住よしのニツ三重きしの姫松いく世まで、かくうらめしき川たけの、ふしては夢にその人を、本地見まくほしさようつゝにも、レイゼイわすらればこそとひたすらに、かわくまもなきたもとかな、イロ詞さるによつて浮世人、かつらきこそは道順が、はからひゆへに思はずも、つほねへおりしと夕ぐれの、門立玄げき、イロナカシおざゝはら、戀風慕ふにかつらきは、つやくなびくけしきなし、本地ともかくにもかつらきは、なさけのふかき、女郎と三重玄たはぬものこそ上「なかりけれ片ヲロシ去ほとに、下イロ地梅津のかもんは、かつらきが局に尋ねまほしく、色々と、やつす姿はすみ衣、人目を玄のぶあしろがさ、玄づくにぬるゝかの里の、下イロ地其かつらきのかみの町、あまたの局をよそながら、三重心にかけてぞ「通りける、その折ふしに、

かつらきは、わびしきまゝに門立し、そなたをながめ居たりけり、折しもあたりに人はなし、かつらきどのかといひければ、なふ、梅津さまにてましますかと、まつさきだつは涙かな、イロ地かつらきなみたをおしとめ、山三どの、御ためと、仰によつてかへりしに、かくうらめしき身と成し、イロ地みづからが心のうち、思し召てたび給へと云はし、なみたにむせびけり、かもん聞て、もつとも也、さりながら、にくからぬ山三と、思ひすて、おくりなば、かく淺ましきつとめをも、いとはじものをそれがしも、此ていに成給ふと、人々のうわさゆへ、心もとなくおもひつゝ、早々たづね來らんが、掃部と道順知ならば、また御ためもあしからんと、かく身をやつし参りたり、聞ばふわの伴左衛門、山三西國へおもむくゆへ、すりちがふて此ほどは、都あたりに來るよし、さるによつて西國へ、急々に飛脚を立、山三を此方へよびこさん、少の中のつとめぞや、此事申さん其ために、かく身をやつしきたりたり、イロ地かつらきは聞よりも、嬉しき今の御たづね、ゆかりのするゑとてかたじけなし、とは思へ共かの人の、御事のみを

わすればこそ、なふ、梅津さまかもんさま、いつさてあはんとくどくに、そともに袖をぞまはりける、かもん聞て、今申通り也、遠からぬうち便せん、もしもや人の見とがめば、おためにもあしからんと、いとまをこふて立出れば、かつらきたもとにすがりつき、こなたさまをせめてもの、その人のゆかりぞと、思へは心もなぐさむに、今しばしとて押といむ、いや／＼時こくうつるほど、萬事まゆびのあしければ、又ちかき内参りつゝ、こま／＼とかたらんと、カルひかふるたもとをふり切て、三重かもんは家路に上「歸りけり、片チロシそれよりも、かつらきは、うつ／＼なき心となり今は人目もは／＼からず、まかきの外にはまゐり出、里がよひの人々を、見付ると何としてかはなごやのどの、見ぬふりはつれなやな、こなたなる忍びかさ、つほねのつとめと成ぬれば、もはや替らせ給ふかや、いかに我つま其人と、ひたすら、早三重狂女と「成にけり、去ほとに、道順いよ／＼はらをたて、所詮あのていにては、つとめの道はかなふまじ、にくさまにくしかつらきを、きせん往來の道ばたに、おいはなしすつべし、かた／＼と云つくれ

ば、やぶれたりしのり物に、かつらきをうちのせ、大坂口にすてけるは、なさけ早三重なふこそ上「聞えけれ、是はさておき、かつらきに付そひける、かめといひしかいぞへ、おさな立の比よりも、付参らせし事なれば、せめてはいかいおはするかと、言葉に成ともとぶらはんと、只ひとりすごくと、大坂口へぞいそぎける、よどの邊に成しかば、かなたこなたと尋れば、あさましきのり物の、道のほとりに捨て有、是なるらんと立寄て、さしのぞきみてあれは、本地あわれ成かなかつらきは、ふしゑづみてぞなき居たる、はつと思ひ戸をひらき、カルなふかつらきさまにてましますか、こは淺ましきすがたやと、まづさきだつはなみた也、イロ詞かつらき聲を聞よりも、のり物よりよろほひ出、さて久かたや山三さま、イロ詞君ゆへにこそかく迄に、淺ましき身とはなれ、我思ふほど其かたには、思しめさぬがうらめしやと、聲をはかりになき居たり、あゝうつゝなき御有さま山三さまにて候はず、みづからはかめにて有、こはそもいか成御事ぞ、なふ心をゑづめ給へとて、いろいろとぞいさめける、かつらき心をゑづめつゝ、よ

くくみればかめにて有、イロクドキ御身をだにも見わすれし、みづからが心のうち、思ひはかり給へとて、又さめくとぞなきにける、げに理り成御心、みづから尋ね参りしも、あまりの事のいたはしさに、いざなひ申いかやうとも、いたわらんためぞかし、かならず心を取なをし、御そくさいにてましますば、一度は戀しき其人に、めぐり合申さんと、かたりなぐさめ居たりけり、かゝる所に、山三郎年春、西國へ打越、其器量はつめいゆへ、りつゑんの身と成、かたき都に有よしを、掃部方よりつけ來れば、首尾よくいとま申うけ、供人あまた召連てイロチクリ都をさしてぞのぼりける、道のほとりに破れたる、のり物に付けるは、見たるやう成女ぞと、かごをよせ見てあれば、かつらきに付添し、かめと云女也、こはそれ成はかめなるかや、山三さまにてましますか、かやうくと申ける、山三かごより飛おり、扱は左様に有けるかと、頓て戸をおしひらき、なふかつらき山三こそ、只今都へ上る也、こはそもいか成有様と顔とくを見合て、もろきは今の涙也、山三かめに云やうは、かく白晝にてこまくと、うきやつら

さを語らんは、人の見るめもいかゞ也、まづ／＼た
びやに立入、つもの思ひをかたるべし、それ／＼と
云ければ、山三がのりし乗物にかつらきを打のせ、
宿やをさして急きける、實や括せぬちぎりこそ、ふ
かきなさけと聞えけれ、かつらき山三がうれしさを、
きせん上下おしなへて、みなかんせぬものこそな
かりけれ

第五

「其後、なごや山三とし春は、戀しゆかしきかつらき
に、大坂口にて廻りあひ、よろこびいさみそれより
は、北野をさしていそぎけり、梅津が方にあんない
こふ、かもん立出、山三郎にたいめんし、むかし今
の物がたり、かつらきを見るよりも、よろこぶ事は
かぎりなし、其時かもんいふやうは、さてもふはの
伴左衛門、此ほど島原に、また通ふよしを聞付たり、
道順がふるまひ、にくさもにくしことに又、伴左衛
門も通ふよし、ひそかに里に打こへて、道順にあひ
申、かたきをうたんはかゝ事、かくはからはん山三

郎、げに／＼是はもつともと、前後のしゆびをいひ
合、島はら三重さしてぞ上「急きける、去ほどに、な
ごや山三年春は、むかしに替らぬ出立の、忍びあみ
がさまぶかにきて、上の町上林、道順がたちに行、
先あんないをこひにけり、どうぞゆんふうふたちい
で、こはめづしらしき御出と、やがておくにせうじけ
り、その時山三云やうは、それがしきたるは別義な
し、かつらきをつれ出し、ふさいにせんと思ふ故、
其心得にて参りたり、是は當座の音物とて、道順ふ
うふ下々迄金銀をつかはしける、道順よろこぶ内よ
りも、かつらき其まゝ有ならば、いよくの事成に、
せんなき事に追出し、こうくはひすれどかひぞなき、
おい出せしと申ては、いかなるうらみかうけぬべし、
いつわらんと思ひ、わざと涙をながし、かくけつこ
う成御みやげを、うくるに付て我々ほど、くわほう
うすきものはなし、御まへさまおもはずも、御牢人
となり給ひ、ことにさいこくへ御こしを、かつらき
聞とひとしくやまふとなり、いろ／＼かんびやう申
せ共、ぞやうごふなればかなはずして、むなしく成
て候也、まつごのせつもひたすらに、只御まへの事

をのみ、申出してふびんやな、むなしく成て候と、カ、ルまことしやかにいつわりて、そらなみだをそながしける、山三おかしさ身にあまれど、わざとおどろくふせいにて、さてはさやうに候か、せびもなき仕合なり、かつらきが住たりし、此家の事なれば、いかでおろかに思ふべき、さいわひ西國より、玄やくはい成人伴ひしが、同心し來りたり、道順聞て、御心安ければ、こなたへ御入あそばすべし、山三聞てそれ／＼と云ければ、かつらきかもんもろ共に、大小をよこたへふかあみかさにふくめんし、やがて内にぞ入にける、道順見て、みぐるしき所へ、能こそ御入あそばしたれ、山三さまはむかしより、わけて御目を下さるゝ、さておもてには御忍び、わたくしが家にては、いかでくるしう候へき、御かさをもとり給ひ、御きうそくあそばすべし、山三聞て、道順申もことはりなり、何かくるしう候べき、かさとり給へといひければ、心得て候と、兩人かさを取ぬれば、梅津、かもんとかつらきなり、道順ふうふきもをけし、カ、ル物をもしはずあきればて、さしうつぶいてぞ居たりける、梅津も山三も云様は、いや／＼

おどろき申さるゝな、申てもかつらきは、御身のやしなひ有し身の、よの女郎の見せしめとて、かくつらかりしはことほり也、もつともうらみも有つれ共、かくあふ上は別義なし、かつらきが身のしろも、しかるべく送るべし、いかに／＼といひければ、道順いきをほつとつき、げに有かたき御心てい、さやうにおぼしめされなば、いよくもつてかたしけなし、けふはゆる／＼御酒盛、御なぐさみましイロチクリませとて、いろ／＼もてなし申ける、山三梅津道順を、ひそかに招きいふやうは、山三はねらふかたきあり、聞ば此ほど其男、此地へ通ふと聞て有、此里のおさなれば、うき世を忍ぶ人々の、そのふるまひをば見しりなん、道順承り、よからぬ事に候へ共、島原に住なれて、うき世人の風流は、自然と覺申たり、あら／＼かたり申べし、是も當座の御なぐさみ、しかたにいたし申さんと、あふぎおつとりそれ／＼の、忍ぶ戀路のふりすがたを三重いち／＼次第に上かたりけり、先此里と申は、方六町にかこひをなし、あまたの君をかざりたて、よゝの人のなくさみに、袖引つるゝ玄やみせん、いとおしらしき、言の葉の、

露の本地なさけのぬれ衣、七重八重九のへの、花の都なれは、なかめもあかぬ風流、通ふうき世の人々の其有様こそ色々なれ、夢とみじかき世の中に、さす長かたな亥やんとして、はつばと袖をふる雪の、おも白小袖ほのめかし、うわぎくは物すきのニツ三重うらは明石にすまちかく、ちん鳥あしべの立なみを、けまはしにぬいかくす、かくれかさにも床しきは、ときめく人の風ぞくなり、又は夜々こと通ひきてあなたのがきを、立のぞきこなたの、格子にやすらひて、いつのまゝ成御事そや、イロシチリ遠からぬうち相生の、まつ斗りなりよしや松、ときはの色のかはらずに、おはしますこそうれしと、心といめぬあだ人も、あまた此地にありはらの、むかし男にとらじと、きりやうをおもてにあらはして、君にあふせの人も有、かたちは山のかせきにも、心の花は、有物を、ひかはひかれんあつさゆみ、やさしき言葉をもとゝして、亥のびくるわに通ふもあり、あるひは君に青柳の、風流成し色このみ、すがたに色やこのむべき、心ざしこそ道なれど、あるに任する人も有、又人しれず君と我、ふたりぬるよをたのしむに、

あまたの友をさそひきて、女郎たちに人よせの、さいつさゝれつたわむれて、うきをなぐさむうき世歌、手びやうし人にはやさせて、ねよげに聞ゆつゝみぐさ、たいこのはやしに興をなし、ことをのそむも候と、品ふりかたちそれく、に、物かたり亥たりしは、さて、げにおもしろふぞ聞えける、梅津も山三も一同に、これにては亥れがたし、いかせんそ申ける、道順が女房すゝみ出て申様、此ほどふしぎの人の、夜るく此地へ御こし有、夜中にもふかあみがさ、一やうにふくめんし、せいかつこうもなりふりも、紋所大小、同じやうに出立五六人つゝ打つれて、まがきくを見物有が、さしていくの女郎にも、あひ給ふていもなし、もしかやうの人にて、伴左衛門にて候はずや、山三梅津聞よりも、あつはれそれこそふしぎなれ、かたくは見えるまじ、さて又今宵も來らんや、女房承り、毎夜來り候へば、今宵もさだめて參るべし、山三梅津日本一、うたがひもなき伴左衛門、あんおんにて置まじき、日比のうつふんはらすべし、萬事は頼むといふまゝに、心亥づかにしたくをする、道順かしこまつたりとて、やが

て座敷をずんと立、下々をまねきよせ、そのもの共のきたりなば、町のものに申つけ、大門をさしかため、もれぬ様にいたすべし、我又よからんおりからに、おもてのかうしを、ほつと、ほとゝたゝかばすわはやと心得て、用意せよ、さて又時分をはからいて、壹人つゝ、忍びくゝに出べきなり、かまひてくゝあわてゝことばしゝそんな、うむのふたつはこゝなりと、やがてようゐをしたりけりかの、道順が心ざし、時に取てのちうこやと、きせん上下おしなへて、みなかんせぬ、ものこそなかりけれ

第六

「其後、すでに日もはやせい山に、かたぶく比にも成しかば、家々のまがきの内、ともし火をかがげつゝ、あまたの女郎きらびやかに、かざり立てなみいれば、きせんくんじゆの色々に袖を三重つらねて上通ひくる、げに世の中の、なぐさみかな、かゝる所に、ふわの伴左衛門かげ道、おなじやうに出たち、以上五人友なひ、ふかあみかさにふくめんし、まがきくゝ

を立のぞき、けんぶつして通りけり、道順がまがきに、やすらふ所に、うつせみといふ女郎、かうしのほとりにたゝすむを、伴左衛門いふやうは、あつばれ見事の御すがたや、しかし御名の聞まはし、うつせみ聞て、名はかずならぬものなれば、申てもそのかたに、何とてしろしめさるべし、つれたる男いふやうは、あれこそうつせみの君とて、まがきに光源氏だに、おもひそめにし君ぞかし、伴左衛門きくよりも、げに聞およびし御かたぞや、我たましむもぬけのきぬ、うつせみさまの事ならば、いのち成共おしからし、うつせみにつこと打笑ひ、いつわりにもせよ嬉し、御玄る人になり申さん、伴左衛門よろこび、御しる人に成ても、儲かなはぬ我々、去ながら、今生の思ひ出に、御しる人に成らんとて、まがきにひしと立寄を、うつせみとくと、御知人ルに成申さんが、しかし御おもて見玄らでは、かさねてのためなればと、まがきの内より手を出し、伴左衛門があみがさ、押取てすてければ、ふくめん共にとれにけり、伴左衛門こは女郎、人目忍ぶの通ひ路に、あからさまなる事共は、きのどくに候へども、君なら

ずしてたれか又、取べきものも候はずと、たわむれし所へ、山三郎立よつて、久しく候伴左衛門、おこしを待こそはるかなれ、かくごせよといひければ、伴左衛門はつといひしが、今はのがれぬ所ぞや、尋常にうちはたさんと、兩方へ立ならぶ、所のもの共、かねて用意の事なれば、門々をさしかため、高ちやうちんを出しければ、早三重只まんどろの上「ことくなり、日比たのみし、事なれば、伴左衛門方くみせしは、以上五人かためける、山三がかたには、梅津のかもんならびにかつらき、以上是は三人にて、こゝをはれと、切むすぶは、早三重花やか成ける次第なり、去ほどに、山三郎が方にては、身命をなけうつて、秘術をつくしたゝかへ共、伴左衛門が與力のもの、一たんかわせし事なれば、逃じたくの心にか、四人のつれのこらず、みな手の下にうたれけり、伴左衛門切て出、山三郎とわたし合、玄のぎをけづりつばをわり、切先よりも火ゑんを出して早三重こゝをせんとぞ上「戦ひける、うんのきはめの、かなしさは、山三が太刀をうけはづし、かたさを切つけられ、たちくとする所を、山三やがてつゝと入、伴左衛

門をおしふせ、たい今がさいごぞや、ねんぶつ申せ伴左衛門、なむ、たむけ申父玄やうれう、とんしやうぼだいと首中にうちおとし、今は本望とげたりと、玄やうこのため、梅津かづらき、くるわの者どもうちつれて、所の玄ゆぐにうつたへ、本領あんど相違なく、かつらぎと二世かけて、さかゆくすゑとはんじやうせり、せん玄うばんせいめてたしとて、きせん上下おしなへて、みなあをかぬものこそなかりけれ

名古屋山三郎終

京四條おくに歌舞妓

土佐少掾正本

第一

序葉手「おどりきそへや、らくやうの花の、ぢよらうの、なりふりは、うき世ぼうしをゑやんときて、歌はやす拍子のそろふた、江平おまへに畏り、いざよひながら月かげも、まだ宵なりと存せしに、明わたるぞと夕がらす、カルあげ挑燈もゑら／＼と本フシはやゑのゝめとみへ候、みたちの首尾もいか／＼なり、カルはや御立といさむれば本節おくにはなごり、をしまれて誰かせいせんみたちのゑゆび、とうじ天下にかくれなき、今川の仲秋と、申す御身もうき世ふう、世はわざくれぞ今ひとつ、舟歌ヤッシをんどを肴に御酒あがり、それより向ふの茶やのみせイロ地つかのま計り夢をみて、おかへりまし／＼候へと、とゞめ申せば江平は、つね／＼わが父大道寺、鐵山と諸共に、ほんぎやくのくはだてなし、鬼にこぶもと思ひゑに、おくにが詞にちからをゑて、我もさは存れ共、内々御ぞんじも候はん、御かろうあら川刑部、同一子小

六郎が、いらざる御いへ重代の、賢人だてにへんくつの、かんげんほとんど耳にあき、我々ゑきさへふ忠のせめ、刑部がきげんそんじては、おいへの奉公成がたし、せひ／＼おかへりあそばせと、そやしたつれば仲秋公、扱は汝はあら川を、此仲秋にもかへじとな、あら川とても某が、かゑんなれば明日より、役義をけづり下さんも、又は所領をもつしゆせんも、我らが心次第なり、重をんをゑし某に、ちゑよくをあたへ當分の、あら川がゐを恐るゝは、まづ／＼汝を今よりして、かんどうなりとせき給へば、江平かつにのつ取て、仰はしごくに候へ共、今あら川がいせいには、御家中一とうとぶ鳥も、只一言に吸物の、わんにもとびこむはね切なり、今川の兩家老、あら川刑部大道寺、鐵山がせがれなる、此大どうじ江平が、おためをぞんじは／＼からず、くわんたい申上し段、まつひら御めん下さるべし、御をんの主君へふた心、有べきやとの御目がね、君共をばへ申さずと、遠手にまはす猿猴の、そらうそぶきしざんげんに、わかげのいたり、仲秋公のせられ、給ふも理りや、やゝもすればあら川めが、かんげんだてにあきたれ

共、我身のかうせきよからぬゆへ、かくいふぞと思ひしに、扱は主君のゐをかつて、がいにかかするを
ごり者、きつとせんぎをとぐべしと、仰あれば江平
は、御せんぎ有てはかへつて又、いか成る逆意かい
できなん、只何となく大やうに、少のをちどに事よ
せて、けいくはにを、せ給ひなば、ゑだいにせい
うすくなり、おのづから其上は此方の、自由ぢぎいに
成申さん、君一國の御あるじ、かく計なる御遊興、
かうせきあしくましますと、申にてなど候はんや、
皆あら川がかたくなにて、氣一ぱいなる御酒さへも、
きこし召ゑぬ御きづまり、其儘にては置がたし、ゑ
かし先今日は、御かへりましゝ候へと、すゝめ申
せばせひもなく、さらばよくにあすの夜と、クドキ
立出給ふ名残の袖、古めかしくもまゝならぬうき世
なりけり夕ぐれのお出をまたばけふの日は、嘸なが
からんとためいきのかこちてをくるやるせなさ、仲
秋公もふりかへり、あら川をさへ追こめなば、跡は
千よも心まゝ、少の内のふせうぞと、カ、ル戀にはや
みのよも明て本三重やかたをさしてぞ「かへらるゝ、
ながれあらたに、今川の、いへにつたはる寶藏の、御

虫干も花やかに、大どうじ江平は、御ばんの役に相
つめて、色／＼の珍物を、大々よゑん小書院に、一
めんにかざりをき、下番の者共が、障子をへだて、
とぎまにつめ、けいごきびしくきたりける、かゝる
所へ、大だうじ法眼鐵山は、虫干の吟味のため、御
書院に出けるを、幸あたりに人もなし、江平そばに
近付て、仰付られ候義、昨夜をどりの折からに、か
やう／＼のついでよく、あら川をや子があくじ共、
すいぶんりくつに云たてゝ、仲秋公をも此方へ、ま
きこめ申候へば、此上はあら川をちどを見出す計
なり、先めでたきぞ、打給へと、逆意をいはふ、手
の内も、かべに目はなの淺はかや、丹波の次郎時ひ
では、御書院に用有て、行かゝりつゝ兩人がひたい
とひたい押合、相談何共のみこまず、ぢつとかたへ
にさし足して、やうすをうかい聞いたり、あら川
小六ゑげかつは、大廣間に詰いたりしが、とけいの
八つ打ぬると、書院をさしてくる音に、すはや人ぞ
と鐵山は、かたへさしてぞかくれる、小六はふすま
押明て、うんきの時分先刻より、扱々御太義千萬や、
八ツのとけいも打ぬれば、御ばん替りに参りたり、

御待遠に候はめ、いざ御きたく候ひて、御休息なさるべしと式臺すれば江平は、御念入たる御口上、くるしからずゆる／＼と、御出も候はで、をしつけおゑまひ候へと、カル御道具一／＼引わたしチャクリ宿所をさしてぞかへりゐる、イロ地小六はひとり廣ゑんの、長もうせんのくれなゐに、背きて白き、つまはづれ片ひざたてゝたばこぼん、うすき煙にあつき日のきをくつろげて、いたりけり、かゝる所へ、仲秋公のいもふと姫、かほるのまへと申せしは、つね／＼小六重勝に、心の底のみだれかみとくかたなくて、おはせしに、けふは幸虫干の、つめばんなりと聞給ひ、カルうかいひみんと忍び足さし規きてみ給へば、なを戀風の、かほるひめたへすもそつと、忍びよりゑりへ手をさしいれ給へは、小六ははつとふりあをのき御目を見合、をどろきて、立ちりぞきてさしうつむく、其時姫君なふ重勝、兄君より虫干のてうど共、わらはにひそかにみせよとの、仰ぞやとのたまへば、小六いよ／＼謹で、畏り候と、爰やかしこへ御供しチャクリて唐のやまとのたぐひなき、本フシてうとゑよゑやくに、名作は、ごうの御たち其外の、御きせなが

の數／＼色チャクリをいち／＼御めにかけてけり、され共姫君身にそます、何ぞによるへ思ひの色、ゑらせばやと思召、小六にはなれずつきまはり、色／＼ゑたひ給ひしが、むねとゐるかせ給ひつゝ、もだしてすごし給ふ内、思ひ切てももの／＼の、品にたよつてなふ小六、かざり置れしもの／＼の、ほまれはくちぬこがねざね、うつくしうみへがたければ、いかなる思ひの矢さきにも、通りそうにもなき物や、いづかな／＼もの／＼ふの、ゆうきを守るもの／＼を、かたきなど／＼は淺ぎ糸、うすくれなゐを引まじへ、をどしたてたる御きせなが、春のよろひと、召れつゝ、御せんぞよりつたはりて、地關東關西たび／＼の御たゝかひにさきをかけ、數萬のてきをゑたがへて、龍と雲にのぼるより、なをすみやかに官録の、すゝませ給ふ御いへに、なんぼうめだき御もの／＼ぐ、本フシ扱その次の金小ざね、染ぬさきなる白き糸、花色まじへさはやかに、草ずりながの、御もの／＼ぐ、色もなさけもなし打の、かぶとをそへてかざられた、ハヤ三重名のるこはねも、高々と、はつ山かくる時鳥、ひとこへよりもさがけて、卯の花をどしと申つゝ、

夏のよろひに是をめす、掛三ばんにかざりしは、鍬がたけだかふかいやきて、サツマツリ半月のむかふたて、あたりまばゆき金銀にて、つま戀かねしさをじかの、やさしつのもじつからぬ、かな物打てつけたるは、それは我から夏の虫、其身をこがす火をどしは、秋の鎧に御ぎ候　はるか上座にくる皮を、こんの糸にてをどしつゝ、頭巾頭の老人がほ、八枚煮ころかたくさり、八まん殿の御よろひ、牛のひざ皮千枚をきたひくゝておどしたる、御きせながにて御ぎ候、されば奥州十二年、御かせんの其内に、馬あらふしててき城へたいちに、かけ入たりける時、すまんのてきぐん押取まき、さし取引つめゐる矢さき、あめあられとふりかゝれど、うらかく程の事もなく、うつたちつける長刀の、此かつちうにあたりては、岩にくだくるさい波の、みぢんに成てちりてんげり、玄うわうむぎんに切たてゝ、残る奴原はらくゝゝ、むらくゝばつと追ひちらし、かごみをのがれ出給ふ、ところぐゝにはつれ雪、銀にて打てつけたれば、冬のよろひと申なりかく代々の名將の、すどのてうてき、あくまをたいらげ、一天四かい波、ウタイ打を

さめ給へば、國もうごかぬあらがねの、きたひつめたる御ものゝぐ、當家御武運長久の、御守りと申ては、此上にや御ぎ候はんと辨舌、清く立まはり、いちくゝをしへを奉り、あふぎさす手に姫君は、ひしといだきつき給ひ、じんぎを立るお侍、いかにぐそくのき心はと、につことゑみてのたまへば、重勝こはそもはしたなや、いかなる公卿高家にも、かし給ふべき御身なり、もしもや人の見とがめば、御身のさはり御いへの、御かきんはやくゝをくへといさむれば、姫君猶も聞給はず、そちがきらはいそれ迄よ、只今をことが見るまへにて、此通ぞとがうのたち、するりとぬかせ給ひしを、小六はつと飛かゝり、御たちをもぎはなし、もつたいなや此たちは、がうの名劔世の人の、見る事もなきつるぎなり、御けがあらばいかいせんと、せいし申にふしぎやな、御てん俄に玄んどうし、此たちをのれとひらめきて、四方八めん、切廻るは、ハヤ三重すさまじかりける「次第なり、此たち風に、姫君の、うす手をおひ給へば、小六大きにおどろきて、たちのとがめと心へて、たてなしの御甲、はづしてたちにうち付れば、めいきの印一同

に、たちもをのれとゑづまりしは、ふしぎ也ける、しだいなり、此物音に仲秋公、あら川刑部大とうじ、鐵山をやこ御供にて、あやしやと入給ひ、此體に驚けば、姫君小六諸共に、はつとかたへに指うつぶき、せんかたなくぞをはします、仲秋は御らんじて、こはいかにかほる姫、何とて爰へは來りしぞ、重代のてうほう、名劔ぶぐをかざり置、殊にがうの名劔は、女の近づく事かたし、それゆへたちのとがめにて、思はぬけがも有しよな、先御たちをおさめんと、いたいきおさめ給ひつゝ、いかに重勝、かくみだらなるふるまひは、詞にたらぬ大惡人、かほる姫をば大道寺、鐵山をやこに預るなり、きびしく一まに押こめよ、小六は我手にかくべしと、はかせに手をかけ給ひしを、あら川刑部押とめ、ゑばし御待下さるべし、君の御手をおろされずと、父の刑部が罷在る、きつとせんぎをとげ申、いよくふぎに候は、某が手にかけ、きやつがかうべをはね申さん、先一てうの御いかりに、そつじあそばし候な、勿體なしといさむれば、江平ゑたりとすゝみ出、やゝをいにほれたか刑部殿、まのまへにてふぎ者と、見とがめら

れてせんぎもはや、ゑれたるとがにん此上に、何のせんぎか候はん、まだるしゝ江平が、たち取をせん小六郎、腹をきれやと、わめくにぞ、刑部笑てやかましゝ、わどのけつきにまかせつゝ、むほう破りは犬侍、ひかへられよとねめつくれば、犬侍とはたが事ぞ、舌ながるくはんたい、此上は某、ごぶんの相手に罷なる、小六が事は扱置、先其方が首とらん、ぬけやゝとつめよる時、床にかざりし御きせなが、ずつとつゝたち江平が、はなのさきに立出れば、江平大きに肝をけし、いづれもたちに手をかくる、時に甲をはねのくれば、いつのまにかは入たりけん、丹波の次郎時秀、見たぞやゝとこへをかけ、此たくみは大道寺、鐵山をやこが逆心なり、あら川ふしをばなき者とし、心のまゝに此國を、押領せんとはかり事、御ゆだんあるなといらゝげば、そらくゝゑくも鐵山、何われゝが逆心とは、せうこばし有けるか、せうこもゝさいせんに、おや子がよつての内談を、とつくと聞ていたりしぞ、何と鐵山見どをしかと、つめかけゝ云ければ、鐵山をやこきみわるげにいや其せんぎにてはなし、あら川をや子のせ

んさくぞと、まぎらかすを飛かゝり、取てふせんとする所を、仲秋大きに立腹あり、某きつとせんぎして、ざいくはに申付置しに、いらざるおのれが忠義だて、汝も共にかんどうぞと、カ、ル鐵山江平御供にて、をくをさしてぞ入給ふ、次郎いかつてゑゝめんどう、玄ゆくんも何もいらばこそ、鐵山をやこがいけ首を、引ぬき捨んと飛出る、刑部すがつて引とめ、そつじをなすなはやまるな、爰にてなせば重々の、をちどを身にうけ皆かへつて、惡人原がりとなるぞや、玄ばらくまてと引とめ、むねんの泪にむせびしはことほり、すぎてぞみへにける、刑部いかつてゑゝ淺まし、世にたくましき今川のいへ、てんせい才ちの名將も、邪臣にくもるむねの月、頓て後悔有べしとこぶしをにぎりきばをかみ、三人目とめを見合てないつついかりつ忠臣の、國を思ひ君思ふ手本は是なりとて貴賤上下押なべて皆かんせぬ、者社なかりけれ、

第二

「其後、大道寺鐵山は、江平を近付て先以仲秋を、すかしおふせて氣がゝりの、丹波二郎諸共に、あら川をやこをひつそくさせ、日比の本望たつしたり、されば仲秋在京の、きんやくを御めんにて、近日國へ入部ときく、此折こそは究竟一、何とぞ、手だて有べきぞ、江平は聞あへず、それこそ候ゑ仲秋、城中へいる所を、思ひがけなく追かけて、ふいを討んはあんの内こゝろ、やすかれおやち殿、かゝるかうなる子を持て、をい木に花をさかするは、此うでさきにと押さすり、玄まんなしてぞ申ける、おなじ心の古入道、ゑつばに入て、げにまこと、汝があればことわざの、子ゆへのやみもてるぞかし、玄かしはやまり仲秋を、討たる跡にてかみよりも、とがめのあらばいかいせん、こは玄ちくどし其事も、此江平がむねに有、其時言上なすべきは、されば主君仲秋、わかげの至我まゝにて、きうこうのかしん共、あるかなきかに追下し、其上此程四條なる、おくにが方にて日々夜々、酒興にをほれ候を、かしんあら川をやこのもの、見かねていさめたりけるを、きつくはいなりとがもなき、兩臣をかんきなし、追失ひて候な

り、とかく狂氣と存るまゝ、ゑばらく押こめ我々が、いけんをくはへ正氣となし、ちうきんなさせ申べし、其間は關東の、城はをやこに御預け、下さるべく候はい、有がたからんとごんげんせば、何の手もなく此いへは、カ、ル只とる山の時鳥うへみぬわしとくらすべし、心づかひをゑ給ふなと、すゝむる惡の上ぬりに、みがきをかくる鐵山が大きに悦び、打うなづき、萬事はよきにはからはん、こなたへ來れとそれよりも、三重ひそかに用意を「なしにけり、さればにや、仲秋公、在國の御いとま、けふゑまち入のかゑまだち、其行れつも、花やかに、皆一やうの旅でたち、花をかざりてつゝきたり、虎や吟扱其次は花やかに、一ツ三重數の馬をぞ、ひかれける、あしげ水あほひばりけや、をぼろといはんさび月げ、すへつむ花や、べにくりげ、すみすりながすくろの駒、引立／＼打過るこがねちりばむくらかいぐ、日かげもへたつあつぶさや、くれなる紫水淺ぎ、もみちを染る夕時雨、さつとふりだす大鳥げ、本節だいかさたて笠あざやかに、其跡よりも仲秋公、風もすいしきもじイロチクリかごやゑづかに召て通らるゝ、跡につゝける御供は、

カ、ル思ひ／＼の旅衣のりかけ馬のさま／＼に、ゑきろの鈴のいさぎよく、三重關東さしてぞハヤメ「ゑゆこくある、去程に、鐵山をや子の者共は、跡をゑたふてせめ來り、カ、ル城にもなれば押取まき、ハヤ三重時のこへをぞ上にける、城にはごせざる事なれば、上を下へとかへしける、され共みそばの御小性、一角ちからはをき、二人やぐらにかけのぼり、何者なればろうせきや其名をなのと呼はつたり、其時鐵山駒はせいだし、やあ我々は大どうじ、鐵山をやこの者共なり、然るに仲秋ふぎにして、道にあらざる御ふるまひ、上ぶんにたつしつゝ、我々に仰あり、此城を御預け、仲秋をばいづくへも、追失へとの御事ゆへ、君臣の道にそむけ共、おもき上意にちからなく、只今爰にはせむかふ、命はたすけ申べし、城をいそいであげられよ、さなくば一矢仕らん、いかにいかにと呼はつたり、二人は大きにはがみをなし、君をざんするをこの賊、あれ追ちらせと下ぢすれば、みかたのせいものはものゝぐし、カ、ル御もんをひらき切て出、ハヤ三重火花をちらして「たゝかひけり、かくてみかたの其中にも、てきへ一味の多ければ、

カ、ルかへつてみかたのうら切に、皆ことごとく討れにけり、され共一角ちからの助、今ははや是迄と、手々にゑものを引さげて、きはふかたきにはせむかふ、ゆらのくはん八まつさきに、ちからの助とわたしあふ、ちからはゑてのくさがりがま、請つひらいつ諸共にハヤ三重ひじゆつをつくして「たゝかひける、もとよりちから手きゝにて、くはん八がうつたちを、はつしと請てくさりにて、たちをからんでかなぐりとり、飛でかゝればくはん八は、こは叶はじと逆行を、すかさず追かけうしろより、たぶさを取て引かへし、首かきをし立たりけり、後藤の善太はかたの九郎、二人一度に切てかゝる、一角すかさずつゝと出、カ、ル兩人にわたしあひハヤ三重ゑばしたゝかひ「たりけるが、善太九郎を、弓手めで、けさに切てぞ落しける、され共敵は大勢にて、城に入べきやうもなし、是迄なりと兩人は、たせいのの中へわつて入、四方へはつと追ちらし、其後ゑがいの手本よと腹かき切てぞゑしたりける、今は手に立者なければ、我も我もと城中へ、ゑいやごへにてこみ入たり、仲秋せんかたまします、御ゑやうがいの障なければ、いか

がはせんと思せしに、實究竟の事有と、寶藏にはせ入て、御いへの寶共、取出し大庭に、なげだし給へばもとよりも、カ、ルよくにめのなきかたきのせい、ハヤ三重あらそいひろふ「其内に、御させながを、ぬぎ捨て、ゑがいせんとゑ給ふ時、あら川刑部はせ來り、かたきの大せい追ちらし、是はいかにと、押とゑめ何と某つねぐに、御いさめ申す事共を、今こそをぼしあたるため、此ゑきほのかに承り、はせさんじ候なり、はやまり給ふな此所は、ひとまづ落させ給ひつゝ、時節を御待有べきなり、跡は某ふせがんと、申上れば仲秋公、涙をうかべ其方がつねに申せしことのはを、カ、ル用ひぬゆへにかくのてい、めんぼくもなき次第かな、只とにかくに此上は、汝諸共討死せん、刑部いかつてこはいかに、爰にかぎれる御うんかは、急ぎ落させましますと、さいさんいさめ奉れば、心よはくも仲秋公、然らば爰を落ゆかん、必其身まつたふし、討死すなどのたまひて、いづち共なく、落給ふ、心やすしと、それよりも、刑部打物ぬきそばめ、せめいるかたきに、わつて入、ゑゝふゑんこらんにう、ひてうのかけりの手をくだき、爰を

さいごとたゝかひしはハヤ三重すさまじかりける「次第なり、深手あまたに、よはりつゝ、是迄なりと大をんあげ、かうなる者のゑやうがい、こうせいにかたれやと、城の内へつゝといり、急ぎ矢ぐらへかけ上り、腹十もんじにかき切て、たちをくはへさかさまに、カ、ル矢ぐらの下へどうどをち、つゐにむなく、成にけり、鐵山をやこ悦びて、勝時つくつてそれよりも、城の内へぞ引たりけるかの、あら川がさいごのゑぎ、あつぱれかうなる忠臣やと貴賤上下押なべて皆かんせぬものこそなかりけれ

第三

「其後、大道寺江平は、本城をのつ取、大どうじを改めて、今川かげゆの助カ、ルてるはやと、其名をかへ世にはびこりてくらせしが、しがらきうんじ難波の浦波、蘆まのかに若、くもじのらい八を近づけ、偕も天うん順くわんし、今仲秋を追をとし、先一城のあるじとなり、かゝる榮花にはこる事、天のめぐみと云ながら、何と果報の我ならずや、殊にあら川刑

部めは、心やすくも失ひて、心にかゝる事もなし、併小六めと、たんば次郎を打もらし、是きがかりに思ふなり、汝ら四人が内、兩人づゝ立わかれ、都と江戸へたちこへて、かの兩人の奴原を、さがし出して打てすて、こゝろの本フシ月の、くもりなき、うき世となせや爰に又、我仲秋が妹なるかほる姫に心をかけ、さまぐゝとくどけ共、一向なびく色もなし、こよひはうむの戀定め、をして思ひをとぐべきなり、汝らははやとくゝ、罷たてと申つけ、おくを指て入ければ、四人の者共一同に、畏てそれよりも、らい八うんじはあづまの空、浦波かに若兩人は、引わかれ行道のべや三重都の方へと「出てゆく、池のふぢ浪、ゑづやかに、本フシャツシあまのかはらの、ほしとのみかぞへ、つくさじ、色まさご、本地色などのごの色文は、いとまさかへし、くり石や、思ひはとんとすて石の、かたひは玉の盃のそこよ、こゝよと、枝ごとに、本地けしきをかしきすね松の、すねたふうこそにくらゑや、こなたには何春ならば、吉野もいかではきくらの入日、すゝゑき、ひむろかげ、本地ゑげりあふたるくま笹のいなのと、よみし有間山夕ニツ三重

風そよぐ、ふせいをば、レイセイ又もきてみんまつ島
や、をしまのとまや、波よせて、クドキうつすやり水
岩くみも、心をつけしにはのを、ゑばし心をはらさ
るゝ、めのとの藤がへ申やう、こよひは文月七日の
夜、七夕姫のあふせ川、ふかくいのればあふ事の、か
なふとやらん承る、いにしへ歌を梶のはに、書連ね
つゝ星まつり、たむけまゑ候へかし、姫君は聞
召、うき世のうさをかさねたる、イロ地身はろうてう
のくもをこふ、クトキ心も色にあらはれし、今みづか
らが思ひをば、いのらん物をとそれよりもみぎわに、
うかむさゝをぶね、本地めのともろともそれよりもや
がて三重ふねにぞ「めされける、かくてふぢがへ、筆
にそむ、其いな舟や梶のはに、硯をそへて参らする、
かほる取あげましゝて、すみすりながし、水ぐき
に、いにしへよりのたむけうた、本地ふかくそめなし
一〇〇三重にゑいぎんなしてぞ「うかめける、こゝろ
にこむる、ねがひの品、本フシャツシ筆にむすびて、ふ
たくだり、取上てまづ七夕の、心の内やいかならん、
待こしけふの夕暮の、本地空と吟じて此ぬしは本フ
たれかはふかく、思ふ君、本地待宵なりしけしきをば、

いのるうたぞと、をもひとる、こなたには又天の川、
まだ初秋のみじか夜を、などたなばたの、ちぎりそめ
けんと、かきしはまこと、諸ともに、本地あふよの數
のまれなるを、うらむこゝろよ、そのつぎはなにご
とも、いのるとはいさゑらなみに、ニツ三重かきながせ
しはたなばたの、とわたるふねの、梶のはにいくあき
かきつ、露の玉づさなをもつゝきて、契りけん、本地
心ぞつらき七夕の、年に一たびあふは逢かはとかき、
つらねしはたぞや此、歌の心の人ならば、あこぎが
浦のあまりなり、男をゝなの中はたいあふ、事のみ
をいふ物か年に一たび、まれにして、こよひ計のい
もせ川、深き、中こそ、戀ぢなれ、誠をいはばこゝにま
た、淺からぬ契りをぞ、思ふ天の川あふせは年の、一
夜なれ共、かくつゞけたる歌はそも、姫君様と覺へ
しと、申上ればかほるのまへ誠にそれはみづからが、
イロ地浮身をなげく言のはの、はやくも色に出しぞ
や、星は一夜も天の川、われはちら共、あふ事は、あ
まのもしほ火たきそめて、むねの煙の立まさる、思
ひよりして織姫の、中をうらやむ心ぞと、打そばみ
つゝのたまへば、舟もこぞりて取ゝにイロチクリゑ

ばしはかんじあひにけり具外、ハヤ三重わたる、かさ
さぎや、もみぢの橋をかけてだに、つまむかへ舟こ
がれゆくまたは、かしつるいとはへて、年のをながき
戀心、別れをゑたふ歌も有、或はすゝきをぎはきや
露をたむけし心も有、カ、ル實さまぐのたむけ歌ぎ
んじ、あふたるありさまはやさし、三重かりける「次第
なり、かゝる所に、かたへなる、すさきの松の木か
げより、かげゆの助は只一人、み舟に近づき打わら
ひ、こは姫君の御遊興、御きげんよろしくみへ給ふ、
御いたはりはいかいぞと、頓て舟にのりうつれば、
日比つれなくをはします、姫君いかゞをばしけん、
誠に水からかく迄に、世に捨らるゝ浮身をば、さまざ
まの御かいほう、なんぼう心にうれしけれ、地今よ
りしては御心に、叶ひ申て水からはともかくにも、
成申さん、是は寺からさとられぬ、御ことのはやそ
れはそも、御玄んゑつか但は又、御偽りての仰かや、
姫君争いつわらん、もはや我身はたらちねを、さき
だて申あふうへにも、はなれ申せば見なし子の、よ
にたのむべきその人もなくねにくらす、我なれば、
此上はゑうぐのかたき詞をやはらげて、君こそ二

世のとのぞかし、我身はまかせ參らするたのみ、ま
してと指うつぶき、ゑなだれかゝりてのたまへば、
てるはや大きに打悦び、こは忝き御心體、御心さへ
かはらずは、カ、ル萬々年は扱置てみろくの出世に、
いたる共、我が心はかわるまじ、然らばけふより、
君とわれ、はや祝言をいそぐべし、かための盃いた
だかんはやとくぐと喜べは、本フシ引取姫ぎみさか
づき、取上て、かげゆの助にさし給ふ、てるはや盃押
いたゝき、つゞけて三ごんさらりとほし、いざ盃は
事すみし、舟より上りて涼のちん、こすにもり行そ
らだきを、互の袖にとめなんと、姫君の御手を取す
ゝめ申せば姫君は、いや今ゑばしわすれたり、今宵
は殊に七夕のあふせのよはと聞物を、時もあひたり
我契り、かはらぬ印に水からが、是を參らせ候と、
守ほぞんを取出し、取かはす手のあやまりて、川へ
ざんぶと取をとし、是は、いかにとおどろけば、かげ
ゆも共に驚きしが、よし捨給へ其ほぞん、千も二千も
つくらせて、まいらすべしと云ければ、姫君は聞召、
いやぐさには侍らはず、水からが守ほぞんは、あい
せん明王の尊像、母上より給はりて、けふ迄はだを

はなさずし、たいせつにせし事なれど、君を深くも思ふゆへ、地契りの印にまいらせしに、カル取落せしは何とやら、氣がゝりになり侍ふぞや、よし／＼水から水に入、命にかへてもとめんと、とびいらんとし給ふを、こるはや急ぎいだきとめ、さほどにおぼし給ひなば、カル某が取出してまいらせんと、頓て小袖を、ぬぎ捨て、かの水中へ、ざんぶと飛入爰かしことハヤ三重たづねもとめて「およぎける、某いまに、姫君、めのとを近づけうれしやな、先てるはやをば、偽りて、手だてはをせたる物を、いかせんとのたまへば、藤がへさあらば此所を、忍び御出ましまして、いづかたへも落申さん、はやとく／＼とかひ／＼しく、舟にさほさし押行を、かげゆの助はうき上つて、舟に手をかけなふ姫君、是取出し候ぞや、悦び給へとさし出す、ひだりのかいなを姫君は、そばに有けるたち引ぬき、ずんど切てぞ、おとさるゝ、はつと驚きてるはやは、逃行んとする所を、さんざんにぞ切たりける、すかさずめのとてるはやが、たぶさを取て引よせ、舟ばたに押つけ少も更に、はたらかせずさあころさせ給へや姫君様、心へたりと

かほる姫、たちをさか手にてるはやが、のどぶへにをしあて、思ひゑつたか大惡人、時にてるはやこへを上げ、やあ／＼姫君さいせんに、つまよおつと、云かわす、此かげゆめは姫君の、おつとなるぞや其おつとを、ころし給はゞ天ばつはいかでかまぬかれ、たまふべきぞやおろかやをのれ主君たる、仲秋公を追失ひ、いへをうばひ水からに、よこしまのれんぼをなし、をつとよつまと思ふこそ、をもきが上のおもきとが、かさ一ツ三重ねかさぬる、惡心のまぬかれざる天ばつは、今ぞむくふと思ふべし、念佛申せてるはやと、首かき落し捨給へば、上カルをいは波に水の色、あけにそみたる明がたに、めのとがかほをきつと見合、地をすましたりとうれしくも、二人手に手を取くんで、あづまの方へ落給ふ、かほる姫の心の中うれしき共中／＼申計はなかりけり

第四

「昔男のかぶきふう、をゑかへてゑもんいしやうつき、大小さしたふり迄も、都難波津むさし野の、三ヶの色

にをいてふろ、彼丹州の御門前、丹前ふうと世の人の、カ、ル姿をまなぶしなしぶり、をんなごゝろの、だいたんにふるや、やつこの、なががたな、どて八丁のはるぐと、けぶりかすかにみへわたる、本フシむかふのもりの、色ぐに、本地せんじゆ金杉里のめのニツ三重正月はまづ、つくばねのみね、ゑろたへは、さながらに、江天のぼせつみやぎの、田のものをつる、歌かりがねは、へいさのらくがん見かへれば、里の通ひをまつち山ニツ三重きせん男女の、うき世びと色のねがひをむすぶの神、聖天宮へさんけいの、よねの名による茶やのてい、さんしのせいらんなど共、かやうの所や云つべし、うつすに筆も及ばれず、ゑ師の上手がはけ取て、本地さつとひいたるすみだ川、なみまにうかむゆふせんはゑんほの、きはんやなぎかけ一ツ三重つりする、おぶね、とあみぶね、夕日にいそぐ、早小船二てう三てう、かすぐの、色めきよする、花川戸、漁村の夕照、よみせをとこゝろにこむるうかれをのなじみ、ぐに、あふせ川ゑるもゑらぬも、ゆきちがふ、袖すりいなり草深く、扱もやさしの、はたるのむしや、かよふなはてに火をとほす、こり

ずもかよふ、たんぼみち、風にも行雪にも行、ぬれに打こむ若ざかり、色でゑのなら深草の、是しやうせうのよるの雨、ふつゝふられつきぬぐの、なごりをおしむわかれざけ宵にむすんで、夜明にたゝむ、土手のばんする身はやすし、夢の此身とわざくる、道哲の念佛は、ゑんじの晩鐘かの里の、色をならべて見るごとく、極樂せかい洞庭の、ゑやば目前の秋の月、實ゑやうにも榮花にも、又此上や有べしと、詠めつゝけて、是だんな、命の君に大門口茶三重やのまへにぞ「つきたまふ、かはるすがたも、おかしげに、あれハヤ三重にあれたる、ものゝふの、うき世をすねし、風俗や、くろきをきらふ赤ゑぼし、まゆ半にきて大紋の、はかまのすそをくゝりあげ、大だちはきてゆふゆふと、牛にのり行有様は、おふさ、きるさの色人も、ゑばしは爰に立つどひ、笑ひすぐなるゑもんざかをとこの、たちしまむかふに、遠慮なくのりかくるを、こなたへよくれば猶のりかけ、かなたこなたとかまふにぞ、供なる男こらへかね、きしよにはみればれきぐの、御方と存るが、所もあしく候へば、けんくはをもとめ給ひても、某が主人は、御相

手には成申さじ、太郎聞て、我はけんくは、このまね共、横にあゆむは牛のくせ、よけてとをれと云捨て、猶もむぎんにのりかくる、男今はすいさんと、刀に手をかけあみ笠を、取て捨るを能みれば、姫君様にてましますか、さいふはいかに御家人の、丹波次郎時秀、是はく計にて、しばし、なみだにくれにけり、姫君かゝる様は、いかなるゆへぞさん候、何とぞ君の御行衛、尋出し奉り、大どうじをほろぼして、世にたて申さんはなかりごと、あち川小六と云合、此所に罷ある、然るにかたき大どうじ、京都なにはづ關東へ、討手を付をき我々が、こうせきの善惡みて、折あらば打とれと、申付候よし、それゆへかくもこしらへて、あら川小六は世の人の、關東にならびなき、だての小六とあだ名たち、某をば、丹波の助太郎と名を呼かへて、かくはうらつのていたらくも、てきの心をうばゝんため、わざとみせかけ候なり、幸小六重勝も、此里に通ひきて、罷有候なり、某御供申べし、君又かゝる御ふせいは、されば自大とうじ、かげゆの助をば手に懸て、がいしやかたをのがれ出、當國へ落來りしが、名高き氷川明神へ、カ、ル

さんけいなせし下向道、色ある文をひろふたり、名がきをみれば小六の君、勝山よりと書たりし、扱は重勝此里に、通ひくるわを尋んと、めのとの藤がへ諸共に、姿をかへて來りしと、委く仰有ければ、時秀大きに悦びて、へんじもはやく思しめす、小六にあはせ奉らん、カ、ルこなたへ御こしませと姫君のハヤ三重御供してあげやをさしてぞ、舟歌ヤツシ色のせくる二上りの、こゝろも、そらにうきぐも、はれて、月見の、あげや町、うつりがゑたふ、梅の花の色こそみへてかやの内、外にはなにと戀ごろも、しゆすのたてがみつや清き、ニツ三重小六も今は、かつ山に、のぼりつめたる、はこばしご、てうしもてくる、かぶろ共、本地しやくをとらせてしづやかに、歌ふたり興あるさかづきは、深き色とぞみへにける、かゝる所へ、あみ笠まぶかに引かふで、ゑしやくもなげにつゝといひ、小六かつ山驚きて、何人なるぞととがむれば、くるしからず某は、けふ始ての者なるが、名もいや高きかつ山の、君の御げんを願ひつつ、ていしゆを頼候へ共、御さはりのみ候て、御めにかゝる事かたし、よつて某けふちきに、御めにか

かゝ申さん爲、座敷へすいさん仕る、情をかけて給はれかし、かつ山聞てこはいかに、高しの濱のあだ波のうちつけなりし、御方や、さはさりながら数ならぬ、みの、おやまの夕しぐれ、ふるかひもなき水からを、さ程に思召れたる、深き御しんはいか計、身にあまりて忝し、ゑかしこよいは相馴し御方と、深きさはりに候へば、御かへり候へし、いや／＼さはる事あり共、こよひはせひにもらふべし、小六はせいてあんないなく、ぎにふみこむさへあるうへに、せひもらはんとの我まゝは、おこといかなる者なればと、つゝとよつてあみ笠を、引取みればかほる姫、是はいかにとあきれはて、とほうにくれてことばなし、かほる姫はゑげかつに、イロ地わらはかく迄うきくらう、悪人の大どうじ、てるはやを打取、あやうき所をのがれ出、あはん計を力にて、女の身にあはざる、男の姿にさまかへて、此所迄尋しを、哀なりとは思はずし、あの女郎に相なれて、わらはをすてしは情なしと重勝にすがりつき、深くなげかせ給ふにぞ、さ、おぼしめすも御理り、まつたくさやうの事ならず、此かつ山と申は、都四條に名も高き、お國と申

すかぶきをな、然るに主君仲秋公、通ひなれさせ給ひつゝ、深き情に預りし、御をんのおゑう仲秋公、此度の亂げきに、本城を御立のき、おくには君をかいほうなす、らう／＼の御身いたましく、此むさしのに二どの花、ちいのこがねに身をかへて、かくうきつとめをいたせしも、仲秋公の御爲と、かつ山が心てい、肝にてつしてたのもしく、わざと相みるていにして、とかくはかたきを打とらん、評議いちつにいりやぐなす、日本の諸神をかけ、まつたくさやうの事ならずと、かつ山諸共一心に、やいばをみかく血判の、きしやうを取だし姫君の、御めにかくればかほる姫、扱はさやうのゑんていかや、たのもしき人々や、カル今のうらみはわがとがぞゆるし、たまへとのたまへば、小六かつ山諸共にこはもつたいなき御事と、三人めとめを見合て、ゑばしなみだにむせばるゝ、かゝる折ふしかざりをく、月見のだいをけ破て、男二人飛でいで、我々は大どうじが郎等、うんじらい八兩人なり、かねて小六此里へ、通ひくるよし幸と、手だてをめぐらしきづまりなる、だいの内にかくれいて、やうすはとつくと聞たりし

ぞ、命をしくば繩かゝれ、さなくは——打とらんと、懷劔引ぬき打てかゝる、さしつたりとゑげかつ、そばにたてたるゑよくだいにて、打くるたちを請ながし、姫君勝山押かこひ、カルかなたこなたとふせぎしはハヤ三重せんかたなくこそ「みへにけれ、丹波の時ひで、かけ來り、先うんじをかいつかみ、取てなぐればうんといひ、身もだへするまにらい八を、取て押ふせ引立て、うんじが五たいへ打かさね、胴ほねふまへてつゝ立上り、をさへたくをつさへた、かたきを外へはやらじとぞ思ふ、をもふまゝにぞいけ取ける、頓て二人を引立て、かうべとかうべを打合、みちんになさんはやすけれ共、すぐにきやつ原都へひき、かたきのやうすを尋べし、かつ山をば請出し、都へ諸共御こしと、ていしゆをよびて云わたし、小六は二人のやつばらを、ゑよくだいにてさんぐに、たゝきたてゝぞいそぎゆく、適かうなる者共やと貴賤上下押なべて、皆かんせぬ者、こそなかりけれ

第五

「其後、大道寺鐵山は、仲秋公を追失ひ、おのれがままにくはんらくし、あんどの御教書請ん爲、在京しでいたりけり、かゝる所へ、鐵山が郎等、芦間のかに若罷出、承るにかぶきおな、都おくにが名にしあふ、四條がはらにさじきをたて、見物貴賤くんじゆなす、君にも忍び御出あり御見物あるまじきや、鐵山聞て打悦び、幸かなやそのおくには、仲秋の思ひ者、色におぼるゝふせいして、深くなじみを重ねなば、仲秋のありかを、ゑらせん事はぢでうなり、其用意すべしとて、供人あまた引ぐして三重四條さしてぞ「いでにける、貴せん男女の、見物はきりを、たつべきせきもなし、中にも左り正めんのおもさじきには大どうじ、法眼鐵山ゆふくと、郎等左右にゑゆごなさせ、三重見物なしてぞ「いたりける、かくてゑこくに、なりしかば、色のもなかのはやし方、上げまくさつと淺づまの、あたりかゝやく出立に、はしがゝりよりゑづくと、心もいとゝ、ふかみ草、花のかんばせほのぼのとひむくのしたぎゑもんよく、浮世はまこと、よしあしも、なには入江の立波に、こがれて過るあま小船、カルつなぎとめたるみをつくし、むねのほむ

らもけしかのこいはでの山のいはつゝじ、櫻ちりしく花蘭や、本地まがきが鳥の初霞、はつとして猶はでらしく、かい取小づま吹上て、懷にいるふへ竹の、よにしほらしくぞいでにける、本フシつゝいて出し、やまと歌、本地ていかといへる女郎の、其風俗は秋津すに、又ありがたき容色の、見るに思もますほのすすき、おばなの袖や白露の、イロ地たまさかにだにあふ人も、ふかき、をもひをいかでかは、あだになすのををみなへし、くねる計の、ふせいにて、本フシをるひとゆかし藤ばかり、其紫のまらべには、ゆかりを見する小つゝみのせうぎに、こそはなをりけれ、つぎにみへしは、大づゝみ、本地かはらぬ松や柏木と一ツ三重名こそ立れ、さくら色なさけのもなか月のかは、玄やんと出たるしなもよく、本フシ柳のまゆに、花のゑみ、いとし取なりはでもやう、きむくうつろふかさねづま、舟歌ヤツシ八る山吹の玉川に、ながれ立田のもみぢかり、本地きやらの指ぐしくろかみの、いとつや清くしとやかに、思ふ人には大やうに、是もせうぎに、なをりけり、たいこの役は其名さへ、なを若草とねよげにも、みへてや露の白むくに、白かねのやうがいのさ

しかゝりたる有さまは、げにたぐひなきふせひかな思ひくゝの、出立にぶたいくんする有さまは、三重心ときめく次第「松の位もときわなる、松の位も常盤なる夕まの隙ぞとぼしき、諷女郎の數にさへいらで、水しのうきつとめ、やうくゝまばし夕方の、すきを求て此屋の内、わけよきかたの御出に、色大よせの候よし、數ならぬ身もまじはらんと、サツマウツリかうしのきはに立よれば、數の女郎押留て、いや此内へ外よりして、色のならひはなき物を、叶ふまじとてとゝむれば、いやしき水しの女なれば、くるしかるまじさもあらば、つねにこのみて手なれたる、まりの拍子を一かなで、こゝにて御めにかめ申さん、げにくゝ是は興あらん、さあらば急みせ給へ、女はうれしく立よりて、キリ山入あれにまします、女郎の、うはぎの小袖かりにきて三重既にきよくをぞ」かなでける、ゑもんながしの、まりの曲、ゑもんながしのまりの曲、いざやけ上て、なぐさまん亂拍子そも此まりと申は、ふぢ原の、本地まさつねまさ道の、いへをおこして此かたは、世にことふりしもてあそび、本フシ大宮人の、御ゆふにも、本地まうきくのはのをもよ

もとのこかげ枝たれて暮に數あるくつの音二三重柳
さくらを、こきませて、にしきをかざる、もろ人の、
花やかなりやこすのひま、くるくまはるからねこ
のざれるもすそをふり切て、上がへ下がへ引かさね、
かぶろは袖の、ふりはじめつく、つくくには手ま
りつく、ひいふう三よ、みよならく、松をかざし
て、梅のをりゑだ、それすいたしやみの手、中の町、
あげや町は色くらべ、かくて、月をち、鳥もなき、
かのかうそくの一曲は、本フシあけやにたいして、カ
カルうつゝをぬかせばよき隙ぞとて、かしこにつり
たるとうがいの、だいわに手をかけとぶぞとみへし
がハヤ三重引かづきてぞ「かくれける、數の女郎、を
どろけば、ていしゆあはて、飛で出、かやうの事
の有べしと、思ひしゆへにさいせんより、外の女郎
きんせいと、申付ては有ぞかし、とうがいは女郎の、
忍びてあへる客の爲、カル心中たつる女郎は、ふか
くうらみし此あかし、いでくなげしに引上んと、
かうしにひける二上りの、てうしにつれてうたひけ
る、色かへつて此さとの、地あそびの數はつくる共、
手くだの數をつくべきか、てうばわすれでくる文、

ちかひしせいし心中に、ゆび切も、皆偽りぞと聞時
は、ゑつにうらみは有明の、とうがいこそ、すはす
はうごくぞはやせたい、拍子ひけや手々に夜明のさは
ぎ、ふり手の名人かけ手の上手、心をくだきてはや
しける、謠はやしたてられひかねどうがい、うご
きいでふしぎやあかし、のとぼるよとみへし、ほど
なくなげしに引上たり、中におくには只ひとり、い
とゆふくたるふせいにて、かい取小づま、しほら
しく、ずんと立たる容色は、よしの、櫻のだの藤、
立田のもみぢならべても、けをされぬべき其いろに、
よねんをぼうして鐵山は、棧敷よりぶたいに出、扱
も誠に久方の、天津くもいを立へだて、あづまの空
にたいりうし、此程かへられ候とて、今日の御まね
き、忝しや殊に又、ひさしぶりにて、御一曲、げにむ
さしの、色風に、もまれて歸京有しゆへ、其御ふせ
い、一入に、詞にあまりて覺たり、其方もわが果報、
定て聞も及ばれん、今我國のつかさをば、此鐵山に
にんせらる、何と仕合ならざるや、其方をね引して、
ときはの松の千世かけて、をいのたのしみござんな
れ、いかにやくくとゑなだるゝ、おくにはゑてにほ

かけ舟、よるせをまちし折からに、今の詞のうれしくも身は山里の姫小松、ひく人もなき水からに、今の仰は御うれし、こゝははしぢかこなたへと、相づの所へともなへば、時分はよしと時秀、釣とうがいを切落し、取たと云ておさふれば、鐵山驚きこへ上て、はねかへさんともみあふに、少も更にはたらかせず、鐵山が郎等あまさじと押取まく、小六姫君打物ぬき、四方へばつと追ちらす、丹波次郎大をんあげ、しゆくんをなみせし大罪人、カ、ルいざさいなめと左右よりつきつらぬきてぞ「さしあぐる、鐵山くるしみ、もだゆるを、小六時秀一同に、天はたい釋地はけんろう、主君をかすめし、惡心は、カ、ル爭あをんなるべきぞ、思ひゑれやと、飛かゝつて、さんざんに切ちらし、首打落しそれよりも、かち時つくつて立たりけり、カ、ル前代未聞の次第やと貴賤上下押なべて、皆かんせぬ、者社なかりけれ

第六

「其後するがの守仲秋は、てつさんが叛逆に、都のそ

らにをち給ひ、内縁のちなみある、今出川大なごん、きん直卿のかまへらる、北山の山庄に、深く忍びておはせしが、此程妹かほる姫、丹波次郎時秀、小六諸共あづまより、尋のぼりてめぐりあひ、御悦びは淺からず、然るにけふも逆心の、大どうじ鐵山を、はかりうつべき計略は、いかゞとあんじおほせし時、小六時秀はせかへり、かやう／＼の手だてにて、さしももういの鐵山を、たやすく討取候と申上れば人は、御悦喜はなはだかぎりなく、きん直仰けるは、然らばへんじもはやとく／＼、某ぢきに御所へゆき、御かんき御めんの御せう、申上べし此上は、心安かれ人々と、ゑやうぞく改めそれよりも、仲秋公を伴ひて三重御所をさしてぞ「あがらるゝ、其比天下の、武將をば、源の右大將、よしまさ公と申奉り、ぶとく四かいにあまねくし、そうめいるいちの名將なり、けふしもは御ちやくし、左中將よし直卿、御げんぶくの儀式とし、御まへにはふだいのゑん、仁木細川上杉等、カ、ル國中の諸大名ざせきを、かまへて仕公せり、かゝる所へ、今出川きん直卿、いぎをたゞしく入給へば、よしまさは御悦び、先こなたへと上座

にせうじ、亥きだいをはればきん直公、先以今日はよし直卿の御げんぶく、うゐかうむりなる御粧ひ、はなはだにあはせまし／＼てめでたく存候と、仰あればよしまさ公、猶悦びの色みへて、それ／＼と有ければ、ながへのてうし御かはらけ、カルぎ亥きおわつてそれチクリよりも既に、御酒ゑんはじまれり、時にきんなをのたまふやう、扱も某此間ふしぎなる一卷、相もとめ候なり、是は御かしん、今川入道りやうしゆんが、つね／＼しそく仲秋へ、ていきんの一ぢくなり、あらかた一見申せしに、中々世上のきやうかいにも成べき物にて候ゆへ、よし直卿へまいらせん持て參れと有ければ、みつぎに有しみずいゑん、かの一巻を持まいる、よしまさ是へと取給ひ、ひけん有しに其詞、皆せいけんのをしへなり、よしまさ御らん終て後、誠にさりし了亥ゆんは、ぶんぶの忠臣たりけるに、子はかれににぬ仲秋が、不道のふるまひなせしゆへ、かのいへだんせついたせし事、ざんねんに候との、仰にのつ取きん直卿、亥やく取直しのたまふは、さん候仲秋事、まつたくふぎにて候はず、仲秋かゑん大どうじ鐵山がざんげんゆへ、御

かんきかうぶり、ちつきよせり、某びんなふぞんじつゝ、ないゑんのよしみにより、かくまひ置て候と、一々仰有ければ、よしまさおどろきさもあらば、仲秋急ぎ召出せと、カル上意もいまだをはらぬに、仲秋御せんに出らるゝ、時によしまさやあ仲秋、きん直卿の仰により、召出して有けるが、其身にくもりあらぬとの、せこもあるやと御でうある、仲秋つゝ、亥んでうけ給はり、有し事共ごん上有り、それぞれと有ければ、小六時ひで兩人は、色里にて召取し、うんじらい八、二人のものなは取して、御亥らすに引すゆる、時ひでこへをあらゝかに、やあおのればら鐵山が、ぼう逆一／＼言上せよ、其時兩人一同に、皆鐵山が領地を、うばはん爲に仲秋を、ざんげんいたし候なり、我々かれが郎等にて、うんじらい八と申者にて御ざ候、小六時秀兩人をうつべき手だて顯て、かくのていとは罷なる、あはれ、かみの御亥ひに、命をたすけ給はれと、一／＼申、上げれば、よしまさ扱はとがもなき、仲秋をくるしめたり、此上は官祿も本のごとくと有がたき、ほんりやうあんの御げう亥よを、なし下されて入給へば、仲秋は

つとてうだいなし、二人を引たてちうりくあり、それよりもすへながくふつきにさかへたまひけり、千
ゑう万歳めでたしと貴賤上下押なべて皆あほがぬも
のこそなかりけれ

京四條於國歌舞妓終

土佐日記

第一

「諸も、其後、爰に仁王六十代、だいごていと申は、古今まれなる賢王にて、まつり事すなをなれば、内にうらみのおんななく、外にむなしき男もなく、天下太平長久の目出度、御代とおさまれり、さて又時の人々には、びわのさだいじん仲平、右大臣たゞひら、あふしかうちのみつね、大内記きの友のり、御所には、玄番の守紀つらゆき、かゝる賢人多ければ、はまのまさごの数々にわかぬ、あそひそやごとなき、かゝるところに、大和國うだ野のれうしゆ、むらとりのちかね、さんだいせしめ申やう、さてもそれがし、けうなる鳥をもとめゑて、すなはち持参つかまつる、きつけういかゞ心得がたく、御うかゞひの其ために、さんだいいたい候と、五しきのふなるきんけいを、やかて御せんにさし上る、みかどゑいらんましゝて、それもろこしのせいたいには、きりんほうわうあらはれたり、かゝるれいてう出る事、國

ばんせいのためしぞや、さればわうじん天わうの御夢に、やまとたけのみこと、しろきとりとけし給ひ、おはりのあつたへ、とばせたまふと御らんあり、さてこそ八つるぎ大明神と、今にたへせぬ神がきへ、さいわひちんれいむあり、ほうへいしをたてらるべし、つゐてわそのちかねに、もしみやこ鳥といふ、鳥の色ねやぞんせしか、うけたまはれとのせんじなり、仲平かしこまつて、ちよくでうのよしのべらるれば、さやうの鳥名をうけたまはるも、今がはじめに候とつゝしんでぞ申ける、みかどゑいぶんあつて、その鳥のしさいばし、聞出してあるならば、さつそくちうしん申べしと、りんげんあつてそのうち、きのつらゆきを召れ、なんちはあつたのみやしるへ、きんけいをちかねにもたせ、しんりよをすゝしめ、こくかたいへいの、ほうへいをさゝぐべし、はやとくとくとありければ、つらゆき、かしこまつて御せんをたち、ちかねをはじめ下ほくめん、はしとみの貞沖、家のしつけんみぶのたゝかつ、そのほかの人々まで、ろしのぎやうれつはなやかに、もみちをかぎすかしまたち三重めてた、かりけるヲロシ「次第なり、

爰にまた勢州くわなのかたほとりに、奎之丞、ふちはらのつぐかげとて、もとはきんりよみやつかへ、その性ゆゑしき人なれども、時にあわねば家まづしく、たゞまかちなるのきの草、ぎよそのんの宿の、たのしみにたいこうぼうがつりあれと、只わくらはにみゆきする、ぶんわうのなき世の中をうちなげき、うらみて暮し給ひしが、つらゆきのさんけいに、此事をつたへき、あねに八ゑかき十六歳、次男、多門丸拾一歳、さうでんの郎等に、近藤みんぶきよひて、女はうはまおぎもろともに、ひそかにまねきのたまふは、此たびちよくしきのつらゆき、あつたのやしろへしよてうをはなち、みやこ鳥といふとりを、御たづねなさるゝよし、そもく、みやことりといふ事は、かだうのひみつ、日ほんのたからなり、むかしなりひらの中將、すみだ川にて見たるより、おそらく世上にしる人なし、されどもそれがし、ふしぎにこれをつたへたり、今御たづねある事は、それがしがぶうんの花、ひらくべきさうなれば、尾州へたちこへちうしんし、花さく春にあふべきなり、これとおたづねの有ならば、らうがんのつう路いかい、

さいわいあねの八ゑかきに、つねくつたへておきぬれば、ひめをともしなひまいるべし、多門ことはふうふのもの、よきにたのむとありければ、きよひでふうふうけたまはり、しからばおとを御まかせ、おやは御出ましますと、御ことぶきのさかづきに、はやしのゝめも、ちかつけは、つくかけやゑがきおや子の人、ひでんの一くわん、まもりぶくろへいれたまひ、おつつけめでたくかへらんと、たち出たまへば人々は、門出いはふいとまごひ三重あつたをさしてそちろしいそがるゝ、さればにや、ほうへいしに立給ふ、きのつらゆきはあつたにて、みかぐらののつとうに、しんりよものうじゆましますてい、きんけいをみ山にはなち、なを當國のきうせきを、ながめんためにおはします、されば、はしとみの真沖は、さうだ一人めしつれて、なるみがたのかいへんに、つりをたれんと出けるが、おりからなみもしづかにて、かいへんのつりをふね、かなたこなたをうちなかくめ、みぎわにたゝすみ居たりけり、かゝる所につぐかげは、ひめぎみにいざなわれ、みちよりこゝちあしきとて、やうくとしてきたらるゝ、なるみの

いそのまつかげにて、今ひとあしもひかれずと、こちわづらひ給ひけり、やゑがきはたびといひ、ことに女性の事なれば、のふちうへさま、心はなにとましますぞ、もしもの事のあるならば、わらはゝいかなるべきとなみだ、くみてぞおほせけり、つぐかげはきこしめし、いや／＼きしよく心よし、しばらくあしをやすめなば、よからむものをさないひそと、かさ打かたげおいの身の、なやみ給ふぞうとましき、ひめぎみはせんかたなく、かなたをみやりましまして、きんへんの人と見へ、みぎわにつりする人のあり、あらうれしやと立よりて、詞わらははたびのものなるが、つれたる人にわづらはれ、くすりとてもさふらはず、御しよぢもあらば御じひに、たまはれかしとのたまふを、貞沖はつく／＼みてさてやことなき、上ろうや、御らんのごとく我とても、つりにたち出候へは、さやうのようゐも候はず、家にはくすりも候なり、たびはものうきものなれば、その御つれをともしひて、わがすむかたへ御こしあれ、上ろういかとうちかたる、やゑがきはきこしめし、こはかたじけなき御ことば、さあらばそのよ

し申さむと、そこをたゝんとしたまふを、貞沖御てをしとゝとり、そなたのやうをきくからに、またこ元の用事をも、さこそかなへてたまはるべし、なるとのいそによるなみのうちつけかましく、候へど、見る／＼君にこかれふねよるせ、なぎさの我なれば、詞そなたのおこゝろ次第にて、七夕姫のちぎりをは、なかくむすばんほしあいの、コトバいもせのゑんはいかゝぞとしなたれて申にそ、やへかきはなむさんばう、わけなき人にもいふて、心にそまぬむらさきの、ゆかりのきかせ給ひては、こなたのいろと御らんせんあらよしなやと、たちたまふ、もとよりかうしよくぶとうなる、貞沖が事なれば、ひらに心にしたがひて、つれの人にもきうそくを、せさせたまへとだきかゝゑ、はや引立てゆかんとす、ひめ君これらはらうせきと、よばはりたまふにつぐかげは、すこし心をとりのをし、こはらうせきものがさじと、太刀おつとつて出たまふを、それさうだといふゑもまなく引立、いそぎける、さうだは太刀をひんぬいて、討てかゝるをつぐかげは、しさつてさうだがすそをなく、のつけにたをるをのりかゝつて、すかさ

すといめをさしとをし、ゑゝむねんやといふゑも、まなこくらみてたちもゑず、かゝる所に、むらりのちかぬ、これもとせんのあまりにや、貞沖といひあわせ、つりさほかたげきたりしが、このありさまを見るよりも、引たてくすりを口にいれ、何ものなれば人をがいし、そのみもきしよくのふせひこそ、おぼつかなしとときをつくれは、つぐかげやうゝ心つき、さてゝ人にせんあくあり、かやうゝのしだひとて、ひめの御事かたりつゝ、只今の心さしありがたふもとうとけれ、これは此たびみかどより、御たづねおぼしめす、みやことりの一くわんなり、もしもちよくしへつてあらば、このまきものをあげたまひ、われらがゆへをもよきやうに、御とりなしをたのむなり、そのおりからは名もなのり、このをんだくをもほどこさん、萬事はたのみたてまつると、てをあわせてぞ、おゝせける、ちかぬもとよりぶとう人、てんのあたへとよろこびて、さてはみやこどりの、でんじゆをのするいちくわんとや、まづゝそれがしあづからんと、ひだりにもちて右に太刀、ぬきうちにはつしとうつ、つぐかげこれはととびしさ

り、おのれもおなじとうぞくよな、いゑのうんめいきはまつて、てんのはつするところなりと、またたちだちとより給ふを、ちかぬ太刀にひつかけてさそくをふんではねかへせば、みぎわのいそへどうどをち、うづまきて見へけるを、ちかぬはまきものくわいちうし、なをひめぎみの御あとをしとふてこそは、いそきけれ、このたち風にぎよふ一人、いそべにふねをさしよせて、にげていゑちにかへりしが、つぐかげすいれんゑたりしや、やうゝ浮上り、かのふねに手をかけて、ひらりとのかつはとふす、おりふしなみかせたちさわき早三重いづこも、しらすに「ヲロシ」ふかれゆく、斤ヲロシさればにや、貞沖は、やゑがきをいざなひて、あつたのみやゐもりかけの、人なきところにおろしをき、のふひめ今はそのかたの、つれたる人もうたるれば、たよらんものもあるまじきぞ、われにしたがひましませと、いろゝとにかきくどく、八ゑかきはきこし召のふゝ其、つれたる人はちゝうへなり、ちゝをころせしそのものに、いもせをかねむ事やある、ちゝのかたきのがさじと、さしそへをぬかんとしたまふ御てをとり、ひぎの下

にひつしき、さてくだいたんなる女かな、さあした
たがわすは此太刀にて、さしころさんとひしめくと
き、つらゆきのかうけん、みぶのたいかつ、けふつ
らゆきのだいさんに、みやゐにまいりかへりしが、
はじめよりのしだひを、しげみのかげよりよく聞て、
つゝといでまづ、さだおきをかいつかみ、七八けん
なげのけ、ひめきみをかこひつゝ、二王たちにぞた
つたりける、さだおきこれはとどうてんし、やあい
かにたいかつ、此女はわが下人、すこしさいある
により、かくせつかんをくわふるを、りふじんには
いとる事、いかなるゆへぞと立かゝる、たいかつが
これを聞、あふめづらしやうつらゆき、此たびち
よくしかふむりて、此みやへさんけいに、きでんと
もしてきたりし身の、女をつれての神まふでか、む
たいのれんぼと聞たるなり、まづたいかつがあづか
りて、しうつらゆきのりやうけんを、うけたまはら
ぬそのうちは、そくかの土はこんぢくるゑ、くだけて
入ともわたさぬぞ、さ何うけとつて見たまへと、太刀
にてをかけつめかくれば、いやそれほどにはおよば
しと、あとしさりするところへ、むらとりちかぬか

けきたり、このありさまを見るよりも、しらぬ顔に
て中へいり、これはいかなる御事ぞ、かくたいせつ
なる神まふで、しんりよもはかりませと、り
やうはうをせいしたる、心の内こそ、ふてきなれ、
たいかつがこれを見て、やあいかにかぬ、おもひ
もよらぬ御出は、さては眞沖とだうしんか、すけだ
ちあるはおもしろしと、つめかけく云ければ、何
とてさやうの事あらん、こゝをばそれがしあづかる
と、手をさげいふにたいかつは、あまり申もいかゝ
なり、いしゆはつらゆきわけ申さん、いざせ給へ
とそれよりも、ひめをかこふてかへりけり、善あく
二どうわかれたる、そのめいきやうはたいかつとき
せん上下おしなへて、みなかんせぬものこそなかり
けれ

第二

「其後、きのつらゆきはうへいし、事ゆへなくたちか
へり、すぐにさんだいなされつゝ、神りよなうじゆ
ありしだん、つぶさに申あげたまひ、さてそれがし

にそへられし、はしとみのさだおき、たびのおんなにあくぎをなし、そのぎろけんしたるとて、ちくてんいたし候だん、それにつめてそのおんな、つらゆきかくまい候よしいち／＼そうもんなされける、うちよりのせんじには、さだおきかゆきかたを、くさを、わけてたづぬべし、さてつらゆきが事は、とさのくに／＼くだりつゝ、國のせいとうなすべしと、げんばのかみをかねさしめ、とさのかみになされつゝ、そう／＼にんこくいたすべしと、やがてちよくのおりければ、つらゆきつゝしむでうけたまはり、人おほきその中に、かゝるちよくでうありがたしと、つのうらよりみふねにて、とさのくにへぞチロシくだるゝ、おりから風なく、なみおさまり、まともにはしるふねのあし、ゑんほのきはんそれ／＼に、げにうなばらも、なかめなり、さればにやつらゆきは、やゑかきひめをもこのたびの、ふねのやかたにのせまいらせ、いろ／＼なくさめたまへども、たゞち／＼うへの御事を、つゆわすれさせたまふまも、なみだにしづみておはします、かゝる所へ、小船一そう、浪にうかびてたゞよひしが、御ざふねちかくなが

れよる、つらゆきは御らんじて、それとめよやおほせける、すいしゆかんどり、御ふねをそばへよせければ、つらゆき御らんさるゝに、いそじばかりのおのこ一人、おもやせたるふせいにて、せんごにひうをこのみのるひ、とりちらしありけるを、いかなるものぞとひとたまふに、おのこやう／＼おきあがり、それがしはおもひよらざる、とうぞくのなんにあひ、すでにうみにしづみしに、此つりふねにたすけられ、つゝうら／＼によるといへども、のちのなんぎをおもふにや、かゝるしよくじをおきて、みなと／＼をおひ出す、さるによつてなにとなく、おしからぬみをなからへて、うきねのちどり、もろともに、コトバなみにたゞよふおひの身を、あわれとおぼしめされよと、なみだなからに申さるゝ、あひちかければやゑがきひめ、ちゝのこゑときゝしりて、なふち／＼うへにてましますか、われこそひめのやゑがきよ、なふつぐかげはわれなりと、たがいのふねにとりつきて、よろこびなみだはせきあへず、さてつぐかけをかきいだき、やかたのうちへ入申、ひめぎみはたゞかつの、みちある心にこのみをば、

たすけられまいらせたる、やうすをかたりましませば、つぐかげはとうぞくに、みやこ鳥のいくわんをとられて入水したるよし、御ものかたりましませば、つらゆきはきこしめし、さてはきやうの事なるか、大内のまじはりも、ほどへだゝりし事なれば、つぐかげをも見わすれしぞ、いかなるものかひみつのしよ、うばいとりてやありつらん、さりながらこのひめの、ちゝにふたゝびあひたきとの、ぶつじんへのたんせいゆへ、ふしぎのたいめんありがたし、我にんこくの事なれば、親子の人にふちすべし、かならずなげかせたまふなと、いとたのもしくのたまへは、おやこの人は手をあわせ、あらありがたきみこゝろやと、うれしきにもかなしきにも、なみたのうみの、袖のうら、じゆんふうにまたほをあげて、とさの三重くにへそヲロシ下らるゝ、すてにとしとり、春すぎで、なつきにしげる青葉山、おしうつりゆく世の中の、そのとりさたもとをざかれば、むらとりのちかぬは、折からよしとおもひけん、うばいとりたるみやことり、ひみつのいくわんけつかうし、やがてさんだい申つゝ、きよねんそれがしきんけいを、さ

しあげたるおりから、ちよくでうのおもきによつて、かの都鳥の事こゝろにかけ、せんぎつかまつり候ところ、ふしぎにこのいくわんを、急候によつて、さし上申候とまことしやかにぞさうしける、左だいじん仲平、こはめづらしきさゝげものと、急いらんに入ければ、みかど大きに御かん有て、さんぬるころもきんけいをさゝげ、しんりやうじゆありしにより、すなはち五こくもせうじゆせり、またこんねんは大内の、たからともなりぬべき、このいくわんをさしあぐる、もつともほうびあるべきなり、大せうをあておこなふべし、いづれのちなりとも、のぞみ申せとりんげんなり、ちかぬすましたりと、つゝしんで申やう、いせの國あさげのこほりは、せんどのちにて候へば、かの地を下したまはらば、生せんめんぼくとつゝしんでぞ申ける、仲平はきこしめし、さいわいかなかのところ、にんこくのしゆあきたり、ちかぬにくだしたまはるなり、はやとくゝとちよくでうある、ちかぬつゝしんでおうけをなし、御せんをたつてそれよりも三重あさげのこほりへヲロシ「入こくする、くにゝもなればこくしゆげかうま

しますとて、こくみんおほくはせさんず、さればに
やさんぬるころ、あつたをおちしさだおきは、ひそ
かにちかぬをたのみつゝ、つねにしのびてきうじな
す、さるほとに、ちかぬは、こくみんにたいめんし、
さても此ところに、ふぢはらのつぐかげと、いひし
ものゝゆかりあるべし、きんりへたいしむほんにん、
きつとざいしよをあらわさば、ほうびはのぞみたる
べしと、相ふれよとぞ申ける、かしこまり候と、ぶ
んこくのくちくへ、つぐかげゆかりをしらせよと
の、高札を懸たりしは三重あじろのうをの「ごとな
り、去ほとに、つぐかげの郎等、近藤民部きよひて
は、このことをきくよりも、女ぼうにいふやうは、
ずいぶん君をかくせども、かたき四方をとりかごん
で、かへつてこなたをうたんとす、身をおくにとこ
ろなし、事のびくにてかなふまじ、手だてをめぐ
らしうつべきなり、二人がうち一人は、かたきちか
ぬにかうさんせん、さりながらわれくが、心ざし
をさつしつゝ、きをゆるす事あらじ、しからは我子
のまつわかば、生年は十一さい、多門きみは十二さ
いふうがちうをみがくべき、天のあたへこれなるべ

し、たきんきみといつわりて、二人がうち一人は、
すいか山にこもり居て、わか君をはわが子になし、
かう人の身となりて、二人がくびをうつならば、い
かでかこゝろおくべきぞ、そのとき敵をうちとつて
しゆくんのおんをほうせんは、いかゝあらんとかた
りける、女ぼう此よしきくよりも、すこしもいなむ
げしきなく、我いひ出んとおもひしか、御身をはか
りひかへたり、いしくも申させたまふかな、はやと
くくとぞいさめける、きよひで聞て、さすがみん
ぶか女ぼうかな、さればいのちながらへて、のちに
事をとぐべきは、遠ふしてかたし、今しゆくんとい
つわり、ともにしなんは、ちかふしてやすかるべし、
しかれば此きよひでは、ぐわんらいじんぎをまもる
ゆへ、かりにもかたきへかうさんし、あれこそしう
のかたきよと、おもはいろやあらはれん、よつて
やすきにしたがつて、我さきにすべきなり、御身
はしゆくんのやういくし、ほんもうとげてたまはれ
かし、はまおぎ聞て、なみだなからにとにかくも、
おほせをいかでそむくべき、しするものこるもおな
しちう、まづ此事を聞せんと下ナクおくのひとまへ

たち入て、ともなひてたち出る、ちゝは我子をちかづけて、かみかきなで、申やう、われはしゆくんの御ために、なんぢをきみといつわつて、ちゝもろともにじがいして、はゝにほんるをとけせんと、いづちにかくごきわめたり、しうのめいにかわりつゝ、きみをあんせんならしめよ、おやなればとていきのこり、そひはてぬべき身にしなし、かならずらいせは一れんに、はんぎをわけむといひければ、まつわか此よしきよりも、こたへもなくてさしうつむき、しばしへんじもせさりけり、はゝはこのよし、みるよりも、あゝみれんなりまつわか、なんぢはや十一さい、ゆみやとる身はおさなくても、ものゝ心はしるぞかし、みぬ世の人のかきおきける、じんぎのみちはみざるかや、いかにゝといさむにも、せきくるなみだをおししつむ、げにことはりとそきこへける、そのときまつわかかほふりあげ、いのちおしむに候はず、まことにそれがしがいちめいにて、きみとちゝとの御ために、しせんいのちはおしからねど、此しんたいをそこなはざるをもつて、これたいかうと申なり、ふかうたんめいなる事を、くゑかしての

なみだぞと、こゝをひきたる一ごんに、ふうふたがひのかほみやはせ、つゝめどこぼるゝそのなみた、よそのたもとぬれぬべし、ときにきよひでやあ女ぼう、なごりはつねにあるものを、まつわかを引ぐして、すゝか山にこもるなり、御身はあとにてわかぎみへ、親子がけいりやくかたりつゝ、かたきをうつてたむくべし、しでのやまにてよろこばん、女ぼう聞てもつともなり、いゑに生るゝ武士のみち、すぐにわかぎみ我子となし、この一心のやいばにて、かたきちかぬをうちとつて、しうおつとへのいきどおり、たつせんものをいしにたつ、やたけ心よひくなきみ、おくるなつまと門いでを、につことわらひまたはなき、つまはかたきへきよひでは、心のこまのすゝか山、いさみすゝんでいそきしを、あつはれぶしの手ほんやと、きせん上下をしなへて、みなかんせぬものこそなかりけれ

第三

其後、むら鳥のちかぬは、さだおきをちかづけ、さ

てもつぐかけが一ぞくの、ゆくゑのしれぬ事こそは、心がゝりにおもふなり、すいぶんありかをさがすべし、はしとみいかにと云ければ、さだおきうけたまはり、此うへは君も御馬をいださるべし、それがしも立わかつて、さがし出してうち申さん、此義もつともしからんと、はやたち出んとする所へ、さふらひ共まかり出、御たづねのものゝさいしとて、かう人のよし申ける、ちかぬ大きにうちよろこび、それこなたへと有ければ、かしこまつて候とせんごをかこんで出にけり、ときにちかぬ、さてはなんぢは、きよひでがさいしよな、何とてたい今、かうにんには出けるぞや、はまおぎが是を聞、すぐにいはんとおもひしが、ちかぬがさうのおろかさを、心にふくみちんするやう、仰のごとく兩人は、つぐかけがいゑの子に、こんどうきよひでが、つまや子にて御ざ候、おつとのきよひでをば君、くさをわけてのおたづねゆへ、きよひではしうの子をいだきつゝ、あたりなるかいちうへ、じゆすいたし候なり、わらは女の事なれば、さまでの事は候まじ、めしつかはれて給はらば、しやうせんの御おんならめ、またこの子

をばほうし共なし、人々のなきあとを、とふらはせたくはんべると、おもはゆげなるおもざしに、ちかぬはまことゝおもひより、さだおきはさいせんより、まなこをくばつてやあさふらひ共、それ取まけ、かしこまつておつとりまく、女ぼうさはがすこは、ぎやうぎやうしやかたゝ、おさなき者と女なり、あまりさはがせ給ふなよ、儲いかにやととひけるを、さだおきが見ていやゝゝ、つぐかけがてうせきの、けふりのたゆるらうすいまで、心ざしをはこびたる、きよひでが女ぼうの、おつとしうの子しゝたるとて、かうにんに出すべきか、いこくのほうじがゑみをなし、ほうくわをこひしためしもあり、さあきよひでやしうのありか、はやゝ申せさもなくは、その子もろともくびきつて、ぐんもんにかくるぞ、いかにいかにと云よれば、はまおぎとこをはたと打、さてもせひなき御がなりき、しうつまの事なれば、何とぞ、たすけたふさふらひて、申たるにて候へども、さとき心のおそろしや、なるほどしゆくんとわがつまは、しん山にかくれすむ、わらはこの子が一めいを、たすけたふ候ゆへ、そにんに出んと申せしを、

ひけうなるおんなとて、ころさんといたせしを、やうやうにいつわりて、たゞ今まいり候なり、此子がいちのちつゝがなく、おんたすけ候はい、しうつまのかくれがを、わらはてびき申べしと、なみだなからに申けり、ちかぬさだおきかは見あわせ、きよひでをさへうたせなば、なんぢも子をもゆるすべし、はやおしへよとありければ、さあらばうつてをむけるべし、かのきよひでは一人、とうせんのきこへ有、さだおきむかへ、かしこまつて、ゆふしすぐつて五十よき、ものゝぐひつしとかためさせ早三重はまおぎをさきにたて、すずか山へそヲロシおしよする、かくれ所の、しるしの松早三重時のこゑをそヲロシ「上にける、かねてごしたる、きよひでか、身はころもなき世なれどもくちぬ所はさふらひの、こかねざねのよろひをき、おなじけのかぶとに、ぢうだいのたちはいて、さてはつまのそにんゆへ、今こゝによせたるな、まちもふけたるなぎなたの、かねを心み給へやと、こおどりしてかけむかふ、日ごろの手なみをきゝたれば、そうなふかけよるものもなし、松戸の五郎ゆきむね、一ばんにはせかゝるを、しとゝうけ

てはらふてに、こしのつがひをきりはなつ、わたらひ善次善六、是はといふておつとりまく、いしづきにてめてをつき、ゆんでの善次がかたさきより、はらりずんと切すへたり、津山のゑん八あきすみとて、すきまもなくかけよるを、こむてなぐてひらくてに、すかさずくびをかけおとす、五ばんにかゝるたかわの九郎、かぶとの天へんうちくだき、右よりかゝるやすくにが、あへなくはらふなぎなたに、兩足ながれ大ぢにふす、心やすしやすくにと、くびをしらはにのせすつる、あとにのこるぐんびやうども、はらはらとかけよるを、なぎなた水くるまにまわし、切てかゝればこゝろ早三重すしてあきのこのはとヲロシ「ちりみたる、さるほとに、うつての大しやうさだおきは、たかき所にこまひかへ、かゝれやゝとげちなせど、おそれてちかづく、みかたなし、きよひでも今ははや、すか所手をおひたぢゝと、なぎなたをつゑにつき、ふんぢがつてぞ立たりける、ときに女ばう、ゆみやをさげてはしり出、のふいかにきよひでどの、さこそにくしとおぼされん、さりながら、きよひでをうつならば、松若をたすけんとの、かたき

けいやくあるなれば、よしみのやさきにかゝつては給へやと立むかふ、まつわかはこのゑとき、山上にあらはれ出、かたきにいろをさとられじと、やあいかに女ばうよ、たとへきよひでが、しんぢうはかわるとも、なんぢはおさなきときよりも、ちぶさをあたへし事なれば、わか子もしょうもどうせんぞ、それをわが子にかへんとは、日ごろのことはにたがひたり、それもよしなや女なり、たのむまじや人心、されとも一子の松わかへは、いひおきたきことのあり、あひかまへて此きはの、さいごみれんにあらざると、つたへてはてし、のちの世の、ぼだひをとふてゑさせよと、てきへおぞれ心にふくみ、外によそへていとまごひ、さしもにがなるきよひでも、おなし心のはまおぎも、心におつるなみだの玉、つらぬきあへぬ、けしきかな、ときに松若、よしなき今のことばのすえ、これまでなりとおしはだぬき、つぐかけが一子、たもん丸がじがいを見て、こうせいにかたれやと、ゆんでのわきにおしたつる、ふうふ、はつとまなこはふさげ共、みゝにきこふるわか子のこゑ、やうくめてへおしまはし、かたなもぬかでさ

んとうより、きよひてがまへにおちける、ちゝが心そかなしけれ、女なれ共はまおぎは、なんしにまさる。心にて、イロ詞さとき心のさだおきに、見とがめられてはいかいぞと、のふいかにきよひでどの、若君御じがいあるうへに、なにゝいのちのおしからん、さあらばこのやまいらせん、うけてみたまへきよひでと、そゝろ引てみへけるが、つゆのうらみもなきつまを、君のためとはなさんや、天のおそれもいかならんと、おもふ心にもふるい、むねとゐろきてはなつにぞ、あらざる方にそれたるやは、げにことはりともへにけり、きよひでいやく、ふかくなごりをおしみては、たくみし心もあだなりと、若ぎみじがいましませば、きよひで御とも申とて、はら十もんじにかきやぶり、わが子のしがいいにかさなつて、いだきつきてぞしゝにけり、さだおきがこれを見て、くびうてとげちをするを、女ばうはおしとめて、みづからかくてあるうへは、他人にくびはとらせじと、おつとゝ我子のくびを打、さるにても人々よ、ひとりはおしうまたはつま、おつとのくびを女ばうの、身として打ける心のうち、おしはかり給はれと、今

は人めもいとはずに、こゑをばかりになげきけり、
げにことはりと、うつ手のせい、とうおんになげき
しは、むしんにあらぬしるしなり、今ははやこれま
でと、はまおぎをかいしやくして早三重ちかぬがやか
たへヲロシ「かへりけり、されはにや、むらとりのち
かぬは、きよひでた門がくびじつけんし、やくそく
なれば一子をば、ほうしのためにゆるしつゝ、心に
かゝるくもあらぬ、うき世のあきの風のこる、あつ
さにねまの、戸をあけて、しんやの月の月かげに、
よねんなくこそいねにけれ、さればにやはまおぎは、
おりをうかいひむらとりを、うたんものおと思ひた
つ、しんるのほうくわのたちのほり、ゑゝしうつま
のかたきぞや、中々まつにまたればこそ、しよせんう
んはてんにあり、こよひうたんとおもひたつ心のう
ちこそふてきなれ、はだのきごみにくさりかけ、白
きこそでにはらまきし、きよひでさいごのじせつま
で、はなたずさししたちをさし、多門ぎみをもかい
がいしく、かろきすがたに出たゝせ、かきをやぶつて
大にはより、しのび入こそあぶなけれ、このちうし
んの心ざし、てんもかんをうありけるにや、とのゐ

のものもよくねいり、ことにしやうじをおしひらき、
さしいる月にてきちかぬ、せんこもしらすふしゐた
り、はまおぎはうれしやと、そのまゝかてうきりお
とし、わがしうをかみにたて、その身はあとへまわり
つゝ、たがひにかほを見合て、二のいきをほつとつ
く、さすが若君おさなくて、ひざうちふるふてみえ
けるを、物をもいはすはまおぎは、はつたとにらん
ではがみをなす、この氣にはちてたもんまる、こゝ
ろをしづめたちをぬき、すでにうたんとしたまふを、
やあまづしばらく、いねたるものゝくび取ては、か
たきうちとはいはれまじ、いかにちかぬ、おのれが
ぐあんに一しやうを、しあふせたりとおもふとも、
もとよこしまの口はかど、そのわざはひのしもがつ
き、一ツ三重てんのめいきやう、あきらかに、たゞ今
うつそぶたう人、おきあへやつとよばはれば、心へ
たりとおきんとす、かてうにまかれどをうしなふ、
はまおぎゑたりとおさへおき、はやうちたまへと申
にぞ、十二さいなるたもんまる、たちかゝつてぞ切
たりける、せめてはうつてたむけんと、しうぐゝし
てうつたちに、さんをみたせしごとくなり、やがて

といめをさしとをし、あらうれしやとのたまふを、はまおぎおさへて、うちのかごにやとのゐのもの、せんごもしらす候へば、はやおちゆかんとかいしく、若ぎみをおひまいらせ、とらの尾をふむ心ちして、とのゐのまへに氣をいため、どくじやの口にもんついぢ、おんどりこへてぞおちたりける、なにはのあしのあしはやき、まことにいせのはまおぎを、せんだいみもんのけんぢよやと、きせん上下をしなべて、みなかんせぬものこそなかりけれ

第四

「そのうち、くわうゐんはといまらず、さればきのつらゆきは、あがたのをさへとしたちて、ゑんぎ五つのなつのころ、たいせんをようゐなし、すいしゆかんどりろをそろへ、みやこへかへるときつ風、ひやうしをそろへてこぎ出す、そこもしらぬわだづみの、ふかき心をくみてしる、人のくにまでまじわりの、そのなさけこそ都なれ、八日の月の海にいる、山のはにてとよみたるは、さりしむかしのなりひら

なり、このうみべにてよまなんには、なみたちさへていらすもと、よみてましやとおもひよる、つらゆきひめにのたまふは、いかに八咫がきこゝこそは、むろ津のはてといふ所ぞ、あのとを山をうちながめ、心をはらし給へとある、やゑがきは聞まいらせ、一しゆのうたにかくもなんまことにも、名にきく所はねならば、とぶかごとくにみやこへもかなと、口すさみましますを、人々かんじたまひけり、かくてこきゆくうらなみの、くろざきの松いろあをく、いそのなみまはゆきとのみ、はこのうらなみたゝぬ日は、うみをかゝみとたれもみん、いし津のいそきすぎゆくに、ふきくるかせのあらければ、かちとりが申やう、此すみよしの明神は、靈のかみにてましませば、いのりをかけさせ給へやと、大あせに成てかちをとる、つらゆきはきこしめし、うしほをむすびいろくの、きせいましますそのなかに、やゑがきはもち給ふ、かいみをうみに入るとて、ちはやふる神の心のあるるうみに、かゝみをいれてかつみつるかなと、よませたまひてかのかゝみを、なげいれ給へはこのうたに、しんりよもなふじうましましけん、なみかせお

さまりおいでよく早三重なにはの、うらにてヲロシ「船
よする、これはおき、いせのあさげのこほりにて、
ちかぬをうちしはまをぎは、津のくには、おつとき
よひでがしやうこくにて、ゆかりをたのみゐたりし
に、らうどうのさだをきが、此ところをもさがすゆ
へ、今ははやせんかたなく、日もくれかゝれば、す
みよしのこがくれに、若君もろともたちしのび、ひ
そかに事をうかゝひしは、はくへうふむがことくな
り、わかこのゝろをみちとして、あらきなみ風おさ
まれは、このうらへふねよする、よつてつらゆきよ
ろこびの、御ぐわんをとかんためにとて、やゑがき
ひめもろともに、すみよしへさんけいある、かんぬ
しくはるたちむかひ、たい今じやうきやうましま
すか、かゝるおりしもならではと、さまぐもてな
したてまつる、しのびてありしはまおぎは、やゑが
きひめと見るよりも、大きによろこび、わかぎみも
ろともはしり出、のふやゑがきにてましますかや、
さいふはおとゝかあねうへかと、人めもはぢずにい
だきつき、よろこび給ふはかぎりなし、やゝあつて
はまおぎ、きよひでがさいごのしぎ、かゝらんまで

のうきくろう、こまぐと打かたれば、ひめぎみも
つらゆきに、やしなわれまいらせたる、御ものかた
りましゝて、さてつらゆきにうちむかひ、かやう
かやうの御事と、はしめおわりをかたらるれば、つら
ゆきはきこし召、さてはさやうかめでたやな、これ
もとうしやの、ひきあわせ、ことにはしよぐわんを
かけぬれば、しんりよをいさめのまひのそで、かな
で、神をそうせんは、いかゝあらんとのたまへば、
くにはるはうけたまはり、もよとりかぐらさいばら
は、もつとも神のもてあそび、神をすゝしめましま
さば、などかなふじうならざらん、そのうへみな月
つごもりは、とうしやの神事で候へは、みや二人に
はめづらかなる、このさいれいを御らん有、しかる
べうとぞ申ける、つらゆきはきこし召、げにゝか
かるおりにふれ、このまつりにあふ事も、一かた
ならぬきゑんぞや、まづしんせんへまいらんと、た
たせ給へばやゑがきは、たもん丸をひきぐして三重
やがてよいいとヲロシ「きこへける、はなにこてうの、
まひのそで、はらからゑもんつくろひて、たまかつ
ら、うちかづく、まゆのにはひやらんじやのけふり

くわんしとゑめる、かほはせは、かのくわうめうの
のちのよを、さとりのおたにもろこしの、山のあな
たにたつくもは、こゝにたくひのけふりなりと、ご
だうのゑみもかくやらんびんの、こぼれのくもとな
り、よしふりよしこゑもよき、されは花もみぢ、ニッ
三重そのあきつくになれや一けひらけておもしろや、
むめのはな、やがてはるぞと白ゆきの、さしてのい
そのさよちとり、つきぬことばの此うらの、はまへ
のたづのもろこゑに、ばんせいをよばふひめこまつ、
ゑたもさかへてときわぞと、しんりよをすゝしめ給
ひけり、身はならはしのうき世にて、ひなにこゝろの
なぐさむる、わらひのたねとこと人は、ながめ給は
んふうぞくを、此身にうつすなりかたち、すかたま
ばゆき夕つくひ、あかまへだれについのかさ、中に
かさほこ、いろ／＼の、うちわあふぎのもやうよく、
いろもわか木のさくらはな、いまはあをばとおしま
るゝ、うみはなかめのはるくれて、またさなへとる、
さみたれも、あきにははやきとし月の、ゆめもむす
ばでくれがたの、ゆあみとはるゝ夕からす、あつさ
しのがんかたさとの、しばしとてこそひとやすみ、

御じんじなればうち出て、まだてにいらぬおどりふ
り、かみのみまへのしばのうへ、ふたつひやうしに
そろふこゑ、四しやのおまへの、そりはしは、たがか
けたやらなかたかに、さあすみよしのきしのひめま
つめてたさよ、さとはまつりのうちつとひ、あから
めもせて高むしろ、こまつ、かげのしたつゆに、
そよの袖までしつほりと、ぬれてはまべの、いそち
どり、おきにかもめがともよびかわす、はんまちと
りが、ちりやちり／＼ちり／＼や、ちり／＼ともと
ぎ出せはからろのおとがからこり、からこるも、
思ひをぬきにこひをたて、なさけのおさの、めをこ
めて、しつがておりやぬのびきの、たきのしら絲、う
ちはへてあまつ、おとめやさらすらん、ほしか川べの
ほたるかと、かのやさ人のうたのたね、よむやまさ
ごの、かす／＼に、なみとなみだに身をはたす、そ
のますらをが、ますかゝみ、なみになりたやいそう
つなみに、めなみおなみの、ぬれにぬれたる中ぞゆ
かしき、あらうら山しいかなれは、かた山ざとに生
れきて、とをきこしちとすみのゑの、うら山くにを
へだてゝもすめば、みやことおもひとる、いつれす

みよきすみよしの、おどりつまふつよろこひつ、さあすみよしの、きしのひめ松めでたけれ、おもしろやく、やゑがき多もんもろともに、扇子おつとりたち給へば、てうしにうつるまひのそで、せいかにもきへざるゆき、しうねんにも、つくる事なき風、あきをひゐて、手のうちにしやうすなる、月をかくしてふところに、いるさのかげともろともに、つらゆきこゝをたちたまふ、はらからもこれまでと、神をはいしてかへられけり、まことありけるきみがてに、なびかぬくさもあらしとてきせん上下おしなへて、みなかんせぬものこそなかりけれ

第五

「そのうち、つらゆきは住吉より、ことなくきゝやうましゝて、いそぎさんだいなされつゝ、くにのせいとうつゝがなく、まかりのぼり候だん、つぶさにそうもんなされつゝ、さてまたつぐかげおやこの事、さだおきがあくぎやくを、いちゝゝそうし給ひけり、内よりのせんじには、そのさだおきが事をば、

おもきざいくわはおこなふべし、さてつぐかげが子どもは、二人ともにつらゆきに、あづけおかるゝ所なり、かさねて御さたあるべしと、ちよくでうあればつらゆき、つゝしんでおうけをなし、さて人々にうちむかひ、にんこくききやうのうきくろう、につきにつけおき給ひつゝ、かなたこなたのうたまくら、などやうくわしくうちかたらひ、はまのまさごのかずゝは、イロ詞あきのよながのものかたりと、いとまをこふてかへらるゝ、これすゑの世につらゆきの、とさにつきと申せし事三重かさなるとしにそチロシ「しられける、去ほとに、やゑがき二人の人々は、つらゆきのなさけにて、いそのかみのふるごしよに、しばらくすませたまひけり、さればにやひめぎみは、われいとけなふしてはゝにおくれ、いままたちゝにとをざかり、よろしき世ともなさぬ事、女ながらもあさましや、何とぞゝ後代に、のこるほどなるさうしをかき、せめてはすぎしやゑかきが、ふでのすさみといわれんと、おぼしめしたち給ふ、心のうちこそやさしけれ、かゝる所へつらゆきは、とも人をめしつれてうす月なりし、ゆふまくれ、この御しよ

へぞ入給ふ、ひめきみこなたへ御いりとて、さま／＼なりしものかたりに、たもん丸はつらゆきの、とも人を打つれて、おりからなりしあきくさをなかめんためにぞ出給ふ、ときにつらゆき、ひめきみにうちむかひ、のふいかに八ゑがき姫、おんみもさかりのおみなへしくねるはかりの、ふせひぞや、てんじやうひとの内にして、いもせのゑんをとりむすばん、あかさせ給へとありければ、やゑがきはさしうつむき、もの申さねばいわつゝじ、いわねはきみのみ心の、イロ調うちもはづかし申べし、さればにやみづからは、きみの御かげふかきゆへ、斯るみにしもやしなはれ、なんほううれしくはんべるに、ひとつのねがひの候ぞや、かやう／＼のしだひにて、おもひたちたるぐわんのあり、もと、みやこどりの一くわんは、一とせなりひらあづまのかたに、おもむき給ふみちのきなり、ことにはきみのおしへにて、大かたうたのよみくせも、すこしは心へさむらへば、心ばかりのさうしをかき、世にとゐめんと思ふゆへ、このげちうせうじんし、まいにち水をむすびつゝ、けがれをきよめ候へば、まつこのぐわんのみつるまで、

其御ことをゆるさしめたまはれかしとのたまへば、つらゆきはきこしめし、さて／＼やさしき心ていかな、かんじ入てさむらふなり、すいぶん心をつくされよ、其うへ一まのかけものは、さりしいづゝがじひつぞや、なりひらの事なれば、御がうもよろしくはんべるなり、やゝよもふけて八つのかね、まづかへらんと出給へはやゑがきは、つまこめに、八ゑがきつぐるものたりに、ひとまにいらせたまひけり、つらゆきはそれよりも、たちかへらんとし給ふが、いや／＼わかき女なり、ためしてみんとおぼしめし、一むらすゝきに身をかくし三重ことをうかゝひヲロシ「給ひけり、あか月のころのあかの水、月も心やすますらん、さなきだにものおもふ身にし、ならはぬあかのおけ、ひさげの、つゆのたまたすき、やつれくろかみむすばゝれたれかあくべきたがひきなんまこもくさ、よしといわれんニツ三重身にしあらねば、つゝいつゝ、井づゝにかけし、まろがたけ、おいにけらしなわがすかた、月をつるべにくみかけて、そてしぼるこそあやなけれ、かゝるおりふしあてなるおとこのけたかきが、あをかりきぬに青きかむり、さも

ほのめける、ふせいにて、きくの花おけ手にふれて、
すりちかふてぞとをりける、ひめぎみいづれいろこ
ころ、げにうつくしき花かなと、のたまふにこそか
のおのこ、につことわらひさればとよ、はつかしけ
れどこのはなは、おもふかたへのおくりもの、もと
めては候へども、うつろふいろのみへければ、その
みづすこしそゝぎかけたまはれかしと打ふるゝ、八
ゑがき此よしきゝたまひ、いとやすき御事なり、さ
りながらおほしめす御かたへ、おくりたまふその花
に、わらわが水をまいらせなば、ふかきこひちに水
をさす、色しらすとやわらはれん、おほせはさにて
候へど、イロコトハたいはなゆへとおぼしめし、なさ
けのつゆをひとしづく、つもりてふちはするの事、
そのうへ御身にのぞみ有とは、イロ詞くわしくぞんじ
候へば、かならずかなへ世にたてゝ、まいらせんぞ
やわが思ひ、はらしてたべとくどかるゝ、ひめもも
とより心ある、おとこのいろのなをさりに、イロ詞わ
らわがのそみなひなば、いなにはあらずむさしあ
ぶみさすがに、かけてもかほのもみぢや、なみだぐ
む、手をと리카わしつまを引、いづゝによりてそで

をかけ、たがひにかけを水かゝみ、おもてをならべ
づゝいづゝ、井づゝの水もけいやくも、あさからず
とこそみへにけれ、このていをつちゆきは、すゝき
のかげより御らんじて、うつてすてんとおぼしめし、
とび出たまへばかのおとこ、はつといふひとこゑに
ていづゝのかけに、うせにけり、これはいかにとた
ち給ふに、またこつせんとあらはれて、あらはづか
しのわかすがた、イロコトバさんぬるげんけうねん
に、はかなくなりしなりひらが、そのゆうれいにて
ばんべるなり、ついにゆく、みちとはかねてきゝし
かど、きのふけふとはしらずして、いろにふけりか
すかすの、女をおかせしもうしうにて、うかまぬ雲
にたいよふなり、なをちふしんをはらさんため、う
かりしこの身のありさまを、さんげにかたり申さん
と、うつゝながらにヲロシ「たち給ふ、いともかしこ
きちよくをうけ、大うち山のはるかすみたつや、や
よひのはじめつかた、かすがのまつりのちよくしと
て、すきひたいのかむりをゆるされてんじやうにて
のげんぶくは、たうじそのれいまれなりき、むかしお
とこの名をとめて、花たちばなのにはひうつるはい

づれぞや、にたりや／＼かきつばた、花あやめ、こ
ずゑになくはせみの、からころものをでしゐたへの、
うのはなになのりてする、ほとゝぎす、さつきのす
ゑのふじの山、ちらり／＼とみしゆきを、かのこま
たらとよせひある、うたも心もあめあられ、といろ
といろとなる神の、まぎれにささきをおひまいらせ、
ふむあしもとはこひのやみ、よろ／＼とおに一
くち、あくた川をも、うちわたり、ことをとはれて
しら玉か、なにぞと人のとひしとき、つゆとこたへ
てきえなんと、ふかきいろこそわりなけれ、またあ
るときはこれやこの、女のけしきも／＼とせに、一と
せたらぬつくもかみ、ひたいのなみやこしのゆみ、
やだけのつえのよろ／＼と、たもとをひかへくどか
れて、一夜いねける事も有げにや、まことにしのび
ねの、月にはめでしこれぞこの、つもれば人のおい
となり、此世をさりてのちの世の、じやねんのあつ
きは身をせめて、そのねんりきのみちはけわしき、
つるぎの山のうゑにこひしき、人はみへたりうれし
やとて、行のぼれば、つるぎは身をさきばんじやく
の、おちかさなりてきもをうつ、こはそもいかにお

そろしや、あらかなしやたへがたやと、よべどさけ
べどたれ人か、たすけんこゑも、あらしふく、たい
ごくそつのいかるこゑ、ほのをにむせぶくるしみを、
これ御らんせよといふこゑも、たちまちめうくわさ
かんにして、ほのほにむせぶとみへけるが、さもあさ
ましきすかたにて、いきつぎあへぬものうさに、く
さばのつゆをのまんとて、たちよる所にひとつのつ
ゆ、くるり／＼とめぐりしが、さつとひらけてその
うちより、こてうひとつとび出て、これたかやすの
つゆのまへ、われよりほかにこと人を、もたじとい
ふてかさねつま、にくやつらやととびかゝる、まつ
たこなたにかけおける、たつた山の上の一字、うす
るとみえてたちまちに、せうじやとなつておろかな
り、我つまなるぞとまとひよる、こなたはいつゝか
なたこそ、かよひなれにしたかやすの、こてうのり
やうとの／＼して、ゆんでめてよりせめかゝるに、
心もくらくあさましや、あゝら心うつゝなりひら、
やすきひまなきこの身のせめを、たすけてたべとい
ふこゑも、きへてあとなくなりけるか、すゝきにう
けるつゆの玉、はら／＼とみへければ、またかけも

の、文じも有、これはふしぎと思ふところに、またそくたいのすがたにて、ゆめのごとくにあらはれいで、みだれ心のじやゐんのつみ、しやばのたのしみめいどのあた、かしやくのせめをうくるなり、此かずかのたまづさは、あまたの女にかわしまの、水くきのあとなれば、御身これをかきあつめ、さうしとなしてわがあとを、よきにとぶらひたまはれと、ふみのかずくとり出し、八咫かきにわたさるゝ、つらゆきもなみだにくれ、さてはむかしになりひらの、そのゆうれいにて候か、ともにちからをくわへつゝ、さうしをかゝせなきあとを、よきにとぶらひ申さんと、やくそくかたきいしのひか、ほたるのひかりいなつまの、かげよりはやくうせ給へは、のでらのかねにほのくゝと、はや明わたるふる御しよの、松かせやばせをばのゆめもやふれてさめにけり、二世を一世に見る事は、せんだいみもんのしだいとて、きせん上下おしなへて、みなかんせぬ、者こそなかりけれ、

第六

土佐日記

「その、ち、ゑんぎ七年八月七日、さだいじんなか平、つらゆきやゑがききやうだいを、ともなひさんだいなされつゝ、なりひらのゆうれい、ひめにまみえ候ひて、かやうくゝのしだいとて、かきあらはしたるものがたり、御まへにひろうある、みかどゑいぶんあつて、きのともりのものがたり、よまさしめよと有ければ、ともりの御せんにまかり出、此さうしをよみわかつ、本讀むかしおところるかうむりしてならのきやう、かすがのさとにしるよししてかりにいにけり、そのさとにいとなまめいたるおんなはらからすみけり、此おとこはなりひらの、うき名をふでににははせて、かくものかたりにつくりたり、にしのたいの夜のむめ、春やむかしの月やあらぬ、わが身ひとつもあるとだに、さだめなき世のおしへにや、しゆつりのやうをしめすとや、ぢしやうさんがうじつそうにもれず、よみおくわかのことのはも、みな大せうのたへなるのり、とくにことばもよもつきじ、さればおもふ事、いわでたいにややみなんと、かきはたしたるものがたり、おのくゝあつとぞ、かんせ

らる、みかどゑいぶんまし／＼て、げに／＼そのかみ、ちかぬがゑさせし一くわんに、はしとあしとはあかうして、いときよらかにしろきこそ、都鳥とみへたるに、この物がたりにそのおもむき、こまやかにしるす事、つぐかげはつね／＼に、わかのうらに心をよせ、歌のさまをおもふゆへ、ひめまたつらゆきにたよつて、かゝるさうしをつくる事、しんびやうのいたりとて、つぐかげをば、じやうほくめんなされつゝ、たもん丸をば、ゆきゑのせうにふせられ、なをこのさうしをゑいらんあつて、まことになりひらが歌のてい、心ありてことばすくなく、人しれぬ心中こそ、世をさりて後さすけしにうたがひなし、あつはれゆうなるものがたりと、はなはだ御かんあさからず、すなはちひめをば、いせのないしとめされける、さてとももりと、おふしかうちのみつねをめされ、右のしだいをせむじ有、このさうしに、なをつけよとのりんげんなり、兩人ゑぼしをかたむけて、さて／＼めでたき、さくいて候ものかな、心内にうごき、ことばほかににはやかに、たけたかくよせいおほく、わこくのしつほう、ためしおほく

候へは、すなわちさくしやの名によそへ、いせものかたりとめさるべしと、つゝしんでそうもんある、みかどゑいかん浅からず、すなはちげたひをしんひつに、しよしやごとの御ほうのふ、ちうぐうひめみやないしんわう、つほね／＼にかきうつし、さてこそ今のよゝまでも、ふきつたへたるかみかせや、いせものがたりは、これなりけり、そのゝちたもん丸には、いせの國をたまはりけり、さてはまおぎには山だにおゐて、いちじこんりうの地をくださるゝ、今のせきでらのかいき、せいしん尼とはこれなりけり、有がたし／＼と、御せんをたつてハヤ三重それより、さたおきたいちときこへける、かゝる所ゑ、はしどみのさたおきを、たかてこてにいましめて、御まへに引すゆる、たもん丸御らんじ、みれば中々はらもたつ、とくちうせよと有ければ、うけたまはり候とて、かうべをはねてぞすてにける、さてそれよりもたもん丸、むねかとあまたたてならべ、ふつきにさかへたまひけり、せんしうばんせいめでたしとて、きせん上下おしなべて、みなあほがぬものこそなかりけれ、

土佐日記終

對面曾我

土佐少掾正本

第一

扱も爾後、あまつこやねのべうゑいに、そがの太郎すけのぶとて、さがみのくにに名をえたるチクリ弓取一人おはします、右大將よりとも公へ、すどの忠ざありけるゆへ、同國中村の郷を賜りて、めでたくさかへ給けり、去共世つぎのあらざれば、一とせおくの、狩ばにて、くどうさへもん、祐つねに討れたる、川津の三郎祐玄げが子共、一萬宮王兄弟を、こう玄つ共に呼むかへ、箱王をばはこねへ上せ、一萬を養立、則祐信かとかとして、そがの十郎祐成と改め、ゆい跡をさうぞく有、今日其祝ぎとして、北條殿を始とし、わださがみの守義もり、其外の諸大名、招請有て、饗應の、びをつくしたるけつかうはおびた、しくこそみへにけれ、まづとこの正めんには、そがだい／＼の、重寶、四ほうゑろのかぶとに、鍬形打てからかはおどしの鎧に、五七の桐のさし物、領知でんらいの一通、るいだいぶ玄やうのかんじやう有、

次に、祐成の兵ぐとして、一かさ増りし大鎧、こん糸にておどしたる、こく玄つのどうに、さかおもだかをきんにておかせ、ゑぼしがたの金甲に、横木爪のまへだて、かさぼこのさし物、おしたて、かざられしはげにもび、玄く、みへにけり、かくてはうらい持出れば、北條殿宣ふは、まづ御ふしの御盃、めでたう相すみ其上にて、我／＼も給はらんと、わだくどう、いづれもすゝめ申さるれば、さ候はいと祐信は、盃取上一ツほし、十郎にさし給へば、祐成は押いたゞき、人／＼に禮をなし、たんぶとうけてさりとほし、かへし申せばみな一どう、ウタヒカ、リせん玄うばんせいとがせらるゝ、祐のぶ悦淺からず、すと立て盃を北條殿に進すれば、玄だい／＼にくみながしみなく、きやうにぞ入給ふ、ときにすけつね、進出、笏取直し十郎殿、きでんと我とは、一けの事、今更申すもことくどし、其元には今日より、太郎殿の嫡子と成、そがの家を繼給へば、いとうがたのゆづりもの、貯玉ふは道にてなし、ゑぼしかたのかぶと、さかおもだかの鎧さし物、此方へ御こしあれ、とうじいとうの嫡そんは、此祐經にて候へば、ご玄あん

迄もあるまじとりに當てぞ申さるゝ、祐成きいて仰のだん、尤には候へ共、あの腹巻はおゝぢいとうの入道より、玄つふ川津にゆづられたり、さし物は入道殿四代の祖、二かいどう遠江守これちかより、持傳たる重寶なり、某た名をついたり共、弟の五郎と云者有、なんぞき公へわたすべきいはれなしとぞ申さるゝ、祐經いやとよ十郎殿、あしく物をきゝ給ふな、ごぶんた名をつぎ給へば、玄つがたのけいず、寶物何かせん、ど中のこがねにことならず、我はいとうのいへなれば、其寶をてに入なば、せんぞへのかうといひ、一けはんじやう成ことは、いとう入道せんれいも、嘸や悦び玉ふべしたゝとくゝと有ければ、祐成ひぎを立直し、いや、さ程一家を思ふ身が、川津を何とて討たるぞ、かく云出すうへからは、玄つふの敵のがさじと、刀の柄に手をかくる、わだの吉もりあいにいり、尤なり乍去、祐經を討玉はい、天下の掟を破とが二ツ有、一ツには祐經の父、くどうむ玄やは、御身の父、川津殿に殺て、祐つねの爲には、おやの敵に候へば、川津殿を討れたり、それを又討事は、又討とててうじなり、二ツにはやうし

たる者、玄つふの敵をうたぬこと、是てんがの大法なり、此うへはわぼくして、一家親くなし給へと、詞をつくしせいせらる、さしうつふいてすけなりはとかうのへんじもなかりけり、祐のおは手を束、十郎がぶ禮のだん、くがいを存せぬ者なれば、御免を蒙申べしと、玄やしたまへば北條殿、兩方そこつ有べからず、某よきになし申さん、日もばんけいに傾たり、いざや罷立んとて、祐信に暇を乞、たちいで玉へば人ゝは玄ゆく玄よゝゝにかへらるゝ、玄なをつくして、いろをよそほふけはゐさか、その名もたかきせうゝの、あげやはもとよりとりたてし、小さくらやに大よせの、花をさかせしゆふきやうは、おもしろかりける玄だいなり、上座には王藤さへもん祐つね、次にびせんの大藤内、そのほか大せい引つれて、ゆふゝとちやくぎなす、上やふうふを初とし、みなゝ玄ゆじの持なしに、其比さたある松の君、袖嶋と申せしは、大藤内約束にて、ひかりかがやくありさまの、おとらぬ女郎さゆうにつれあたりを、はらふていできたり、はらゝとゐならびしは、月ゆき花もおよばじと、人ゝ見とれてことば

なし、大藤内は盃を袖嶋にさしければ、取上てくど
うにさす、祐つね頂三こんほし、次に並し女郎に、
さす盃を押られ、彼におあいこゝにさし、入みだれ
たる酒もりはいともきやうあるふせいなり、去共せ
うせう遅きゆへ、祐つねき色あしければ、ちたびの
使ひまもなし、時に男走きて、せうく様御入と、
申す詞に人くは、かたづをのふで待けるに、間も
おかずせうくは、きんぐれうらの色こそで、つま
をかさねてゆりかけしは、さながら天女のやうがう
かと、おもふ、ばかりのよう玄よくに、三千の女郎も、
がん玄よくなきがごとくなり、おめずをくせずそで
しまが、玄やうざに、むんずと打なをり、女郎達に
ゑしやくして、既に盃初て、カルまたわかやぎし酒
もりはいとも、興あるけしきなり、時に祐經、せう
せうどのゝ慰に、何ぞ興あることもやと、申さるれ
ば大藤内、せんこくきでんあの君を、乍さなか皆天女と宣
ひし、御詞にて某が、思ひ付のござ候、せうく殿
をば辨ざい天、のこる所の女郎たち、十五どうじに
表しつゝ、せうくどのゝ御まへに、品くかざらせ
酒のまん、是はいかにと云ければ、工藤手を打扱ごへ

んは、おゝ才かく候よ、おも白からんはやとくと、す
すめ立れば女郎達、わらひさはぎてそれよりもやが
てようゐときこへける、花やかにこそみへにけれ、ま
づせうくはみつぶとんよぎをうろに引おほひ、
いはやをやつしていりければ、てんによとさだめ、
そでしまは、ゐんにやくどうじと打みへてあまたの、
かぎをふくろにそへきせるに、かけてぞかづきけ
る、つぎにいでぬるはつ山はひつけんとうじとおぼ
しくて、かたさままゐるごぞんじとかいたるふみに
ふでをそへゆるぎいでたる取なりは、やなぎさくら
にむめがかの一つに、にはふ三重ごとくにて、いづれ
いかにとわきがたく、なじみの中の打とけて、むす
ぶも、かろきみづ色の、てほそを兩のてにもちて、
につことゑめる玄んざうはいまはやりでのせんせい
に、あふよまれなるたまよのきみ、くはんたいどう
じとみへにけり、いしやうどうじは玄まのすけ、に
しきのきぬをかたにかけ、かたてにつまをかい取て、
ふりかけくいづるてい、さすがとしまの玄こなし
は、みな人ほむる、ほめたこゝろのよければ、ひとつ
のめとや、とよさきが、てうしさかづきもちいづる、

玄ゆせんどうじや是ならんげにとよ、としはとみく
さのほにほが、さいてみのるてふ、きみのみつぎに引
きたる、ぎうば、どうじと、おぼしくて、みつ玄ほは
五玄きなる、ふさをかけたる竹馬をさても、見事に、
かざりたて、たづさへいづれば、せんじゆのきみ、
せんしやどうじと打ちへて花をかざりしふねくるま
玄んくのつなをむすびつけひいて出たる其ふせい、
おの／＼きやうにぞ入給ふ、せう／＼はすけつねに、
一向酒をすゝむれば、いまはざしきにたまりかね、
漸くここにいりければ、せう／＼は、かいほうなし
すかしてとこを「おきいづる、かゝる所に、ゑんの
うへ、ものさはがしくどう／＼と、玄やうじにうつ
る其かげはあうんの、二わうにことならず、皆／＼
驚き逃ちつたり、玄やうじ四五間ふみ破て、五郎朝
いな一同に、おどり出たる其時むね、さかおもだか
のはらまきに、四尺餘りのたちをはく、義ひではす
はうにて、草摺三げんかい抓、ひきすがり、どうと居
て、ゑいやつととめた、五郎本より大力、又引立れば
引留め、くる／＼めぐるいきほひはたもんぢこくの
ふんぬのせいにはまさじとみへにける、せう／＼

さはがずあさいなさま、御せはな、やき給ひそ、はな
ち給へとといむれば、義ひできいて、某御所よりか
へりの道にて、見れば五郎、鎧引かけ馳けるゆへ、
心元なく追つゝき、やうすを聞ん其爲に、是迄一所
にきたるといふ、五郎踊てはがみをなし、十郎殿は
などおそきぞ、はや御出候へと、あさいなをふりは
なち三重／＼やかしこと「たづねける、かゝるところ
へ、十郎は、もの／＼ぐかため馳來、やうすはいかに
とのたまへば、時むねうれしさかぎりなく、み／＼に
さゝやきかくといふ、兄弟悦びぬき足して、すけつ
ねがふしたりし、くだんの床に立かかり、ねいりし
ものをきらん事、玄にんにおなじ、いざおこせと、
三重あとやまくらに、たちよりて、いかにすけつね、
だいじの敵を持たる身が、ふかくにみゆる物哉、
おきよ／＼とよばゝれどこたへなければ時宗は、う
へ成衣を引はず、祐成たちをふり上れば、くどう
にてはあらずして大とうないぞふしてける、きやう
だいめと目を見あはせて、あきればてたる計なり、
十郎たちを拔持て、そ首を抓引出し、やあいかに、
大藤内、祐つねが有所、眞直に申べし、少も包物な

らば、いけてはおかじとたち突付れば、わなゝきこへして大とうない、何も存せず、祐經は、たい今いでゝかへるうち、そこにねよとの事ゆへに、いねたるにて候とふるひ／＼ぞ申ける、時宗は少將を、引立刀を胸に當、いかに流の身なればとて、祐經が大名ゆへ、早も我に思ひかへ、よくもおとして有けるな、のがれはなしといふときに、てしゆ邊て走出、全是少將のわざにてなし、工藤様涼のぶし、そこを覺て少將にも、色をみせずにおち給ふ、はかりながらせつしやめが、こゝはうけあひ申なり、工藤様は大磯の、きゑゆと申す女郎に、心をとれて在せば、是にさしこみ此御願、押付叶はせ申べしと、少將を引のくる、朝いなはかけ來、おしわけてつゝといり、なにをさはぐぞわかもの共、靜れ／＼此ていしゆが、とつくとやうすをうけごふたり、是は當ざの花なりとて、みつ引れうのもんつきを、ていしゆにこそは興けれ、ていしゆはこ袖を押戴、我ゑそん迄家名をば、三浦と名のり、此ごもんを付申さんと悦びて、こよいのことは知人なし、先隱便にと申すにぞ、朝いな祐成時宗は、よきに頼とそれよりも大藤内を

引出し、せめてはきやつを、さいなめと、おきればふみ、よろべばけたをしすきもなく、三人笑てゆびざしして、宿所／＼にかへられけり、適祐經長居せば、あやうかるべき次第やと貴賤上下安詫皆かんせぬ者社無けれ

第二

「其後、朝日向三郎義秀、そがの五郎時宗は、いづ境にて行逢、互にそばへはしりより、是はいかにととひければ、よしひできいて去ばとよ、先日、けはる坂にて噪の事、父義盛が聞付、以の外に腹立し、某をかんどうなす、力不及立いで、一先田舎に身をかくし、免許の旨を願んと、ゆかりのかたへ參るなり、是といふもごへんらが、身のうへをおもふゆへ、父の心に背しと、日比にかはるあさいなが、打ゑほるこそまことなれ、時宗はつと手を打て、扱はさやうかせひもなし、我らとてもさのごとし、ほうしになれとの母のめい、背て男に成たるとて、母のかんきを蒙れり、某はかねてより、かく有べしと思ひし

に、ごへんは笑止千萬や、義秀聞て、扱はさやうに候か、舍兄はいかにと云ければ、去ばとよ十郎は、わだ殿のかんげんに、やうしと成ては、ゑつふのあだ、討には叶はぬと、宣ひしその日より、祐信がやかたを出、ちうや大磯に罷有、ゑよぞんの程はいはず共、すいさつあれとぞ申ける、義秀聞て、あゝたのもしく、又こそあはんさらばとてたがい、見おくりそれよりも、ゑるべのかたへぞいそぎける、さるほどに、鎌倉の御所には、侍所の別當、工藤さへもん祐經、今日出仕のめんくへ、申渡けるやうは、偕も我君頼朝公、右大將に任せられ、其御ゑうぎとして、來月十日御能あり、諸大名諸役人、并にかまくら中の町人共、見物仰付らるゝ、男は白洲に相詰べし、女は棧敷ごめんある、うの上こくにいづれも、相詰べしとの御事なり、有合めんく一同に、畏て、おうけをなしわがやをさしてぞかへりける、さだまる日にも、成しかば、かまくら中の老若、こゝを晴と出立て、われもくまゐりしは、おびたいしうこそ「見えにけれ、こゝにまた、へいけの侍、主馬の判官盛久は、此序に忍入、より朝を討取、くまのに忍て御座、重盛

の公達を、大將と領、再へいけのみよとなし、亡君の御仇を、むくいんと思ひたち、かまくらにきたりつ、きせんにまじはりうかへ共、女はごてんへ呼上られ、男は白すに残ゆへ、力及すこゝかしこやうすを、うかいひゐたりけり、としのよはいは、ゑづはたやはたち計のにようぼうの、いとあてやかにみへけるが、ともにはなれてたゞ獨、ぼうせんとしてたちいたり、盛久は促て、なふ御身は何方より、來給ふぞいかなれば、ひとりゑましますと、いとむつまじくとひければ、女房聞て躬は、雪の下の方成が、御能見物いたさんと、是迄參侍へ共、つれたる者を見失ひ、あさまだきより此所に、立疲て侍ふと、かたりければもりひさは、さていたはしやそれがしが、伴て參せん、わが行かたへ、御こしあれいかにくと云ければ、女房聞て面煩げに、かほ打傾何方の、お人さまかはぞんせね共、御心入の程、忝なうは侍へど、今にも連の參なば、章を尋申べし、ゑこそおうけは申さねと、たちかへらんとゑたりしをもりひさをでを、ひかへつゝ、尤には候へ共、ほかへ伴ひ申さばこそ、人の尤も有べけれ、御所へ參に誰有て、い

なみ申さんやうもなし、我等に任せ給へかし、かゝるすがたの上郎と、まばしなり共御つれだち、申すことも、すぐせのえんはやくとく／＼と手をとれば、おんなはにつこと打わらひ、何様是もごゑんなり、さあらばつれの來る迄、頼まいらせ侍ふと、さきにたつをもちひさは、うしろさまに、むすどなく、女房是はと驚を、帶を解小袖をはぐ、こはとうぞくかなしやと、もがくところをだきすくめ、みぎより左のわきつばを、こぶしも通れと刺通し、かしこのほりへざんぶとなげいれ取たる、こそでをうへにきて、かづきにかくす男がほ、もとより盛久ようがんは、よにかくれかき事なれば、さながらおうなのごとなり、いかに主君の爲なりとて、思へばひどうの行跡哉、あゝなむあみだぶつとなへつゝ、まばしねんじゆをなしにけり、かゝる所に、梶原平三かげ時は、見廻りの爲出たるが、世上にさたある色好、もり久を見るよりも、誠の女と心へて、ま／＼とたちよりにて、さてそのほうは何として、かくゐいたるぞや、見物の者ならば、こなたへ参れとめを細め、いと懇に云ければ、盛久はかぢはらを、見るより嬉しく幸と、

ごらんのごとく自は、御能見物の者成が、つれなる人にはなれつゝ、そのうへこゝちあしければ、一足もはこばれず、御樂の侍らはい、給はれかしとかげ時が、たもとにすがり申けり、かぢはらいまはたまられず、こひかせぞつと、むねさはぎ、邊を見合某が、悪やうには致まじ、すいぶんかんびやうなしゑさせん、まづ片かげにて休そくし、よきまぶんに某が、さしづして面白き、所をみせんいざまいれと、かたに引かけ立けるが、ふりあほのきて、上郎は、打見たるとはさうゐして、さて／＼おもしこはいかにと、いへば盛久さもあらん、こゝちあしく侍へば、身を引立る事叶はず、ごたいぎながらはやくと、すゝめければかげ時は、もとよりうでさきつよければ、心へたりと云まゝに、はや御能始りて、ふゑやつゝみのこへ共に、ごてんのかたへにいそぎけり、のうもなかばの、比成に、まぶんはよしと盛久は、かたへにまのび、ものゝぐし、あいづのたいこを、打にけり、忍びいたりしいちみの者、こゝかしこよりあらはれて時のこへをぞあげにける、すまんのけんぶつ、さうどうして、うへを下へと、かへしける、

去共御所には、おのゝ一人當千の、物になれたる兵共、ものゝぐかため切て出ゝをせんとぞ三重たゝかひける、かゝる所に盛久が郎等、久遠久住兩人は、大だちをさしかざし、たせいのなかを、こと共せず、わりたてゝ切ちらせば、あたりになかづく、みかたなし、こゝに、玄なのゝくに、うんの小太郎、行氏が郎等、薙刀かいこみ馳向ひ、ひさすみにわたしあひふた打三うちてうゝと、合けるが久住に、なきなたを、打おとされ、かたさききられゝ引ている、安西のや七が郎等、逃さじと打てける、心へたりと久とをは、以開て打たちに、みけんのぶかに切こまれよりゝと引ている、平くの、へいまの丞が郎等、久とをがうしろより、たゝ一打とする所を、久住すかさずかけ合、兩方より切たつればせんかたもなく、うけだちにて、かいふつてにげゆくをいづく迄もおつさまに、ひさとをが打たちの、きつさきをほろつけに、切こまれて引ている、臼木の、八郎が郎等、すきまもなく打てけるを、たゝみかけて切付れば、ゆんでのひざを切われ、かなはじと思ひけん、ひかんとすどれひきも、ゑず、すでにあや

うくみへける時、くどうさへもん祐つね、走いで、大をんあげ、何へいけのざんとう共、御所へ亂入すいさんなり、いで物見せん大だちぬき、まくりたつれば、追かへし、二三ど四五どいどみしがさすが、名をゑし、すけつねに、何かは以たまるべき、久とを久住兩人は、ゆんでめでに、切ふせられ、おなじまくらに玄ゝにがり、玄のびゐたりし盛久は、逃ぬ所と切て出、おゝ珍しやくどう、いざまいらんとわたしあふ、すけつねゑたりと云まゝに、兩方めいよの兵にて、玄のぎをけづりくはゑんをたてこゝをせんとぞたゝかひける、もりひさかたより、きの七きの八兄弟、祐つねに切てかかる、祐經が郎等、あふみの小藤太八はたの三郎、玄うを討せて叶はじと、おしへだてわたしあひ三重ゝをせんとぞたゝかひける、そのひまに、もり久は、此度こそは空く共、おし付本望たつせんと人だまいにぞまざれいる、祐經主従三人は、きの七きの八兄弟を、ゆんでめでに切伏て、もり久をのがさじと三重あとを玄たふておひかくる、わだのよしもり、追欠て、長追むやくと引留め、祐經師友それよりも、御所をさしてぞあがら

れける、適ときのちんじやとて貴賤上下安詫皆かんざぬ者社無けれ

第三

めでたきみよに大いそや、ゆきゝの人もうかれぶね、色のみなどの中になを、せんせいのかいさんとやまと、のみかは、から竹の、せんりに名たかきとらごせん、其風俗の艶くて、又よはからぬだて姿、千花が中の一花と、かうけもぢげもおしなべてゑたはぬ人こそなかりけれ、けふしもやよいみかのくれ、かのその人にはあひもせで、如月の半より、世の人嫌かぢはらが、けふ迄も上詰の、せひにあはんと認共、一よの枕もかはさねば、平三かげ時持あつかひ、いかいはせんと夕ぐれに、ゑるべのちや屋へきたりしが、とらごせんに行あひて網笠あふのけゑとゝより、めもなく笑て是はそも、我らが迎に御出か、有がたしく、大かたさやう有べしと、思ひおもつて來りしに、あんにたがはぬ嬉やと、せなかを打て手をとれば、とらはその手をふりはなち、いらへなにしにお

むかいに、まいり申さんやうもまた、せうつきなくはき給ふぞ、おきにゑ給へかぢはらと、いふ名を、きくもいやらしと、あいさうなげにいひければ、さすがのかぢはらせきめんし、ほかのみるめもはづかし、いはんことばにさしつまり、よくおぼへてござあれやとばかりいひてたちけるをわらは三重ぬものこそなかりけれ、はるはまづとよ、のも山もたいそれのみの、さくらあめ、てごとにかふていへづとに、なせやむかしも、ひさかたのあまつかみよの、にゐまくら、みとの、まくばい有けるも、是に、ならひてあきつすの、めでたくなりしせきれいとう、それより、いまにめおの中かはすなさけのことはも、うすきはいやよ、こくせんや二ぐはんあめは、めいぶつと、きせんらうにやくおしなべてゑろきを見ればふくるよの、月にニツ三重ゑげれる、かつらあめ、とうゑんゑがく川口よりも、わきてながるゝ水あめや、くむ共つきじかんろすい、里の子共よ、とくはやくかはいこいゝこんぺいとうもあるべいぎうひゑなぐのはとやすいめやからなすび、からふりからもゝ、うつくしく、かぞへならべてうたひしは、

おもしろかりけるゑだいななり、とらはにつこと打ゑ
みて、かさもいしやうもよくにあふ、うまれながら
のから人か、きかま、ほしやと有ければ、商人は打笑
て、上郎様とて正ろやな、飴さへめせば何程も、て
んぢくこうどのほめことば、わがてうこゝんのはや
りうた、ごゑようあれとぞ、申ける、梶原聞てや
あ商人、とら共いはるゝ上郎が、己が歌が聞度とて、
其飴をかふべきか、よくさへうたはゞ金銀は、いか
程も此客が、まきちらしてとらすべし、わつとうた
へと云ければ、商人聞て先それは有がたし、乍去す
い一の、太夫さまにて在せば、ゑやれの上にはそう
なき物、少上て見ませんと、飴一袋さし出す、とら
はわらふて手にとるを梶原大きに涌上て、我にあて
て其飴を手自取て有けるかと、ばい取てかしこへす
て、扱は此商人が、びじやくの色に思はくか、きくは
いなりと云まゝに、ぼう押取て商人の、はこをみぢ
んに打くだくは、ぼうゑやくぶじんにみへにけりか
かる所へかまくらより、急の使馳來り、御所よりき
うに御召と、一通をさし出す、かちはら急拜見し、
君の仰のきうなれば、せひに及ずはがみして、すべ

きやう有り其商人、留置べしとけらいをそへ、つぶや
きながらそれよりもやかたを、さしてぞかへりける、
とらはおかしく商人の、とめられ給ふも一玄ゆのか
げ、よと共かたり、申べし、こなたへきたり候へと
もなひ、内にぞいりにける、とらがざしきは花かざ
り、びをつくしたるものすきの、けふのものとしてひ
なあそびかゝやくまでにかざりたて、さまゝなり
し、もてなしにいざあき人にもゑやうぞくとり、酒
ひとつ進せん、はやとくゝと有ければ、商人は畏
て、ゑやう束ぬげば其よはい、十六七のび少年、と
らは驚なふ御身は、どう三郎殿なるか、あらめづら
しやなつかしや十郎さまはいかゞとすがりついて
ぞなきにける、どう三郎も諸共におつるなみだをお
しといめ、日比せつなるごしんちう、存申て候へば、
此程の御きづくし、さつし入て候なり、扱此間十郎
殿、御行かたのゑれざれば、定めて此やの内に、忍給
ひて有らんと、存乍も今程は、人に尋んやうもなく、
かやうに粧を引かへて、御めにかゝることうれし、
へんじも早く十郎殿に、あはせて給はり候へや、と
らは聞てさにてなし、今見給ふと梶原が、其せいとう

のつらければ、内からせくも一入に、御めにかゝる
 事叶はず、こよいは御身をかのかたのゆかりと、思
 ひむらさきの、ふかきいろかになぐさまん、どう三
 郎はあれなりしいかうに、かけしかりぎぬに、かむ
 りをそへてかざられし、やゑさいはいかにさればとよ、
 はづかしながらかたるべし、自が父上、伏見の大な
 ごん、さがみにさすらひ給ひし時、母の長者に戀草
 の、假初臥の其中に、童を儲給ひつゝ、都へ上り給ふ
 時、此装束を賜て、三月三日は年毎に、是を飾てお
 がみしに、こぞのけふは祐成に、是をきせましひな
 ごとし、ならべし、そでのうつりかも、いつしか夢
 と成はてゝ、まゝにならぬはうきよかな、さりなが
 らつゝがなく、ましますことのうれしきに、わざと祝
 て御身にきせ、十郎様と思ふべし、やからば仰にま
 かせんとかむり、かりぎぬ「ちやくしつゝ、さても
 ひいなのはじまりは、あはしまのおゝんかみすみよ
 しの、明神になごりを、おしみかたちをかみにて、
 つくり御そばに、ならべ置給ひしよりおうなの是を
 もてあそぶは、男おを~~え~~たふならひとやさればせいせ
 うなごんがふみにも、こしかたゆかしきもの、ひいな

あそびのてうど、有ましてやいはん、そがの君、よ
うぼうゆふびなるのみか、ぐんりよきうばゝいへの
物、まうききんぎまよぐは迄も、ならぶかたなき
身なれ共はるの花には、山おろし秋の月にはむらく
もの心にあらぬ世のさはり、ふたつゝれだつかげみ
れば、うら山しくも行鳥と、あふぎさす手にとらご
せん、ひしとすがりてむねのひは、ふじやあさまと
わかれ共、もゆる思ひはおなじこと、けぶりくらべ
んまづが身の、かゝるつとめのかなしやとなみだに、
くれてふしむたり、是見たまへと、其ひまにかむり
かりぎぬゝぎかへて、なが大小にまきばをりとこに、
かけたる花入の、あみがさ取て引かぶり、一ふりふ
つてふりかへり、あの山みたか、はつぎくら、此谷
みたかもゝの花げにうぐひすの花をみて、ほゝうと
はむるこへはいとけしきに、うつりおもしろしとた
がいに、三重かはす、おしのはの、ふかまの水のそこ
きよく、むすびし中も理と、夕つげ鳥のなかぬ日は、
あり共きみにあはぬよはなふおぼへぬと、諸共に、
かたにもたれて立ゐたる、すがたはさこそよそめに
は、色と思はぬ人ぞなき、かゝる所に祐成は、忍ひ

來て此ていを、えやうじのひまより見給ひて、つゝ
と入て其まゝに、ふたりをさゆうへ突倒、にらみつ
けてぞ立給ふ、是はいかにと團三郎、君のおゆくへ
尋ん爲、忍び參て候と、申ければ十郎は、いや何と
てまづ此ざしきに今のふせいは何事ぞ、己たゝぬか
此うへに、何の云わけ有べきぞ、にくきはとらに留
たり今更いふも腹立と、持たる扇を取直してうゝ
と打たゝき、せきつのりたる有様なり、とらは泪に
くれながら物のりひをも聞わけず、さりととはつらき
御_まかたと、起直るを又打すへ、今ははや是迄と、立
かへらんと、_ま給ふを、團三郎押留、まづゝお心お
まづめ、とつくとことを聞給へ、それがし是へ參事、
とらごせんに御なづみ、敵の事をわきへなし、一向
色にぞみ給ふ、去に依時宗様、さまゝ心をつくさ
れて、何とぞしてとらごせんを、わきへゆういん申
なば、おのづから里通を、御留り在んと、某形を刷
て、此所へまいりたり、全ふぎに候はずと、くだん
の装束取いだし、祐成にみせければ、祐成一々聞給
ひ、扱はさやうに有けるか、かく迄思ふかたゝの、
まゐていさつして恥や、全我が誤なり、はらばした

つな此うへは、時宗にたいめんして、わがまゐてい
をあかすべし、まづゝ汝はかへるべしと仰ければ
どう三郎、何を申もお爲なり、畏て候といとま、申
てかへりける、とらは涙を押といめ思ふが、中のい
さかひとやきげんなをしに酒のまんとみづから、て
うしかたぶけて、十らう殿にさしければ、祐成盃取
上て、ほさんとせしが堰上て、まきりにおつる泪の
たま、つらぬきあへぬごとくなり、とらはあやしみに
かにやと、とひければ祐成は團三郎が申すでう、時
宗が心體の、肝にてつして恥しく、思ひ切んと思ふ
程、なをきれやらぬぼんのうの、いぬよりもなをお
とりたる、祐成が心の中、我ながら口をしと、こへ
打ふるふて申さるゝ、とらもたもとをまぼりつゝ、扱
もうれしきおゝせやな自浮世にながらへて、御身様
の御ために、ならぬと聞てつかのまも、いきてせん
なし此うへはまゝてみらいのちぎりこそ、わすれ給
ふな是迄と、守刀をすらりとぬく、祐成押留且まて、
御身を殺某が、ながらへて何かせん、いやゝ御身
はたいせつの、のぞみをもちて御いのち、すて給はん
とはおろかなり、我は命ふたつ有り、弟五郎がある内

は敵をうたで置べきか、かく迄思ひつめたれば、共にいのちをうしなはんぞかしこゝにて相果なば、上やの噪いかいなり、かやう／＼とさゝやきて、おび二すじを取りだし、二かいの柱に結付、たぐりてそとへおちこちの、みちもさだめすいでけるはあやう、かりけるゑだいなり、いろはにほへと、ちりぬるをわがよたれぞつねならむとおさなき時の、てならひにかきおそはりしわざなれど、よそのことゝやいたづらにすぐる、月日はおほけれど、はな見る春のすくなきを、むかしの人はなげきけめ、それさへ、あるに我はかく、いかに君ゆへ、なればとて、かゝるうきみのはかなさをこしちに、かへるかりがねも人に、つぐるな、たのむによ、うるのおくやま、けふこえて、あさきゆめみし世の中とあらでやふかく思ひいり、人をうらみ身をなげき、かなしむまじと思へ共、我らごときの、おろかの身さんがい、くはたくと、聞時は、いか成里にかくれても、かくしてやどるいほもなし、是もたれゆへかた様のにくからぬよりかくまでに、身をすてゝこそうかぶせもありてふ物をいさぎよき、此世にまさるのちのよと、いさめられて

はいさみつゝゑのびていづる、ゑゆとなれば、こよみはあれどゑひもせず、けふといふけふ大いそをいでこしゆけば心なき、身にも哀をゑるといふ、嶋立澤にぞつき給ふ、それよりも人々は、心静にうはぎをぬぎかたへに打ゑきむかひゐて、かほとかは見あはせて、みらいは必、ひとつはちすのうてなのうへ、ふかくかたらひ申べし、みれんにわたらせ給ふなと、申すことばもそゝろにて、又うちふしてなくばかり、祐成いや／＼歎つゝ、殿ば人や見尤ん、はや／＼さいごを急んと、ゑみづを結念佛し、刀ぬきもちいかにとら、いまが此世の限りなり、ねんぶつ申せとのたまへば、とらは心へさふらふと、まなこを、ふさぎくはんねんす、祐成すかざす心もと、さし通せばつばもとよりほつきと、おれてぞとびにけるとらは驚こはいかに、祐成につこと打笑、其心ていをためさんとたくむ思ひの劔ばゝ、木だちにはくをおしどりの、色けをさりしゑつの程、おゝたのもし／＼、すへの松山愚なり、ふじのたかねになみこす共、たがいの中はかはるまじ、二のみやかたへ立忍び、いさいはあれにてかたらんと、二人手にてを取くみて

ふかく忍びてぞゐたりける、げにあきからぬかたら
ひとときせん上下押なべて皆かんせぬものこそ無け
れ

第四

わたるいたばし、とんどろとろ、ゑどろもどろの、
あしなみを、物くるわしのすがたやと人のはやすが
みづからはなを、おもしろふさふよの、はやせや子
ども、はやさぬかさにつけたるふりつゝみ風がさ
そへばからころり比は、やよいの夕がすみ、立いで
てみねのくも、花にやあらん白たへのゆきかと、の
みぞうたがはる、その花よりも、くゝ、いざよひ過
てつぎのよや、見しかほばせがめにつきのすみまゆ
かみの、おもかげが、身にゑみぐゝと二せかけて、か
はりたまふな、わすれじと、かたくむすびしふうじ
めの、ふたりが中にかよふかみ、くもゐにかせの、そ
よそよともにも、くんじてちる花はさらくゝさらり、
さつくと、ふりかゝりたるこぼれかみ、かきあげ
かきあげばちに懸りてもつれてよれて、とけぬ、思

ひはうやつらやうきよにあきか、はるながら、ゑぎ
たつ澤の夕まぐれ、おゝちみ月に松のはの、かすはよ
む共君思ふ、こひしき事の、かすゝに、いかでお
よばんまつ人も、こぬよあまたに成ぬれば、ひとり
かたしく、たまくらに、ふけゆくかねのこへすごく、
あらしにつたふひいきには、ゆめやぶれておき見れ
ば見しよの人の俤が、とこのかけ物ふすまのゑに立
そひ、いだきとめんとすれ共かげきへて、かしこの
つまど、こゝのすみくゝ、かけりめぐつて、物くる
はしき、らんびやうし、すはこそ松ふく風にさそは
れ、いはうつなみのどうくゝとあだし、こゝろの、
みだれかみゆふてうらみを、はるのくれ鴨立澤にぞ
つきにける、さる程に、是は、三千風と書て、みち
風となづきたる、行脚の者にて候、くばんゑくど
く平等施一切同、ほつばたいしんぢやけんの眼もゑ
ほらしき、色のめもともふさぎては、おなじのばゝ
の塊に、なるとは誰も知やうに、ゑらぬはゑゆらの
けんぞくと、なりぬる事こそ、はかなけれ、こゝに、
大磯のとらごせん、全盛又なき身なりしに、そがの
何がしかやいふ客に、互に結ぶ心中の、あへなく

も此澤にて、廿日斗いせんに、又の下に身をちいめ、
ついにはかなく成候、ぐそううへんの者なれば、こ
こに葬石碑をたて、諸人のゑかうを請ん爲、形を刻
かやうに負、大磯邊をくはんぞんし、たゞ今かへり
候なり、いやあれ成、とらがつかにこしかけし、狂
女はいかと立寄て、みればこはそも少將か、五郎
様にて在すかとたがいひしとすがりつきまづさ
き、だつはなみだなり、やゝ有て少將は、二せとち
ぎりしみづからを、ふりすてゝとらごせん、ほだ
いの爲に出家なし、此あんぞつにゐ給ふは、有べき
事共思はれず、かく身をやつし忍出、とにもいかに
も成べきと思ひさだめてさふらふぞや、時宗もうす
を取てすて、是見よや、出家はせず、かねてわ女も
知ごとく、かの工藤祐經が、却こなたを討んとす、
たせいにぶせい力なく、兄十郎はとらごせんと、心
中してゑゝたると、世にひろうなし時宗は、母の仰
に隨て、ほうしに成しと人々に、ゑらせん爲の策、
祐成とらは先立て、二のみやかたに忍びゐる、かま
へてあんずる事なかれと、打かたらひてゐる時に、
物おとまぢかく聞ふれば、時宗は少將を、かたはら

へゑのばせをき、其身もかたへにかくれるて、こと
のよしをぞうかいひける、まだ夕月の、比成は、つ
いのてうちん、かいやきて、見れば庵に横木瓜、ゑ
や、祐經ごさんなれ、奴こゝに來る事、ゑゝまつ所の
狸、打てとらん嬉やとたちぬきそばめて、まぢかけ
たり、まぢかくなれば、てうちんを、切ておとすを
供のぶし、はらくと押取まく、なんぞ五郎にたま
るべき薙たて切はらへば、のり物を捨てて、四方へ
ばつとぞちつたりける、時宗急駕の戸をふみ破祐經
を、かいつかんで引だし、すかさず押伏のりかゝ
り、とし比ねらひし、おやのかたき、けふめぐりあ
ふうれしさよ、くさのかげなる父そんれい、たゞ今
たむけ奉ると、跳上り飛上りさんくゝに切ちらし、
切たる首の髻取、塗たるちを押のごひ、靈せんにた
むけんと、月にすかしてみてあれば、祐經にてはあ
らずして、名もなき者のくびなりけり、時宗はつと
ひざをうち、ゑゝむねんや淺ましや、か程に心をつく
したる、おやのかたきを時宗が、打そんじたりとい
はれんは、世に口おしきゑだいでと、たいちにどう
とぎをくみて、ゆみやのかみもいかなれば、いとうが

まそんをか程迄、にくみすてさせ給ふぞとおぼへず、
そいろにおちかゝる、むねんのなみだはせきあへず、
かゝる所に時宗が、うしろに工藤祐經、ずつと立て
いかに五郎、此祐つねを打事は兄弟よつても叶まじ、
向後心を翻せ、五郎佐にらみ付、うれしや天の與な
り、くはんねんせよとたちおつ取、切てかゝれば祐つ
ねも、まゑつたりとぬきあはせまのぎをけづりてた
たかひける、かゝるおりふし、七尺ゆたかな大男、預
たりとわつて入り、双方を打留る、時宗怒て大切成、
敵討のまやまなさば、討て捨るぞのけといふ、時に彼
者綱笠を取て捨れば、朝いななり、兩人是はと驚ば、
朝いなむずとぎをくんで、まばらくく、すけだち
にては、さらになし、ことのどうりをとつくときけ、
やゝ祐つね、一らう別當たる其身として、何しに是
へはき給ふぞ、まつた時宗、ごへんは祐經を狙ゆへ、
母のかんだう蒙しに、それをやぶるか大ざいにんそ
こ立されと、云ければ、時宗聞て、くんふの仇をば、
共に天をいたゝかず、たゝ、打にと飛かゝる、朝い
な尙も引といめ、ま程口きく其方が、兄十郎と師友
に、討てこそは父川津の、靈こんも悅れん、五つや

三つの比よりも、心をつくせし兄弟が、兄を指置うつ
ならば、惣領の助成は、たんせいむになすのみなら
ず、臆病ものゝ名を取て、ふかうのつみ遁なし、わど
のばかりか、川津が子か、いかにくつめければ、
涼の五郎一ごんの、へんとうにも及ずして、さしう
つぶいてゐたりけり、時に祐經立上つて、いかに時
宗、某是へ來る事、十郎は大磯の、遊女を偷で逆たり
しに、置所なくさし殺、せひなく其身もまぬといふ、
五郎は坊主に成ときく、扱はまごくのこし拔共、一け
の名下と人くくに、唱られては此工藤が、ぶゆうの
家のかきんと成る、打て捨んと思ひしに、今のまはざ
心ばへ、存のほかたのもし、我も一子を持けるが、
汝がやう成ることを持事、適川津はくはほう人、随分腕
に力をいれ、ふたりにても三人にても多くかたうど
催して、此すけつねが首をうて、汝が刀はくどうが
身に、立べきはがね覺なし、是はおぼへのある劔、い
ざとらするぞとさし出す、時宗をくせずつとより、
人に刀を授るには、つかをこそ出すべき胡やはさき
を出す事、請取べしと祐經が、持たる拳をみじと取、
ちから任にまめつくれば、ねんりきうでにかたまつ

て、祐つねが拳より、ながるゝのりは紅のきぬ引はへたるごとくなり、朝いなみて取あへず、こしに付たる大さんにて、やがて、此ちをたんぶとうけ、五郎が手を押はなし、一口飲で工藤にさしいこくには、會盟とて、ちをすゝつて、双方の、約をたがへぬ誓となす、此義ひでが證人ぞ、御身吞で五郎にさせ、はやとくゝとせめられて祐つね、まなこくらめ共さあらぬていにて一口のみ、五郎にさせば時宗、盃請取押いたゞき、唐土の會盟は、犧のちをすゝる、押付我ら兄弟が刃をえん上仕らん、たがへ給ふな祐つねと、悦勇ずつとほす、工藤は克心へたり、ずいぶんうてよとにらみつけ、やかたへかへれば時宗は、手に握たる其敵、のがす事の有べきかと、追北出るを朝いなとめ、一人にて討てはたゝす、兄祐成兄弟して、討て本望を遂られよと、せいせられつゝちからなくはがみをなして、立たりける、武道を立るぶしの身の、ぎは金てつにひとしゝとて貴賤上下安詫皆かんせぬ者社無けれ

第五

曾我兄弟の人ゝは、一所にさし郡祐成仰ける様は、いかに時宗、頼朝公かねてより、武州淺草の觀世音へ、天下太平のきせい有り、願狀をこめられしに、程なくせいひつ成けるゆへ、代さんとして祐經が、ぶゑうへ行由聞て有り、何とぞ忍び年來の、ほんもうをたつせんは、いかゞあらふと有ければ、時宗うけ給はり、嬉げに打笑て如渡得船とは是ならん、早々ごゑたく有べしと、兄弟師友それよりも、やがてようゐをなし給ふ、さくらちる、ゑがのうらはに、あらね共、たまちるなみの、花川戸らうにやくきせんくんじゆなす、ゆへをいかにとたづぬるに、世に弄はいかいの、女點者に朝日とて、わこくのことにくらからず、世上にひろきまなくよせわれも、ゝとつどひよりにぎはし、かりけるゑだいなり、かゝる所へ、けはる坂の小櫻やは、朝いなに家名をもらひ、今は三浦と改て、淺草に來りしが、あんないこふて立入ば、朝日は上にしやうじつゝ、いか成ごようととひければ、去ば候此度、ちゝぶどのゝくんかうに、此入間の郡を賜り、色里なくては叶じと、新に是を

取立らる然べきちを某に、望申せと仰により、當所に來て候なり、就夫て其かたは、是に久しく御栖ゐ、所のやうすも御存なり、いづかたを郭とし、然べく候はん、殊又其元は、江口の君の御ゆかりと、承候へば、便宜く此事を、相だん申さん其ために、是迄、まいりて候なり、其上とこのかけ物を、ぎんじて見れば世の中を、いとふほどこそかたからめ、かりのやどりを、おしむ君かな是、西行の玄ひつにて、江口に與しゑいかなり、をくゆかしやと、有ければ、朝日聞て、仰の如私は、江口の妹、江川と申せし者成が、身まゝに成て所から、うきよのにごりを、すみだ川、みやこどりのふるすにて、うたの事にはよせあれば、くさの庵を引結び、心靜に世をおくり、いとまある身にさふらへば、いかにも其問合、承申べし、色にそみたる若人は、心うかれて亂るゆへ、靜ん爲に昔より、おゝくは是を無常ばの、邊にちかく立おかる、此所にて申さんは、はしばの向さんやこそ、宜からんとありければ、三うら大きに悦て、さあらば其かた能やうに、萬たん頼候と、たゝんとせしがあいさつに、ふで押取てかくばかり、はなよ

りも、ゑがほまづよき、あさひかなと、せうびゑければ、朝日、忝なしと取上て、はしらすふでもうつくしくたがまことから、かすむあの山とつけ、れば、三うらよこでを、てうど打て、おもしろしく、ゑんたくわたましするならば、百ゐん興行致べし、彌色里開關を、頼いるさの山のはに、月のよざくら、ほのゝくと、朝日にゑらむ花川戸、あけて三浦はよろこびのまゆを三重ひらきてかへりける、はるがすみ花もまづさく、京まちを三浦のやかたとさだめられ、九十三げんたてならぶつゝきて、たかき山口やあまてるかみの、立給ふ、いせや、やましろ、天まやにふくゑざいある、みやうがやのなをもさかふる、とみをかや、色もかへぬはおゝけれど松や、まつばや、おほまつや、ゑだも、ゑげりて君とわがあふよつきせぬさはぎにはいかによニツ三重ながき、ながつきの、有明の、月もあげやの、のきにそのまゝありながら、きやくにつれなきわかれ酒、さらばさゝやに、やくそくを、又ゑなのやの、ゑなゝと、かずかさなりし、かづさやに、いくよはこびてあし引の山やのとの、ゑだりをのながくもかよふながさきや、こゝろ

の玉やまるやこそ、なじみてよけれ、よつめ、やにか
かるかぎやの、ひさしくも、大津つのくにいちもん
じふたつ、ともへに、みつどもへ、まんじかたばみ、
すいきやに、のしやひやうござさどふしみ、人は何共
いへだやの、君とわれこそふかくさの里、ならね共う
づらやの、こへよきうたにきゝとれてふけゆく、そ
らのゑらくもにはねを、ハヤ三重ならぶる、かりがね
や、とけてまとはる、つたやこそちよもはなれず、あ
ふみやにさいなみ、よするみぎはやの、花も色ある
ふぢやがみせ、ふぢのめいゑよはさかいのうらよ、さ
かいやひしやゑびさがみ、かゝやはしもとときりあづ
まきつかうもつかう大こくや、たからぞつもる山も
とや、あげやに取てはいせおはりならぶ、うみづら、
ゆくみづの、なかにかけたるはしもとやわかさいづ
みのとうたらり、どうくたらりたへずとうわきて
ながるゝいづゝやの、ほとりにちかくうへおきし、き
りやが色も、ときはにてゑげる、松ばや立花や、ゑ
びやふせだや、たてならべ、色のもなかの、さはぎに
はいかなる、ゑやうのいはやの、おひぢり様も、三
すじのいとに引たてられて、とんと打こむすがゝき

の、ひやうしをそろへてゑいゝゝゝゑいゝゝゝ
ゝゝゝ、あれさのゑい、此やれたのしき、みよこそめ
でたけれ、かくてぢぎやうも、ゑやうゑゆし、けふ
吉日のはしらだて、ゑやうとうのゑうぎとして、り
うぶしをたてゆみやをはげ三うらが、いへのにぎは
ひは、何にたとへん、かたもなし、ばんじやうのとう
りやうはいしやう、たゞしくあらためて、棟のうへ
に畏り、きもんにむかひはいをなくもつの、もち
いせいどうを、取て四方へまきちらすは、にぎはし
かりけるゑだいなり、かくて十郎、祐成は、尋る者
を伺ふて、ほうかぶりしてたゞひとりこゝや、かし
こと見たまふを、かたへに休むたりける、あまたの
にんぶ一同に、遁じと押取まく、中に一人進出、い
かに、そがの十郎かく云は、祐經が一子犬坊なり、
兄弟こゝにて覗だん、祐經はとく知て、早かまくら
へ立かへる、汝らを助置ては、父工藤がゆゝしき仇、
打とらん其爲に、あふみやはたを初として、大せい
を召ぐしたり、彼生取て引立よと、いふより早く一
同に、大せいどつと折合、十郎を取てふせ、すでに
かうよと、みへける時、おんどの朝日かけ來り、あ

ふみやはたを初とし、促者をかいつかみ、はらり／＼となげいだすはめをハヤ三重おどろかす斗なり、十郎おどろき、いかにと問、三浦も是はとかけ來る、其時朝日はかけきへて、やの棟に立現れ、まろをたれとか、思ふらん、朝日將ぐん義仲が、守ほんぞん、鎧の袖に付たりしを、鎧と共に義經が、すみだ川の、川下へ沈たり、是末の世に其川を、鎧の渡と申すとかや、今祐成がゑいこのの、心をかんに其上又、朝いなはきそが種、守らん爲に出現なす、まつた三浦はゑんを取、心正路のゑといひ、よしひでに此度、志をつくす事、ぶつだにてつしへんほうに、汝がゑんを守らんと、むねより光明かくやくと、三うらが、そでにとび給ふ、こは有がたし／＼と、ちたび戴それよりも、朝日の如來とせうじつゝ、つたへてすへのよゝ迄も三うらがいへに、あるとかや、其間に、犬坊丸、あふみやはたも起上つて、大だち引拔打てかゝる、時にむねのうへよりも、ほうかぶりせし大おのここしにはてうなつちのこ切、ゑびらのごとくさしみだし、とんでおりたる有様は、らいでんいなづまはつたゝがみ、おちかさ、なりしごとくなり、

犬坊が是をみて、やあすいさんなり下郎、そこ立されと云ければ、男聞て先、から／＼と打笑て、大工ゆへに大き成、たくみをなして汝ら迄、此所に引入た、ちぼうまづよし義ひでが、こゝにゐたるをゑらざるか、めに物見せんと、こおどろし、かけやの大槌かいふつて、むかふものゝ眞甲、にぐるものゝどうごし、ぶちひしぎ打おるはすさまじかりける、ゑだひなり、あふみやはたは、一もんじに、朝いなにむすと組、犬坊丸も祐成に、飛かゝつて引くんだり、犬坊力や増りけん、十郎を取てふせ、既に危くみへし時、かしこにありし番匠の、かごゆさ／＼とゆるぎしが、木くづ四方へ跋と散、なかより五郎時宗、跳出て犬坊を、後様にかい抓、七八間投出せば、朝いなも兩人を、ゆん手めでにけたおして、兩ゆうにらんで立たりしはこんがうりきしにことならず、ざんとう大せい押へだて、又三人に打てかゝる朝ひな笑ておもしろし、あじ十方の逆敵を、此小林が拳にて、抓よせて一ひしぎよみじ一切ゑよじかけ引、此すけ成にまかされよ、時宗は、だじ八まん九まん九万十万百千万、てきにばいする力こぶ、かいせあみだの

玄ゆごなれば父そん靈についせんす、時宗がてがらの程、是見よゑいと彼成、五丈斗の、ざいもくを、押取てふりまはし、玄んどうして打たつればどつハヤ三重とくづれてちりにける、いぬぼうたまらず、逃て行、兄弟すかさずぼつめ、あふみやたと引くんで、ひざの下に引玄いたり、朝ひなは兩人の、間に入て奴ばらこそ、川津殿を手につけし、大敵成ぞ首とれと、いさみ立れば、祐成は、あふみを取て引かへし、首かきおとせば時宗も、やはたが首にもろてをかけ、かたほねふまへてゑいやと引、つゝぬきにしてさし上る、朝いな悦扇を上ケ、あふぎたてたて、三人打連立かへる、ちじんゆうの其行跡、適ぶさうの働やと貴賤上下安詫皆感せぬ者社無けれ

第六

爾後相模國に御坐、わだの義盛夫婦の人、朝ひなの三郎を、たい一たんのこらしめに、かんどう赶逐なし給へ共、今は月日も程ふれば、ゆくへいづくにいかゞして、嘸や懶有らんと、あんじわづらひ給ひける、斯所に

そがの十郎、祐成同五郎時宗は、とら少將を召ぐして、旅疲にて來らるゝ、よしもりそれこなたへと、よきにもてなし給ひける、互に一禮事おはり、兄弟の人は、こんど工藤祐經が、淺草寺へ參につき、幸と我く、身をやつし覲しに、祐經さつして、策をめぐらし、くはん音より、直にかまくらへ、引かへす、力及ず、此度も、打もらし候ゆへ、むねん乍もかまくらへ、又立かへり候なり、就夫て朝ひなには、我ら兄弟が垣と成、心ならずもみ心に、背き申せし事なれば、へんじも早くごめんあらば、我く迄生前の、ごをんと存候はんと一同にぞ申さるゝ、義盛も懷く、思はれける事なれば、巴のまへとかほ見合、兄弟のぞせう、玄んせつのだん過分なり、いかゞ思はれ候と、宣ふ詞に巴のまへ、御兄弟の御詞、身に餘て忝なし、其義ひではいづくにか、身をかくし候ふと、うれしなみだをはらくと、いとなつかしげにのたまへば、とら少將も一同に、むさしのくに、御坐、はやく御迎遣され、然べしと申すにぞ、義盛然らば人く、の、わびに隨ひ免べし、ゆるす迎をださんとのたまへば、そが兄弟とら少將、いづれも悦び限なし、

扱それよりも、いとまをこひまゆくまよを、さしてぞかへらるゝ、斯所に、かまくら殿より、川ごへの二郎、御使の由申いる、義盛急出むかひまやうざに、しやうじ給ひけり、川ごへ申されけるやうは、扱もへいけのよるい、まゆめの判官盛久、とゝうを結び身をやつし、君を伺ひ奉る、彼等を急かりたてゝ、たいぢせよとの上ゐなり、おうけあれとぞ申さるゝ、わだはゑぼしをちに付て、人おゝき其中に、かゝるごでうの有がたし、押付もり久たいぢなし、み心やすんじ奉らんと、御請あれば川ごへは、禮ぎを厚くざを立てごまよをさしてぞかへらるゝ、去程に、朝いな三郎は、さんやのへんにいたりしが、此度父よしもり、主馬の判官盛久が討手の仰蒙由、聞と等く盛久が、隠がを尋るに、つねに淺草觀音を、ふかく念じて淺ぢがはらに、すまゐると聞よりも、まだほのぐらき曉に、鎧引かけ大だちはきたけなるこまに、打のりて、八尺斗の鐵棒を、めでの脇にかいこふで、せつなの間にのり付て、みれば大堀ほりまはし、一丈餘のきどをたて、こへて、いるべきやうぞなき、義ひで馬よりひらりとをり、此もんひとつも

のゝし、おしやぶつていらんとて、とびらに左の手をおしかけみぎりのてにてこしおさへ、ゑいんといふてふんばつた、さしもにかたき大木戸が、ひらりゝとあほる事、うちはなんどのごとくなり、ねをびれたるばんの者、すはや打といふまゝにうへを下へぞかへしける、斯所に、吉はらの三らうより、三つ引兩の幟を、す十本おしたてゝ、小林の朝いな社、此攻口蒙たれ、もり久いで、尋常に、はらをきれと、よばゝつたり、敵ははたの紋をみて、すはや三浦の大將ぞと、門の内には數百人、押かへされじと扣たり、朝いなものゝ數共せず、諸手をかけておしければさしもの大木戸柱もをれ、ぐわらと崩て倒ける、をしに打れてハヤ三重まするものかずもかぎりもなかりけり引され共ざんとう、打てかゝる、義秀いさんで面白しと、てつぼうを押取のべ、なんによにんばの嫌なく、めにさへぎるをかたて打は早三重らりはらりとなぎたつる、何かは以て、たまるべき、盛久がぐん兵共、こは叶はじと引かへし、あとをもみずして、にげてゆく、もり久いまは是迄と、たち拔持て走出、平將ぐん貞盛に五代、越中のせんじ、もり

としが弟、主馬の判官もりひさが、うんつき今の玄に
狂、へいけに於おいてはよき敵ぞや、打て高名仕れと、切て
かゝれば義秀は、ねがふ所とわたしあひ、ハヤ三重ひ
玄ゆつをつくして、たゝかひける、もり久たちの、
てきゝにて、更に勝負はなかりけり、義ひで棒を投
すてゝ、飛かゝつてむすつくむ、もり久玄ゝのはが
みをなし、立あはんとしけれ共、日本ぶ双の朝いな
に、何かは以及べき、のつけに倒るを義秀は、のり
かゝつて取てふせ、ちすじのなはをぞ、かけにける、
斯所に、わだの義もり玄そつをぐし、馬上よりも此
ていを、見るよりそばにかけ寄て、あさいな成かと
有ければ、義ひで悦びもり久を、いましめて引たつ
る、よしもり悦喜淺からず、即かんどうめんきよあ
り、打つれだちてそれよりも、盛久を引立させ、か
まくらさしてぞかへられける、千秋万歳目出度とて
貴賤上下安詫皆仰がぬ者社なかりけれ

色里開闢對面曾我終

芳野の内裡

土佐少掾直傳

第一

扱も、其後、およそ天下をひきふるに、じんせいあればたみやすく、みなばんせいと仰ぐもこれ、天のめいずるきみのとくヲクリうごかぬ、みよこそひさしけれ、こゝに人王、四十代の帝をば、天むてん王とあがめ奉る、其比の功臣、村國の大將、男依公の妹鴉照姫と申せしは、ぶそうのれいしつ成ければ、君御てうあいふかくして世にときめかせ、給ひけり、ころしもふゆの夕げしき、はやさきそめし、むめつばにとぎよましゝて御ゆふある、かゝる所へ、村國の大將、玉ぎまちかくしこうして、ないそう申されけるやうは、先ていの御子、大伴いがのわうじには、み心あしくまします故、先立てしが寺へ、御入しつの御事を、御憤り此間、きみてうぶくのきこへあり、御むほんの御心ね、天下の大事と存れば、某ことを伺ひみて、じつふをたゞし申さんや、ゑいりよいかにとそうもんある、帝ゑいぶん有て、然らば

村國ことのやう、たゞしみよとのりんげんにて、御れんに入せ在せば、村國、畏ておうけをなしだいりを退出なし給ふぎしきの、ていこそやごとなき、せうさつたりし松風も、おなじうき世のをとそへてくはたくのかどのあけくれと、大伴いがのわうじは、ごまの烟に身をふすべ、てうぶくひほうをしゆせられしは世にすさまじうぞみへにける、かゝる所へいくしき、女性一人しばのとを、おしあけてたちいつゝ、わうじの、みそばにかしこまる、せんげん、たりしようしよくのかつらのまゆすみくものびん、はつゝとあうじはうつゝなくおぼへずだんをおちこちの立よりあかつき眺何者ぞと、とはせ給へばかの女、みづからは此あたりのさとのしづにてさふらふが地二せとちぎりしわがつまを、うきこといろにねとられて、詞わらはゝよもぎふの、やどりにひとりよをあかし、すてられぐさのねたましさ、所詮今はかの女が、命を取て妄執を、はらしたうさふらふゆへかれをじゆそなしたび給へ、此ことお頼申さん爲、忍び是迄参りしなり、御禮のしるしには、見ぐるしけれど此小袖を、捧進せ候と、なみだと共に申けり、わうじつ

くぐきこしめし、扱はしつとの色ゆへに、是迄あ
こがれきたるとな、誠にわりなき心ていの、理には
有けれど、さ程つれなき心の駒、二道かくるつまな
らば、そのかたも打すて、外のゑにしをたのめか
し、さればわれこそ其かほばせ、見しよりかゝる行
法の、すます心は徒に、詞身はうつせみのからだこ
そ、くうのいろゆへけがされたる、われになさけの
うきふしのひとよを、こそとかこたるゝをんなおど
ろくふせいして、こはそもかゝるごんじやの身、さ
やうの仰はあさまし、いや／＼しやもんの身にて
なし、我はてんぢのわうじたる、大伴いがのみこと
なり、元よりてんしと成べき身の、かゝる姿の口を
しく、かく行法のこうをとげ當ぎんをてう伏なし、
我ていわうと成ならば、汝を皇后に、かしづくべし
とうつゝなく、心の大じをあかさるゝぐいの程こそ
つたなけれ、しかる所へ御めのと、はだのすくね友
足は、中どみのかなむらじ、そがの赤兄を召つれて、
あはたゞしく馳來、此ていをみてさればこそ、とく
とくと云ければ、そが中臣は心へて、かけよりやに
はにかの女を、手ごめになして引すゆる、わうじお

どろきこはいかにと、仰あるを友たる、さればにて
御ざ候、此女は村國の、をよりが妹、にはてると申す
もの、君調伏のみあり様、伺ふべきためしづのめの、
かたちとなしてさしこす旨、一味のかたより告きた
れり、去によつてかゝるてい召取うへはしさいなし、
扱こよいこそきんりには、ついなのよにて候へば、
此紛に忍び入、帝を擒となすべき事、掌の内にあり、
右のしぎを申さんため、はせまいり候なりはやとく
とくと申すにぞ、大伴ゑつき不淺、いそぎしたくを
なすべしと、にはてるひめを引たてさせ三重やがて
やういを「なしたまふ、はくほうぐはんねん、しは
すのはてのみそじ日や、こよいはなにおふおにやら
いいともめでたきまつりごと、主上御れんに入給へ
ば、あまたの宮女しよきやうたち、そでをつらねて
ちやくざある、おんやうのはかせすへ明は、まご庇
にしこうして、ごへいふりあげうや／＼しく、まつ
りごとをぞしゆくしける、それあめながくつちひさ
しきあまつひつぎのまつりごと、申すもおろかなり
けれど、まづはつはるのあけそめて、ほしをととなふ
る四方はい、とそをくうずるくすりこの、もみのた

もとやひのためし、くむわかみづは、御生ごしやうきの、ほうがくの井をてんじはるたつあしたひらきそめもんだのつかさたてまつるわかなをすゝむなゝくさや、あはばのせちへあがためし、きよくすいのゑん花しづめ、なつにもなればころもかへ、うづきの中のよつの日は、あまてるかみにさゝげ給ふやかんころも、たんごのけふとみや人は、あやめのかづらかけまくも、さこんうこんのまてつかい、なつのおはりのひとよさけ、なごしのはらひみそぎ川、三重ながれてうつる、としなみの、あきにもなればひさかたのほしのまつりのたむけぐさ、すまひのせちへこまむかへ、てうやうのゑんさかづきに、ちよをくむてふきくのさけ、ふゆのをんがちはやふる、ないし所のおんかぐらチャリかゝるぎしきの中になを、わけてこよいはついなよ、ゑきしをはらふ其ためし、こくどあんせんちやうきうと、にぎてふりたてじゆもんをなしごてんのよもを打はらふは、三重めでたかりけるしだいなり、かくてとねりのめんくはおにのめんをかほにかけチャリたてほこかざして立いづる、ついな役人取々に、もゝのゆみあしのやを、うちつがひ

うちつがひ、せんくは門より立いれば、鬼形きやうの役人迹まよふを、やごへをかけて三重とうていをかなたこなたとおひまはし、たき口の、戸におひいだすはいさましかりけるぎしきなり、かゝるところへ大伴のわうじは、玉のかんぶりこんれうのぎよいを、ちやくしてさんだいある、あり合公卿おしとめ、君先立てしがてらへ、御入しつの御さたに、かゝるてんしの出立にて、ござんたいはいかにぞと尤とがむれば大伴は、いや我こそは一天の、ゆるしをゑたるばんじやうの、皇なれと仰ある、諸卿いづれも心へず、とかくおかへりあるべしと、とりぐにいましむる、時についな役人に、紛るたりしそが中どみ、鬼形のめんを引はづし、てん上へかけのぼり、たちぬきかざしさんぐに、諸卿をばつと追ちらし、立かへつて夫よりも、御れんをさつと切をとせば、六尺ゆたかなあらおのこそらうそぶいてぞたつたりける、兩人おどろきのつけにそりかしこにふるへにげのきたり、わうじつめかけ何者ぞ、愚やぐ、天にふたつの日りんなし、ちに又ふたりのていわうは、あらがねの土もきも、我大君の秋津國、天てらすくはうと

うを、うばゝんとなすとも、三じゆのじんきしゆ
 ごのしん、村國の大將が、玉たひにかはつて、かゝ
 るろうせき、しづむるうへは叶はぬぞや、たちさる
 べしゝあくとうばらとぞあざむきける、王子いか
 つてそれもの共、きやつをあまさずいけどれと、あ
 いづのかいを吹立る、忍びゐたりしぐん兵ども大ゆ
 かみはしの下よりも、どつと顯れつめかくる、もの
 ものしやと村國は、大だち引ぬきわつていり、なぎ
 立るいきほひにむらゝばつと逃ちつたり、すきを
 見合村國はおりふしさんだい有あはせし、吉のゝし
 ゆぎやう、にんかいあじやりを^{もかり}眠て、もはや諸卿い
 ちみのうへ、玉たいあやうく候へは、きそうは帝を
 吉の迄、潜にぐぶし在せと、叫給へば元よりも、か
 いゝしきあじやりの坊、心へたりと君を負、よは
 に紛ておち給ふは、あやうかりけるしだいなり、心安
 しと村國は、待かけ給へば敵のせい、あらてをまし
 てのがさじと、ちくいのごとく打かごむ、村國ちつ
 共たゆまずして、階のらんかん二三間、忍いゝや
 つとこちはなし、攻よるたせいに馳向、なぐりたて
 おんまはししばしときをぞ「うつしける、いまはき

みにも、道の程、はるかにおちのび給はんに、是迄な
 りとしたふてき、追拂ゝ御跡求おち行けり、かの
 村國の其働、適ぶそうの勇將やときせん上下をしな
 べて皆かんせぬ、もの社なかりけれ

第二

「其後、吉のゝあじやりにんかいは、主上をれうの御
 馬に、のせ奉り口をとりあやうきこゝうをのがれい
 で、みちをはやめてをち給ふ、かゝるところに、跡
 よりもおつてのせいとおぼしくて、ときのこへをび
 たゝしくいかゞはせんとにんかいは、一先玉たいを、
 かくさばやとかしこなる、山のしげみの松がへに、
 御馬をつなぎ置、其身は道にはせいで、さらぬて
 いにてまち給ふ、さればすへの世此所をくらま、山
 とは申すなり、しかる所へ村國は、身にたつそやは
 さながらに、もりのごとくにをりかけてあけにそま
 りてはせきたる、にんかいそれと見るよりも、かけ
 よりいかにと宣へば、村國はいきついて、扱は君に
 てわたらせ給ふか、跡より追て頻なり、某もやうゝ

と切ぬけ、是迄追付奉る、又々こゝに立留り、敵を
防申す内、とく／＼主上を誘申し、おち給へやとす
すむれば、にんかい是に力をえ、お馬の口を引たて
て、馳出んとしたまふ時、流や來て主上の、御背に
はつしと立、人々はつとおどろき、立かゝつてそや
をぬき、玉たい如何にとみてあれば御はだへにはた
たざりけり、こはばんじんのかごとりと、よろこび
いさみにんかいは君をしゆごなしそれよりもとぶが
ごとくにおち給ふ、それよりして此所をやせの里と
はなづくるとや、あいもすかさず敵のせいあまさじ
とおつゝめて三重ときのこへをぞあげにける、まぢま
ふけたる、村國はカ、ルもの／＼しやとわたりあひ、
せんごをはらひさうをなぎ、いそうつなみのまくり
切三重／＼をせんどゝふせがるゝ、さすがの大せい、
たゞ一人に切たてられ、すゝみかねてぞ、みへにけ
る、そがの赤へとび來て、ゑゝふがひなき者共や、
敵は一人手負むしや、おにがみにてはよもあらじと、
高言はいて欠向ひ、をしならべ引くんたり、村國是
をこと共せず、てもなく取ておつふせて、くびをか
かんとする所へ、かなむらじ馳きたり、はつといふ

て村國が、たぶさを取て引かへす、村國ゑたりと兩
ひざにて、あかへをおさへ手をさしのべ、かなむら
じがかいなをつかみ、引まはし取てふせ、おなじく
一所に引よする、かたきの大せいおどろきて是はと
一どにをうかさなり、村國を引立る、兩人ゑたりと
下よりも、ゑいやつとはねかへし三重おさへてなはを
ぞ「かけにける、村國いかり、口おしやと、おどり
くるへど大せいにて、手取足取引たてしはむねんな
りけるしだいなり、そが中臣はいさみをなし、きや
つをからめしうへからは帝はおつて擒とせん、まづ
まつわうじの見參に、入て御かんにあづかれと、か
ちどきあげさせて三重みやこをさしてぞかへりける、
さる程に、大どもいがのわうじは帝をば追失ひ、村
國を擒となす、今は思ひのまゝなりとおして御そく
ゐおはしまし、ほういつ無暫の御せいとうにが／＼
しうとぞみへにけれ、鴉てるひめの御かたをば、か
うひの位にかしづきあげ、御てうあいはかぎりなし
地され共にほてる大伴の、御こゝろにしたがはず、
あけくれしゆしやうの御事のみ、したひなげかせ給
ひつゝ、打しをれておはします、わうじは尙もあこ

がれて、何とぞひめの心をとけ、主上を忘給ふやう、
さまぐの御なぐさめ、いくさのことをも打わすれ
タクリ日やの御ゆふかぎりなし、斯折ふし、はだの友
たるさんだいと、申上れば大伴は、珍らしや友たる、
こなたへまいれと仰ある、かしこまつて友たるは、
そのいでだちのことやうにさしぬきのそばたかく、
くげうのうへに鍬をすへゆうくともちいで、御ま
へに、さゝげつゝふんぢがつてぞひかへける、わう
じ此ていごらんじて、こはけうがりしそのふせいし
ゆきやうなるかとゝひ給ふ、友たるは打わらひ、い
かでかさけにゑふべきぞ、是は寔の姿ぞと、ごらん
有てしかるべし、わうじ心は扱ひかに、おろかなり
おろかなり、ぎよくでんかはつてやけいとなるごわ
うのためし今こゝに、かゝるいみじきほうけつも、
くさしげきのらとなり、しかのふしどゝなるべきと、
世に心ある者共は、まゆをひそめてうたふよしその
消息を拙者めが、みせんにまなぶ此姿、くさしげゝ
ればみちのつゆしほるゝはぎをたかくとる、さて此
くわこそ其時の、たがへすてい^{まなび}を學つゝ、けふの御
ゆうに、そなへんと儲たり、何とくゝ、おもしろく

おぼさずやいかにと申あげゝれば、わうじぶ興の色
みへて、にがり切てぞおはします其時に友たるは、
せつかくと催たる、此ふせいはみ心に、いらぬとみ
へてきのどくなり、いづれもいかにとねめまはせど、
みなくかうべを傾て、一ごんの返答なし、友たる
重て、寔や君に、ふぎのふるまひます時は、諫るは
しんたる道、これに有合狸共、ぶ道をみながらへつ
らふは、こくぞくと云つべし、あゝ淺ましきかな我
君さま、かやうにふりよの御事にて、天下をしろし
召るゝ共かくまでびぢよと御たはぶれ、政もなし給
はず、ことに又てんむてい、やまとちに、忍びてわ
たらせ給ふよし、かゝる道なきごせいとう世のたみ
うとみをりをへていまにもてんむの、御みかた、申
す者もいできなば、忽亡び世の嘲、かばねに残し給
はん事、かゝみにかけておぼへたり、向後み心押直
し、其鴉てるをとをざけて、せいとうたゝしく在さ
ば世のあだはしだいにきへ、こくかあんせんたるべ
きなり、此事かんそう申さんため、かゝる姿にすい
さんなす、かへつて御ゐに違なば、とうく首を召
るべしと、泪をながしりをたゝし、まことをつくす

いさめのほどげにことはりとぞみへにけるさすがど
うりに大伴もさらにへんとうましまさず、一ざこほ
りてゐたり鼻、やゝ有て友たる、か程諫を申せ共、
御聞入もあらぬてい、然ばこゝを身退、首陽にうへ
を待べきなり、かへすくもそが中とみ、君の御身
に御大事、きたらぬやうに政、計ひ候へこれ迄なり、
御暇申すぞと、四かく八方睨付ごせんを退出なしけ
るはたぐひまれなるちうぎなり、時にわうじのび上
り、につくきかれがかんげんだて、たすけておかば
おそらくは、かへり忠をもなすべきやつ、追欠て討
とれと、大きにいかつて立給へば、そが中臣は畏り、
有あふぐんびやう召ぐして三重あををしたふておひ
かくる、さればにや、友たるは、やかたをさして立
かへる、跡よりあかへかなむらじ、うつての勅定蒙
て、馳來るぞや、友たる、といまれとこへかけて、村
村と押取まく、友たる笑てさもさふず、乍去己ばら、
肝をばそつと冷させて、生がいせんと思ひつゝそば
につみたる大石を、押おこしはねをこし、ちかづく
てきになげかけしは三重このはなんどのごとくなり、
此いしに、打ひしがれおそれてちかよる者はなし、

友たるは是迄と、たちをさかてに取直し、自くびを
かきおとし、立すくんでぞしゝたりける、そが中臣
は悦て、件のしがいを取もたせ、だいをさしては
せかへる、かの友たるがさいごのしぎ、わこく稀成
忠ぎやとてきせん上下安詫皆かんせぬ者社無けれ

第三

三重いざやわかなをつみそろへ、ゆきにぬれたるごろ
もでを、ふれやふれくちはやふる、かつての、か
みにさゝげんと、いさみよりくる里のめの、中に一
きは吉のなる、カルすゝかの翁がひとりひめなもす
ずしめのすゝかのまへ、めだつふせいにめのわらは、
かすのこしもといでたゝせ、めかごもたせてさきに
たて、其身はまきへのおくるまに、五しきのふとん
うずたかく、しんくのいと引つなやのりへしすが
たもよしのやま、なつみの川のかみいさめおんどを
こそははやしけれ、やんらめでたやたのしきことを
みよしの、山もかすみてはつそらの、けしきにかほ
るむめの花、くはつとひらいたかどかざり、ぶりく

ぎてうはこのこを、つくやひとふたみしめなは、し
げきみかげと引はへてかやがのきばもあらたまりか
みよもかくとおもはるゝ、たのみあるかな、此はる
のめぐみも、ふかきみやこだち、いざ／＼わかなを
さゝげよ、なる程さふじやいのなつみの神事いそ
がん、このめはるさめふるともなをきへがたきみ
山ぢの雪かきわけてつむわかな、大みや人の御ゆふ
にはけふぞ思ふた君が手をしめつるのべのひめ小
松、かた山かげにすむみこそよしなや夢のたまくら
に、ひとりねのひのまつ人もなしと、こたへてみや
こどり、とをきあづまのよしのにははなを見すつる
かりがねも君がかたにときくものをかみにたのもの
色こゝろなどかはしるしなからめや、いさめやいさ
めと取々にかすのわかなをつみそろへチクリかみの
みまへにさゝげつゝ、しばしやすらひゐたりける、
おもしろや山花にたり開て錦に似、澗水たゝへてあいのご
とし、それはやよひのけしきなり、春まだわかく三
芳野の岑の白雪花とのみうかれてこゝにたはんのし
よもう、いやきやうじんとよそめにはあだにやたゝ
ん、なつみ川、をり立てうろくすをすくひあげてた

のしまん、いざやすくひてたのしまんすゝかごせん
は此ていを遙にみるより、扱いかに、しや門の身に
て漁の、はしたなきことわざは、いぶかしやと立よ
りてなふ／＼御そうさ計の、御身にげなや其ごふせ
い、いかに成心在すや、僧は聞て我は是、此川波のく
づいを、あみにて救ひたのしむなり、こは浅まし
や殺生かい、われらごときも持たもつぞや、みれば三衣を
身にまとひ、カルかくも拙なき御ふるまひ有べき事
とは思はれず、いや／＼それは愚なり、ゆく川のな
がれはたへずして、しかもゝとのみづにはあらずな
がれにうかむうたかたの、かつきへかつむすぶ、そ
のてんぺんをたのしめば、はれゆくむねのくもと見
しは、みよしのゝ、みよしの、川よどたきつなみの、
うろくすをすくひあげ、ゑたるときにはじゆをさづ
け、またみなそこへはなしすつ、さとりひらけしけ
うちうの、あふけばだいきよかせすゝし、いかなと
あればすゝかのまへ、さてはみこゝろおもしろし、
とをきけんすが跡をおふ、御身はそもやいづくより、
きたらせ給ふ御名をば、何と申すたとひければ、其
時僧は立よりて、拙僧事は當山のしゆ行、にんかい

あじやりと申すなり、されば此たび、王城のらんげきにて、當今都を御ひらき、吉のに忍びござ有よし、大伴のわうじより、儼に尋召取て、進すべしと某に、りんげんをなし下さる、去共我は出家の身、かせいなくて叶はじと、里人を伺ふに、女性ながらも其かたは、文才有てゆうきをそへ、ことに當所の長といひ、もんようしげきかたなれば、くだんの御一み頼んと、たよらん手だてかく斗、ことやうなりし出立も、ごふしんをうけんため、さあ拙僧と一みなし、帝を尋召ぐして、大伴へ進らせなば、御身も共に忠せつの、たれかはかうをあらそはんいかにくくとよぎなくも、打さゝやきてぞたのまるゝ、すゝか興さめこれはそも、思ひもよらぬ御事を、承り侍ふかな、其事ならば躬は、御ゆるされを蒙るべし、まづおぼしてもごらんせよ、君を失ひ民を攻、その惡逆の大伴の、助をなして一天の、君を擒とせん事は、縦此身は大國の主と成てゐいようを、きはむるとても中中、ふぎのふうきはうかべるくもかうもうとらざる、ところなり、あらもつたいなしいざさらば、御暇申すと立行を、且しほしと留めにんかいは、扱はさやう

かさもあらば、若又君に頼れては、御みかたをなすべきや、それはおろかの仰せやな、かくも王どに住む身にし、争て勅をば背べしにんかいはつと手を打て、あゝかんじ入たるしんていたのもしゝいまはなにをか、つゝむべき、先程よりのあだごとは、みなみな御身の心中を、引みんためのうら問ぞや、誠にぐそう儼ひそかにも、主上をかくまひ奉れど大衆の心ていしれがたく、兒のごとくにもてなして、我坊に置申せど、未あんどと思ひをせず、御身は名に負女性なり、御頼あらんため、是迄ぐぶなすあの兒こそ、すなはち一てんばんじやうの、君にてわたらせ給ふぞと、そんなあればすゝかのまへはつといふてひざまつき、こは有かたや何が扱、いはいにや及べき、女にてこそござ候へ、自おみかた申なば凡吉の、十八かう、てをさすものも候まじ、かつてのかみもせうらんあれ、二心なく主上をば、よきに愛奉かしづきらんと、申す詞にあじやりの坊、大きに悦び此うへは、君をば御身に預たり、我は又一山の、大衆をかたらひ日をうつさず、御迎にまいらんとれうでうかたきかたいとものむすぶちかひの、たのもしく、あじやりは山

へとかへらるれば、すいかは君のぐぶなしてわがや
を、さしてぞかへりける、色みへて、うつろひやす
きむらさきのふりいで、そめしすいかのかた、地君
のたへなるごようほう、おそれおくもみちのくの
しのぶによはる、おりくは、よに有がたきみこと
のり、身にしみくひとたすらにしづこゝろなきこ
ひとなり思ひのたけを夕かせの、地そよとばかりの
御しらせ、申上んといくたびか、日ごとにこゝろな
やませど、詞さすがに君はかけまくも、皇の御身に
て、わたらせ給へば御まへに、出る事さへ愧く、き
のふとくらしけふとをくりて人しれぬ山したみづの
こがくれて、せきぞかねつる思ひ川、こよひはせひ
によるせぞと、ともしかゝげてながろうかひそかに、
しのび御しんじよの、ひとまにそつとたち入て、御
ありさまをうかいへど、もしやちよくでうあだなら
ば、いかゞはせんとあんじわひなみだにくれてぞゐ
たりける、しゆしやうはそのとき御めさめ、こは何
ごとのうさ有て、さのごとく歎ぞと、とはせ給へば
すいかのまへ、ふりそふそでのさよしぐれチャクリとい
め、かねつゝやうくと、おんはづかしや、みづか

らは、地いやしき此身おけなく君にこゝろをそめ
ぎぬのひとへにいまは、およびなきふかきこひぢと
なりまいらせやるかたもなき、思ひゆへ、ゑいりよ
のほどもはゝからずしのびまいりし心ざし、あはれ
なり共みそなはし、こよひばかりはふしゝばのたゝ
かりそめのおんなさけ、地かうぶりてきへはつる、
うきたまのをゝしばしやは、むすびとめたふさぶら
ふと、いふことのはもそゝろにてまたさめくとぞ
なきゐたる、主上つくく聞召、扱はやさしき色心、
こひに高下はなきためし思ひをかなへてゑさせん
が、まろは元より十善の、いみじき身とは生きて、
未うきよの百性に、少のめぐみも不施、てきのあら
しのつよければはなのみやこをおちこちのちりに此
身をけがすこと、地すぐせのかいぎやうつたなきと、
おもひこめぬる心より、再ていゝとならずんば、み
のりの道に立入て一日成共世をいとひ、ごせの願を
みてんため、それ迄は色の道、といめんとちかひし
ゆへ其戀草のねもたへに、思ひきれよとちよくあれ
ばすいかはよしを、うけ給はり、是はつれなきりん
げんぞや、地はやく迄に名取川、せいのうもれぎ

顯て、そうし申せば命こそ、君の爲ゆへうば玉の、やみくも此れんば、おもひとまり申さんや、かくごをきはめ忍びくる、さ程ゑい慮に任ずば、玉たいを失て、わが身も共にじがいなしみらいゑうこう六道四生詞付そひ申て一ねんをはらさでおこうかいにくつけしきをかへたもとぬぎさけつめよりて、そうし申せばきりんの御色を顯して、何程に申す共、いでかへらぬことのはの、此ぎにおいてはかなはじと、たせ給へば口をしやく迄申せど御承引、在さじとな是迄と、懷中したるつるぎをぬき、とびかゝらんとせし所に、ふしぎや俄にめいどうしいなづましきりにちらめきて、まなこもくらみたちもえすかしこへ、どうとぞ「ふしたりける、此さうどうに、こしもと共おどろきさはざはしりいで、是はいかにと立よつて、すいかのまへをおしおこしさまぐこゝろをつけにけり、主上此ていごらんじて、ゑつたなしやすいか、汝はちんを侮共、三じゆのじんぎしゆがあれば、其ばつをうけ身をせむる、それにても執心を、思ひとめじやいかにとある、すずかやうやく心つき、かほふりあげておそろしや、

地よしなき色に辨ず、玉たいをあやまちて、かく迄にばつとうく是よりこゝろをひるがへし、しうじやく思ひきるべきに、御ゆるしましませと又打ふしてくるしむてい主上ふびんと思召、勅免あるとのりんげんに、忽すゝかしやうきとなり立上れば有あふ者は、いかでそりやくに有べきといよくかしづきたてまつる、げにていとくのふしぎのほどをさせん上下をしなべてみなかんせぬものこそなかりけれ

第四

其後とんよくの山たかみ いたゞきくれぬ人心、すずかのまへがいへの長、龍崎いはほざへもん、つくつく思慮をめぐらすに、所詮帝を擒となし、大伴へ注進せば、願のごとく賞をゑて、ふうき心のまゝならんと、にじゆんに及ぶおいの身の思ひたつこそあさましけれ、儼にゑめし合たる、どみんのぶしを招よせ、こよいはせひに忍入、帝を取奉らん、ごへんらは、道に待受給はるべし、かみよりのごほうびは、

某がよきやうに、わうじへそうだつなすべしと、あたりを見合呟ば、よくにめのなきあくとうら、擧て悦び夫よりも、しのびてやういをなしけるはぶとなりけるしだいなり、たましくみやの内すまい、地こがねのうてな引かへてかやがのきばのわびしさは御せいのだいに召れたる、とを山里のけしきをも、いまはだおなしごしよのうち、ゑいりよくるしうますらんと、すいかはおまへにとのいして地さまぐなぐさめたてまつれば、れうがんことにうるはしく、地まことにかゝるかいほうを、いつのときにかわすれんと、地たぐいなかりしちよくでうの、有がたし中々になみだのほかはことばなし、かうたけぬらんでさらば、やすらふべきになだちも、立入いねよと有ければ、すいかはお請申上げ、明なば參申さんと、御まへを罷立、御次さして出けるが、げにやまことにこひせしとちかふ心もみるたびにいろこそまされくれないの花そめころもそでしほる、くもらぬあめふりさそひ又こそくもれむねの月、はれぬはさてもいんぐはぞや、あゝいかなればわれ思ふ、ひとを思はぬむくひにや我こふ君のつれなさよしよせ

ん又もや、此思ひ、地そうして見ばやとたちかへり、見ればそなたのそらおそろしくこはよしなやと思ひきりせめくるこひをおししづめ、なみだ地ながらにまくらうく、わがねやさして入けるはやるせなげなるふせいなり、三重しゆしやうはつらきひとりねにゑんじのかねのひゞき迄なみだをそふるなかだちと、ゑいぶん有て世のうさを、おぼしつゝけてしんしんとかべにそむけるとほしびのかげろふしたに色すがたつゝくりとして立ゐたり、主上あやしみたそ成と、ごらんあれば鴉てる姫、こはそも御身いかゝして、是迄遁來りしと、地うつゝ心にちよくもんある、鴉てる仰を承り、されば自思はずも、わうじにとらはれまいらせて、あさな／＼のもの思ひ夕べ夕べのうきなみだ、地かはくまもなくあけくれに、御行すへをいかゞと、思ふ一ねんぎよくたいを、しはしのうちも立さらずしゆごしまいらせさふらふなり、扱とよこよひ此所に、御わたり在ては、御身にあやうき事あれば、いざいづちへも御供せん、急ぎ落させ在せと、さうし給へば主上は、大きにおどろき思召、しからばへんしも此所、遁てみばやと御と

こを、出させ給ひ手に手を取、そこはかなくなきまよひゆくゑいりよの内こそやるせなき、ゆめかうつゝ、かまぼろしのそれとさだめもなみだかき吉の、川の花いかだいとしき君の御身をばのせてこがるゝさゝふねとたとへていはゝおもひよこひよ、いづれしづまぬ人もさはあらしのつてに聞しよのかた山里はうたまくら、道のき杯におぼへたる、そのふうけいをいまこゝにみるさへあるを山がつとしづが手わざのいかたふねつゝ、む人めのせきくだす三重すがたやさしやくれ竹の、さはさすそでの手もたゆくことにちらちらふりくるゆきのしきりにさふき山おろしげにやにしきのてうの内、地すきまのかせもいとひたる、花のはだへにさみぐゝとしばしやすらひましませば、地主上はよしをござらんじて、くるしからんと姫君の、御手をとらせおはしまし、御ふところにあたためて、此川なみのすへこそは三重いもせの山に、おつるてふかゝるめでたきゑんにふれやがてくもいに立かへりもろ共に此うさつらさ、ねものがたりになすべしとちよくでうあればにはてるはこは有がたき勅、さりながらゑいしんはます花、その色心かは

りやせんと御ひざに打もたれつゝのたまへば、いろもなきこゝろを人に、そめしより、うつろはんとはおぼへぬを、世はうきくさのしげりあふ、ふかき思ひのふちなればそこいはいかでしらしやとかこたせ給へば吉の川よしや人こそつらからめ、かねてちかひしことはゝわすれぬものをこひごろも恨申すもよしなしと又立あがりみなれざほししのひまもとまなみさしてちかよるみねのくもあれこそはかづらきや、くめちにわたすいはばしのちぎりはいやよたかま山よそにのみ見てやみぬべきゆめのかよひちさめやらばきへてやのこるおもかげのわが身のほどをなきこふるかたみにそでをしぼりゆく、ふゞきいやます川かせにいとゑぬれそふ御ふせい三重よそのみるめもいたましき、ゆきはしだいに、ふりまさり、さはさすいかだといまりて、跡へもさきへもうごかねば、いかゞはせんとおほせし時、あやしやすゝかがおもかげの君のみそばに立あらばれ、なふうらめしやいかに君、わらはがつよきしうしんは、思ひきれ共いやましにとゝまりがたき、あだなさけ、こよいはせひにと御床に、忍びてみればつれなくも、ふ

りすておちさせ給ふぞやいざうちつれて、くはんかうあれと御衣の袖、ひかふるなかへ鴛てる姫、分入てつきたふし、いや愚なり賤き身の、玉たいをけがさんとや、君に付添自は、いろのときはやれんりのまつほかの思ひはなかくに、そめてかひなきしぐれぞかし、とく立かへり思はれぬ、我身を恨み候へと、仰あればすいかのかた、大きにせいて立上り、扱心へぬことのはや、それてんしは御きさき十二人八十一の女御ときく、定てそのかたが、れんりの中とはやあおかしや、それはともあれ大君さま、かやうにしたひきたる身は、たまさかにだにあふ事の、なぎさにしよるなみなればうらみてのみや、かへるべき、なをしもつらく在さば、たとへ此身は天ばつのそのせめはうくる共、とてもとまらぬけねんのごう、勅定いかにとけしきをかへ、なみだのあめははら／＼とこぼれかゝれるびんづらをとらあげてしとよる鴛てるはすいさんなり、何程にしたふ共、自が有内は、思ひもよらずこなたへと、み袖を取て引給へば、すいかもまけじと引もどし、玉たいの右ひだりくるり／＼くる／＼くるしきはむらはくは

えんと成てたがいにあらそふおんねんの、角はくはばく、ひたいをさきてにらみあふたる有さまはすさまじかりけるけしきなり、すいかのまへは口をしや、いで／＼思ひしらせ申さんと、とびあがつて水中へ、ざんぶと入て忽に、甘尋計の大蛇となり、てんちに群なみをけたて、さんか一どにしんどうして、しゆじやうをめぐけてとびかゝるは三重おそろしかりけるしだいなり、げにやたがい、しつとのねん、諍ひ叫そのこへは、時のたいこをうつゝか夢、すなはち夢さめ御とこにぼうせんとしておはします、ゆめとはさらに、わきがたく、玉たいしつぽとあせいにて、御むねのといろけば、さてもあやしき事共とあんじめぐらしましますときすいかもめさまし欠きたり、同ごとくのゆめのてい、まだはなれえぬ執着は、ゑ／＼浅ましく醜と、さんげにあかすものがたりたがい、これとは手を打てしばしあきれて、おはせしとき忍びゐたりし龍崎、いはほさへもん御こたつを、すんどさし上げ顯出、此ていみるよりとびかゝつて、主上を取ていましむる、すいか驚こはいかにと、取付袖をかい抓、おつふせたかてにいましめて、さあ

第五

己ばらかくごせよ、大伴のわうじへ、注進の儲物、しあふせたりと悦びて、引たてゆかんとせしときにふしぎやごてんめいどうし、いましめのなはおのづから、ふるくはつとほどけつゝ、忽小蛇と現て、さへもんが首のねへ、なへやへにまとひつきしめつけくさいなめば引放さんと身をくるへど、争か以はなるべき、忽もんせつびやくちしてかしこへどうとたふれけり、そのときくはうめうかくやくと、ざはう權現出現有、さへもんがからだを三重ほこにつらぬきさしあげて君をなみする、大悪人、めうばつしやりんのごとくぞと、金りんざいへなげ給へば、みちんに成てぞ失にける、そのときしんたいみこへを上げ、色欲の執着は、六道りんゑのきづなを今、切てほんがく眞如の月、くもらぬかげはれいゝたり、尙々ほうそをしゆごせんと、よばはり給ふこへ共に三重よはほのぐと、あけわたる主上はつと有がたく、御跡三どらいはい有、御悦はかぎりなし、げにしんこくのためしやとてきせん上下おしなべて皆かんせぬものこそなかりけれ

其後、地鴉^{ひめ}てるの御かたは、大伴のみ心に、随ひ給はぬこらしめと、一間のでんに押こめられ、うき事つもる御身をも、君かためぞと思ふ身のきへんいのちもをしからじ、地さるにても大君の、くもいをよそに引わかれ、よしや吉の、山里に、忍わたらせ給ふとや、そののみ思ふよなくは、玉たいをたちさらぬ、地ことのみ見たるまさゆめの、さめてはのこるうつりがをかこちわびてぞくらさるゝ、かゝるをりふし、わうじみゆきといふこへに、御まへの侍女、急取々立向ふ、時にわうじはのみあかす、宿酒も未さめやらぬ、あそびがさきのちどりあし、よろくくさうの手を、官女二人に扶られ、さも凄じき大盃、御跡に取もたせやうくとしてゆるぎいで、鴉^{ひめ}てるをながしめに、^{きつと}佐ねめ付うそふきて、我萬乗の位となり、ふてんの下そつとの内、心にたがふ事あらず、是偏にわが恵を、うけぬものなきゆへんなり、若又ちんにいさゝかも、そむかんものゝ有なれば、如此になすべきと、さゆう成官女を、一所に

引よせかい抓、片手にずんどさし上て、たち拔持て提切さげきりに、むざんやさつと切放せば、ながるゝのりはたきつせにもみぢみだるゝふせいなり、是をみたるか汝等と、しがいをがはと投給ふ、その形勢なりさまに人々は、針の筵にざすごとく、わなゝゝふるふ計なり、王子は扱もこゝちよし、是を肴にそれゝと、持せの大人取上て、さらりゝと三ごんほし、くはんじと咲さみてやあ鴉カラスてる、つらくあたるもたゝちんが心に背ゆへぞかし、心をとけよさもあらば、兄村國もろくくつを、遁て共に富たつとく、身のゑいようを極べし、さあゝ中直りせん盃を、取上よとさし給ふ、鴉カラスてる些ちつともおそればこそ、盃を取持て、彼成まき柱に、打あてゝみちんになしさらぬていにておはしますわうじ興きさめ是鴉カラスてる、さ程にきははゝその盃、取上ぬ迄のこと、心ざしたる盃を、かくは計ふ不屈者、すべきやう有それ者共、村國を引出せ、畏てそが中どみ、かくと申せば大せいにて、なほ取なしてむらくにを、てい上へ引いだす大伴は立かゝつて、いかにおより、汝か妹鴉カラスてる姐ひめ、丸が心に隨ず、仍今召出す、鴉カラスてるちに隨ふやう、諫言を加なば、

汝も共に免許せん、さもなくは忽に、攻ころさんとぞをうつて、はつたと睨にらんでござうある、むらくにしつとあざはらひさこそあるべしわがいうと、君の爲にはおやをもすつ、ましてや兄が忠せつゆへ、縦八ざき車ざき、しゝびしほになるていを、みる共いたむ事なかれとおそろゝけしきは見へざりけり、わうじ怒て、憎きこうげんはやくゝゝ、くるしめて命をとれ、いかにゝとせき給へば、しうごくの役人共、はらゝと欠よるを、村國つゝと立上り、さんゝにけたをして、うんといふてたかてこて、ふつふつゝとをし切て、てい上へとび上る、有合者共驚て、かけへだゝるを事共せず、かいつかみゝ、カル人つぶてに打たつれば三重おそれわなゝきにげている、いまはさゝゆる、者もなし、いざや遁ん鴉カラスてる、かたに引かけ門ついぢ、とびこへゝをちたりしはあやう三重かりけるしだいなり、さる程に、天むてい、にんかいあ闇りのはたらきにて、一山の衆と一みなす、然うへは里近き、ざ王どうを皇居として、よきに愛奉かひつきる、去ば吉のを古郷と、よしのゑいかによみをくも此ぎようよりの、事とかや、折か

らやよひのころなればかすみたなびくおちの山いづ
くも、はるの夕げしきころ、のどけきころなるに、
地ましてところはみよしの、なにしをふたるさく
ら花ふもとよりまづさきそめて花もをくあるそのふ
せい、ゑいかにたへずしも、かたへなる御ことを、
引よせだんじましませば、詞ゆきとけたざる谷川に、
ひいきをそへしそのけしき心ことばもおよばれず、
花のゑんの、夕ぐれおぼれ月よにひくそでさだかな
らぬちぎりこそ、心あさく、みへけれゆきのあした
の、あらしはこずへの花のちるふせい、チャクリなごり、
をしきは、とにかくに、まちへし、君のかへるさひ
よくれんりのかたらひも、かはればかはるよのなら
ひさりとては、うらむまじ、むかしはなさけありし
をむめがへにこそ、うぐひすはすをくへ、かせふか
ばいかにせん花にやどるうぐひすをしろのしら
べやなくものかよひぢ、ふきとちて三重こゝにと
どまり、ことのねに、こなたもわかをそうせん、あ
まのはごろもまれにきてかざしの花も折からの、ま
づせいやうのわかをあげて、きしゆんらくをまはふ
よ、さてまたなつに、いたりては、いかならんまひ

のそで、かたへすゝしき川みづにうかみてみゆるさ
かづきのけんはいらくをまはふよ、あきのよながき
かせのをとはたがふむまひのひやうしぞ、おぎはぎ
すゝきつゆしげくたまをちらしてふぢばかま、しう
らくをまふべし、日かずつもりてふゆのよは、くは
いせつのそでのまひさてもゝしぎのまひには、大み
や人のかざすチャクリなるさくら、たち花もろ共に、花
のかむりをかたぶけてほくていらくをまふとかや、
いままた、君のことぶきにけんじやうらくを、いざ
まはんしかもところはみよしの、たへなりやおと
めこが、おとめさすひもからたまをたもとにまきて
おとめさすひもうたひかなつるそのふせい、主上あ
やしみそもおことは、いか成者ゆへ朕をかく、慰る
ぞと勅あれば、時に天女は被たる、玉のかんざしは
ごろものそで引ちぎつて我は是、大伴いがのわうじ
也、此所に皇居のよし、聞よりはやく伺よる、かく
ごあれと天皇の、御衣の袂をしつかと取、已にあや
うくみへにけり、折ふし村國いだてんの、ひ行かく
やと飛來て、わうじをつかんで投出し、君をかこふ
て立たりしはヲ、すさまじかりけるありさまなり、

わうじ大きにせき上つて、みちにせんといふまゝに、ざ王どうのゆるうのかね、とびかゝつて引おろす、村國すかさずかけよりて、引おろさせじとむずとめた、ゑいとひく、やらじとひいた、もとよりわうじはあしゆらがいきほひものくしやと引もどす、兩ゆうあらそふそのいきほひ、うほうさひつの兩こんがうがうまの、かたちふんぬのせい、かくやとばかりすさまじく、くろ烟をたゝてゑいやくゝと引あふにぞ、さしもの鐘たまらばこそ、堂舎佛閣森林に、ひいきわたつてまつふたつに、くはつとさゆうへ引わつたり、三重ときにしゆるうの、てんじやうより、むしや一きとびをりて、なぎなたかいこみこそ是は、花の吉のにかくれなき、すゝかといへるをんな也、皇居をしゆごしわうじのかく、伺ふていをさつしつ、かねてたしなむ長刀の、刃の程をばしらせんため、隠てこゝに現たり、いで見參と打てかゝる、わうじ怒てすいさんなり、あれ打とれとげちあればかくしせい、一同に、顯いで、切てかゝる、むらくに笑ておこがましとかたへのたいぼく引たふし、打てかゝるをすゝかのまへ、押とめそれにて見物あれと、

なぎなたをおつとり三重のべついてめぐるみづぐるま、なみのうちこしたきおとし、きつてまはればこらへずして、さんげをさしてぞにげかへる、され共てきは、大せいなり、せんちんごちんひとつになり、押取まきて攻よする、村國すゝかに引そふて、うつてまはればわうじのせい三重あをとをもみずしてにげてゆく、ながをひむやくと、村國は、すゝか師友引かへし、皇居をしゆごして立たりけり、適ふ双の働やときせん上下安詫皆かんせぬ、者社無けれ

第 陸

其後、吉の山の皇居をば、ふいに伺ふ猛敵を、人々の働ゆへ、一先は追退、玉たいつゝがましまさねば、御よろこびはあさからず、されば君、此山にござ有よし、隠なければ官ぐんの、我もくゝとさんかうして、さしもにひろき吉チャクリの山いはかげ、このまたにあい迄、人ならずといふ事なく、花の夕日もものぐにてりかいやきし有さまはげにいさましようぞみへにける、主上ゑいかん限なく、とくく出ちん仕

り、げきとを討りくすべしと、日月の御はたを、むらくに、給はれば、村國勅せん畏り、官ぐんつがう二十萬、三千よきを隨へて、しがの郡におしよする、いせいの程こそゆゝしけれ、さる程に、大伴のわうじは、たくみしちりやく徒に、はふゝに逃かへり、そが中臣を近付て、せいの中のらぬそのさきに、吉の、皇居を攻つぶし、帝をがいしにほてる姫うばひかへさんはやとくゝ、ぐんせいさいそくなすべしと、ごでうあればそが中臣、承つて在京の、ものゝふつがう七萬よき、にしきのはたを三重おしたて、吉野をさしてぞおしよする、あはづのはらにて、はしたなく、兩ぢんはたと行あふたり、互にそれとみるよりも、そなへをさだめ一どうに三重ときのことゑをぞ「あげにける、みよをさだむる、たゝかひも、けふをかぎりの事なれば、兩ぢん一どにもみあはせ三重こゝをせんとぞ」「たゝかひける、され共、くはんぐん、たせいにして、大伴がたのぐんせい共まけいろにこそみへにけれ、そが中臣は踊出、きはひ切たる官ぐんに、ゑしやくもなくわたりあひ、龍虎、の三重いさみすさましくはらりゝとなぎふする、さし

もの官ぐん、たゝ一人に切たてられ、兩方へさつとひく、かゝる所へ、にんかいのそなへより、きんふせんのうんくはい、かづらきのらいでん坊、ゑたりやおふととびかゝる、そが中臣打笑て、いらぬほうしのいくさのやう、そこを引なとつゝとより、互にむずと引くみて、ゑいやゝともふだりけり、うん悔らいでん元よりも、なにしおふたる大力僧、こと共なさず一同に、そが中臣を取てふせ、こへを合て兩人は、首ふつゝと捻切て、互にさし上立たりしはゆゝしかりける有さまなり、此勢に大ともがたあるいはおちゆきかうさんし、今は大伴たゝ一人、いで物みせん已ばら、わうじがめいどのぐぶせよと、踊かゝるを官ぐんは、兩方へだて押取まく、すいさんなりとはせむかひ、大手をひろげはむかふもの、つゝぬきねぞ首三重人つぶてはすさまじかりけるしだひなり、いさみほこりし、官ぐんも、わうじのせいに恐つゝ、右往左往に逃ちりける、時にふしぎやくうより、友たるが首飛來り、大音上ていかに君、某が諫の程、いまこそおぼしあたらんとからゝ打わらへば、わうじは更にへんとうなく、おもてをお

おひはぢ給ひば、友たるかくびさもさうず、我忠心
の一ねんは、けふ迄此どに留れり、かゝるうへは潔、
御生がいをいそがるべし、せんかにまみへ申さんと、
いふこへ計のこりつゝ、風にせうじて飛去けり、わ
うじ是はとあやしくも、たゞぼうせんと立給ふ、此
ていにうん悔らいでん、すりしよつて引くんたり、
わうじ怒てもものゝしと、左右に取ておしふする、
村國遙にみるよりも、飛來て組付を、同取て引しい
て、おしひしがんとせし所に、吉のゝかたより神通
の、鏑矢來て大伴の、みつけんにはつしとたつ、わ
うじは是にゆう力の、たゆむ所を下よりも、三人一
どにはねかへし、さし通し指通す、村國首を打おと
す、時にふしぎやめいどうし、ぎ王權現出現有、朝
敵のこらず討ばつし、天下太平成べきなり、カ、ル
いよいよこくかをまほらんとひかりをはなつてうせ給
ふ、夫よりも天むてい、大和國にせんど有、清見ば
らのみやにして、政道たゞしく在けり、千秋萬歳め
でたしと貴賤上下安詫皆仰がぬ者社無かりけれ

源氏六條通

第一

「扱も其後、夫天下に名を得ては、徳あれば四海にみち、あやまちあれば人こそつて、蝕のごとくに是を見る、さるによつてくんしはたい、其ひとりをつゝしむとや、こゝに仁王、六十六代の聖主をば、一條の院と申奉り、めでたきみかどおします、其頃のきり人に、延喜帝の御子、前の中書王の御舎弟に、一世の源氏を賜はり光ル源氏と申せしは、王道はさの其爲に、人臣と成給ひ西のみやの左大臣、高明公と申つゝ、和かんの才にくらからず、ようぼうゆふびにましませば官女も下女も押なべて、したはぬ者社なかりけれ、又右近衛の大將藤原の、道包公と申せしは、父關白の愛子にて、世の人おもくもてなしかる、心ざしふてきにして、ひげたくましきあだ名にや、皆人はを髭黒の大將とぞ申ける、外にはくはをかざれ共、内にはかねて逆心の、くはだてふかくましませば、光ル源氏と常々に、むつまじからぬ中

なりき、いで其頃は、永延元年の十二月、さこんの櫻咲みだれ、かいらく枝をあらそひしはけしからずこそみへにけれ、よつて主上南殿に渡御有て、諸卿を召れさまゝの、古きためしを御尋ね、ちよくもんあれば人々、しゆくゝの古事かんがへて言上有し折からに、攝州住吉の神職、庭上に畏り、扱も住吉姫松の本に、さも大いなる石のかろうとひとつ、すて置て候が、いか様ぼんぶのわざならず、石のおもてに、八ッの文字の候を、うつしてごん上仕ると、いたに書たる一下り御まへに、さし上れば、右大將道かぬ請取てそうもんある、二人一ト、一人入王といふ八字なり、ひげぐろしばしかんがへて、天晴めでたき御事や、二人と書て天の字なり、一トとは下の字なり、一人は大の字、入ると云にうの字に、王の字をくはへては、まつたしと云全の字なり、天下大いに、まつたしとよむ時は、天下大安全の御吉てう、住吉の御つけ、是に過たる悦びなし、いよくほうそ長久の、御しるしと覚えしとことぶき玉へば其時に、光ル源氏いやゝまつたくあんせんの、御へうじとは思はれず、今太平の時たいへいを、しんれい

のつげなく共しれたる事にて候なり、太平には亂をつげ、亂世には太平を、つげ玉ふこそ明神の、おうご共なり万民の身をつゝしむべきしめしなれ、我おもんばかりに此文字、二人下つて一人、王は入ルとかんがへ候、二人には仙洞と、當さんの御事、一人とは逆臣なり、王に入とは王城へ、くわきうにせめ入る大けうじ、もつての外の次第なり、てうてきまぢかに候はん、かならず御ゆだん有まじと詞、きよげにそうもん有、みかどつくゝゑいりよありいづれをわけんやうもなし、高明道かぬ兩人、頼光を召ぐし、事のやうを見てまいれと、時の武將かづさの介、源の頼光を召れて此よしりんげん有、承て人々は神の心のにごりなき住吉、さしてぞいそがるゝ、松のおちばをかきよせてゝ、木の下かげをきよめん岩がねによせてはかへる白波の立るひまなきしづが身の玉もかるなるきしかげに、たちよりて見たせば水たかふしてべうゝとほ計見ゆるおちのふねなみのあはぢの嶋ちどり友よびがよふしほあい、むこ山おろしはげしくて釣せであまやもどるらんはくらう、ちりて花千べん、かりせい天にてんずれば

文字一かうを顯はして、よそに稀なるふうけいをしばしながめていたりける、おとゝのしづは立よりて、いかにあね人此住吉の岸の姫松、ひと本をばなど相生と申らんいぶかしさよととひければ、姉は聞てむつましと、御身しらずや水垣の、久しき代より高砂のをのへの松と此松は、相生のやうに覺しと、きのつらゆきが古今のじよに、のこしおきたるふでの跡よくゝ心へ候へや、いはれをきけば面白や、かしこは高砂、こゝは住の江、扱は國をへだてゝも、相生の松といひくるしからず候よな、さんせんばんりをへだつれ共互に通ふこゝろづかひの、いもせの道はとをからずまづはひせうの物だにも、相生の名をゑたり、ましてやせうある人として年ひさしくも住吉へ、あゆみをはこびちかひなばいかでのうじゆのなかるべきいざみやめぐり、はじめつゝ、松のおちばをかこふよ、竹のさらへの手もたゆく、かけ共つきぬことのほの、道を守らせ玉ふなるあけの玉垣ひかりそへ四社のそり橋大とりい朝きよめして、松かげにしばしやすらひいたりける、かゝる所に左大臣高明、右大將道かぬ、頼光を相ぐし、住吉へつき玉

へば、津守の國夏あないして、松のもとにより玉ひ、かのかうとを見玉ふに、高さ五尺ゆうよにして、よこ七尺に餘りたる、大ばんじやくの其おもてに、きしにかはらぬもんじ有いかさまあやしき次第やと、兩卿ながめておはします、其時に頼光うらべのくはんじや末たけに、あのかうとのふたをあけ内を見よとのたまへば、畏て末たけ立よりあけんとせし所へかたはらなる松かげよりしづのめしづのお立いで、ちよくしのおまへにひざまづき、このかうとの事に付、申上たき旨有と、ごん上申せばらい光、ひかへよとの仰にて、末たけしばらく立しりぞく、時にしづのめ申やう、我々は住吉の、濱のまさごのかずならぬ名もなきものにて候が、おとゝが事は生れ立、力人にすぐれて、心からなる者なれば、かやうの折をさいはひと、都のとのへみやつかへ、ねがひ申て自らが、伴ひいで、候なり、此かうとをかるゝと、さし上させて力の程、ごらん下され候は、有がたかるべく候と申あぐれば、兩卿、ねがひの通りごめんある、しづは悦び松かげより、持つたへたるものゝぐを、さも花やかにちやくしつゝゆ

るぎ出たる其有様かぶとのきなしよろひつき、たぐいまれなる武者ぶりは只者ならずとらいくはうは、眼をくばつてやあ者共、もらすなと下ぢあれば、けいこの者どもさゆうより、二人のしづを押取まく、姉のしづのめこはいかに、げうゝしき有様やさまで御ふしんあるまじと、さはがぬていに申にぞ、らい光なんぢらふてきなり、あのよろひは平しんわう正門がてうほう、天ちくやうにおどしたて、ばらもんどどうと名付つゝ、びざうせしよろひなり、ひつでうてきの一るいなりまつすぐに白狀せよ、さなくば一々がうもんせんと、はたとにらんで宣へば、しづのめよこ手をてうど打てゑいさすが源氏の大將ぞや、今は何をかつゝむづき、わらはゝ平しんわう、正門がむすめ、加藏の尼と云者なり是なるわつばは、正門が子、自らが爲にはおとゝにて侍ふなり、父正門朝敵と成てほろびしよりかやうのていにさまをかへ、ようちのおとゝをかいほふし、せい長なさしめ本もうをはらせせん其爲に、正門が子なるとは、ふかくつゝみてじせつをまち、けふらい光にたいめんこそ、そくはいをたつせん時いたりぬ、桓武天皇四

代のそん、平のよし正がちやくし、しんわう正門が子なるぞや、父もちゝたる者の子が、かまへてひけうの働きすな自ら女の事なれば、足手まとひにせんもなし、九萬八千の軍神のちまつりに、只今こゝにてしすぞと、懷劔を引ぬいて、自ら首をかきおとし、かつばとふしたる有様はゆゝしかりけるしさまなり、おとゝおどろきいだきつきこはさていかにはかなしと、さすがにたけき眼にも、つらぬきとめぬ泪の玉はつらはらとぞ流しける、今迄我にそれぞ共、しらせ玉はぬうらめしさよ、かくみんかんに人となり、いやしき身ぞと思ひしに、すせうをきいてまんどくせり、そぶはよしまさ、父は正門、二字を取て今よりは、我、平太郎良門と名のりて、王城へ攻入りちゝのねがひをたつすべし、又頼光はがんせんの、姉のかたきのがさじと、大音聲にのゝしる時、ふしぎやかろうとめどうしふたを、こくうにはねかへし、内よりも其たけ九尺計の童形のとんでいで、良門に、立ならんで我はそも、ゑい山のちごなりしが、大天ぐに參會し、まゑんの法を學びつゝ、佛經王法めつせん爲、經ろんを焼はらひ、あまたほうしの命

をとり、今市原にすまいなすきどう丸とは我事なり、いかに良門諸共に、力をそへて天下をば、御身が心にまかすべしと、ふたりならんで立たるはあうんのりきしのごとくなり、頼光は兩卿に、御けが有てはいかゞぞと立ふさがつてかこはるゝ、けいごのもののふ左右より、打とらんと馳よるを、兩人是を事共せず、引よせゝ弓手めで人つぶてに打たりしはすさまじかりける次第なり、かゝる所に四天王第一番の大あらもの坂田、會同丸公時、いだてんかくやととび來て、君をかこふてつゝ立けりよく天の大ま王が、生れかはつてせむる共、げんけのしゆじなす其内は、おゝ思ひもよらぬ事成ぞ出物みせんと名に高きしにはびこる大のまつゝとびかゝつて引たふす、わたり土七八間、ねよりくづれてのきにけり、かるゝとふりまわし、大ぢもさけよと打立れば、きどうよしかにどへきゑきして跡をもみずして逃失ける、公時笑てさもそうず、あくまは去て西の海青きがはらの浪間より、顯れ出たるあら人神、かみすゝしめのほうへいをはやくゝと頼光公、兩卿の御供し、都へかへる公時は、天晴源家の寶やときせん上下押な

べて皆かんせぬ者社無かりけれ

第二

「其後、源の頼光は、みたちにかへらせ玉ひつゝ、渡部の太郎綱、坂田の會同丸公時、うすいのさだ光うらべの末武を、御まへに召れつゝ、扱も此たび、あやうきちんじつゝがなく、高明道かぬもろ共に、御きらく有し事、是公時がぶこうに有と御よろこびはかぎりなく、此上は四天王、きどう丸と良門を、心を付て尋べしと、御でうあれば人々、畏てお請をなし御前を退出なし玉ふ、去程に髭黒の大將はやかたにかへらせ玉ひつゝ、御そばさらずの郎等、東仙道無三坊、坂西あら波入道、なんかいのうんりうけん、北國の雪道齋、四人の者を近付て、いかに汝等承れ、扱も此度大内にて住吉の神職津守の太夫國夏が、注進申せし事につき、勅を蒙り高明と、共に見聞なす所に、きどう丸と云し者、平太郎良門、共に力を合つゝ、かうめいと頼光を、餘さじとしたりし時、まつたれい、坂田めが、大わざをふるまふゆへ、きどう

丸も良門も、はふく逃て行方なし、何とぞかれらが有所、尋出してみかたとなし、かねての所存をおもひたつ便にせんと思ふなり、いかにく有ければ、雲龍軒すゝみ出、仰の趣しぐくなり、あの頼光が有内はたやすく御本いとげがたし、先かれを御失ひ然るべく候なり光ル源氏は其内又よろしき手だても候はん、此ぎいかと云ければ、あら波入道無三坊、一同に手をつかね、成程其理聞へたり、しからは是へ御招き、どく酒を以せめころし、四天王の奴原をば、我々四人一同に、打てかゝり候は、いかでか以餘すべき、御心安かれと手に取やうにぞ申ける、無道齋すゝみ出、某は御使に罷こし候べし、髭黒大きに悦びて、明後日はりもなく候は、招請なしたく候と、云付て指つかはし、へんじおそしと待給ふ、暫く有てせつどうさい、立かへり申やう、頼光申され候は、思召よる御使、過分しぐくに存るなり、成程參上有べきとの、御へんじにて候と、謹で申ける、皆々悦び手を打ていそぎやういと聞へける、さだまる日にも成しかば、かづさの介頼光は、渡部を御供にて、あしげの駒にくれないのあつふさ

かけて召れつゝ、右大將道かぬのやかたをさしてぞいそがるゝ、かしこになれば馬よりをり、かくとあんない有ければ、郎等共出向ひやがて奥にぞしやうじける、其時大將しづゝと御出有、早速のらいいん悦び入候よし、互にゑしやく事おはり數の名くはやちんせんのしなをつくしてもてなさる、暫く有て雪道齋、入海となづけたる大盃を頼光の、御まへに持いでゝ、手づからてうしたつさへて、すゝめ申せば頼光はひとつうけさせ玉ふ時、ふしぎなるかなそともより白ふのたかまひ來り、頼光の持給ふ御盃の其上をかなたこなたへ飛めぐる、人々あやしみみる所に、頼光は心づき、持給ふ盃を、さし上てかのたかの、口をひたすとみへけるが、忽はをたれおちにけり頼光さはがす此御酒は、鳥のたべたる跡なれば、玉はるまじとて捨給ふ時にゑんの下よりも、男二人飛上つて、頼光を左右より、たてはさんで討んとす、頼光喘とにらみつけ、ならおかしや道かぬ公、かやうの事にて頼光が、やみゝ討れんや、おのれらすこしも手向はゝ、まつかうふたつに切わらんと、御はかせに手をかけて、ひぎ押たてゝぞ待玉ふ、ぎ

せいに恐れて二人の者、わなゝゝふるひおちゑんのらんかんふみをり、どうとおち、ふみ石に打あたり、かうべみぢんにくだけつゝあけにそみてぞしゝたりける、頼光笑てやあひげぐる、むかしかんのよに、張禹と云し者は、成帝のしはんだり、朱雲といふ者はをねたみ、てううを討んとそうせしに、せいてゐいかつてしゆうんを、きらしめんとし給ふに、しゆうん恐れてらんかんにいだき付ていたりしにひぎをそうせし天ばつにや、おぼしまおれて忽に、朱雲は庭におちけるとかや、是よりして今の世に、人の非をせめたいすを、檻折おほしまをりともじにかき折檻と申すとかやあの者共がふるまひは、よくもにたるぞひげくろ殿、いかにゝと宣へば、大將ざしきにたまりかね、をくをさしてぞ入給ふ、あら波入道雪道齋、それ餘すなと云こへに、渡部の太郎綱、しやうじ杉戸をふみ破り、いきほひたけつて欠來り二人の者をかいつかみ弓手めでへ取てなげ、氣色ばうてぞ立たりける、此いきほひに恐れてやあたりに近づくものはなし、いぎ御かへりと太郎綱、君の御供仕りみたちをさしてぞかへらるゝ、かくてひげくろ、あら波入道雪道

齋、兩人をちか付て、打もらしたるむねんさよ、此まゝにさし置ては、かへつてことの大事なり、小せいなる其内に追欠て討取べし、とくく〜と宣へば、畏て兩人はよろひ引立かたにかけ、有あふ者共引ぐして跡をしたふて追かくる、程なく追つき、あら波入道雪道齋、兩人駒をのり出し、おくしたるか頼光、我々が有ながら、いづくへにがしかへすべき、手なみの程を見せんとて、くろぬりの大弓に、かなじんどうをくつまき迄、引こふでぞのしりける、綱は此よしみるよりも、矢おもてに立ふさがり、おのれらごときのおくびやう者、いらざる長追身のはめつ、いでく〜ゆんせい心みんと、たちぬき持てひかへたり、兩人聞て渡部が、くはうげんのにくさよと、矢次早成者共が、さし取引つめはなつ矢を中に切てぞおとしける、是を軍の始にて、ぞう兵共入亂火花をちらしてたゝかひける、しばしせうれつなかりけり、右大將のかたよりも、くろがねせんじやう同く、道竹と名のつて出、一丈許の鐵の棒、かろく〜とふり廻し、頼光のぐん兵をはらりく〜となぎ立る、かゝる所に貞光末たけものゝぐして、大いき切てはせ來

り、たちぬき持てわたりあひ爰をせんとぞ「たゝかひける、何かはもつてあますべき、せんじやう道竹兩人を、弓手めでへ切すへてすかさず首をかきおとす、坂西北國是をみて、おゝ四天王程有けるよ、天晴見事のはたらきや、そこを引なと切てかゝる、坂田の公時欠來り、御兩人の御手がらははや相みへて候へば、こゝをばこのさかたが申請んと云まゝに、鐵棒をかいふつてはんじ計ぞ切むすぶ、され共せうぶみへざれば、さあくまんと云まゝに、二人一所に押ならべ、さうのかいなをむんずととる、公時はあらくるしや、もはや叶はぬ上からはごへんたちがすきにせよ、さかたも今は是迄と、さもよわ〜と云ければ、二人のほうし頭をふり、たるみをくれんばかり事、其手はくはぬ公時を、生取たるぞおりあへと、大をんあげて呼はれば、東仙道無三坊、なんかいうんりう折合、手もなく取て押ふせやにはにいましめ引たてゝ、是見給へや、おにがみのごとく成る四天王のすい一さかたの會同丸公時を、手むめに生どるつは者を、いか成者と思ふらん、右大將のみ内なる坂西あら波入道、北國の雪道齋、東仙道無三坊、

南海のうんりうけんと云者なり、源氏にはぢあるぶしあらば、とめて見よとくはうげんはき、はやとくあゆめと公時をたゝきたてゝぞ引立る、半だん計とおぼしき頃、公時しりいにどうとすはつてはやくたびれて是からは、一足もひかれぬぞ、汝等はさきへゆけ、四人は聞て腹をたて、かく迄及ぶかばねして、其惡口はすいさんなり、はやとくあゆめと追立る、公時笑てかたぐゝは四人にて一人を生取たるを手がらとす、いざさかためもそと計、手がらの程を見すべしと、云よりはやくいましめのなわ押切て飛上り、力足をふみならせば、無三坊うんりうけんすはこそと引かへし、逃行を、今しばらくとかい抓、二人一所に押ふせて、首ねち切て立上るを、坂西北國すきをみて、ゑたりやあふと引くんだり、やさしやとさうの手に、二人が首ほねかいつかみ、かうべを七つ八つてうゝと打合落花みちに打ひしぎ、二人を一所にくゝしつけ、ひけくる殿への音物ぞ、御持參あれとさし上げて、てきちんへなげ付れば、どつとくづれてのきにけり、それ餘なとごちんのせい、百き計一同に、あをりをけたてかゝるをみて、きん

ときいさんで面白しと、鐵棒を押取のべはらりゝと打立る、かゝる所へ暫くまてと割て入り、駒を扣て高聲に、そもゝ是は關白殿の仰をうけ、けんひいしの介頼光、是迄來て候ぞや、此おこりは右大將、道かぬ公の郎等、酒興のお禮をいたせしより、かくじんじやうに及ぶときく、王城まぢかき所といひ、かみをはゝかり此うへは、西ぢんはやく軍をやめ、互に野心あるまじと、ことばをつくしせいせらる、道かぬ公も頼光もよきに御うけましゝて双方いこん有まじと、血判を取かはし、やかたゝにかへらるゝ、天晴時のちんじやと貴賤上下おしなべて皆かんせぬもの社無かりけれ、

第三

きのふよりふる雪ながらけふたつはるの改めて其名もかはるあは雪を木ごとの花と打ながめ、中河のやどり成る、川邊にのぞむらうたいに、光ル源氏ははしちかく、御出有ててうあい、二人のびどうを左右に召、あたゝめ酒の色に出、興を催す小づゝみ

の、しらべさやけく此ちは、まれ人をうるなり雪に向へるこぼくは又花にあふ事安きなる其斷も様々と、浪にひいきし音曲は面白かりけるしだいなり、田子のうらはの蟹ならで雪をのせくる笹小船、ゆられゆらるゝなみの上、さすさはの手にけおされてゆきもうるみてふるものを、まつ白ひとはなんぞいの、おせやさつゝ松風に拍子をそへて程もなくこぐ共なしに行ふねをちんのもとにぞとめにける、高明ふしんに思召らんかんに立そひていかにそれなる女性は、あて成るかたか賤のめか、事のしさいは白雪の、ふるもいとはず舟の上、何しに是迄來りしぞ心へがたしと仰ける、女はよしを承り、こは情あるうへ人の、御尋の有がたさよ、身にし事は六條にてあかしと申流の女、ゑ方まいりの其爲に、ぎおんへまふで侍ふが、雪もはれ行夕日かげ是紅天の暮つかた、餘りけしきの面白く、立寄ながめし折からに、此御ちんの内にして、つゝみの音の聞ふれば、きかまほしさに川ぎしに立やすらひて侍るに思はずも此舟の、あるにまかせて竿さゝせ、是迄こがれ參りしと申ければ光ル君、見しは始と遊君の、今せんせいのさか

んなる、色に見とれてしばしやはとかふの事ものたまはず、やゝ程有て其かたは、あかしと云君なるよな、實もゑん有姿かなしる人に成り申さん其道より上りて、此ちんへ御こしあれ、酒ひとつまいらせん、それつぐはの介あないせよ、承て立所を、あかしとどめて忝なし、實一節の竹のはも所かはれば御慰、恐れおゝくはさふらへど、賤が伏やに御はこび、さゝ事いたし候はい、又一しほの興ならん、袖ふり合候も多生のゑんときく物を、見初し君をいかでかは、よそにのみ見てやみぬべきたそがれ過ぬ其内に、はやはや御入あれかしと詞の花も色取て、よにもわりなく申にぞ、源氏も今はうつり氣の心うかれてうつなく、さは思へ共誰有て、伴はん人もなし、殊に我は官おもく、位もたかき身を持て、さやうの所へ行ん事、世の人口もいかゞと、仰ければあかしの君、こはおろかなりそらたかきくもいの月のいかなれば細谷川にかけやどるらんとゑいきんなせば光ル君、はつと手を打げに誠、姿ににたる歌のさま、しほらしさよと宣ひて、谷川のみづのながれのきよければ、月もかけをばなどおしむべきと、そくせきの

御へんかに、あかし嬉しく打ゑみて、さもあらば是よりして、君諸共に浮船の、浪に竿さし參るべし、はやとくくと申にそげんじも今はたへかねて、しからばひそかに伴はんと、つくばから松兩人に、ばんじを仰ふくめられ、いそぎちんよりおり給ひ、心うきたつのり初に戀風浪風さつくと六條さしておしけるは、いさましかりけるしだいなり、花のみやこに名もたかき、六條と申はそも流の水をたへつゝ、初心の關を押破り、心を通す色里にてとうもかうけもおしなべてかよはぬ人はなかりけり、見るたひに又珍らしき、松竹のたてわたしたる春の門、男まじりにつくはねのちらちらおちて門松にかゝる折ふし貞光と、末たけ二人一ざにてかよふをよそに忍びがさ、はをり袴も風流に、あゆむ手持かしちくのつゑ、ぞうりにつたふうす雪は、花をふむかと興有てかしこの茶やにぞ入にける、ひかる源氏はゆうくとあかしの君と諸共に、ゆきのあかりのぬりあしだ、跡は二のじの一やうにふみそろへたる八もんじこゝ、やかしこを見物したゝすみ給へばしるべの茶や、夕風さむし暫くも、こなたへ御入あそばせと、御供申

せば人くは、あづまやさしてぞ入給ふ、時に女房出向ひ、御盃を取あへずさまぐもてなし奉る、光ル源氏ははしちかく、御出ありて行かへる、貴賤のていをひはんじて、ごらん慰おはします、其頃くるわに名のたかきすまうらと申せしは、あかしにまけぬごせんせい、此兩太夫を皆人の相生の松と口ずさみ及ぶも及ばざりけるも、したはぬもの社なかりけれ、あづまやの前にきてしばし見入て立いたり、あかし内よりさしのぞけば、それを便に須磨浦は、若あかし様此花の、いとうつくしきさをば、獨お詠めましますか、そともへさし、一枝を、たをるも花の習なり、下心あしきと思すなよ、御目にとまる事有共大めに見さんし玉はれかし、明石聞てよそがましや、先しばし御入あれ、こは忝なし去ながら、あい近よらば其花を、手折たまふや侍はん、若さもあらばいかゞして花守様へ申わけ、誰を頼みていたすべき、手のとゝかぬがましじやにと、光ル君の御顔を見つめてたゝすみいたりける、明石打ゑみ、落花らうせき、くるしからずと云事有、たおらせ給へ須磨浦様、こは淺々しき御おしへ、さ程の花を手折ても、

おしむ心はましまさずや、さもあれば社雪上り、こ
となふあらし夕風を、御いとひなくみへ侍ふ、此身
杯がさ計の、花を一もと持ならば、木の下蔭を宿と
して、あらし風にはあてまじに、御逢かたのそまつ
さと、けせう詞ももどかしくせめくる戀の浦浪の打
つけにこそ申けれ、あかしはせいてあひかたの、う
ときしたしき杯云事、よそにてなぞて知給はん、せ
ひ共是へと立いで、ひかふる袖にすまうらは、や
がて内にぞ入にける、もとよりげんじの御事は、か
うらいのはかせさへ、いこくにもなき御ようぼう、
ほめ奉るあまりにや、光ル君とあがめたる、御さう
がうにてましませば、名におふゆうくんつやくと、
見とれてこそはいたりけれ、兩君は左右により、盃
かずもかさなりて、明石はれんりすまうらは、ひよ
くの中と御たはぶれ、共に身請と宣へば、茶やも悦
びめでたしと、尙汲かはす盃に時をうつしておはし
ます、千ねんく三千年是はめでたきじゆめうとう
松に花さくはるはいつきたる事ぞと七つ子が、里の
おきなにとうぼうさく、又うら島が長めいも此あぢ
はひの徳とかやいざやめせくじゆめうとうかゝる

所へ禿の千鳥、あづまやを立出て、急あはてゝかへ
るとて、此箱に行あたりかしこへどうと打かへす、
商人大きにはらをたて、すかさずちどりを引とらへ
扱もそさうや此禿、ちにおとしたる品々は、何とな
にはのあしなく共、望にあらはあたふべしいかにい
かにと云ければ、ちどりはかほの色をかへ、さもしき
事な宣ひそと、ふりきる袖をはなさずして、しばし
時をぞうつしける、あづまや遙に是をみて、飛でい
でゝ中に入り、まづくせひにかんにんして、さの
みにな申されそ、幸かな我かたに、わけよき大じん
御出ある、かしこにきたり商せば、爲よきやうに取
持べし、はやとくくと云詞に、商人悦び大じんと
きけば床しやそこもとをよきにたのみ候ぞ、いざま
いらんと打つれて、かしこに立こへかの商人あづま
やの、みせさきにはこをおろして内よりもいとうつ
くしきにんぎやうを取出しつゝそれよりも既によう
いをなしにけり、げにや日にそひ月にまし里ははん
じやう君たちもなをせんせいはいやましに、したひ
くるわのはるはまづ初やくそくを松かざりとうどの
鳥と日の本の鳥の八こへの七草やひらきて、いはふ

くらのとにすへのとしこし十五日かよひくゞてきさ
らぎは、むすぶゑにし、神がきにいなりのいはふた
はつむまややよいめでたきちよつるのひなのいもせ
のまさな事ならべし、いその小がいにて、しほひがり
せんとこのうみなみのしらゆふうの花月はみなぬれ
ぎぬのころもがへさみだれ月はあやめぐさのきばゆ
かしき、かをとめて、のぼりかぶとのいさましや、
けふばかり社おゝなごのいゑになるとよみな月はひ
むろのいはひふみ月は、其たなばたや、うらぼんの、
日かずつもりて八さくのけふをたのものとさたすぎて
月見ぞ、わけて色里のけしきうきたつこよひなり、
きくのせつくや十三夜かた月見をばせぬものといみ
しは里のならひかや、しぐれもよほす神な月、いの
日のいはひゑびすかう、にはのしらぎく色かはりま
せにすゝめの、あしがたの、つきてやさしきしも月
の、八日はほたけそれよりも、しはすになればこと
おさめ、すゝ取もちゑ其ほかは、京とあづまはかは
れ共、かはらぬ色にまげたい、すへはめでたき千
ねんと、調に花をさかせしはいと興有てぞみへにけ
る、かうめいごきげん、うるはしく、それくゞと有

ければかずくゞのひきで物、はこびいでゝぞあたへ
ける、すまうらは商人が、始よりして下心、かよふ
めもとのうるさくて、背向にぞい直りける、男たま
らず懷中の、さすがをぬいて左の手の、小指をはた
と押切て、すまうら様へと投付る、源氏驚きこはい
かにと、宣ふこへにかの男、ひかる君を乞みて、つ
つとよりてかい抓、やがて表に引出し、すかさず取
て押ふせて既にあやうくみへける時、貞光末たけ欠
きたり、あみがさ取てかしこへすて、うへ成る男を
かい抓、曳やつと引かへす、高明は起上り、扱も兩
人有あはずは、あやうかるべき所なり、去ながらそ
の者は、只さしあたる當前の、戀のねたみとおぼへ
たり、せんぎもあらばかへつて皆、我身の爲あしけ
れば、たゞ其まゝに穩便に追はらへと仰ける、貞み
つ末たけきばをかみ、おのれは命冥加の者、我々が
手にかけてたすけかへせし事なけれど、場所あしけ
れば力なしと、目よりたかくさし上げ、十四五間投
出し、げんじをかこふて立たりける、時にかの者は
うかぶり、かなぐりすてゝ我は是、平太郎良門なり、
父將門が反逆の、跡をついて王城を、のつとらん

とはかれ共、あの高明が才ちにて、あまたの計略空く成る、けふげんじ此所へ、かよひくるよしきどう丸、しらせしゆへに身をやつし、討んとおもひ來りしに、すまうらが色にめで、ふかくを取て其上に、二人の者にさへられし、口惜さよと云まゝに、しこみの大だち引ぬいて打てかゝれば、兩人は、御けが有てはいかゞぞと、ひかるげんじを押かこへば、すはや喧嘩と町の者、我もくゝと棒提、大もんの戸をさしかためてのがすまじいと「取まくを、よしかどたちの、手きゝにて、いさごをあぐる大風の天をくらますごとくにて、一ほうへまくりたて、むらゝばつと追ちらし、御度社はむなく共、ついには本望達しつゝ、かさねて首をばかうめいとひとりごとにのゝしつて、大もんをおんどりこへ行がたしらずに、成行けり、適あやうき事共やと貴賤上下おしなべて皆かんせぬ者こそなかりけれ、

第四

其後、だいにには諸卿を召れ、光源氏の高明、六條

へ通ひつゝ、日夜色に身をゆだね、政事をかくのでう、一々に叡聞有、天子のこゆうたるべき身の、以の外の有様と、逆りん有つてださいふへ、はいるせよとの勅でうなり、人々はつと思へ共、綸言なれば力なく、承て殿上人、みふだをけづり高明を、ごんのそつににんせられ、つくしへさせん有けるはむざんなりける次第なり、去ほどに、髭黒の大將はむ月下旬のはるの雨、かすみよりふるこゝちしてのきの玉水しづかなる、けしきを友とたゞ獨つねの所に入給ひ、扱も日頃氣がゝりなる、高明思はするざいして、是にましたる珍重なし、我念願をたつすべき、時至ぬと悦て、火急にとげん企てをば、いかゞすべきとあんじつゝ、ていしやうを打ながめもくねんとしておはします、かゝる折ふし一めんにくろくもおおひ、風おちて、雷雨でん光頑くせんごを忘する計なり、ふしぎやくこうにこへ有て、こくうんの内より、さしもめなれぬ異形の者、金色の車にのり、ひろにはにあま下り、抑是は、市原の強童、きどう丸とは我事なり、我ま道の術に達し、佛法はめつをいのれ共世を覆す強將なし、とうじ御身より外、我

道に引入て、みかたとなさん器量なし、つゝみ給ふな心底に、大いなる望有り、それこそなたの幸ひなれ、はやとく／＼とすゝむれば、右大將につことゑみ、汝が云、詞の下より胸はれて、國家をしゆりに治ん事、さま／＼計略廻らせり、實面白し此うへは、教にまかせて行はん、きどう聞てさもあらば、此車をまいらせん、凡是に打のりて、大地を走り候共、人のめにみる事はなし、此車に打のりて、市原野へ出給へ、必まみへみつだんの、力をそへ申さんと、いふこへ計黒雲の、内にまぎれてうせにけり、大將跡を見おくりて、共にのりへし車どう、ひかれてゐるやよこしまのくらきこゝろぞはかなけれ、思ひあかしてつく／＼と、月のいるさもあかしの君共にうき名もこりすまの、其すまうらしのびぢの手に手をとりにて、やかたをいで、おちこち人のみるめをもいとふ心はつゆもなく、物にくるふも誰ゆへぞかのかたいとしわすられず初會になじむこひごひもうらなくかはす中となり、共に身請と有し時、うれしき又とあづまなるふじのたかねはしらね共、都の山は、中／＼にたぐへていはん色もなく思ふ折から

あへなくも、遠きつくしのあらいに、さすらひ給ふも此身ゆへと思ふに、はつときもきへて伏しづみたる、其日よりなげきかなしむおゝなの身、云にいはれぬくろかみの亂心にまよひ出かなたこなたと尋るになれにしわざの、くせとなり昔わすれぬ身ごしらへ小づま取あげしやんとしてなふいづち迄ひかる君、いざかへるさと手をとれば、あかしにつこと打ゑみてせうし人めも有物をあすこそ君のやくそくをわすれ給ふか是々と過しいなせの文取いだしふたりひとつにつどひよりおくよりはしへまきかへし又押かへしながめつゝいさめいさむる身も共に覺す狂氣と成けるは哀にも又いとやさし、明石はうはぎのすそをおりはをりにまなふ立すがた戀しきとのゝ、あゆみぶり、とふみこうふみふり出す其御姿みるやうの、ふせいにすまうらうれしげに吸付出す煙草あかし手に取顔と顔互に見合こはいかになふうつゝなやうつゝなき我がのけしきはかなやな爰はいづくぞ、戀の山、ふもとにつゞく市はらやおぼろのし水俤もやせやおはらやせれうの里、柳のいづゝ汲上て、ひさげの水とわきかへり諸共しぼる、ぬれごろもきせ

るにつれて立煙きへてむかしに、成けるは、戀しう
らめしかなしやとかこちわびたる有様はやるせなか
りしふせいなり、去ほどに、髭黒の大將は、くだん
の車にのり給へば、ふしぎやな此車、ゆるぎめぐり
て牛もなく、人もひかぬに市はらへとゝろき行こそ
あやしけれ、げにしきよくははかりなき、大千がい
の龍王を、岩やにこめし通力も、仙女がびにはまよ
ふにや道のかたへにやごとなき女の二人伏まろびか
なしむていを右大將見しよりまよふ色の道、雨をふ
くめるはくふよう、いとうつくしき容色に、忽魔術
の通力きへ、ぼうせんとして車より、おりたちそばへ
近付て、いか成る者ぞととひたまふ、時にすま浦我
君のましますかたへ打のせて、ゆかふと申かうれし
やとあかしも共に走りより車のながへに取付て、は
やとく／＼と申にぞ、髭黒きいて汝等は、狂氣の者
と見請たり、やうすをかたれと仰ける、兩女につこ
と打わらひわけを申せば足引の、八咫山吹の花の色
身は口なしのしづなれば何とかこたへ申べき、尤な
れ共聞からは、我身に叶ふ事ならば聊力と成べきに、
かたれ聞んと有ければ女心の淺はかにひかる君に

別れにしはじめ、おほりをかたりつゝめぐりあはせ
て、たび給へと泪に、くれてぞ申ける、色にめのな
き右大將、扱はげんじが思ひもの、今は汝等誰有て、
はごくむ者も有まじ、我住かたへまいるべし、よ
きにいたはり得さすべし、世になき者をしたはんよ
り、こなたへ來れと手を取て、車にのせんとし給ふ
所へ、さかた、會同丸公時、武者執行とてさがのに
出、此所へ來りしがつか／＼と欠よりて、やあ是は
大將、道包公にてましますか、此御有様は心へず、
承れば此間、ざせんのかかに口を閉、めんへきして
よをあかし、人にまみへ給はずと洛中の大評判、我
等式迄其きたに、みゝを穿て候に、かゝる色の御修
行、やあだいの所へまいりつゝ、拜見いたすさか
ためは、適冥加に叶ひしと手を束てぞ申ける、髭黒
兩女をつきのけて、夫本來は、一物もなし／＼のた
い、三がいむあんのしゆ行者に、極てざせんのか
もなく、一所不住の道理をば、車のめぐるにたとへ
たり、此しゆ行に立入ては、重惡の者なり共、邪は
へんじて正と成ル、去に依せんあく不二、邪正一如
と云事有、なんぢいかでしるべきや、おろかなりと

ぞ仰ける、公時聞て、高々と打笑て、いか様さやうあれば社、上を僞り民をしい、仁義の門を閉ふさぎ、かく放埒のふるまひ、よき御かつ手候よ、おゝ貴卿むほんの穩便を、とつく聞て罷有ル、よき所にてきがんをとげ、此さかためが武者しゆ行の、名利にかなひたいけいと、車をしつかとかい抓、頼光かたへ御供せん、さあゝ此まゝと引立れば、大將やらじと留給へど、さすが名を得し公時に、何かは以及ぶべき引立られてゆく時に、さんか頻にどうようし、きどう丸飛來て、ゑ、淺ましゝ右大將、女にたはぶれ給ひしゆへ、かゝるちんじの起きたり、そこのき給へと飛かゝり、雙方聞へし大ちからこと更にきどう丸、天ぐ道の術をゑて、ふしぎの力いやまして既に車を引もどす、公時笑て此さかたを、よの人間と思ふかや、父は赤龍母は又、とがくし山の山神なり、争か以及ばんと、ふんちがつてひく程に、左右のかいなの力すじ、さながらりうじやのあれ立て、こぼくをまとふいきほひにうごきわたつてすさまじく、ゑいゝと引く力に、車をぐはらりと引わつたり、きどう片わをふり上て、みちにせんと打てける、坂

田大だら引ぬいて、引はずし打付れば、きどうがめてをひぢぎはより、ずんと切てぞおとしける、弓手にて公時に、抓かゝるを打はらへば、弓手のかいなも切落され、ひるむ所を飛かゝり、やごへをかけて切たりける、すかさず首をはねおとし、髭黒いかにと見廻すに行方しらずに逃失けり、かたちもみへねば、公時踊てはがみをなし、せんなきやつにさへられて、大將のがせしむねんさよ、去ながら、よき我君へのみやげぞと、きどうが首を提て、御所をさしてぞかへりける、かの公時がいきほひは、こんがうざわうまりし天のあれたるけしきもかくやらんと貴賤上下安詫皆かんせぬ者社無鳧

第 伍

れんぼのやみぢくらけれど、名のみあかしは市原にて、おそろしきめをすまうらと、たがいにかほを見て合て、ぼうせんとしていたりしが、過しよりしていやましに君を戀しと思ふにぞ云ことのはのかすゝを狂きと人の云なして都にかへれあらざれば、柏木

やの長順は、高明るざいませば、憚る所あらずとて、大せい引ぐし兩くんを、こゝやかしこと尋しが、碯はたと行あひ手を打て、天のあたへ是也と、大きに悦び走り寄、二人をかごに打のせて六條さしてぞかへりける、六條の、色里には柏木やのすまうらあかし、又立かへる二どの花さくや此はるせんせいに、引なびけたる有様は、三千のゆうくんも、色を失ふ計なり、さればにやすまうらは、其頃くるわにさたしたる段と云大臣、けふやくそくの日なりとて、あげまきやどりぎ兩人の引舟女郎諸共にさき立あげやへ立こへて、もてなしの其爲に、興ある、事をたくみける、されば此大臣は、世上を深く忍ぶゆへ、男をざしきへきんせいと、かねてより聞へしが、今大門を御入と、茶やの女房告來ル、すま浦二人の禿かぶろをよび、よういせよと有ければ、關や蓬生立上り、既に柏子をすゝめける、そも此たいこと申はもろこしよりも事おこり物いはずして人をよびわしらずしてさうをつぐ徳はさまゝ有明の、つきぬまさごの、かすゝをすきとは、かぞへつくされぬ中に取ても、日の本や、天の岩戸の、いとかたく、色をはなれて

世をいとひとぢこもらせ給ひにし、神のむかしに此國のやみと成しをかなしみて八百萬の神様の岩戸のまへにて御なげきみかづら始給へばとうたふ所へ大臣の御出なりと、のり物をすくやかなりしおゝなごのざのまん中にかき入てみなゝかたへにのきにけり、かくあると聞し事ゆへすまうらはさらぬふせいのやうだいにうてやうたふよ曲だいこ、ていつくつくゝしつていゝ、つくゝゝゝしつてうてう其時大臣こしの戸をすこし、ひらき給へば忍ぶに、つまる氣もはれて一ざ夕日に、かいやけば女郎のおもて白ゝと見ゆるおもしろやとこしの戸をはつと押あけゆるぎ出上座にむすとぞ直らるゝ、是ぞ御げんの始めなるちはやふる神を出すもたいこの徳かくれし客を見る事も此とくなりと夕まぐれ既に、酒ゑんぞ始れり、さて大じんは、ゆふゝと、すまうらに打向ひ、某がていたらく、嘸げうゝしくおぼさんが、敵ぞんじを持たる身ではなし、かくるゝ事はなけれ共、皆御存ぞんじの我まゝもの、いつ此里へ來りても、氣がすくまねばのり物より、ないし五日も十日も、出ぬ事も候が、すだれのひまよりそんがんの、眞白なるを

見しよりも、中／＼今はたまれずかくの通りに、候ぞや、姿はあらび候へど、いまだ若木の花なれば行末ながく相生の松と竹との、中もよくなたり給へとしなだるゝ、すま浦はにつことゑみいと浅からぬ御おしへ、こなたにおろかは侍らはず、それ／＼とければ、つかへの女心へて、さも大いなる盃を、はなをかざりしだいにのせ持出て社直しけれ、大臣是に興をまし、それ始よと有ければ清は取上ひとつほし大臣にさしければ、引請三ばいさらりとほし、すまうらにさしけるを、一ッ上んと押戻す、さあらばおあいとあげ巻に、さす盃をあげ巻は、お手元みてとつきかへす、是はきうなりさもあらば、やどりぎ様へ大あいを、頼申すとさす所を、すまうらはあいに入り、其盃はまかひ有、せひに上んとすゝむれば、大臣こまりてやどりぎへ、さゝんと云て盃もち、ずんと立をすまうらは、盃をしつかと取、外へはやらじ是はまづひとつ上りて私にさゝせ玉へとおさふれば、ふり放さんとする所を、すまうらはもろ手をかけ、おそろく此六條にてすまうらと呼ばれ、是程の酒もりに、一ざの女郎、おめ／＼とつぶさせて、ざし

きにはたまれず、つよくしいば請てこぼすか、一口のふですつるか、盃を取おとすか、三ッに一ッはでう八まん、こよいにおいてはのまじ物をと片ひざたてゝぞひかへける大じん酒狂に、のぼりつめ、はなせ放さじのけのかじとあらそふちからに大盃、二ッにさつと引わつて、是しやう／＼のみだれ足よろ／＼とゑふ酒に所さだめぬ足もとを皆一同に笑こへしは、なりもしづまらず、清は立寄手を取て、さあ御やすみと大臣をとこの内にぞいれにける、かくてよもふけ、人静り、うしみつ過る頃おひに渡部の太郎綱、かのたいこの中よりも、押破て立いでて、たいにしこみしたちをはき、なりをしづめてここかしことくとやうすを伺ひて、一味の人をよぶこ鳥あいつのふへをぞ吹にける、忍びいたりし四天王小ぐそくかためはち巻し、てうちんをうしろにおひ、しめし置たるあいことば我も／＼と忍びいる、其時つな云やうは、かた／＼は一人づゝ、おち口をかため給へ、我討取候は、引たいこを打申さん、此ぎ尤／＼と、公時貞光末だけは、口／＼をさしかため、きびしく、まもり有ければもれておつべきやうはな

し、かくて渡べけらいをよび、やたてをいだし筆押取一つをぞ書たりける、謹て言上、かね／＼御尋の、平親王、將門が子、平太郎良門、既に年たけ名を改め、段の一條軒と申、姿をかへて六條の色里に罷有る、手立をめぐらし付出し候、よしかどは一人と申ながらかれは源家の御あだ、王道の大敵、殊にかたちも、貞かに存候はねば、一人にて討ん事、そこつの至とぞんじ、せうこの爲に、朋友を招きよせ候、尙明早天に、良門が首、實檢にそなへ奉るべく候條謹言、永延三年、三月、廿八日、渡部の綱、坂田の公時、臼井の貞光、浦部の、末たけと連判し、いさい云付頼光の御所をさしてぞつかはしける、じぶんはよしと四天王、打破て亂入る、有あふ者共めをさまし、すはや夜討とさはぎたち上を、下へとかへしける、よしかどかたにもかねてより、父將門がぐん法にて、我ににたる若者を、六人迄一やうにかけもはなさず召つれしが我おとらじとぬきつれて、つまり／＼に身をひそめはむかふ者をぞ待にける、あかしすまうら、兩くんは、かひ／＼しく出立て、平太郎よしかどは、ひかる君のあだなれば、四天王の

人／＼より、せひ／＼さきに打とらんもはや君への心中も、けふを限りと思ふにぞせきくる泪をとめかね共に、念ぶつとなへつゝ、明石かたにはやどりが、すまうらかたにはあげ巻、姉女郎を見つがんと、一やうに身じたくして、風と波との相詞いさみすゝんで待けるは、げにもゆゝしくみへにけり、先一ばんに大男、二かいの上より飛おりて、せんご左右を見廻して、かひ／＼しくみへけるを、すまうらはしごの下よりも、ぬき足してねらひより、はらふ刀にこしをきられ、のつけにかへす所を、すかさず首を打おとし、二のいきをほつとつき、手始よしと悦びてむね押さすつて夫よりも二かいのうへに切上つて、てきをうてやといさみつゝ、あかしははしごをかけのぼる、二ばんにすゝむ、大男、あかしにむすゝわたりあひ、火花をちらしてたゝかひける、あないはしらず火はきゆる、二かいの口をふみはづし、どうど下へぞおちたりける、すまうらはこへかけて、風といへ共こたへなし、それ餘すなと切立る、こは叶はじと引かへし二かいをさしてぞ逃上る、あげ巻つゝいて追のぼり二かいのうへにて切むすぶはゆゝ

しかりける次第なり、第三ばんにおくよりも、しやうじからかみ引はづし、しんどうして打立るすまうら得たりと、はせ合てしばし、たゝかひたりけるがたち打おとされ、叶はじと、ざしきの柱に飛つくを、餘さじと胴切に、こしよりしもは下へおちかみはうへにぞとゝまりける、あかしあげ巻二かいのてき、討取下へ缺おるゝ、すまうらてきかとあやまつて、あかしに切てかゝりける、二打三打てうゝゝゝうつたち風にはつゝとかほる、とめ木はたいならずらんじやくんじてよもにみちてき共更に、覺ねば、すまうら風ととひければ、あかし波とぞこたへける、其御こへはあかし様、すまうら様かこはいかに、さつてもあぶなしゝと、互にたちをそつとひき、御けがもなく候やと、云ことのはにやどりきは、てうしを求め缺來り御いきつぎにまづひとつと、立ならんで汲かはすつめたき酒のあぢはひも、さながらかんののごとなり始てひとり切る時は、むね打さはぎふるひしが、なれては安き物よなふ、いざひと勝負といさみつゝ切ていらんとす所へ、四番のたびの大男、二かいの上より切ておるゝを、あかしあげ

卷待請て二かいをさしてぞ切上る、たてはさんで、左右より切付れば、兩の手てもなく切おとされ、ただよふ所を打倒し、首中に打おとす、障子にみなぎりながら、血からくれないに水くゝるたつたの川のいにしへも、か程はあらじとみへにけり、坂田の公時始より、見物していたりしが、物くしやたち打は、めんどうなりと其渡り、二尺餘りのまさかりにて、こもると見へしかくれがを、むむ三に打破る、のこる二人の者共は、恐れわなゝき逃出るを、おこしもたてず打すへて、落花みちんになしにけり、扱よしかどはいかにやと、こゝやかしことさがしつゝ、二かいをさしてぞかり立る、よしかど今は、叶はじと、やねづたひに逃んとす、公時すかさず追つゝき、飛かゝつてくみとむる、良門本より大力、忍いやゝゝともみあひしが、こうばいけはしきいたやのうへ、引組ながらのきばより、大路へどうとおちけるはあやうかりける次第なり、すかさず兩人、起上り、ぬき合切むすびひじゆつをつくしてたゝかひける、よししかどいかゝしたりけん、びんはづれを切付られ、眼くらみてたいよふを、すきをあらせず公時、首中

に打おとす、むくろをば四人の女郎、たゞみかけてうつたちは、のはきの風に白き尾花のおきてはふすにことならず、すだ／＼にぞ切たりける、渡邊やがて馳來り、朝敵即時の誅ばつは、珍重めでたし／＼と、四人の女郎召つれて、みたちをさしてぞあがりける、天晴けなげのはたらきやと貴賤上下安詫皆か
んせぬ者社無かりけれ

第六

「其後、たんばの國笹山に、髭黒の右大將道包公、大軍を以たてごもる、是に依頼光、ついとうしを蒙りて、四天王を引ぐし、ていへいすぐつて三萬よき、大手よりよせ給へば、同國更井の城主、平井の保正搦手より、す萬のせいにて押取卷時のこへをぞ上にける、城の内にも、かねてごしたる事なれば同く時をぞ合ける、其時よせての大將、駒しづ／＼とあゆませ出、夫我國に有ながら、王命いちよくの輩を、誅ばつせよとのせんじをうけ、たゞのかづさの介、源の頼光、平いの太夫、藤原の保正、罷向て有ぞかし、はや／＼

出てかうさんあれと、のたまふこへを聞よりも、右大將道包、やぐらに上りざい取て、あれ追はらへと有ければ、兩ちん互に入亂火花をちらして戦ける、こゝにかたきのちん中より、さつた山の惡太郎、しが谷の八龍丸、鐵棒をふりまはし、あたる所を幸にはらり／＼と打立る、うすいの貞光、うらべの末竹、此由を遙にみて、いさぎよき働かな、手取にせんと欠出る、八龍さつた是をみて、適のぞむ所ぞと、鐵棒を押取のべ、みちんになれとうつ所を、かいはずしむずと取、少も更に働かせず、二人の者ははがみをなし、ゑいや／＼と引所を、一／＼にけたをして、たかてこてにいましめ、けふの分捕、しすましたりと悦びてみかたのちんへぞ引にける、髭黒今は是迄と、長刀かいこみ出給ふを、ぐんせいすはやと取まくを、髭黒長刀押取のべはらり／＼となぎたふす、貞光末たけ、是をみて、あまさじと左右より、押ならべてむすつくむ、髭黒本より大力ぢから、二人を手もなく取てふせ、首ねぢきらんとし給ふとき、平いの保正搦手より、城中へ忍び入り、うしろより欠來て、たぶさを取て引かへす、兩人すかさず起上つて

かしこへやがて打たふし、生取引立それよりも、はや打入れとげぢなせば、いさみすゝんでぐん兵共、城中へ切て入りなんなく城をぞのつ取ける、頼光喜悅限りなく、勝時作て夫よりも、髭黒を引立て都をさしてぞのぼりける、だいらには光源氏の御事を、諸卿こぞつて訴訟ある、是に依召かへされ、官位本領、本のごとくと有ければ、高明は有がたく、はつと冠を地に付て、御悦びは限りなし、かゝる所に頼光保正、右大將道包を、たかてこてにいゝしめて、御しらすに引すへー／＼にそうもん有る、引さがつて四天王禮ぎたいしく相つめける、内よりのせんじには、道包がぶ道の段、評するにも及ばねば、日向のあがたへながすべし、此度の忠賞に、頼光にはかはちの國、保正には、たんばの國さゝ山を、更井さらの庄に相そへて給はる也、四天王の者共、いづれもけんじやう給はれば有がたし／＼とだいをたいしゆつなし給ふ千秋萬歳めでたしとて貴賤上下安詫皆仰がぬ者社なかりけれ

定家

第一

扱も、其後、我日の本に光りそふ、神八重垣の御歌より、みもすそ川の御ながれ、賤山がつも心をよせ、和歌におさまる此國の久しき、世々こそめてたけれ、爰に、ごとばの院と申奉るは、和歌に御身を御ゆたね、七人の歌人をゑらひ、新古今をせんせらる、中にも藤原の黄門定家は、わかんの才にくらからず、手跡は今に世の人の、ていかやうとてまなひける、かどうのめいてつなりければ、たうぎんの御歌の、御しはんを蒙りてけんだいに歌書を置、しづかになをり座し給ふ、主上をはじめ奉り、后宮の美夫人、近習ちくわの公卿達、ぶんだいに書をひかへ、かふりのこじをかたぶけて、謹て聞給ふ中にも、しよくし内親王と申奉るは、後白河の院、第三の皇女にて、一年加茂の、いつきの宮に立せ給ひしが、かんのりふじんやうきひも、おもてをそむく許なり、無双の容色成ければ、心をかけしあた人の、叶はぬしゆく

ゐの口のさが、色にうき名を立ければ、御歸りおわしまし、此席につらなりて、歌書によねんをほうじつ、打かたふひてぞヲロシ、おわします、既に定家は書をひろげ、それと歌のよみすがた、さまゝならひありそ海、はまのまさごの數／＼に　ことの葉つきぬ事ながら、定家が一字の題春は先、かすみ、うぐひす梅柳、イロ地わらびさくらにも、やなしきゝす、ひばりになく蛙、すみれ山吹つゝし藤、夏にもなれば、あふひ草、まがきに白き卯の花や、はつ郭公五月雨に、あやめもわかぬ夕顔や、かやり火螢くいな蟬、いづみ扇に、秋來ては、おぎ萩、露にらんすゝき、月蘆雁に鹿や蟲、うづら鴨桐ふゆの季は、霜やあられに薄氷、みぞれや雪にかもたかの、埋火ふすましゐかけひ、すみかまなどの品／＼を、姿やさしくたけ高く、心を深くあはれにも、またおもしろく、さくい有、詞に花をさかせつゝ、よみあふする事此道の、かんおうなるよしせんてつの、仰おかれし所なり、猶おくふかき心をば、重てしやくし候はんと、辨舌、きよくのべ給へば、をの／＼、かんしん、淺からず、しづかに、席を本三重立給ふ、義式

のていこそヲロシ「ゆゝしけれ、それヲロシ」よりも定家は御次さして出給ふ、野わけのかた立出て、御袖を引とゞめ、につこと笑ひ此ほどの、心つくしの御返事、やうく取て参りたり、よろこばせ給ふべし、御吉事にて侍らふと、玉づさをさし出す、ていかおぼへずおしいたいき、あたりに人もあらざれば、忍びやかに見給ふに、中々、詞にあまりつゝ、あすの夜かならず大内の、はせのみだふに、さんけいし、わに口をならすべし、かならず是をあいづにて、しのび給へとかき給ふ、ていかうれしきかたしけなさ、ひとへに是はそのかたの、御取持による所、御禮申に言葉なし、かの方さまの御前は、只よき様に夕暮の、くれのあいづを待ぞかし、かならず首尾のたがわぬやうに、たのみ入候ぞや、野わけ承りそのしゆびはみづからに、御まかせ候べし、去ながら大内に、人多き事なれば、人たがひもや覺つかなし、いかいと申上ければ、定家は聞し召、然らばかくよ年もへぬ、いのる契りははつせ山と、かみの句を姫宮の、吟じさせ給ふべし、おのへのかねのよその夕暮と、下の句をつけ申さん、此歌かつてしる人なし、よく

よく此事姫宮へ、仰あげられ候へと、云かはしつゝ、立わかれ、ひとりほゝゑみそゝる事、つゝみ給へど悦ひの、色外に見る人も、三重みたちをさしてぞヲロシ「歸らるゝ、其比又、きんりほくめんの侍に、平の左近時國とて、好色しやしの悪しやうもの、るいにしたがふ郎等に、岩波龍左衛門なりたか、雲分飛龍之助早風とて、おとらぬ曲者兩人を、つねに前へよび出し、酒ゑんをなしてあそびしが、いつもこのめる大盃、すはいかさねてさしひかへ、今宵は我に大き成、仕合ついてありけるぞ、なんぢらもしるごとく、いつぞや加茂のくらべ馬、内親王にも御出有、御らんありける御こしの、みす心あり山おろし、さつとふきあげほのかにも、見ゑさせ給ふ御ようしよく、是はと思ひそめしより、袖のしぐれのたへまなく、手つぎをもとめいづかたへも、しのび御出有ならば、かならずしらせゑさせよと、しめし置たる方よりも、こよひ大りに立給ふ、はせのみだうへ御忍び、さんけい有よしつげ来る、我く三人心を合せ、忍び待うけくどくべし、もしも承引なきならば、やにわに引立来るべし、かまへてそのふん心得て、用

意せよと申つけ、今宵ぞおもふ新枕、われ一代の妻
さだめ、ちんせんまふけまつべしと、いわひことふ
きそれよりも、二人の者と諸共に、三重やがて用意を
ナロシしたりける、眞しも春の花盛、皆白たへに梅
ならで、やみはあやなしさくら花、本地すがたまばゆ
く詠め過、空にちらく、ちゝめける、ほしのかげ
さへ心うく、局の野わけ御供にて、今宵ぞ君に大内
の、はせのみだうへ参りつゝ、今のゑにしの戀のし
ゆび、ねんごろに御きせい有、あいづのわに口てう
てうと、うたせ給へばうしろより、物をもいはずい
だきつく、局さてわとさし心得、とあるかたへに立
忍ぶ、しんわうははづかしく、むねとゝろきてとり
あへず、カルしめしあわせし上の句を、としもへぬ、
いのる契りははつせ山、と詠じ給へど此男、とかふ
のいらへせざりけり、こはそも戀の人たがひと、袖
ふりはなち逃げ給ふを、なさけなしとてすがりつく、
猶ふりはなちにげたまふを、かたへに忍びし二人の
郎等、一度にとび出姫君を、むたいにいだきとゝむ
れば、見へかくれに参りたる、定家のかうけん、大
江の左衛門忠重、つゝと出て時國が、そくびをつか

んで引たふし、すかさずうへのりかゝる、雲分か
けよりうへ成る男を、引かへさんとする所を、やさ
しきものゝしわざやと、上帶つかんで引よせて、刀
を二人がくびにあて、扱おのれらはなにものぞ、し
さいをかたれとおしつくる、龍左衛門聲を上げ、や
やそれこそは我らがしう、今一人はわがほうゆう、
しさい有事なれば、其名をあかさす様子もいはず、
只そのまゝにおんびんに、二人共にこなたへわたせ、
さなくば又此方にも、姫宮をがいするぞと、刀をむ
ねにおしあつる、男聞てはがみをなし、ゑゝわれ幼
少のときよりも、てきたいなせしやつばらを、一人
としてそれがしが、たすけかへせし事なけれど、無
念ながらもおのればら、命をたすけかへすべし、姫
宮をこなたへわたせと、二人を取て引立て、兩方一
所に近づきより、互に詞をかけかわし、双方へ取返
し、立のかんとする所を、三人ぬきつれ打てかゝる、
心得たりとうけながし、ハヤ三重ひじゆつとつくして
ナロシたゝかひける、時國今はかなはじと、取てか
へし逃たりけり、男いづくへのがさんと、二人を左
右へ切拂、追かけ行を兩人は、太刀をなげすてむず

とくむ、元より男大力、二人がかいなをかいつかみ、二三十へんふり廻し、つかみしかいなをふりはなせば、まなこくらみてたいよふを、けたおし一々繩をかけ、早御出と云ければ、定家姫宮御悦び、互にちよもの御ちきり、仰かわされそれよりも、大江の左衛門たいしげが、あく人ばらをば生捕候、爰をばわれに御まかせ、局おんとも申されよと、姫宮くわんかうなしまいらせ、今ははや是迄と、二人の者をかいつかみ、中にさしあげやぶゑをかけ、築地のそとへなげ出し、おゝけつこうなる有様と、からくと打笑ひ、定家卿の御供して、やかたをさしてかへりける、大江のさへもんたいしげを、あつばれかう成はたらきと、貴賤上下押なへて、皆かんせぬものこそなかりけれ

第二

其後、平の左近時國は、ほうくしゆく所に迹かへり、二人の者はいかゞぞや、もし此事のろけんせば、身の上いかゞ成べしと、あんじわづらふ所へ、二

人の郎等なさけなく、したゝかにいましめられ、御前にかしこまる、時國おどろきかけ寄て、なわおしほどき小聲になり、様子をいかにとひければ、二人の者承り、くはしくかたりかくの段、めんぼくなふこそ候へと、さしうつふひてぞ居たりける、時國聞て、むねんに思ふはことほりなり、我もむねんに思へ共、此身を忍ふ事なれば、おんびんにしくはなし、主のためにかゝれる繩、まつたく恥にてはぢならず、扱又くだんの男めはいか成ものにて有哉覽あるやらん、さてしたゝなる大力や、つかまれたりしかたばねの、今にいたむと云ければ、飛龍之助申やう、姫宮出させ給ひし時、大江のさへもん忠重が、あく人共をば生捕たり、御かへりましませと、申あげ候なり、正しくは藤原の、ていかいこうけんたいしげなり、しさい有てそれかしが、うけたまはり及びしなり、時國聞て、さては藤原の定家と、内しんわうわけ有て、みだうにて忍びあひたるな、ゑゝはら立やしよせんたい、戀の敵は定家なり、何とぞ手だてをめぐらして、定家をなき身となし、夜前のむねんをさんじつゝ、又姫宮をもうばひとり、思ひのまゝに契る

べし、いかいあらんと云ければ、龍左衛門しあんして、くつきやう一のけいりやくを、思ひ出し候と、ひそかにさゝやき云ければ、時國聞て打悦び、日本一の手だてぞと、飛龍之助にも云きかせ、誰くといはんより、龍左衛門が弟の、岩波彌七は、忍びをゑしと聞て有、ひそかにたのみゑさせよかし、さもあらば其方をば、よきに取たてゑさすべし、いかにいかにと云ければ、龍左衛門承り、とかくは君の御ためなり、それがしよきにはからひて、本望とけさせ申べしと、互にしめしあわせつゝ、時國わそれよりも、三重攝政殿へと参りける、ヲロシ去ほとに其比又、せつしやうよしつね卿と申奉るは、たぐひなかりし歌人にて、さしも名高きていかにも、手を置給ふ御方なり、有時みなみおもてのみすたかく、ていしやうを打なかめ、歌をあんしておはします、かゝる所へ時國は、攝政つねくむつましく、和歌の御會に召れつゝ、内外へだてずさんせしゆへ、御前にまかり出、おちゑんにかしこまる、せつしやうよしつね御覽じて、珍らしや時國、何か世上にかわりたる、事もや有とおたづねある、時國うけたまはり、さればさま

さまちんせつの事御ざあると、あらゆるうき世のまसान事、いとめづらかに、咄しなし、興をもよほす折からに、ゑんのしたより鍵引さげ、大の男飛て出、攝政殿をつく所を、時國すかさずむんずとくみ、ろうせき有と呼はれば、御内の侍數十人、我もくとおりかさなり、高手こてにいましめて、御前に引すゆる、御家臣、今河將監はるかた、たくみありとは露しらで、あつはれ時國ましますは、ゆゑしき君の御大事、さてもけなげの御はたらき、何をもつてか此おんを、ほどこし申候はんと、悦ふ事は限りなし、扱將監、めしうとに打むかひ、おのれいか成宿意によつて、君をうかひ申せしぞ、まつすぐに申べしと、はつたとにらんで申ける、かの男承り、さん候それがしは、ていかきやうへつねくに、御出入仕る、早川源太と申て、家まづしき浪人者、定家ひそかに御めし有、當時歌道におゐてはそも、我にうへこす者なきに、やゝもすれば攝政に、よみおとるこそはいなけれ、何とそ日比の念比に、我に命をゑさせつゝ、攝政をうしなひなば、しそんは遊々しく、取立て得させんと、わりなく頼ませ給ふゆへ、かく

ぼうじやくのふるまひ、おそれ入候と、時國と顔見合、誠しやかにそ申ける、人々おどろき、とかふの事も宣はず、時國おまへにすゝみ出、誰くとも歌の道、しうじぬものは候はねど、かゝるよこしまふるまふ事、前代未聞の所なり、扱此段を、かみへうかいひ給ひなば、當きんの御歌の、御師判にて候へば、事おんびんに成ぬべし、然らばのちく御身のうへ、ゆゝしきあだにて候へば、そうもんなく此うへは、うつ手をむけられ候べし、幸かなやそれしが、参りあひし事なれば、一方の責口をば、仰蒙り候はんと謹でそ申ける、攝政よしつね聞し召、其義にて有ならば、ごへんを頼み申とて、御勢百きそへらるゝ、しすましたりと時國は、手勢合て二百よき、定家やかたにおしよせて、二重三重に、おつとりまきハヤ三重時の聲をそ「上にける、定家きやうのやかたは、思ひよらざる事なれば、うへを下へとかへしける、され共こうけん、大江の左衛門忠重は、ものゝぐせよと下知をなし、かしこに立出大音あけ、何者なれば此やかたへ、おしよせて有けるぞ、其名をなのれと呼はつたり、時國駒をかけ出し、平の左

近時國が、ちよくめいを蒙て、罷向て有ぞかし、ちんじやうにはらをきれ、かいしやくせんと呼はりける、忠重きいて打笑ひ、何時國とや聞ふれぬ、北めんごときのしきじのれい、さつするに己めが、筋なきしゆくゐに定家を、ざんせしにうたがひなし、あれ打ちらせと下知なせば、兩方互に入みたれ、ハヤ三重軍は花をそ「ちらしける、軍なかばの事なるに、時國が方よりも、熊山五郎と名乗て出、さんく切たて、四方へはつとおつちらす、定家の方より、ふちなわめのよろひきて、つかまぎ七郎と名乗て、大太刀まつかうにさしかざし、はしりかゝつて打つ太刀を、くま山さらりと請ながし、すそをはらへばおどりこへ、おがみ打にてうど切る、むさんやなくま山は、二つに成てうせにけり、七郎は打笑ひ、悦びいらんとせし所を、五郎がいとこ、木がらし平太平六、つゝと來て七郎が、もろすねをなぎければ、こはむねんとたをるゝを、平六やがて七郎が、首中に打おとし、定家の御内に、我と思はん者あらば、出て勝負をけつせよと、大音じやうと呼はつたり、ただしげ今は叶はじと、定家卿をば先立て、ひそにか

おとし奉り、心やすしと切て出、定家が後見に、大江の左衛門忠重なり、あまさじと打てかゝる、平太平六是をみて、ねがふ所の幸と、忠重を引つゝみハハ三重爰をせんとぞ「戦ひける、され共たゝしげ事共せず平太がまつかう、唐竹わりにてうど切る、平六是はとつゝと入り、おしならべむずとくむ、忠重が是をみて、やさしやいとまとらせんと、よろひの上帶かいつかみ、ゑいやつとなげゝれば、みちんに成てうせにけり、岩浪雲分兩人は、過つるいこんをさんせんと、ゑものゝを引さげて、忠重に打てかゝる、たゝしげがきつと見て、いざ參らんと聲をかけ、そばにありける大木を、曳ひやつと引たふし、無二無三に打たつれば、岩波雲分叶はじと、取てかへし逆行を、いづく迄かのがさんとハハ三重こくうむりやうに「追かくる、岩波雲分兩人は、とある石にけしとんで、二人一所にたふるゝを、おこしも立ずひた打に、力にまかせて打ければ、みちんに成てぞうせにける、時國大きにはがみをなし、あれあますなうちとれと、しきつて下知をなしければ、大勢一度に打てかゝる、然所へ、位官たゝしき公卿の、さいはひ白あわはま

せつゝ、しさい有とて割て入り、双方をおしわけて、是は五條の三位かりうなり、いさいの事を承り、これ迄來て有ぞかし、定家とはのがれぬ我、攝政殿よりしばしが内、申預り證人とし、御家人今川將監、はるかたを同道と、高聲にのたまへば、春方馬よりとびおりて、兩陣の中に入り、上意のおもむき相のぶる、春方も忠重も、いさむ人數をおしとゝめ、式禮なしてそれよりも、互にちんをぞ引たりける、あつはれ時のちんじやとて、きせん上下おしなへて、皆かんせぬ、者こそなかりけれ

第三

其後、姫宮はひとりふせやの床の内、さひしき枕をとふ月も、あわれと思へ、さりし夜の、イロ地はせのみだうのあふせをも、花のあらしや月の雲、チャクリ立へたでつゝいたづらに、カールなるとの沖の濱ちどり、今わなくねを忍びかね、一首の歌に玉の緒の、たゆるチャクリ許の玉つさに、イロ地ほのみしまゝのひとよきり、うきふししれど指そへて、さひしさまさ

るさよしまを、御前に召れつゝ、ひそかに仰ふくめられ、ふかくもいとふ人のさが、つゝむ心の小倉山、三重しぐれのちんへぞ「おくらるゝ、いたはしや定家卿、思はぬちんじにあいそめ川、かりう卿の、はからひにて、しばらく御身もつゝかなく、病氣と號し引こもり、はや姫君にあふ瀬をは、今はおたへのほしちかき、しぐれのちんに姫宮ふり、おくり給ひしひとよきり、御しきしを手につれて、玉の緒よ、たへなばたへねとくりかへし、またおしかへしひたすらに、ぎんじなげかせ給ひける、御つかひに参りたる、小夜嶋勾當手をつねか、戀はわりなき物なれば、實どうりなる御なげき、何がし琴を仕らん、御氣はらしにあなたより、しんせられたる有竹を、琴にあはさせ御なぐさみ、いかゝと申上げれば、定家卿聞し召、いしくも申せし勾當な、さあらは一曲催して、少まきれんそれゝと、御床に侍ひける、にしきの袋の内よりも、一よきりを取り出し、音もすみやかにふき給へば、小夜嶋琴をしらへつゝ、三重しづしなくさみ上給ひける、笠をめせゝ都のとのよ、さがはぬれとこ、芳野は色よ、それゝ時雨がふりてゐる、

戀の山がら濡た「チャクリ」すがたにさしかけさせかけ、君のかへもんもみちのながへ、笠に木の葉のとまりて戀の、さし笠手もたゆく、戀にはよわけ、ないしんわう、うき名をまゝと一筋に、かいやりなげの花小袖、ふりながゝとほそつくり、チャクリ男色見せてつかみさし、むらさきぼうしこし羽織、二つ重ねの一つまへ、供のおのこは野わけのかた、うかれて出る取なりは、いつ見ならひてはしたなく、あづま言葉に此所、都にさしも名の高き、小倉の山の、しぐれのちん、しばらくやうすをうかいひて、あない致し候はんと、とあるまがきに立そふて、しばし「チャクリ」たゝすみ給ひける、かくて糸竹ことおわり、ふりみふらずみ定めなき、しぐれの雲のたへまより、ほのかに月のかげさして、誰とはしらす少人の、ちんのあたりに見へければ、定家あやしく思し召、さしのぞき見給ふに、あてやかなりしやうしよくは、ぎんかんはんりの秋の月、すかたをねえんで、五更のきりにやしつむべき、定家覺へず御よそほひ、何にたとへんもろこしの、そうのかうしのいつくしく、びしかゝ色や、きくにゑむ、周のちどうの其かほばせ、

漢のみかどのそてをたち、けんび少年、はちすにまがふりくろうや、歌もたへなるゑんねん、女にて、見まくほしきと、むらさき式部のかゝれけん、光る源氏のおさなかほ、つばめる花に、匂ひふくみてうつくしと、たとへたりけんなりひらの、ちごのさかりと申共、カ、ル是にはいかてまさるべきと、ほめさせ給へは少人は、こはかたじけなき御縦、折境立よるしぐれのゑん、ゆるさせ給はゝそのちんへ、すいさんいたし只今の、御禮申あげたきと、仰ければ定家卿、げに／＼一じゆ一河も皆、たしやうのゑんと承る、時雨もはる、軒端の月、何かはくるしふ侍らはん、こなたへ御入候へと、はぎの戸をおしひらき、出させ給へば姫宮は、羽織こし物なげ捨て、定家きやうにいただきつき、人の心を忍ふ山、かくすがたをも引かへて、女の身のはしたなく、はる／＼道をしのぎつゝ、是迄參る心さし、いか許なるしんじつと、おほし召れ候へと、につこと笑ひましますは、定家ゆめの心地して、いづわりのなき世なりせは神な月、たが誠より時雨そめけん、と詠じ給ひて御手を取、打つれちんへぞ上らるゝ、去ほどに野わけは、てう

しさかづき持出て、こよひぞ初の長枕、長さちぎり御ことぶき、御取あげましますと、姫宮に上ければ、姫宮盃御はじめ、ていかきやうへさし給へは、押いたゝきて三ごんくみ、姫宮に參らせて、さいつさゝれつ思ふが中、よそにイロチクリもらさぬ御盃、ねたむ心の色ほかに、野分のかたは定家の、ひかへまします盃を、中にてうばい、おしいたいき、御まへを立ければ、人／＼御目を見合て、につこと笑はせ給ひける、御下心ぞはつかしき、姫宮定家によりそふて、かすの見へける小色紙の、イロ地うるわしかりける御すみ色、殿ににせたるやさしさよ、定家これは此人／＼、一代一首の名歌を、ゑらみたるにて候なり、御なぐさみにみ心に、覺し召れんそのたけを、判をあそばしおわしませ、姫みやいづれも吟じつゝ、及ばぬことに、侍れ共、是こそ花實そうたいの、めでたき歌共申べしと、しばしかんじてこはいかに、みづからが君思ふ、忍ふ心にたへかねし、此玉の緒のとうさをば、此中におかれん事、はゝかり有こと仰ける、ていかきやう聞し召、されば此歌みこゝろの、見ればみるほどふかふして、あはれいやまし覺へし

ゆへ、これ後の世の忍ぶこひ、詠する手本なるべきと、かきいれ申候と、互に道ある歌の時宜、やさしかりける事共なり、されば此御しきしを、小倉しきしと申つゝ、今の世ゆゝしきてうほうにて、百人一首と申せしも、是をあつめしさうしなり、定家卿は姫宮に、花めづらしき色の床、あだ夜をふかしせんなしと、袖引つれてねやの内、あかぬ契りの御むつ事、つきぬ、ゑにしぞわりなけれ、あわぬ夜を、あふ夜の數と思ふ共さてもやかなしかるへきに、戀をしらざるかねつきの、はや明がたを音づれて、なみだはらくとりみだし、打かさねたるきぬゝを、引はなちつゝ人々は、又のよる瀬を云かはし、なみだをそふるたもとより、玉づさはと、おちければ、姫宮あやしくひろひとり、燈にひらき見給ふに、いはんかたなふかきくどき、ちつかに及ぶにし木々を、數ならずとて捨てらるゝは、あまりといへばなさけなし、色あるいなせなきならば、とても君ゆへ死する身を、うらみのふちにしづみつゝ、一念の惡鬼と成、追付おもひしらせんと、ゆびくい切てあけにそめ、おくりたりける玉づさなり、姫宮はおそろしく、

是見給へとのたまへば、定家は御覽じて、此上はせひもなし、何をかかくし申べし、御供に参りたる、野わけたびゝそれがしに、ふみをつかはし候へ共、終に返事もせざりしが、又恨ての此ふみを、見るも中ゝいまはしと、ともにさしあてやき給へば、たちまちめう火もへ出て、煙の内にふしぎやな、色青さめたる女性のすゝゝと立顯れて、あらうらめしや君こふる、涙のふちわさうかいも、たとへばなをも淺間山、くゆるけふりの思ひをば、しらせ申せし玉章を、いかで煙となし給ふ、うらめしや恨めしと、いかれるけしきに定家の、御そばに寄けるを、枕に有し御太刀にて、拂ひ給へばそのすがた、たちまちきへて御つぎにて、わつとさけぶこゑぞせる、姫宮ていか諸共に、おどろきたち出御覽あれば、野分の方はあけにそみ、夢打さましこはいかにと、とほうにくれてぞいたりける、姫宮はおそろしや、主の思ひをねとらんとて、人の色をもせいせん身の、うしろくらき心ゆへ、忽むくふ主のばち、今よりしては我まへに、出る事はかなふまじ、かんだうなりといからるゝ、野わけの方は聞まいらせ、こはなさ

けなし姫宮さま、今宵のふみの御はら立、それゆへにこそふしたりし、みつからをやいばにかけ、またあきたらで御かんど、我人まよふ戀の山、高きひくきも替りなし、御身のうへをも思し召、ふびんところはあるべきに、つれなしやうらめしやと、聲をあげてそなきにける、定家はあい立、かゝるうへ

は何事も、論じて今はせんもなし、其手をおひしはしさい有、まつたくもつて姫宮の、あそばしたるにてあらざるなり、追つてやうすをあかすべし、まづ大内へは叶ふまじ、是よりゆかりのかたに行、いれうをくはへ候べし、姫宮の御まへをば、よきに取なし申さんと、さまゝいさめそれよりも、下部少々さしそへられ、乗物に忍ばせて、ゆかりの方へぞ、送られける、かゝる所に女房たち、あまた打つれ参りつゝ、御約束のときたがひ、くはんぎよならせましまさねば、御首尾のほど覺つがなく、忍び参りて候なり、はや御出と申にぞ、名残の袖を引わかれ、宮はかちゝをくわんかうある、定家は見おくりて、さらはゝの御聲も、次第にとをくよこ雲の、立歸りて露しぐれ、時雨のちに只ひとり、さびしきね

やのうつり香を、かこちわひてぞあかさされる、まことにわりなき妹背やとて、貴賤上下おしなべて、皆かんせぬ、ものこそなかりけれ

第四

そのうち、五條の三位家隆卿、ひそかにさがへ、御こし有、ていかにたいめんましゝて、何とそ貴卿と攝政の、御中をわだんなし、事内々にておさめんと、過し一戦大内へ、ふかくおんみつなす所に、平の左近時國、さへぎつてそうもんし、事はまつて早討てに、時國是へよするなり、時國がふるまひ、何共がてん参らねば、爰にさまよひ討死して、人口にかゝらんより、一まづ爰を御立のき、時節と待て、とがなきむね、申わけ時國を、八つさきにもはからふべし、幸御兄じやくれんほうし、するがの國、ふじ川にましますば、是迄忍び御下り、一左右を待給へ、それがし折を見合て、追つけ御左右仕らん、はやゝ忠重御供せよ、ときこそうつれとくゝと、いさめ給へば定家卿、御いとまごひなされつゝ、し

うぐゝ二人三重それよりも、ふじ川さしてそゝ下らるる、坂わてるゝ鈴なりて、こまもしづかにのりかけの、下はからあやから嶋の、ふとんかさねてうづたかく、姿やつして商人の、あづまにおもむくふせいにて、大江の左衛門跡につき、馬子のさまもしほらしき、所ならひか女のまご、男と見せてほうかふり、かひゝしくもすそくゝり、名所きうせきかたりつゝ、さますねふりの夢にさへ、すがたたちそふかの方に、いつか、歸京のちよくをうけ、二たびめぐり逢坂の、關もとゝめよ是や此、行も歸るも足とめて、詠め過てふ森の内、是せみ丸のわらやの床、延喜第四のわうじにて、いともめでたふまします身の、さとの御目をとぢ給ひ、心をすまして此所に、びわをたんにておはせしに、はくがの三位といひける人、風のふく日も雨の夜も、三とせ通ひて三曲を、つたへたりけんきうせさと、馬子はおしへ奉る、さだいへたれも世の中は、むかしにけふもあすか川、せたの長橋打はれて、雲井に高きひるい山、坂もと山王三重八わうじ、ふもとのこすいへうゝと、中にさひしき、松一木、左衛門是は過し夏、山王のさいれ

いに、舟にて是を見にけらし、唐崎の一つ松、志賀の浦部の釣小船、みぎわにあさる白鷺の、のぞく柳のしなぶるに、つゝくりとしてかゝみ山、やつれ姿のまはゆくも、笠つかたむけ、通る馬子がしほらしく、ひらの伊吹の、さつき雨、ばらんゝと、ふる音は、のきの玉水ちる木の葉、おれてやさしき板ひさし、窓のかけ戸も、夜あらしに、ふわの關もりとゝむなよ、かく勅かんの身の行衛、何となるみの鹽干がた、蘆のかりねのつかのまも、わすれてこそはありはらの、きつゝなれにしつましあれは、はるはるきぬる旅おしと、詠じたりけん八橋と、おしへ申せば我とても、同じ思ひを三河國、是より馬ををり給ふ、馬子はそばにしとゝより、いただきおろし参らせて、思ひありげにせきめんす、さたいへあやしく思せしが、さりげなくして左衛門と、名所ゝを詠め歌、よむことの葉は數ゝの、濱名の橋を打渡り、かゝるてうとのうさつらさ、かひなき命ながらへて三重池田の里にぞ着給ふ、かくて御宿召れつゝ、御まへに馬子をめし、誠に遠き都より、名所きうせき道すがら、語りなぐさめ参るでう、しんべう成事

共と、品々を下されて、御いとまたびければ、馬子
はとかふのいらへなく、涙にくれていたりしが、御
袖にすがりつき、こはなさけなしみづからは、野分
の前がかへ姿、ふかくも君をあこがれて、思ひきれ
共ばんのうの、つよききづへにつなぐ犬、さがにて御
手にかゝりし時、とにもいかに成ならは、我かゝ
る思ひは侍らはし、情なしとよ姫宮の、からきいと
まを給はりて、うきねをなきてゐたりしに、君さがを
落給ふと、風の便に承り、たよらん爲に身をやつし、
かゝるばしやくとおそろしき、ならはぬ馬の口を取、
屏風の繪にて見覺へし、名所きうせき宿くをつか
るゝ事も打わすれ、なぐさめ申はるゝと、是迄御
供申事、ひとへに君の御情に、あひ參らせたふさま
さまと、心をくだくかひもなく、歸れとは恨めしや、
今此時にうき思ひ、はらさでいつをぐすへきぞ、逆
も叶はぬ物ならは、舌くい切てきへくと、一念の
悪鬼となり、此世のみかは生々世々、くるりくと
つけめぐり、本望とげでおくべきかと、いかれるお
もてのすさまじく、泪をながしさうつふき、わな
わなふるふてゐたりける、定家興さめて、すかさ

ばやとしあん有、さほどわりなき心底を、いかでむ
になしはつべきぞ、去ながら今日は、心にねんずる
願あれば、あすの夜はかならずしも、互の下ひは打
とけて、思ひをかたり申べし、さのみうらむる事な
かれと、しとゝうしろを打給ひ、今にも忠重來りて
は、さつする所もいかなり、まづくやすみ候へ
と、につこと笑ひそれよりも、ひとまに御入ましま
せは、女心のはかなさは、あすのよるせをたのみつ
つ、こよひばかりのかり枕、一夜を千夜の心ちして、
とあるかたへにふしにけり、かくて定家、左衛門を
ひそかにめし、右の次第を語らせ給へは、忠重ある
しを近付て、かやうくときさゝやき、跡をば頼むと
云捨て、しうく二人忍び出、ふじ川さしてぞ急が
るゝ、しばらく有て、野わけのかた、定家の一間にゆ
き、屏風をへだて申やう、夜あけがらすのころ立て、
おちこち人もおとすなり、御したくもやとうかへ
ど、御いらへあらざれば、野わけふしぎやこはいか
にと、屏風をひらき見てあれば、定家卿はましまさ
ず、是はと思ひ立出て、忠重がふしどを見、扱はた
はかり捨てて、落させ給ふと心つき、ていしゆを呼

て人／＼は、いづかたへそと問ければ、ていしゆさ
あらぬふせいして、人／＼様の御事は、いさゝかぞ
んじ候はずと、おどろくにて云ければ、女聞て
腹をたて、さては、汝も一身よな、ゑゝ恨めしやと
はがみをなし、あるじをとつておしすくめ、落給ふ
はいづくぞや、まつすぐに申べし、少も偽る物なら
ば、うきめを見せんといかりをなし、けしきかわつ
て見へければ、ていしゆかなしみ手を合、あつまの
方へ御通り、我をばゆるし給はれと、ふるひ／＼申
けり、女聞て打うなづき、ていしゆをかしこへかつ
はとなけ、やゝおろか也いかに君、いづくへ逃行給
ふ共、いかで其儘置べきぞ、天はひゞさうひさう天、
地は大かいならくのそこ、むけんやうちん、八萬ち
ごくのそこ迄も、おかけおつつめわがうらみ、いか
ではらさでおくべきと、髪空様そらさまになる神の、黒雲い
なづま地をふるひ、大風こぼくを吹たふし、山河草
木しんどうして、跡をもとめて追かくるは、すさま
じハヤ三重かりける次第なり、かなやの宿にて、人々
わ跡をはるかに見給ふに、いつく迄もと呼はる聲、
山彦にこたへつゝ、まぢかくおつかけ來るをみて、

大江の左衛門もとよりも、すいれんの達者なり、君
を肩に引かけて、東國一の大井川、やす／＼とおよ
ぎこし、君をば在家にかくし置、道につゝ立ことの
やう、しばらく窺ひいたりけり、女いかれるめんし
よくにて、すかさず追かけ川ぎしにつゝ立、いづく
を越すべきと、爰よ、かしこと見まわせど、日本無
双の大河と云、折ふしみかさまさつて、瀬のはやき
事さながらに、三つ羽のそ矢をゐることく、こしと
どまつてあらされは、身をもだへつゝ川きしを、か
なたこなたとめぐりしが、今はたまらず飛入て、さか
まく水をかき立／＼、一念の蛇身と成、ざんじに川を
打上り、忠重を、目にかけて、引さきすてんと飛か
かるを、てうどきればゆん手へくゞり、しさつて拂
へばめてへぬけ、かげろう稻妻水の月、神通ふむる
いのじや身にて、さうなふうつべきやうもなし、忠
重は心中に、なむ八まん大ぼさつと、きせいをなし
てはつしと切る、きられてひるむをかけよつて、指
通し／＼、さん／＼に切ちらし、大井川になげ入て、
扱もあやうしわが君様、先／＼しおふせ候と、君を
うしろにおひまいらせ、忠義の旅をするがなる、ふ

じ川さしていそぎける、彼忠重がそのありさまを、きせん上下おしなべて、皆かんせぬ、ものこそなかりけれ

第五

其後、藤原の定家卿、時國がざんげんにて、おかせ
るつみもなき御身、勅かんを蒙りて、無念の山はふ
じ川の、りうほうじと申せしは、御れんしじやくれ
んの、みてらにてありければ、かくて爰に御入り有
り、月日を送らせ給ひける、有時定家、忠重に宣ふ
は、おもへば野わけがしうしんも、心にかゝりおそ
ろしや、此事れんしの事なれば、我ぢきくには云
かたし、なんじじやくれんに語りつゝ、重てせうげ
なき様に、はからふべしと仰ありチクリ一間に、御入
ましませばたいしげはじやくれんの、御前に罷出、
右の段々物かたりし、万事は頼み奉ると、謹て申し
る、じやくれんは聞し召、げにおそろしきしうじや
くかな、かゝる事には一切の、女人成佛とくだつの、
法花どくじゆにしくはなし、然らば千部をはじめん

と、じげ僧御弟子に仰付、扱又番の寺僧を召、明日
千部のはじめなり、定て參詣多からん、しさいあれ
ば此たびは、女人はかたく門内に、いるゝ事きんせ
いと、仰付られそれよりも、三重頓て用意と上聞へけ
る、比しも文月、中半にて、本地なき玉歸りおちこち
に、うかれさまよふ折からに、女性一人、かりもん近
く立寄て、もの申さんと有ければ、けいこの法師是
を聞、何事やらんとこたへけり、女是は此邊の、白拍
子にて侍ふなり、たゝもさへ、女は五障三從の、つ
みふかく侍るよし、ましてながれの川竹の、一夜許
りの手枕に、人の思ひを身にうけて、ざいごうふか
き此身なり、せめては近く御經の、み聲を成共耳に
ふれ、佛果のゑん共なしたふ候、哀たゞけちゑんに、
此門入て給はれかし、さもあらばみづからが、年比
なれし舞の袖、おもしろふかなでつゝ、御なぐさみ
を申べし、ひとへにたのみ奉ると、打しはれてぞ申
ける、若法師共是を聞、こは珍敷見物ぞや、何とく
るしからずんば、一かなで所望して、ひとり計りは
入もせよ、いかにも是はよからんと、かしらをふつ
て悦べば、老僧聞てそこつなり、かく善根の所へは、

寸善尺魔のせうげ有、其上きびしき御いましめ、叶ふまじとぞせいしける、けつきさかんの若法師、耳にも更に聞いれず、しさいな者には舞見せな、苦るしからず我くが、いれておがませるさすべし、かつこを打て一さしまへ、さいわひ定家此間、御もふきにたましませば、御慰に成もやせん、御目にかけてとそれよりも、かくと申せばさだ家卿、忠重を御供にて、みだうのゑんに御出有、女はゑぼしをかりにきて、三重既に拍子をすゝめける、打ならず、かつこの蒔繪はふし川の、浪のしらへや風のさゝら、とんと打てこきりこと、袖をかざして、曲ばちの、あやとる品のうきしづみ、柳のこしのたよくと、しなふ手品に、するさゝら、さらくさつと、数くに手をつくしてふ百千鳥、聲ほのかにも、のどか成、春の詠めは花計り、花の外には松計り、松を時雨の染かねて、ひとりこがる、紅葉はの色にそみけり、白露を、何ぞととはい消し身の、歸らぬはいにしへ、とまらぬわ今のしうしん、三重戀風みだすあま雲にといろくと鳴神の、拍子をそろへ品もよく、ふりくる雨は、さらくと、さゝの小笹の竹のさゝら、うき

ふしくのよゝことに、思ひは、ふかき川浪の、もとよりかつこは、波の音、くよせては、きしを、どうど打、かのきしにさすのりの、舟歌舞の、ほさつの舞の袖さゝらも、チャクリかつこも、ふへひちりきも、みなごくらくのあそびぞと、たうく思ひ聞物を、ほんのふばたい、もと一つ、雪や氷とへだつれど、万法一如實相の、みのりの庭へどうくく、かつこをならしさらくと、さゝらよりなを手をもする物を、狂言ながらのりの道、ばたいの門にさりとては、入させ給へ御僧と、打しほれてぞかこちける、かくて舞見し若法師、此上はこなたへと、門をひらいて入にけり、女性は悦び庭に入り、定家卿や忠重を、うらめし貌に打ながめ、君に心をくれ竹の、世のうきふしになきしづみし、野分がおんりやう、是迄あらはれ來りたり、むねのほむらのいたづらに、きへなん事もしら雪の、命の内にせひともと、思ひしものを情なや、あれなる大江の左衛門に、切すてられてしうじやくの、いやまし残り大井川、涙にしづむ恨の數、いでく思ひしらせんと、ひらりと上へ飛あがり、左衛門を目かけつゝ、杖ふり上てうた

んとす、主従刀に手をかくる、じやくれん驚きはし
り出、是はかね／＼聞及し、野わけとやらんが死靈
かや、それ五たい五りんはかり物なり、今汝、しき
たいをはなれつゝ、しうじやくのこる、くうきとし
て、たとへ汝がしきよくの、心に定家したがふ共、
いか成たいにて契るべし、もはや執心はなすべし、
おろかなりとぞしめさるゝ、死れう聞て、我色體を
具足して、契らん事を思ひしに、むなしく大江の手
にかゝる、ひとへに、君のつれなきゆへ、しよせん
君を取殺し、おなじくうきとなし申、長きめいどに
ちぎらんため、むかひに是迄來りたり、そこ除き給
へと飛かゝれば、有がたや内陣より、光りをはなち
給へば、おんれう爰にたまりかね、ていしやうに飛
おりて、かなたこなたとかけまわり、あらたへがた
や恨めしや、此度こそはむなしく共、終には本望達
せんと、云聲しゆるうにひゞきつゝ、りうづに手をか
けとぶとぞ見へしか、引かついでハヤ三重かねの内に
そかくれける、じやくれん此よし御覽じて、たとへ
いか成惡靈なり共、行者の法力つくべきかと、みな
一同に聲を上、いらたかじゆずをおしもんで、東方

に、ごうざんせ明王、南方に、ぐんたりやしや、西
方に大るとく、北方こんがうやしや明王、中わう大
日大しやうふどう、うごくかうごかぬかさつくの、
なまくさまんだばさらだ、せんだまかろしやな、そ
わたやうんたらたッかんまん、ちやうがせつしやとく
大ちゑ、ちが、しんしやそくしん成佛と、今の地身
をいのる上は、一念毒蛇のうらみのすゑ、何有明の
つきかねこそ、すわ／＼うごくぞいのれたゞ、ひけ
やてん手に千じゆのたらに、ふどうのじくのけ明王
そんたい、力を合てたひ給へとて、かんたんくだき
いのりけり、いのりのられつかねど、此かねひッ
きわたつて、ひかねど此かね、おどるとぞ見へし、
ほどなくしゆるうへ引上たり、あれ見よじやたいは
あらはれたり、きんせい東方せうりう清淨、きんせ
い西方びやくたいびやくりう、きんせい中わうわう
たいわうりう、一だい三千大せんせかひのごうじや
のりうわう、あいみんのうじゆ、あいみんしきんの、
みぎんなれは、いづくに大じやのあるへきごと、い
のり、いのられかつはとまろぶが、又おき上て忽に、
かねにむかつてつくいきは、めう火と成て其身をや

く、猶せめつけてはけきやうの、八の巻を大おん上げ、よみかけく打給へば、ふしぎや二つのつのおもて、おんれうすなはち三重佛果をえて、天上するこそ有難き、實もたへなる、法力にて、則おんれう成佛し、定家卿もつゝかなし、げに佛法の御ゐとく、有がたかりける次第とて、貴賤上下おしなへて、皆かenseぬ、者こそなかりけれ

第六

其後、五條の三位家隆卿、とうのくわんばく重定へ、ていかのとがのなき旨を、きんりへ召れとう人と、對決の御事を、願ひ上させたまひつゝ、じやくれん定家諸共に、忍びて都へ呼むかへ、ないぎ評定有所へ、侍一人罷出、岩波彌七と申者、御門外へはせ参りじきくゝに、申上度事有て、参上いたし候よし、申上候が、いかうとうかひ奉れば、かりう卿聞召、何さましさい有べしと、人々をばおくに入、それそれと有ければ、くだんの男を召出す、かりう卿御らんじて、おこといかなる者成ぞと、御尋有ければ、

男かうべを地につけて、さん候それがしは、平の左近、時國が郎等に、岩波彌七と、申者にて御座候、おそれながらと一通を、御前にさし上る、かりう取上、御覽有、御喜悅はなはだ淺からず、重てきんりせんぎの節、しいしゆを残さずのぶべきと、きびしくしゆごし置給ふ、かゝる所へ、藏人來りつゝ、關白とうの重定より、來る十日きんりにて、御評定有間、ていか卿をともないて、急ぎさんだい有べき旨、仰出され候と、いさい相のべ歸りけり、かくてかりうていか卿、じやくれんほうしにたいめん有、右の次第を仰あり、三重既に用意をなされける定る日にも成しかば、三公くぎやう諸司八庄、八座七辨内外のりやう、北面の武士迄も、かいがだうじやうみちみちて、いぎをたゞしてなみ居たり、左のかたには攝政よしつね、はるか引さがつて、平の左近時國、右の方には三位のかりう、定家を御友なひ、いぎをただしくちやくざある、御しらすには、攝政よしつねのこうけん、今川將監春方、ていか卿の御家臣、大江の左衛門忠重、左右にわかつてかしこまる、時に關白しげさだ卿、双方にむかはせ給ひ、申上べき事

共を、はやとく奏し給へと有、攝政よしつね承り、
いかに定家、いか成宿意有ければ、我やかたに家人
を忍ばせ、我を討んとはかれしぞ、定家は聞し召、
まつたくさやうのかんきよく、さら／＼以て覺へな
し、せうこばし候か、攝政はおし返し、せうここそ
候へと、平の左近を召出され、其時の有様を、申べ
しと有しかは、時國まゆにしわをよせ、なふいかに
定家殿、あらそひ給ふとあらそはせし、貴公の家人
をしのばせて、もつたいなくもせつしやうを、うち
とらんとなしけるを、折ふしそれがし有合、生取ご
くやにおしこめおく、あつはれ時國ありあはずは、
貴卿の本意たるべきに、さこそはいなふ覺されんと、
あさ笑ふてぞ申ける、其時にかりう卿、とかくの論
はむやくなり、せんずる所其めしうど、出して實否
をたいされよ、幸かなやこなたにも、たいしきせう
こ候なり、それ忠重と有ければ、畏て候と、くだん
の男を召出す、よしつね卿も時國も、あきれてとか
ふの詞なし、かりう仰けるは、いかに彌七、なんぢ
わがやへかけこみて、さし出したる一通の、其趣を
御前にて、つまびらかに申べしと、さて關白に向は

せ給ひ、此度の次第、此者に御尋、事明白に御た
し、有がたかるべく候と、謹てぞ申さるゝ、くわんば
くは聞し召、いかにこの事のやう、まつすぐに申
べし、少も偽る物ならば、がうもんにかくべきなり、
ありやうに申なば、命をたすけえさすべし、男承り、
さん候それがしは、あれなる平の左近時國の郎等、
岩波龍左衛門が弟、岩波彌七と申者にて御座候、さ
れはあれなる時國どの、定家卿にいし／＼有て、其を
まねきつゝ、汝は忍びをゑしときく、何とぞひそか
に、攝政殿へ忍び入、よき折からによしつねを、打
申てもうたず共、事のせんぎあらん時、定家が家人
に、早川源太と名のりつゝ、主にて候定家、攝政殿
をいかにもして、うしない申せと頼れて、かくの通
りと偽りて、定家をなき身となすならば、妻子をゆ
ゆしく取立んと、かたくけいやく有し故、主のため
に二つなき、命を捨てそれがしは、きびしきごくや
におし入られ、扱こそ手だてしおふせて、定家卿を
はちくてんさせ、本望をとげ給へば、けいやくのそ
のごとく、殘し置たる妻子共、いかならんおんしや
うにも、預るべき身をさはなくて女は口のさがなき

者、おさなきものはすゑくの、身のあだなりと情なく、おやこ共にさしころし、あまつさへそれがしを、ごくやより引出し、うしなはんとしたまふゆへ、主君ながらもつらければ、やうくそこをのがれ出、かりう卿のやかたに行、右の段々申上げ、かくの通りに候なり、重ざいなる我なれば、ともかくも御はからい、然べく候と詞を放て、申ける、時國今はかなはじと、迺行んとせし所を、忠重春方つゝとより、左右のかいなをねぢすくめ、御しらすに引すゆる、みかど大きにげきりん有、前代未聞のくせものかな、心のまゝにはからへと、定家に下さるゝ、また岩波彌七は、洛中を引渡し、追拂へとのりんげんなり、まことにちんがふとく故、とがなき定家つみせし事、はなはだ耻る所なり、そのせうとして大和國にて、三千町を給はると、やがてりんしを下さるゝ、定家は、ありかたしくと、御前を立給ふ、それより兩家むつまじく、ゆたかにさかへ給ひけり、千秋萬歳めてたしとて、貴賤上下おしなへて、皆かんせぬものこそなかりけれ

三世二河白道

第一

扱も其後、御存知の者、誰かあると召るれば、太郎くはんじや是みつと、次郎くはんじやつぐしげが、御まへにかしこまる、御機嫌はなはだうるはしく、われうきだの氏族とし、浮田の左金吾時世とて、人にも少々白川の、長者と呼れいへとみて、萬寶けんそく何事も、心にまかせぬ事もなく、弓馬は本より家の所作、文才詩歌糸竹も、つたなからざる器量にて、心になふ事もなく、ひとりふせやに、ほとゝぎす、なくひとこゑに、あくるよを、あかしかねたる、床のうち、すこしは哀とおもひなば、地兼て申せし望みの色やあ、ゆだんはあらじしていかに、見たてつるか有ければ、太郎冠者承り、大かたならぬ御望み、兩人心をつくしつゝ、随分尋ね候へ共、中々及ぶ色もなし、さいはいかなや明日は、毎年ぎおんのさいれいなり、とひ遠境の男女迄、つとひあつまり候也、見物ながら御出あり、御見たてまし

さば、御心に叶へる色、などかなふては候はん、あゝ此義いかうかへば、次郎くはんじやも一同に、是はいみじきしあんなり、くはんくはつに出立て、然るべしと申上れば、本より色にうきだの時世、ゑつばに入てさりとては、能こそ申せしつぐしげとカ、ル末廣にて打たゝき、明なば出んめんくも、したくいたせとそれよりも三重奥をさしてそ「入給ふ、比は皆月、中の四日のぎをんのゑ、見物きせんみな渡る、おほちにらちゆひ、さじきかまへさまく」の、内まくもうせんみすきちやう、風のまにくほのめかす、らんじやのかほり、色をんないとい心も、うきだのさきんご、當世風のだて羽織、ふるやくはんくはつ、長かたな、雪のかんば、せしゆすのびん、是みつつぐしげ御供の、下部のふうも色めきて、弓手やめての棧敷に、尋る色の品姿、ありやなしやと都の町、きをつけ通らせ給ひしをカ、ルかいまみたりし女皆、したはぬ者こそなかりけれ、地色はあやなや名につれしカ、ル錦の小路の中ほどに、女中のさじきと打見へて、みすかけしとみしめやかに、打見ゆかしきさゝめごとカ、ル風ほのめかす隙もやと、しば

しといまりさきんごは、ふりあふのけばうへよりも、さしくし一つをちかゝる、いそぎ取上ヶ見給ふに、さもぢんじやうなるべつかうを、みがきすかしてしほらしく、金銀さんごにかざりつゝカ、ル哀世に、心になふ色もかな、月と花とを、ともに詠んと、さもいつくしき筆まきへ、同じおもひの歌もよう、此主心にくふしてカ、ルひたすら見まくほしければ、詠め入てぞおはしける、内よりやさしきめのわらは、いそぎ立出其御くし、姫君さまの御をとし、こなたへ給はり候へと、いと小さかしく云ければ、さきんごにつこと打笑ひ、小ぢよはしらずや櫛などは、落せし主へちきくゝに、手つからかへんさほうなり、人づてにては叶はじと、仰ければ棧敷よりカ、ル又やうの女のわらは、いそぎ参りて其御かた、くるしからず御さじきへ、伴ひ申せと姫御前の、仰にて候へは、御通りましませと、申上ればさきんごは、是は當座のたはふれなり、上郎方の御さじきへ争うさん仕らん、此くし御あげ候へと、さしだし給ふ御手をひき、むたいにさじきへともなへばカ、ルていしゆも出て御供を三重おくのひとまへしやうしける、姫

君打ゑみ、くるしからずゆるくゝと、見物ましく侍らへと、にはやかなりしも、のこびカ、ル色好の左金吾も、心うごきてめかれせず、詠めとれてぞをします、又姫君も男色のカ、ルほのかに見しは中々に、物の數かは是こそは、年月ねがふ色すがた、殿とも見めと戀衣カ、ルしのぶのみたれ限りなく、人目のせきを何とぞし、こゝろを通さんはかりこと、ちぢにあんじて姫君は、井つゝと云し名香を、地ひとりこがるゝ芝船の、たきしめしつゝみづからがカ、ル心ざしとて出さるゝ、金吾は君が、ことのほの、面白く押いたゞき、六十二種の名香の、品々多き其中に、ゐづゝはいかにときくうちに、あんじあたりていにしへのカ、ル戀くらべたる、ふりわけかみ、われならずして、誰か又あぐべきとは、有がたしと、れんりといへる名香を、かたじけなさの印ぞと、つがせ給へは姫君は、しばらく聞し召れつゝ、是やうきひとげんそうの、つねにちがへるさゝめごと、君みづからが、其中をれんりのきとは、扱は戀カ、ルじやうじゆしたりと人々は、悦びたまふぞ、やごとなき、時に姫の御めのと、石部の藤内罷出、是に候姫こそ

は、たが袖と申つゝ、禁中の上北面、齋藤左衛門よしひろがひとり姫、幼少にて父母にをくれ、おち兵衛の尉やしなひたて、定房方に罷ある、某きみを見申に、浮田の左金吾時世公、かねくしゆくん兵へのせう、望み申せしむこかねの、けふのぎおんの引合、めでたき折に候へは、ふかきいもせの御けいやく、御盃をとくくとチャクリすゝの申せばさきん五は、是は幸ひよき折から、けふしも御目にかゝる事、深きえにしに候と、悦ひ給ふは限りなし、すはや櫛の見ゆるぞと、人立さはぐに人々は、いざや諸共みすをろし、見物せんにそれくと、石部は表へ立出て、かための役にかしこまるカ、ル我もくといさみつゝ三重まつり見るこそ上をもしろき、爰に又淀の河部の片ほとりに、梶たへまのづかう勝廣とて、好色ぶ道の悪牢人、いへとみけんぞくあまたもち、ゆたかにくらしいたりしが、けふの祇園のさいれいに、見物のため手の郎等、ちりつかあくたの助、浪次郎たつとび、かれ兩人を召つれて、美々敷出立大かたな、小路一はいよこたへて、喧嘩せんするあて詞カカ、ゆきかふ者共をそれつゝ、中をあけてそ通しけ

る、錦の小路の棧敷の、たが袖姫を一目見て、色には猶も氣みじかもの、御盃成共いたゞかんと、罎をし破りいらんとす、ていしゆあはて、はしり出、御らの通りぢよ中方、御用捨頼み奉ると、手をすつて申ける、たへまいかつてやあ、其女中と一座が望み、おのれめと、こぶしをにぎつてそつほうを、火の出るほどはりければカ、ルかしこへかつはとほりたふされ、かゝへさすりて逃入ける、是みつづしげつゝと出、さいせんていしゆが申せしごとく、女中計りのさじきの内、我々とても青侍、おのく方のおあい手には、思ひもよらずひらさらに、他所へ御こし候ひて、手ににあひたるつはものと、喧嘩を求め給へかし、ひらにくとわびければ、かつにつて二人のもの、長々しき口上は、さらりとやめてあの女中と、主君に一座をなさしむべし、ちつともいぎに及びなば、かうべみぢんにふみくだくぞ、いかにくと力足、どうくとふみならしカ、ル仁王立にたつたるは、おつをおこがましくこそ、見へにけれ、是みつづしげ心中に、おかしながらも其けしき、おそろゝていにもてなして、力のつよき御うで

を、ちとわれ／＼も心見んと、二人がかいなを引つかみ、げに／＼つよきうでやとて、二人一度にしめければ、さしもじまんのちからうで、ちきるゝ計り目もくらみ、是々ゆるせざきやうぞと、泪ながらにわな／＼と、ふるひ／＼わびければ、是みつづしげ打笑ひ、はからふやうも有けれ共、命はゆるすと差上て、ふり廻しつゝなげ出す、たへまいかつて大たちぬき、うつてかゝればとびかゝる、町の者共ばう引さげ、只打ころせとさん／＼にカ、ル一所にむらがり打たつれば三重ころびたふれて逃て行、先さいれいのさまたげは、事なくすみしぞはや／＼と、めでたくみこし渡しつゝ、千秋樂の時津風、ばんせいらくの見物はカ、ル面白かりけるしだいとて、貴せん上下おしなへて、皆かんせぬ者こそなかりけれ

第二

其後、浮田の左金吾は、去る祇園のさい禮に、禁中の北面齋藤兵衛尉、定房のひとり姪、カ、ルたが袖姫に御えにし、たがいにながひ、ちはやふる地神のむ

すびの色姿、いもせの川の橋はしら、中立頼みゑんがあり、けふ珍らしき花むこ入カ、ル花やかなりし御しやうぞく、たぐひなかりし黒色に、月を地ねためる姫君の、まばゆき迄に出立て、ゐたりも光りかゝやける、金銀のほうらいに、二人むかひて相生の、松カ、ルにすをくふひなつるや、みぎはの龜の、さいれ石、いはほとなりて、こけむす迄チクリ千代にや、千世と御ことふき、兵衛尉も御機嫌よく、カ、ル規式終て御盃チクリさいつ、さゝれつ舞うたふ、次郎くはんじやつぐしげ、悦び是にしかずとてカ、ルあふぎ押取立上り、ほうらい山をかざる事、龜は木より、よろづ代をふるなれば、長壽をいのる印なり、松は其色ときはにて、とかへりの花もさき三重みどりのかけによる人は、老せぬためし候なり、竹は其かげすぐにして、所ところのふしのまはチクリ花ほとゝぎす月雪の、節をたがへず人もまた、折にあふこそめでたけれ、つるはせんざいたもつ故カ、ルかゝるせいたいせいちやうの、徳になづきて、舞あそび候と、カ、ル詞に花をさかせつゝ、千秋樂と、まひおさむ、これみつも悦びて、めん／＼も同音にカ、ル手拍子打て、三

國一とうたひつゝ、祝ひのめきたりけるは、めでたかりける「しだいなり、去程に、たへまのづかうかつひろは、先日ぎおんのさいれいに、大きなるふかくをとり、面目なくも立歸り、匂ひ床敷たが袖の、其おもかげのわすられず、明くれ戀に身をしつめ、あまりたへかね郎等の、あくたの助浪次郎、兩人を招きよせ、さりしぎをんのさいれいに、見初し女は音にきく、齋藤がひとり姫、たが袖姫にて有けるとやカ、ル何とぞ望みむかへ取、いもせの川のわたりそめ、深き契りを結ふべし、汝等は此度、けいやくの使として、兵衛がやかたへ立こへよ、はやとくくと申ける、なみ二郎申やう、さん候君はしろし召れずや、たが袖の義は先達て、むこかねけいやく定り、けうこんゐんのことふきなりカ、ル是はちびきの石にして、もはや叶はぬ御事と、申ければかつひろは、大きにせて口をしや、まなかな戀ぢとおもひつゝ、人めを忍びつゝみしに、人にせんをこされたり、此上においては、兵衛が館へはせ入て、一家の者共きりちらし、たが袖姫をうばひ取、せひ共に某が、妻と定めん者共よ、はや打立んと、ずんどたつを、あ

くたの助、今しばしとてをしとめ、こは氣みじかなる御事ぞ、齋藤一家の奴原は、君の御手をおろされずと、それがし兩人はせ向ひ、一々にふみつぶし、姫を引立參らん事、何よりもつてやすけれど、爰にひとつのなんぎ有り、此度むこと定めしは、先日ぎおんのまつりの場、我々にはむかひし、浮田の左金吾時世なり、そこつにしてはけがあらん、夜半の時分に見すまして、兵衛がたちへ忍ひ入り、とうぞく一きのふせいして、姫を引立參るべし、若もはむかふものあらば、其時こそは片はしより、しやうぎたふしに切ちらしカ、ル本望とげさせ申べし、此ぎいかにと申ける、づかう大きに悦喜して、いしくも申せしあくたの助、これ究竟の手だてなり、然らば用意仕れ、はやとくくと、それよりも、其夜のふくるをまち遠く、心せきやのくだかけの、聲諸共に打立て、あだなる心はうば玉のハヤ三重にしきの小路へ、をしよする、中に取ても、あくたの助、本より忍びの名人にて、大きなるつなに、くまでをゆひつけねりへの、むな瓦に打かけて、繩をつたひてよぢのぼり、内のていを見てあれば、人しづまりて音もせず、し

すましたりと飛をりて、じぶんはよきぞ此門を、打破てはよいれや、者共と云ふ聲に、表なる一きの者共、心へたりと云まゝに、かけやまさかり手々にもち、我もくくと打やぶり、やごへをかけて切て入るカ、ルこは何事ぞとハヤ三重やかたの内、上を下へと「かへしける、されども物に心得し、さきんご是みつぐしげは、をもてをさして切て出カ、ルやいばの光りを便にてハヤ三重爰をせんとぞ」戦ひける、齋藤兵衛定房は、老武者とは申せ共、心たけき人なれば、長刀引さげ松とぼし、らうせきもの餘さじと、宣ふ聲に片原より、たへまのづかうとんで出、齋藤やらぬと打てかゝる、心得たりと定房はカ、ル長刀を押取のべハヤ三重爰をせんとぞ「戦ひける、心はやたけにはやれ共、老武者といひ殊に又、けつきさかんの勝廣に、さんくんに切つけられ、かしこへかつはとふしたまふ、とゞめをさゝんとする所を、さきんごは立かへり、はつと云てかけへだて、かつひろとたゝかふまに、次郎冠者は浪二郎と、押ならべて引くみ、ゑいやくともみあひける、太郎くはんじや是光は、あくたの助が首取て立歸り、是をみて勝廣を、押取

まき主従して切立る、づかうはたちを請はづし、みけんをしたゝか切つけられ、こは叶はじと逆行を、餘さじと追懸ゆく、次郎くはんじや浪二郎を、かしこへかつはと取てなげ、やあおのれらは何者ぞ、様すを申せとせめければ、まなこもくらむ悲しさに、われくは、たへまのづかうかつひろ、主従にて御座候、かやうくのしだいにて、今宵是迄押よせたりカ、ル我をばたすけ給はれと、一々白狀申ける、つぐしげ聞て、能こそ申せしほうびには、首をばたすけうでほねをと、曳やつと引ぬき、かしこへかつはとなげ捨て、定所を見てあればカ、ルはやこときれてましませば、あきれ果てぞ居たりける、恙る所へ左金吾是みつ覺束なく、立歸り定房の、御手はいかにと宣へは、事きれ給ふと申ける、ゑゝ無念やうとは親、をやのかたきのづかうめを、こんりんならくの底迄も、追かけうたであるべきや、たが袖事は二人の者カ、ル万事たのむと云捨て、行方しらずいで給ふ、次郎おとろきこはいかに、君は御出ましませば、いづく迄も御供と、跡をしたふてかけ出るをカ、ル太郎押とめ、汝は跡にとゞまりて、ひめ君へ此事を、

皆かんせぬ者社なかりけれ

第三

歌をきまるみよもひさかたの、月にカル名高きむさしのに、深草の色人の、百夜はいまた、あさぢがすへチャリ其ひとふしも吉原とて、皆人通ふ色里あり、三千地のうかれめの、籬あらそふ花々の、そのふにうへてもかくれなき、くれなゐのはに名をよせし、高尾の君と申せしは、ふたり共なき三浦が内、今せんせいの、君なりき、然るに此女郎、たけはづむ迄深川の、うき世といへる大臣に、カルなじみ重ねてつまこめの、いつも入るかきいひあはせ、外の客にはつよく出、下紐とかぬ中なりきカルけふもゑにしのかいやくにて、今や／＼と侍あたり、爰に梶、たへまのづかう勝廣は、都にて齋藤兵衛定房を、叶はぬ恨に討てすて、當國に忍びしが、人におもてを見しられじと、髪がつさうに大ひげなで、詞大江のゆふが小鬼つらと、其名を改めだて小袖、あけうらくはつと吹かへさせ、身せばひろ袖大かたな、ちうや

聞せ申せよ御供は、それがしなりとかけ出る、次郎聞ていや、御身は跡にとまりて、姫君兵衛の御事を、よきにはからひ給ふべし、我こそは御供とカル太郎をかしこへつきのけて、御跡したふて出にけり、かゝる所へ、ひめ君をくより出給ひ、兵へのしがいにいただきつき、しばしたへいりなきたまふ、地是みつも泪をながし、きみの御所存かたりつゝ、敵を追かけ出給ふ、若もをんけが候ひては、某がぶんたらず、御あとしたひ参るなり、敵を討て御本望カルとげさせ申候はんと、出んとするを姫君は地のふ侍給へ是光、自らがためにこそ、敵なれやさりとては、一所に伴ひみづからにも、うたせ給へや捨ててカル何となれとかをもふぞや、情なしやかなしやと、聲をあげてぞなき給ふ、是光もりにふくし、げに御ことわりいざさらば、某御供申べし、御心安く覺し召、左金吾さまに追つきて、諸共に敵たへまを、大地を割て打とらん、いざ御出とそれよりも、兵衛のしがいを片付て、姫君の御供し、かひ／＼しくものゝふのカルやたけ心の一筋に、あづまをさして下りける、かの是みつが心の中を、きせん上下をしなべて、

惡所にはいくはいし、ほういつむざんにふるまへば
カ、ル恐れぬもの社なかりけれ、昨夜より居つゝけし
て、けふの歸りに高尾を見て、あつはれくるわの色
つかさ、お名の高尾はもろこし迄、われ我朝にしら
れたる、鬼つらと云大臣が、たび／＼御一座ねがへ
共、御さはりのみきのどくの、ふかまのかたへむり
所望、是さたかをのもみぢかりと、うしろをほと、
打ければカ、ルたかをにつこと打笑ひ、おかしき人の
詞かな、千日千夜通ふても、叶はぬ戀ぞ其かたに、
もみぢかりと出ぬれば、こなたに少もさわがざる、
世様といへる是持ありカ、ルさし通されな鬼つらよ、
おいてたもとをふりきれば、さすがのおにつら詞な
く、きつる君やとそれよりも三重なじみのふぢ屋へ
いそぎける、爰にうきだの左金吾は、敵をたづねあ
づまへ下り、人めを忍び深河の、ゆかりのやしきに
かりに居て、うき世の助と名をかへ、ふとこの里へ
通ひきて、高尾の君になれきぬの、とめきのかほり
なつかしく地朝夕通ひ給ひしが、つぐしげを御供に
て、いさむ心もはやおふね、ぬれにうつりし舟男、
板ふみならし聲かけてカ、ルおせさつ／＼と色里へ、

飛が三重ごとくに「こがれゆく、かくてかの地に成ぬ
れば、身ふりつくらふゑもん坂、人まつ女郎數々の、
地中に位も高尾の君、互にそれと三瀬川、いもせに
おなし戀衣、きさんし給ふか待とをかと、カ、ルたが
いに袖を引つれて、伴ひ三重内にぞ上「入たまふ、あ
げや立出、御盃と取々に、一座にぎはしもてなして
チクリ興を催す酒もりは、面白ふこそみへにけれ、か
かる所に、さもいつくしき作りはな、花籠にさしみ
だし、大せいにてかき出て、文を高尾に參らする、
取上て見る所に、其比くるわのつはものにて、鬼つ
らとふかくあふ、坂田といへる女郎より、たへしゑ
にしかなつかしむ、筆に心をつくしつゝ、けふおな
じみの御出に、ふかき方よりおくられて、詠めあか
ざる花ながら、色をも香をもしる人に、見せまいら
せたく候ひて、暮に及び候へ共、送り參らせ候なり、
こじんにならひしよくをとり、御詠め候はゞ、悦び
まさんかしくとゝむ、高尾は思ひよらざりし、人の
情の花の色カ、ル詠めあかざるかへり事、心をつくし
かきをくり、かたへのとこに直させて、是をさかな
にをひとつとカ、ル水をもらさぬ花のゑん、酒たけな

はに、面白屋、時にうき世定りの、あだ酒もりは事
ふるし、此花につき一景の、あらましほしやと宣へ
は、高尾げにも御ことはり、いざ打よりて女郎達、
ぼたんの花にことよせて、兼てしくみし獅子の曲、
よろしからんと有ければ、はやとくくとうき立て、
小さつま八橋それ／＼にカ、ル色大よせのゆふきや
うは、三重をもしろふこそ上「見へにけれ、うきよを
わする、色里の、五町の君のかす／＼に、みな人こ
がれふしみ町、ひく手あまたのあづさゆみ、君がチク
リこゝろの二丁めの、にはひゆかしき三重八重むめ
に、しばしうかれて、たゝすみ丁の、戀と恨の境ま
ち、右の方には、にぎわひの、外にはあらぬ江戸町
や、情に名をやあげや町、たぐひあらざるしん町の、
いちぎにぎはふ京まちに、かへるさわするふくろ町、
大かうし小かうしに、げんじかうしやあげや茶屋、
色をよそほふすがかきは、心もうはのそらたきに、
をもひをこがすふせいなり、先せいやうの、雪とけ
そめて、ほころびいでし梅のはな地ぬふてう鳥の初
音の君、聲もかはるは花輪違、ひとつさくらや、三
つさくら、櫻木やよひの色の紋、つゝら花笠ひはゆ

るけきは、初もとゆひの小紫、こがれこがる、花
いかた、こゝろも波にうき橋や、若むらさきは藤と
もゑ、みどりのまゆもわかまつの、ほねをかはして
だきてうは、千とせまん世もかはらじと、地なじみ
かはせし夏木立、花おもだかは、世の人の、ゆかり
とひくる郭公、聲もたかまのかつらきや、めした姿
の色ふかき、もみぢは其名たか尾の君、ちがひかし
はや三つもつかう、ちさと津島のほか迄も、たぐひ
あらざる君達なり、冬とや三重いはんはつれゆき、つ
もるをもひはたかまつや、三がい松のごさかんに、
かはらぬ色の、常盤のきみ、其外巴よつめゆひ、む
すぶゑにしにあさつまや、わけて小よしのなびき桐
山を繪にかくひあふぎや、八ゑ角すみきり、やつは
ながたとんとけあげし、まりはさみ、かげやひなた
の取々に、通ひくるわのせんせいに、カ、ルうかれさ
まよふ有様は三重けにおもしろき上「しだいなり、色
よきすぬひつほをりて、チク／＼したには殊にすぐれつ
ゝ、ぬふてう糸のふしのまも、しのふもぢずり誰故
に、めしゝおしゝをかつきつゝ、うかれて出る取な
りは、をもカ、／＼しろくまだ拍子とる、笠をめせ／＼、

まん丸よふてきよふて、はでなしめをの片むすび、しめてきり／＼んきり／＼と、皆一やうのとりなりは、水に地系をかく其ふせい、白きを見れば月のいろ、げにしん／＼とみあれやま、神のひもろぎ物わびて、たれをまつやらよぶこ鳥、いやしほりゆくわが袖は、よれつもつれつもつれつよれつ、きて見よかしのおどりふり、れんぼのふへによる獅子の、アイノテちどり足なる花の聲、夢をやぶるやひてうのまひ地身をすくめつ、毛をふるひ、見だれかゝれる糸竹の、かける小てうにいさみ／＼て、まはれば廻る車とび、みだれ拍子になる鈴の、ひきよくにつる、面白やアイノテし、とらでんのふかくのみ、きん大きんりきんのし、かしらうてやはやせやはたんぼう、彼しやくきやうもかくやらん、追廻り毛をふるひ、きばをならして爪をとぎ、花にはひ枝にふし、くるひしていを其まゝに、かくにうつしてし、とらでん、いぎやなごりの拍子をと、世々も盡せじ松の葉の、ちりうせずしてときわぎの千世萬代のことふきを、かなで、舞をぞ納めける、人々是に興をなし、いぎ夜もふけぬしばしも、さあ御床と氣をつけてカ、ル世之

助高尾諸共に三重ひとつとこにそ上「ふしたまふ、げにあやにくや月に雲、花に嵐や世の助の、下部來て都より、きうの御用の御飛脚、急ぎ御歸りましませと、大いきついで申ける、宿屋の者共是をき、つぐしげにかくと云、次郎はやがてをくにゆき、其趣をのべければ、うき世心もとなくて、はからぬさはりせひもなし、けふにかぎらぬゑにしなり、ちかの御げんときぬ／＼の、袖引わけて出たまへは、高尾いつよりむつましく、くるしからざる御しゆびなら、夜あけておかへりましませかし、心もとなふ覺ると、といめ申せばうき世の助、つぐしげが供すれば、あやうき事はなき間、心安かれ重ねてと、ひかふるたもとをふり切て、心つよくもかへらるゝ、是を限りゑにしとは、後チクリにぞをもひしられたり、たかをばひとりぼうせんと、御跡見送り立るたり、すしましたりと鬼つらは、くだんのぼたんの花のかめ、ふみ破て立出、しんにしこみし刀をさし、たかをがそばに立よれば、高尾驚きカ、ル逆んとするを、いだきとめ、つれなき君やかく迄に、心をつくす某は、いはずと見しり給ふべし、心に隨ひたまひなばおそ

らくは此いへに、山吹の花さかせ、ねびきにやかたへうつしつゝ、替らぬ中は姫小松、千世をこめつゝ、もろしらが、いたゞく迄も君とわれ、しつほと語り申べし、かくおもてこそこわく共カ、ル心はやさしきわれなるぞ、いかにくゝとくどきける、高尾大きにせき上り、かしこへかつはとつきたふし、ながれたなき川竹とて、なぶり給ふか女郎も、女郎によりての事、うき世さまと命をかけ、夫婦の契約なしぬれば、いかほとにのたまふ共、心をみだすわれならずと、耻しめて申ける、鬼つら聞て腹をたて、ゑゝすいさんやけいせい、色なればこそかほど迄、心をつくしとやかくと、いへばいふ程かつにのる、此上はせひ共に、力づくにてなびかせん、あさ返答はいかにくゝと、りふじんにいだきつく、たかを今はこらへかね、鬼つらがさしたりし、刀を引ぬき打て懸るカ、ル鬼つらは是はと辻まはる、たか尾ひけうや餘さじと、追つめられてせんかたなく、一太刀うたせつと入り、刀をうばひ取てふせ、扱だいたんなる女めや、さあさしころすがいかにといふ、らうせきものところへ立るに、鬼つら人にしられじと、カ、ルむざ

んやたかをが心もと、ふた刀にさしころし、人立さはぐにまぎれ出カ、ル行方しらす辻のびける、あげやの一家驚て、高尾を切たぞそれくゝと、曲輪一同さはぎたち上ハヤ三重を下へと上「かへしける、みなく立より、やがてたかをいだしあげ、心地はいか、何者か、かくはなせしぞいかにやと、さまくゝに問けれど、はやこときれてみへければ、涙ながらに盛りのはな、思ひをこがすはしば村、戀の煙となしにけりカ、ル誠にふびんのしだいやと、貴賤上下をしなべて、皆おしまぬ、者こそなかりけれ

第四

旅の衣はすゝかけのくゝ、露けき、袖やしほる覽、太郎くはんじやが申やう、爰は名にあふむさしの國、都に増る花の江戸、敵たへまも此所に、罷あると承る、さきんご様にも廻りあふ、便に神社佛閣や、名所きうせき御詠め、うきたび忘れませと、あないのためにさきにたち、あれ御らんせよ名ところの、花よりさきに咲梅の、ゆしまかんだのみやしるより

地下谷はるかに見をろせば東の三重みどうむねたかく、くもゐに見ゆる大をん寺、おがみカゝめぐりて車坂、花のあらしをいとへとて、其名もよしやべうぶ坂、さかりの春は芳野にも、増る上野のながめかな、利益もたかき山王や、きせんくんじゆのふうぞくの、はでな姿や一文字、色のかゝ笠だて染の、もよう品々なし帶、濡たすがたのやさしくも、深く人目をしのふの岡、またしのはずの御神は、地むすぶの神と聞からに、わかれし人に今ひとたび、廻り地逢せて給はれと三重させいなしつゝ、行するゑの、尋る君ぞ小石川、旅のつかれはうし天神、しばし休らひぬかつきて、名に大くぼの柏木の、ゑもんさくらも春ならて、立へだて行霞か關、思ひはたへぬ玉川の、瀧のながれの糸打とけて、とけてみだれて、いつか青山つまゆへに、こゝろをつくすこんわうの、カル其舊跡もあとになし、とばには三重あらぬ高繩手、海つら遠く詠むれば、釣する小船、くもまにならぶ、ほかけふね、さながら須磨やあかしがた、朝霧わけてびんせんし、むかふにかすむ安房かづさ、遠見るうちにこがね共、西門跡につく田嶋、三つまたわくる

せをはやみカル露にきらめくしいの木は、幾世へぬらん石原や、戀敷人をまつち山、二丁のおふね名にしあふ、おせやれ男、ういた浪とや花川戸、爰淺草の觀世音、三社權現明王院、朝露むすぶいほが崎、日本堤のはるくくとチクリ金杉千壽詠めやり、はし三重ばの方へぞ去歸らるゝ、見れはふりたる寺院あり、かたへにもみちいろつきて、夕日にそむるくれなゐは地二月の花も霧嶋も、及ぶべきとはみへざりけり、其もとに石塔たて、四十計りの僧一人、かね打ならし聲哀れに、念佛申ていたりけり、いかさま是はゆへあらんと、立寄り衣の袖を引、我々は此地始て一見の者なるが、いまだ時より色つきて、かゝるもみぢは珍敷、殊になき世の印と見ゆ、いはれを語り御きかせ、侍へかしと仰ける、僧は聞て此塚にはカル哀れなる物語、かたりて聞せ申べし、此きういんは、正覺院と申なりカル是成もみぢは色里に、其名も世上に高尾とて、皆人なづむ君なりき、中になじみも深川に、都方の人なりとや、うき世とかやに身をまかせ、外の客をばふりつけて、あはづの森のくづのはの、恨をふくみし物ならん、去年七月末の比、やみ

はあやなしあへなくも、かいし立のき候なり、なげくにかひなくなきからを、此所にほうむりて、御らんのごとく戒名は、典譽妙信と申なり、常にもみちをこのみつゝ、紋にも染て其名さへ、たかをとつきし君なれば、印に是をうへ候、カル色ある君が印にや、もみちもたぐひあらざれば、世の人なべてあづまなる、たかをの紅葉と申つゝ、名木にて御座候、拙僧もかの里の、ほとりに近き庵室に、名は道哲と申つゝ、此君のときの僧、いたはしく存そゝ、まいど参りてゑかうをなす、みれば何れもさんゑの身、御けちゑんに打寄て、廻向ましゝ候へと、委く語ればたが袖はカル都といふに心つき、扱哀なる事共や、地其高尾に逢給ふ、深川のうき世とは、いか成る方にや侍らひし、ぐそうひそかに承る、都にてはうきだの左金吾、今此あづまに御下り、御名をかくさせたまひつゝ、浮世の助とは申せしとや、姫君扱はと嬉しくて、そのうき世の介こそは、わらわが尋る妻の事、ふしぎの人に逢参らせカル妻の行ゑをしる事も、ひとへに神の引合と、悦びなみだはせきあへず、道哲は心得ず、見れば男子の姿にて、うき世の

助と妻とは、争か仰有けるぞ、さればにて候、其浮世どのこそは、都にてうきだの左金吾、時世とて、わらわが二世と契たるつまカル申もいか、耻しの、もりてや人にしられんと、廻國修行の姿となり、めくり逢んと思ひこめ、今むさし野の糸すゝきカル、みだれて又もあふ事の、便を聞て嬉しさは、地覺し召ても御らんせよと、装束をぬぎ捨て、委く仰ありければ、道哲はたと手を打て、扱々いとしき御しんてい、然らば拙僧御供し、深川へ参りつゝ、たいめんなさせ申べしカルかりそめのうきふしの、一夜つまとはとや申べき、地かりそめのうきふしの、一夜つまとは申せども、高雄もひとへにかの方をは、偽りならずいとおしみ、申せし人のむしよなれば、一へんの念佛をも、御ゑかうあれと申ける、姫君もいざさらばと、一所に寄て南無ゆうれい、成等正覺とんしやう菩提アイノ手しやうこの音もすみ渡り、名もなつかしみ宮戸川、都鳥も聲添て南むあみだ、佛みだほとけアイノ手彌陀佛と、淺茅が原のさうゝと、風ひやゝかに身にぞしむ、ふしぎやもみちのかげろひて、塚のうしろにすごゝと、たかをがすがたゝちあらはれ、

あら有がたの御追善、申たきこと侍らひて、ゑんわうにいとまをこひ、是迄あらはれ候なり、されば遊女はことなれて、地人のこゝろにつゝむ色、詞の外に通るぞかし地その御かたにはうき世さま、いもせのけいやく候ひし、たが袖姫にてましますかや、耻かしながら川竹の、ながれの身とてみづからも、ふと此君にあひそめ川、深きなじみに身をしづめ、此世からさへおそろしき、鬼つらと云惡性の、つらき恨になしきも、やいばに懸りむなしくなる、くるしき此身のありさまを、うき世さまに御つたへ、なきあたとひてたび給へ、さなきだに女の身の、五障三じうの、おもきさはりにさよ衣、わがつまならぬかさねつま、うきふしゝげきながれをたて、かたちをよそほひ色有し、詞の露に濡衣の、人に思ひをかけたりし、むくひのせめはひまもなく、はやときぬといふ聲も、ふるひわなゝき風はげしく、身にしみ渡り、東西くらゝ、有つる所忽に、かうくはうたりしのへとなり、鳴神しんどういなひかりハヤ三重すさましかりける上しだいなり、むざんや高尾は、世の人の、思ひをかけし泪のあめ、詞打しぐれつゝふりか

かれば、はだへにくれんの氷としみ、たへかねこかげへ立よれば、やいばのせめに木々の枝、つるぎと成て此身をさく、カルあけにそまりて立まよへば、くろかねのきばある犬ハヤ三重すさましき聲をあげ、きばをならして上飛かゝる、こはかなしやと、つへをあけ、うて共くばんのうの、せめくる犬にせんかたなく、遡んとすれば左右より、のみすてたりし酒の波、人をやきたるほむらは又、めう火と成て、打かけくわつかなる、父母兄弟のためにうるカル身のせんこんのほそ道へ、ころびまろびて遡行を、あだにちかひしせいしのからす、くろかねのはしをならし、まなこをぬかんと飛來るカル前後左右より責られて、せんかたなくてふす所を、むらがりよりて引きさくらふ、道哲さはがすがつしやうし、南無や朝日のみだ如來と、名號せめかけとなふればカル有がたや紫雲にのり、ひかりを放て立給ふカル其時高尾は手を合、なむ阿彌陀佛と、となふ聲の下よりも、みだの利劔にあくごうの、皆ことごとくおそれたり、たかをもはつとかげきへて、地ごとくみへしは忽に、みだのちかひの有がたき、正覺院と成にけり、人々き

いの思ひをなし、念佛申それよりも、うき世の助へ
といそがるゝ、あつはれふしぎの事共やと、きせん
上下おしなべて、皆かんせぬものこそなかりけれ

第五

其後、夏立て、はや秋きぬと文月や、今宵は名にあ
ふ七夕の、いもせをわたすあまの川、まれのゑにし
と思へ共、人界の五十年、天上は一日にて、一千歳
をたもつとかや、かく限りなき契りさへ、あはれとお
もふ世の中に地我ははかなやかはしたる、たが袖姫
には引わかれ、また馴そむるもみちなく、ひとりこ
がるゝ捨小舟、あしの丸やのかけ作り、琴酒軒と額
を打、酒にうき日をゝくるをば地哀と思へ小ぼうし
と、しやくをとらせて一つほし、七夕を打詠め、死
せし高尾はせひもなし、うつりがわくるたが袖に、
逢せてたべと打なげき、しばしは爰に思ひねの、こ
ひ敷夢をむすばるゝ、かゝる所にふしぎやな、ほと
りにしげむあしのまに、星ひとつさつとをつ、あや
しやと見たほふに、いきやうくんじて風そよき、さ

もいつくしき天乙女、あしまをわけてかぢのはに、
五色の巻筆棹さし出、うき世の助に打向ひ、みづか
らは織女よ、御使に参りたり、君はこれけんぎうせ
い、色道を世の人に、しめさせ給はん爲として、い
こくにてはゑんしと生れ、わか朝にては光る君、有
原の中將、今又びなんたぐひなき、うき世の助と代
代顯れ、男女のわけの品定め、今宵そみつる天津そ
ら、定るよる瀬なる間、御迎に参りしと、申ければ
うき世の助、思ひよらざる御迎、假は過去はそう天
の、ひこほしのせいとても、かく人男にへだつる身
の、争で天上成べきと、仰ければ天乙女、此かぢのは
に御召あれ、みづから御供申さんと、勧むる心に乗
移れば、乙女は忽びんがとなりカルかぢの葉共にい
たいきて三重天上するこそ上ふしぎなれ、下かいを
はなれてくものなみ、霧のまわけてやゝはるかに、
のぼると思へば浮世の介、昔に心立かへり、こは古
里に近つくとカル悦び給へはけんぎうと三重姿かわ
るぞ上ふしぎなる、それ天上と申せしは、此かいよ
り八万由旬、しゆみせんのかやうじやうを、たうり
てんと申つゝ、帝釋の喜見城、三十三天だんゝに、

限りもしれぬくものうへ、其半ふくに四王天、四天のいます都にて、日月爰を御めぐり、青うなはらは星の天、ほくしん諸星のわうとして、地是にむかふてでんをなす、中にもわけて七夕は、銀河を中にへだてつゝ、いもせむかふてでんがくあり地白かねのついちをつき、こがねのろうもん峰かゝやき、けんきうの御かたには、れいかうかくと額をうち、しよく女の方には、てんしやうでんとかくをかく、百官けいしやう出むかへば、けんぎうは久しやと、一禮有ててうあいの、しゆすより黒き御牛に、金のはなつらくれなるの、打緒を取てゆふくと、七寶の御ゆかにカ、ルなをらせ給へはいづれも皆チャクリかつがうなしてぞ悦ひける、其時にあま乙女、おり姫の御かたに、嘸待遠におはすらん、夜もいたくふけぬまに、御入有て打たへし、ゑにしをいそぎましませと、いさめたてつゝさきにたちカ、ル夜光のあかりさしあげて三重あまの河邊に上「出たまふ、見渡せば、あまの川なみすいしくて、めのうすいしやうさまゝの、岩地くみ多きひまゝに、さんごの枝のをひしげり、五色いろどるしな鳥の、ねをあらそひてさゑづるは、

おんがくするかとうたがはれチャクリしんにをすます川水に、たがつま音とは、しら波に、琴の音かすかに聞へけり、七夕はたゝすみて、是はいづくのしらべぞや、おとめにつこと打笑ひ、君待かねており姫の、あそばすなりと申ける、七夕は聞召、こは偽りやさもあらば、妻むかへ舟いかにして、まれのよるせにおそきやと、仰ければ、こはやく、わすれさせ給ひけり、其年毎に品かへて、もみぢの橋や笹小船、こよひはうじやくなりけるか地いかにをそきとふくる夜を、恨みてたちし川波に、一度にさつとむれきつゝチャクリつばさをかはし一筋に、橋を渡せばけんぎうは、むかふへわたり給ひしに、打ならびたるかさざきは、雲井三重はるかにとびさりぬ、しよく女のみあやに成しかば、御まへの天乙女カ、ル百味のちんにごんずの酒、さカ、ルまゝもてなし奉る、しよく女盃御取あげ、さゝげ給へは、けんぎうは、御さかづきを取上て、こは珍らしや逢事も、玉の盃相替らず、契りも深きゑんおうの、あひことふきをなすべきに、いざこなたへと顔をよせカ、ルひとつにむすぶあひ盃、浦山ざるはなかりけり、織女けんぎうへ打向ひ、

君下かいへ御こし有、凡人と御契り、心かはらせ給ひては、天上かいへ又二たび、のぼらせ給ふ事かたしと、いもふとぢよをたが袖姫、じゆん女を高尾と云遊女に、下して色をふかせがせたり、御めにかけん御そばの、カル天津乙女に仰有、忽爾女を御召有る、ふぢよじゆん女來らるゝを、見ればふしぎやこはいかに、二世と契りしたが袖姫、なじみも深き高尾をなりカルこはそも夢かなつかしやと、互に左右へ取付て、しばし涙にむせばるゝ、時に順女はからずも、ふとなれそめてもみぢばの、あかぬ別れに露の身も、消る計りに候ひしに、御目に懸るはうどんげの、をりひめさまには年毎の、其文月のよすが有り、こよひのよるせは自らに、まげておゆるしたたび給へと、涙にくれてぞかこたるゝ、ふ女は内にねたむ色、外に顯れなふ順女、我は始めのそなれ松、カル君にまとはる藤の色、ゆかりの身とてすがりつく、順女はよしや織ひめの、御ふけうは蒙る共、今宵はわらはとしきたへの、袖をかはして給れかし、いざ諸共に、ねみだれて、むすばふれんとけんぎうの、御手を取て立ければ、カルふぢよも取付きこはいか

にと、地はなちはやらじと引といめ、左右に取付引あひて、情をあらそひ給ふにぞカルけんぎう今はせんかたなく、おもひは二つ身はひとつ、何れといはんやうもなし、いごをあらそひかちたる方、手枕なるぞと有ければ、仰にまかせるりのばん、黒白の石をいれ、金銀のごげそへて、御まへにこそなをしけれカル順女とふ女のはらからは三重いろをあらそひ上「打むかひ、こゝろをくたく數々は、あまの川せの星のかげ、心にとめてしめやかに、うつや先手は順女なり、ご地手はふ女とぞ定めらる、何れ花もみぢ、ごいしの色はるんやうの、じやうゑの二手うつ音に、あうんのひいきそなはりて、生死のめいご目前に、ねはんのさうを顯はせり、うつ手ははまのまさごにて、石のたてさへ女ごの、けんじのまきに三重手ならふて、やさしふもまたうつせみや、のきばのはぎとあらそひて、花を地ちらすやは、きいの、其ゑあはせのかちまけに、ねたむ心は竹川の、ふしある所をきりつばせんアイノ手人のうつ手のつゝめ共、白くみへぬる夕顔の、こなたのはしどみたてよこに、まとひてとらん玉かづら三重つゝかぬ石を巻柱、しちやうにい

ざやかけふよ、色の二みち梅がへや、こうはい、匂ひかほる共、わきかぬる手のさりとては、身を盡してやうち橋の、こなたへちらと飛はたる、みだれてせむる責合の、いざ／＼石を二つ三つ、よゝのふしふし竹のふし、あふせあらそふかちまけは、手をつくしてこそ打にけれ、けんぎう立より見給ふに、碁の手もきれて一石もカ、ルさらにたいごとみへにけり、其時けんぎう宣ふは、何れをわかたぬ其うちにも、せん手こそは一石の、順女がかたによはみ有、此碁はふ女がかちしぞかし、カ、ルこよひのよるせは御身ぞと、寄そひ給へは悦びて、嬉しや深きゑにしぞと、けんぎうの御手をと、打ゑみ一まへいらんとす、順女はけしき替りつゝ、ゑゝ恨めしやねたましや、まさしくこの碁はたいごぞや、つらくも今の仰かなカ、ル今宵のゑにしは叶はじと、めんしよく引かへ忽に、ひたいをつくさく／＼はぼくのつのカ、ルごばんの上に立たりしは、扱すさましかりける有様なり、けんぎうは御らんじて、ふ女をかこひて、御劔をぬき、向はせ給へば順女は又カ、ルふぢよを引さきすつべしと、くるり／＼と追まはすは三重すさましか

りける上「しだいなり、けんぎう今はせんかたなく、大ひの御經取出し、心中によみ給へば、おんれうしだいに足よは車の、かしこへかつはとたふれしが、又をき上り口をしやと、かくふぢよが命をとらんとカ、ル飛かゝらんとしたりしが、御經の光明に、たらん力及ばずしてカ、ルそばなるごいし押取て、はらはらとかみくだき、かしこへくはつと吹かくればカ、ルめう火と成てもへ上り、煙の内に立紛れはや明わたるさよ千鳥カ、ル川風と諸共に、常の所にふしいたり、かゝる所に、たが袖姫、尋ねて立入わがつまかと、宣ふ聲に目を覺しカ、ル是は／＼と計りにて、御悦びは淺からず、げにかんたんのかり枕、小てうの夢もかくやらん、あつはれきたいの事共やと、きせん上下おしなべて、皆かんせぬものこそなかりけれ

第六

其後、浮田の左金吾時世はカ、ルたが袖姫に廻りあひ、御悦は淺からず、たが袖姫宣ふは、正覺院にて高尾が事、かやう／＼の有様と、委く語らせ給へは、

浮世之助聞召、我も夢中にかゝるてい、是又一定高尾がれい、追善を請んため、ま見ゆると覺へたり、殊に朝日のみだ如來のれいげん、古今にたのめしなき、靈佛にて有ければ、三浦が方へ立こへて、此段々を語り、開帳を致つゝ、諸人におがませ申なば、大き成功徳といひ、其上高尾が追善はカ、ル是にましたる事あらし、此義いかにと申さるゝ、道哲を始とし、是はよろしき御事やカ、ルはやとくゝと、それよりもヲクリ三浦が方へぞ急かるゝ、かしこになれば、あんないこひ、ほうじゆんに對面し、右の段々語らるゝ、芳順承り、扱は左様の御事かや、かゝる尊き御佛を、諸人におがませ申さんとカ、ル口道哲もり申三重開帳するこそ上ありかたき、我もくゝと參詣し三浦が館はくんじゆなす、かゝる所にたへまのづかう鬼つらは、うはきにもれざるくはんくはつもの、過しらうぜき人しらじと、忍びあみ笠ふかゝと、三浦がもとの朝日のみだ、拜みなからも色姿、まがきくを見物し、ヲクリすり違ふてぞ通りける、次郎冠者にはたとあふ、おにつらは見わすれしか、そのまゝにてあゆみゆく、二郎冠者は能見覺へ、君の敵ぞごさ

んなれ、是究竟とそれよりも、世の助姫にかくと云、人々悦ひ用意して、ほうじゆんにもかくといひ、歸るを待こそ不うんなれ、是をはゑらて鬼つらは、のさのさと大門口、あゆみ出るを町の者、拍子木合敵打、のがすなと呼はるにぞ、門さしかため押取まくカ、ルかごの鳥とや鬼つらが、今身の上にぞしられる、時に人々かけ出て、いかにたへま見わすれはせじ、齋藤兵衛定房がめいたが袖を、つと左金吾なり、のがれぬ所ぞくはんねんせよ、いかにくゝとつめかくる、鬼つらはつと驚きしが、よしゝ今は力なし、ぢんじやうに立別て、勝負を決せよ尤とカ、ル双方へ立わかつて火、ハヤ三重花をちらしてたゝかひける、され共左金吾主従は、命限りにたゝかへは、つかうが無二とたのみたる、角田赤堀兩人も、手の下に討れけり、たへま今は是迄と、四尺四寸の大たち、みつけん指かざしカ、ルうき世の助にわたりあひハヤ三重いきをはかりに去たゝかひけり、本より名にあふかつひろが、まくり立てうつほどに、既にあやうくみへける時、姫君長刀とり直し、因果は廻る車切カ、ルはつと計りをさいごにて、ついにむなしく成にけり、さて

左金五、所の者に一禮して、二たび都に歸洛有り、
富貴の家とさかへける、千秋萬歳目出度と、貴賤上
下おしなべて、皆かんせぬ者こそなかりけれ

源氏花鳥大全

荊山

所謂、荊山と申はそも、楚國のたいせいをまもり、五湖のせつけいを帶たり、前には海水じやう／＼として、月眞如のひかりをかゝげ、うしろにはれいしやうぎゝとして、風じやうらくの夢をやぶる、やうたいしもみてり、一聲の玄鶴そらになく、はこ秋ふかし、五夜のあいゑん、月にさけぶ共云つべし、かく物すごき山中に、住なれし身はさもあるに、汝は住もなれずして、嘸心うく有らん、乍去いにしへも、雪山に薪をこり、あんじんにこぶしを切し人も有、身をぢんがいのごとくにし、心を鍊牛にひしてこそ、積功しやくくのせいき顯れん、彼一盃のふんゑは、こゝの玉札成けると、長房はしらざりき、汝もわれに師匠の禮カ、ルほうをんをなすべきか、いかにいかにとのたまへば、晴明おくするけしきなく、誠に師恩の高き事、たとふるに物なし、命のつゝかん其ほどは、ほうじやの勤いたさんと思ひ切たる有様な

り、爾時そのとき伯道、よきかな／＼晴明と、持給ひたるしゆじやうをば、數千丈の谷そこへ、だんぶとなげいれ給ひしに、せいめいついて飛でいり、ながる、柱杖をとらんとすれば、白浪さかまく水煙、がんせきいはほに、あしもたまらず早き瀬の、どふでもあられと落くる水に、ながる、柱杖をとるべきやうこそなかりけれ、ふしぎや川浪立かへり、俄に川霧立くらがつて、柱杖は忽ち飛龍と成てカ、ル浪間に出るハヤ三重其いきをひすさまじかりける上「次第なり、晴明つるぎをぬき持て、飛龍にかゝれば飛龍のいきをひ、修行のいりきにかんをうし、せいめい共にかづき上げカ、ルもとのいはほに上りしは、ハヤ三重ふしぎ成ける」次第なり、時に伯道、せんざい／＼せいめいと、彼一卷を取出し、是こそほきの眞傳なり、汝が家につたひにし、金鳥、玉兎集といへるも、皆此内にこもりたり、汝は此書をたづさへて、日本へ歸るべし、あやうき大事いで來れり、いそげやいそげとのたまひて、御いとまたびければ、飛龍のかうべにのりをゑて、天にかけり、地にわだかまつて、ちすいをかへしてうせにけり

第一

偕も其後、梅花の清くかんばしきも、はなはだやせて事たらず、桃はまだこへたれ共、色ふかふしてなつめるとや、思ふになをくかたちよく、あいすべきもの世にまれなり、爰にくわうとう、六十五世の帝をば、花山の院と申奉る、時の關白藤原の頼忠、まつり事わたくしなく、天子をはさし給ふゆへカル四かいの浪もをだやかにチクリをさまる、みよこそめてたけれ、扱又后宮に后妃あまた有中に、錦のあけもうばふべき、藤つぼの女御、さはらばきゑん萩の戸に、かうきでんの女御とてカル春たちぬれば芳野山、花かとみゆるこびあれば、秋の詠めのたつた川、チクリ錦をさらすみやびをそへ、いづれもおとらぬをんかたち、朝な夕なの御ゆうゑん、なくんはあらざる君達にて歌やつしおしかのつものつかのまも、玉座をはなれまします、中にもかうきでんの女御には、君御心イロ地ふかければ、藤つぼの御方は、朝夕是をねたましく、うへにはこびを見せ給へと、内には如

夜叉の、ごうをまぬかれ給はず、雪のあふぎもきへぬへき、思ひにむねをそこがさるゝ、扱時の武將には、清和源氏の嫡流、攝津の守頼光、誠に有てたけからず、古今まれなる名將なり、平氏には桓武のかういん、是持の舍弟、平の左官重茂、血氣の猛將兩輪として、君をしゆごし奉れば、カル大内山の霞そへ本フシしなをにたゝぬ、日もなくて、誠に寛和の時とかや、ことさらけふは、名にしあふ、うこの馬場の日折とて、加茂の競馬の御まつり、藤つぼ、かうきでんの女御にも、御見物有度よし、御ねがひましますゆへ、御預りにて有ければ、平の左官しげ茂、源の頼光兩將供奉の勅誼あり、はや／＼みくるまに召るれば、二條を東へ千本を、北の方へとといろかし、右近の馬場へと出給ふ、花やかなりける上、次第なり、けいばのぎしきにぎやはしく、カル洛中浴外又畿内迄、きせんくんじゆのけんぶつは、をびたゝしくこそみへにけれ、扱くらべ馬の役人、思ひ／＼のしやうぞくに、かばのはゝきやきせんくは、つゆをふくめくふせいにてカルうわうざわうの追かけ聲ハヤ三重われをとらしと上はせけるは、世に目さま

しき、見物なり、かゝる折ふし、いそじ計りの男一人カ、んくんじゆの中を押わけて、けいごのゆばへに近づきて、申上たき旨あるよし、重もち頼光立向ひ、事の様子を問給ふ、時にかの者某は、天文のはかせ秦の道満と申者にて御座候、某いへのひみつ書に、金鳥、玉兔集といへる、天文の書有、是にて窺ひ奉るに、帝王位をさらせ給ふ、すいへん顯れ候故、后妃の内、御てうあいの一たる方、たいゐしんしとかたゝがひ、てんだう火木の悪性、是國家ぞうらんのもとい、わたくしならぬ御大事、やむ事をゑすして、恐れながら言上と、謹てぞ申ける、右大將かげかた、けいばのちよくしを蒙り、ゆばくの内におはせしが、此よしを聞給ひ、立出て宣ふは、天晴ゆゝしき御大事、后妃のうちに一なるとは、只今に至ては、かうきでんの女御なり、君の御爲國のため、急ぎそうもん申つゝ、里へうつし奉り、カル君御物いみ然るべし、此義いかにと有ければ、平の重茂げに尤と同心す、時に頼光いかに道満、后妃の不吉と申には、ただしきしやうこはあるにや、そこつの義を申上げ、後悔さきに立べきぞ、時に道満懷中より、一卷を取

出し、書の表に顯れ候、勘文の通り、言上いたすと申ける、カルかゝる所へふしぎやな、かたへのまつにしろくもの、かゝるとみへしが中よりも、せいめいはとんで出、人々に打向ひ、某こそをんやうのかみ、せいめいにて御座候、入唐のこうをとげ、つゝ、がなく歸朝なす、しさいは兼てぞんじ、事を伺ひ罷在候、いかにどうまん久しやな、われ渡唐のきざみ、某が書をぬすみ取、うつすとは思ふ共、非道にくらむがん力の、たばかられし淺ましきよ、ひじする金鳥玉兔集は、某是に所持して有、汝がかがふ其おもて、皆よこしまのぼうけいなり、われ歸朝する上は、中々もつて及ぶまじカ、んしやうこのあらば汝が書、披き見せよと申ける、どうまんはつと思ひしが、さあらぬていにてあざ笑ひ、抑々此書と申は、文殊ひさうの一卷、我より外にしろものなし、汝が書こそ偽りならめ、いらざる事をいはんより、そこ立されといかりける、時にせいめい、ろんは無やく書をひらさ、勝劣を顯すべし、どうまんをくせず押ひらくに、ふしぎやもじのすみきへて、皆白紙とぞ成にける、晴明いかんと責けるに、どうまんは詞なく、

赤面して遊行を、頼光それあますなと宣へは、定光末武つゝとより、カルどうまんを取てふせ、高手小手にぞいましむる、其時頼光、けふはけいばのさい禮、後日に事をたゝすべし、せいめいにはさんだいあれ、どうまんは某が、宿所へ引てせんぎをとげん、扱女御にはおかへりあり、然るべしとそれよりも、ぐぶのぎやうさう引つくりひ、定光末武埒押破り、御車をとゐろかす、右大將かげかた、こはろうせきなり頼光、けいばもいまだなかばにて、藤壺の女御にも、御歸りのさたもなし、其上勅使を蒙る身に、一禮もなく埒破り、うらかたのさうろん、尤邪正は顯るれど、をこと獨のさばきやう、さりとてはわが儘なり、しんていあらばまつすぐに、只今こゝにて申されよカルさなくは此場はさらすまじと、氣色かはつて申さるゝ、頼光は聞召、しゆごを蒙る某、かくそうぐしき祭禮の場、かうきでんの御供して、歸るがひが事候か、但覺しめす儘ならねば、残念に候かと、にがく敷も宣へば、重茂はすゝみ出、いかに頼光、貴邊の詞何とやらん、ゆへありかはに存るなり、身不肖ながら某も、藤つばのしゆごなるぞ、

ふぢつばおかへりなきうちは、かうきでんの御車、まつたくさきへは叶ふまじ、我々をおし下さば、この重もちがうでさきにて、車をとめんらいくわうと、いきをひかゝつてのゝしれば、渡邊の綱つゝと出、こはぎやうぐしき有様かな、頼光供奉の御車、とめて見たまへぐと、四方をきつとねめまはせば、重茂いかつて、きつくわいなり、おのれ目に物みすべしと、たちのつかに手をかくる、坂田の金時かけ來り、てきたふ奴原片はしより、つかみひしぎて捨べしと、飛て懸るを綱をしとめ、はやまるな金時と、さまぐにせいすれどカルもとよりこらへぬあらものにて、せいしかねてぞ見へにける、かげかたも重もちも、此いきをひに肝をけし、すこしちゝする其隙に、頼光みくるましゆごなして、だいをさしてぞ歸らるゝ、天晴けうのちんじやと、貴賤上下をしなへて、皆かんせぬ、者こそなかりけれ

第二

其後、右大將かげかたは、平の左官しげもちと、つ

れだちやかたへかへられしが、小聲に成て宣ふやう、
扱も藤壺の女御とは、のがれざるゑんにより、深く
も頼まれ道満を、かたらひ事を伺ひて、けふ本望を
達せんと、思ひ立たるかひもなく、せいめい歸朝し
剩、どうまんとりことなす、後日にかれを糺明せ
ば、たくみのしだいを云もやせんカ、ルいかゝあらん
と大いきつぎ、せんひをくいし御ことばに、重茂眼
をいらゝげて、かく大望を思ひたつ、某とても女御
を、預り申せしかひもなく、かうきでんの御るせい、
ひゝにつのらせ給ひなば、頼光今さへぎゝめくに、
ほこさきつよく成敗を、只獨にておこなはゞ、中々
無念の次第なり、幸こよひの御とのゐ、頼光番にて
有ければ、ぐぶよりすぐに大内に、勤あらんはじで
うなり、今宵ひそかに頼光が、やかたへ立越へ夜打
して、道満をぬすみ取、ひそかにがいし後日のさた、
頼光せひをたいさすして、無せんぎ成ッよしきろく
所へ申上ケ、あはよくはかかうきでんをもなき身と
なし、本望を達すべし、それも叶はぬ物ならば、大
内山をよそになし、朝敵の名を立て、ていとをやみ
になし申されカ、ル御心安かれと、手に取やうにぞ申

ける、かげかた二のいきほつとつき、ともかくも此
上は、万事貴公にまかすなり、よきにはからひ給ふ
べし、はやとくくゝと有ければ、御暇をこひ重茂は
カ、ルしたくへ歸り用意してハヤ三重日のくるゝをぞ
上待居たる、是は扱置、頼光は、晴明諸共參内し、
加茂のけいばのちんじの事、どうまんが有様、せい
めい歸朝しふんみやうに事顯れし其旨を、いちくゝ
そうもんいたさるゝ、主上ゑいぶんましゝて、し
つとのねたみは藤壺が、朕を掠るたくみのほど、甚
げきりん限りなく、今宵の中に藤つばを、親里へ送
るべし、扱せいめいには、御ほうび數々給はりて、
天門の役となし、どうまんをばをんるのつみ、頼光
かたくしゆごすべしと、御みすさつとをりければ、カ
カルせいめい面目はどこして、有かたしゝと、頼光
に式代あり、天門屋敷にうつらるゝ、扱頼光は平井
の保昌を召れつゝ、こよいは某とのゐの役、おこと
はやかたに立かへり、どうまんのきびしくしゆごし、
其上にもてきたふ者の多ければ、構てゆだんいたさ
るゝな、早とくくゝとの御誼なり、保昌よしを承り、
いさゐ心へ候と、御まへを罷立、やかたにかへり下

ぢをなし、門々をかためさせカ、ルきびしくしゆごせし其有様、げに三重ゆゝしくこそ上見えにけれ、既に其夜もごやのころ、平の左官重茂は、三百餘きの兵を、カ、ル野ぶしのごとく出立せ、姉が小路へ押よせて、物になれたる忍びの者、二人堀地を飛こへて、ねいりし下部を指ころし、門をひらけば三百よき、皆廣庭へはせ入しが、されとも中門きびしくして、カ、ル内へ入べきやうもなく、少ゆうよをしたりける、されとも平井の保昌、いまだいねもやらずしてカ、ル近じゆのぶしをかたらひて、物語などしいたりしが、中門のひろ庭にて、大勢の人聲は、まさしく夜盗かしれものか、かたぐ用意いたされよと、弓と矢つがひ立ければ、始はそゝやくぐんせいの、今は思はず大音上げ、門を破れとぎしめくを、保昌少もさはがずして、中門を押披き、指取引つめいたまへはカ、ルはやりをの兵ともハヤ三重たふれかさなり上射ふせらる、扱其隙に、御家人達カ、ルものゝぐかため切て出、軍はハヤ三重花をぞ上ちらしける、軍中ばの事成に、主は誰共しらねとも、六尺ゆたかな大男、大まさかりを引さげて、よあけば何のせんあら

ん、我につけやみかたのせいとカ、ルむらがる中にハヤ三重わつて入、はらりゝと上なぎたふす、ひとへにやしやのごとくなりカ、ル此いきをひにみかたのせい、ふせぎ兼てぞみへにける、平井の保昌是をみて、天晴てきやよきかたき、そこをひくなと云まに、れいの岩切かいかふで、打てかゝれば引はづし、かくれば拂ひうてばひらきカ、ル兩方めいよの兵術にて、しばし時をそかうつしける、かくてはいかにもどかし、よれくまん尤と、互に打物なげ捨て、おしならべてむずとくむ、只一ひしぎとなす所を、保昌古老の勇者にて、した手に入て四つがいを、ちぎれてのけとしめつけて、ひらいてはたとけたをせば、まつさかさまにたふれしを、何様しれたる曲者と、頓て繩をぞかけたりける、是をみて敵のせい、とりこのあらば後日のさた、カ、ル亂入てばひとれと、一度にどつとをしている、かゝる所へ四天王、やかたのさうどう聞付て、我もゝと大内より、一人さんに欠來り、カ、ル敵のうしろを無二無三に、はらりゝと上なぎたふす、かくてはいかい、叶はじと、重茂馬にむち打てカ、ル跡をもみずして逃行をハヤ

三重のがすまじいと上追欠る保昌しばしと押とめ、野ぶしごときの奴原を、おふても何のせんあらん、こなたにしやうこはとめ置たり、まづこなたへ來れよと、四天王の人々を、せいしとめてそれよりも、夜の明るをぞ待たりける、天晴かう成兵やと、きせん上下をしなべて、皆かんせぬ、者こそなかりけれ

第三

イロ地沉香亭のよきかほり、なくても色は紫の、はすへに匂ふ藤つばはイロ地秋かれに見しわれもかう、時しもをとる粧ひを、思ひ出ればかきくもる、ますイロ地みの鏡引かへて、我は恨みでくらせとや、ゑゝ腹立やとみかへれば、獨こがるゝ身のうきに、つれてはたるのあなにくと、扇を上げてはたとうつイロ地げにこよいは文月七日、かのもろこしの王建が、銀燭秋光、ぐはびやうすさまし、けいらのしやうせんりうけいを、うつと詠せし詩の心、カルそらのけしきと思ひ出の、らんかんに、立盡して、大内山はそなた

ぞと、中はこひしくうらめしく、詠めをくれと白雲にイロ地妻よぶ鹿の聲計り、我もかはらぬうきねぞと、とはず語りの手枕に、しばしまどろみ、たまひける

管絃

歌カ、リ「千年ふる、君の霧山本アシおまへのまつがゑに、ひなつるは、すをくへは、池のみきはに龜あそぶ琴歌天下たいへい長きうに、納まるニツ二重」御代の、ためしかや、花のはるのきんきよくはチャクリくはふう、らくにりうくはゑん、りうくはゑんのうぐひすは、同し曲のさへつり、月の前のしらべは、夜寒をつぐる、秋風雲井に渡るかりイロ三重かねの、琴ぢにをつる、こへゝなみだの露の玉章、いづみ涼しき、夏ぎぬはせみの羽ごろも、夕つゆの、草むらごとに、立よれば、あつさを増るとこ夏に、いわ井のみつを、むすびとめても白たま、しづくにたへやらんましら玉、筆にたへやらんチャクリたへぬをもひの、こひ草に、君かきまさば、むこにせん、みさかなには何よけん、

千世のちきりを、かねよけん、音羽の瀧のたきの、
 しろいと、糸くいとしやの、いとしけりやこそあ
 ふ事のせん、さんごをくだく一兩曲、こほり、ぎよ
 くばんにをつ千万聲、時の調子にきをそへて、糸竹
 呂律の、遊興は三重筆も詞も上、およぶまし、今はたい
 思ひたへなんと計りを、人の恨み世のそしりを、つ
 つむに心のいとまなく、いも、月にや待らんと、イロ
 地主上はそゝろに御心せき、左ちうじやう是なりと、
 頭の本地少將よしかねを、御供に召れつゝ、といろか
 しゆくみ車に、さなくとさゝんしのびの緒、霧のま
 がきもをぼろにて、月にはあらでゆふづくよ、御て
 んの邊りへ御車の、ながへをさしよせたりける時カ、
 ルかとりかづきし女房の、そともに寄そひゐたりし
 を、さきにたちたるよしかぬが、此ふせいを見るよ
 りも、君をそしと女御より、御迎の其爲に、つけ置
 れたる物ならんと、ぢじうのつばねかすけどのか、
 たれ成らんと尋れば、カル女房こたへてそなたに
 ぞ、待人有ていそぐらん、わらわは君にふかさるゝ、
 難波入江の捨小舟、萩の葉ならば時有て、秋風ふけ
 と音するに、かれにはをとる浦かせの、ときわのま

つと契りし物を、あだに替りし藤壺が、すこしおう
 らみ申さんため、是迄参り侍らふなり、車のながる
 も恨めしと、すがりついてそなきたまふ、よしかね
 是なり申様、扱は藤壺の女御にて渡らせ給ふか、ゑ
 いしんよろしふましまさねば、かさねて叡慮を伺ひ、
 よきにそうもん仕らんとカルかたへにたすけのけ
 奉り、御車内へ引入れば、イロ地こは情なしかたゝ
 と、すがらせ給へはふり放ち、カル猶取つくをつき
 たをし、跡押立て入ければ、イロ地せんかたなくもつ
 いぢの外、やまとがたりもからいしき、ひとり敷ね
 の袂たべなみだや、露けかるらん三重かくて主上は上
 「入御あれば、かうきでんの女御は、地官女達に打つ
 れて、御迎に出たまふ、主上叡覽ましゝて、こよ
 ひの月のさやけさの、ことあひたりし詠めをば、あ
 はれ諸共見ばやとて、是迄あこがれ來りし、勅諭あ
 れはかうきでん、わらは、君を待侘て、忍びねにな
 き候と、もゝに餘りし御こびは、てんねんみめうの
 御ようしよく、たぐひあらしと覺すにそ、叡かんは
 なはたかぎりなく、こやふみ月のしるしとて、その
 數々をかけられし、きりこたいこのなりもよし、こ

とに色繪をうるはしく、かみに切ばむるやうもじ、
いにしへ今のかせんをばカ、ルありくところ寫さ
れし

歌仙

ニツ三重「先人丸は、ほのく」と、あかしのうらの、朝
霧と、本地叡吟あればかうきでん、みぎはつらゆき、
さくらちる、本地木の下風は寒からで、チャリ空にしら
れぬ、雪ぞ降ける、げにや、ちる花を雪とまがふと
をもしろや、本地いせがよみぬる三々の山、いかにま
ち見んとしぶとも、たつぬる人も、あらじといへと
御身をば、いか成^ル山の奥迄も、まろはたつねにい
かにやと地勅誼あればかうきでん、げに勅めいなり
去ながら、こなたにも又逢みての、後のこゝろにく
らふれば、君まさぬ夜のひとりねや、あるは待佗ね
もやらで、ふけ三ツ三重行かねの聲、きけばむかしは
ものを思はざりけりとよみしはげにも、ことはりと、
思ひしられ候と、かこち顔にて宣へば、主上は由を
聞し召、しかなりくあたらの、月かたぶかぬそ
のうちに、いざくこなたへくと三重れん中ふかく

そよ「いりたもふ

うはなり打

イロシチリ「くねるこゝろのふぢつぽは、いよくまさ
る亂かみ、ほぐれかねだる思ひをば、筆にいはせて、
ふた下りみとの、こもりの折からに、御れんまぢか
く立よりて、さきつかたより歌仙共、御ほうへん有
けるが、此歌の心ばへ、御ひほうならせ給へかしと、
御れんの内へたんさくを、なげ入給へはかうきでん、
たれやと取上見給ふにカ、ル小野の小町が歌とみへ、
色見へでうつろふ物は、世の中の人のこゝろの、花
にぞ有けると、吟じさせ給ひつゝ、いともあやしと
み給ふに、思しよらざる藤つぽの、いとろうたけて
をはします、かうきでんは心へすや、雲井にくゆる
藤つぽの、とかふのつたへもまします、御れんに
近づき給ふ事、有べき事共おもほへず、藤つぽは聞
たまひ、をろかなりとよ大内山、ともに詠めしくも
ゐの月、ほぞをならへしふようぞと、人にいはれし
身の花も、かたえは残り片枝は一ツ三重秋くる風に、
ちりくゝと、ふり捨らるゝわがそでを、思しもいだ

さでなかまくら、いやかはらしなわすれじな、行末千世との御契り、詞聞も恨めし見れば猶、起ふしわかぬうづみ火の歌跡より戀の、責くれば、せんかた浪に立かねて、是迄參り侍らふなり、主上叡聞まし／＼

て、おろかなりとよ藤つば、カ、ルまろか心の替らずは、人に恨みは有まじきに、などかくねじけかたくなに、牛のつのもじすぐならぬ、はや／＼かへれと勅諚有る、藤つば承り、地かほど迄になげ、共、つらきは君に添ぶしのカ、ルあふむの鳥のくだけに、あだこと申もの有て、ますほのそめのゆへならめ、今は早是迄と、守刀をぬき持て、御れんの内へかけい地らんとし給ふを、かうきでん刀をうばひ、君にはむかふじやいんのつみ、我をな恨み給ひそと、心もとを指通すカ、ル差通さるればきも魂も、きへ／＼と成うせ、朝日うつろふ秋風は、身にしみ／＼とちんの上カ、ル夢は破れて藤つばは、御目をさまし給ひつつ、あたりを見廻しこはいかに、君を戀しと思ひねの、わが心から見る夢よな、吉にてもゆめにさへ、かうきてんの女御にカ、ルけをされぬるこそ口をしや、地猶も思ひは十寸鏡、見よく／＼今の恨みをば、カ、

ル牛の時詣して、思ひしらせん物をとて、面色替つてみへ給ふ、カ、ルじやゐんの、念ヲツヲをそろしき共、中々申計りはなかりけり

第四

其後、陰陽の頭晴明は、源の頼光と、殿下のみたちに参加つゝ、頼忠公に申やう、扱も此日、ほくとのへいていうすくして、かくせいしるんをおかしつゝ、月をつらぬく、すいへん顯れ候故、天文地理をくはいがうし、へんくはを伺ひ候に、ほうそをしゆそなす者はあり、ことに今宵は月ちかく、星の位の高ぶりて、くはきうに相みへ候、此由申上ん爲カ、ルはせさんじ候と、謹でぞ申ける、關白頼忠聞召、大きにおどろかせ給ひ、おぼろけならぬ御大事、神祇官にてはらいあり、御物忌有やうに、そうすべしと宣へば、せいめい承り、某家のひみつにて、邪魔將來のしやうげをば、はらひ除き奉らんと、白紙を申うけ、神道ひみつの文をじゆし、かなたこなたへ折たゝみ、かたへをきればふしぎやな、たちまちひとつの

鳥となる、時にせいめい頼光に、打向ひ器望の武士をつかはされ、此鳥の落所、見届ヶさけ給ふべし、然らば事のしれ申さん、早とくくと云ければ、頼光渡部の綱を召、此鳥のをち所みて參るべき由仰らる、せいめいかの鳥をこぶしにのせて、文をとなへはつとふく、いきにじやうし此鳥こくうにまひあがる、渡部馬にむちをあてカ、ル其をちかたを追行しはハヤ三重ふしぎ成ける上しだいなり

貴布禰の道行

片ナロシ「花さかは、つげんといひし、やま里の其音、づれはあらねども、わがみは出る戀のやみ、かなわに燃る燈火に、猶たきそへししんるのほむら、むねをこがしてわきかへる、歌ひさげの水はゆとなれと、猶さめやらぬわがをもひ、しばしはるゝと立よれば、かもの川せも我にはつらや、君をまもるとなかれ行本地其水垣の水浅き、替る心のをく迄も、誠たゝすの神ならは、など偽りをゆふだすき、かみはをどろにふりみたし、心の鬼はいつしかに、姿耻かしみぞろ池、いけのはたへやはたひろの、蛇身と成てくるく

く、くるはたれ故君ゆへと、思へといとこゝろうき、一夜とだにもかなしきに、百夜はつらや小野塚ニツ三重市原野邊を見渡せば、ぼたんやはちすのとうろうを、かのもこのものこすへにかけて、にゐたままつる、有さまは、本地こや初秋の印かや、君もわらはに秋きぬと、目にはさやかにみへねども、心はよそにふく風の、かせにもまるゝいなむしろ、しゐてねんくねたましや、あなねたましやかほど迄、かはる心の有なから、二せかけてとはいつはりや、是は二のせの松尾山、歌待かひなきも理りや、月もみそかにくらまやま三重くらくとかへらし、馬も車も、なくくそちしほにそみしわらんずも、つゝかんほどは緒をしめて、しめてゆるめて、ねしよはも、今はりんゑのしるへかと、昔戀しく忍るゝ、忍ふ其夜はやみこそよしと、いへど山ぢに行なやむ、なやむ思ひの身は埋木よ、朽てみ谷のちりとなる、谷の水音とんくといろ、おつるなみだの瀧ならん、やああやまつたり吹まよふ本地みやまをろしに夢さめて、みれはよしやなや今更に、恨みられしも恨みし人も、ともにきへ行あだしのゝ、つゆとは思へ共ぼんのう

のつよき、きづなにせめられて、牛の時詣する、我身ながらもつれなしと、よし足曳の山水の、たぎりて夏に落合の、川も瀧に見へみ、みへすみ妄執の、カ、ル雲となり、雨となる、心のたけを夕時雨、思ひしらせんまでしばしと、ないつ笑ふつ、悦びつか、ルじやゐんにひかる、一念の、うしみつ過る比ほひに三重貴船の宮にぞ上つきたまふ、かゝる所へ、渡部の綱は、してうの行方、跡を求て追きしが、きふねの山に落ければカ、ル則馬より飛でをり、暫く息つき爰かしこ、見廻りたりしに物すごく、朧月夜に人かけの、あやしく見ゆるふしぎさにチャリ事を伺ひしたひより、かくとはしらでふちつばは、神前にひざまつき、なむやきぶねの大明神、こよひ七日のまんさんなり、足を空にし詣たる、印をみせてたまはれと、深くきせいし御まへなる、神木に打向ひ、此釘はイロ地かうきでんにうつ成ぞ、にくしつらしの一念は、詞鬼共なり蛇共なり、終には思ひしらせんと、てうくく〜と打給へば、大杉より血ながれて、貴船の川もくれなゐに、錦をさらすごとくなり、あらありがたしく〜と、重て釘を取出し、又此釘はわが國の、あ

るじには似ず恨めしや、あせのごときの論言の、出ても詞かゑるうきなみだ、替るましとのむつことは、皆偽りにて有けると、しらでとけにし下ひほの、うらかく計り主上をば、カ、ルうつ手の下にちるたまの、きどくをみせてたび給へと錠押取て神木に、カ、ル既にうたんとし給ふを、渡部頓て飛かゝり、押とどめ、そも先汝は何者ぞ、一天の御あるじにてをします、君をしゆそする御子はいかに、まつすぐに申べし、さなくは己、目に物見するがカ、ルいかにいかにとはつたとにらんで申ける、女御は由を聞召、みづからを何ものとや、汝等ごときの下々に本地名の共よもしらし、爰をはなせと有ければ、渡部聞てしも〜とは、くわんたい成る詞かな、我こそ源の、頼光が郎等、渡部の内舍人綱なるぞ、何うとねりつなとや、わらは、藤つばの女御なり、其時渡部、はつと云てひざまづき、何女御にてましますとや、ぞんじ申さで無禮の段、まつひら御めんを蒙るべし、併、かくかちはだしの御有様、女御の御身にははしたなや、しつと、申は下部の心、后妃の位にましまして、何の御不足候て、君をばのろはせ給ふぞや、

藤つぼは聞召、扱は汝が主頼光、かうきでんのうしろ見故カ、ルあなたのみかた聞もいや、あだなるいろのますはなに、見かへさせたまひにし、君のゑいりのうらめしさに、君共、かうきでん、命をたちて長き世のカ、ルしんのむねをはらさんため扱こそ、かくははからふなり、渡部聞てけにや高きも賤しきも、色には亂るゝならひかは、かうきでんへ御恨みは、御ことはりにて候が、君に恨みは候まじ、女御と申も我君の、御恩にては候はずや、今より後は此事を、ふつゝと覺し直させ給ひなば、頼光方へ御供し、互におとらぬ后妃のさた、よろしくそうさせ申べしイロチクリまづゝ、こよいはおかへりあれ、藤つぼは承引なく、はや此ごとく汝等に、見あらはされし上からはカ、ルいよゝゝをもひはとまるまじ、せひゝこよひは過さずして、カ、ル命をとらで叶はじと、面色かはりすまじく、釘押取て神木に、又立向ひたまひしを、渡部をさへてかほと迄、りを盡し諫るに、御承引候はずは、せひもなし御命を、うしなひ申がいかにと云、何カ、ルころさばころせきらばされ、わらはがねがひをさまたげば、汝共に取こ

ろすぞ、渡部今は是迄と、太刀ぬき持てはたと切る、はつと云て藤つぼは、渡部に飛かゝり、持たるたちになぐりつき、ゑい恨めしやかほどまでカ、ルみてし願ひをかくのみか、やいばにかゝる腹立や、死に替りいきかはりて、まんゝ劫をふるとても、かうきでんと我君を、取ころさでは置べきかとカ、ル御目もちほみ色替り、はがみをなしてぞみへたまふ、渡部是を事共せず、もぎはなつてかきいだき、心もとを指通せば、はつと計に藤つぼは、終にむなく成給ふ、しがいをきぶねのかは浪に打入て神木に、打たる釘をぬき捨て又立かへる橋の上、中は渡るとみへしとき、うづまくハヤ三重淵の底よりも、藤つぼのをんねん、忽大蛇となり、橋かるゝとかづき上げ、渡部共にみなそこへはカ、ルねかへさんとしたりしはハヤ三重すまじかりける次第なり、渡部少もさばがず、たちぬき持て切拂へどカ、ルはたらくべきやうなき所へ、はくしの鳥のとびきたつてカ、ル渡部をかいつかみハヤ三重いづこ共なく「飛行は、蛇身はいかり、もだゑつゝ、神木にくるゝと、くるしげにく息は、猛火と成てもへ上れば、みやましきりにし

らんどうし、風雨いなつまハヤ三重天地をかへせば「社人達おどろき、てん手にたいまつを、我もく」とほしつれカ、ル川へ來れば執心は、あら腹立やとほのふをふき、こくうむりやうに追かけく、貴船の川浪しんるんに、とんでぞ入にける、天晴きたいのしだいやと、きせん上下をしなべて、皆恐れぬ者こそなかりけれ

第五

其後、關白の御やかたに、せいめい賴光會合し、しゆそする者の其有所、渡部が注進をカ、ル今やくと待給ふ、雲井はるかにくだんの鳥、渡部諸共カ、ル庭上に、どうどをつ、人く是はと立よれば、鳥は則伯道と顯れ、はるかに有やせいめい、我は是、もろこしの伯道、汝にあたへし一卷の、ひじゆつをしるせし其きどく、今こそ思ひさとりため、此上とても其ごとく、妙術をきはむべし、是迄なりやさらばとてカ、ル文珠菩薩と顯れチャクリひかりを放つてとびたまふ、何れもきいの思ひをなし、御跡拜したまひけ

る、渡部が申やう、鳥のをちしは貴船の山、しゆそする人は藤つぼ、是玉體の御大事、御いたはしくは候へ共、某が手にかけ、御命をたち申、御さいごの有様、其かたち異形にて、既にあやうき所に、してう來つて某、命をたすかり、罷歸り候と、一々申上ければ扱々カ、ルをそろしき次第やと、何れもかんじたまひける、關白賴忠宣ふは、藤つぼの有さま、じごうなればせひもなし、せいめいが占かた、神に通せし故ならん、そうもんなさんと有ければ、せいめい承り、此上とても御つゝしみ、然るべしと申上る、かゝる所へ日藏人、あはたしくはせさんじ、かうきでんの女御、御殿を出させたまひ、いづ地共御行方のしれざる由、禁中の周章、をびたくしく候と、大息ついで申ける、關白驚き給ひ、其御行方を尋よとカ、ル爰よかしこと夕間暮ハヤ三重らうがはしくこそ上「見へにけれ、去程に主上は、御物忌の其内、かうきでんの女御さへ、だいを失させ給ふにぞ、しんきんをいたましめ、殘し置れし御文を取あげ、ゑいらんありければ、吹ちらす萩の露にて、身をしりぬ、うき世のあきに、あはではてめやと、かく計りなる

言の葉は、藤つばがねたみのほど、思ひ詞つゞけてあぢきなく、身を捨てだいの道に入けるかと、歎慮くるしくみへ給ひ、ひそかによしかぬ是なりを、御側近く召れつゝ、思ふしさいの有間、忍びてイロ地花山寺へまふでせん、用意せよとの論言なり、兩卿目とめを見合て、是はいかゝと思へ共、りんげんなれば力なく、畏てをうけをなす、それよりも主上は、御しんでんを出させ給ひ三重花山寺さしてそゝみゆきなる

花山寺御幸

「哀れもよふすおか野邊に、夜すがらとほすはたるひも、さへぬ思ひのあれはにや、虫だにむねをやこがすらん、げにありはらのなり平の、きちうの詠めに飛はたる、雲のうへ迄いぬべくは、秋風ふくと初鴈に、つたへてくれのかねの聲、百八ぼんのうのねふりさめよとみほとけの、をしへはそれとしりながら、戀のやみちにたとゝと、道もさだかにみへわかず、あゆみ兼させ給ひけり、よしかぬ是成申やう、こよいの中に花山寺迄は、中々行幸成がたくましませは、

向ふに人家の燈火みへ候、あれへ行幸なし申さんと、御手をひかへたてまつりひ三重かりをしるへにたづねゆく、かゝるうき世に秋のきて、朝げの風は身にしめと、むねを休むる事もなく、きのふもむなしく暮ぬれは、まどろむよはぞなみたなる、あら定めなの生がいやな、かゝる所へ兩卿は、主上の御手を引まいらせ、やうゝたどりつきたまひ、しばのあみ戸を音つるゝ、あるじの女立出て、たれにて渡らせ侍らふぞや、其時よしかぬ我々は、道に行くれ足はのそイロ地つじがましく候へ共カ、ルしばしつかれを休むるうち、をやどを頼みたてまつる、イロ地女は聞て安き事にて候へと、よにみくるしき芝のいは、殊によはひも中そらに、またかたふかぬひとりゐの、さしもいぶせきねやの内、カ、ルみせ申さんも耻しや、おやどはかなひ候まじ、よしかぬ重ねて道はくらぶの山たかみ、せんごをばうじて候へば、あこぎとはをほさめとカ、ルこよい計りはかりねせん、いや叶はじと柴の戸を、さすがをもへはいたはしや、さらばといまりましませと、カ、ル扉をひらけば人々はチャクリ急ぎ立入たまひけり、見なれ給はぬしつがわ

ぞ、主上よしかぬを召れつゝ、あれは何と云物ぞ、
よしかぬあれこそ賤の女の、いとなむわざのわくか
せと、申物にて候なり、主上此よしあるいふん有、し
もが下にも此ごとく、やさしきわざの有けるな地い
となみ、見せよと勅誼有、よしかぬあるじに近付て、
いざもてなしにわくかせを、いとなふで見せ給へ、
女は打ゑみつねにさへカ、ルいとなむわざをまして
やは、御なぐさみと成るならばカ、ルいく世もへなん
わくかせの三重麻草のいとを^上くりかへし

絲 繰

「まさうの糸をくりかへし、むかしをいまになぞらへ
て、君にもつるゝ糸柳、亂てもなを麻ぎぬや、賤が
うみそのよる迄も、世渡るわざこそ物うけれ、かゝ
るうき世にながらへて、明暮隙なき身のうさを、た
れにかたらんかたいとの、恨みてかひはなけれ共、
めぐりゝて月かけの、光る源もじ御げんもじ、五
條あたりのあばらやに、夕がほの宿をたづねしは、
日かげのいとかふりきし、それは名高き人やらん、
かものみあれにかざりしは、いとけのくるま、引つ

れてきつれて爰に、いと櫻色も盛にさく比は、くる
人多き春のくれ、ほに出し秋の糸、すゝき月による
をや歌待ぬらんアイノテ今はた賤がくるいとの、なが
きやみぢやくろかみの、をもひみだれしいにしへを、
まきかへしつゝ、ゆひもどし、又ときなをす玉の緒の、
むすひとめたよ恨みのせきに、めぐりあひたりめぐ
れやめくれ、品よくめぐれ小車の、そのくるしみを
思ひあかしの浦子鳥、ねをのみ獨なきあかす、ひとり
あかせる恨みをば、よその上となをばすなと、云か
と思へは忽に、めんしよく替りつのを、頭にいた
だく金輪の足の、ほのふの赤き鬼と成て、あら珍ら
しの我君や、うらめしや捨られて、思ひにしづむ泪
川、詞むくひは今ぞ夕露の、きへなん命いたはしや
と、はつたとにらんで立たりしは、すさまじかりけ
る地しだいなり、よしかぬ是成さはがずして、つる
ぎをぬき持切拂へばカ、ルをんれうさすが恐れつゝ、
少ちゝする其隙に、兩人君をかこひつゝ、足にまか
せて逃行を、いづく迄かのがさんと、跡をしたふて
追かくるはハヤ三重すさまじかりける上「しだいなり、
かゝる所へ源の頼光、五人の郎等引ぐして、ものゝ

くかためたちをはき、主上の御まへにひざまづき、あやうき御なんをしゆごいたせと、せいめいしらせ候故、はせさんじ候と、謹で申さるゝカ、ル良兼これなり力をゑて、君をしゆごしてをはします、かゝる所へ藤つばのをんれう、くろ煙を立てはせ來り、八めんの惡鬼となり、やあ頼光我はもと、山田のをろちが一念、藤つばねたみの一心に、入替て玉體に、近づきて引きさ捨、まこくになさんとはかりしに、せいめいがかち頼光が武勇、三種のじんぎに恐れつつ、本望達せぬくやしさよカ、ルつかみさかんと呼はる聲ハハ三重てんちをかへして上「飛かゝる、人々」少もさはがずして、じゆもんをとなへ切立ればカ、ルあまてる神のをうごのかげ、ひかりに恐れてうづまふを、四天王の人々、すだぐに切たりけり、頼光すかさず首打をとし、八方にらんで立たりしは、地國増長廣目多門、誠に四天のしゆごなりとて、貴賤上下をしなべて、皆恐れぬ者こそなかりけれ

第六

其後、頼光、四天王の者共は、君の御供仕り、だいに還幸なし申せば、あべのせいめいかうき殿の御供し、急き參内仕り、君しんきんをいたましむるも、女御失させ給ふ故、ひみつをもつて御行衛、尋ね申てかへりし旨、謹でそうもんす、主上ゑいかん甚敷カ、ル誠にふしぎのせいめいやと、おのゝかんしたまひける、かゝる所へ、勢州のたんだい、左近の太夫はせ來り、扱も右大將かけかた、平の左官重茂、すいか山に城郭をかまへ、きんざいの野武士をかたらひ、むほんをくはたて中なり、捨置れなばゆゝしき後日の御大事カ、ル急き討手をつかはされ、然るべしとぞそうしける、内よりのせんじには、急ぎ頼光立向ひ、逆臣ちうばつ仕れとの勅諭なり、頼光おうけを申つゝ、都合其勢三百よきカ、ル都を立てそれよりもハハ三重せいしうさしてそ上「向はるゝ、すいかの城になりしかは、カ、ルふたへ三重にハハ三重押取まき、時の聲をぞ」上にける、城の内にも兼てごしたる事なれば、同く時をぞ合ける、其時頼光、駒のり出し大音上げ、ふてんの下に住ながら、君をあざむくふてきもの、頼光上意蒙りて、罷向て有けるぞ、命

をしくは降參せよと、たからかに呼はつたり、重茂
聞て物ないはせそ打ちらせとカ、ルてきみかたハヤ三
重入亂れ、爰をさいことたゝかひける、坂田の金時、

是をみて、ゑゝもどかしゝみかたのせい、某さきを
かけんとて、れいのてつ棒引さげて、カ、ル大勢にハヤ
三重割て入はらりゝゝと「なきたふす、何かはもつて、
たまるべき、むらゝぱつとぞちつたりける、時に
城の内よりも、岩上大六鬼淵、鉄どうと名乗て、一
もんじに打てかゝる、金時すかさず引はづし、ゑし
やくもなくかいつかみカ、ル一ふりふつてなげけれ
ば、みぢんに成てぞ失にける、鐘どう得たりとむす
とくむ、ゑゝおこがましやをのれめと、ひざの下に
引いて、首ねち切て捨にけり、重茂今は是迄と、
打て出るを、渡部すかさず立向ひ、しばしが間たゝ
かひしが、いつ迄時をぐすべきと、渡部いらつて打
太刀に、かたさきよりちの下迄、ばらりすんと切落
し、首ちうに打をとし、むほんのちやうぼん重茂は、
渡部の綱討取たりと、たからかに呼はつたり、景か
た今は是迄と、取てかへし遯んとする、定光末武を
りかさなり、高手小手にいましめて、勝どきどつと

作りつゝ、都をさしてぞ歸りける、千秋万歳目出度
と、貴賤上下をしなべて、皆かんせぬ者こそなかり
けれ

艶色
萬歳 賴政

第一

名のりかけたる、ほとゝぎすなのりかけたる、ほととぎす、雲の上にやひしくらん、是は兵庫のかみ地源の賴政なり、扱も當今、御しんでんの上にして、よごとにあやしきこへ有て、御のうおもくましませば、ひきめを持てようくはいをカルたいぢせよとのせんじをかふむり、なし打ゑぼしに白あやの、はちまき長くむすびさげ、初もみぢのひたゝれに、うこんの大きくそばたかく、らいじやうどうといふ弓に、兵は水はの矢を取そへおんともには、いのはやた、赤皮おどしの腹巻に、大たちをぬきくつろげ、大の眼をいらゝげて、四方八めんにもらみつけ、しうぐおとらぬ出立にて、よんのおとゝの庭上に、心をしづめこくげんを三重今やくと「待いたり、既にふけゆくみじかよのいしみつ過る比おひに、とう三でうの方よりも、黒雲一村まひさがり、御てんのうへにおほふとみへしが、大風こぼくの枝を折り、しん

どういなつまおびたゝしく、御殿もハヤ三重くづるゝ「計りなり、すはや是ぞと賴政は、すいはをつがひ高聲に、なむ八まん大ぼさつと、しばしたもつて切てはなつ、何かはしらす雲中にてカルあつとさけぶこゑぞせる、すかさず兵はを打つがひ、つるおと高くへうという、手ごたへと、つがひひやうしに聞へてはつしとたつ、ゑたりやあふと、矢さけひのこゑ諸共にどうどおつる、いのはやたつゝとより、取ておさへこぶしもぬけよ通れよと、九かたなぞさいたりけるカル此さうどうにみかきもる、衛士共たい松ふり立て、よくみてあれば頭はさる尾はくちなは、足手は虎のごとくにて、なくこへぬへにことならずッシ堂上堂下一同にチャクリ悦び給ふはかぎりなし、たちまち、御のうへいゆふ有、ゑいかん甚淺からず、此けせうをは清水寺へ、うづむべしとの御事なり、扱關白もとさね公をもつてりんげんには、此度のけんじやうに、從三位にじよせられ、薄緑といふ寶劍に、御衣一重給はりカルうぢの郡を一圓に、あておこなはるゝ所なり、又官女の内を一人、下さるゝとの勅定、賴政うれしさ身にあまり、時忠の娘あやめの前

を、申請度候と、言上あれば關白殿、來る五月五日には、御ふたいにてくはんげん有、いづれなり共其時節、のぞみ申せと有ければ、頼政あつとお請をなす、其比源家の人々に、三位にのぼる人なければ、世に源三位としやうしつゝカ、ル家の面目よの三重聞へ、うら山さるは「なかりけり、玉のかんざしゆらやかにカ、ルゆるぎ出たる其ふせい金銀、れうら色々の、花をかざりていちやうに、ふたりつれたるまひ姫の、いづれをわけん春秋や、花も色そふ君が代は、千秋樂にすゑとをく、さかへさかふる天が下、天平樂と悦ふなるニツ三重こてうの舞の袖かろく、せみの羽衣いつしかに、夏たつけさは玉かしは、はもりの神にしめはへて、たむくるしでのたおさととり、やうりうらくに皆月の、あつき比にはわうしきの、しらべにかくるあふぐうらく、きくもすゞしきすいてうナク、樂水の、緑のせいがいは、秋のしらべの面白や、りつのひゃきを身にしめて、雲井の月の影高く、こゑをほにあけ初鴈の、天の川せやわたるらん、よのまの風に霧晴て、さへこそ渡れ冬はまた、あられ初雪、ふれやふれ、我ふるつまのいとしさよ、みぞれ

ふるよはねやさむみ、きてかさねたる戀衣、うらみてあかす折も有、地君の情はつくはねの、かけよりしげき秋津すのカ、ル外迄もゆめぐみの末、何かはもれん道すぐに三重げんじやう樂の「舞の袖、かへすかへすも、大君の御代を祝ふやばんじゆ樂、打やつつみにかねのこゑ、びわ琴わごんひちりきに、せうこゝの度そうすれば、ほうわう爰に舞遊びカ、ルしんにをすますくはんげんは三重心ことばも「及ばれず、かねてより頼政は、あやめの前の方よりも、ちつかにあまる文をゑてカ、ルいつみきとてかみかの原、見もせぬ戀にあがれて、思ひなづみておはせしが、けふのふたりの舞姫を、いづれをそれとしらざれば、いかゞはせんとあんせしに、關白仰けるやうは、いかに頼政、此二人の官女こそ、あやめの前まこもの前、いづれを望候と、仰あれば頼政は取あへずハヤ三重さみだれにぬまの、まこも、水こゑて地いづれあやめと、引ぞ煩ふとゑいし給へば、元さね公、あやめの前の手を取て、けふは幸たんごにて、軒のつまにもあやめふく、よき折なれば伴ひて、妻にみよとのりん言ぞと、頼政に地給はれば、互に目とめを見

合て、につことゑみて指うつふき、面を赤め嬉しさを、袖につゝむもけふよりは、あらはにみへて夏衣、ひとへにかはす契の末カ、ルげにたのもしふ人々も、皆悦びをがし給ふ、頼政はそれよりも、あやめの前の手を取て、退出せんとせし所へ、丑寅のすみにして、物音しきりにさはがしく、人々あやしと見給ふに、大和國の住人石門將ぐんの末やう、石川の次郎秀門、直垂のつゆを取、大弓にぬりつるかけ、十六さいたる白はの矢を、ほろのごとくにときみだし、郎等黒塚江内にカ、ルものゝぐさせて召つれ、庭上に畏り、扱も某、今日とのいに相つめしに、れいけいでんの上に、黒雲一村まひさがるを、只一矢にてゐておとし、是迄持參仕るとカ、ル侍共にかき出させ、御前にぞ直しける、人々立寄見給ふに、頼政たいぢなし給ふ、ぬへに少もかはらねば、又重ての惡靈かと、舌をふるふておはします、時に秀門が申やう、某が高名も頼政が高名におとるべきやう候はねば、我も望の官女有、給はれかしと言上す、頼政はすゝみ出、いかに秀門、其化生はいづこをばし給ひしぞ、矢つばを見んと宣へば、秀門大きに腹を立、御

身を頼んで秀門が、高名をなすべきや、退給へとはつたとにらむ、いの早太もとよりも物をこらへぬ男にて、おゝ高名はさもあらん、其化生に某がとどめをさしてゑさせんと、つばもとくつろげ飛でかかれば、此ぬへ忽起上り、逃んとするをいのはやた、そくびをつかんで取てふせ、かふりしめんを引はづせば、あんにたがはず大男、すはこそ正たい顯れたれ、やうすを申せとせめつくる、秀門むねんや顯れしと、たち引ぬき打てかゝるを、とのいぶしろうせきものと押取まく、叶はしと秀門はカ、ル江内諸共高ついち、とびこへゝ逃失ける、人々つゝいて追欠るを、關白せいし給ひつゝ、やうすはしれたりしづまれカ、ル扱頼政にはゆだんなく、いよく大内しゆごなすべし、先はあやめを伴ひて、退出あれと宣へば、頼政は有がたしゝと、あやめの前の手を引て、だいを退出し給へば、早太は件のくせ者を、やかたへかへりせんぎをとげんと、追立ゝそれよりも、君の御供仕るカ、ル天晴時の高名やと、きせん上下おしなべて、皆かんせぬものこそなかりけれ

第二

其後、石川次郎秀門は、だいにてのろうせき、其上にふかくを取、都の住居叶はずし、さがのへんにちつきよして、かしん黒塚江内を近付、いの早太めがはやり過、いらざる事を言出し、それゆへにこそ、弟の國五郎秀重をばとりことなし、跡へもささへもゆかざるなり、もと此いしゆといつは、大内へんげたいちのぎを、某に仰付られしが、我思ふには目にさへぎらぬへんげのしよい、若も事をしそじなば、弓矢の名おりと思ふゆへ、事をつゝしみたいとなす、是ものゝふの本意ぞや、それにあの頼政が、ゑたりがほに領狀して、へんげをたいちなしける事、思へばくむねんなり、しかし是頼政が、武かうにはあらざるなり、かれが家の調法に、雷上動といふ弓兵波水破と云矢有、並なきめいきにて、此弓矢を持しゆへ、思はぬ手柄をいたせしなり、何とぞして此弓矢をカ、ルうばひとらん手だてこそ、有やいかにと云ければ、かしん江内承り、究竟の事候、某忍びをゑたりし者、かたらひ置候へば、かれらを頼み一

同に、頼政方へ忍び入、うばひ取て秀重をも、御供申歸るべしカ、ル御心安かれと、手に取やうにぞ申ける、秀門大きに悦びて、然らば汝にまかするなり、幸こよひやみにて有、用ゐをいそげはやくく、カ、ル畏候とチクリ忍びの上手はたれくぞ、いなづまのとびくも、やみのよの鐵太郎、小ぐまおしかをさきとして、つがう其勢三十き、一やうに出立てカ、ル其日のくるゝをハ三重今やくと待むたり、かくとはしらで頼政卿、みたちにかへらせ給ひつゝ、いの早太を御召有こよひはとのゐにさんだす、汝は宿に残つゝ、兵は水は雷上動、かねて預けおく所、用心おこたる事なかれとカ、ル瀧口を御供にて三重きんりをさしてぞ「あがらるゝ、既に其よの、子の刻計と覺しき時、三十人の忍びの者カ、ル人の寶をうば玉の、黒き装束一やうに、しこみのちやうちん相詞、半弓打物取々にカ、ル我もく」と頼政の、ついちのそとにうかゝひより、稻妻の飛雲、ひらりとうゑに飛上りカ、ル内のていをみてあれば、人しづまりて音もなし、すはやよきぞと云まゝに、門の貫の木ねぢ切て、相づのふへをふきければ、三十人は一同に、我

も我もと亂入カ、ルかしこに有し番の者、こはろうせきとひしめくを、おこしもたてず切てすて、其中に一人を高手にてにいましめて、寶藏の有所をあんない致せ、さもなくば命を取がいかにと云、番人わななき何が扱、命をたすけ給はらば、あんない致申べし、寶藏は所院の東に御ざ候、いの早太殿よろゝは、きん番致され候と、申ければ引立、さきにあゆませあないさせ、寶藏さしてゆかんとする、かゝる所に長七となふ、物音のあやしさに、うかゝひ寄てみてあれば、すはしれものよと十五そく、大のかりまた引かふで、よつ引てふつとゐる、眞先にすゝんだる男が首はねる切てカ、ル跡に立たる大男、二人つらぬきどうどふす、すはや夜討ぞ殿原達、某是にてふせぐ内カ、ルものゝぐあれと呼はつてハヤ三重指取引つめ「ある程に、とうぞく共はたまりかね、とあるこかげへさつと引、かくる所に、頼政のみ内なる、相澤源藏森山七郎、一もんじに切て出カ、ルとうぞく共にわたりあひハヤ三重火花をちらして「切立る、手元にすゝむやつ原をカ、ル六七人切てすて、しばらくいきつきいたりける、こゝによ打の方よりも、六尺

ゆたかな大男、まつくろに出立て、八尺計のつげの棒、矢がらのごとくふりまはしカ、ル兩人にわたしあひハヤ三重爰をせんとぞ「たゝかひける、さしもすぐれし者共も、何かはもつてたまるべき、大ぢにどうぞ打すへてカ、ル力にまかせて打ければ、みぢんに成てぞ失にける、かゝる所にいの早太、寶藏しゆごしていたりしが、らいのごとくにかけ來り、ゑゝとうぞくふせいの奴原に、忍びいられし口おしや、たい松出せ者共と、一丈計の鐵の棒、まつかうに指かざし、打てかゝれば大男、しづんですそをながんとする所を、かさにかゝつて打ければ、忽むなく成にけり、殘る者共一同に、しこみのてうちんふり上て、是こそねかふ敵よと、むらがつて打てかゝる、早太笑ておもしろし、いざ參らんと大せいをカ、ル弓手に相つけめてにうけ、八方拂なぐりたて、たゝきちらしてかけ立ればカ、ルとうぞく共叶はずして、中をあけてぞ通しける、其隙にみ内の人々カ、ル一度にどつとわたしあひ、火花をハヤ三重ちらしてたゝかひける、かゝる折ふしきんにて、ぬへにたばかりとはれし、秀門が弟國五郎秀重は、かごみの内に有け

て、みなかんせぬものこそなかりけれ

第三

るが、よき幸と思ひつゝ、やがてかじみを忍び出、
寶藏にはせ入て、兵は水は雷動、やすくと盗取、
すはや本望とげたりしぞカ、ル跡につけや者共と、
くもをかすみに逃て行カ、ル早太むねんや餘さしと
跡をしたふて追かくる、くらはくらし道みへず、
其行方のあらざれば、せんかたもなくたすみは、
み内のやうすきづかはしく、取てかへせば頼政卿、
きんにてさうどうを聞召されて、とのいのやくカ
カル御ゆるし蒙りて、急やかたにかへらるゝ、早太は
つとひざまづき、有し、だいを申上る、頼政大きに
立腹有、かゝるろうせきとうぞくは、よのつねの事
なれど、わが家のてう寶三つのめいきを、やみく
とうばはるゝことは何事ぞ、きつと尋てわが前に、
持來らざる其内は、七生迄のかんきぞやカ、ル罷立
にらみつけ、奥をさしてぞ入給ふカ、ル早太だうりの
泪にくれ、君の仰はしごくせりカ、ル天はひさう地
はこんりんならくのそこに至共、取かへさでは此御
所に、立かへらじと飛上り、おとり上てはがみをな
し、行方しらす出たりけり、かのいの早太か心の内
カ、ルむねん成けるしだいやと、きせん上下おしなべ

其後、三重うき世は戀の、ふちなれやチクリかよひく
る身は川水よ、まもる人めはいせきにて、まつげし
からむ泪川、浪にゆらるゝまこもの前地はづかしな
がらけふこゝに、やつしてかくも出る身の跡は三重野
となれ山吹の、せにかけみれはわがすがた、けうと
き計おもやせて、しのぶのみだれひとしれぬ、思ひ
をつねにするがなる、ふしの高根を音にのみ、きゝ
渡りつゝあふ坂の、關のこなたに年をふる地心は我
が物なれど、まゝにならぬはいな物よ、つれなきひ
とゝしりながらカ、ルこふる心のおろかにて、すきに
は身をもうつせみの、ねになきくらし秋くれば、も
ぬけのからと成はつる、眞如の月の影くらき、むね
の思ひのくもきりを、ことのはかせにこよいしも、
はらさん事のうれしさに、門出いはふ君とわが、中
末ひろにいつ迄も、長く扇を參らせん、あれなると
のよ、そこかあつくは、こなたへござれ、こゝはす

すしき柳かげ、數の扇の風なをすし、扇めせく、
うちはもそふよ、ちいのもやうを三重かざりたて、引
やくるまのくるしきも、しんくの糸の手もたゆく、
つかれはてたよ君ゆへに、うき名はよもに橘の、小
嶋が崎やこゝろせきチャクリいつかはやく大村の地
里の名をさへたのもしく、思ひながらも皆人の、よ
を物うちと聞からは、我身一つにあらね共、戀をす
る身のくせとしてチャクリ命の程もそれ迄と、思ひ切て
はつよくとチャクリ笑は、わらへいはいいへカ、ルふ
つつ思ひきりつぼの、ないし所もなんの其、かぐ
ら拍子は聞もうし、鈴ふりすて、出るにぞ、ひとへ
もはかまぬきかへて、染かたびらのはでもやう、す
あし高つまひらくとカ、ル風にもすそのひるかへ
る、歸るはいやよ行かれて、戀しき人とふしやなき、
夕風そよく下かげに三重しばしやすらひ給ひけり、う
ぢの川せのかけつくり地うち見床しきそらたきは、
のきばにくゆるかやり火とカ、ル人やみるらん夕す
すみ、みす上させて頼政は、あやめの前の御杓にて、
相盃に顔をよせ、互に御目を見合て、につこと笑は
せ給ひしは、いづれ月雪花もみち、たとへていはん

色もなく、淺からざりしたはふれに、さへつさゝれ
つ盃の、赤きは酒のとがにして、ひやゝかなりし川
風もカ、ルいと興有てひざ枕チャクリふかき中こそわり
なけれ、柳のかげよりまこもの前地此ていをみてた
へかね、ひたすらあこがれかく迄に地なれぬ手わざ
に身をしのぶも、ひとへにあやめがわざぞかしカ、ル
しよせんあやめを失はんと、ちゝに思へどせんかた
なく、きしにのぞめは水の色、あいをそむかとおそ
ろしく、とやせんかくやと身をもだい、岸になびけ
る柳かげ、枝をつたひてへいをこし、せひに思ひを
はらさんとカ、ルいとはかなくも青柳を、つたひのぼ
りて見給ひしに、つれなくも柳のゑだカ、ルはつきと
おれてまこもの前、川へざんぶとしづみけるカ、ルさ
れ共思ふ念力の、うきあかりつゝおよきこしちんの
もとへと近付て、岸の浮草力にとカ、ル取付は川風
に、ゆりおとされていくたびかカ、ルうきてはしづみ
しづみては地うきをみるめのかりのよに、もろきは
人の命にて、底のみくづと成けるは三重哀なりける
「しだいなり、げにおしめ共けふの日も、くれはのい
とやぬきみだる、玉かとみへたとぶはたる、そもや

きせんかいにしへは地しかもすみゑてきをすまし、
花鳥風月のたのしみも、げにことはりと思はれて、
しらぶることのやさしくも、つよからずしてよはか
らす、おふなの歌のしほらしく、名もなつかしき紫
の、雲井の曲やわすらるゝ、わが身の程は思はれて、
あだ名たつ、うき人の末のよいかゝ有べきぞ、身は
うき舟のよるせなく、便も今はあらゐその、岩うつ
浪の音つれに、ちゝにくだくるこゝろかな、のきば
におふる八ゑむぐら、歌カ、ッあめ打そゝぐつれゝ
に、昔を忍ぶ折から、あわれをそへて草のとを、た
たくや松のさよ風に、おとろか三重されてながむれ
ば、ねやの隙さへつれなくて、明やらぬまのひとり
ねの、夢に計りはよなく、思ふ人を、みちのくの、
なこそそのせきをたれすへて、うつゝのこともあはざ
らん、卯の花はちすなでしこ、風ふけば、すゝしく
て、水に心をうつせり、そのさん曲の、つま音や、
こゑよくうたふひゞきには、ちりも立まふちんの内、
かんにたへたる「ばかりなり、かくて物をと打しめ
り、あやめ仰けるやうはカ、ル川のよ風は身のどく
ぞ、いざゝおくへと、頼政の、御手を取て立給ふ

を、しばしゝとかたゑより、しとゝと頼政の、
たもとをひかへとゝむれば、頼政おどろきこはたそ
と、御らんあれはまこもの前、涙にくれてつれなし
や、けふはしめての思ひかは、かねてぞつもる身は
うぢの、山より高き文のかず、かいやりずてゝうら
みしや地過しくはげんの折からに、引すてられし恨
をは、君にしらせん其爲に、よはに紛て内りを出地
かくはしたなき身と成て、是迄來る情には、思ひを
叶へてたまはれと、すがりついてぞなき給ふ、頼政
さすが其こゝろ、岩木ならねばさほど迄、わりなき
心のうれしさよ地去ながらけふしもは、つまのあや
めが見るまへ有カ、ル又折をゑてゆふくれの、忍ふと
ぼその手引をば、よきにこしらへ申べしカ、ル先々こ
よひはかへられよと、さまゝ詞をつくさるゝ、ま
こもはせひに承引せず、思ひ定て來る身に、何重て
のあふせとや、つれなしやなさけなし、あび大城の
底に入る共、みらいやうこう、忘れはせじとはらゝ
と、なく涙に面色替て、せんげんたる雲のびんづら
さか立てカ、ルあいじやくしんいのつのするどく、花
本のごとくにおひ出れば、あやめは是に驚て、おく

へ逃入給ひしを、いづくへやらじと追欠て、いらんとするを頼政は、まこもの前が乱がみ、むずと取て押すくむるカルかなしやとさけぶこゑ、もろともにふりかへつて、頼政にいだきつき、しめころさんとする所を、御つぎにひかへたる、渡部きおふ瀧口、此よしをみてつゝと出、たちぬきもつてうど切る、はつといふこゑ弓手にきこへカルめてにみへつゝうしろへぬけ、波にちらめくいなつまの、かけよりはやく飛めぐるはハヤ三重すましましかりける「しだいなり、主従たちをぬき持て、なむ八幡大菩薩と、名劔のもんをじゆし、兩方より切立ればカルおんれう今はたまりかね、かしこへどうとふす所を、さんく切たりしは地さんをみだせしごとくなり、きおふしがいをかい取て、さかまく水になげ捨れば、ついには本望たつせんと、云こゑ計り残つゝカルうちの川きりたへくゝに、顯れ渡る三重明かたの、跡白浪と成にけりカルけにおそろしきしうじやくやと、貴賤上下押なべて、皆かんせぬ者こそ無けれ

第四

「其後、源三位頼政は、うち川の別ぎやうにて、三日三やの、御遊ゑんましゝて、けふは都の上やしきへ、御歸り有べしとて、みだい所諸共にカルあまたの供人召ぐして、三重錦の小路へ「歸らるゝ、やたけ心のものゝふの、やそうち川による波の、立出ゆけは朝日山、かげさす水の清らかに、ひをのひれふる冷しさよ、面白や此川の、よるにもなれば螢火に、光あらそふうかひ舟地むかふの山はかり人の、ほぐしのあかりほのみへて、あくるもしらす夏くれは、今は青はに山吹の、花もあくたとちり過て、うつる月日のはやきせに、なれても通ふ芝舟の地こがれてこゝに頼政は、あやめの前と諸共に、けふかへるさの道すがらカルかちゝをほこびみへ渡るチクリ名所きう跡打ながめ、かたりなぐさみ爰かしこ、手を取かはし立つとひ、とけて亂て君とわが、中よへ、いつへ、なゝへ八重はや九重の、空高き、山のかいよりほとゝと、音つれて過る、ほとゝぎす、是もせきかと行やらで、ふたりの、中に二こゑを、きかまほしさに、とゞまりて三重いづくと人に、とばなはて、

さなへとるてふ、さをとめのうたふ田歌のはり上た、こゑもひなびておかしやの、かははみへねとすげかさの、白くうごきていれちがひ、ゆきゝの人も、立とまり地しばし見るまもいざよりて、あつさ、しのがん笠取山、うすき衣もうるさくて、あふぎの風にそよ／＼と、ならや伏見の里ちかく、春は花見し藤の森、今はしげりて深草の、深き中をはよもさけし、かしらの雪のふりかゝり三重おもきがうへに、つものとも、おしのふすまは物かはに、いつもかはらすいつもたゝ、いなりの山の神さびて、きのふも通り京極や、四條かはらにさしかゝり地あとより風のさうさうと、吹くる音に身ふるひし、やゝさむき程ぞつとして、ひざ打ふるひ賴政は、心地あしげにみへ給ふ、あやめの前はおどろきて地いかゞ渡らせ給ふぞや、心は何とましますと、ひたいをおさへうしろをなで、かいほうあれは賴政は地さのみにあなじ給ふなよ、あつさのつよきゆへならん、しばらくつかれをやすめんと、道のかたへにぎをもふけカ、ル女ぼう達も打寄て、よきにいたはり奉り、御のり物をすゝめられ、めさせ給ふに目もくらみ、やめもわかず

あやめの前、心元なやみづからも、いざあいこしにのり申地み樂まいらせ候はんとカ、ルうつらせ給ひ夫よりも三重ぎをん林を打過て、心をつくしきをくだき、今はとほうにくれ竹の、すゞの色とき過る比三重みたちにつかせたまひけり、こゝに又、いの早太たゝすみは、雷上動の弓、兵は水はのてうほうを、尋出して賴政の、かんきをゆるされつかへんとカ、ル思ふ心の一筋に、野にも山にもやどる身の、是も一つは武者しゆ行、こよひはむしよに指かゝりカ、ル比はふみ月中のよの、なきたまゝつる折なれば、思ひつづけて世の中のカ、ル無常をくはんじもくねんと、しばし休らひいたりけり、れんぼのやみのくらければ、まよふ心の本來は、むめうのくもにおほはれて、猶立かへすまうしうを、いつかはらさんわが思ひ、うらめしのうき世や、あらうらめしのうき世やと、獨かこちて其すがた、いとなまめいたる女ぼうの、花をかざりしとうろうを、むしよにたむけて歸りしが、早太がそばにしとゝ寄、見申せば其かたには、旅つかれとみへて有カ、ル此所はれんだい野、いかでわたらせ給ふとゝふ、早太聞て我は旅の者なれば、所の

いとひは候はず、おんみは若き女郎の、何とて獨此所へ、來り給ふはいかにとふ、女はにつことうち笑ひ、よになれくしき物語カ、ル御はつかしふ候へどもみづからが、身の上を、語て聞せ申へし、それに付ては其かたを、お頼申事有と、申ければたいすみは、扱ゆふてふなる女かな、我は思はぬなんにあひ、かゝる浮世のめんどうに、我身ひとつのおきふしさへ、ふすいの床にかかるものを、聞も中々かしましとカ、ル立さる袖を引とめ、こは情なき御詞地みづからは此里の、民のつまにて侍ふなり、御身もとのにて候へ共、男の心の淺はかにカ、ルきのふにけふは引かへて、あすかゝはらの川のせの、かはりやすくもこといろに、うつるのみかはみづからを、地情なくも追出し、跡はさかりのます花に、れんりの枝と契りつる、かゝる恨の數々を、せめて一たび語りつゝ、にくしと思ふ者共を、思ひのまゝに失ひて、本望とげんと思へ共、あやにくと門札を、とうとかちして打て有、是をはなしてたび給へ、さもあらば千僧萬僧のくやうより、有がたからんと云こゑも、泪にくもりて申ける、早太驚きこは心へぬ云事や、

げにも女中の心には、しつとの深く有ゆへに、理とは云ながら、門に打たる其札を、たとへはなしてあればとて、追出す程ならば、中々内へはよもいれじ、先程よりの事共は、一つとしてのみこまず、外を頼候へと、すんと立んとする所を、女はいとゝすがりつき、げにも仰は尤なり、我は此世になき身なり、物きゝ給へ、先惣じて、人に用事を頼には詞出家は出家ぶしはぶし、それくの道による地わらはは御身のみ心を、大かうへと見請しゆへカ、ル女の力に及ばぬを、頼みまいらせ侍ふなり、御身程なる侍が、物頼んと云をき、迹かへらんとはあゝいひがひなしく、かやうの所にふし給ふを、武者修行ともおぼしなば、猶更御名を耻給へ、御身は正しく源三位頼政卿の郎等、いの早太にてましますや、いかにくと云ければ、早太詞につめられて、せひもなし此上は、札をはなしてゑさせんが、所はいづくとゝひければ、うれしやこなたと手を引て、半だん計りあゆみつゝ、此所ぞとおしゆるに、ふりむく霧のたへまより、ひとつのかう門みへたりし、早太近くも立寄て、刀をぬいて門札を、こぢはなし捨たりけり、女

悦びうれしやな、我は是まこもの前がおんれうなり、いで／＼本望達せんと、云こゑ天ちになりわたつてハヤ三重霧に紛れて失にけり、早太驚き、こはいかにと、みるより早く霧晴て、む所とみへしはわが主君ヲクリ頼政卿のやかたなり、扱はへんげの某を、たばかりよな口おしや、おのれいづくへのがさんとカル追かけ出んとせし所に、駒をかしこに芝つなぎ、其身かるげに忍び寄、へいに手をかけ伺ふ者、さしつたりといの早太、近々と詰かけ、むずと引組引よせて、よはこしをいだきあげ、大地へどうど取てなげ、すかさず上にのりかゝつて、そも先おのれは何者ぞと、首ほねつかんでつきつくれば、かうべもくだくるたへがたさに、ふるひ／＼、我こそは、秀門が弟國五郎秀重なり、忍び入て頼政をがいせんと思ひしに、しそんじたるむねんやと、はねかへさんと身をもがくを、猶したゝかにふみ付て、扱はおのれは過し比、ぬへにばけて雷上動、兵は水はをぬすみしよな、さあ其弓矢の有所、眞すぐに申べしカ、ルさなくばかたはね引ぬくそと、せめ付とひければ、秀門が手に有よし、一々に白狀なす、早太笑てうれしやな、

第五

おのれあんないすべしとて、取て引立馬引よせ、秀重をいだきのせ、むちを押取たゝきたて、駒にまかせていそぎゆくかのカルい、早太が心の内を、きせん上下押なべて、皆かんせぬ、ものこそなかりければ、其後、江州三井寺に、つゝいの法眼淨明とて、其行法もたにすぐれ、尊き沙門有けるが、源三位頼政、つねにしたしくましますゆへ、此度の所勞に付、きとうのせい／＼ぬきんで、守のくはんじゆ取認カカル三位のやかたへいそがんと、まだよをこめて出らるゝ、ながらの橋にさしかゝるに、むかふより其よわいカルはたちにたらぬ女ぼうの、かづきにふかくかほかくし、しどけなげに來りしが、供押わけて乗物の、そばちかく寄ければ、供の者共こはいかに、ろうせきなりとおし留る、女につこと打笑ひ、くるしからずみづからは、おたのみ申事有てカルわざわが是へ參たり、さのみあらくな宣ひそ、法眼是を聞給ひ、何者成ぞととひ給へば、さん候みづからが、

お頼申事としては、よのぎにあらず、其かたは源三位頼政の、病氣本腹有やうに、きとうのせい／＼つくされて、けふあの方へ御こしと承候ゆへ、わざ／＼是へ出向ひ、待請て候なり、かまへて／＼、頼政の病きのきとうをやめ給ひ、お僧は是より三井寺へ、お歸有て給はるべしカ、ルさなくはおためにあしからん、はやとく／＼と云ければ、供人共是をき、あやしき女が云事や、そこ立のけとのめけば、女聞てあざ笑ひ、汝等にはかまはぬぞや、此僧に用有と、云こゑ共に風おちて、しんどうらいでんおびただしく、黒雲一村まひさがり、乗物共に淨明をカ、ル空中にまき上しはハヤ三重すさましかりけるしだいなり、供人共は肝をけし、皆こと／＼く逆ちつたり、中にもみでしに一らいとて、けつきさかんの若法師、長刀のさはづし、いづくへやらんと呼はれ共、雲中なればせんかたなく、おどり上てはがみをなし、こくうをにらんで立たりけり、時にふしぎや淨明、ひみつのくじを切てかくれば、うづまふ雲も、ちりちりに、なるよとみへて、あやうくも大ぢへどうど落けるガ、ルこしはみちにくだけちり、其身につ

つがましますず、一らいカ、ルはつと欠よつて、悦ぶ事はかぎりなし、時にくだんの女すさまじきかたちと顯れ、我は是まこもが一ねん、身はうち川にしづむといへども、其靈こんはきへうせず、しんゐのはのほもへまさり、つもる恨に頼政を、取ころさではおくべきかわ、僧がきとうのふうさつは、此おんれうがあだとなる、頼政になさつけそ、はや／＼かへれさもなくは、みぢんになさんと飛かゝる、一らい長刀押取のべ、口にじゆもんをとなへつゝ、淨明じゆずを押もんで、いのりいのられせんかたなく、よも明行ば山のはの、日かげにしほむ朝良の、つゆのごとくにきへ失て、終には本望達せんとカ、ル云こゑ計り、河風にこたまの音を聞つゝ、いカ、ル淨明はそれよりも三重二位のやかたへいそがるゝ、比は文月なかにて、てりそふ月のかぎきよく、光あらそふとうろを、とぼしつゝけしかず／＼は、心々の手をこめて、金銀のたいにのせ、カ、ル女ぼう達の取々に、御まへにかざらるゝ、然共頼政卿、さりしうちのかへるさより、御こゝちれいならず、さま／＼いれうましませ共、更に印のあらざれば、みだい物うくおぼ

し召、何にかなみ心を、なぐさめ申候はんと、めの
 とのみとりを御召有、此とうろうのあかしよく、ひ
 るにもまさるけしきぞや、何なり共興をなし、殿の
 御きをなぐさめよチャクリはやとくくと宣へば、承候
 とカ、^ル四きの立花をならへたて三重既に用ゐと聞へ
 ける、世はならはしの人こゝろ、四きおくりとさ
 きかはる、花に心をなぐさめて、かざりならべしか
 らへいじ、いづれおろかはなけれども、春はまづさ
 く八重梅の、かをなつかしみうぐゑすの、こゑも吉
 野の山さくら、花見がてらにくる人は、散なん後は
 さそあらん、ちらさぬために風よぎて、かめにさし
 たるひと枝は、萬代地迄もさかへてふ、てうくと
 まるかうばたん、かげにつくばふ唐猫の、すきをう
 かひそらねふり、くはつと飛出とらんとすれば、
 小てうはおどろき三重ひらくと、まひ上ればつめを
 かくして尾をふるひ、花のこかげにしづくと、し
 たれ柳のかた糸を、かなたこなたへよりあはせ、あ
 はずは何を玉のをに、千重萬畧の岩つゝし、たをり
 てかへる山みちは、袖を引あいそろそろく、たら
 たらおりてやすんで、しばしといまる澤水の、流す

ずしきあふひ草、かうほねおもたか花せうぶ、あき
 はつゆちる糸はぎの、けさは亂てまつれてとけて、
 風の吹しくのべみれば、お花浪より夕ざれの、霧立
 三重のぼる村もみち、錦まくうつ長月の、其有明の山
 おろし、いつしかくものかくろひて、まきの板屋に
 はらくく、さらくさつとさつくの三重こゑに
 ねざめてきく時は、雨かこのはかきぬたの音か、か
 らころくしつていつくく、うつ手やさしきたい
 このひきよく、亂拍子の面白や、げに面白や白々と、
 しらけたるよの月ならで、雪のはつかにかいつもる、
 年のなごりの程みへて残る松さへ物さびし、雪かき
 分て尋れば、其名もさむしかんきくや、さんくは
 すいせんやぶこうしチャクリ心をつくし手をこめて、色
 をかざりし作り花カ、^ル一々かそへうたひしは、いと
 やさしふこそみへにけれ、頼政御きげんうるはしく、
 きうつをはらし覺ずも、心よく候と仰ければあやめ
 の方カ、^ル御悦は限なくチャクリ皆々興にぞ入給ふ、か
 かる所にそともよりカ、^ルこてう一つまひ來り、爰や
 かしことはをやすめ、花にあそぶとみへけるが、ば
 たんの花のとうろうに、ひらりと飛入ふしぎやな、

けしたる姿と顯れて、したい／＼に賴政の、御そば近くさまよひて、かなたこなたとかゝへば、忽に賴政卿、御身をふるひ御いれいも、以ての外にみへ給へは、みだい所を始としカ、ル人々大きに驚てハヤ三重上を下へと返しける、げにやおゝなはさらでだに、五つのさはり三ツおもく、おもきが上にかさねたる、身は戀衣君ゆへに、あはれはかなきうたかたと、きへにし物を情なく、波のみくづと捨られし、恨をはらさん其爲に、まこもの前がおんれう、是迄顯れ來りたり、とてものがれぬむくひのつみ、くはん念あれと大をんあげ、鐵杖ふつて立たりしは、扱すさまじかりけるしだいなり、賴政は聞召、こはむねんやと宣て、うす緑の御劔をぬき、切はらはんとしたまへば、おんれういかつて、ほのほをふき、みぢんになさんと飛かゝる、弓手をはらへばめてへぬけ、前かとみればうしろへこへ、水月いなつまはツたゝ神カ、ル姿はみれ共さながらに、水にゑをかくごとくにて、もとよりくうきの靈なれば、うて共きれ共手こたへなく、おつつかへしつする隙に、ひらりとかに飛のつて、鐵杖ふりあげ立たりしは、おそろし

かりけるふせいなり、賴政今はせいつかれ、せんかたもなくあきればてカ、ル互に、らんでつめあひしは、身のけもよだつばかりなり、かゝる所へつゝいの淨明、あはたゝしく入給ひ、此ていをみて、さもそうずときねんのくはんじゆ取出し、賴政にさづけつゝ、打物わざにて叶はじと、じゆすさら／＼と押もんで、なむ大聖ふどうそん、おんてきたいさんなし給へと、カ、ル御でし諸共同音にハヤ三重力を合て「いのらるゝ、をんれう今はたまりかね、爰にひれふしかしここにたをれて、又おき上りうらめしやカ、ル六道四生がその間、いかであんをんなるべきと、近付よらんとせし時に、ふしぎや守のふどうのしゆじ、明王尊と顯れて、がうまのりけんをひらめかし、向はせ給へばおんれうは、くるり／＼とめぐりしが、りけんの光におそれつゝ、あらうらめしやくるしやな、此のち又もきたらじと云こへ計り御てんの内、こたまにひゞきて失にけり、時にふどうみこゑを上げ、いよく行末まはらんとカ、ルちかひあらたにましくて、もとのぼんじと成給ふは、有がたかりけるしだいなり、人々御跡伏おがみ、賴政の御病きも

カ、ル則へいゆうましませば、御悦はかぎりなし、かかる所にいの早太、秀重が首引さげ、兵は水は雷上動、取かへしはせ來り、かやうくのしだいにて、ふたゝひ手に入候と、御まへに上ければ、頼政御悦喜淺からず、則かんど御免有、げに主従の御さいくはいカ、ル天晴めでたき御事やと、貴賤上下押なべて、皆かんせぬ、者こそなかりけれ

第六

其後、源三位頼政卿、淨明のかち故にカ、ルやまふ本腹ましゝて、御悦は限なし、頼政仰ける様は、まこもの前が有様、ゑいぶんに達し、勅定に任せんとカ、ルそれよりも頼政は、チクリだいを指てぞ上らるゝ、だいりになれば、まこもの前の有様、一々しだいに言上ある、みかどゑいぶんましゝて、まこもの前は身よりほろぶるじめつのざい、誰におふせん様もなし、幸なれば淨明に、とぶらはせよとのりん言なり、かゝる所へみい寺より、大衆打つれさん上し、扱も近江國鏡山に、石川次郎秀門、あまたの郎等召ぐし

て、たてごもり候が、みい寺をせめおとし、城櫓になすべしと、せめ來り候を一まづふせぎ戰て、追ちらし候なり、又うち川へしよりをつけ、かの川をよながいに取べしと、其用ゐ専らなり、事のつのらぬ其内に、早く討手をつかはされ、然べく候と謹でぞ申ける、關白元實大きに驚せ給ひ、其秀門はいづの國え流せしに、いかゞしてかはまぬかれしぞ、誰かれといはんより、頼政向ひ候へと、仰ければお請をなし、手せいすぐつて八千よきカ、ルうちの川邊に押よせてハヤ三重時のころをぞ上にける、され共秀門、うち橋を引ければカ、ルさすが難所の大河にて、こすべき様もなかりし所に、瀧口早太兩人は、もとより馬上の達者といひ、かねて川のあないはよし、小嶋の淺せに乗込ば、陸地を走ることくにて、八千よきの兵共、一きもなかれずおめいて上れば、秀門が先手の者共、押もどされ、半丁ばかり覺ずしさつて、切先より火煙をたてハヤ三重こゝをせんとぞたゝかひける、かゝる所にみい寺より、つゝいの淨明一らいほうしを先として、まんじの指物押立て、みい寺より頼政に、ごつめをなすと呼はつて、うしろより

押取まく、秀門大キにしうせうし、せんごにてきを
請ければ、あじろのうをのことくにてカ、ル進退こゝ
に極て、命限りと戦ひける、かゝる所に一らいほう
し、大長刀を引そばめカ、ル人馬のきらひあらばこそ
ハヤ三重はらり／＼となぎたつる、こゝにかたきの中
よりも、よこが鳥のふどう丸、黒塚江内、其早わざ
も名にしをふ、空とぶ鳥のごとくにて、一もんじに
切てかゝる、一らいもとより早業の大力、右に相付
左に請、おつゝまくりつ戦ひしはカ、ル敵みかたのめ
を驚かすチクリ誠にゆゝしき働なり、さすが名をゑし
一らいに、何かは以てたまるべきカ、ル大けさ胴切四
つになり、弓手めてにぞたをれける、秀門今は是迄
と、大たちまつかうに指かざし、あまさじと打てか
かるをカ、ル早太瀧口 かけ合ハヤ三重こゝをせんとぞ
たゝかひける、はやだ瀧口こはめんどどうと引組、ゑ
いや／＼と諍ひしがしばしせうぶはみへざりけり、
かゝる所にふしぎやな、白雲一村まひ下り、次郎が
上におほふとみへしか、忽五たいのう亂し、かしこ
へどうと伏にけり、有がたや雲中より、ふどう明王
出現有、佛王法の敵をなす、秀門を立所に、めう罰を

あたふるなり、是勸善懲惡の、誠を顯す所ぞと宣ふ
みこゑの下よりも、秀門が兩がん、忽ぬけ出ちをは
きて、終にむなしく成ければカ、ル明王はしうんにの
り、こくうに上らせ給ひけり、頼政三どのらいをな
し、勝とき作つてそれよりも、ていとを指てぞかい
ぢん有カ、ル千秋萬歳めでたしと、貴賤上下押並て、
皆あはがぬ者、社なかりけれ

艶色
萬歳
頼政終

和國女眉間尺

第一

扱も其後、仁は秋津洲の外にながれ、けいはつくば山のかげよりも、しげきかもとの猶しげき、君のめぐみそ有かたき、今この時のみかどをば、人王四十五代、聖武天皇と申奉りチャクリいとも目出たきすべらぎなり、扱御れんしに、葛城の大君とて、御心さしくはんじんに、みかたちゆふびにましませば、まつりごとをかねおこなひ、天子をたすけ天下をやすんじ給ふ故、くはうたいしにも立給はん、御器量まします君なりと、あふぎうやまひ奉る、同く御弟、すがねひこのわうじとて、其御さりとやうたくましく、御たけ七尺ゆふよにして、ぼうこへうかの御いせゐ、かみ公卿より地下迄も、カルをそれぬ者はなかりけり、ある時みかど、仰出されけるやうは、カル此ほどくどもをだやかに、民のかまどもにぎはへば、じゆんしうの其ために、江州いぶき山に行幸あり、みかりをゑいらん有べしと、ぐぶの行粧花やかに、

あふ本三重みちさしてぞ「みゆきある、けふよりしては、世の人のイロ地みゆきの跡といぶき山、さしもにひろきおのへより、すそにおよんでうつかりや、はりチャクリをたてなんらい地なし、扱かしこなる松かげに、ほうれんをすへられて、カル數の公卿殿上人、きみをしゆござせ給ひけり、こなたは葛城の大君、まつたかなたはすがね彦カルけいひつせんぐうるはしく、袖をつらねてなみいたり、まだしのめより打立て、カルすまんにおよぶし、ハヤ三重かせぎ、しだい／＼に「かり下す、われも／＼と、さきをかけカルぶん取をあらそひしは、世にめさましくぞ、見へにける、かゝる所に、むかふの山のおのへより、二疋つれたるさおしかの、もゝ四つかくす青草を、ふみわけてかけ來る、はだのふしやうはるつね、馬上の達者成ければ、きやうどの弓をまなびつゝ、横切にかけ通り、切てはなせはあやまたず、うしろさまにぞいたりける、今一つのさおしかをば、馬よりゆらりと飛てをりカルつのに手をかけひらりととりハヤ三重せこをあつめて生とらる、扱又こなたのかたよりも兎一疋かけ來るを、少なごん是つね、此由を見

給ひて、是をば某いたさんと、手ほこをかざして飛
かゝりカ、ルをつさまにさしつらぬき、かたげてこそ
は引にけれ、葉山の木末に啼さるを、左少辨かねさ
だ、よつひきへうどゐたまへは、手ひき猿のこぶし
より、三疋つゝけてゐてをとし、せいしを召てとら
せらる、かゝる所に山上より、いくとせへし共しれ
ざりし、猪一つ大勢のカ、ルせこを拂てハヤ三重一もん
じに、いかりたけつて「かけ來り、ほうれん近くよ
りけるを、すがね彦のこうしん、右大辨つね高、弓
と矢つがひかけむかふを、カ、ル人馬共にすくひ上、
はるかの谷へかけたをす、すがね彦は御らんじて、
つゝと立て弓矢をはげ、向はせ給ふ所に、みやびた
る少人の、いきをもつかず追來り、よつひきへうど
はなつ矢の、あやまたず猪の、尾づゝよりゐ通して、
かつはとたをれたりけるを、年來ねらふ親のかたき
カ、ル思ひしれと切ちらし、につここと笑つて立のく
を、すがね彦は御らんして、某が引ゑたる、弓をお
さへてさきをかけ、かみをおそれずはたらく條、は
なはだき會のいたりなり、それからめよと有ければ、
かしこまつてけいごのぶし、左右より追取まゝ、其

時かづらきの大君、しばしとせいし給ひつゝ、汝は
女と見えけるが、かゝるかりばの出立は、心得がた
しまつすぐに、申上よと御でう有るカ、ル時にかのも
のさん候、みづからは此山のふもとなる、賤のめに
て御座候、ふたとせいせんにわらはが父、かりに出候
ひて、此山の猪に、命をとられ候ゆへ、みづからが
兄何とぞして、かたきのしゝをうたんため、かなた
こなたとつけねらへど、つゝに見あひ候はず、此た
びみかりを幸と、親のあだにて候ゆへ、男の姿にさ
まをかへ、兄とをなじく罷出、兄をさきほど見失ひ、
ほうぐたづね候所に、猪を見出し、嬉しさの餘り
に、をんまへ共はゝからず、らうせきに及びし事カ
カルおゆるし有てたび給へと、涙をながし申ける、大
君つくく聞し召、切々やさしき心さし、いまだび
じやくの女の身、親に孝ある心ざし、深きゆへにぞ
かほど迄たけういかれる猪も、只一矢にはとまりけ
ん、是天道のみやうかなり、ざいくはをめんじゑ
させんと、かへつて色々御ほうびあり、御暇下さる
れば、れつぎの公卿一同に、何もかんじあはれける、
君もゑいかん淺からず、かやうにたつちうたつかう

の、國に多く出来るも、御身のせいとうすぐなる故、けふよりしては大君を、皇太子とかしづき、とうぐうにたつべしと、りんげんあれば諸卿皆、冠をたれて勅答し、仁なる君のとうぐうに、立せ給ふは是ひとへにカ、ル國あんの印ぞと、いづれも悦び給ひける、すがね彦は手持なくカ、ル口をとちてぞおはします、かゝる折節ふしぎやな、はれ渡りたる春の空、忽にかきくもりカ、ルしんどうらいでんをびたゝしく、ハヤ三重風雨しやぢくをながしつゝ、さんかもくづる、計りなり、君をはじめ諸卿皆カ、ル木のもと岩のね便となし、雨をしのがせ給ひける、すがね彦はもとよりも、すぐやかにましませば、玉座のほとりを立さらず、しゆごなしてをはせしに、いなづましきりになる神のカ、ル耳にひゞきてほうれんのハヤ三重まちかくはためき落けるを、少も恐れすがね彦、くろくもに飛入てカ、ルいかづちと引くんでハヤ三重しばしあらそひ給ひしが、雨のつのを手懸りにカ、ルうんと引きさ給ひしは、すさましかりける次第なりカ、ル程なく空もはれ渡り、みどりの空にぞ成にける、きみゑいらんましゝて、扱々ゆゝしき勇力かな、

やまとたけのみことより、御身程なる勇者はなし、今よりして御身をば、まどりのわうじとよぶへきと、りんげんあれば、魔取有がたしゝと謹て勅答あり、喜悅のまゆをひらきつゝ、ほうれんをしゆごなして、都へくはんかうなし奉る、天晴きたいの事共やと、貴賤上下おしなべて、皆かんせぬ者こそなかりけれ

第二

其後、伊吹山のみかり、ことゆへなく過ければ、都へ還幸なされつゝ、諸卿何も退散有る、其中に魔取の王子は、常々皇太子の望深く有けるを、葛城の大君にりんげん既に下りし故、二月の梅のごとくにて地をむるいろかはかわらねど、柳櫻にけをされて、ことゝふ人もなくゝぞチカリ過行春をしむにも、げにおもひ内にわだかまればカ、ル外のけしきはさほど迄、面白からずとひろゑんに、つくゝ立て庭のをも、しばし詠る折ふしに、三かんの日のかげも、巳の時にならざるに、せい天俄にかきくもりカ、ル風すさましく雲井にひゞく、いかつちはハヤ三重すさ

まじかりける次第なり、光りの内にふしぎやな、黒雲一むらうずまひて、庭上に落かゝり、さつとわれて中よりも、やしやのやうなる其姿カ、ル眼のひかりすさまじく、面をむくべきやうぞなき、魔取は太刀に手をかけて、やゝ汝はいか成る化生のめいこんぞや、正たいを顯すべしカ、ルさなくばかうべを切くだくぞ、いかにくゝとの給へば、けしやうからくゝと打笑ひ、御身わうじやくの身を持て、通力自在の某を、かうべがよもやくだかれんカ、ルせめてさすりて見給へと、大聲上てぞ笑ひける、魔取大きにいかりをなし只一打と飛かゝり、みぢんになれとうつ太刀をカ、ルかいくゝつてめてへこす、かへつてはらへは弓手へこへ、かほどたへなる我身をば、いかではきやくし給はん、誠の道理を打捨て、はやく邪道にいたり給へ、魔取聞てかしらをふり、我せいけんに背きつゝ、何とて邪魔をうくべきぞ、外道聞ておろかなり、せいけんまことたつとくば、など手に入りし天下をば、カ、ルくるしめてはかり給ふぞ、我等が術ををこなは、百日はみてざる内、其きどくをゑせしめん、邪正一如、即佛へんまといんをきり、さつと吹

かけ奉れば、まとり忽がんしよく替り、眼の光りすさまじく、あら嬉しやけふよりして、天下は只取たる物なりとカ、ルをどり上り飛上つて、悦び給ふけしきを見て、外道一部の經卷を、七寶の臺にのせ、是こそ我等が行法の、經文にて有けるなり、是を帝へ捧けつゝ、何とぞ魔道へゆういんあれ、其時われも顯れて、いよく力をそふべきなり、某は藤原のひろつぐがをんりやうの、こんはめいどに飛ゆけ共、はくは此土にといまつて、魔道神通の力にて、さいせんいぶき山のみかりにも、いかづちとなり顯れて、君にゆふるをそへてありカ、ルいよく力をそふべきとて、のぼるも高きわしのみ山の雲や霞、嵐と共にうせにけり、魔取はきいの思ひをなし、もはや本望とげたりとカ、ル件の經卷取もたせ、だいを三重さしてそ急かるゝ、だいいには諸卿あつまり、御ゆふるんの折からに、かつらきの大君、ふ時にさんだいましゝて、さく夜ふしぎの夢のつげ、たしか大内太政官と覺しきに、位官たゞしき人々の、かすゝなみ居給ひしに、われもばつぎに侍りて、つゝしみ守り居たりしに、中にも上座に居給ふ、上郎のあらたな

る御聲にて、此度第六天の魔王共、わが日の本へ下り、まこくとなさんとはかりつゝ、まどりのわうじに惡義をすゝめ、魔經をだいに捧るゆへ、色々と評義なし、此大乘の妙經は、大君にゑさするなり、急ぎだいに持參して、此由そうもん申べしと仰あれば夢心に、あら有がたや是はそも、わがとをつ親あまてらす、をゝん神の神勅ぞと、おもふと則夢さめて、枕の上に妙經のみ、残り是有候ゆへカ、ル則捧け候と、謹てそうもんある、君をはじめ諸卿皆、かほどふしぎの神勅は、是只事に有べからず、いか成事や出きたると、何もふしんはれやらす、かゝる所に魔取の王子、右の經卷持參あり、そうもん申されけるやうは、此御經と申は、末代ふしぎの一軸なり、然るにしやかと云邪僧出、さまゝ方便をとき顯はし、正法をけがしつゝ、國土の民をまよはしめ誤り、千歳に及びたり、今某ふしぎに此經をもとめたりカカルとくゝ、尊拜有べしと、そうもん有てぞ捧らる、天王よしをゑいぶん有、唯今かづらきの大君も、かやうゝの次第にて、妙經を捧らる、所詮邪正の勝劣の、慥成義を見ずしては、定めがたしとりんげん

有る、魔取此由承り、其義にて候は、雙方のほう經をひだり右に立わけて、火をかけるゑいらん候は、必きどくの候はんと、重てそうもん有ければ、さらばさやうに仕れと、妙經を左にをき、扱又邪經を右にをき、兩方一度に火をかくれば、正經はやけ失て、魔經は少もつゝがなし、上中下に至迄チクリ何もはつとぞかんじける、魔取いよゝいさほひにのり給ひ、かほど目出度正經を、御うたがひの淺ましやと、あざ笑てのたまへば、大君いやゝそれ正法にきどくなし、火に入たる經卷の、やけではいかで候べき、やけざる印候こそ、いよゝ邪經に候と、仰もいまだおはらぬに、有つる邪經の内よりも、ほのふ忽もへ出て、皆ぢんはいと成失て、はじめなかりし妙經のカ、ルもとのごとくに顯れしは、有がたかりけるしだいなり、主上を始奉り、けいしやううんかく一同にカ、ルあつと頭を地に付て、かんるいしばしとゝまらず、天王げきりんはなはだ敷、汝皇孫の身を持て、還て魔道に落入り、剩王位まで掠めんとはかる條、こくぞくよりもはなはだし、つみにふすべきことなれ共、王子にめんじて只今より、參内無益とりん

げん有、魔取は聞て口をしや、何とぞ君をたぶらかさんとたくみし事もむに成しぞ、去ながら、今よりして我じんづうをふるまひつゝ、忽和國をしたがへんとふんじんのいかりをなし、大床みはし渡りどのヵカルふみたてけたてそれよりもハヤ三重やかたをさしてそ歸らるゝ、やかたになればみうちの者共召れつゝ、かやうくのしだいなり、時をうつさずかづらきの、王子のやかたへをしよせて、本望をとぐべしと、ぐんびやうをいんそつしカル王子のやかたをハヤ三重取廻し、時の聲をぞ上にける、去ほどに大君のこうしん、中納言みつのり、ついちの上に飛上り、何者なればらうがわしく、此所へはよせ來るぞ、名をなのれとのたまへば、まどりのわうじのみうちなる、右大辨つね高駒かけよせて高聲に、抑是はまどりのわうじ、天のめいする國のうけ、帝位につかせ給ふ故、したがひ給はぬかたゝをは、せいばつのためりんかう有る、葛城の大君も、まどりにしたがひましまさばカル申なだめ候らはんと、さもにくさげにぞ申ける、みつのりは聞給ひ、ゑゝ淺ましやゝ、王位にそむくおこのぞく、あれ追拂と宣へばカル御

もんをひらき切て出ハヤ三重軍は花をそちらしける大君のみうちの者、随分いどみたゝかへ共、多せいに無せい力なく、残りすくなにうたれけりカルみつのり今は是迄と、大どのさしてはせ參り、御前にかしこまり、随分防ぎ候へ共、せいすくなに候へは、過半手ををひ或はうたれ、はかゝ敷き防戦なりがたく候へは、ひとまづ何方へも御ひらきなされつゝ、時節を御待候へかし、某はふせぎ矢ゐて、跡より追付奉らんと、すゝめ申せば大君は、かみにおはする主上さへ、いかんとせさせ給ひがたし、はや王道はすたれなん、たゝゝやかたを枕にと、御でうあれば光のりは、ゑゝ淺ましきみこゝろかな、文王ゆうりにとらはれて、九年のらうをなしてこそ、ござんにはたをあげ給ふ、とくゝおちさせ給ふべしと、いさめ申せは大君は、然らは跡をはからへと、御うらの小門よりカルいづち共なく落給ふ、みつのり御跡見送りて、門前にかけて出て、大君のこうしん中納言みつのりが、ぶゆうの程をみよとて、カル多勢が中へわつていり、はす切胴切こてをとし、あたる所を幸に、よせ手のハヤ三重大勢はらりゝと追ちら

し、鎧をみればながれ矢は、しのをつくなくなるごとくにて、カルしばしこなたにやすらいて、いきをついてぞいたりける、かゝる所にまとのみうち、下野の丁子丸、せいのせんじはせ來り、左右よりむすくむ、みつのりは見給ひて、扱々やさしきもの共かな、我等がめいどの友だちと、二人一度にかいこふで、まへなるから堀へカ、ルうんといふてなげいるれば、そのみくづと成にけり、我身も太刀を引ぬき、腹かき切てしゝたりける、つねたかかけより首打を、としかち時つくつて引たりける、かのみつのりのさいごのてい、目をおどろかすはたらきやと、きせん上下おしなべて、皆かんせぬ者こそなかりけれ

第三

其後、イロ地かづらきの大君は、魔取のわうじのほんぎやく故、御身あやうくましませばカ、ルひとまづ帝都を御ひらき三重あづまの方へそ

道行

「落給ふ、八聲の鳥も、物すごく地今一二ゑに九重の地花の都の春のそら、地きらめくほしのかけさへも、うつるなみだの玉水に、わが身はいでの里もはや、こまにまかせてあさ霞、立こへ見こへ山しなや、音羽の川のさよ千鳥、よどむいせきにむれあつゝ、あさる小うをの白なみに、しらゝゝあくるしのゝめの、ほかけかすかに、三井の寺、みろく出世の其あかつき、まつも久しき久かたの、うつる光りもはづかしや、旅のつかれと世をおもふ身は、老にけらしなやつれしと、さぞやわらはんわらはゝわらへ、我はまたゆたかなる世にあふみぢや、見し玉たれの雲の上、まくら屏風の物すきの、あゝ繪によくもにはのうみ、しほやかねども、たつけむり、たみのかまどのにぎはひを、地いといあつかれゝと、おもふ心のおほけなく、うき世にそでを大津の浦、うら吹かへすくすのはの、身も手もつかれくすをれて、賤がしわざを、三かきが原、地むかしてんちのおゝん時、やまとのくによりうつされて、爰に都を、し賀唐崎の、松に千代ふるしら波も、立やあわづのはらからに、つらなるゑだをあらそひて、よくもうきめを情なく、見せ

もみせたの長橋を、とろ／＼と駒のあし、いやあめのあし玉あられ、おつるなみだの村しぐれ、ふる里おもふそでぬれて、しほるか露を、のちのさと、しのびてわくるしの原を、見よとくに／＼やか／＼み山、かみのむかしを思ひでし、するがのふじを夜のうちに、はこびきつかせ給ひしが、今一かへりつちくれを、はこぶちまたに夜の明て、爰にすてさせ給ひつ、ちりひぢ高し、くもまより三重そなたのかたにみかみやま、山かげうつすやす川も、いく瀬わたりのつらければ、身のくるしさにせきあまる、すそもたもともこほりつゝ、さむきあらしにあわゆきの、ちらりちら／＼ふることを、おもひぞ出る山かげやカカルともをたづねし人もあり、これはひきかへいつしかに、くはくしやうをきてはいくわひし、はらへどはらへどそのかひは、あられかさねのぎよゐひちぬ、めされし駒もやう／＼に、地つかれはたてやありぬらん、みちのちまたのかたはらに、かつはとたふれしらあははみカ、ルいきたるこゝち見へざれば、いまはせんかたましまさず、おりたちたまひふるゆきを三重うちはらひひきかづく、なをしのつまにたるひと

ち、とけゆくひまもあらされは、あなたのくさむらこなたのかげ、くま／＼もとめたまひしは、目も三重あてられぬハヤ三重次第なり、かゝる所に上なる山の谷あいより、ふりつむ雪にとぢられし、うさぎ一疋かけ來り、カル王子の召たる下かさねの御たもとにぞ飛入ける、わうじ此由御らんじて、こはふしぎや去ながら、いきたる物懷中にとびいるは、運をひらかんさうにやはとカルくるしき中にもたのもしく、なでさすりてぞおはします、かゝる所に、あいもすかさず狩人と、覺しきもの一さんにつけ來り、あらふしぎや是迄は見へたるがと、四方をきつと見廻し、扱こそ是に雪のあたらぬ木影あり、定めて是にや居ぬらんと、矢をはげへうと放さんとしたりしが、引しほりたる手もすくみ、地跡へもさきへもうごかねばカルとほうにくれて是はそも、いか成者のしよいやらんと、はげたる矢をおし直し、たとへいか成る者にもせよ、正たいあかさでをくべきやと、カル立よりて見てあれば、はたち餘りの上郎の、雪をしのぎておわします、狩人は膽をけし、いかさま是はこらうやかんの某を、たぶらかさんためなるよな、其正た

いを顯すべし、さらすは松葉をかきよせてふすべる
がいかにと云、わうじ此由聞召、いやとよわれようく
はいのものならず、我は是かづらきのわうじなるが、
魔取のわうじにおそはれて此所迄きたれりと、のた
まひもはてぬに、狩人はつとかうべをたれ、扱はさ
やうにましますか、某は高村すくね兼道とて、其い
にしへは此所の、郡司にて候が、父にて候正道、三
とせいせんにかりに出、いぶき山にて猪に、ふりよ
に命を失はれ、某若年に候へ共、ぐんしの口宣を召
下され、父か名跡さうぞく仕候、然るに近年此所は、
魔取のわうじ御家臣、右大辨つね高の、鷹の飼料に
押とられ候故、牢浪の身に罷成、みんかんに落下り、
かやうのていには候へ共、大君のりんげんに、い
かでか背き奉らん、いぶせげにては候へ共、先それ
がしが、はにふへ臨幸なし奉らん、肩に御召候へと、
君をうしろにおひ参らせ、わがやをハヤ三重さしてぞ
歸りける、はにふのこやのあさ夕につゆなれころも
しほり戸に通ふ戀風しみくと地品よくたゝむなけ
しまだ、うたてやゆふもつらけれど、父母にわかれ
て其のちは、地たのむひとりの兄上の、垢つきたりし

小袖をばすゝぐたらいに、たつなみの、ちどりかけ
なるたすきをばチャクリ習はぬしづのいとなみは、世に
しほらしくぞ見へにける、かゝる所に兼道は、大君
をおひ参らせ、芝の戸を音つるに、更科急ぎ立出て、
などけふはいつよりも、をそぐ歸らせ給ふぞや、わ
らんず取てやすませ給へ、時にかね道やあ妹、某より
は此御かたよきにいたはり奉れ、さらしなはつと膽
をけし、いか成る人にてましませば、是迄つれ立來ら
せ給ふぞ、兼道聞てこの君こそは、其方がごぞのみ
かりの御時に、をやに孝ある女とて、御ほうびを拜
領せし、かづらきの大君様魔取のわうじの横行故、
都をひそかに出御有り、かやうくのしだいにて、有
かひなしの某を、御頼有間、是迄御供申せし事、恐
れ多くも有かたし、まづくをくへりんかうなし申
べしとカ、ル友なひ申せばさらしなは、はつと計に嬉
しくも地なふく兄上あれこそは、わうじさまにて
ましますか、其みやさまにて侍ふかと、地くりかへし
くりかへし、心にこめしかよひちの、ゆめにのみやは
人めよく三重つゝむ心ぞ

しのひのだん

やるせなき、くれ行まゝに物すごく、あたりになかきかねのこへ、かのいあるじの草のいは、ねぎめもおぼしいでられて、をゝん枕も打つかず、ひとり詠る夕まぐれ、しのぶにつたふ地軒の玉水おとすごく、灯の影月のかげ、ひかりあらそふあばらやは、ひすいのふすまさむふして、誰と共にやかたりなん、あああだなりと御床を、おきいでさせまたひつゝ、地あいのしやうじをつきゆびし、ほのかに御らん有ければ詞兼道はいつしかにカ、ルけふのふゝきにくだびれて、せんごもしらずふしいたり、更科はかたはらに地いやしきひなのすまるにも、昔わすれぬたしなみに、さす爪べにやますほかい、地ちひろにあまる黒髪も、櫛けづるさへまれにして、むかふかゝみもはつかしと、顔を見ふりを見姿を見、かこちわひたる有様に、わうじも戀のますかゝみ、しやうじをそつとあけ給ひカ、ルもたせ給へる扇にて、うしろをほとゝ打給へば、うつる鏡にわうじとしりフシノリ何かうしろへおちしやとさらぬ體にて云ふせい、さすがわう

じにましませ共、御身もちゝみ御こへも、ふるひながらにわれなるぞ、戀しきまゝにねもやらず、是迄忍ぶわれが身に、情をかはしゑさせよと、仰あればさらしなは、霞がほらに咲花の、われらごときいやしげなる、鳴子鳥をはとめ給はん、大君は聞召、くもゐに三重たかき月かげも、桂男の中空に、よなく通ふ白露の、にぐりにしまぬはちすはも、でいどりこそおふるめれ、大宮人に、まじはる身は、しづに戀をばせぬ物かは、かやうにほに出染し身をカ、ルいかで其まゝあらるべし、心くすみし兼道が、かへりきかんでも耻かしや詞我身のはても是迄と、立かへらんとし給へば、更科たもとにすがりつきカ、ルわらはも君を戀衣、かの岩橋と見置しも、ゑにしふれつつちぎる夜の三重あくるはわひしこなたへと、御手を取て諸共に、ふせやの内のもせ川、ふかき哭りと聞へけりカ、ル此人々の心のうち、うれしきとも中々申計りはなかりけり

第四

其後、まとのわうじはからひにて、かづらきの大君を、尋ね申さん其爲に、五畿七道に新せきをすへカ、ル國々へくはんざつしを、下し給ひてたづねらる、中にも江州は、右大辨つね高、承つて下向なし、國の守をまねきよせ、かやうくの御せんぎなり、かづらきの大君の、ありかをしらする者あらば、ほうびはこうによるべしと、一々に口とひす、もり山の百姓共、すゝみ出て申やう、當里において、さいかうの前郡司、すくね、兼道のもとにこそ、何人かは存せね共、其さまけたかき上郎の、みへさせ給ひ候と、申上れば國の守、つね高にかくと云、右大辨聞よりも、それこそはいぶかし、直に某むかはんとカ、ル手勢すぐつて三重それよりも、もり山さしてぞむかひける、ひなのすまゐのいぶせきも、馴初ぬればいつしかに、たくしよのさんせん是も又、わが古里の白雲と、高間の山を地よそにのみ、かづらきの大きみは、兼道兄弟が忠節にカ、ルひとひふつかとおぼせしも、月をかさねしつまごめや、いづもやへがきいつとなく、妹のさらしなを、うねめ女官に召れつつ地くはしんげつせき時折の、御つれくの仇枕、

かはすいもせの今ははや、淺からずとこそみへ給ふ、兄すくねかね道は、朝げ夕げのいとなみ、又我君を何とぞし、世に立申さんつてもやと、世の是ざたを聞んためカ、ルあきなふわざのさまくにチャクリ日ごとくに市にぞ出にける、けふも又我君に、御いとま申うけカ、ルあじかかたみも竹かふり、かふる小笠のおかしげに、市をさしてぞ出にける、其跡にて更科は、御まへにとぎなしてカ、ル立かへり行年なみに、昔のくもの上ならば地あまたの公卿參内あり、御こと始ぞせちへぞと、御ことぶきをとりくに、いつきかしづき申さんに、かゝる佗しきふせやの内、せめてはけふの七草を、御なぐさみにみづからがカ、ルはやしてみかゆをすゝめんと三重取そろへつゝ、

七 草

はやしけれ、いまださむけき春の野に地袖ふりはへてつむわかな、まづはながめもいやたかき、ふし二三三重ならねどもねしろなる、すへながくとせりくさや、君のめくみはつくばねの、かげよりしげきなづなくさ地また五ぎやう草たびらこや、すいなくたち

とりませで、此七くさのみかゆをば、しんにそなへ
君にさゝげ、身をいはへは地忍やみをのぞきじや氣
をさり、よはひをのぶるためしとかや、ことにあは
はの御せちる地三七疋の馬どもを、みはしに引やも
ろたつな、ゆりかけくゆるがぬ御代をわがきみの
地つがせたまわんしるしにはか、りやうじゆじつか
くませば歌やがてめでたきはつはるをまつもまつか
や子の日の小松、ひくは千代ふるひめ小まつ、まこ
と千世ふるものならは一ツ三重神代のことを、かたれ
とうくくくくくとうどのとりと、日本の鳥と、
わたらぬさきに、なくさなづな、なづななくさ
なにごと、君のめぐみをあふぐ身は、などあさか
らぬあさか山かげさへ見ゆる山の井の、あさくは人
をおもふものかはと、君をなぐさめたてまつる、さ
れば後代にいたりて、きのつらゆきがこきんのじよ
に、なにはづいあさかやまの二歌をばカ、ル忍いかの
父母とかゝれしもノリこれこのうたのことなりとや、
うねめはみかゆをとゝのへて、大君にさゝげつゝ、
御ことふきたてまつる、かゝる所に兼道、大いき切
てはせかへり、畏て申やう、君此所に御座有る事、か

たきの方にもれ聞へ、國司に下ぢして魔取より、大
勢打て向ふよし、道にてつたへ承る、かくて此まゝ
御座有ては、若も御けが覺束なし、更科を召つれら
れ、幸當國しがらき寺には、我君の御きるそう、行
基僧正、十六丈のるしやな佛を、御こんりう候ひて、
かしこにおはし候へば、あれへ御こし候べし、某は
是にとゞまり、かたきをふせぎ申べし、はやとくと
くと申上る、大君は聞し召、なんでうさる事あるべ
きや、汝もろとも兎も角も、生がいをとぐべきなり、
時にさらしなすゝみ出、なふいかに兄上さま、爰に
はひとつの手だて有、君は只ひとへに、御身を頼み
てましますに、御身是にて果給はゞ、此後たれか御
かいほう、なし奉る者あらん、又みづからは女の身
カ、ル草の内なるは、木々の、ありてかひなきものな
れは地死するも残るもをなじ忠、御身は御供なされ
つゝ、敵を討取大君を、みよに立させ給ふべし、み
づからは是にとゞまり、女成共ものゝふの、家に生
れは弓矢の道カ、ル争か男子におとるべき、早とく落
させ給へと云、兼道聞てさすが汝は某が、妹ほど有
けるよな、然らば跡をたのむぞと、君の御供仕り、

しがらき寺へと急きけるカ、ルさらしな御あと見送りて心安しと内に入り、兼道がたしなみし、鎧を著し太刀をはさカ、ル長刀小わきにかいこふで、よするかたきを待居たり、去程につね高は、士民共にあないさせ、大せい引ぐし來りつゝ、大音上て此屋の内に葛城の大君、おはしますと承り、右大辨つね高が、御迎の爲參りたりじんじやうに御出あれ、さなくは只今亂れいり、兼道もろ共生どるぞや、それ打いれと下ぢなせばかうがの藤太藤内、まつさきかけてかうもんを、打破つて飛で人、さらしなゑたりと内よりもカ、ル長刀をばめまくり立ハヤ三重おもてをさして切出し、しばしたいかひたりけるが、もとよりさらしな、長刀の上手にて、藤太かほそくび打をとし、藤内がまつかうから、竹わりにさつと切る、され共多せいの事なればカ、ル我もくゝと落かさなり、高手小手にぞいましむる、扱ぞう兵共亂入り、爰やかしこと尋れど、大君見へさせたまはねばせんかたなくもさらしなをカ、ル引立てそれよりもハヤ三重都をさしてぞ引にける、さればにや大友のまとりは、かつらきの大君を、都をさらせまいらせつ、心にかゝる

雲もなく、をして太子に立給ひ、カ、ルごうあく無ざんにまします故、恐れぬ者こそなかりけれ、かゝる所へ右大辨つね高、御まへにしかうなし、此たび江州もり山にて、かづらきの大君を尋ね、生取申さん爲罷下り候處に、わうじ落させ給ひつゝ、すくね兼道が妹の、さらしなをカ、ル生取引ぐし候と、まとりのおまへに引すゆる、魔取はし近く出給ひ、さらしなに向はせ給ひ、大の眼をくはつと見ひらき、やあ汝はすくね兼道が妹にて有けるな、よくものをのれは大君を、いづくへをとして有けるぞ、ありかを只今まつすぐに、申せやいかにと座を打て、はつたとにらんでいからるゝ、時にさらしなからゝと打笑ひ、あらぎやうゝしき有様かな、何それがしに大君の、行衛を申せと宣ふかや、女ながらも更科は、高村郡司が妹カ、ルもともものゝふの名も高き、其末葉にて候へば、忠節に落せし君、其葛城の御行衛、やゝいかで、あからさまにや申べき、それ徳有て仁ふかく、めぐみもあつくましますを、是仁君と申なり、道に背きて王位を掠め、がいにかかせてふるまふを、ひつふどくふと名づけたり、どくふ世にあるためしな

し、淺ましきかなばんじやうの、其徳もまします、親兄の禮に背き、人民をなやますは、追付け天の明鏡の、くもらぬ影にせめられて、めつぼうくびすをめぐらさじカ、ル其時こそは申さめと高笑ひしてぞいたりける、まとり大きにはがみをなし、やあらおのれは女の身の、小さかしげなる返答かな、よしよしいはせでをくべきや、やあもの共其女が、いしやうをはいであれ成し、松の梢につり上て、せめつけせめつけ拷問せよ、かしこまつていしやうをはぎ、あげつをろしつせめとひしはハヤ三重目もあてられぬしだいなり、むざんかなさらしなは、さむき嵐に身もこほり、はだへもふるひいきたへて、たへいる計に言葉なし、其時魔取近々と立より、汝がいらざる忠節故、思はぬうきめに逢ぞかし、落せし行衛を申なば、たすけかへさんはや申せと、大音上て宣へば、更科聞てやあ愚か成る仰かな、身をさき骨をくだかれても、中々行衛は申まじ、忠義の爲に命をすつるは、女ながらものぞむ所、きよく命を召れよと、さも高聲にあざむけば、魔取大きにせき給ひ、げにも汝は忠義をたてけんを顯す、それ賢人の胸中には、七

つの穴あるとかや、今より後の世語りに、魔取がじつけんすべしとて、はかせ給へる御太刀をぬき持て、心もとさし通さんとしたまふをカ、ル頸をちいめてきつさきを、二三寸くわへたり、魔取いらつてこちはなさん、いやはなさじせひはなさん、いや／＼いやいやはなさじと、諍ふにこそくはへたるカ、ル切先はつきとくゐをつて、ほつと吹かけ奉る、まとりくぐつてよけ給へは、うしろに有ける右大辨、つね高のみつけんに、一ゆりゆつて立ければ、わつと計りをさいごにて、ついにむなく成にけり、まとりも膽をけし給ひ、そらをそろしく身ふるひし、横手を打て、あつはれ汝は、扱さて女にまれなる者にてあり、繩ゆるめよと御でうあるカ、ル畏て引をろし、いしやうをきせて取かこむ、時に魔取宣ふは、傳へきくもろこしの、みけん尺はめいけんの切先を、口にふくみしんわうに吹かけカ、ルついに本望とげたりとや、汝は女の身なれ共、みけん尺には増りたり、ゆふきにめんじ命をば、たすけゑさする去ながら、我を討んと思ひなば、ふつうの劔は身にたゝず、只今切先をれたりしいかづち丸をあたふるぞ、此太刀

にて某を、何とぞ重てねらひつゝ、討て見よと件の太刀を下されて、いとま給り入給へば、さらしな跡を見送りて、命を助け給る共、目の前にある逆敵を、争かでもつて餘さんと、いかづち丸ぬき持てカ、ル追かけいらんとしたりしが、いやましてばし此所は、まつたふなして立歸り、兄かね道と諸共にうつこそ本意よ、ことに又、いかづち丸をゑたりし事、魔取のうんのつきしさう、時節はうつさじ此太刀にてカカル王子の首は地給るべし、かまへて忘れ給ふなど、高聲に呼わつて、君の御跡したひゆくカ、ル天晴まれなる女とて、貴賤上下をしなべて、皆かんせぬ者こそなかりけれ

第五

其後、葛城の大君は、兼道にいざなわれ、しがらき寺に御入あり、行基に對面ましくて、御頼み有ければ、行基御請を申つゝ、御かいほうなしかれば、カ、ルしばらく是に御逗留、時を待てぞをはします、去程に、かね道は、君の御出世きぐはんのため、よ

なよなこすいに口すゝぎ、こりをかき身を清め、白ひげ大明神へさんろうし、ないげ清淨にはつせなす、今宵はことに一七日、まんずる夜にて有ければ、いよいよしんくゝこらしめて、宮居にさんけい申つゝ、一心にがつしやうして、なむカ、ルきめうてうらいそもそも、當社明神は、本地觀音大しにて、れいげんあらたなりけるとや、ねがはくはせいりやうの、月くらからぬかげをうけ、逆敵忽めつぼうし、あまつひつきのほがらかに、雲井をてらす大君の、御世となしてたび給へと、ふかくきせいをかけまくも、かしこによすがらつや申、きねんなしてぞゐたりける、かゝる所にないぢんより、はくはつたる老翁、こつせんと顯れ出、さしもけだかきみこへにて、いかに兼道、汝ちうていを盡し、神明にかつがうなし、君の出世をいのる事、心安かれ本望を達しゑさせん、そのために姿をまみへて有けるぞ、汝が妹更科も、忠孝の者なれば、つきそひまほりのがれゑぬ、なんをすくふてゑさせたり、更科にも對面させ、諸共にごうあくの、魔取の王子をうたすべし、我に隨ひきたれよとカ、ル宣ふみこへ諸共に、はくうんに打乗

て、都の方へとびたまふ、兼道きゐのをもひをなし、カ、ルをしへにまかせ御跡を三重したふて都へいそぎける、去程にまじりの王子は、御ゐせい日々につのらせ給ひ、まへには魚鳥八ちゃんをつらね、うしろにはかすをおかにし、酒を池にすと、古人のいへるもかくやらん、酒色におぼれけうをなしカ、ルあかしくらせ給ひしは、よにあさましくぞみへにける、けふは殊更毎年の、かれいにまかせさぎてうを、はやさせゑいらん有べしと、ひがしをもてのみすちかく、御出有てゑいらんある、かねてしたくのことなれば、二もとのさぎてうをみて、いしやうにかざりたて、はやしの役をふれ渡す、いづる姿も三ヶ月の、弓取なれど時しある、君がためにとはらからはカ、ルはやしにの役に打まじはり三重をんどをこそは

さぎてう

はやしけれ、うてやさぎてうとんとやおほんをさまる、御代の印には、ながき日かげも、うつろふや、まつと竹との、あいをいに、もろこし鳥の、尾をまな

び、したのほすへをゆつりはや、つるすあふぎのきり／＼てうと、ひらいてすほめてくはつとひらくや、よもの春、はるのぎしきを取そるへ、孫子にゆづれだい／＼の、かほしばむ迄かいらうの、ひげながれとかゝまりし、こしにあづさのはや弓や、ゆみはふくろにおさまればみはこによゝの、たち花の、かほりあらそふ、とそのみき、くめやいづみの盃に、引しめなはにしろかねの、ゆきをいたゞくすみのへの、いそによるてふほだわらや地昔じんぐうこうぐはうの、いこくたいぢの御時に、はたう万里の舟のうち、馬かふ草のなかりしに、もちひ給ふときくらに、われも二ツ三重たぐるん君が身を、世に田つくりとあがむらし、あかみがちなる初花や、すそのゝむめのうつりかに、いもせの山と名やたゝん、よしなゝばたてひとふしに、つのぐむあしのあだまくら地かはすちぎりを世の人に、見せばやけふのかゝみ草、八千やこのかず／＼に、ふくじゆのきくのはたげをは、千世のためしに引いと、糸にかゝれるかきたいよりも、をもふかたきをつりさほの、みさほすぐなる、みよをいつ、みどりもさすや、青柳の、

げにもかれたる木たり共、花さくら木によそほひ、
せいやうのかげのとかなる、空のけしきをもしろや、
そもくさぎてうのはしまりは、くはうていの御時、
しうなん山のかたはらに、さんりやうと云惡鬼あり、
かたは人にて足ひとつ、とくはしる事世にすぐれ、
峯をこへ谷をすぎアイノ手木ずへをかけり三重枝をつ
たひ、人民を、なやましぬ、くはうていあはれみお
ぼしめし、ていりやうのれいをなし、三つのぎてう
を打たまへば、惡鬼はおそれ逃さりぬ、いまのさ
ぎてう是なりとや、それはいにしへわれはまた、い
まぞかたきをふたつ三つ、打かちくりと悦ぶはカル
何よりめでたかりけると、まいをさめたりければ、
王子御きげん淺からず、品々のたま物をめんくにし
下さるゝ、いたいくふせいに兄弟は、けいごのぶし
を取てふせ、さいたる太刀をばい取て、首くしに
打をとし、かふりしふくめん取てすて、天上へかけ
のぼり、魔取の王子を引立て、ていしやうへ飛でを
り、兩方よりさし通し、首中に打をとす、有あふめ
んめんさはぎたち、らうせき者のがさじと、さゆう
より追取まく、時に兼道大音上、やあしばらくまで

かたくく、かく申某は、高村すくね兼道、かづらき
の大君の、御みかた仕り、はかりことをめぐらし、
只今王子を討取たり、五逆の人にくみせんより、仁
有る君にしたがひてカル天下をやすんじ給ふべし、
いかにやいかにとよばはれは、有あふ公卿殿上人、
北面下郎に至迄、一同に悦びて、もういに恐れ隨ひ
しが、今よりしては大君の、御みかた申さんと、い
づれもこそつてきぶくなし、皆ばんせいをとなふる
時カルきてうのかざりの内よりも、魔取の王子飛で
出、兼てかやうに有べきと、ちりやくをなして有け
るを、はかり事にのせられて、悦ぶけしきのをかしさ
よ、まことの魔取は我なるぞ、とあたりをにらんで
立たるは、金剛りきしまけいしゆらカルあれたるけ
しきもかくやらんと、身のけもよだつ計りなり、兼
道大きにはがみをなし、天にあがらば五逆の網、大
地をふまばせきばつの繩、けんこんにみちくたり、
七尺の屏風は、しなをにあゆみ行とても、まどりの
王子はあめが下、身を置給ふ地はなきぞ、いづれも
かゝつて打とめよ、心得たりとさゆうより、追取ま
はし打でかゝる、魔取いかつて、物々しやおのれば

ら、一々につかみさき、鬼神をしたがへまこくにせん、かゝれやかゝれと大手をひろげ、ねぢころしふみくだき、あるひはつらぬき人つぶてカ、ル力まかせにあれたるはハヤ三重すさまじかりけるしだいなり、時にかね道、大音上てやあまとり、妹にけいやくのいかづち丸をへんしんせん、請て見給へ王子とて、兄弟諸共打てかゝる、魔取は是をことゝもせず、かいくゝり引はづし、二人を左右にかいつかみ、一々に取てふせ、くはんねんせよとふみつけて、首ねぢきらんとし給ふ時、ふしぎや大地めいどうし、白ひげの大明神出現ましゝうしろより、魔取のたぶさをかいつかみ、中に引立給ふにぞ、兼道さらしな力をゑ、をき上つてさゆうより、指通しさし通せば、よはる所をしんれい、かしこへかつはとなげ給ふ、カ、ル兼道すかさずまとりが首、水にたまらず打をとすカ、ル此首こくうにひぎやうして、くはゑんを吹かけ飛めぐる、され共しんれいかごあればカ、ルくもゐはるかにまひ上り、行方しらずにうせにけり、しんれい其時みこへをあげ、カ、ルなをゝほうそをしゆごせんと、ひかりをはなちうせ給ふ、兼道御あとふし

をがみ、逆てきをたいぢして、國あんせんの吉左右と、悦びいさんで立たりけり、かの兼道がはたらきを、きせん上下をしなべて、皆かんせぬ者こそなかりけれ

第六

其後、魔取の王子も自滅有、洛中のさうどうもしづまれば、天皇を都へ還幸なし申、かづらきの大君もカ、ル江州より歸洛あり、目出度御代とぞ成にける、此度のくんこうに、高村すくねかねみちを、近江の郡司にせんじ有、正五位ていゐにふくせらるゝ、まつた行基僧正にも、菩薩の號を給はりて、近江は都遠ければ、大和の國に地を見立、大がらんをこんりうし、十六丈のるしやな佛、あんち申せとりんげん有、則すゝねかね道に奉行けいご仕れと、ちよくでうあればかねみちカ、ル謹で承り、頓て三重用意をしたりける、かくて其日に成ぬれば、奈良のみなみに地を見たて、則行基かうじにて、四方に四天の柱をたて、あまたのばんじやう召あつめカ、ル奉行の兼道

さしづなし、作事初と聞へける、去程に都より、あまたの月卿雲客、御さぐはんのため參詣有カルのうふしやうかくをもちこの、所せくまでさしつどひ、くんじゆなしける有様はチャクリ花やか成けるしだいななり、かゝる所に、天地俄にめいどうして、雲中より魔取のかうべまひ下り、口よりほのふを吹出し、かいげんくやうの道場をカルさまたげんと飛まはるは、すさまじかりける次第なり、兼道さはがす太刀をぬき、飛かゝつてはつしときればこなたへうせかげらういなづま石の火のカル姿に見れ其手にとられず、かなたこなたとする所を、ぎやうぎしばしとをしとめ、かく惡靈のをんねんは、カル打物わざにてかなふまじと、じゆずさらくと押もんで、せめ付くいのらるれば、いのりいのられあくれうはカル大地に打ふせらるゝとみへしが、忽くだけで其内より、魔生のすがた顯れ出、ゑゝ口をしや、魔取がからだをわが物にし、日本をまこくになすべしと、かく迄しをふせたりけるを、又ものぞみをうしなへり、われ廣次が一念なり、今ははや是迄とカル云かと思れば其まゝに、雲にまぎれて失にけり、先々あく

まはさり行しと、こんりうのこと始め、つゝがなく打納む、千秋万歳めでたしと、貴賤上下をしなべて、皆あふがぬ者こそなかりけれ

通俗傾城三國志

第一

「偕も其後、駒もいさみてなるすゝの、馬子が歌にかしまたちあつまのそらに、かはむけて、朝日ににはふとを山やと山の、さくらはなかがる、からあやしき、色ふとんしやんと三重のりかけかゝかさの、うちみゆかしきはなと花、ふたりばしやうによも山の、めいしよはなしにいつとなく、はや品川につきにけり、とものおのこはやどをとる、ていしゆ立いで見るよりも、まだ山のはに日もたかし、是はいかなる上郎様、いづくへ伴ひたまふととふ、男聞てさればとよ、げせつがしゆんとたのふたる、新吉はら京町、三うらのほう順このたび、三がのつの色合、京の名色花月の君、なにはのゑん色むめがへ様、この御ふたりをよびくだし、もとよりてまへのわかむらさき、合て三がいまつの君、ひとめにおがむ三ふくじん、カ、ルせんせの世にいで、の里、やへ山ぶきの花みして、さかへんすへのゑいぐはのほど、たのしみぞんし

候也、その山ぶきはいわぬ色、カ、ルくちなしそめのぶんにして、人にさたばしたまふな、いざ／＼これへとそれよりも、地むめがへの君花月の君、馬よりおろしまいらせて、内にともなひかしつきて、たびのつかれを三重「やすめける、いろのみなとのふなかゝり、京大坂の松の君、あづまくだりとこよひしも、品川に一しゆくし、あす江戸入ときくやいな、むかひのためにわかむらさき、その比又世にたかき、なごやさん三としはるは、若むらさきにあひそめて、ともにむすびし江戸かのこ、いふにいはいれぬなか也き、打つれきたり御一ざの、繕はずしてふうりうは、カ、ル色のきつすいまれものと、上下さゝめきにぎはへり、ていしゆ盃もちいで、三がの君の中におき、それおてうしとすゝむれば、嶋ばらの花月の君、むめかへ様へと有ければ、是はあづまのむらさき様、御はじめあれかしと、につことゑみて申さるれば、ていしゆこゝはさん三様、おさしづあれといひければ、山三につこと打わらひ、若むらさきは某が、あひかたなれば申されず、とゑ釋あればむめつのかもん、罷いでせつしやめが、憚ながら申すべし、兩

君様は都より、始ての御いで也、むらさき様はとうちの君、申せばていしゆこゝろみして、あげさせ給へしからばと、若むらさきは兩君に、カルじぎして盃取上て、花月^母さまへとさしければ、花月取上ケしづやかに、人々にゑしやくして、山三にこそはさしにけれ、山三盃取上て、江戸にゐながら久かたの、くもゐもとをき都の君の、御盃をいたゞく事、色みやうがあるくはほうもの、人々うらやみ申さんと、むめがへにじぎ有て、たんぶとうけて一口のみ、さしひかへ又取上ケ、むめがへにさし給へは、むめがへおさへてよそよりの、カルひへたる盃せんもなし、ひとつあがりて給はれと、つきもどせはさん三は、さあらばていしゆあい致せ、むめがへいや／＼その盃、かまひのあれば御あいはかなふまじいと云ければ、カルていしゆはほうと計りにて、びんかさなで、ぞゐたりける、なごやさあらば給はらんと、又ひとつ引うけて、口付給へばむめがへは、さすまをおそしとよりそひて、その盃に口をそへ、いちどにのふでいきをつぎ、たがいにくと目を見あはせて、しつとわらふてうつぶけば、むめ津^{はやし}拍ていよ見事、

むめがへ様の御盃、むらさき様へと云ければ、あいとこたへてさしけるを、若むらさきは太やうに、扱もきみよき御酒ぶり、カル一つたべんとうけほして、むめ津にこそはさしにけれ、かもん待かね候と、いたゞきて三ばいほし、山三にさせば一つうけ、ひかへ給ふをみてむめ津、進出て兩君様、せつしやねがひのござ候、三がの君のか程迄、御あつまりあるご一ざは、つゐにきゝも及ばねば、道中の御しかたちと計り御まなび、御みせあれやと云ければ、兩きみこれはいとやすし、むらさき様もそうあらは、御たちあれやとすゝむれば、じするにちよばず若むらさき、小つま取あげたちあがり、さきにすゝめば兩君もチャクツついてせきをたゝれしは、めづらしかりけるしだいなり、色はちしほにおほけれど本地さすがにかけてたのむには、むさしのおふいとすゝき、ほにでし色や若むらさき、みやこなにはづこの江戸を、三がの津とは申せども、そのだいいちの松の君、さも太やうに立いづる、やなぎのめもと花のくち、ちよつとさしくしあらひかみ、身ふりせいころとしのほど、たとへていはん花もなし、見るに心をくれな

ゐの、もへたつやうのかうりんずに、打かけたりし
しらきぬは、さくらかさねとうちみへて、三重ときも
やよひの色なれや、つぎはみやこに名の高き、花の
めいしよは多けれど、見てもみあかぬみよしのや、
よしのゝさくらすまあかし、月と花とをくまもなく、
ひとつに見たるこゝろとや、本地花月の君と申つゝ、
ひなのはて迄せんせいを、きゝふれたりし色つかさ、
ひじゆすのうへにきのこそで、はなやまぶきと云と
かや、三つかうがい二つくし、げに京ふうのかみ
かたち、あいきやうありしようがんは、ほかにたぐ
ひもあらゐその、なみのちひろにしづむ共、せめて
ひとはこのきみと、心をかけぬはなかりけり、つ
づいていろもなをよしや、なにはづに、さく此花の
いまもはるなるいろさかり、むめかへのきみはひと
しほに、花もいろかもさきかけの本地よそにおとらぬ
ようしよくに、ふたつかうがいひやうごわけ、みつ
さしぐしに八もんじ、山三がかほを目にかけて、ず
んどでかけしよそほひは、月ゆき花の三つの君間ノ手
小つまかいとりふりかけて、たかびにあとさき見あ
はせて、さしもにひろき大ざしき、二三と四五ど道

中は、こゝろことばもおよはれず、かゝるところへ
そともより、しゆすのづきんにすげかさき、三重あさ
ぎあはせの身せばつま、ひらりゝとけかへして、
つかゝときたりつゝ、おめすおくせず立たるは、
おもひかけなうみへにけり、むめ津はいそき立むか
ひ、やゝそのほうは此所を、何と心へざしき迄、き
たりては有けるぞ、くはんじんならばおもてへでよ、
べいせんはいか程も、ゑさすべしと云ければ、いや
私は小づるとて、カルはづかしながら少々は、人に
もしられし身なれ共、さしつけ是へまいる事、承れ
ば京嶋ばら、大阪のしんまちより、たゆふ様の御下
り、しん吉はらより御むかひに、若紫様御いでにて、
こよひ三がの色くらべ、世にもまれなる御一座を、
ゆめ程成共見まほしく、つとめをかきて御ざしきへ、
カルわざゝまいり候ふと、につことゑみてぞ申
る、山三此よし聞召、くるしかるまじこなたへと、
カルおほせければさあらばとて、チャリかもんはと
もなひいれにけり、山三是へとのたまへば、すこし
もおくせずまんなかに、カルむんずとなをればわか
むらさき、さかづき取上ヶさしければ、小つるとり

あげいたゝきて、みな様すらりとゑしやくなし、むめがへにさす所を、山三おさへてまづかさを、ぬぎて盃いたされよと、てを取給へばふりはなち、是はわれらがだうぐ也、づきんはかみもおなし事、かさは上郎のかうがい也、くるしからじとかたふけて、しとゝよりそひむめがへ様、イロ地御身をちらとみのぢより、カル道すがらつきまとはり、はまなのとまりでくどきしに、つれなくよもあけ此程も、かなやのしゆくにてちそめのふみ、とかくのこたへもましまさず、御身にたよりかこたため、やつすすがたの百年んめ、じつを見せんとみぎりのての、カル小ゆびをふつゝとくひきつて、ちけふり立てふきつくる、むめがへ是はと立のくを、たもとを取て引とゝむ、山三こはしれものと、二人の中へわつて入、おしへだてつきのくれば、かのものかふりしかさづきん、カル取てすつればすみまゆかみ、山三がかほをきつと見て、やあごへんはなごやさんざとしはるにてはあらさるや、山三きいてさいふはたそ、たれとおろかすぎし比、御身にうたれしふはの、ばんざへもんがおとゝ、同名ばんさくてるひろ也、兄をう

たせむねんと思ふ、一ねんこゝにてつつうし、たいめんなすこそうれしけれ、くはんねんせよとくはいけんぬき、たゝ一打とする所を、御供にひかへたる、かみなりくはん八、ふうでん長七、一もんじにとんでいで、さゆうより切付る、もとよりばんさく小たちの上手、カルひじゆつをハヤ三重つくしわたしあひ、命かぎりになゝかひけり、大りきぶさうのくはん八長七、大がたなにて切まくれれば、何かはもつてたまるべき、長七と切あふまに、くはん八はうしろよりむずと引くみ兩人してカルすかさず取てどうとふせ、くびをうたんとする所を、なごやおしとめやあゝまで、某がちゝ同性、三郎ざへもんを、伴ざへもんになたれし時、こつすいにてつしむねんさを、思へばかれもあにのあだ、うたんと思ふはぶしの道、もつともしごくのところ也、いまだびやくのものなれば、放ちかへせ此なごやが、うんつきずんばうたるまじ、とくゝとのたまへば、兩人きいてかたきをば、ねをたつてはをからす、せひにうたんと申せ共、所もあしく此たびは、ゆるせとしきつてとめ給ふ、ちからおよばず兩人は、命みやうが

のしあはせものと、カ、ル取て引たておひ出す、地ばんさくしゝのはがみをなし、山三がくびはあづけおく、かさねてほんもうたつせんと、ゆきがたしらずに成ゆきける、なごやかなさけふはがゆう、カ、ル適じんぎのせい靈やと、きせん上下安詫皆かんせぬ者社無嶋

第二

其後ふしうよつやのかたはらに、そのかみ四こくの住人とや、がまそがうカ、ル大十ふゆとらとて、ふうきぶにようのらうにんあり、大なでつけのすみびたい、男じまんにはいくはいし、そがうびたいと世にたかく、すへの世にみな人の、カ、ルそうがうといふ事は、そがうをあやまることばとかや、生得ねぢけ肝ふとく、力ふつうにこへければ、カ、ルがいにかまするふるまひを、にくまぬものこそなかりけれ、したがふ所の郎等には、大どうぶつゑもんおにかけ、大竹とら八くろかせ、だちぼく入道てつぎう、山あらしじやの助、カ、ルいづれもぶさうのあぶれもの、

人をおびやしたのしみて、ひるはくらして大さけに、よはおきあかすもの共也、時に大十なんぢらもしるごとく、われ三うらの若むらさきに、ひたすらといひいるれど、馬にわうごんうしのつの、はちのせゝるがごとくにて、些そつ共うけ付ず、いかゞはせんといひければ、だちぼく入道すゝみ出、こは御ことば共おぼへず、凡ちからわざ成共、又きんぐの事も、御ふそくなき御しんしやう、何とてさ程御心を、なやまされ候ぞや、若むらさきがい程に、せんせいしゆみ迄のぼる共、なんでうつかへの候はん、此入道がはからはんに、たが取もちの入べきぞ、たいいまに御吉さう、申上んとたつ所を、そがう笑ていやまづまで、それではゆかぬ所あり、なごやといふものさきだつて、きよねん中よりあげつめに、當年中もらいねんも、かひ切たるよしいて有、そがう程なるものなれ共、カ、ル是にこまつてさしあたり、とうはくしたると申ける、大どう大竹申やう、さあらばひとつの手だて有、なごやが歸る道すじに、待伏してやみ打に、うつてすて候はんに、なんでうしさいの有べきと、カ、ルてにとるやうにぞ申ける、

大十きいてげにそれも、よろしからんがさりながら、かれもゆゝしきものなれば、ごにちのろけんあらん時、このそがうがやみ打に、したるなんどゝいはれては、ながくかたきをもとむる也、そこをよくりやうけんせよ、いかに／＼と有ければ、山あらしすゝみいで、あのなごやはせんねん、ふはのばんざへもと、申す者を打たりしに、かれがおとゝ同名ばんざく、いろ／＼ねらひ候よし承候也、かれがなをかり、敵討とかうしつゝ、よぶかにかへるをりからに、ばしよ能やうがい見さだめて、切て出兩方より、はさみ打にいたさんに、何のしさいか候はん、さすればおのづと若むらさき、御手に入候はん、是はいかがと申にぞ、十河をはじめ扱もよし、こよひつけんと夕まぐれ、たゝんとせしを大十は、さ程の事にかどいでを、先いはふべしそれ／＼と、申付ればふつへもんと立ておくよりも、ギンノリまだ口ひらかぬさかだるに、カルひさくをそへ持いでゝ、カルそがうがまへにぞなをしける、大十はゝゑみ立よりて、ひさくおつ取くみうけて、いきをもつがずつゝけさま、十四五しやくかいほして、さあなんちらものめ

やとて、カルひさくをわたせば四人のもの、チャクリさしうけ／＼くみほして、今少し召上られ候へとて、差出すそがう引よせもろてをかけ、そろり／＼とのむ程に、カルたちまちたるをかへほして、かしこへかつはとなげ出し、扱きびよしやいさぎよし、いざ門出を打ておけ、此勢におそらくは、てにたつものの有べきやと、おどり上つて一どうに、すでにようゐをハヤ三重ゝしたりける、さればにや、ふはのばんざくてるひろは、むめがへが色にめで、あにのかたきをわきへなし、なごや山三を打もらし、むねんの山はふじよりも、まだいとたかくもへまさり、しんゐのほのほに身をこがし、やかたにかへり此事を、云ふもむねんにおもへ共、あまりの事にせひなくも、てごめにあひし事共をばんざへもんがこうしつ、柏木に語つゝ、是と申も某が、びじやくものにて候へば、かやうにおくれを取候、うでに力の有ならば、扱付てもほんもうをば、カルたつせん物をとせきつゝのり、なみだをながして申ける、柏木きいてそれは又、思ひのほかのふかくかな、ばんざへもんのあれ程に、ぶだうはしかく在せば、つね／＼に人にお

ぢられし、其弟ご共あらん人、さ程のふかくはあさまし、くさのかげ成せうれうも、さぞ口おしくおほされんと、おもへばなうばんさくどの、女ながらもむねんさは、こつずいしみてかなしやと、ざを打ちこゑをいらゝげて、おきつまるびつなきにけり、地ばんさく此一ごんに、はらかき切てもあきたらず、口をしく思ひしが、いや／＼敵をうたずして、犬死したるといはれては、かはねのうへのちじよく也、是迄也とずんとたつ、柏木それは何事ぞと、カルとどむるそでを、ハヤ三重ふり切てゆきかたしらずに出にけり、さんぎさんげ六こんしやう／＼、こんがうりきしのあいみんのうじゆ、なむきめうてうらい、ふはのばんさく、てるひろは、カルかしはぎが一ごんに、むねんをはらにすへかねて、金龍山しやうでんの、にわうはれいげんあらたなる、こぶつにて有ければ、さらばちからをいのらんと、よごとうしみつころおいに川にひたりて、こりをかき、あらなはにてはちまきしはだか身にこしみのあて、ふたへたつなでしつかとしめ、ばんざへもんがさいたりし、三尺八寸の大かたな、カルおつこうで一こしさし、て

に八かくのかしぼう、どう／＼とつきならし、カルにわうのまへの石坂を、一そくせつなに百どのぐはん、ひとたびごとに、力かみ、かんで打付ゆきかへるは、げにぬきんづるたんせいやとチャッ皆人ごとにぞかんじける、あらふしぎや、兩仁王、はうくはんよりけふりたち、しつほとあせ出あのにわう、ひらきしみ口の内よりも、じんつうふしきのこんがうそく、カルほつとふきかけ給ふにぞ、そうみしびれておぼへずも、大ぢにどうとふしけるが、かつはおきてわが身を見れば、さうのうでさうのあし、むねのわたりの力こぶ、カル二三十づゝふつ／＼と、地ふくれうごきてそのめんしよく、さもたくましくするどにして、カルしらきつくりの二わうより、なをすさまじくぞみへにける、ばんさくうれしき限りなく、かしこに有してうづばち、さも大きなみかげ石、かいつかんであげれば、カルその石かろくににしへに、まくらなどをとるこゝち、ゆびさきにてふりまはし、もとの所にすへおきて、扱有がたし有がたし、愈諸願成就と、おんどり上り飛上り、二わうをちたびらいはいし、こんりんふうりんすい

りんまで、くたけてひゝけと力足、どうくくど、地ふみならし、此うへ敵山三めが鐵の城に入り、石の扉をふさぐ共、らくくはみぢんに打やぶり、本もうたつせんうれしやと、うしみつすぐる比おひに、ハヤ三重わかすむ、かたへぞかへりける、さればにや、なごや山三としはるは、カル若むらさきのうつりかも、まださめやらぬとこはなれ、ころしもはるの月たかく、地かすめる空のおもしろき、おぼろ月よにしくものは、なしとゑいせし歌よみも、かやうの時やゑいじけん、いかにくはん八此けしき、いとおもしろし、どての内、かちにでゆかんとおゝせける、官八しからば左右も、おんそばに引そふて、心をくばりてあゆみける、かゝる所に、どてふちのさゆうより、怪き者す十人、顯れいでゝそれなるは、なごや山三とおぼへたり、ふはのばんさく是にあり、あにの敵のがさじと、云より早く切てかゝる、山三を始御供人、小せい成とは申せども、ことになれたる者共にて、カルぬき合切むすび、こゝをせんとぞ「たかひける、かゝるおりふし、ばんさく、かへりがてらに行かゝり、此事をきくよりも、かれはなごや

とおほへたり、あいてはたれかはしらね共、山三にいしゆありばんさくと、いつはりなごやをうつたくみか、是幸にさんざを、うつは何よりやすけれど、一たん命助られ、其恩ほうせず今うつては、侍の道たゝず、ことにわがみもいぎやうのてい、是でなるもいかい也、こゝはなごやをすくはんと、山三をかこひおしへだて、何人かはぞんせね共、だいじの御身と見うけたり、こゝはそれがし請取たり、かさねてやうすはしれ申さん、カルはやくこゝを御かへりと、やにわに山三をおしもどし、十河に向てやあかたぐ、敵にこそは人達も、むかしより有事也、打てににせはあたらしや、しやつ力のて始に、ちまつりせんとかしこなる、すぎの大ぼく飛かゝり、ゑいやつと引たふし、いざまへ立のばん作どの、正身のそんたいが、こゝにやうがう有けると、しんどうして打立る、そがう今はこらへずして、飛かゝりかの大木、かいつかんでむづと引、もとよりそがう大ちから、ふはゝみめうのじんづうりき、ゑいやくとひく程に、さしもの大木まん中より、カルふつゝとねぢ切大十は、しりゐにどうとすはりける、ばん

さく些たぢるかず、ふり上てうつ所を、そがうさそくのきいたれは、カ、ルおき上りかいくゝり、行かたハヤ三重しらずににげてゆく、ばんさくさのみいしゆもなし、にげは其まゝにがさんと、いよく二王をらいはいなし、わがやをさしてぞかへりける、カ、ル連ぶ双の働やと、貴賤上下安詫皆かんせぬ者社無梟

第三

其後蒲十河大十は、若紫になづみしが、ふと花月にあひ初て、ちひろのうみのふかまと成、カ、ルちかきにね引のさたきはまり、たがいのやうゐひまもなし、郎等大どうぶつへもん、大竹とら八をよびいだし、こん日はふか川の、下やしきにて綱ひかせ、それよりすぐに花月が方へ趣かん、カ、ルしたくいたせと云付て、やがてやういを「なしにけり、よしやなにはのうら浪に、さすがしやれたる梅がへも地なごや山三に打こみて、のぼるもくらきこひの山、地つもる思ひをこまゝと、かきておくりしちつかのふみ、

地若むらさきにとがめられ、めんぼくなさにいつはりて、地びやうきとがうしつとめをひき、ひるはひめもす思ひわび、よるはよすがらなきあかし、むねにたく火の色はなを、地やしほのもみぢきり島の、つゝじよりけにもへまさり、とひくる人もうるさくて、地なごやの君の事計り、若紫があの色に、うばはるゝこそくやしけれ、しよせんうしなひそのゝちは、しやうく世々も山三様、はなれはせじとさまさまに、カ、ル思ひせまりて今ははや、あらぬ事のみたくみつゝ、ひそかに一まを立いでゝ、人めをうかがふ折からに、山三様の御いでと、若むらさきへあげやより、しらせきたれば紫は、待儲たる身こしらへ、いでゆくすがたの妬しく、しばし見おくり梅がへは、地若紫がへやの内、ひそかに忍ひ入にける、チャクリこゝろの内こそふてきなれ、かねてなごや紫に、おくりたる吉光の、守わきざし有けるを、尋ね求めて盗み取、是わが戀の媒と、カ、ルおしいたゞきよせ打そべり、きせるにかたるむねの内、さはぐをしづめてゐたりける、かゝる所に、團助といふわか

いもの、梅がへに大なづみ、すつうのきしやう書つかはし、さま／＼心をつくせ共、つれなく月日をすごす内、思ひにたへかね梅がへが、一まに忍びみてあれば、み山のおくのいはつゝし、花のすがたをみる人も、なきひとりゐるを幸と、しとゝよりて抱付、梅がへさはがずだん助か、こゝをはなせとてにもちし、きせるふり上げうつ所を、むづと取て梅がへさま、あまりつれなき御しなし、身に思ひのあるゆへに、あづまにくだる折ふし、道中にて御身をみそめ、品川のしゆくにつき、かたちをやつしゆびをきりそれよりかやうに下郎となる、身のねんぐはんはよそになり、か程に心をつくす事、ふびん也とはおぼさずやと、こへうちふるふてくどくにぞ、梅がへつづくしあんして、是くつきやうの事也と、面よはげになう御身は、品川の宿にて敵打のさた有しが、その事はいかゞぞや、だん助きいてさればとよ、よい事計りはならぬ物、御身の事がおもとなり、敵も何もやめになる、とかくの事はぎよゐしだい、此身はずだ／＼五ぶきざみ、車さきになるとても、ちつ共そつ共ひくきはなしと、身をもがいてそ申ける、し

すましたりと梅がへは、さあらばわがみに自が、續たき事のあり、あの花月がそのかたの、品川にての事共を、とくと知て侍へは、此うへ御身と自が、ゆゆしきあだは花月也、あれをさへ失ひなば、心憂く念比せん、儼に失ひ其うへにて、かやう／＼と叫て、かの守りわきざしをそとつかはせばだん助は、あの女獨をば、いかやうにも計はんと、せめくるこひのわりなくも、かならずたがへ給ふなと、ちかひをなしてはかりしは、三重むざんなりける「しだいなり、のめやうたへやはまゝつの、おとぎんざの大一ざ、チクリもとよりなごや若むらさき、たにことなりし御中にて、あげや一けの者共に、しなくを給はれば、カルあげやふうふはあさからず、よきにもてなし奉る、時に梅津それ／＼と有ければ、承り大せいにて、嶋だいをかきいづる、上郎たちの名よせして、しよこくめいしよの花たばこ、心をこめてかざりしは、いとめづらしくぞみへにける、かゝる折ふし花月の君、けふの客衆のおそきゆへ、さびしきまゝにまいりしと、いとしづやかにぞきたらるゝ、山三むらさき始とし、みな／＼是へとしやうじつゝ、やゝ過け

れば花月の君、かぶろをよびて嶋だいに、品をつく
せしたばこの名、よみきかせよと有ければ、カルあ
つとこたへてよみけるは、やさしかりける次第なり、
花のめいしよはおほけれど、わけてよしのはいろも
かも、地よそにかつ山からさきや、さかりはいまだ
わかくらの、その山からのほとゝぎす、やみのさつき
になきわたる、三重こへもたかさきいはくらの、山な
たてじやとはらびろに、うへみぬわしのをのながく、
ながくしよのひとりねに、君をまつらにすみのへ
や、地なきあかしたるむしたばこ、けふりはそらに
立わかれ、しるもしらぬも白きくの花のいくゑもよ
ね澤の、かほりゆかしきそでのかを、したひてこゝに
小まつとや、きよはらきよ川にぎりなく、むすびし
水もいさぎよき、ひかりにみがく玉の井の、くめど
つきせぬ江川の水、ながれてはやきやはせかや、戀
しき人をみやかはら、地わたるとすればはしとめの、
はしのあるじかおそろしき、名もりうわうやはつと
りの、とぶてふすへはくもにいる、カルあとこそみ
へね白たへに、ふるはつ雪はゑだごとに、花とさく
らやさゆるよの、月のかつらのかつら川、しづがお

やまだかりそめに、見そめしんでんいつのまに、そ
のにしきゝもかずゝに、つもりて君にごげんこや、
あかぬこゝろはあかつちの、つきぬ名よせの品々を、
おもしろうこそかたりけれ、わかむらさきと花月の、
きみ立より名よせのふたをみて、若むらさきとふだ
をかき、からさきにつけたりし、心はいかにおゝそ
れは、ならふ色なき君なれば、ひとりのまつといふ
ならん、花月の君をよしの、とはうへなき花といふ
事か、地扱はつとりをはずねとは、それはかなにて
かく時は、はつとりなれはうぐひすの、こへにたと
へてはつねの君、歌のよきをやはめぬらん、それは
さもあれお山だに、高をとつけしはいかならん、む
らさきこたへてうつくしき、女をお山といふなれば、
高をの君はお山じやと、いふ事ならん三しうを、小
松と云は又いかに、わかむらさきは打わらひ、よの
かたゝもなにはへ、よしとあしとをくみわけて、
おゝせられよとありければ、なごや梅津一同に、若
紫の才ちの辨、今色里のしよかつりやう、そのかう
めいもおよばじと、きやうにしやうしての給へば、
紫きいて三しうは、三重ならぶ色なきしんぞうゆへ、

やがてくらゐもまつのきみ、小松と是をいふかとよ、かうしうたてをきり山とは、それはきついといふ事か、みちしばをりうわうとは、色のすいわうなるとかや、みちのくをはつ雪とは、見る三重たひにめづらしいといふ事が、若むらをはしとめとは、こひわたられぬといふぎりか、せんよのかたをさくらとは、さくらははなのわうなれば、すがたを是になぞらへて、ほめしことばのおもしろく、色もんどうのやさしやと、ほめぬ人こそなかりけれ、紫はきせるにて、だいをはつしと打ければ、しまだい四方へばつとひらき、金銀のはくにてだみし百はのすゝめ、ばつととび出こゝやかしこととびめぐる、チクリ人々是はとおひめぐれど、とるてをくゞりそでをこへ、驚にぐるをのがさじと、カルすみゝおつかけ御さわざは、めさましかりける次第也、若紫はおさへとり、袖をおほひて撫さすり、扱もかはゆきものかなと、カル山三と共に打つてをくをさしてぞいりたまふ、花月の君の袂より、カルひとつのすゝめとびいでゝゆきがたしらす成にけり、花月は是をきにかけて、ぼうせんとして立ゐたり、幸也とだん助はうしろより

かけよりて、口に手をあておつすくめ、むずとしむれば花月の、君こは何者とおどろくを、カル一かたなこゝろもとさしとをし、是こそはカル若むらさきのたのみ也、我ばしうらみ給ふなと、つゞけさまに二かたな、カルさし通しくりまはし、そのわきざしを捨て、カルさあらぬていにて梅がへが、チクリとこの内に入けるは、ぶたうなりける次第なり、かゝる所へがまそがうふか川にてひまをとり、もみにもふで亥のこく比、あげやにかくとあんないある、かねてまちへし事なれば、さあ御出とさはぎたち、休み在す花月様、おこし申せとてしよくをもち、女房かぶるもろ共に、はしり行て見てあれば、むざんや花月はあけにそみ、もはやことされこはいかにと、わつと一どになきさけぶ、おどろきさはぎ大十も、カル立いり大きに肝をけし、あきればてたる計也、ていしゆ是は客の内、上郎ころせしものあらん、大もんうつて此せんぎ、すまぬ内は一人もカルいざすまじ、ハヤ三重いとふれまはし、うへをしたへそかへしける、なごや梅津は驚て、立出こらん有ければ、梅がへは走りきて、花月のしがいに取付て、カルあ

らいたはしの花月様、もはや事きれ給ふかと、さもけうとげにふしまろび、こへをあけてぞなきにける、大十は立よりて、むなしき顔をかきなで、われ來やう遅ゆへ、むざんの死をいたさせたり、たい今にせんぎをとげ、敵を取てゑさすべしと、そばに有けるわきざしを、取てさしだし此内に、このわきざしを見しりたる、ものやあると云ければ、泣伏ゐたる梅がへは、なごや様より過し比、若紫へおくらせ給ふ、わきざしといひもはてぬに、大十ゑすはしれたり、若紫色の妬に、なごやどの御はからひか、真直にいひひらかれよ、のがさぬと、はたとにらんで申ける、梅津きいてやあらそこの御口上、こゝにふたつのふしんあり、一つには梅がへ、其わきざしを見もせず、若紫のわきざしと、知たるは心へず、ふたつには泣やうにしうる有、かんる有、今かれがなきこへはほかに偽り、内心に悦ぶおんのきこふるぞ、かれをとらへてごせんぎあれ、いかにくといひければ、そがう聞て慥のせうこあるうへは、若紫にもせんぎあり、まづ梅がへをいましめよと、大どう大竹立かゝる、だん助つゝと走いで、梅がへにとがは

なし、げしにんは此男、しかし敵をめまへに、おいてまよふは戀のやみ、くらむあくうん今こそは、しにものくるひとわきざしぬき、山三にかゝるを梅津のかもん、なごやを伴ひ立かくる、大十始あげやのものの、あはてふためきさうどうなす、そのひまに町のもの、カルてんでにぼうをふりハヤ三重たてて、うへを下へぞかへしける、され共だん助ひるまばこそ、つばなのごときす百のぼう、カル切落し切落しとうハヤ三重ざいへ、むらくはつとおひちらし、にぐる所のもんうてば、せんかたなさにかしこなる、みづためおけにとび入て、しばししのへば見うしなひ、ひやうしぎ打てさはぎたち、こゝよそよと夕やみの、くらきにまぎれカルおちうせけり、あやうし共中々、申はかりはなかりけり

第四

其後、不破伴作照廣は、わかげのそこつしだして、こかうをのがれ夫よりも、やきがねを顔にあて、めんさう引かへ名を改め、柴忠太とかうしつゝ、カル

其身いさうにつくりなし、うき世を忍ひゐたりしが、花月をばむめがへが、殺たるに紛なく、もとなにはの上郎ゆへ、大阪のおやかたへ、かへしつかはし見せしめに、おもきざいくはにふすべしと、三うらのほう順計ひしに、げしにんとして大十が、もらひうけて郎等、大どうぶつへもんおに景、大せい召ぐし請取て、けふくるわを引出す、何とぞ道にてばいとらんと、カ、ル心をくばりこゝかしこ、チクリしばし見あはせゐたりけり、ゑいやゑいさらさきのつな三重よいこへかけていまひとつ、てうしをそろへてたのむそへ、チクリひけやはやせやよをうしの、めぐるくるまのはかどらぬ、力をいれて車力のもの、四五十人にてざいもくを、カ、ルあまたのうしち車にてチクリ大あせながして引きたる、しば忠太傍より、ゆらり／＼とあゆみ出、さて／＼みればきりやうよき、わかいもの共何として、あつたらうでに力なく、片手にても振まはす、たゞ一本のざいもくを、うしの力をかたつかと罵て、かつらからとぞわらひける、才料のものの立むかひ、是は淺草くはん音へ、みどうむなぎの

きしんなり、かたつきわきへより給へと、ていねいつくせば又ひとむれ、けんくはゑしよくの、車力共、大きにいかりこへ／＼に、す六ほうめがでほうだい、本性か但は又、あくさけに吞酔たか、誤つたらば赦べしと、口々に罵たり、忠太さはがす兩うでくみ、かたなのつかに打かけて、きつと見かへりかしましし、何と又あのざいもく、片手にてふりまはさば、何とするぞと云ければ、車力の者共一同に、チ、片うでにてうごかさば、是に有あふす十人、てしたに成て順ん、まつたあげへぬ物ならば、しやつかうべを一足づゝ、みな／＼ふむががつてんか、早くあげよとつめかくる、忠太聞て、男の詞はきんてつより、かたきをもつてせうことす、さあせいもんをたてよといふ、皆一同にあたご山、冥り白山うそなしと、こへ／＼にいふ其中に、又一むれに呟て、ぬくとみたならぶてと云、忠太いや／＼己等に、刀を汚物にてなし、いでそこのけといふまゝに、あみかさ取てかばとすて、かのざいもくのはなを取て、する／＼と引よすれば、人は物かはうし迄も、四方へばつとぞのいたりける、忠太笑てざいもくの、真中取てす

つとさし、かろ／＼と振まはす、もとよりじんべん
てき一ぱい、こんがうりきしのさづけたる、カ、ルち
からにて有ければ、物のかず共おもはゞこそ、さあ
己等一人も、背がさいご打ひしぐと、カ、ル大のまな
こにかどをたて、はつたとにらめばひれふして、大
きにおそれ此うへは、なんぶんにも御げちを請わが
主と頼べしと、かうべをさげてゐたりける、忠太は
ざいもく、もとのごとくに直しつゝ、どうと居てや
あなんぢら、其しんていならちと斗り、カ、ルたのみ
たき事のあり、いかゞあらんと云ければ、何かはい
ぎに及んと、皆一同にぞ申ける、さあらばとて巧の
程、かやう／＼と云ければ、御心安かれと、カ、ルて
に取やうに申ける、忠太おほきによろこびて、まづ
酒のめと懷中より、しやきんあまた取出し、まきち
らせば車力共、悦びうけ取おしいたゞき血きさかん
の若者共、いきほひあがりそれよりも、こゝやかし
こにみへかくれ、今や／＼とハヤ三重「まちゐたり、か
くとはしらでおにかげは、梅がへをいまして、馬
に打のせはたをさし、カ、ルくるわの内を引まはし、
せんごきびしくけいごなし、人をはらひて取かごみ、

どてへ出ればきしかげより、くだんの車力す十人、
顯れいで、其女を、わたせと云ておつ取まく、もと
より大どうぶつへもん、そのなをゑたるあらものに
て、大切のざい人也、そこをのかぬか盗人共、めに
物みせんと大刀、四五寸くつろげにらみつけ、おど
しかくれば車力共、それ打殺せと云まゝに、とび口
ふり上げ打てかゝる、カ、ル大どうせひハヤ三重なくわ
たしあひ、火花をちらして「たゝかひける、かゝる所
へしは忠太、ざいもくを淺草の、もんないに引おく
り、カ、ル立かへつて此所へ、くるよりはやく梅がへ
を、引卸いしめ、カ、ルなわおし切てかたにかけ、
ハヤ三重行かたしらずにかけ出す、さすが名をゑしぶ
つへもん、大せいにてをとおせ、その身もすか所疵
をうけ、のこる者共おつちらし、カ、ルはふ／＼かし
こを引けるは、てもちなうこそ「みへにけれ、里はめ
てたの、わかむらさきの、色もさかへてのんゑいこ
の、なみもしづかにこぎいだす、なごや山三としは
るは、あらたに小ばやをしつらひて、若紫を召ぐし
て、かすの御供賑く、さゝめかしたるろびやうしは、
チクリいさましかりける次第なり、ころはぼしゆんの

日のかげも、のどかにかすみ風もなみ、地あさくさ川
におしだいし、品川うらにこぎゆけば、若紫は一し
ほに、はるのみなどの夕なぎや、地かすみにむせぶな
みの音、カ、ルげにめつらしのふうけいと、チャクリしば
しながめておはします、やまとにあらぬとうあみの、
さつと打てはさつとひき、とをあさを打ひくあみの、
げにおも白き手わざやと、しばしあみをぞ打にける、
山三紫此ていを、はるかにごらんじめづらしや、こ
なたへよべとおこせける、梅津は扇をさし上て、是
へくと有ければ、カ、ルぎよじんはかぢを取なを
し、御ふねちかふぞまいりける、としはるは艦に、
立出給ひて此所の、ぎよふにてあらばみへわたる、
うら山をおしへよかし、さん候此所、品川うらに八
けいあり、カ、ル御物語申さんと、一々しだいにかた
りけり、まんづむかひのうみつゝき、八咫のしほあ
いきはもなく、なみによせたるあわのくに、かすみ
かくれにはのみゆる、ゑんほのばいせんなみにいり、
波よりいで、春風に、にほひなければどなみの花、地さ
つとあたりてちるふせい、この下かげのこゝちして、
しほひの比はかへるかり、ひかたにおりてはをやす

め、むれゐる人におどろきて、はつと立てははらく
く、はらりとおるゝありさまは、しほひのらくか
ん是ならん、三重こなたにみゆるひとむらの、こたち
にりよ人行くれて、ねぎめに松の風すごく、さうく
たる雨の音、こきやうを忍ぶかんせいは、すゝのも
りのよるのあめ、これらはなつのけしきにて、ひと
よくにそらさへて、そこ共しらぬわだのはら、こ
がれ出たるなみのおも、是かいしやうの秋の月、つ
きのひかりも袖さむみ、チャクリくれもよほす山かせ
の、もみちをそらにふきさそひ、にしきとぶかとう
たがはる、是やつ山のせいらんなり、ひゃきておつ
るかねのこへ、しよぎやうむじやうとものさびし、ぞ
う上寺のばんしやうに、品川おもてゆくたび人、や
どをもとめつやすらひて、はるかにうみを見わたせ
ば、入日はなみにかゝやきて、もろこし迄もうみつ
づく、是品川のせきしやうと、ながめせしまにふゆ
ふかく、ふりくる雪にうなばらも、そらのけしきも
見る人も、皆白たへにせんちうの、ぼせつのきやう
はおもしろや、此品川のしなくはカ、ルかたるにつ
きぬふうけいと、くはしくおしる奉る、時に漁客我は

と思へば忽に、もとのみふねにのりうつり、淺草川へぞかへられける、カルあつはれきたいの事共やと、きせん上下おしなべて、皆かんせぬものこそなかりけれ

第五

其後、武州入間の郡、金龍山せんそうじのくはん世音、衆生利益の結縁に、三十三年めに斗帳とさうをあげ、いにしへよりはいさしむ、こんねん其ごに相當り、三月十八日よりかいてうあり、カルきせんなん女はそでをひき、きりをたつべきせきもなし、なごや山三利春は、りう王のめいにまかせ、此くはん音へさん詣あり、寶前に謹て丹せいをこらし、それよりもかしこを見れば、若紫あまた上郎打つれて、カルかずくのさゝげ物、思ひく「いでたつや、そめしゆかりのわすられぬ、ふかき色かの若むらさき、地ぎんのくはひんに松のしん、みさほの色のちぎりこそ、はなれぬ中となさけしる、しらふぢ小ふぢの、ゑだにかゝりてはる風に、さつとなびけるふうけいを、

心にこめてさしたる花、車にのせてしんくのを、かぶろにひかせて出にける、あともときわの色つかさ、小紫は一しほに、大じ大ひの御せいぐはん、くさきのすへはも、もらさじと、おゝんめぐみにわが思ふ、君とちぎりし其中を、ちよよろづよとりうくばんし、つるかめのしよくだいに、かうろ花入取そろへ、かふろにひかせて出にける、つゝいてうねめの君なりき、かねてちかひしわがねがひ、見てさせ給ふうれしさに、さいしきこのむすがたを、のせて車の引つなも、しんくのいとすへながく、むすぶるにしをいのりつゝ、てづから引てまふでくる、わかにその名高をの君、日ごとにまさるせんせいも、めぐみのすへをみほとけの、おくはうかやく十二とう、とぼしつれつゝくるまにのせ、かぶろにつなをとらせつゝ、ふりよきさくらの色ざかり、花のあゆむかごとくなり、其外ゑまにつくり花、かすゝいろの名をよせし、大てうちんはひとしほに、カル天にかゝやきちにゑいじ、淺くさでらのにぎはひは、こゝろことばにのべかたし、なごやさん三は人々と、打つれ立てはいでんの、地さまくゝなりしさゝげ物、

打なめつゝさんけいの、らうにやくなん女のひは
んして、たずゝみ給へば上ろうたち、みやげ物な
ど云付て調來るをまつおりから、比しもやよひの花
くもり、いとみだしたるはるさめに、さんけいの人
人も、あまやどりしてはいてんは、しよにんまばら
に成にけり官八は用有て、表へ出れば長七は、若紫
をみおくりて、かしこをさしてぞ出にける、山三は
かこの來る内、カ、ルはいでんにあまやどりチャクリし
し時をぞうつさるゝ、ふしぎやいつもはいでんの、
かたはらにあるびんづるの、ごうかと思へばさはな
くて、六尺ゆたかの大男、めんうす衣を取てすて躍
出てそれなるは、なごや山三か珍らしや、汝を待て
身をやつし、しば忠太と名をかへし、ふはのばんさ
くてるひろなり、遁はなしとつめかゝる、にはに有
あふ供のおし、おし隔おつ取まく、ばんさくみ妙の
大力、引よせゝかい掴み、人礫に打たてゝ、大に
はさしてかけ出すは、ハヤ三重すさまじかりける次第
なり、山三も今は是迄なり、遁ぬ所と思召、刀拔持
わたしあひ、切てかゝればばんさくは、四尺餘の大
刀、まつかうにさしかざし、たゞ一打と切付る、山

三もとよりけん術しや、カ、ルうけながしかいく
り、ハヤ三重こゝをせんとぞたゝかひける、もとより
ばんさくがう兵のなが刀、たゝみかけて切付る、山
三てきゝと申せ共、腕つかれ今はや、既にかうよ
とみへし時、きくはんにかけしかしからかさ、おの
れとぬけて春さめの、そばふるかせにさそはれて、
ひらりゝとおちきたり、ふたりの中にどうとおち、
忽大風頻に吹カ、ル此かさに風をうけ、はんだん計お
してゆく、山三が形もみへわかねは、ばんさくたち
にて此かさを、拂のけんとしけれ共、かなひがたく
みへければ、しやめんどうなるしやうげかな、たち
のすんはのびたり、からかさかけてはつしときる、
つばもとよりかたなはおれ、はつと見ればこはいか
に、くめのへいないびやうへながもりが、せきぎや
うにきりつけたり、チャクリ山三はけがなくぼうせ
んと、てがさにあめをしのぎつゝ、かごをまちてぞ立
たまふ、ばんさくいよゝせき上つて、つかみさか
んととびかゝる、中へ老そうわつていり、双方をお
しとめ、いかにばんさく汝が兄ばんざへもん、な
ごやがちゝ三郎さへもんを打たるゆへ、其子山三に

うたれたり、是積惡のなす所、全なごやに恨なし、しかし汝兄の仇、ほうせんと思ふこゝろざし、力をいのるふびんさに、二王にめいじさづけたり、こんがうりきはまるが分身、なんぢがちからはわがちからぞ、此うへ心をひるがへし、地山三と水魚の結びをなせ、汝今打果さば、ふはのいへをつぐものなし、われは南方ぐせだいし、とうじの本ぞん成けるぞと、カルくはん音さつたとあらはれ、しうんにじやうじておがまれ給ふ、なごやばんさくひれふして、しばらくしらいはいくはんきのなみだ、くはう大じひのくはうみやうに、うらみのくもをふきはらひ、たがひにむすぶゆうしのみち、げにいさぎよき次第なり、かくとはしらで梅がへは、長刀おつ取はちまきし、走り來つてばんさく殿、うはへは御身に順へ共、命をあげし山三様の、助たち成ぞと切てかゝる、ばんさく呆れてゐる所に、くろくもおくり其内より、花月がおんれうあらはれ出、おもひしれやと梅がへが、くびふつゝと引ちぎつて、はんもうとげしうれしやと、いふこへもろ共うせけるは、ハヤ三重おそろしなんでしょうもおろかなり、かゝる所へがまそがう、大てうち

んをけ破て、立顯れ汝らを、つけ出さん爲此所に、先達て忍たり、戀の敵のふはなごや、兩人共にのがさじと、カル打てかゝるを兩人は、心へたりと馳かかる、官八長七かけ來り、やうすを聞て打悦び、すは究竟の敵にあふ、君は御手を卸されまじ、我々に御任と、そがう郎等大せいを、カルあたるとうざいよるなんぼく、じうわう八めんすきもなく、打てまはれば叶はずし、カルかいふつてにげゆくを、ハヤ三重いづく迄もとおひかくる、山三せいし給ふ時、そがう大十引かへし、こゝはてせばとをりへ出、一き打にしやうぶせんカルなごやばんさくもつ共と、いさみをなしてそれよりも、大道さしてぞ出られけるカル適ゆうしやのしわざやと、きせん上下おしなへて、皆かんせぬ者社無けれ

第 陸

其後、かくてその日もくれゆけば、兩方互に進みより、そがう大十大おんあげ、いしゆは互のむねにあり、あれ打とれと云ければ、てつぎうしやの助太刀、

まつかうにさしかざし、一もんじにはせ出る、なごやのいへのご官八長七見るよりも、カルいれちがひ切むすび、ひじゆつをつくしてハヤ三重「たゝかひける、さすが名だかきあらもの、カルだちばく入道山あらし、四つに成てぞしゝにける、大とう大竹兩人は、あまさじと打てかゝるカルばんさくすかさすわたしあひ、こゝをせんとぞたゝかひける、大どう大竹叶はずして、かいふつて遯んとす、そがう大十かけ出てカルちごしぬけめとたちふり上ケ、二人がくびを打おとし、ばんさくに切てかゝる、ねがふ所とわたしあひ、兩方てきゝのかうの者、カルしのぎをけづりくはへんをたて、ハヤ三重はんじ計ぞたゝかひける、もとよりゆうしのばんさくに、てすきをあらせず切付る、さすがのそがうしたてになり、既に危くみへし時、花月がおんれうあらはれて、ほのほをふきかけてつちやうふり、思ひしれやとばんさくに、打てかゝればすいさんやと、はつしとうてばゆんでにくいり、とびしゝつて、てうときればひらりと、かたにのりうつる、つけてめくれれば、ちからを忍、そがうはたちをふり上て、たゝ一打とする所に、な

ごや山三おしへだて、カル大十にわたしあひ、火花をちらして「たゝかへと、なにかはもつてたまるべき、すでにかうよとみへし時、なごやはんさくしん中に、ねんひくはん音めうちりき、とうじんだんゝゑと、一しんにねんずれば、たいうくろくも風おこり、どうようするその中より、ふうてんらいでんしゆつげんあり、らいてんはおんれうをかいつかみ、おつふせ給へばふうてんは、大十がそくびをつかんでそくかにしき、兩そんにらんでたちたまふは、たうとくもまたおそろしゝ、ときにふうてん天をひかくす大おん上げ、いかなごや、がまそがう大十に、ばんさへもんがあくねん、入かはつてなんちをかく、がいせんとはかれ共、くはんおんのめうりきにて、たちまちばつする所なりと、のたまふみこへにばんさくは、かしらをふつてそのを忍ず、あにばんさへもんしゝたり共、そのれいいかでおとゝゝを、がいせんとは心へず、その時らいてん大おん上ケ、ふしんをなすは理りなり、ばんさへもんしゆらのやつこ、なんぢはさつたのめぐみにあひ、心をてんするそのうらみ、ことさら花月を打たるゆへ、かれと心

をあはせたり、され共くはんおんの御じげんに、したがふまことあるにより、ながくしそんをつがすべしと、ふう天らいてん一どうに、花月大十ふり上ケて、こんりんざいへなげ給ふ、いかになごや、なんぢがたねんしんぐゆへ、三十三じんのそのふたり、ふうてんらいてんしゆごなしたり、いよくゆくすへまほらんと、ふうてん長七、らいてんはくはん八と、すがたをかへてそうもんに、いるよと見ればふしぎやな、カルありしにかはらぬうんけいの、正さくたりし二てんのざう、さゆうにかゝやくぎいとして、たゝせ給ふぞありがたき、なごやばんさく三はいし、しゆくしよくにかへられけり、此人々のはんじやうは、カル千しうばんざいめでたしと、きせん上下おしなべて、みなあほがぬものこそなかりけれ

博多露左衛門色傳授

第一

「既に御船こう成て御母さまには、辨財天を勸請し、ほうらい丸とがくを打、詞こがねの箱や巻物るい、まうきく小弓能道具、茶の湯かうの御てうど、きやうをうのきざい迄、せんつくしびつくして、金銀の御盃、カ、ル命ながるの御てうしに、諸病悉除のせいやくのチクリ名酒を、たゝへてひかへけり、御せんに有し、小倉増はの助、みやぎの萩之丞、今日の御乗初、浪風もなくうらやかに、いづれも恐悦仕る、ついては君此度の色玄ゆ行、思召立れしは、いか成ルゆへんに候やと、伺ひ申せばげに誠、さやうに思ふは理りなり、我九州において、はかた露左衛門の尉、光次と名のり、あめ若みこのまそんとして、朝日長者とせうせられ、七珍萬寶世のたのしみ、一つとして不足なし、然共片いなか、外みぬ家に住くらし、犬かいゑらぬ井の蛙、やふなる男と世の人に、笑れんこそ口をしけれ、諸國をめぐり色里に、あそびひな

びし國詞、くもる心のかゝみをも、みがゝばやと思ひたつ、諸國に金銀まきちらさば、ゆゝしき所々のふくの神、いへとむかひにあらずやと、仰ければ皆一同、うはきにもれぬ若者共君は、千世ませいる執行、われらも千秋御供せん、ばんせいらくと同音に、いわひことぶき御船を沖の方へぞ「こぎいだす、あとより小舟三丁にて、押立く「ごぞ船へハヤ三重もみにもふでぞ「こぎよする、人く「あやしく、船とめて、みれば長崎丸山の、カ、ルいこくわくと申つゝ、をしもおされぬまつ君、光次御きゑつかぎりなく、是へく「と宣へば、うれしくみふねにのりうつり、わけ御執行の、御ふなで、暇乞なき恨の程、ほのめかし宣へば、さへもんは聞召、さればけふは吉日ゆへ、ほうらい丸に乗初し、是迄出たる計りなり、旅たつならば争かは、君にさたせぬ事あらんと、カ、ル仰ければ兩君も、是で恨のむねはれしと、おちつきよき折來たり、さあらば共にいわんと、さいつさされつ思ふが中、カ、ルへだてぬ今の酒もりは、おもしろふこそみへにけれ、時にさへもん、鵲をまきへして、天の川とめい有し、大盃を取出し、是は此度

色執行、諸國の君とのまん爲、まふけたる盃なり、先の色の、み始め、君達取上給はれと、仰ければいこくはき、ひろき浮世のわけの里、いろ成君とかのみ給はん、御まふけの盃を、カ、ル色ありかほにけがさんも、なふわこく様いかいぞと、取上ざれば、光次は、又れいのいやなふり、某取上げ申さんと、たんぶと請て兩君より、かほを指よせ給はれと、さしだしたまへば兩君は、につことゑみ、こはをもしろきお盃、さのみはいかいと右左より、顔をさしよせ給ひしは、つぼみてひらく、くれないの、花の物云ふごとくなり、みるにたへかね、さへきんも、おぼへずかほをさしよせて、三人一所にはし給ふ、是やびめんのみつどもへ、たぐいなかりしふせいなり、時に兩君申やう、色執行の御船に、只よのつねのほぎぬにて、うつりのあまに候はんと、忍んではかたの浦里に、宿を取て此間、よを日について綾錦、おりたて申候へ共、五十反のほぎぬゆへ、いまだできかね候也、其間は我くが、旅宿へ御入ましめて、はたおるていを御らん有り、それよりすぐに御舟を、出させ給へと申にぞ、さへもんは聞召、勤隙なき内

にして、さやうのわざはいぶかしやと、尋ね給へば兩君は、はづかしながら我くは、津の國くれはの生れにて、もとはたをるいとなみを、いたせし者に候が、まづしきおやをすくはんと、こゝろつくしに身をうりて、かくの通に候と、いとこまやかに申さるれば、光次かんじ思召、増ほの介を御召有、長崎の丸山へ、そうく使を指こして、いこくわこくの兩君を、身請をなせと有ければ、畏て候と、申付ればさへもんは、来る十日は吉祥日、めんくの旅宿より、出船をいたさんと、兩君を伴ひて、船よりあがり、はるくと、はかたのうらへといそがる、こゝに又、四國九國にもてあつかふ、わにのばんこすいわうとて、白波の大將有、大力はやわざならびなく、あまたの手下を去たがへて、かいぞく山立ひるがندوق、人の寶をりふじんに、うばい取てくらにつみ、ゆたかにくらすあくとうなり、其らんしやうを尋るに、西國に名をふるひし、木戸狼の助が孫とかや、領分はことくく、てきの爲に打とられ、ろうくの身と成て、一子わにの大八は、關東に住居なす、随ふけんぞく、赤鬼ぢごく兵へ、大げ

さの無佛坊、引きばきのわし次郎、かみなりのはちはちさへもん、かれら四人を伴ひて、折しもなれや彌生の空、花見がてらに丸山の、色里ぞめきに、出たりしが、すいわう道にて云やうは、汝らつねにゑるごとく、我一念をかけぬれば、やゑゆらが持たる物にても、ぶつたくらすと云事なし、色はあやにくまゝならず、長崎の丸山の、いこくといへるけいせい、ふと心のちまよつて、そびきださんと千金を、山につみて云入れど、むつくにはつくに聞入ず、きけばはかたのつゆさへもん、こがねの鍔でつなぎをく、又わこくを引ぬかんと、思へばきやつをもはかためが、碇をおろしてうごかせず、所詮きやつめは戀のあた、はかたが館に夜打して、つゆさへもんをふみけして、丸山の傾城を、手に入んと思ふなり、いかにくくと云ければ、赤鬼はすゝみ出、きけば此程つゆさへもん、京見物を思ひ立、出船をなす所を、いこくわこくこがれきて、戀の碇をかけとめて、はかたに逗留するとかや、かれらが旅宿へ下拙めが、ふみこんで君の戀、わこくいこくを引立て、つれまいらんと其詞、カ、ル手に取やうに申にぞ、ばんこ、

よろこびでかしたり、一人にてはおぼつかなし、む佛坊と兩人して、うばい來れとげちなせば、兩人たやすく領承し、夫よりすぐにゑたくしてハヤ三重かしこをさしてぞいそぎける、實やおりぬふ賤のわざ、昔神宮こう皇の、三かんたいち、ましまして、西北の風ゑづまり、東南にくも晴て、尙てりまさる日の本に、いてうはおそれみ心に、應神ていのおゝんとき、ごゝくのみつぎをさゝげしに、くれはあやはと申すなる、二人の女を奉る、はたをる者をくれはといひ、あせひく者をあやはと云、わが國のいふく、皆吳國より始れば、小袖をごふくと申なり、この時に織姫は、こんれうの御衣を織、帝へさゝげたりければ、よゝの大君此御衣を、召るゝ事と成けらし、きんしにおもふ詩をおりて、こたびかへりあふ事も、是皆はたのとくさ糸、綾の手ぐりのうつくしき、からくれなひの、立田川、氷に閉しもみちばを、くゐるひうをのひれかろく、あなたへちらり、こなたへちらりうつおさの三重きりくはたり、てうはたりアイノ手でうくさらくさつくくの、風に立くる波ならで、あせのつゆちるたまだすさ、かひくしくも、

をる袖の、さほなぐるまもたゆみなくハヤ三重おり立
おり立其かみの、ためしをこゝに、引糸の、たへぬ、
ちぎりを猶深く三重むすびとめつゝ、打おさめ、かた
てほぎぬを、おりそろへ、さへもんにまいらすれば、
御きげんなをも浅からず、あるじを召れ其方は、わ
がかへる迄兩君を、事ふじゆうになきやうにと、品
品を下されて、兩君にうち向ひ、名残はいつもつき
ぬ事、カ、ル此度の心ざし、残からざりし事共なり、
るすの内さびしく共、所の賤の女召よせて、此手わ
ざをおしへつゝ、慰み待せ給へやと、念比にいとま
ごひ、此時所の賤の女共、ならひおりだし今の世に、
はかたをりと申せしも、是より始りけるとかや、既
に出んとしたまふ時、さもたくましき大男、あみ笠
まぶかに引かふで、カ、ルあないをこへば人くは、
かたへに忍び入給ふ、ていしゆ出て、何方よりぞと
尋れば、是は長崎丸山より、いこくはこの兩君へ、
飛脚の者ぞあはせてたべ、誠と思ひ内に入り、かく
と申せば兩君は、里の便とうれしくて、立出みれば
思ひの外、すさまじき大男、それとみるよりつゝと
より、二人の君を引よせて、扱くおのれは大たん

者、大事の女郎已等が、よくもぬすみかくせしな、
ていしゆをはじめかくごせよ、女はまづくつれ行
と、左右にかいだき欠出れば、ていしゆを始めろ
うと、赤鬼大たち引ぬいて、村くはつと追ちらし、
しすましたりとつれ行を、つゆさへもんの下部、と
びらのくはん藏欠來ッて、先赤鬼をかいつかみ、取
ておつふせ、右のかいなをねち上て、うんと引ぬき
なげ出せば、む佛坊肝をけし、二人の女郎うしろへ
なげ、ごめんあれと逃行を、そくびをつかんでこん
りんざい、大ちもさけよとどうどなげ、すかさず上
にのりかゝつて、扱もきみよやこゝちよし、われら
が君の色しゆ行、御ふな出にまつかいな、御血まつ
りをいはんと、さはぎにすてし大かんなべ、是幸
と押取て、む佛坊がかうべにあて、落花みぢんに打
くだき、いこくわこくをいざないて、先おくへとぞ
入にける、かのくはん藏が其はたらき、天晴きみよ
き若者よと、貴賤上下押なべて、皆かんせぬ、者社
なかりけれ、

第二

「其後、おしてゐるやなにはつの國、大坂のかぶきの芝居時めきて、三重きせん男女のひぎをしに、いどみあらそひみる程に、さしもの棧敷人たまり、糸をさぐべきせきもなく、奥にせうじてわらふこへ、なんばの浦の波風にひいきを、そへておびたいし、猶目に増るはんじやうや、切の太こと諸共に、我をとらじと、かへるさの、をしつおされつ出けるは、にぎはしかりける「志だいななり、そのおりふしに、つゆさへもん光次は、此程當所につき給ひ、未旅宿におはせしが、あまりゑばいのにぎはしさに、今日見物ましまして、カルきせんに交り珍らしく、こゝやかしこ」とみ給ふに、深あみかさにかほかくし、あやしげ成る男の、二三ど四五ど行かへり、さへもんのめでのかた、すり違ふまに御こしの、さげ物きれてあらざれば、こはいかにとみ給ふ時、御供に候ひける、團六、つゝとよりてあみかさを、かいつかんでかしこへなげ、むながらをむすと取、己は人を見そんじて、

かゝるふるまひなしけるか、只今のさげ物を、出せや出せぬす人と、押ふせんとする所を、もろ手をかけてふりはなし、やあら是はお侍、我をさやうに宣ふは、慥のせうこ候か、團六聞て、せうこはこなたに見置たり、はや／＼出せとせめければ、男聞て此方に、せうこがなくはいづれもは、何とかおさめ給ふと云、團六聞て、カルそれは互の首かけよと、むたいに袖に手を入るれば、ごめんあれと逃んとす、大せい折あひさうどうし、すは逃すなとおつ取まく、だん六すかさず取て押ふせ、さげ物を取かへし、ふみころさんとする所を、つゆさへもんごらんじて、思へばふびんの事共なり、命をたすけゑさせよと、仰あればだん六、ゑゆくんのめいはそむかれず、己は命くはほうの者、すべきやう是有と、早繩を取出しゑたゝかにいましめて、刀をぬいてむね打に、たたき立／＼、さん／＼に追はらへば、ころびたふれてハヤ三重「逃てゆく、去程に、露左衛門の旅宿には、侍下部あまたにて、けごを、守りていたりしに、おもてに謠のこへ聞ゆ、内よりみるに其ていの、昔はさもと、打みへて、あみ笠まぶかに引かふて、扱も

三條の吉次信高とて、こがねをあきなふ商人の、毎年すだの寶をつけをくへ下る、天晴^{あつはれ}是をとらばやと、與力の人數はたれ／＼ぞ、扱國／＼よりあつまりし、中に取てもたが有しぞ、河内のかくせう摺鉢太郎兄弟は、おもて内にはならびなし、扱又都の其内には、三條の衛門みぶの小猿、火とほしの上手わけ切には、これらにうへはよもこさじ、扱北國には越前の、あさうのまつ若、三國の九郎、かゝの國には此、長はんを始としてと、謠うたふて指のぞき、一し半錢の御合力と、四方のあないをみまはすを、ぬす人のけごなりとは、夢にもさらにゑらずして、鳥目をなげ出せば、おッを有がたし／＼と、心の内の前いはひ、カ、ルこよひの寶の口あけと下チクリ押いたいてぞ通りける、かゝる所へさもあてやかなる女郎の、光次の御やかたへ、あはたしくかけ来り、門の番侍に申やう、わらはは、少つゆ様に、申度事侍らへば、此由仰給はれと、申ければ侍共、くはん藏にかくと云、貫藏立出みてあれば、光次のあい給ふ、高橋と云ふ女郎の、妹分のいはほなり、是は／＼と内にいれ、扱光次に、かくと云、さへもん立出對面し、い

かにしてかはき給ふぞ、いはほ聞て、御ふゑんは御理り、されば水から參りし事、此程、わにのばんこずいわうとや、おそろしきひげ大じん、水からを思ひこみ、一ざを望み候へ共、さばるよしにて、圓に、あはぬにたへかね身請をし、はや明日引とると、云渡し候ゆへ、やう／＼くるわを逃出て、かた様を頼みつゝ、のがれたき計りにて、扱こそ只今まいりたり、それにつき侍ひて、先身の上より御爲に、もつての外の大事有、いづれも是は心へず、何事やらんととひければ、いはほされば自から、是へまいる道にして、謠をうたふて一日の、よすがをおくる袖乞と、みへつる者の通りしに、其ていゑしれぬ侍の、行あひあたりを見廻して、つゆ左衛門がいたくのやう、あないをよつく見しやととふ、袖乞とつくと見届たり、ぬれ手につかむあわのかね、先悦べよゑといよ／＼、ずいわう殿がさいせんに、定めしは八つのよせかとときく、成程々々其時分、逢んと申て立別れぬ、推量いたし候に、自らをねびかんと、申候すいわうが、ぬす人の大將にて、夜討の用ゐとみへ候、御用心あそばせと、申ければ増ほの助、いかに貫藏

晝程の、謠をうたひし袖乞めが、けご見とゑらでのがせし事、口をしき次第なり、去ながら、御氣遣なくゆる／＼と、御休おはしませ、萩之丞と某、團六貫藏手をくだき、働き候物ならば、千や二千のぬす人ら、物の數にて數ならず、よ打の事は我々に、御まかせ候へと、人々をいれまいらせ、門戸をきびしく指かため、團六貫藏兩人は、よすがら屋敷を打守り、なりをしづめてハヤ三重とうぞくを、今や／＼と「待いたり、是をばゑらで、わにのばんこすいわうは、はや打立と大せいにて、一時千里とらの時、露左衛門の屋敷によせ、門を破てせめ入と、大つちにてさんざんに、門のとびらを打破り、てんでにたい松なけこみなげこむいきほひは、やうやくじんも、かくやらん、手下のとうぞく一同に、ぬきつれて打て入る、貫藏團六渡りあひ、ゑゝふんじんくらんにう、ひてうのかけりの手をくだき、ハヤ三重こゝを、せんとぞ「たゝかひける、とうぞく今は、きをのまれ、ねすみも命の有てこそ、あらしようやひかんとて、皆ちりぢりに逃ゆけば、すいわういかつてゑゝおく病なる奴原は、足手の妨げ、まいり候と大長刀、水車に

まはしつゝ、打てかゝれば團六貫藏、すいわうにわたりあひ、火花をちらして「たゝかひける、すいわういらつて、鐵べきも通れとつく長刀を、はつしと打てゆんでへこす、追かけすかさずこむ長刀にひらりとあればむきになし、ゑさつてはらへばめてへこし、押取直してとうときれば、中にてむすぶほどくてに、かゑつてはらへば飛上り、さしもの兩人今はや、せんかたなくもみへける所を、内よりいはほは走り出、あり共みへぬけんをぬき、打付給へばあやまたず、すいわうがのどぶへに、つばもとせめてくつとたつ、きじんのごとくのすいわうも、眼くらみきもゑゝまり、はがみをなして手をにぎり、仁王立にぞ立すくむ、貫藏團六欠よりて、さん／＼にそ切たりける、光次はごらんじて、天晴こゝんの御手がらと、悦び給ふはかぎりなし、時にいはほは我は是、汝がせんぞ代々より、ふつきを守る辨財天、日比のゑん／＼淺からず、此度も船玉に、祝ひこめたるゆへにより、つきそひなんぎをすくふたり、なを／＼行末守らんと、光りを放ちみすがたは、寶の前に入給ふ、光次ゑん／＼肝にめいじ、有がたし／＼と、

御跡三度ふしおがみ、悦びいさみ立給ふ、適きたいの事共やと、貴せん上下押なべて皆かんせぬ、者社無けれ

第三

「三ゲのいろのその中に、いづれ、おろかはなければども、京嶋原と申ハ又、わきていたりのやさ所、花の都の水からに、風俗、詞ひとまほに、色まさりたる所とかや、去程に露左衛門、都に逗留します内、今咲出し初菊の、色かをほのかに聞及び、何とぞきうにあはいやと、ちいに心をくだかるゝ、され共其比全盛にて、心のつよき君なれば、いか成るとみの大玄んが、こがねの山をつくとも、中々さうなふあはざれば、さすが都の大じん共、手に入かねてもだせしと、世上にひろくさたあれば、はかたいよく戀なづみ、若松やを頼みつゝ、御しる人に成たまひ、けふ約束の日なりとて、思ふ心の深あみ笠、其風俗も當世に、若松やへとぞいそがるゝ、ていしゆは急ぎ出向ひ、はや道中と、夕日笠詞にたゆる下思ひ色

には、いでの玉川とて、かほにあらはす全盛の、つよきをみせて八もんじ、風にこづまのひらくとニツ三重かほりるならぬふうぞくや、雪のゑりもと月ひたい、みる人、戀をますくも、ます世といへるつきだしの、ねよげにみゆる若草や、まげき引手の大やうに、ゆらりくゝとゆりの花、露をきそふるふせいをば、たれかはいなと、いな舟や、こがれて渡り染川の、かたゆりかけてはこひ足、あたりをはらふまこなしに、ついのかぶろやつれ男、わきてめにたつ有様に三重まばし詠めて「たちつどふ、竹のうちより光りを出す、またいぐらいかうは、大坂のまだしでござるゑい、此ゑい今はあづまの、はて迄も、くはつとはやりて京九重や、あの君たちの手にふれて、笑ひのたねと成もよし、よしやいとはし此身をかく、いとしかたをはさゝ船にのせて、つれて渡らん思ひ川、戀を嶋原忍びてくるは、くるはたれゆゑ、誰ゆへくるは、くるはたれゆゑ、君ゆへぞ、こちの思ひはそうかいも、浅くやならん、あさはかな、色にはあらぬ、くれないの、八ち鹽染のから衣、獨かたしくよなくは、身をしる雨に水まさり、ねや

の枕もうく計り、枕うくとはなふ人なみぞ、身さへながると聞ならば、契りの末の松山に、波こゆる迄頼むべし、玄んぞ此身は本よりも、色に打こむ、つぶてもじ、かいてくどいて見せさきに、立とまりて色いとに、あづまことばも珍らしく、うらばめせめせみた三ぞんの御來迎、めせいざやめさぬか三重「こゝに太夫の初ぎくは、其風俗も色をゑる、人にみせばの白小袖、昔男の色あそび、あづま下りをすみゑにかき、すそにこがるゝくれないを、けだせるはぎの白々と、ゆきをあざむくかほばせに、生れのまのひたいぎわ、見る人の身をうつせみの、もぬけのからとぞ成にける、本より情の色深き、めもとに一めちらとみて、はや只ならぬ商人と、心のつきてやそばにより、扱も替りし商人や、賤しからざる爪はづれ、ちとめきゝしてまいらせん、みたてた所が三つ有、情をゑらぬ女郎の、思ひの淵にはめられて、こうゑたゑよていかいゝや又、心にくい女郎を、引てみんと御玄んかや、それでもあらじ扱は又、及ばぬ戀かさあつゝます、かたり給へとはれつゝ、いや拙者めは明くれと、ねてもさめても御來迎、お

がむ計りを命にて、よに住わびしいやしき身のお、詞に預る事、みやうがに叶ひ有がたし、初菊更に聞入ず、何程つゝみ給ひても、内にこがるゝ紅の、色をあかして仰あれ、身の上ならぬ君なりと、わしが逢せてまいらせん、こゝはとちう自らが、なじみの茶やへ伴ひて、やうすを聞んと袂を取り、引き行く袖を御らいかう、取ていたゝきもつたいなや、今せんせいの松様の、かくあか付しもめん袖、カル御手のけかれ候と、立のく袖を猶はなさず、其深き心のそこ、見るがめのおく女郎なれ、いか程いやしき者なり共、玄つに此身を思ふならば、いかなる方にもみかへまし、くもる心の女郎の、情の鏡とおそくは、ならんと思ふわしなるぞ、こよいは夜と共身上りし、心をとけてまいらせんと、カル宣ふ所へ若松や、走り來て約束の、はかたの大玄ん御待かね、はやはやと云ければ、初きく聞て、こゝにきうなる情有、是がすまねばたれさんの、寶の山をつかんして、も、中々みかへす事にてなし、はて此上は此人と、あげやおいてはしの茶や、むぐらの宿に、ねも玄なんひしき物には此袖と、ひしとすがれば御らいかう、

はつとかんじて、云やうは、扱／＼んのめい太夫、今は何をかつゝむべき、我こそ誠のつゆぎへもん、若松やに有けるは、増はの助と云けらい、君は情を本として、いやしきにも身をまかせ、縦高家大玄んにも、心にいらねば、なびかぬと聞及び、かくはからいて引見しと、申所へ松やより、はじめのさへもん欠來り、御玄ゆびよろしく珍重と、申もあへず御供人、あまた來ッてさへもんに、やがて小袖をきせかゆれば、いづれも驚きさりとては、今に始めぬ事ながら、初きく様の御めき、とかう詞にのべがたしと、つゆ大じんをうやまへば、さへもん御きゑつ限りなく、をくは中々きつまりなり、前のかうしを取拂ひ、そとを見はらし酒もりせん、女郎達を皆あげよ、はやとく／＼と有ければ、ていしゆ、畏つたりとて、大せいかけて少のまに、まへなるかうしを引こはし、一めんに取拂ひ、女郎はらりといながれて、御盃をまいらせて三重既に酒ゑんぞ「そじめける、大じんいよ／＼興にじやうじ、ふくさにつゝみし大盃、取出させて初きくへ、是はわれらが國なじみ、道はる／＼の長崎に、其名も高き丸山の、わ

こくに増るいこくと云、女郎が其御かた、聞及びて指こしたり、取上給へと出さるゝ、初菊是は珍らしやと、手に取みれば鵜の、渡せる橋をまきへして、天の川と銘有しは、いもせを渡せのおゆるしか、こは情ゑる御玄んをば、一つ請んとたんぶとうけ、さらりとほしてさしければ、大じんも一つほし、かへし給ふを初きくは、あまりきうなり今少と、おさへ申せばさへもんは、ざ中を見まはし女郎達、おあいと云んがめづらしく、聞及びたる吉原の、色の名物小紫へ、此あいを頼むべしと、れうし引よせ文認め、盃共にふうじいれ、時つけにつかはせと、増はの助に仰有、ていしゆへかくと云わたし、そくざに飛脚をたてられしは、聞しに増るたいきやと、おの／＼かんじあひにけり、かくてさへもん時つけの、かへらん内はいつ／＼けせん、かやうの酒はよのつねにて、おもしろからず我こゝに、興あるあそびをもよをさん、近頃女中へにあはざる、望ながら女郎達、二つにわけて關せきわき、小むすびなどゝわけをたて、色すまひを催して、まけたる方には酒をゑい、かちたる方をば此里を、身まゝになしてまいらせん、い

かに、いかにと宣へば、數の女郎浮立て、たれかは
まけんあらせうし、こゝははしちかをくへとて、大
じん初きくさきとして、大せい足音どろくくと、打
つれのぼる箱はしご、たぐひハ三重まれなる「ゑだひ
なり、そもくこよひの色すまふ、大じんの御物す
き、枕をならべ土俵とし、左右の女郎一同に、花や
かなりし風俗の、小つまかいとりたすきかけ、かひ
かひゑくもちから足、ゑとくくとふみならし、ふと
んのうへに入れるは三重げにも興ある「ふせいなり、
時の行事は初ぎくなり、うちわたづさへ立いで、
それおすまいの始りは、天竺にては、あらかん達、
大唐にてはじやまんがまん、我朝にてはあまてらす、
おゝん神の、岩戸にこもらせ給ふ時、たちからをの
明神さま、やを萬の神達と取はじめ給ひ、たへまの
けはやのみのすくね、きのなとらなど取傳へ、きん
中さまにもすまひの、せちへと申事の候よし、それ
は男のあらすまひ、是は女郎のやさすまふ、かまへ
てあらしき事なかれ、随分花車になし給へ、爪取はそ
り大、わたし、車ぞやしかいなそり、かやうのるい
はきんせいなり、惣じて女郎の取手くだ、四十八手

を八十八手に取わけ、今はもゝてに取くだく、只何
事も新ぞうは、姉女郎に隨ひて、指出たる事なきや
うに、なづむてきをば先かけて、よき程あいふり
つけよ、くせつをするにならひ有、うかとしだして
さよ嵐、きくの花園ふくごとく、ちらしかねては手
を取ぞ、是はいづれも女郎の、つねに有べきこゝろ
がけ、をくの手箱のそこふるひ、きを働取むすび、
ゑめてさげたるひとへをび、ゑどけなげなるふせい
にて、たいやさしきを、おもとする、身ぶり一ゑゆ
の花すまい、さあ出給へとこへかけて、うちわを上
て合ける、道芝やつと手を上れば、花きくすかさず
つゝとはり、兩の袂をむすとする、道芝かさより押
付るを、花きく左りのひざをつき、うつぶきければ
道芝は、あまりてかしこへたふれけり、いづゝ此由
みるよりも、扱いさぎよし花きく様、いざまいら
んと立向ふ、花きくにつこと打笑ひ、手なみのゑれた
る私に、かゝり給ふはつわものやと、いさみいさん
で飛かゝるを、いづゝは小づまをかい取て、ひらり
ひらりくとはづすにぞ、花きくせいて追めぐり三重
ゑばし、あらそふ有様は、ぼたんのかげよりからし

しが、小てうをとらんと爪をとぎ、はがみをなせし
いきほひも、かくやとみへておも白し、兩方いかに
とみる所に、すきをみて、いづゝはうしろより花き
くが、ほそこしをいただきあげ、そつとかしこへなげ
ければ、扱も取たりお手つまと、ほめぬ人こそなか
りけれ、かゝる所に中くらは、茶玄ゆすの小袖ぬぎ
さけて、紅白のくけ帶をなひ合、玄つかとしめひさ
やの小袖にたすきかけ、はちまきながくむすびさげ、
玄つゝと立むかへば、いづゝもすかさず取合、く
んづほぐれつすきもなく、互に大事とくみあひしが、
中くらいづゝをうしろにをひ、どこへ我共お望に、
なげ申さんとはせまはり、ふとんのそとへなげたり
しは、げにたくましくぞみへにける、みちのくはみ
るよりも、一もんじに飛かゝるを、あいさうもなく
なげ出す、そめ川つゝいてかゝるをみて、中くらに
つこと打笑ひ、後に打身をもたんして、わらはを恨
み給ふなど、云ふ詞の下よりも、はやくすくつてな
げ出せば、こへもんはつゝと出、げにおとしまの關
すまふ、めを驚かす次第なり、こなたの關にひけ付
て、あまりとあれば云かひなし、いざまいらせんと

宣へば、中くらのぞむ所ぞと、ひしゝと組合て、
兩方更にはなさねば、初きく見るにたへかねて、こ
づまくりあげあいにいり、すまふの、外の手は法度、
はなち給へと押のけて、つゆさへもん^きの手を取て、
かはす枕の戀の山、こゝんまれなる遊興やと、貴賤
上下おしなべて、みな玄たわぬ、者社なかりけれ

第四

其後、つゆさへもん光次は、嶋原の初きくに深くな
じみて名にそめし、あづまの色の紫に、あいを頼て
指こしたる、早打のかへるまを、御いつけのゆふ
興は、おびたいしくこそ聞えけれ、かゝる所へむさ
しへまいりし御使、あげやの男立かへり、御盃に文
をそへ、指上ければ大玄んは、取手も遅しとふうを
切、急ぎ披て見給へば、おのゝおづうが風流に、い
とうつくしき、筆の跡、文の詞も女にて、強からずよ
はからず、情をふくむすみ色の、くろみ過つゝ書な
がし、一首の歌に我とても、うすくはあらじ小紫、
染てほしたき君が盃と、色あるふくさ引重ね、柴船

と云名香を、御おさへとてまいらすとは、たかぬさ
きよりこがるゝとの、かけし詞か初きく殿、此よは
あづまに下りさし届け、押付ケ持てのぼりつゝ、ね
引の松のちよかけて、あい盃をいたすべし、先それ
迄はおいとまと、くつの嘉七を召れつゝ、先達て下
るべし、跡より我も追つかんと、仰付られ嘉七は、
そくざに都を立ければ、大玄んはそれよりも、あげ
やの一家を召れつゝ、おいとま乞の品々を、數々給
はりよもすがら、旅の御用ゐ御酒もり、取まじへた
る御さはぎは、いそがしかりける「玄だいなり、京
とはいへど、ひなびたる、馬子の歌にのりかけの、
戀ぢ執行のあづまの旅、今なり平と名やたゝん、つ
いぬれぎぬの紫がおさへてもどす盃の、ふくさの筆
にうつりきの、詠めあかざるはつきくを、見捨て行
と恨てや、跡になくらんかも川の、すへ玄ら川の、
あさきせを、渡る心のうたかたの、あはた口より、
かへり見る、そなたのぼりかおりや今下ル、馬やか
ちの追分の、昔はこゝの關寺に、おのゝ小町が身
をまんじ、あまりに心つよふして、かなたの玉づさこ
なたの文、かいやりなげし中になを、わけて思ひの

深草を、戀に玄なせし其恨、かはらで年をとをしみ
たる、色の姿のおとろへて、つらき、おふなのためし
となる、舊跡なりと見渡せば、大津八町はるぐと、
ひゑのみのりのくも晴て、根本中堂むね高く、坂本
山王三千坊、たれ白ひげの明神迄、王城のきもんを
守らせたまふなる、ふもとのこすいまんぐと、い
く世へぬらんちくぶ嶋、むかしなからの玄がのうら、
こゝより馬をおり給ひ、せたの長橋打わたり、人に
まけじとますらをの、姿をみがく鏡山、くもればぞ
あれ朝がほの、みくばはづかし日にいたむ、草津の
宿をあゆみ過、玄ばし休らひ腰かくる、石部の並木
みへつゝき、梢にひく松風は、きんのねをや玄ら
ふらん、おたの蛙のこへ迄も、心有げに水口や、馬
子が歌も戀を玄る、みのにつま持おはりにすめば、
あめはふらねどみのこひしやれみのこひし、既にい
せぢの山おろし、駒もいさみてのぼるさかなるやす
いかの、宮いとや、實をそろしき鬼とても、色で身
を打ためし有り、いはんや人のおほりをば、たれか
三河の八橋も、田計有てかきつばは、たへていづく
ととうくみ、はなを過てそのかみは、こゝも極女

の池田の里、命なりけりさよの中山さりとては、かれを見是を聞につけ、たのしみ多し大井川、せ枕たてゝながるゝは、みつはのそやをいるごとし、殊に水上大雨にて、三せ口せひとつに成ければ、こしとゝまつてかなやの宿、御宿召れん所なし、大玄ん少もさはがすして、水の増るはおも白し、我に玄せんのもう有て、水にはきどく有間、苦しからずのりかけて、渡すべしとげぢをなし、たけも及ばぬあら波に、さつと打いれ一同に、向ふの嶋田へ渡せしは、めざましかりける「次第なり、いづれもきいの、思ひをなす、露大玄んは打笑ひ、ふ玄んに思ふは理りなり、我が家は、あめ若みこの子孫として、水にきどくはさまゝくに、わけてさつきの入梅には、庭前に穴ひらけ、つゆおわるの日ふさがるゆへ、ゑいぶんに達しつゝ、綸言有ていへ代々、つゆにいる日をそうするゆへ、左衛門の尉にふせられ、世こぞつてはかたの、つゆさへもんと異名すと、語り給へばいづれも皆、玄はゝかんじあいにくるかゝるなん所を行事も、思ひそめたる、紫が色を早口藤枝や、おかべに駒をうつやま、つたの細道我も今、都へかへる執

行者の、あらば便を初きくに、文してつげん戀しさを、いかにするがのふじの山、女郎はおかぬひたいきわ、三ほの松原たごの海、まきへやさしふ三嶋なる、遊女のてうど、はこね山、つらいにも又おも白き、こともさまゝ大いその宿にぞいらせ「たまひける、道のかたへを見給ふに、遠近人のよりつどひ、清く詠めの丸石を、力を出しあげ試む、光次はいぶかしく、立よりてことのゆへ、問せ給へばかの旅人、されば候此石は、そがの祐成色深く、大磯の虎御前が、成けると云つたへ、とらが石と申つゝ、あしき男のあげぬれば、おもふ成てあがりかね、よき男の上るには、かるふあがると申により、皆旅人があげためす、皆様方にも打よりて、あげさせ給へと云すてゝ、おのがさまゝ行過ぬ、戸びらの貫藏すゝみ出、是ていの小石分、小ゆびにても上ぬべし、なんでう器量によるべきかと、立よりてかきいだき、上んとせしに其おもさ、大ばんじやくの如くにて、ちつ共更にうごかねば、團六笑て御ぶんが器量、とらが氣にいらぬとみへしおことより、少ししれるだん六が、あげてごげんにいるべきと、近付むんずとか

きいだき、うんといへ共中々に、ちもはなれず、是に二十もます大石、たやすくあぐるに上らぬは、さりととはふえんとはがみをなす、小ぐら宮ぎのつゝと出、いかにおもたき石なり共、二人ゑてあぐるならば、などかはあげで有べきと、兩方より手をかけて、ゑいや／＼とあぐれ共、ちつ共そつ共うごかばこそ、あきれてこそはゑさりけれ、光次はごらんじて、とら女が氣にはいるまじきが、我うごかしてみせんとて、立よりゑつかとかきいだき、一生二世の力をはり、ゑいやつとあげ給へど、いつかな／＼うごかねば、こは色ゑらすのとらが石、人の云とはかはりしと、あさけり笑てのき給へは三重うごくともへしか「ふしぎやな、此石くだけで内よりも、くものごとくのきのたちて、虎ごせあらはれたはれめに、誠なしとおぼすとも、それは君によつてのこと、ひんなるそがに身をまかせ、鎌倉ぶしのさま／＼に、引手にいらぬ心中の、かたきが成て虎が石、いかで男のよしあしに、あがるへだての口のさが、誠と思ひかたがたの、男じまんにあげ給へば、たれにもたやすくあがれども、わざとじつのかたき事、みせ參らせて

候なり、かくていせつを守る徳、天につうじてうたかたの、流のつみはあわときへ、仙女と成て此石中の、仙境にたのしみすんで年久し、我すむ色の世かいこそ、女仙のすみか色ゑゆ行、よく／＼尋ねとひ給へ、いざ石中へ伴はん、いらせ給へとすゝむれば、さへもんは有がたし、ゑかしわづかの此石に、仙境有とは心へず、とらごせ笑て、おろかの人の詞かな、ひてう坊と云仙は、こしにわづかのつばをさけ、休む時には是に入ル、内にめでたき國土有、宮女百官かしづきて、無量のたのしみきはむとかや、商山の四かうは、猶もちいさき橘に、すみか有て身を休んず、わづかの蝸牛の角にさへ、王こう國を諍ふ物、ましてや是大石なり、全く我をうたがはず、いらせ給へと立よりて、うちわをかざしすゝむれば、疑ひながら人々は、此石にのぞまれしに、大道ひらけて、やす／＼と、一つの世界に出給ふは三重ふしぎなりける「ゑたいなり、よく／＼みれば、前にはゑすいの流川波二上りのばち音をゑらべ、うしろにはまゆの山ゑめるめもとの月をみせ、十八公の松風は、ことの色ねをきんじつゝ、すいせう金銀のいさごちにみ

ち、みどりのこだちうつくしき、櫻色や、もゝのこ
び、ねぶれるすがたかいどうげ、ふやうのまなじり
たんくわの口、びやうの柳風流の、品やかなりし、
ふり迄も、誠に仙女のすみかやと心も、うはのそら
たきの、ほのめく風にたなびきし、宮殿の其内に、
こや天人のやうがうかと、思ふ計りにあて成人、あ
られたばしる白かねの、鉢に色よき桃をつみ、光次
に打向ひ、自からはゑろめとて、ながれ拙き身なり
しが、源氏なじみのつくしがた、下り給ひしかなし
さに、命だに心になふ物ならば、何か別れのかな
しからましと、一首の歌をよみけるに、かたじけな
くも延喜てい、貫之にみことのり、古今和歌集別れ
の部、第廿三首めに、入させ給ひたりければ、其悦
びも身にあまり、一念はごどうして、今仙術の徳を
へて、西王母がでんにいる、術のふしぎを見給へと、
うちわを取てぎゑたりし、左右をまねきたりければ、
天井柱おぼしきに、桃花一どに咲みだれ、其身は花
の下かげに、かくるゝとみれば忽に、くも霧に紛れ
失にけり、跡ふりかへり見あぐるに、こがねのかう
ざんがゝとして、五色に、おつるたきのいと、たへ

ずとうく打よする、波まをみれば、光りさし、こ
んじきのこいにのり、あてやかなりし女郎の三重顯
れいで、打向ひ、自からは、宮木とて今仙、境にい
たりつゝ、名もかいやけるきんかうの、術を學びて
明くれに、こいにじやうじて波まをわけ、みづにう
かみてあそぶ事、是せいしんを清むるため、色と云
事は、おうぎ有それ、傾城と云詞、かんのりゑんが妹、
ふでいにつかへ有けるを、ほつほうにかじんのかほ
よき有、よにたへにして獨たてり、一たびかへりみ
れば、人の城を傾け、ふたゝびかへりみれば、人の
國を傾くと、書し文よりことおこり、王かうの思ひ
人、だつきほうじぐしせいし、きひのたぐひを云詞、
我てうにては、一ばんの、島のせんさい、わかのみ
へ、白きすいかん立ゑぼし、さやまきの太刀をさし、
まひけるゆへに白拍子、男舞共云けらし、其後に室
の君江口の、色の舟による、客をなぐさめたりける
を、流の君と申又、ながれを立ると云詞、此時より
ぞ始まれり、さいせんまみへし虎御前、頃ほひ名有
ル少將や、きせ川のかめつるを、遊君となづけ今は
又、ゆふ女となべて云ぞとよ、我たつさへし一くは

んは、男女のわけの品定め、是をつたへてまいらす
る、いとま申といふ波に、あそぶとみへしがくも霧
や、まぼろしのごとく仙境の、かたちはきへて行こ
ふる、おちこち人の大磯に、ぼうせんとして人々は、
天晴きの事共と、かの一巻を取持て、あづまをさ
してぞ下られける、誠にきたいの次第やと、貴賤上
下押なべて、みなかんせぬ、者社なかりけれ

第五

「露左衛門光次は、はる／＼むさしに下りつゝ、遊里
に行て紫に、一ざの事を云入しに、宿やのてい主立
出て、紫は此間、勤を引てかめいどの、天神宮に閉
こもり、色里源氏と云さうし、つゞり有由聞やいな、
おぐら一人御供にて、カル人めを深く忍ぶ笠三重か
めいどさしてぞ「まいらるゝ、名たかきあづまのわ
けの里、三浦が松の色つかさ、其名たかをのくれない
の、あけをうばへるせんせい、小むらさきと申せ
しは、たゞに風俗せんけんたるのみにあらず、情の
道もゑんにして、わか文玄やうのうるはしさ、濡に

そみこむ、水ぐきや、糸竹茶のゆゑうきく迄、ふう
がなりけるびくんにて、戀ゑたはぬはなかりけり、
つたへきく式部の君、其名も高き石山の、觀世音に
きせいして、佛前に閉こもり、般若のれうしを申請、
天だいゑくわんをやはらげ、源氏一部に書つゝり、
末代の地の色の、男女の情の手本となる、おゝけな
けれど自らも、ゆかりといはん紫の、色里げんじと
名づけつゝ、諸國の遊君大かたの、誠有けるもしほ
草、書あつめつゝ行末の、流の女の鏡共、なさばや
など、思ひいれ、かぶんに尊きかめいどの、天神へ
きせいして、れんがざしきに引こもり、さうしの趣
向あんじつゝ、硯の海にかげうかぶ、こゝにはかた
のつゆゑゑもん、此天神へさんけいし、紫とゑにし
の事、深くちかひてこもりたる、ひとまの便を求ん
と、ゑばしたたすみくはいらうの、ゑまを詠めてめ
ぐらるゝ、先正めんの右のゑは春のていかと、打み
へて、やよいなかばの八ゑがすみ、吉のかめ山、あ
らしにも、増る上の、花さかり、このまかのまの紋
つくし、色をみよとや小袖まく、戀と花とにうかれ
人、ことさみせんに浮世ふし、びんがあさむく一こ

へは、山ぢのせきか行やらぬ、松原こへておどるふり、まのぶにあかぬ、色の笠、けにまのはすのふうけいは、都も争かゝる興、又なき春とぞ見えにける、扱正めんの、左りの糸は、夏のけしきとうちみへて、たへぬあつさに皆人の、數のゆふせんさほさして、夕べすいしきあさくさの、ながれにぐらぬすみだ川、芝の野飼の牛御前、つばなほにでしあさち原、里のかへりをまつち山、いそいで通るこまかたに、あそびてさがる舟もあり、はや夕鹽もみつまたや、兩國川のふねの火は、あまつ星共、みへつゝき、ふくるよわすれあかせして、四條のすゝみと申とも、かかる夏には、まさるべし共思はれず、又くはいらうの石のかた、秋の興かとうちみへて、大内やち里のほかの、むさしまで、月見のゆふのさまぐに、わきてけしきは色里の、折にひけこや金銀に、光りかゝやく盃の、だいにびけいのつくり物、なじみくのおくりとて、深きなさをくみかはす、あげや宿やの大よせに、うつはつゆやらきやらまややら、こなたのひだりの、くはいらうは、よものけしきも冬かれて、あらしこがらし村時雨、棟まろぐとあづ

まやに、おく霜月のかほみせと、貴賤くんじゆに境町、せいろうの山高く、都なにはの下り子の、紋のまきせのはやしかた、はいをみせばのふりだしは、かぶのぼざつの、やうかうも、外にはあらじ、江戸の四き、みな人色の、たのしみは、いこくにもなきやまとゑし、興をつくしてかいたるは、詠にあかぬけしきなり、深き硯の海山に、きつかれければ小紫、かたへのこきうさみせんを、二人のかぶろに、あやどらせ、其身はこのねもたへに、曲はさまぐををけれど、かいてが女郎を忍ぶかさ、女郎は客をまつよいの、まがきのまゝと、云ふ曲をまばしが程こそまらべけれ、つゆは思ひもよらざりし、れんがざしきの内にして、いとやごとなきけんがのこへ、やうやうとしてみゝにたへ、是や尋る紫か、こもりしかたかとゆかしくて、きく程尙もかんにたへ、かく迄そろふ、みつの糸、竹のなきこそはいなけれ、何がし是にて、一よ切を合せんずに若もとがむる、物ならば、それを便にとひよるべしとおぼし召、右のたもとの内よりも、ひとよ切を、取出し中通しにて、つゆをとり、歌口まめしねもたへに、まばしが程こそ

ふかれけれ、紫つくく是をき、こは珍らしき一
よ切、か程に色ねをふく人は、當時あづまに覺な
し、聞ははるく都より、盃さし、大臣の、下らせ
給ふと云さた有り、いまだ御げんにいらざれば、さ
だかにそれとゑりがたし、御名を聞もぐちなれば、
此程出し色げんじの、文にことよせあの君の、出立
を見立つ、あまたの女郎の名によそへ、さはりて
みんと思ひ寄、二人のかぶろにさゝやきて、かやう
かやうと有ければ、こはおもしろしと手を打て、か
程の女郎の名の内に、あのかた様の逢給ふ、なじみ
の色のはい、定てとがめ給ふべし、其時こそは便
ぞと、二人のかぶろ立上り、ぞくをはなれし、ほめ
詞、三すじの糸に引ゑらべ三重色ねやさしき三重こ
へあけて、比はめでたきおゝんみよ、つゆの大玄ん
光次とて、京大坂のわけの里、六十女郎なづませし、
若大玄んの御すがた、筆にかく共及ばし、ひすいの
たてがみゑゆすのびん、したにはやしほのもみのむ
く、うへは、やまとのゑやれがきに、高をのみみち
打ちらし、すそは三河の八橋の、澤べに匂ふかきつ
ばた、色も一ゑは小むらさき、いつもときわの松が

へを、はい一はいにぬふたりし、かく山の大もんに、
小ざつまをりのくけ帶を、ゑやんとむすんでしづ崎
や、花崎若松ちらしたる、初花そめのあけのうら、
敷嶋はをりに夕霧や、ほうわうぬふてくけ紐ゑめ、
關の吉清が打たりし、岩ほくだきの細こしらへ、頭
はくもいに名月の、うすぐもわけて出るてい、ふち
はなるとにたつ波の、さつと打たる岩崎や、まづき
に匂ふ初ぎくを、ゆふゑよがほりし細めぬき、いと
しほらしき藤波打、ひしをやさしふまきにけり、う
らおもてなき柏木に、わしをほりたるつばを打、さや
は吉のゝさくら木の、いろうつくしき花ぬりに、か
すみ立たるかすがのゝ、花むらさきの細さげを、戀
をおもてに當世の、淺ぎどんすの紋はかま、けまわ
しゆふにきこなして、かりにきにしをふてう笠、か
よふうき名も高橋や、君にあふよはくるゝまを、ち
さとゝこゝろせきゑうの、あふぎのゑさるゝわけす
がた、色のゑいぐわの君なれば、光る源氏と申なり
と、しばしが程こそかなでけれ、つゆ大臣は小倉を
召、歌人はいながら名所をゑる、あづまに名をゑし紫
が、某諸國のわけの里、逢し女郎趣向して、色里源

氏を書けるが、只今ふきける一よ切、我ぞと知てわざとかく、糸に合し一節は、疑ひもなき尋る方、是を持行色もかも、御知人をあないにて、是迄參候と、申入よと都迄、送りし名香渡さるゝ、小ぐら請取かしこに行、あないをこふてかぶろにあひ、右の次第を云聞せ、名香を渡しける、かぶろは内に立入て、かくと申せば紫は、是は自らおくりし香、扱はすいせしつゆ様なり、それこなたへと、さへもんは頓てうちにそ「入給ひ、たがい名をへし、色姿、あづまの、花とつくしの月、玄ばし詠てことばなし、かゝる所へ島原に、増りてふうの吉原や、三浦の松の名にしあふ、こうし尋ね打つれて、御見廻とて入ければ、小紫は驚き、こは思はざる御出の、いぶかしさよと有ければ、實御ふまは御理り、承れば鎌倉の、江の島の辨才天、開帳とて遠國や、江戸中こぞつて參詣なす、男女のゑんをむすぶの神、ふうきに守らせ給ふとかや、光次様の御こしを、幸と願ひしに、芳順へ其よしを、仰られ候へば、芳順よりいとまたび、是迄參さふらふなり、紫様にも打つれだち、御こしあれとすゝむれば、紫斜に悦びて、然らば我

身も御供せん、まかしくるわの名残の花、里へ御こしあれよりして、御立出と云詞に、それこそよろしいざさらば、かねて用意の色大名、其行列はいかいぞや、先はてうしをはさみ箱、ついのごうぐはむすびふみ、鳥げのやりは、むさしのゝ、月を出せる三方に、金銀のつゆ付し、すゝきをはつとさしみだし、戀風になびかせて、御供揃の女郎達、大紋當世あづま出ハヤ三重行れつそろへて「押いだす、よにもまれなる風流やと、貴賤女郎押なべて、皆かんせぬ、者社なかりけれ、

第六

「其後、はかたのさへもん光次は、かめいどの天神にて、小紫に馴染て夫よりも、三浦が内に御入有、日々やゝの遊興に、とかく過させ給ふ内、初きくもむかへ取、又長崎へも飛脚をたて、いこくわこくを呼よせて、あそびつくしの古里に、伴ひ下りそのかみの、光ル源氏の榮花の色、よまちにわけし、四きのつば、まなんで我も局をたて、四方に、君をわけ置

て、樂を遊んと、芳順に暇を乞、思ひ立日を吉日に、あづまを立せ給はん由、其用意をなし給ふが、此程名にあふ鎌倉に、江の島の辨天の、御開帳と聞給ひ、いつく島竹生島、此江の島は日の本に、三たいいつちの辨才天、我玄んくゝの御神也、殊に此たびたいせつの、なんぎをたすけ給はりし、有がたきに參詣し、隨分力の及ぶ程、御き玄んをいたさんと、人々を伴ひて三重江の島さしてぞ「參らるゝ、まれなるときを江の島の、御かいてうと、聞やこの、おちこちとひのつとひきて、きせんくんじゆはをびたいし、人々も參詣有、金銀卷物様々を、御奉納あそばして、玄んくゝ深くはいしつゝ、有しなんぎの御たすけ、有がたかりし事共を、申させ給ひ尙行末、守らせ給へときせいして、岩やを出て下向の道、よもを詠めて人々は、玄はしやすらひたまひける、かゝる所に、さもすすまましき大男、三所閉のいぬき笠、大脇指の一つさし、くはんくはつ成ル出立にて、おとらぬつれもあみ笠にて、參詣の大せいを、つきのけはりわけ、傍若無人を振舞て、此所に來りしが、人々を見るよりも、先に立たる大男、天晴かゝる天の綱、絶

體絶命只今なり、やあ己等、定て我をは見ざるまじと、あみ笠つかんでなけ捨、我こそ鰐の大八ぞ、かくごせよと云こへに、つれの者共一同に、刀に手を懸つめかくる、貫藏團六みるよりも、是は過にし盗人の、すいわうが一子よな、推參なる奴原と、先人をかこいつゝ、供の奴原追ちらし、大八に渡りあひハヤ三重火花をちらして「戦ひける、大八もとより太刀の早わざにて、ことに太刀打達者なり、貫藏團六今ははや既に危くみへける時、けしたるれいじん顯れ出、飛かゝつて大八を引たふし、上につゝ立はたらかせず、せいざいゝゝ光次、我は是、辨財天のけんぞく、此なんをすくへとの、神勅により顯れたり、いかに大八、己が親のすいわうは、大惡不道の曲者ゆへ、忝も辨天の、かごの劔のやいばにふす、何條親の敵とは己も只今ばつせんが、つねに辨天玄んずるゆへ、一先命はたすけおく、此後は野心を捨、光次につかへんや、いかにゝと押付れば、大ばんじやくのごとくにて、眼もぬくる計りなり、大八心をひるがへし、すは八まんも御玄やうらん、や玄んを今よりひるがへし、つゆ大じんるみやつかへ、申

べしと云ければ、れい神は聞召、能哉々々此上は、
隨分忠功つくすべし、光次にも是よりは、深くめぐ
みてゑさすべし、尙々行末守らんと、云こへ波にひ
びき渡つて、光りを放ち失給ふ、人々はつと伏拜み、
本國つくしにかへりつゝ、ふつきにさかへ給ひけり、
千秋万歳めでたしと、貴賤上下押なべて、皆仰がぬ
者社無けれ

博多露左衛門色傳授終

新群書類從第五終

黒川眞道校
米光關月

明治三十九年十二月二十日印刷

明治三十九年十二月廿五日發行

非賣品

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地

國書刊行會代表者

編輯者
發行兼

市島謙吉

東京市京橋區新榮町五丁目三番地

印刷者

本間季男

東京市京橋區新榮町五丁目三番地

印刷所

内外印刷株式會社分工場

大. 四. 二.

五. 代. 首. 飾

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 02977 5095